

# 久 下 東 遺 跡 X

(G2・H地点)

— 本庄早稲田駅周辺土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書11 —

2019

本 庄 市 教 育 委 員 会

## 序

利根川を境にして群馬県と接する埼玉県北部に位置する本庄市は、県内でも遺跡の宝庫として知られており、市内には県内で最古級の古墳として有名な県指定史跡の鷺山古墳をはじめ、原始・古代の注目される遺跡が500か所以上も所在しています。また、中世では鎌倉幕府の成立期に活躍した武蔵七党の一つである児玉党の本拠地であったことや、戦国時代の発端となった享徳の乱で、古河公方側と対立した関東管領上杉氏側の重要拠点であった五十子陣が築かれた場所として、そして近世の江戸時代では、中山道最大の宿場町として、また和学講談所の設立や『群書類従』の編さんなどの偉大な業績を残した盲目の国学者塙保己一の生地としても、広く知られているところです。

本書は、本庄早稲田駅周辺土地区画整理事業に伴って発掘調査された久下東遺跡の調査の成果の一部を記録した報告書です。久下東遺跡は、南側に隣接する久下前遺跡とともに、市内に所在する遺跡の中では比較的広い範囲が調査されており、古墳時代から平安時代を中心とした当地域を代表する大規模な古代集落跡の一つであったことが明らかになっています。

今回報告する久下東遺跡のG2・H地点では、古墳時代前期から平安時代中期までの130軒近い竪穴式住居跡が多数重複した状態で検出され、先年度報告した久下前遺跡のC地点と同じく、集落の中でも中心的な居住場所であったことがうかがえます。また、溝によって四角に区画された広い敷地をもつ中世以降の屋敷跡も検出されており、本地点が古代以降も人々の居住に適した場所として長く利用されていたことが判明しています。

本書が、学術的な資料としてはもとより、郷土の歴史や遺跡を理解する一助として、多くの皆様に広くご活用いただければ幸甚に存じます。

最後になりましたが、現地の発掘調査から整理・報告書の刊行にあたり、様々なご協力やご教示を賜りました関係諸機関並びに地元関係者の皆様に対しまして、心からお礼を申し上げます。

平成31年2月

本庄市教育委員会  
教育長 勝山 勉

# 例 言

1. 本書は、埼玉県本庄市早稲田の杜2丁目に所在する久下東遺跡のG2・H地点の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、本庄早稲田駅周辺土地区画整理事業に伴う事前の記録保存を目的として、G2地点・H地点とも平成23年度に調査を実施した。
3. 発掘調査は、本庄市教育委員会が実施し、松本完が担当した。また、各地点の調査には宮本久子(有限会社毛野考古学研究所)が調査員として現地に専従して補佐した。
4. 本書中で使用した地図は、国土地理院発行の5万分の1と2万5千分の1である。
5. 出土遺物の実測・トレース・写真撮影は、その一部を有限会社毛野考古学研究所に委託し、その他の出土遺物の実測については恋河内が行った。
6. 出土遺物観察表に記した記号は、以下のとおりである。  
A—法量(単位はcm、g、カッコは推定)、B—成形、C—整形・調整、D—胎土、材質、  
E—色調、F—残存度、G—備考、H—出土層位・位置
7. 本書に掲載した写真は、遺構を調査担当者が、遺物の委託分は有限会社毛野考古学研究所が撮影した。なお、本書の写真図版に掲載した遺物写真は、縮尺不同である。
8. 遺構図のデジタルトレースとレイアウト編集は、株式会社測研に委託した。
9. 本書の執筆・編集は、第V章を株式会社パレオ・ラボが、それ以外を恋河内が行った。
10. 発掘調査から本書刊行にあたって、下記の方々や機関からご教示・ご協力を賜った。記して感謝します。

有山 経世、浅間 陽、池田 匡彦、伊藤 順一、井上 裕一、大谷 徹、大塚 昌彦、  
小此木真理、金子 彰男、栗島 義明、車崎 正彦、昆 彭生、坂本 和俊、関 美智子、  
高橋 清文、高林 真人、武井 奨太、中沢 良一、中村 岳彦、日沖 剛史、丸山 修、  
丸山 陽一、宮本 久子

埼玉県教育局市町村支援部文化資源課、公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団、  
早稲田大学考古資料館

11. 発掘調査及び整理・報告書刊行の組織は、以下のとおりである。

## 発掘調査組織

<平成23年度>

主体者	本庄市教育委員会
教育者	局長 茂木 孝彦
事務局	事務局長 関和 成昭
	文化財保護課長 金井 孝夫
	副参事兼課長補佐 鈴木 徳雄
	課長補佐兼 埋蔵文化財係長 太田 博之
主査	恋河内昭彦
主査	大熊 季広
主査	松澤 浩一
主任	松本 完(調査担当)
臨時職員	的野 善行
調査員	宮本 久子(◎毛野考古学研究所)

## 整理・報告書刊行組織

<平成30年度>

主体者	本庄市教育委員会
教育者	局長 勝山 勉
事務局	事務局長 稲田 幸也
	文化財保護課長 佐々木智恵
	課長補佐兼 埋蔵文化財係長 恋河内昭彦(整理担当)
主査	徳山 寿樹
主査	堀原 浩
主任	的野 善行
専門員	松本 完
臨時職員	中嶋 淳子

# 目 次

序

例言

第Ⅰ章	発掘調査に至る経緯	1
第Ⅱ章	遺跡の立地と歴史的環境	5
第Ⅲ章	G 2 地点の調査	7
第1節	G 2 地点の概要	7
第2節	検出された遺構と遺物	9
1.	竪穴式住居跡	9
2.	掘立柱建物跡	89
3.	井戸跡	92
4.	地下式坑	94
5.	土坑	96
6.	溝跡	114
7.	G 2 地点調査区内出土遺物	123
第Ⅳ章	H 地点の調査	126
第1節	H 地点の概要	126
第2節	検出された遺構と遺物	128
1.	竪穴式住居跡	128
2.	掘立柱建物跡	282
3.	井戸跡	292
4.	土坑	293
5.	溝跡	312
6.	H 地点調査区内出土遺物	328
第Ⅴ章	自然科学分析	331
第1節	久下東遺跡・浅見山 I 遺跡出土の 二軒屋式土器の胎土分析	331
第Ⅵ章	まとめ	341
第1節	出土遺物の様相	341
1.	旧石器時代～弥生時代の遺物	341
2.	古墳時代～平安時代の土器	343
第2節	集落再編成の一つの画期	352
<参考文献>		353

写真図版  
抄 録

## <挿 図 目 次>

第1図	遺跡の位置	XX	第34図	第266号住居跡	40
第2図	北堀久下塚北・久下東・久下前・北堀新田・北堀新田前遺跡調査地点配置図	2	第35図	第266号住居跡出土遺物(1)	42
第3図	久下東遺跡本報告地点位置図	3	第36図	第266号住居跡出土遺物(2)	43
第4図	周辺の主要遺跡	4	第37図	第267・278号住居跡	45
第5図	久下東遺跡G2地点全体図	6	第38図	第267号住居跡出土遺物	46
第6図	第221号住居跡	9	第39図	第268号住居跡出土遺物	47
第7図	第221号住居跡出土遺物	10	第40図	第269・270号住居跡	48
第8図	第227号住居跡	11	第41図	第270号住居跡出土遺物	49
第9図	第227号住居跡出土遺物	12	第42図	第271・272号住居跡	51
第10図	第228・283号住居跡	13	第43図	第271・272号住居跡カマド	52
第11図	第229・286号住居跡	14	第44図	第271号住居跡出土遺物	53
第12図	第229号住居跡出土遺物	17	第45図	第272号住居跡出土遺物	53
第13図	第253号住居跡	18	第46図	第273号住居跡	55
第14図	第254号住居跡	20	第47図	第273号住居跡出土遺物	56
第15図	第254号住居跡カマド	21	第48図	第274・275・276号住居跡	57
第16図	第254号住居跡出土遺物(1)	22	第49図	第274号住居跡出土遺物	58
第17図	第254号住居跡出土遺物(2)	23	第50図	第275号住居跡出土遺物	59
第18図	第255号住居跡	24	第51図	第276号住居跡出土遺物	59
第19図	第255号住居跡出土遺物	24	第52図	第277号住居跡	60
第20図	第256ab号住居跡出土遺物	25	第53図	第277号住居跡出土遺物	61
第21図	第256ab号住居跡	26	第54図	第278号住居跡	62
第22図	第257号住居跡出土遺物	28	第55図	第278号住居跡出土遺物	63
第23図	第257号住居跡	29	第56図	第279号住居跡	64
第24図	第258号住居跡	30	第57図	第280・281・282・384号住居跡	66
第25図	第258号住居跡出土遺物	30	第58図	第281号住居跡カマド	67
第26図	第259号住居跡及び出土遺物	31	第59図	第282号住居跡出土遺物	67
第27図	第260号住居跡	32	第60図	第283号住居跡出土遺物	68
第28図	第261号住居跡	33	第61図	第284号住居跡	68
第29図	第262号住居跡出土遺物	34	第62図	第285号住居跡及び出土遺物	69
第30図	第262・263・264号住居跡	36	第63図	第286号住居跡	70
第31図	第264号住居跡出土遺物	38	第64図	第287号住居跡出土遺物	71
第32図	第265号住居跡	38	第65図	第287号住居跡カマド	71
第33図	第265号住居跡出土遺物	39	第66図	第288号住居跡	72
			第67図	第288号住居跡出土遺物	72
			第68図	第289号住居跡出土遺物	73

第69図	第289号住居跡	74	第105図	第93号溝跡出土遺物	118
第70図	第290号住居跡出土遺物	75	第106図	第91・92・93号溝跡	119
第71図	第290号住居跡	76	第107図	第94号溝跡	121
第72図	第291号住居跡出土遺物	77	第108図	第94号溝跡出土遺物	122
第73図	第291・292・293号住居跡	78	第109図	第96号溝跡	123
第74図	第291号住居跡炉、第292・293号住居跡 カマド	79	第110図	第96号溝跡出土遺物	123
第75図	第292号住居跡出土遺物	80	第111図	G 2地点調査区内出土遺物	124
第76図	第293号住居跡	81	第112図	久下東遺跡H地点全体図	126
第77図	第294号住居跡出土遺物	82	第113図	第15(SI01)号住居跡	128
第78図	第294号住居跡	83	第114図	第15(SI01)号住居跡出土遺物	128
第79図	第295号住居跡出土遺物	85	第115図	第16(SI02)号住居跡	129
第80図	第295・296・297号住居跡	86	第116図	第16(SI02)号住居跡出土遺物	130
第81図	第295号住居跡炉、第296号住居跡	87	第117図	第18(SI04)号住居跡	131
第82図	第296号住居跡出土遺物	88	第118図	第18(SI04)号住居跡出土遺物	131
第83図	第297号住居跡出土遺物	89	第119図	第195号住居跡出土遺物	132
第84図	第16号掘立柱建物跡	90	第120図	第195号住居跡	133
第85図	第16号掘立柱建物跡出土遺物	91	第121図	第196号住居跡	134
第86図	第17号掘立柱建物跡及び出土遺物	91	第122図	第319号住居跡	135
第87図	第26号井戸跡出土遺物	92	第123図	第319号住居跡出土遺物	136
第88図	第26～29号井戸跡	93	第124図	第320号住居跡	137
第89図	第29号井戸跡出土遺物	94	第125図	第320号住居跡出土遺物	137
第90図	第5号地下式坑	95	第126図	第321号住居跡	138
第91図	第5号地下式坑出土遺物	96	第127図	第321号住居跡出土遺物	139
第92図	土坑(1)	99	第128図	第322号住居跡	140
第93図	土坑(2)	100	第129図	第322号住居跡出土遺物	142
第94図	土坑(3)	101	第130図	第324号住居跡出土遺物	143
第95図	土坑(4)	102	第131図	第323・324号住居跡	144
第96図	土坑(5)	103	第132図	第325号住居跡	145
第97図	土坑(6)	104	第133図	第326号住居跡(1)	146
第98図	土坑出土遺物(1)	110	第134図	第326号住居跡(2)	147
第99図	土坑出土遺物(2)	111	第135図	第326号住居跡出土遺物(1)	149
第100図	土坑出土遺物(3)	112	第136図	第326号住居跡出土遺物(2)	150
第101図	第88号溝跡	115	第137図	第326号住居跡出土遺物(3)	151
第102図	第88号溝跡出土遺物	116	第138図	第326号住居跡出土遺物(4)	152
第103図	第91号溝跡出土遺物	117	第139図	第326号住居跡出土遺物(5)	153
第104図	第92号溝跡出土遺物	117	第140図	第327号住居跡	156
			第141図	第327号住居跡出土遺物	157

第142図	第328号住居跡……………	159	第179図	第347号住居跡出土遺物……………	199
第143図	第328号住居跡出土遺物……………	160	第180図	第348号住居跡……………	200
第144図	第329号住居跡出土遺物……………	161	第181図	第348号住居跡出土遺物……………	201
第145図	第329号住居跡……………	162	第182図	第349号住居跡出土遺物……………	201
第146図	第330号住居跡……………	163	第183図	第349号住居跡……………	202
第147図	第330号住居跡出土遺物……………	164	第184図	第350号住居跡……………	203
第148図	第331号住居跡……………	165	第185図	第350号住居跡カマド……………	204
第149図	第331号住居跡出土遺物……………	166	第186図	第350号住居跡出土遺物……………	205
第150図	第332号住居跡……………	168	第187図	第351号住居跡……………	206
第151図	第332号住居跡出土遺物……………	169	第188図	第351号住居跡出土遺物……………	207
第152図	第333号住居跡出土遺物……………	170	第189図	第352号住居跡……………	208
第153図	第334号住居跡……………	171	第190図	第352号住居跡出土遺物……………	209
第154図	第333・335号住居跡……………	173	第191図	第353号住居跡……………	210
第155図	第333・335号住居跡カマド……………	174	第192図	第353号住居跡出土遺物(1)……………	212
第156図	第335号住居跡出土遺物(1)……………	176	第193図	第353号住居跡出土遺物(2)……………	213
第157図	第335号住居跡出土遺物(2)……………	177	第194図	第354号住居跡……………	214
第158図	第336号住居跡……………	177	第195図	第354号住居跡出土遺物……………	214
第159図	第336号住居跡出土遺物……………	178	第196図	第355・356a・356b号住居跡……………	216
第160図	第337号住居跡……………	179	第197図	第356ab号住居跡出土遺物……………	217
第161図	第337号住居跡出土遺物……………	180	第198図	第357号住居跡……………	218
第162図	第338号住居跡……………	182	第199図	第357号住居跡出土遺物……………	219
第163図	第338号住居跡出土遺物……………	183	第200図	第358号住居跡出土遺物……………	220
第164図	第339号住居跡……………	184	第201図	第358号住居跡……………	220
第165図	第339号住居跡出土遺物……………	185	第202図	第359号住居跡出土遺物……………	221
第166図	第340・341号住居跡……………	186	第203図	第359号住居跡……………	222
第167図	第341号住居跡カマド……………	187	第204図	第360号住居跡……………	224
第168図	第341号住居跡出土遺物……………	189	第205図	第360号住居跡出土遺物……………	224
第169図	第342号住居跡……………	190	第206図	第361号住居跡出土遺物……………	225
第170図	第342号住居跡出土遺物……………	190	第207図	第361号住居跡……………	226
第171図	第343号住居跡……………	191	第208図	第362号住居跡……………	227
第172図	第343号住居跡出土遺物……………	192	第209図	第362号住居跡出土遺物……………	227
第173図	第344号住居跡……………	193	第210図	第364号住居跡……………	229
第174図	第344号住居跡出土遺物……………	194	第211図	第364号住居跡出土遺物……………	230
第175図	第345号住居跡……………	195	第212図	第365号住居跡……………	231
第176図	第345号住居跡出土遺物……………	196	第213図	第365号住居跡出土遺物……………	232
第177図	第346号住居跡……………	197	第214図	第366・370・371・372号住居跡……………	233
第178図	第347号住居跡……………	198	第215図	第366・371号住居跡カマド……………	234

第216图	第366号住居跡出土遺物	235	第253图	第389号住居跡出土遺物	277
第217图	第367号住居跡	236	第254图	第390号住居跡	278
第218图	第367号住居跡出土遺物	237	第255图	第390号住居跡出土遺物	279
第219图	第368号住居跡	238	第256图	第391号住居跡	279
第220图	第368号住居跡出土遺物	239	第257图	第391号住居跡出土遺物	280
第221图	第369号住居跡出土遺物	240	第258图	第392号住居跡出土遺物	280
第222图	第369号住居跡	241	第259图	第392号住居跡	281
第223图	第371号住居跡出土遺物	243	第260图	第26号掘立柱建物跡	282
第224图	第373~375号住居跡	245	第261图	第27号掘立柱建物跡	283
第225图	第374号住居跡出土遺物	247	第262图	第28号掘立柱建物跡	284
第226图	第375号住居跡出土遺物	248	第263图	第29号掘立柱建物跡	285
第227图	第376・377号住居跡	249	第264图	第30号掘立柱建物跡	286
第228图	第376号住居跡出土遺物	251	第265图	第31号掘立柱建物跡	287
第229图	第377号住居跡出土遺物	252	第266图	第31号掘立柱建物跡出土遺物	288
第230图	第378号住居跡	254	第267图	第32号掘立柱建物跡出土遺物	288
第231图	第378号住居跡出土遺物	256	第268图	第32号掘立柱建物跡	289
第232图	第379号住居跡	257	第269图	第33号掘立柱建物跡及び出土遺物	291
第233图	第379号住居跡出土遺物	257	第270图	第33号井戸跡	292
第234图	第380号住居跡	258	第271图	第33号井戸跡出土遺物	293
第235图	第380号住居跡出土遺物	258	第272图	第34号井戸跡	293
第236图	第381号住居跡	259	第273图	土坑(1)	297
第237图	第381号住居跡出土遺物	260	第274图	土坑(2)	298
第238图	第382号住居跡	261	第275图	土坑(3)	299
第239图	第382号住居跡出土遺物	262	第276图	土坑(4)	300
第240图	第383号住居跡	264	第277图	土坑(5)	301
第241图	第383号住居跡出土遺物	265	第278图	土坑(6)	302
第242图	第384号住居跡	266	第279图	土坑(7)	303
第243图	第384号住居跡出土遺物	267	第280图	土坑出土遺物(1)	310
第244图	第385号住居跡出土遺物	268	第281图	土坑出土遺物(2)	311
第245图	第385号住居跡	269	第282图	第27・28a・28b・29・103・104・ 106号溝跡	313
第246图	第386号住居跡	271	第283图	第27号溝跡出土遺物(1)	315
第247图	第386号住居跡出土遺物	271	第284图	第27号溝跡出土遺物(2)	316
第248图	第387号住居跡	273	第285图	第28号溝跡出土遺物	317
第249图	第387号住居跡出土遺物	274	第286图	第29号溝跡出土遺物	317
第250图	第388号住居跡	275	第287图	第30号溝跡	318
第251图	第388号住居跡出土遺物	276	第288图	第79・81・100号溝跡	320
第252图	第389号住居跡	277			



第289図	第101・102号溝跡	322
第290図	第102号溝跡出土遺物	323
第291図	第103号溝跡出土遺物	324
第292図	第104号溝跡出土遺物	325
第293図	第105号溝跡	325
第294図	第107～109号溝跡	327
第295図	H地点調査区出土遺物	329
第296図	遺跡周辺の地質図(1)	337
第297図	遺跡周辺の地質図(2)	338

第298図	G・H地点出土の縄文・弥生土器	342
第299図	I期の土器	344
第300図	II期の土器	345
第301図	III I期・III 2期の土器	346
第302図	III 3期の土器	347
第303図	IV I期の土器	348
第304図	IV 2・IV 3期の土器	349
第305図	V I期の土器	351
第306図	V 2期の土器	352

## <表 目 次>

第1表	第221号住居跡出土遺物観察表	9
第2表	第227号住居跡出土遺物観察表	12
第3表	第229号住居跡出土遺物観察表	16
第4表	第254号住居跡出土遺物観察表	19
第5表	第255号住居跡出土遺物観察表	25
第6表	第256ab号住居跡出土遺物観察表	28
第7表	第257号住居跡出土遺物観察表	30
第8表	第258号住居跡出土遺物観察表	31
第9表	第259号住居跡出土遺物観察表	32
第10表	第262号住居跡出土遺物観察表	35
第11表	第264号住居跡出土遺物観察表	38
第12表	第265号住居跡出土遺物観察表	39
第13表	第266号住居跡出土遺物観察表	41
第14表	第267号住居跡出土遺物観察表	46
第15表	第268号住居跡出土遺物観察表	47
第16表	第270号住居跡出土遺物観察表	50
第17表	第271号住居跡出土遺物観察表	53
第18表	第272号住居跡出土遺物観察表	54
第19表	第273号住居跡出土遺物観察表	54
第20表	第274号住居跡出土遺物観察表	58
第21表	第275号住居跡出土遺物観察表	59
第22表	第276号住居跡出土遺物観察表	59
第23表	第277号住居跡出土遺物観察表	61
第24表	第278号住居跡出土遺物観察表	63

第25表	第282号住居跡出土遺物観察表	67
第26表	第283号住居跡出土遺物観察表	67
第27表	第284号住居跡出土遺物観察表	68
第28表	第285号住居跡出土遺物観察表	69
第29表	第286号住居跡出土遺物観察表	70
第30表	第287号住居跡出土遺物観察表	71
第31表	第288号住居跡出土遺物観察表	72
第32表	第289号住居跡出土遺物観察表	73
第33表	第290号住居跡出土遺物観察表	75
第34表	第291号住居跡出土遺物観察表	77
第35表	第292号住居跡出土遺物観察表	80
第36表	第293号住居跡出土遺物観察表	81
第37表	第294号住居跡出土遺物観察表	84
第38表	第295号住居跡出土遺物観察表	85
第39表	第296号住居跡出土遺物観察表	88
第40表	第297号住居跡出土遺物観察表	89
第41表	第16号掘立柱建物跡出土遺物観察表	91
第42表	第17号掘立柱建物跡出土遺物観察表	91
第43表	第26号井戸跡出土遺物観察表	92
第44表	第29号井戸跡出土遺物観察表	94
第45表	第5号地下式坑出土遺物観察表	96
第46表	G 2地点土坑一覧表	96
第47表	第507号土坑出土遺物観察表	109
第48表	第509号土坑出土遺物観察表	109

第49表	第523号土坑出土遺物觀察表	109	第86表	第332号住居跡出土遺物觀察表	169
第50表	第531号土坑出土遺物觀察表	112	第87表	第333号住居跡出土遺物觀察表	171
第51表	第541号土坑出土遺物觀察表	112	第88表	第335号住居跡出土遺物觀察表	175
第52表	第544号土坑出土遺物觀察表	112	第89表	第336号住居跡出土遺物觀察表	178
第53表	第547号土坑出土遺物觀察表	112	第90表	第337号住居跡出土遺物觀察表	178
第54表	第549号土坑出土遺物觀察表	112	第91表	第338号住居跡出土遺物觀察表	181
第55表	第550号土坑出土遺物觀察表	112	第92表	第339号住居跡出土遺物觀察表	185
第56表	第556号土坑出土遺物觀察表	113	第93表	第341号住居跡出土遺物觀察表	188
第57表	第560号土坑出土遺物觀察表	113	第94表	第342号住居跡出土遺物觀察表	190
第58表	第561号土坑出土遺物觀察表	113	第95表	第343号住居跡出土遺物觀察表	192
第59表	第563号土坑出土遺物觀察表	113	第96表	第344号住居跡出土遺物觀察表	194
第60表	第566号土坑出土遺物觀察表	113	第97表	第345号住居跡出土遺物觀察表	196
第61表	第568号土坑出土遺物觀察表	113	第98表	第347号住居跡出土遺物觀察表	199
第62表	第569号土坑出土遺物觀察表	113	第99表	第348号住居跡出土遺物觀察表	201
第63表	第577号土坑出土遺物觀察表	114	第100表	第349号住居跡出土遺物觀察表	202
第64表	第629号土坑出土遺物觀察表	114	第101表	第350号住居跡出土遺物觀察表	205
第65表	第635号土坑出土遺物觀察表	114	第102表	第351号住居跡出土遺物觀察表	207
第66表	第88号溝跡出土遺物觀察表	114	第103表	第352号住居跡出土遺物觀察表	209
第67表	第91号溝跡出土遺物觀察表	116	第104表	第353号住居跡出土遺物觀察表	209
第68表	第92号溝跡出土遺物觀察表	118	第105表	第354号住居跡出土遺物觀察表	215
第69表	第93号溝跡出土遺物觀察表	120	第106表	第356ab号住居跡出土遺物觀察表	217
第70表	第94号溝跡出土遺物觀察表	121	第107表	第357号住居跡出土遺物觀察表	219
第71表	第96号溝跡出土遺物觀察表	123	第108表	第358号住居跡出土遺物觀察表	220
第72表	第G 2地点調査区内出土遺物觀察表	125	第109表	第359号住居跡出土遺物觀察表	221
第73表	第18号住居跡出土遺物觀察表	132	第110表	第360号住居跡出土遺物觀察表	224
第74表	第195号住居跡出土遺物觀察表	132	第111表	第361号住居跡出土遺物觀察表	225
第75表	第319号住居跡出土遺物觀察表	136	第112表	第362号住居跡出土遺物觀察表	228
第76表	第320号住居跡出土遺物觀察表	137	第113表	第364号住居跡出土遺物觀察表	230
第77表	第321号住居跡出土遺物觀察表	139	第114表	第365号住居跡出土遺物觀察表	232
第78表	第322号住居跡出土遺物觀察表	141	第115表	第366号住居跡出土遺物觀察表	235
第79表	第324号住居跡出土遺物觀察表	143	第116表	第367号住居跡出土遺物觀察表	237
第80表	第326号住居跡出土遺物觀察表	148	第117表	第368号住居跡出土遺物觀察表	239
第81表	第327号住居跡出土遺物觀察表	158	第118表	第369号住居跡出土遺物觀察表	242
第82表	第328号住居跡出土遺物觀察表	161	第119表	第371号住居跡出土遺物觀察表	243
第83表	第329号住居跡出土遺物觀察表	162	第120表	第374号住居跡出土遺物觀察表	247
第84表	第330号住居跡出土遺物觀察表	164	第121表	第375号住居跡出土遺物觀察表	248
第85表	第331号住居跡出土遺物觀察表	167	第122表	第376号住居跡出土遺物觀察表	251

第123表	第377号住居跡出土遺物観察表……………	252	第146表	第647号土坑出土遺物観察表……………	311
第124表	第378号住居跡出土遺物観察表……………	256	第147表	第648号土坑出土遺物観察表……………	311
第125表	第379号住居跡出土遺物観察表……………	257	第148表	第660号土坑出土遺物観察表……………	311
第126表	第380号住居跡出土遺物観察表……………	258	第149表	第669号土坑出土遺物観察表……………	311
第127表	第381号住居跡出土遺物観察表……………	260	第150表	第670号土坑出土遺物観察表……………	312
第128表	第382号住居跡出土遺物観察表……………	263	第151表	第677号土坑出土遺物観察表……………	312
第129表	第383号住居跡出土遺物観察表……………	265	第152表	第686号土坑出土遺物観察表……………	312
第130表	第384号住居跡出土遺物観察表……………	267	第153表	第691号土坑出土遺物観察表……………	312
第131表	第385号住居跡出土遺物観察表……………	268	第154表	第706号土坑出土遺物観察表……………	312
第132表	第386号住居跡出土遺物観察表……………	272	第155表	第708号土坑出土遺物観察表……………	312
第133表	第387号住居跡出土遺物観察表……………	272	第156表	第709号土坑出土遺物観察表……………	312
第134表	第388号住居跡出土遺物観察表……………	276	第157表	第27号溝跡出土遺物観察表……………	314
第135表	第389号住居跡出土遺物観察表……………	277	第158表	第28号溝跡出土遺物観察表……………	317
第136表	第390号住居跡出土遺物観察表……………	279	第159表	第29号溝跡出土遺物観察表……………	317
第137表	第391号住居跡出土遺物観察表……………	280	第160表	第102号溝跡出土遺物観察表……………	324
第138表	第392号住居跡出土遺物観察表……………	281	第161表	第103号溝跡出土遺物観察表……………	324
第139表	第31号掘立柱建物跡出土遺物観察表…	288	第162表	第104号溝跡出土遺物観察表……………	325
第140表	第32号掘立柱建物跡出土遺物観察表…	288	第163表	H地点調査区出土遺物観察表……………	330
第141表	第33号掘立柱建物跡出土遺物観察表…	291	第164表	分析した土器試料とその詳細……………	332
第142表	第33号井戸跡出土遺物観察表……………	293	第165表	胎土中の微化石類と砂粒物の特徴…	334
第143表	H地点土坑一覧表……………	293	第166表	土器胎土中の粘土および砂粒組成 の特徴……………	334
第144表	第635号土坑出土遺物観察表……………	311	第167表	岩石片の起源と組み合わせ……………	335
第145表	第642号土坑出土遺物観察表……………	311			

## <写 真 図 版 目 次>

図版 1	久下東遺跡 G 2 地点遠景 久下東遺跡 G 2 地点全景	図版 6	第256ab号住居跡 第256ab号住居跡カマド
図版 2	第227号住居跡 第228号住居跡	図版 7	第256ab号住居跡貯蔵穴 第257号住居跡
図版 3	第229号住居跡 (北東側) 第229号住居跡 (西側)	図版 8	第258号住居跡 第258号住居跡カマド
図版 4	第229号住居跡カマド 第253号住居跡	図版 9	第259号住居跡 第260号住居跡
図版 5	第255号住居跡 第255号住居跡遺物出土状態	図版 10	第261号住居跡 第261号住居跡カマド

- 図版11 第262～264号住居跡  
第262号住居跡遺物出土状態
- 図版12 第264号住居跡  
第264号住居跡カマド
- 図版13 第264号住居跡カマド袖内土器出土状態  
第265号住居跡
- 図版14 第265号住居跡が  
第266号住居跡（1）
- 図版15 第266号住居跡（2）  
第266号住居跡遺物出土状態
- 図版16 第267号住居跡が  
第267号住居跡カマド
- 図版17 第267号住居跡カマド袖断ち割り  
第268号住居跡
- 図版18 第269・270号住居跡  
第270号住居跡遺物出土状態
- 図版19 第270号住居跡カマド掘り方  
第270号住居跡貯蔵穴
- 図版20 第271・272号住居跡  
第271号住居跡カマド
- 図版21 第272号住居跡カマド  
第272号住居跡カマド袖内土器
- 図版22 第273号住居跡  
第273号住居跡カマド
- 図版23 第273号住居跡カマド袖内土器  
第273号住居跡集石出土状態
- 図版24 第274～276号住居跡  
第277号住居跡
- 図版25 第277号住居跡カマド  
第278号住居跡
- 図版26 第278号住居跡遺物出土状態  
第278号住居跡カマド
- 図版27 第279号住居跡  
第280号住居跡
- 図版28 第281・282号住居跡  
第281号住居跡カマド
- 図版29 第283号住居跡
- 第283号住居跡が
- 図版30 第284号住居跡  
第285号住居跡
- 図版31 第285号住居跡遺物出土状態  
第286号住居跡
- 図版32 第286号住居跡カマド  
第287号住居跡
- 図版33 第288号住居跡西側  
第288号住居跡東側
- 図版34 第289号住居跡  
第289号住居跡カマド
- 図版35 第290号住居跡  
第290号住居跡遺物出土状態
- 図版36 第291号住居跡  
第291号住居跡が
- 図版37 第292号住居跡  
第292号住居跡カマド
- 図版38 第293号住居跡  
第293号住居跡カマド
- 図版39 第294号住居跡  
第294号住居跡カマド・貯蔵穴
- 図版40 第295号住居跡  
第295号住居跡が
- 図版41 第295号住居跡遺物出土状態（1）  
第295号住居跡遺物出土状態（2）
- 図版42 第296号住居跡  
第296号住居跡カマド
- 図版43 第297号住居跡  
第297号住居跡遺物出土状態
- 図版44 第17号掘立柱建物跡  
第29号井戸跡
- 図版45 第5号地下式坑（1）  
第5号地下式坑（2）
- 図版46 第5号地下式坑北側壁面掘り込み痕  
第5号地下式坑底面中央  
第531号土坑  
第532号土坑

- 第533号土坑
- 第534号土坑
- 第538号土坑
- 第539号土坑
- 図版47** 第543号土坑
- 第544号土坑
- 第546号土坑
- 第547号土坑
- 第548号土坑
- 第549号土坑
- 第552号土坑
- 第553号土坑
- 図版48** 第554号土坑
- 第555号土坑
- 第556号土坑
- 第557号土坑
- 第559号土坑
- 第560・561号土坑
- 第563号土坑
- 第564号土坑
- 図版49** 第565号土坑
- 第568号土坑
- 第569号土坑
- 第570号土坑
- 第571号土坑
- 第572号土坑
- 第573号土坑
- 第575号土坑
- 図版50** 第576号土坑
- 第577号土坑
- 第88号溝跡覆土堆積状態
- 第91・92・93号溝跡
- 第88・93号溝跡
- 第93号溝跡
- 第91号溝跡
- 第96号溝跡覆土堆積状態
- 図版51** H地点遠景
- H地点遠景
- 図版52** 第116号住居跡
- 第118・361・362号住居跡
- 図版53** 第195号住居跡
- 第196号住居跡
- 図版54** 第319号住居跡
- 第319号住居跡カマド
- 図版55** 第320号住居跡
- 第320号住居跡カマド
- 図版56** 第321号住居跡
- 第321号住居跡カマド
- 図版57** 第322号住居跡
- 第322号住居跡遺物出土状態
- 図版58** 第322号住居跡カマド
- 第323号住居跡
- 図版59** 第324号住居跡
- 第324号住居跡カマド
- 図版60** 第325号住居跡
- 第326号住居跡
- 図版61** 第326号住居跡跡<sup>4</sup>
- 第326号住居跡貯蔵穴
- 図版62** 第326号住居跡遺物出土状態(1)
- 第326号住居跡遺物出土状態(2)
- 図版63** 第327号住居跡
- 第327号住居跡遺物出土状態
- 図版64** 第328号住居跡
- 第328号住居跡カマド
- 図版65** 第328号住居跡遺物出土状態(1)
- 第328号住居跡遺物出土状態(2)
- 図版66** 第329号住居跡
- 第329号住居跡カマド
- 図版67** 第330号住居跡
- 第330号住居跡カマド
- 図版68** 第331号住居跡
- 第331号住居跡カマド
- 図版69** 第331号住居跡遺物出土状態(1)
- 第331号住居跡遺物出土状態(2)

- 図版70 第332号住居跡  
第332号住居跡カマド
- 図版71 第332号住居跡遺物出土状態（1）  
第332号住居跡遺物出土状態（2）
- 図版72 第333号住居跡  
第333号住居跡カマド
- 図版73 第334号住居跡  
第335号住居跡
- 図版74 第335号住居跡カマド  
第335号住居跡貯蔵穴
- 図版75 第335号住居跡遺物出土状態  
第336号住居跡
- 図版76 第337号住居跡  
第337号住居跡カマド
- 図版77 第339号住居跡  
第339号住居跡カマド
- 図版78 第340号住居跡  
第341号住居跡
- 図版79 第341号住居跡カマド  
第341号住居跡遺物出土状態
- 図版80 第342号住居跡  
第343号住居跡
- 図版81 第344号住居跡  
第345号住居跡
- 図版82 第345号住居跡遺物出土状態  
第346号住居跡
- 図版83 第347号住居跡  
第348号住居跡
- 図版84 第349号住居跡  
第350号住居跡
- 図版85 第350号住居跡カマド  
第350号住居跡遺物出土状態
- 図版86 第351号住居跡  
第351号住居跡カマド
- 図版87 第352号住居跡  
第352号住居跡カマド
- 図版88 第353号住居跡  
第353号住居跡カマド
- 図版89 第354号住居跡  
第354号住居跡カマド
- 図版90 第355・356号住居跡  
第356a号住居跡
- 図版91 第356a号住居跡カマド  
第357号住居跡
- 図版92 第357号住居跡カマド  
第357号住居跡遺物出土状態
- 図版93 第359号住居跡  
第359号住居跡カマド
- 図版94 第359号住居跡貯蔵穴  
第359号住居跡遺物出土状態
- 図版95 第360号住居跡  
第360号住居跡カマド
- 図版96 第361号住居跡カマド  
第361号住居跡遺物出土状態
- 図版97 第364号住居跡  
第364号住居跡カマド
- 図版98 第364号住居跡遺物出土状態（1）  
第364号住居跡遺物出土状態（2）
- 図版99 第365号住居跡  
第365号住居跡カマド
- 図版100 第368号住居跡  
第368号住居跡カマド
- 図版101 第369号住居跡  
第369号住居跡カマド
- 図版102 第370・371号住居跡  
第371号住居跡カマド
- 図版103 第373号住居跡  
第373号住居跡カマド
- 図版104 第374・375号住居跡  
第374号住居跡カマド
- 図版105 第374号住居跡貯蔵穴  
第375号住居跡遺物出土状態
- 図版106 第376・377号住居跡  
第376号住居跡

- 図版107** 第376号住居跡カマド  
 第377号住居跡
- 図版108** 第377号住居跡カマド  
 第377号住居跡遺物出土状態
- 図版109** 第378号住居跡  
 第378号住居跡遺物出土状態
- 図版110** 第379号住居跡  
 第380号住居跡
- 図版111** 第381号住居跡  
 第382号住居跡
- 図版112** 第382号住居跡カマド  
 第382号住居跡遺物出土状態
- 図版113** 第383・385・386号住居跡  
 第383号住居跡炉
- 図版114** 第384号住居跡  
 第384号住居跡炉
- 図版115** 第384号住居跡遺物出土状態（1）  
 第384号住居跡遺物出土状態（2）
- 図版116** 第385・386号住居跡  
 第385号住居跡カマド
- 図版117** 第385号住居跡遺物出土状態  
 第386号住居跡カマド
- 図版118** 第387号住居跡  
 第387号住居跡カマド
- 図版119** 第388号住居跡  
 第389号住居跡
- 図版120** 第389号住居跡カマド  
 第390号住居跡
- 図版121** 第390号住居跡カマド  
 第391号住居跡
- 図版122** 第391号住居跡遺物出土状態  
 第392号住居跡
- 図版123** 第26～30号掘立柱建物跡  
 第31～33号掘立柱建物跡
- 図版124** 第31・33号掘立柱建物跡  
 第32号掘立柱建物跡  
 第33号井戸跡（上半）
- 第627号土坑  
 第629号土坑  
 第630・631号土坑  
 第632号土坑  
 第633号土坑
- 図版125** 第634号土坑  
 第635号土坑  
 第636号土坑  
 第637・638号土坑  
 第639号土坑  
 第640号土坑  
 第641号土坑  
 第643号土坑
- 図版126** 第644号土坑  
 第645号土坑  
 第646号土坑  
 第647号土坑  
 第648号土坑  
 第651号土坑  
 第653・655号土坑  
 第654号土坑
- 図版127** 第655号土坑  
 第656号土坑  
 第657号土坑  
 第658・659号土坑  
 第659号土坑  
 第660号土坑  
 第661号土坑  
 第663号土坑
- 図版128** 第669号土坑  
 第670号土坑  
 第671号土坑  
 第672号土坑  
 第673号土坑  
 第674号土坑  
 第676号土坑  
 第677号土坑

**图版129** 第677号土坑遗物出土状态  
第678号土坑  
第679号土坑  
第680·681·682号土坑  
第683号土坑  
第686号土坑  
第686号土坑遗物出土状态  
第687号土坑

**图版130** 第688号土坑  
第688号土坑土层断面  
第690号土坑  
第691号土坑  
第691号土坑人骨出土状态  
第693号土坑  
第694号土坑  
第695号土坑

**图版131** 第696·697号土坑  
第698号土坑  
第700号土坑  
第701号土坑  
第702号土坑  
第703号土坑  
第704号土坑  
第705号土坑

**图版132** 第706·708号土坑  
第707号土坑  
第710号土坑  
第710号土坑骨出土状态  
第712号土坑  
第713号土坑  
第714号土坑  
第715号土坑

**图版133** 第715号土坑骨出土状态  
第716·717号土坑  
第717号土坑骨出土状态  
第718号土坑  
第719号土坑

第720号土坑  
第723号土坑  
第724号土坑

**图版134** 第725号土坑  
第727号土坑  
第27·28·29号溝跡  
第30号溝跡  
第27~29号溝跡土层断面  
第30号溝跡土层断面

**图版135** 第27号溝跡遺物出土状态  
第27·101·102号溝跡  
第79·81·100号溝跡  
第104号溝跡  
第79号溝跡土层断面  
第104号溝跡土层断面

**图版136** 第28号溝跡土层断面  
第101号溝跡土层断面  
第103号溝跡  
第108号溝跡  
第100号溝跡土层断面  
第109号溝跡

**图版137** 第221号住居跡出土遺物  
第227号住居跡出土遺物(1)

**图版138** 第227号住居跡出土遺物(2)  
第229号住居跡出土遺物(1)

**图版139** 第229号住居跡出土遺物(2)  
第254号住居跡出土遺物(1)

**图版140** 第254号住居跡出土遺物(2)  
第255号住居跡出土遺物(1)

**图版141** 第255号住居跡出土遺物(2)  
第256号住居跡出土遺物  
第257号住居跡出土遺物  
第258号住居跡出土遺物  
第259号住居跡出土遺物

**图版142** 第262号住居跡出土遺物  
第264号住居跡出土遺物  
第265号住居跡出土遺物



第266号住居跡出土遺物 (1)  
**図版143** 第266号住居跡出土遺物 (2)  
**図版144** 第266号住居跡出土遺物 (3)  
**図版145** 第267号住居跡出土遺物  
第268号住居跡出土遺物  
第270号住居跡出土遺物 (1)  
**図版146** 第270号住居跡出土遺物 (2)  
第271号住居跡出土遺物  
第272号住居跡出土遺物  
第273号住居跡出土遺物 (1)  
**図版147** 第273号住居跡出土遺物 (2)  
第274号住居跡出土遺物  
第275号住居跡出土遺物  
第276号住居跡出土遺物  
第277号住居跡出土遺物 (1)  
**図版148** 第277号住居跡出土遺物 (2)  
第278号住居跡出土遺物  
**図版149** 第282号住居跡出土遺物  
第283号住居跡出土遺物  
第284号住居跡出土遺物  
第285号住居跡出土遺物  
第286号住居跡出土遺物  
第287号住居跡出土遺物  
**図版150** 第288号住居跡出土遺物  
第289号住居跡出土遺物  
第290号住居跡出土遺物 (1)  
**図版151** 第290号住居跡出土遺物 (2)  
第291号住居跡出土遺物  
第292号住居跡出土遺物  
第293号住居跡出土遺物  
第294号住居跡出土遺物 (1)  
**図版152** 第294号住居跡出土遺物 (2)  
第295号住居跡出土遺物  
**図版153** 第296号住居跡出土遺物  
第297号住居跡出土遺物  
第16号掘立柱建物跡出土遺物  
第17号掘立柱建物跡出土遺物

**図版154** 第26号井戸跡出土遺物  
第29号井戸跡出土遺物  
第5号地下式坑出土遺物  
第507号土坑出土遺物  
第509号土坑出土遺物  
第523号土坑出土遺物  
第531号土坑出土遺物  
第541号土坑出土遺物  
**図版155** 第544号土坑出土遺物  
第547号土坑出土遺物  
第549号土坑出土遺物  
第550号土坑出土遺物  
第556号土坑出土遺物  
第560号土坑出土遺物  
**図版156** 第561号土坑出土遺物  
第563号土坑出土遺物  
第566号土坑出土遺物  
第568号土坑出土遺物  
第569号土坑出土遺物  
第577号土坑出土遺物  
第629号土坑出土遺物  
第635号土坑出土遺物  
**図版157** 第88号溝跡出土遺物  
第91号溝跡出土遺物  
**図版158** 第92号溝跡出土遺物  
第93号溝跡出土遺物  
**図版159** 第94号溝跡出土遺物  
第96号溝跡出土遺物  
**図版160** G 2地点調査区内出土遺物  
**図版161** 第18(SI-04)号住居跡出土遺物  
第195号住居跡出土遺物  
第319号住居跡出土遺物  
**図版162** 第320号住居跡出土遺物  
第321号住居跡出土遺物  
第322号住居跡出土遺物  
**図版163** 第324号住居跡出土遺物  
第326号住居跡出土遺物 (1)

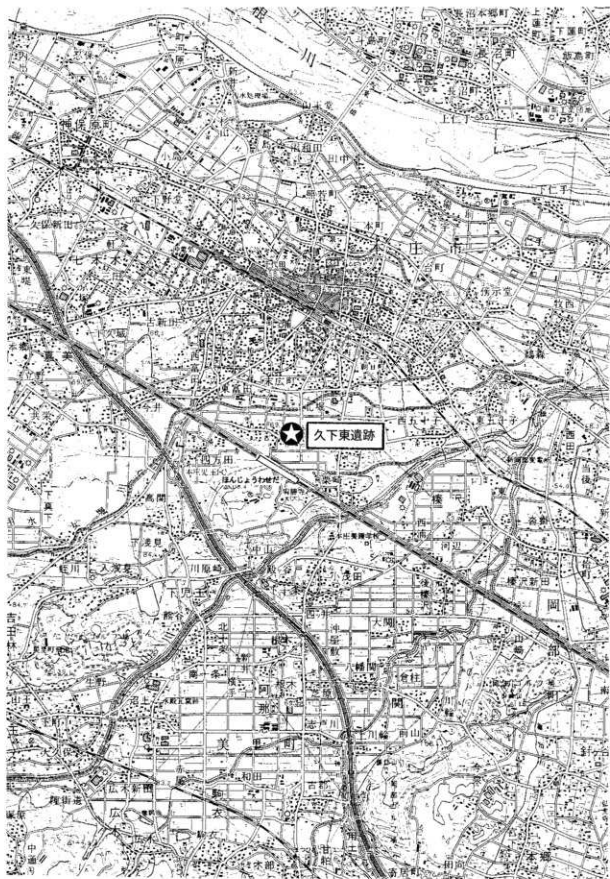
图版164 第326号住居跡出土遺物 (2)  
图版165 第326号住居跡出土遺物 (3)  
图版166 第326号住居跡出土遺物 (4)  
图版167 第326号住居跡出土遺物 (5)  
图版168 第327号住居跡出土遺物  
第328号住居跡出土遺物 (1)  
图版169 第328号住居跡出土遺物 (2)  
第329号住居跡出土遺物  
第330号住居跡出土遺物  
图版170 第331号住居跡出土遺物  
第332号住居跡出土遺物 (1)  
图版171 第332号住居跡出土遺物 (2)  
第333号住居跡出土遺物  
第335号住居跡出土遺物 (1)  
图版172 第335号住居跡出土遺物 (2)  
第336号住居跡出土遺物  
图版173 第337号住居跡出土遺物  
第338号住居跡出土遺物 (1)  
图版174 第338号住居跡出土遺物 (2)  
第339号住居跡出土遺物  
第341号住居跡出土遺物 (1)  
图版175 第341号住居跡出土遺物 (2)  
图版176 第342号住居跡出土遺物  
第343号住居跡出土遺物  
第344号住居跡出土遺物  
第345号住居跡出土遺物  
图版177 第347号住居跡出土遺物  
第348号住居跡出土遺物  
第349号住居跡出土遺物  
第350号住居跡出土遺物  
图版178 第351号住居跡出土遺物  
第352号住居跡出土遺物  
第353号住居跡出土遺物 (1)  
图版179 第353号住居跡出土遺物 (2)  
第354号住居跡出土遺物  
第356ab号住居跡出土遺物 (1)  
图版180 第356ab号住居跡出土遺物 (2)

第357号住居跡出土遺物  
第358号住居跡出土遺物  
第359号住居跡出土遺物 (1)  
图版181 第359号住居跡出土遺物 (2)  
第360号住居跡出土遺物  
第361号住居跡出土遺物  
第362号住居跡出土遺物  
图版182 第364号住居跡出土遺物  
第365号住居跡出土遺物  
图版183 第366号住居跡出土遺物  
第367号住居跡出土遺物  
第368号住居跡出土遺物  
图版184 第369号住居跡出土遺物  
第371号住居跡出土遺物  
第374号住居跡出土遺物  
图版185 第375号住居跡出土遺物  
第376号住居跡出土遺物  
第377号住居跡出土遺物 (1)  
图版186 第377号住居跡出土遺物 (2)  
第378号住居跡出土遺物  
第379号住居跡出土遺物  
图版187 第380号住居跡出土遺物  
第381号住居跡出土遺物  
第382号住居跡出土遺物 (1)  
图版188 第382号住居跡出土遺物 (2)  
第383号住居跡出土遺物  
第384号住居跡出土遺物 (1)  
图版189 第384号住居跡出土遺物 (2)  
第385号住居跡出土遺物  
第386号住居跡出土遺物  
第387号住居跡出土遺物 (1)  
图版190 第387号住居跡出土遺物 (2)  
第388号住居跡出土遺物  
第389号住居跡出土遺物  
第390号住居跡出土遺物  
图版191 第391号住居跡出土遺物  
第392号住居跡出土遺物

第31号掘立柱建物跡出土遺物  
第32号掘立柱建物跡出土遺物  
第33号掘立柱建物跡出土遺物  
第33号井戸跡出土遺物  
第635号土坑出土遺物  
第642号土坑出土遺物  
第647号土坑出土遺物  
第648号土坑出土遺物  
**図版192** 第660号土坑出土遺物  
第669号土坑出土遺物  
第670号土坑出土遺物  
第677号土坑出土遺物

第686号土坑出土遺物  
第691号土坑出土遺物  
第706号土坑出土遺物  
第708号土坑出土遺物  
第709号土坑出土遺物  
**図版193** 第27号溝跡出土遺物  
**図版194** 第28号溝跡出土遺物  
第29号溝跡出土遺物  
第102号溝跡出土遺物  
第103号溝跡出土遺物  
第104号溝跡出土遺物  
**図版195** H地点調査区内出土遺物





第1図 遺跡の位置

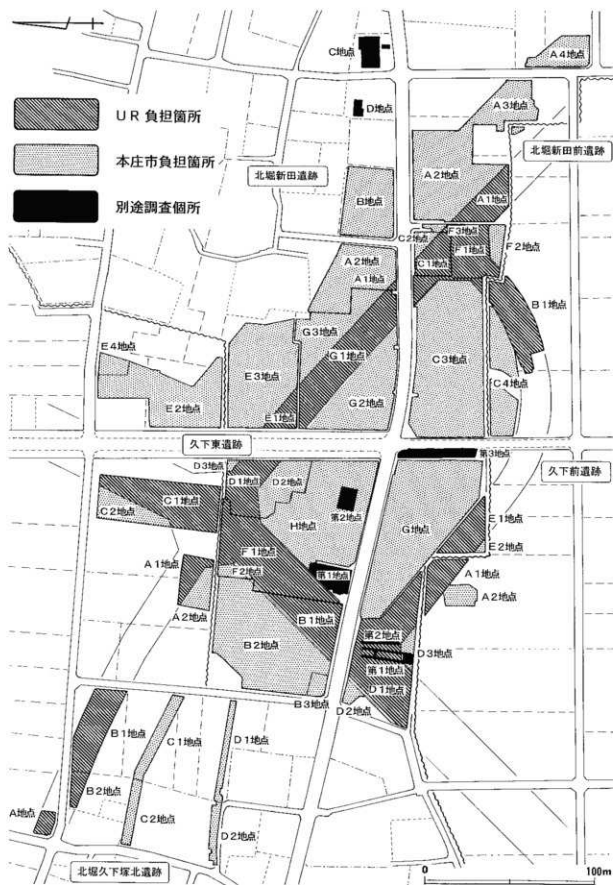
## 第 I 章 発掘調査に至る経緯

本庄早稲田駅周辺土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査は、平成18年9月に事業認可を受けて、同年11月10日に独立行政法人都市再生機構(U R)本庄都市開発事務所・本庄市・埼玉県教育委員会・本庄市教育委員会の4者によって締結された「本庄早稲田駅周辺地区埋蔵文化財に関する協定書」に基づいて、同年12月より本庄市教育委員会が実施している。

事業地内の発掘調査は、その費用負担の違いにより、機構(U R)側の費用負担箇所である都市計画道路の建設区域と、本庄市の費用負担箇所であるそれ以外の区域(沿道サービス用地・産業業務用地・商業業務用地など)に、それぞれ地点を分けている(第2図)。これらの発掘調査予定区域は、工事計画との関係から都市計画道路建設区域を優先しながら、調査が可能になった部分から遺跡(埋蔵文化財包蔵地)毎にアルファベットによる地点名を付けて、随時調査を実施している。そのため、調査地点は調査対象区域内で細かく錯乱したような配置になっているが、年度毎に発掘調査を実施した地点は、以下のとおりである。

- |          |        |   |
|----------|--------|---|
| <平成18年度> | 機構負担区域 | — 七色塚遺跡B1地点、北堀新田前遺跡A1地点                                       |
|          | 市負担区域  | — 七色塚遺跡B2地点、北堀新田前遺跡A2～A4地点                                    |
| <平成19年度> | 機構負担区域 | — 浅見山I遺跡A1・A2地点、久下東遺跡A1・B1地点、北堀久下塚北遺跡A地点                      |
|          | 市負担区域  | — 浅見山I遺跡B1・B2地点、久下東遺跡A2・B2地点                                  |
| <平成20年度> | 機構負担区域 | — 久下東遺跡C1・D1・E1地点、久下前遺跡A1・B1地点、北堀久下塚北遺跡B地点                    |
|          | 市負担区域  | — 久下東遺跡B3・C2・D2・D3・E2・E3地点、北堀久下塚北遺跡C1・D1地点                    |
| <平成21年度> | 機構負担区域 | — 久下前遺跡C1地点、北堀新田遺跡A1地点、宥勝寺北裏遺跡A1・B1地点                         |
|          | 市負担区域  | — 久下前遺跡C2・C3地点、北堀新田遺跡A2地点(南側)、北堀久下塚北遺跡C2・D2地点、宥勝寺北裏遺跡A2・B2地点  |
| <平成22年度> | 機構負担区域 | — 久下東遺跡F1・G1地点、久下前遺跡D1・E1・F1地点                                |
|          | 市負担区域  | — 久下東遺跡E4・F2地点、久下前遺跡A2・C4・D2・D3・E2・F2・F3地点、北堀新田遺跡A2地点(北側)・B地点 |
| <平成23年度> | 市負担区域  | — 久下東G2・G3地点・H地点、久下前遺跡G地点                                     |
| <平成24年度> | 機構負担区域 | — 宥勝寺北裏遺跡C地点  |

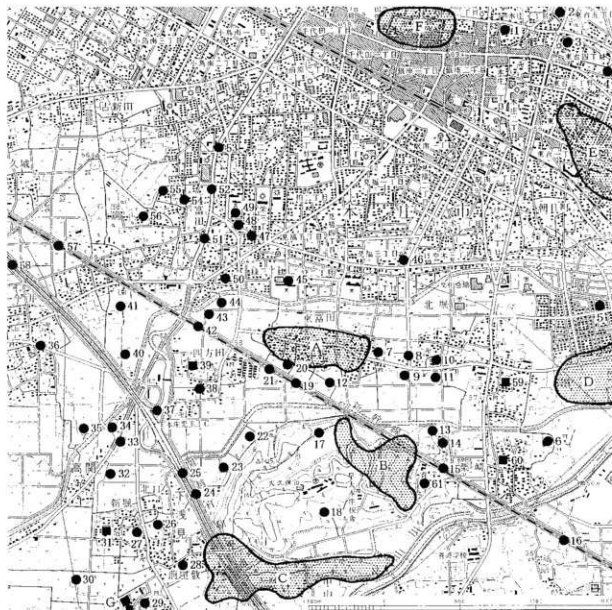
今回報告するのは、市負担区域として平成23年度に調査した久下東遺跡のG2地点とH地点の2地点分である。



第2図 北堀久下塚北・久下東・久下前・北堀新田・北堀新田前遺跡調査地点配置図



第3図 久下東遺跡本報告地点位置図



第4図 周辺の主要遺跡

- 1.城山遺跡 2.天神林遺跡 3.天神林Ⅱ遺跡 4.薬師堂遺跡 5.田端屋敷遺跡 6.東本庄遺跡 7.北堀久下塚北遺跡 8.久下東遺跡 9.久下前遺跡 10.北堀新田遺跡 11.北堀新田前遺跡 12.七色塚遺跡 13.有勝寺裏墳輪窓跡 14.有勝寺北東遺跡 15.東谷遺跡 16.古川端遺跡 17.浅見山Ⅰ遺跡 18.大久保山遺跡 19.下田遺跡 20.元宮遺跡 21.東富田観音塚遺跡 22.山根遺跡 23.根田遺跡 24.雷電下遺跡 25.飯玉東遺跡 26.中畑遺跡 27.天神耕地遺跡 28.南ノ前遺跡 29.鷺山南遺跡 30.浅見境北遺跡 31.間根氏館跡 32.東牧西分遺跡 33.梅沢遺跡 34.川越田遺跡 35.今井川越田遺跡 36.北廓遺跡 37.後張遺跡 38.四方田遺跡 39.四方田氏館跡 40.今井条里遺跡 41.地神・塔頭遺跡 42.九反田遺跡 43.西富田前田遺跡 44.西富田・四方田条里遺跡 45.雌塚遺跡 46.笠ヶ谷戸遺跡 47.南大通り線内遺跡 48.薬師元屋鋪遺跡 49.薬師遺跡 50.西富田本郷遺跡 51.社貝路遺跡 52.夏目遺跡 53.二本松遺跡 54.夏目西遺跡 55.弥藤次遺跡 56.西富田新田遺跡 57.諏訪遺跡 58.九城前遺跡 59.北堀本田館跡 60.栗崎館跡 61.大久保山寺院跡 A.東富田古墳群 B.大久保山古墳群 C.塚本山古墳群 D.西五十子遺跡群 E.塚合古墳群 F.北原古墳群 G.鷺山古墳



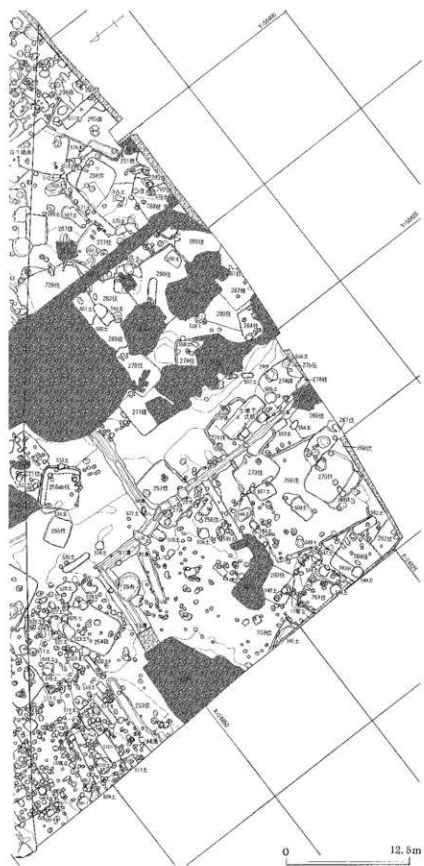
## 第Ⅱ章 遺跡の立地と歴史的環境

今回報告する久下東遺跡G2地点とH地点は、上越新幹線本庄早稲田駅の北側に位置する(第1図)。遺跡の周辺は、埼玉県と群馬県の県境をなす神流川によって形成された神流川扇状地の東端部にあたり、秩父山地の北縁にあたる上武山地内の湧水を水源とする金鑽川や旧赤根川などの小河川を集めて北東方向に流れる現在の女堀川の下流域にあたる。久下東遺跡は、この女堀川低地の女堀川と児玉町高閑地内で同河川から分岐する男堀川に挟まれた標高59~63mを測る東西方向に帯状に延びる微高地上に立地し、北側には、女堀川を挟んで水田部とあまり比高差がない低平で広大な本庄台地が、南側には男堀川を挟んで児玉丘陵から列状に並ぶ残丘性独立丘陵の大久保山が対峙している。

本遺跡周辺の女堀川下流域の各時代の集落遺跡は、低地内の自然堤防や微高地上、低地周縁の本庄台地の南側縁辺部、大久保山残丘上やその残丘斜面下の低台地上の主に3ヶ所に立地している。また、低地内の水田部には、現代の土地改良事業によるほ場整備が実施される以前までは、一町四方の方格地割り連続する条里形地割り(児玉条里遺跡)が連続して認められた。

当地域では、古くは旧石器時代から遺跡の存在が認められるが、古墳時代になって遺跡数が爆発的に増加し、特に前時代の丘陵部を集落立地の主体とした弥生時代後期と異なり、古墳時代前期より低地内への集落の進出が顕著に認められる。これらの低地内に進出した集落は、弥生時代からの伝統的な在地系土器ではなく、東海・畿内・北陸・南関東地方などの系譜をもつ外来系土器を主体にしており、おそらく当地域の弥生時代までの水田経営とは技術的系譜を異にした集団によって、在来集団を取り込んだ労働力の再編成と、灌漑水路の掘削による低地内の開発が積極的に行われていったものと思われる。この当地域における低地開発の成功は、その後の中・後期の集落遺跡の安定的な増加からも窺え、当地域でも地域社会の再編成の象徴として、前期後葉には大久保山残丘上に前方後円墳の可能性もある前山1号墳、中期前葉には円墳の前山2号墳(榊沼他1978)、中期中葉には低地内の微高地上に大形円墳の公卿塚古墳(増田・坂本他1986)などの首長墓級の古墳が築造され、後期には多数の小円墳を主体とする東富田古墳群、大久保山古墳群、西五十子古墳群(太田2007)などの群集墳が形成される。当地域周辺では、7世紀後半の白鳳時代になると、流域の低地全域にみられる条里形地割り(児玉条里)の施工と呼応してか、低地内の集落は低地周辺部に移動する傾向が見られる。しかしながら、下流域では本遺跡をはじめ、古墳時代後期から継続的に立地する集落が多く、古墳時代前期から平安時代中期まで、集落の立地傾向にあまり大きな変化は見られないようである。

中世の遺跡は、本遺跡周辺の下流域では比較的多く確認されているが、その性格を明らかにできたものは非常に少ない。児玉地方は、平安時代末から鎌倉時代初期にかけて活躍した武蔵七党の児玉党の本貫地であり、当地域は地名から児玉党久下塚氏との関係が深い地域と考えられる。中世後期の15世紀中頃には、関東内乱の象徴でもある古河公方と敵対した関東管領上杉氏側の一大防衛線の拠点である五十子陣が、本遺跡の東側約1.5kmの女堀川と身馴川(現小山川)の合流地点に築かれており、それに関係する遺跡も当地域には多く存在するものと思われる。また、本遺跡周辺では中世の屋敷や村落の一部と考えられる遺構も多く検出されているが、南側の大久保山残丘を中心にして、鎌倉永福寺の創建期瓦など、中世初期からの瓦の出土が比較的多く見られる傾向がある(本庄市教委2016)。



第5図 久下東遺跡G2地点全体図

## 第三章 G 2 地点の調査

### 第 1 節 G 2 地点の概要

久下東遺跡は、北側の女堀川と南側の男堀川に挟まれた東西方向に帯状に延びる標高60mを測る微高地上の平坦部から南側緩斜面にあたる場所に立地している。この微高地上の遺跡は、現在の微高地上を通る道路等の区画を概ね境にして、北側を北堀久下塚北遺跡・久下東遺跡・北堀新田遺跡の3遺跡に、南側を久下前遺跡・北堀新田前遺跡の2遺跡に、文化財保護行政上の埋蔵文化財包蔵地として便宜的に区分されているが、これらの5遺跡は考古学的には遺構の分布が連続し、相互に有機的な関係性をもつ同一遺跡と考えられるものである。

今回報告する久下東遺跡のG 2地点は、遺跡の東側に位置している。調査地点の北側は、都市計画道路建設予定地として調査したG 1地点(松本2013)が隣接し、西側は道路を挟んでD地点(恋河内・的野2010、恋河内2016)やH地点(本報告)が隣接している。また、南側は道路を挟んで久下前遺跡のC 3地点(恋河内2018)が近接している。

久下東遺跡のG 2地点で検出された遺構は、古代の古墳時代から近世の江戸時代までの長期にわたるもので、竪穴式住居跡50軒、掘立柱建物跡2棟、井戸跡4基、地下式坑1基、土坑75基、溝跡6条である。

古墳時代の遺構は、前期～後期の竪穴式住居跡16軒(前期5・中期3・後期8)と土坑1基(中期)で、調査区の中央付近から南側にかけて分布している。

前期の遺構は、住居跡5軒(第221・262・283・288・291号住居跡)で、第221号住居跡以外はいずれも調査区内の南端に位置している。調査区内で住居跡の一部が検出されただけのものや、後世の住居跡等の遺構に切られているものがほとんどで、住居跡の全容がわかるものはない。炉は、地皿炉や地床炉の単純な構造のものである。遺物では、第262号住居跡で該期では非常に珍しい口縁部内面に花弁状の篋描文様をもつ幅狭複合口縁壺が出土しており注目される。また、当地域の該期土器の特徴でもあるが、第221号住居跡や第288号住居跡では、煮沸具として平底甕と台付甕の両形態が伴出している。時期は、前期でも新しい後葉段階のものが主体である。

中期の遺構は、住居跡3軒(第265・266・295号住居跡)と土坑1基(第556号土坑)で、これらは調査区の南西側を主体に分布しており、第265号住居跡と266号住居跡は同時期同士で重複している。この第266号住居跡は、規模が11m前後の方形を呈する大形の住居である。これらの住居跡は、いずれも炉を有すると考えられ、時期は当地域の住居にカマドが波及する頃の5世紀前半頃である。遺物は、土器の他に第266号住居跡で貝穴泥岩、第295号住居跡で板状鉄製品の破片が出土している。

後期の遺構は、住居跡の8軒(第255・258・263・264・274・275・289・294号住居跡)で、調査区の南側を主体に散的に分布している。この中で、第263号住居跡と264号住居跡は同一住居の可能性が高く、第274号住居跡と第275号住居跡は重複している。また、唯一遺構の全容がわかる第255号住居跡は、本文中の遺構説明に記載したように、住居とは異なる性格の遺構と考えられるものである。時期は、後期初頭(5世紀末)～終末(7世紀前半)までであるが、主体は後期後半(6世紀後半以降)段階で、後期前半(6世紀前半)段階の住居跡は見られないようである。カマドは、後期後葉の3軒の住居跡で残存しており、当地方で一般的な住居の東側壁に付設されたものが2軒(第264・294号住居跡)と、そ

の他に西側壁に付設されたものが1軒(第258号住居跡)ある。

白鳳時代(7世紀後半)の遺構は、住居跡7軒(第257・271・272・273・276・277・290号住居跡)で、調査区中央部の南側半分にまとまって分布している。この中で、第271号住居跡と第272号住居跡は、同一住居の建て替えの可能性があり、それらの住居跡と第273号住居跡は同時期同士で重複している。カマドは、第271・272・273・277号住居跡の4軒で残存しており、当地方で一般的な住居の東側壁に付設されたものが3軒(第272・273・277号住居跡)と、その他に北側壁に付設されたものが1軒(第271号住居跡)ある。

奈良時代(8世紀)の遺構は、住居跡8軒(第227・229・282・284・285・286・292・293号住居跡)と土坑2基(第560・561号土坑)で、調査区の中央から西側を主体に分布している。これらの住居跡は、遺構の全容がわかるものはないが、同時期同士の重複が顕著で、第227・229・286号住居跡の3軒と第292・293号住居跡の2軒が、同時期同士でそれぞれ重複している。カマドは、第229・286・292・293号住居跡の4軒で残存しており、その住居内での付設位置は、住居の北側1軒(第292号住居跡)、北東側1軒(第293号住居跡)、東側1軒(第229号住居跡)、南東側1軒(第286号住居跡)ある。第286号住居跡や第292号住居跡のカマドでは、土師器の甕を袖や煙道部の補強に使用している。出土遺物では、第229号住居跡で石製と土製の紡錘車が1個ずつと、長さ20cm・幅10cmの台石としても使用されていた可能性がある板状の大形砥石が住居の壁際から出土しており注目される。

平安時代(9世紀以降)の遺構は、住居跡12軒(第254・256・259・261・267・268・269・270・278・287・296・297号住居跡)と掘立柱建物跡1棟(第17号掘立柱建物跡)で、時期は前期～中期前半頃まで見られる。これらの住居跡は、地点的に同時期同士の重複が顕著で、前期(9世紀)の第296号住居跡と第297号住居跡、中期(10世紀)の第267・268・269・270号住居跡が同時期同士でそれぞれ重複している。カマドは、大半の住居が北東～東側壁に付設されているが、第256号住居跡だけは南西側壁に付設されている。第17号掘立柱建物跡は、第261号住居跡と重複しているが、建物の向きを平安時代の住居跡と同じ北東方向に向けている。出土遺物は、土器では土師器や須恵器と灰軸陶器が見られる。第254号住居跡では、おそらくカマドの補強材に使用されていたと思われる大形の板状土製品の破片が出土しており注目される。

中世の遺構は、時期がある程度判断できるものでは、掘立柱建物跡1棟(第16号掘立柱建物跡)、井戸跡4基(第26～29号井戸跡)、地下式土坑1基(第5号地下式土坑)、土坑4基(第531・536・537・544号土坑)、溝跡5条(第88・91～94号溝跡)である。これらの遺構は、大半が中世後期の15世紀後半以降の時期のもので、調査区の西側を主体に分布している。調査区の北側に位置する第16号掘立柱建物跡は、北側に隣接するE1地点やG1地点で検出された同一の屋敷に属するものと考えられる。溝跡は、東西南北方向に向いて直線的で直角に曲がるものが多いことから、これらも屋敷地を区画する溝と推測され、井戸跡も屋敷地に関係するものと思われる。出土遺物は、陶磁器では龍泉窯系青磁碗、在地産土器では内耳鍋・火鉢・かわらけ、石製品では茶臼・粉挽き臼・柱状砥石・碑碣、金属製品では銭貨(渡来銭)が見られる。

近世以降の遺構は、土坑12基である。東西方向や南北方向に長軸を向ける細長い土坑が複数見られるが、本地点では群集しないで散在的に配置されているのが特徴的である。また、隅丸長方形を呈する第553号土坑では骨粉が確認されており、墓坑であった可能性もある。

## 第2節 検出された遺構と遺物

### 1. 竪穴式住居跡

#### 第221号住居跡 (第6図)

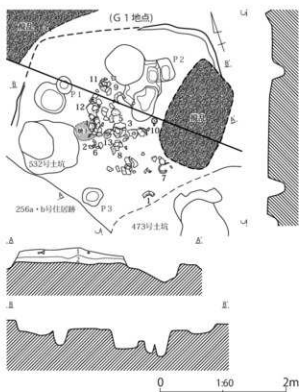
G2地点調査区中央部の北端に位置する。住居跡の北側半分は、G1地点(松本2013)にある。住居跡の南西側は、重複する第256a号住居跡と第532号土坑に切られ、南東側は第473号土坑(松本2013)に切られている。住居跡の上面はかなり削平されており、遺構の遺存状態はあまり良好とは言えない。

平面形は、残存する部分から推測すると、コーナー部が丸みをもつ隅丸方形か隅丸長方形を呈していたと思われる。規模は、南北方向は3.30mまで、東西方向は3.40mまで測れる。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で18cmある。残存する壁の壁下には、壁溝は見られなかった。床面は、ロームブロックを含む暗褐色土を平坦に埋め戻した貼床式である。ピットは、P1～P3の3カ所が検出されている。位置的には住居の上屋を支える4本主柱の柱穴の一部である可能性もあるが明確ではない。床面からの深さは、P1が25cm、P2が42cm、P3が27cmある。

遺物は、住居中央部の覆土中から、古墳時代前期の土器の破片がまとめて出土している。本住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土遺物の様相から、古墳時代前期と考えられる。

第1表 第221号住居跡出土遺物観察表

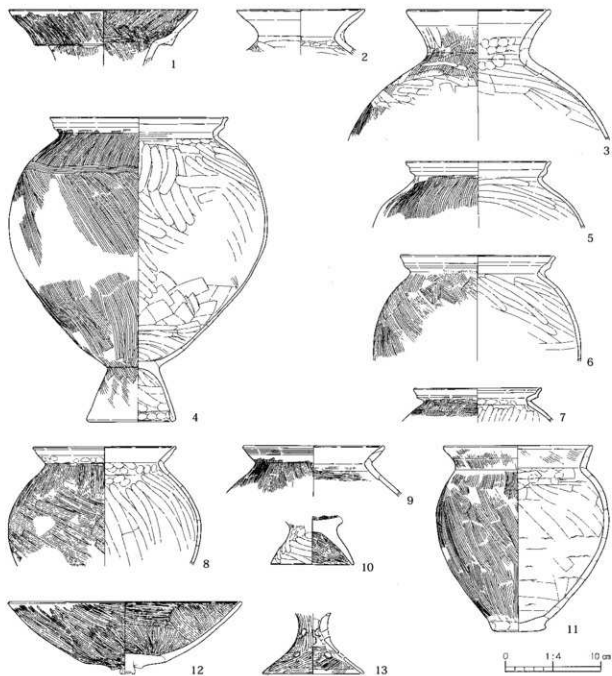
1	二重口縁壺	A.口縁部径(20.0)。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデの後ミガキ。頸部内外面ハケの後ミガキ。D.石英、黒色粒、赤色粒。E.内外一赤褐色。F.口縁部1/3破片。G.口縁部内外面赤彩。H.覆土中。
2	壺	A.口縁部径(13.6)。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ハケ、内面ナデ。D.石英、チャート、角閃石。E.内外一橙褐色。F.口縁部1/2破片。G.胴部内面に指頭圧痕を残す。H.覆土中。
3	壺	A.口縁部径(15.3)。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ハケの後複雑ナデ、内面麓ナデ。D.石英、白色粒。E.内外一橙褐色。F.口縁部ほぼ完形。胴部上半1/2。G.頸部内面に指頭圧痕を残す。H.覆土中。
4	S字状口縁台付甕	A.口縁部径18.8。器高32.2。台端部径9.4。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ハケ、内面麓ナデの後上半ナデ。台部外面ナデの後ハケ、内面ナデ。D.石英、チャート、黒色粒、赤色粒。E.外一橙褐色、内一赤褐色。F.2/3。G.胴部内面に指頭圧痕を残す。H.覆土中。
5	S字状口縁台付甕	A.口縁部径15.4。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ハケ、内面麓ナデ。D.石英、片岩粒、長石、角閃石、赤色粒。E.内外一橙褐色。F.上半2/3。H.覆土中。
6	S字状口縁台付甕	A.口縁部径(16.4)。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ハケ、内面麓ナデ。D.石英、片岩粒、長石、チャート、黒色粒。E.内外一橙褐色。F.口縁部1/2。H.覆土中。
7	S字状口縁台付甕	A.口縁部径13.6。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後ハケ、内面麓ナデ。D.石英、片岩粒、角閃石、黒色粒、赤色粒。E.内外一橙褐色。F.口縁部1/2。G.頸部内面に指頭圧痕を残す。H.覆土中。



第6図 第221号住居跡

#### 第221号住居跡層説明

- 第1層：暗褐色土層 (暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、ロームブロックを少量、炭化物・焼土粒子を微量、浅間山系A軽石・砂利を上面に含む。しまりを有する。)
- 第2層：暗褐色土層 (ロームブロック・ローム粒子を多量、炭化物・焼土粒子を微量含む。しまりを有する。)



第7図 第221号住居跡出土遺物

8	甕	A.口縁部径15.2。B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ハケ、内面ナデ。D.石英、長石、黒色粒、赤色粒。E.内外一橙褐色。F.口縁部2/3。G.内外面に指頭圧痕を残す。H.覆土中。
9	甕	A.口縁部径(15.1)。B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部内外面ハケ。D.片岩粒、石英、角閃石、黒色粒、赤色粒。E.内外一橙褐色。F.口縁部1/2。H.覆土中。
10	台付甕	A.台端部径8.8。B.粘土紐積み上げ。C.台部外面ナデ、内面ハケ。D.片岩粒、石英、黒色粒。E.外一明褐色、内一橙褐色。F.台部のみ。H.覆土中。
11	平底甕	A.口縁部径15.8。器高19.7、底部径5.6。B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ハケの後ヨコナデ。胴部外面ケズリの後ハケ、内面ナデ。D.石英、チャート、黒色粒、白色粒。E.内外一明赤褐色。F.3/4。G.胴部内面に指頭圧痕を残す。H.覆土中。
12	高坏	A.口縁部径24.8。B.粘土紐積み上げ。C.口縁部外面ヨコナデの後ミガキ、内面ハケの後ミガキ。D.石英、黒色粒、白色粒。E.内外一明赤褐色。F.坏部のみ。H.覆土中。
13	高坏	A.脚端径10.8。B.粘土紐積み上げ。C.脚部外面ミガキ、内面ハケの後上半ケズリ。D.片岩粒、石英、黒色粒。E.外一明赤褐色、内一赤褐色。F.脚部2/3。H.覆土中。

## 第227号住居跡（第8図、写真図版2）

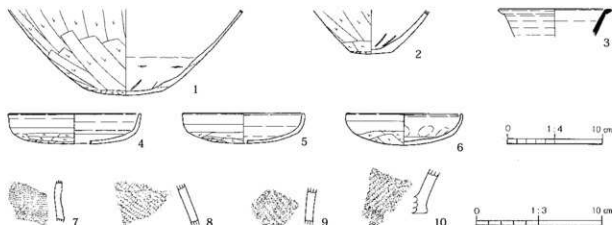
G 2地点調査区東側に位置する。住居跡の北側を第286号住居跡に、中央部を第566号土坑に、南側を第570・571号土坑に切られている。また、住居跡の西側の大半と北東側の一部を攪乱に切られており、遺構の遺存状態は、あまり良好とは言えない。

平面形は、残存する部分から推測すると、方形長方形を呈していたと思われる。規模は、南北方向は5.35mまで、東西方向は3.85mまで測れる。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で12cmある。残存する壁の壁下には、壁溝は見られなかった。床面は、よくわからないが、ロームブロックを含む暗褐色土を平坦に埋め戻した貼床式のようなものである。住居中央付近には、床面が一部焼けた部分が見られるが、恒常的に使用された炉のような施設かどうかは不明である。ピットは、P 1とP 2の2カ所が検出されている。直径25cmの円形と長さ40cmの楕円形を呈し、床面からの深さは54cmと29cmある。位置的には住居の上屋を支える4本主柱の柱穴の一部である可能性もあるが、その配置は住居の対角線上からかなりずれているようで明確ではない。

遺物は、奈良時代を主体とする土器の破片(No 1～6)が、住居の覆土中から出土している。この他に、縄文時代前期後葉頃と思われる土器片(No 9・10)や、弥生時代後期後葉以降の樽式(No 7)や吉ヶ谷式(No 8)土器の破片も、覆土中から混在して出土している。本住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土物の様相から、奈良時代末頃と考えられる。



第8図 第227号住居跡



第9図 第227号住居跡出土遺物

第2表 第227号住居跡出土遺物観察表

1	胴張甕	A.底部径8.0。B.粘土組織み上げ。C.胴部外面ケズリ、内面ナデ。底部外面ケズリ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一淡褐色。F.胴部下半のみ。G.底部外面に黒斑あり。H.覆土中。
2	甕	A.底部径4.4。B.粘土組織み上げ。C.胴部外面ケズリ、内面ナデ。底部外面ケズリ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一茶褐色。F.底部3/4。H.覆土中。
3	須恵器	A.口縁部径(12.0)。B.ロクロ成形。C.口縁部内外面回転ナデ。D.白色粒。E.内外一黒灰色。F.口縁部1/4割。G.口縁部内外面に自然釉がかかる。H.覆土中。
4	坏	A.口縁部径(14.0)。器高3.2。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後下半ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一暗褐色。F.1/3。H.覆土中。
5	坏	A.口縁部径(13.0)。器高3.2。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後下半ケズリ、内面ナデ。D.白色粒。E.内外一暗茶褐色。F.1/3。G.体部外面に黒斑あり。H.覆土中。
6	坏	A.口縁部径12.4。器高3.4。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後下半ケズリ、内面ナデ。D.白色粒。E.内外一暗茶褐色。F.2/3。G.体部内面に指頭圧痕を残す。H.覆土中。
7	甕	B.粘土組織み上げ。C.外面頸部2連止櫛描籠状文(7本歯)の後、上下に櫛描波状文を施す。内面ミガキ。D.白色粒。E.外一黒褐色、内一暗茶褐色。F.頸部破片。G.櫛描文は右回りに施文。弥生時代後期後葉以降降式。H.覆土中。
8	甕	B.粘土組織み上げ。C.胴部外面縄文(RL)、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.外一淡茶褐色、内一明燈褐色。F.胴部破片。G.弥生時代後期後葉以降吉ヶ谷式。H.覆土中。
9	深鉢	B.粘土組織み上げ。C.胴部外面縄文(RL)、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.外一暗褐色、内一暗茶褐色。F.胴部破片。G.縄文時代。H.覆土中。
10	深鉢	B.粘土組織み上げ。C.胴部外面縄文(RL)、内面ナデ。底部外面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.外一暗褐色、内一黒褐色。F.底部破片。G.弥生時代。H.覆土中。

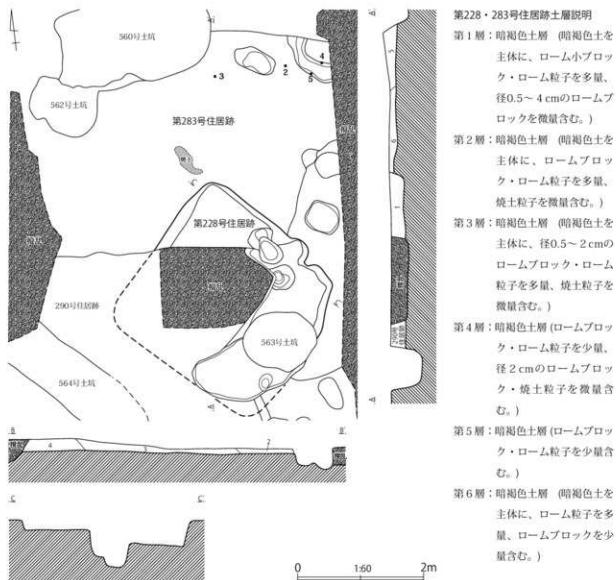
## 第228号住居跡(第10図、写真図版2)

G 2 地点調査区中央部の東寄りに位置する。重複する第283号住居跡を切り、第290号住居跡と第563号土坑に切られている。住居跡の中央部を後世の攪乱によって切られており、遺構の遺存状態は良好とは言えない。

平面形は、残存する部分から推測すると、コーナー部が丸みをもつ隅丸方形ぎみの形態であったと思われる。規模は、北東～南西方向が2.84m、北西～南東方向が2.98mを測る。住居跡の北西側壁は、N-136°-Eの方向を向いている。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは21cmある。残存する各壁の壁下には、壁溝は見られなかった。床面は、ロームブロックを含む暗褐色土を平坦に埋め戻した貼床式である。床面下の掘り方は、住居周辺部を周溝状に掘り窪めた形態のようである。住居内からはピットがいくつか見られるが、本住居跡に伴うものか明確ではない。

遺物は、住居跡の覆土中から、古代の土器の破片が少量出土しただけである。本住居跡の時期は、不明である。



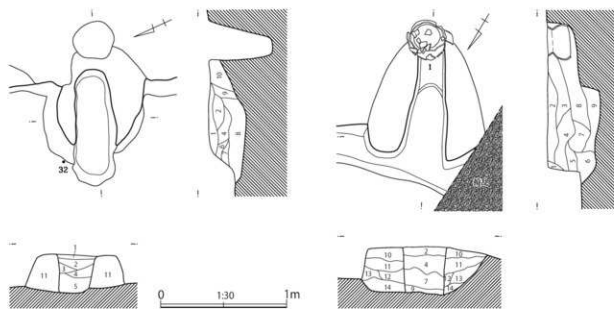
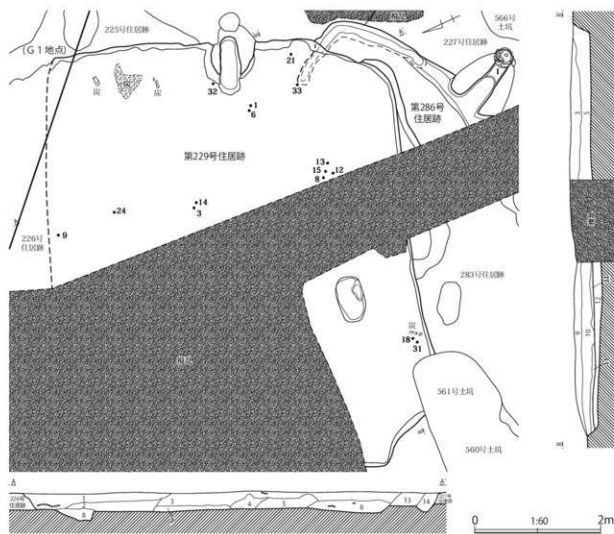


第10図 第228・283号住居跡

### 第229号住居跡（第11図、写真図版3）

G 2地点調査区東側の北端に位置する。重複する第283・285・286号住居跡及びG 1地点の第225号住居跡（松本2015）を切り、第561号土坑に切られている。本住居跡の西側半分は、後世の攪乱によって切られており、遺構の遺存状態は良好とは言えない。

平面形は、残存する部分から推測すると、コーナー部が丸みをもつ隅丸長方形を呈していたと思われる。規模は、東西方向が6.30mまで測れ、南北方向は5.57m程度と推測される。住居の主軸方向は、N-114°-Eを向いている。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは44cmある。残存する各壁の壁下には、壁溝は見られない。ピットは、住居跡の北東側から1ヵ所検出されているが、本住居跡に伴うものか明確ではない。床面は、ロームブロックを含む暗褐色土を平坦に埋め戻した貼床式である。住居中央部は強く締まっているが、壁際の周辺部はやや軟弱である。住居の南西側と北東側の床面付近からは、炭化材が出土しており、覆土中にも焼土ブロックや焼土粒子を多量



第11图 第229・286号住居跡

## 第229・286号住居跡土層説明

- 第1層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子・径0.5～0.8cmの焼土ブロック・焼土粒子を多量、径0.3～1cmの炭化物を微量含む。）
- 第2層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、ロームブロック・焼土粒子を少量含む。粘性に富む。）
- 第3層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、径0.5～1.5cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土ブロック・焼土粒子・径0.2～1.5cmの炭化物を少量含む。）
- 第4層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子・径0.5～0.8cmの焼土ブロックを多量、径1cmのロームブロックを少量含む。）
- 第5層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、焼土ブロック・焼土粒子・炭化物を微量含む。）
- 第6層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、ロームブロック・焼土粒子・炭化物を微量含む。）
- 第7層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ロームブロック・焼土粒子を少量、炭化物を微量含む。）
- 第8層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、径0.5～3cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。）
- 第9層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、浅間山系A軽石・ロームブロック・焼土粒子を少量、径0.5～1cmの炭化材を微量含む。）
- 第10層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ロームブロック・ローム粒子・焼土粒子を少量含む。）
- 第11層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ロームブロック・径0.5～5cmの炭化材を少量含む。）
- 第12層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、径0.5～7cmのロームブロックを微量含む。）
- 第13層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を含む。）
- 第14層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含む。）

## 第229号住居跡カマド土層説明

- 第1層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、ロームブロック・焼土粒子を少量含む。）
- 第2層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子・焼土粒子を多量、ロームブロック・径0.5～1.5cmの焼土ブロックを少量、炭化物を微量含む。）
- 第3層：暗褐色土層（1層に近いが、ローム粒子を微量含む。）
- 第4層：暗褐色土層（2層に近いが、焼土ブロック・焼土粒子を微量含む。）
- 第5層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、径0.5～2cmのロームブロック・焼土ブロック・焼土粒子を少量、ローム粒子を微量含む。）
- 第6層：暗褐色土層（径7～8cmのロームブロック・焼土粒子を含む。）
- 第7層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ロームブロック・ローム粒子を多量、炭化物を少量含む。）
- 第8層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、径0.5～2cmのロームブロック・焼土ブロック・焼土粒子を少量、ローム粒子を微量含む。）
- 第9層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、焼土粒子を少量含む。）
- 第10層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子を少量含む。）
- 第11層：暗褐色土層（カマド袖。）

## 第286号住居跡カマド土層説明

- 第1層：暗褐色土層（暗褐色土・灰褐色粘土の混合土を主体に、焼土粒子を多量含む。）
- 第2層：暗褐色土層（暗褐色土・灰褐色粘土・灰白色粘土の混合土を主体に、焼土小ブロック・焼土粒子を多量、径2～4cmの焼土ブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第3層：暗褐色土層（1層に近いが、焼土粒子を少量含む。）
- 第4層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、焼土ブロック・焼土粒子を多量、炭化物・灰褐色粘土を少量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第5層：暗褐色土層（1層に近いが、焼土粒子を少量、炭化物を微量含む。）
- 第6層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を含む。）
- 第7層：暗褐色土層（4層に近いが、灰褐色粘土を多量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第8層：暗褐色土層（1層に近いが、灰褐色粘土を多量含む。）
- 第9層：暗褐色土層（径0.5～3cmのロームブロックを含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第10層：赤褐色焼土層（灰褐色粘土・径0.5～7cmの焼土ブロック・焼土粒子の混合土。）
- 第11層：暗褐色土層（暗褐色土・灰褐色粘土・ロームの混合土。焼土粒子を少量含む。）
- 第12層：灰褐色粘質土層（灰褐色粘土を主体に、径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子・焼土ブロック・焼土粒子を多量含む。）
- 第13層：暗褐色土層（11層に近いが、黒みが強い。）
- 第14層：褐色土層（暗褐色土・径0.5～4cmのロームブロック・ローム粒子の混合土。）

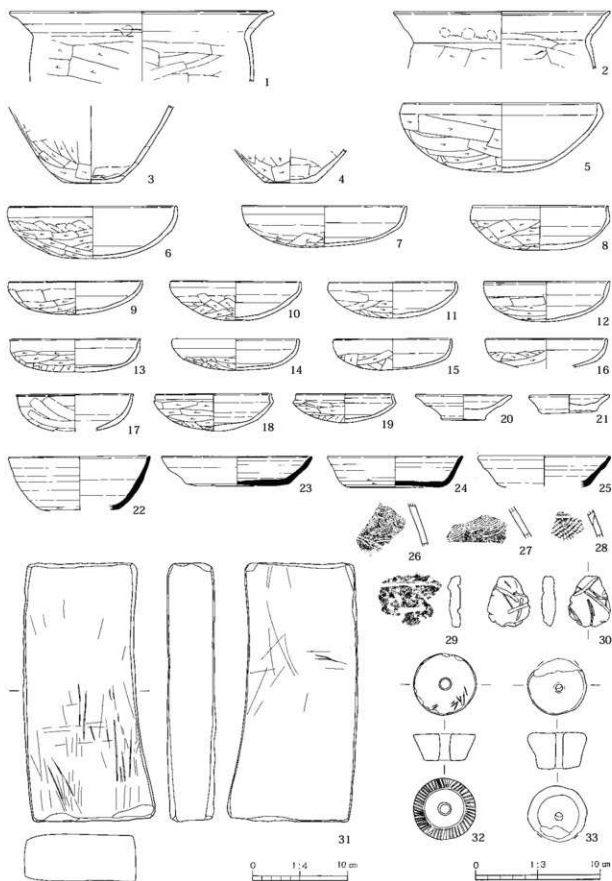
に含む層が見られることから、本住居跡は焼失した可能性も考えられる。

カマドは、住居東側壁のほぼ中央に、壁を掘り込んで直角に付設されている。規模は、全長107cm、最大幅78cmある。カマド掘り方は住居の壁を掘り込んでいるが、燃焼部は住居内にある。燃焼面は、住居の床面よりも低く平坦に作られており、奥壁は直線的に立ち上がっている。燃焼部内面は、あまり焼けていない。袖は、暗灰色粘土をカマド奥壁から廻して構築している。煙道部は、すでに削平されているため不明である。

遺物は、住居跡の覆土中から、土器の破片が多数出土している。本住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土土器の様相から、奈良時代頃と考えられる。

第3表 第229号住居跡出土遺物観察表

1	長 胴 甕	A.口縁部径(28.0)。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面笠ナデ。D.石英、角閃石、雲母、白色粒。E.内外一淡赤褐色。F.上半1/6。G.口縁部外面に指頭圧痕を残す。H.覆土中。
2	長 胴 甕	A.口縁部径(23.0)。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面笠ナデ。D.石英、角閃石、灰色粒、赤色粒。E.内外一橙褐色。F.口縁部1/6。G.口縁部外面に指頭圧痕を残す。H.覆土中。
3	長 胴 甕	A.底部径5.8。B.粘土組織み上げ。C.胴部外面ケズリ、内面ナデ。底部外面ケズリ。D.石英、角閃石、灰色粒、赤色粒。E.内外一橙褐色。F.下半のみ。H.覆土中。
4	甕	A.底部径5.4。B.粘土組織み上げ。C.胴部外面ケズリ、内面笠ナデ。底部外面ケズリ。D.石英、角閃石、白色粒。E.内外一橙褐色。F.底部のみ。H.覆土中。
5	坏	A.口縁部径20.8。器高7.3。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ヨコナデ。D.石英、角閃石、灰色粒、白色粒。E.内外一淡赤褐色。F.7/8。H.覆土中。
6	坏	A.口縁部径(17.8)。器高5.5。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後下ケズリ、内面ヨコナデ。D.石英、角閃石、雲母、白色粒。E.外一淡褐色。内一淡赤褐色。F.1/6。H.覆土中。
7	坏	A.口縁部径17.6。器高4.4。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後下ケズリ、内面ヨコナデ。D.石英、角閃石、黒色粒、白色粒。E.内外一橙褐色。F.2/3。H.覆土中。
8	坏	A.口縁部径14.4。器高4.7。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ヨコナデ。D.石英、角閃石、黒色粒、赤色粒。E.内外一橙褐色。F.2/3。H.覆土中。
9	坏	A.口縁部径14.2。器高3.5。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後下ケズリ、内面ナデ。D.石英、角閃石、黒色粒、白色粒。E.内外一淡褐色。F.1/3。H.覆土中。
10	坏	A.口縁部径(13.8)。器高4.1。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後下ケズリ、内面ナデ。D.石英、角閃石、白色粒。E.内外一橙褐色。F.1/6。H.覆土中。
11	坏	A.口縁部径13.6。器高3.8。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後下ケズリ、内面ヨコナデ。D.石英、角閃石、赤色粒、白色粒。E.内外一橙褐色。F.1/2。H.覆土中。
12	坏	A.口縁部径13.4。器高4.2。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後下ケズリ、内面ナデ。D.石英、角閃石、黒色粒、白色粒。E.外一淡橙褐色。内一明赤褐色。F.3/4。H.覆土中。
13	坏	A.口縁部径13.8。器高3.5。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ヨコナデ。D.石英、角閃石、黒色粒、赤色粒、白色粒。E.内外一橙褐色。F.1/2。H.覆土中。
14	坏	A.口縁部径13.5。器高3.3。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後下ケズリ、内面ヨコナデ。D.石英、角閃石、白色粒。E.内外一淡褐色。F.ほぼ完形。H.覆土中。
15	坏	A.口縁部径(12.9)。器高3.3。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ヨコナデ。D.石英、角閃石、黒色粒、白色粒。E.内外一橙褐色。F.5/6。H.覆土中。
16	坏	A.口縁部径(12.9)。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ヨコナデ。D.石英、角閃石、褐色粒。E.内外一橙褐色。F.1/6。H.覆土中。
17	坏	A.口縁部径(12.4)。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデ、内面ヨコナデ。D.石英、角閃石、雲母、白色粒。E.内外一橙褐色。F.1/4。H.覆土中。
18	坏	A.口縁部径12.3。器高3.9。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ヨコナデ。D.石英、角閃石、白色粒、灰色粒。E.内外一橙褐色。F.3/4。H.覆土中。
19	坏	A.口縁部径(10.4)。器高3.0。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ヨコナデ。D.石英、角閃石、白色粒、灰色粒。E.内外一橙褐色。F.1/2。H.覆土中。
20	かわらけ	A.口縁部径(10.2)。器高2.7。底部径4.8。B.ロクロ成形。C.口縁部内外面回転ナデ。底部外面回転系切り。D.石英、角閃石、白色粒、灰色粒。E.内外一橙褐色。F.1/4。H.覆土中。
21	かわらけ	A.口縁部径8.5。器高2.0。底部径5.8。B.ロクロ成形。C.口縁部内外面回転ナデ。底部外面回転系切り。D.石英、雲母、角閃石、褐色粒。E.内外一橙褐色。F.ほぼ完形。H.覆土中。
22	須 恵 器 埴	A.口縁部径(19.0)。B.ロクロ成形。C.口縁部内外面回転ナデ。底部外面回転系ケズリ。D.石英、角閃石、白色粒、灰色粒。E.内外一橙褐色。F.1/2。H.覆土中。

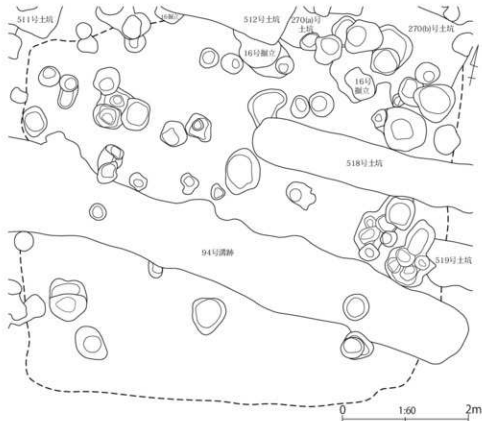


第12图 第229号住居跡出土遺物

23	須恵器 坏	A.口縁部径(16.0)、器高3.1、底部径(11.0)。B.ロクロ成形。C.口縁部内外面回転ナデ。底部外面回転系切り後外周回転盤ケズリ。D.石英、角閃石、白色粒、灰色粒。E.内外一橙褐色。F.1/2。H.覆土中。
24	須恵器 坏	A.口縁部径14.4、器高3.3、底部径10.4。B.ロクロ成形。C.口縁部内外面回転ナデ。体部外面下端回転盤ケズリ。底部外面ナデ。D.黒色粒、白色粒。E.外一灰オリープ色、内一灰色。F.ほぼ完形。H.覆土中。
25	須恵器 坏	A.口縁部径(14.0)。B.ロクロ成形。C.口縁部内外面回転ナデ。D.白色針状、石英、黒色粒、灰色粒。E.内外一淡黄褐色。F.1/6。G.南比企窯産。H.覆土中。
26	壺	B.粘土組織み上げ。C.外面櫛歯状文と刺突文。内面ナデ。D.石英、黒色粒、灰色粒。E.内外一橙褐色。F.胴部破片。H.覆土中。
27	壺	B.粘土組織み上げ。C.外面櫛歯状文。内面ナデ。D.片岩粒、石英、角閃石、褐色粒、灰色粒。E.内外一橙褐色。F.胴部破片。H.覆土中。
28	深鉢	B.粘土組織み上げ。C.外面甲斐R1縄文を縦位施文後沈線区画。内面ナデ。D.石英、角閃石、白色粒。E.内外一橙褐色。F.胴部破片。H.覆土中。
29	粘土塊	A.長さ4.4、最大幅5.2、厚さ0.95、重さ75.83g。B.手捏ね。C.外面ナデ。D.石英、角閃石、褐色粒。E.外一明褐色。F.破片。G.植物の茎のような圧痕を残す。H.覆土中。
30	粘土塊	A.長さ4.05、最大幅3.4、厚さ1.1、重さ14.0g。B.手捏ね。C.外面ナデ。D.石英、角閃石、白色粒。E.外一淡橙褐色。F.破片。G.植物の繊維状の圧痕を残す。H.覆土中。
31	砥石	A.長さ20.7、最大幅10.5、厚さ3.8、重さ1443g。C.4面ともよく磨れている。表裏面とも線状擦過痕。D.流紋岩。F.ほぼ完形。H.床面付近。
32	石製紡錘車	A.上面径5.0、下面径3.2、高さ2.1、重さ77.86g。C.上下面とも丁寧な研磨。側面ケズリの後研磨。D.流紋岩。F.ほぼ完形。H.床面付近。
33	土製紡錘車	A.上面径4.7、下面径3.3、高さ2.9、重さ63.37g。B.手捏ね。C.外面ナデ。D.石英、角閃石、白色粒、褐色粒。F.ほぼ完形。H.床面付近。

#### 第253号住居跡 (第13図、写真図版4)

G 2地点調査区西側の北寄りに位置する。重複する第16号掘立柱建物跡、第512・518・519号土坑、第94号溝跡に切られている。すでに住居跡の床面下まで削平されており、残存しているのは住居跡の



第13図 第253号住居跡

掘り方部分だけであるため、遺構の遺存状態は劣悪である。

平面形は、残存する掘り方の形態から推測すると、方形を呈していたと思われる。規模は、南北方向は5.93m、東西方向は6.96m程度である。住居跡の掘り方は、住居中央部が高く、壁際の周辺部が周溝状に低くなる形態である。掘り方の埋土は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土である。住居跡内は、中世後期の屋敷に関係すると思われる多数の小ピットに切られているため、本住居跡に伴うものは明確ではない。

遺物は、掘り方の埋土中から、土器の破片が少量出土しただけである。本住居跡の時期は、不明である。

#### 第254号住居跡（第14図）

G 2 地点調査区西側の北寄りに位置する。西側には第253号住居跡が、東側には第255号住居跡が近接している。重複する第521・523・525号土坑に切られているが、遺構の遺存状態は調査区内では比較的良好な方である。

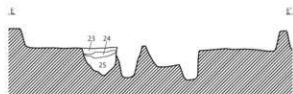
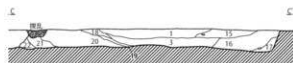
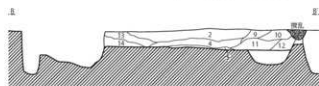
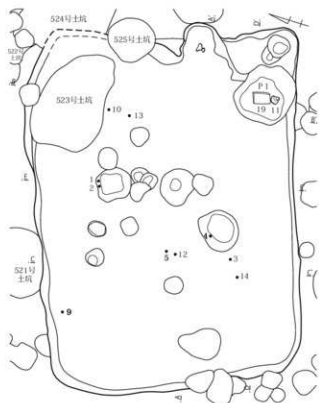
平面形は、コーナー部が丸みをもった隅丸長方形を呈している。規模は、北東～南西方向が5.56m、北西～南東方向が4.21mを測る。住居の主軸方向は、N-71°-Eを向いている。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは34cmある。検出された各壁の壁下には、溝溝は見られなかった。ピットは、住居跡から多数検出されているが、明確に本住居跡に伴うものはP 1だけである。P 1は、いわゆる貯蔵穴と考えられるもので、カマド右側の住居東側コーナー部に位置する。95cm×81cmの隅丸長方形ぎみの形態を呈し、床面からの深さは32cmある。P 1内からは、板状を呈する大形の土製品が出土している。床面は、ロームブロックを含む暗褐色土を平坦に埋め戻した貼床式である。

カマドは、住居北東側壁の中央やや南東寄りの位置に、壁を掘り込んでほぼ直角に付設されている。規模は、全長77cm、残存幅は82cmを測る。燃焼部は、住居の壁を掘り込んで作られている。燃焼部は、カマド掘り方をロームブロックを多量に含む褐色土で埋め戻し、住居の床面より若干低く平坦に作られている。燃焼部奥壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がっている。袖は、かなり崩れているためよくわからないが、灰黄色粘土を住居の壁に貼り付けて構築していたようである。P 1の貯蔵穴内から、板状の大形土製品の破片(No19)が出土しているが、表面に被熱痕や煤の付着が見られることから、カマド燃焼部の内面か焚口部の天井の補強に使われたカマド構築材の可能性が高いと思われる。煙道部は、すでに削平されているため不明である。

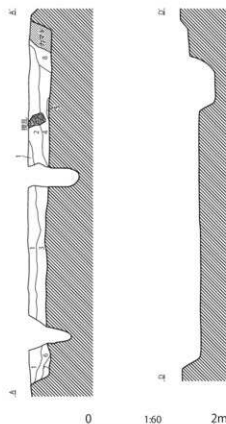
遺物は、貯蔵穴内や住居跡中央部の覆土中から、平安時代前期を主体とする土器の破片が多数出土している。土器以外では、覆土中から丸瓦の破片(No15)、土錘(No16)、刀子などの鉄製品(No17・18)が出土している。本住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土土器の様相から、平安時代前期と考えられる。

第 4 表 第254号住居跡出土遺物観察表

1	糞	A.口縁部径(20.0)。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。D.石英、角閃石、黒色粒、白色粒。E.外一淡橙褐色、内一橙褐色。F.口縁部一胴部上半のみ。H.覆土中。
2	糞	A.口縁部径(20.0)。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。D.石英、角閃石、黒色粒、白色粒。E.内外一橙褐色。F.口縁部1/4。G.口縁部外面に指頭圧痕を残す。H.覆土中。



第14図 第254号住居跡



## 第254号住居跡土層説明

第1層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土ブロック・焼土粒子・白色粒子を少量、径0.5～1cmのロームブロック・炭化粒子を微量含む。）

第2層：暗褐色土層（焼土ブロック・焼土粒子を多量、径0.5cmのロームブロック・ローム粒子・炭化粒子・白色粒子を少量含む。）

第3層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子・焼土ブロック・焼土粒子・炭化粒子・白色粒子を少量含む。）

第4層：暗褐色土層（焼土ブロック・焼土粒子を多量、径0.5cmのロームブロック・ローム粒子・白色粒子を少量、炭化粒子を微量含む。粘性に富む。）

第5層：黒褐色土層（黒褐色土・暗褐色土の混合土。焼土粒子を少量含む。）

第6層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。）

第7層：暗褐色土層（径0.6cmのロームブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を微量含む。）

第8層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土ブロックを少量含む。粘性に富む。）

第9層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子・焼土粒子・白色粒子を少量含む。）

第10層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子・白色粒子を少量含む。）

第11層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子・白色粒子を少量、焼土粒子を微量含む。）

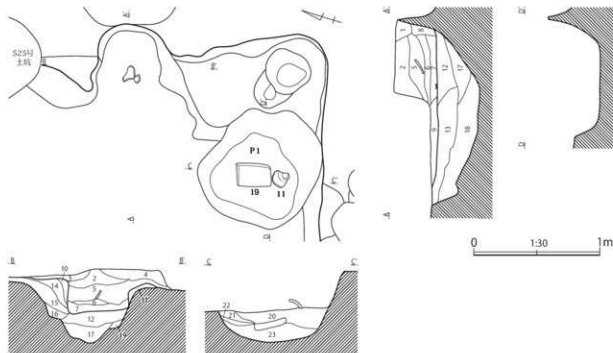
第12層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土ブロック・焼土粒子を少量、白色粒子を微量含む。）

第13層：暗褐色土層（灰黄色粘土ブロック・粘土粒子を多量、径0.5～1cmのロームブロック・焼土ブロック・白色粒子を少量含む。）

第14層：暗褐色土層（灰黄色粘土ブロック・粘土粒子を多量、ロームブロック・ローム粒子・焼土ブロック・焼土粒子を少量、白色粒子を微量含む。）



- 第15層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子・白色粒子を少量含む。）  
 第16層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子・白色粒子を少量、炭化粒子を微量含む。）  
 第17層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子・白色粒子を微量含む。）  
 第18層：暗褐色土層（白色粒子を多量、焼土粒子を少量、ローム粒子を微量含む。）  
 第19層：暗褐色土層（白色粒子を多量、ローム粒子・焼土粒子を微量含む。）  
 第20層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子・白色粒子を少量、炭化粒子を微量含む。）  
 第21層：暗褐色土層（径0.5cm～1cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子・白色粒子を少量含む。）  
 第22層：暗褐色土層（径0.5cm～1cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子・白色粒子を少量含む。）  
 第23層：暗褐色土層（粘土粒子を多量、焼土粒子・炭化粒子を少量含む。しまりを有する。）  
 第24層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロックを多量、焼土粒子を少量含む。）  
 第25層：暗褐色土層（径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子の混合土。焼土粒子を微量含む。しまりはない。）

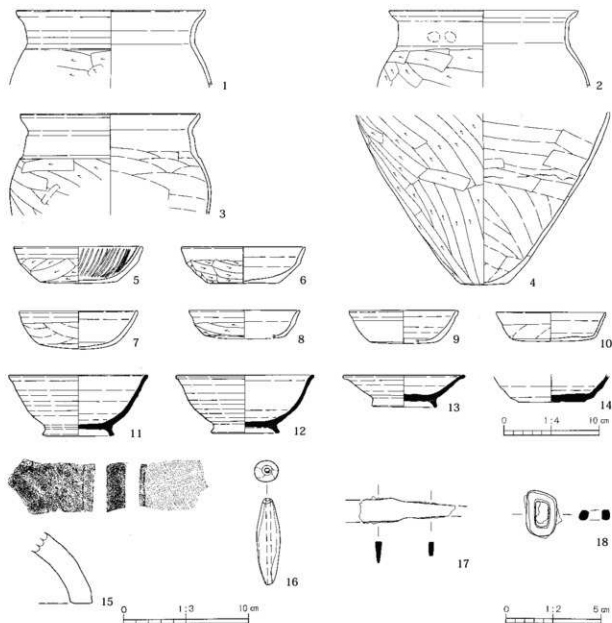


第15図 第254号住居跡カマド

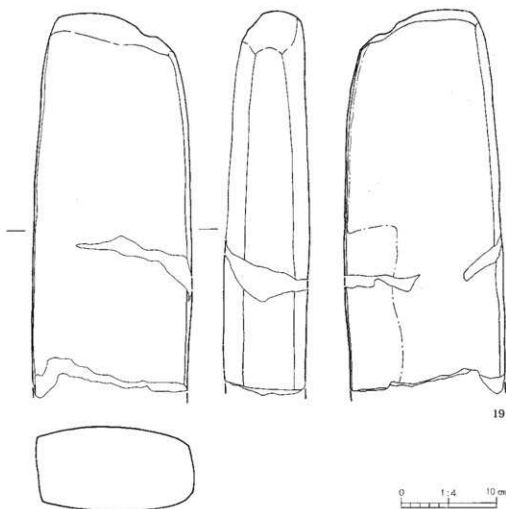
## 第254号住居跡カマド・貯蔵穴土層説明

- 第1層：黄褐色粘質土層（暗褐色土・黄褐色粘土の混合層。焼土粒子を微量含む。）  
 第2層：暗褐色土層（黄灰色粘土粒子を多量、ロームブロック・ローム粒子・径0.5cmの焼土ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子・黄灰色粘土ブロックを微量含む。）  
 第3層：暗褐色土層（白色粒子を多量含む。）  
 第4層：暗褐色土層（焼土粒子を少量、ロームブロック・ローム粒子・炭化物・黄灰色粘土粒子を微量含む。）  
 第5層：暗褐色土層（焼土ブロック・焼土粒子・黄灰色粘土粒子を多量、ローム粒子・炭化粒子・黄灰色粘土ブロックを少量含む。）  
 第6層：暗褐色土層（焼土ブロックを多量、ローム粒子・焼土粒子を少量含む。）  
 第7層：暗褐色土層（黄灰色粘土粒子を多量、焼土ブロック・焼土粒子を少量、ロームブロック・炭化物を微量含む。）  
 第8層：暗褐色土層（暗褐色土・黄灰色粘土粒子の混合土。焼土ブロックを多量、ロームブロック・炭化物を微量含む。）  
 第9層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を少量、炭化粒子・黄灰色粘土粒子を微量含む。しまりを有する。）  
 第10層：黄灰色粘質土層（ロームブロック・黄灰色粘土粒子を主体に、焼土粒子を少量含む。）  
 第11層：黄褐色土層（暗褐色土・ロームの混合土。）  
 第12層：暗褐色土層（焼土ブロック・焼土粒子を多量、径0.5cmのロームブロック・黒褐色土・粘土粒子を少量、炭化物を微量含む。）  
 第13層：暗褐色土層（径1～2cmの焼土ブロック・焼土粒子を多量、径2～3cmのロームブロック・ローム粒子・炭化物・黒褐色土・粘土粒子を少量含む。）

- 第14層：褐色土層（粘土粒子を多量、ローム粒子を少量、径0.5cmのロームブロック・焼土粒子を微量含む。）  
 第15層：褐色土層（径0.5～1cmの焼土ブロック・焼土粒子・粘土粒子を多量含む。）  
 第16層：褐色土層（粘土粒子を多量、径0.5～1cmの焼土ブロック・焼土粒子を少量、ローム粒子を微量含む。）  
 第17層：褐色土層（径2～4cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子・炭化粒子を少量、黒褐色土を微量含む。）  
 第18層：褐色土層（径1～3cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子・炭化粒子を少量含む。）  
 第19層：褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子を微量含む。）  
 第20層：暗褐色土層（暗褐色土・灰白色粘土粒子の混合土。焼土粒子を少量含む。）  
 第21層：暗褐色土層（暗褐色土・灰白色粘土粒子の混合土。焼土粒子を多量含む。）  
 第22層：黒褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を少量含む。）  
 第23層：黒褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・焼土粒子・灰白色粘土粒子を少量含む。）



第16図 第254号住居跡出土遺物（1）



19

第17図 第254号住居跡出土遺物(2)

3	甕	A.口縁部径(19.0)。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面笠ナデ。D.石英、角閃石、雲母、黒色粒、白色粒。E.内外一褐色。F.口縁部1/4。H.覆土中。
4	甕	A.底部径4.9。B.粘土組織み上げ。C.胴部外面ケズリ、内面笠ナデ。底部外面ケズリ。D.石英、角閃石、雲母、赤色粒。E.内外一明赤褐色。F.胴部下半1/4。H.覆土中。
5	暗文環	A.口縁部径13.6。器高3.9。底部径8.2。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデの後放射状暗文。底部外面ケズリ。D.石英、角閃石、雲母、白色粒。E.内外一明赤褐色。F.1/4。H.覆土中。
6	環	A.口縁部径(13.2)。器高4.8。底部径(7.5)。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ヨコナデ。底部外面ケズリ。D.石英、角閃石、雲母、白色粒。E.内外一褐色。F.1/3。H.覆土中。
7	環	A.口縁部径12.5。器高4.0。底部径7.9。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデ、内面ヨコナデ。底部外面ケズリ。D.石英、角閃石、雲母、褐色粒。E.内外一明赤褐色。F.3/4。H.覆土中。
8	環	A.口縁部径11.8。器高(3.0)。底部径(8.5)。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後ケズリ、内面ヨコナデ。底部外面ケズリ。D.石英、角閃石、白色粒。E.内外一褐色。F.底部欠損。H.覆土中。
9	環	A.口縁部径(11.6)。器高3.5。底部径(7.0)。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデ、内面ヨコナデ。底部外面ケズリ。D.石英、角閃石、雲母、黒色粒。E.内外一明赤褐色。F.1/4。H.覆土中。
10	環	A.口縁部径11.6。器高3.1。底部径8.7。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデ、内面ヨコナデ。底部外面ケズリ。D.石英、角閃石、白色粒、褐色粒。E.内外一褐色。F.3/4。H.覆土中。
11	須恵器高台付埴	A.口縁部径(14.7)。器高6.4。高台部径7.5。B.ロクロ成形。高台部貼り付け。C.口縁部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。高台部回転ナデ。D.白色粒。E.内外一灰色。F.1/2。H.貯蔵穴内。
12	須恵器高台付埴	A.口縁部径(14.7)。器高6.1。高台部径7.2。B.ロクロ成形。高台部貼り付け。C.口縁部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。高台部回転ナデ。D.黒色粒、白色粒。E.内外一黄灰色。F.1/3。H.覆土中。
13	須恵器高台付皿	A.口縁部径13.0。器高3.4。高台部径6.9。B.ロクロ成形。高台部貼り付け。C.口縁部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。高台部回転ナデ。D.雲母、黒色粒、灰色粒。E.内外一灰白色。F.ほぼ完形。H.覆土中。
14	須恵器環	A.高台部径7.0。B.ロクロ成形。C.口縁部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り後外周回転ケズリ。D.白色斜状、黒色粒、灰色粒。E.内外一灰色。F.底部のみ。G.南北企差。H.覆土中。

15	丸 瓦	A.厚さ1.9、B.甲き。C.凸面甲きの後ナデ、凹面は布目圧痕を残す。D.黒色粒、白色粒。E.内外一黄灰色。F.破片。H.覆土中。
16	土 鉢	A.長さ6.8、最大径1.9、重さ20.15g。B.手握ね。C.ナデ。D.石英、角閃石、白色粒。E.外一褐色。F.完形。H.覆土中。
17	刀 子	A.残存長5.0、最大幅1.2、厚さ0.25、重さ5.33g。B.鍛造。D.鉄製。F.両端部欠損。H.覆土中。
18	鉄 製 品	A.長さ2.5、最大幅1.9、厚さ0.55、重さ4.54g。B.鍛造。D.鉄製。F.完形。H.覆土中。
19	大形板状土製品	A.残存長40.6、最大幅16.9、厚さ8.8、重さ5080g。B.手握ね。C.外面ケズリの後ナデ。D.石英、角閃石、黒色粒、白色粒。F.1/2?。G.表面一部被熱により赤色化。煤付着。H.貯蔵穴内。

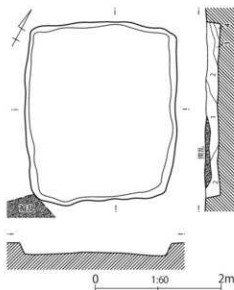
### 第255号住居跡（第18図、写真図版5）

G 2地点調査区中央部の北端に位置する。東側には第256a・256b号住居跡、西側には第254号住居跡が近接している。

平面形は、コーナー部がやや丸みをもつ隅丸長方形を呈している。規模は、北西～南東方向が2.85m、北東～南西方向が2.43mを測る。住居跡の長軸は、N-27°-Wの方向を向いている。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは24cmある。各壁の壁下には、壁溝は見られなかった。床面は、ロームブロックを多量に含む暗黄褐色土を平坦に埋め戻した貼床式である。住居中央部は比較的堅く締まっているが、壁際の周辺部はやや軟弱である。住居内施設は、まったく検出されなかった。

遺物は、古墳時代後期の土器の破片が、覆土中から少量出土しただけである。本住居跡の時期は、出土土器の様相から、古墳時代後期中葉頃と考えられる。

本遺構は、床面が平坦で貼床されている点は、住居の構築技法と類似している。しかしながら、一般的な住居に比べて規模が小さく、住居内にカマドや柱穴等の施設がまったく見られないことは注意を要する。また、遺物も覆土中から出土した破片が主体で、遺構内で使用していた様相が見られないことから、住居とは異なる性格の遺構と考えるべきであろう。



第18図 第255号住居跡

#### 第255号住居跡土層説明

第1層：暗褐色土層（径0.5～2cmのロームブロックを多量、ローム粒子を少量、埴土粒子を微量含む。）

第2層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロックを多量、ローム粒子を少量、炭化粒子を微量含む。）

第3層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロックを多量、ローム粒子を少量、径0.5cmの埴土ブロックを微量含む。）

第4層：暗褐色土層（径2cmのロームブロックを多量、ローム粒子を少量含む。）



第19図 第255号住居跡出土遺物

第5表 第255号住居跡出土遺物観察表

1	模倣環	A.口縁部径(16.0)。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.外一淡茶褐色。内一黒褐色。F.口縁部1/5。H.覆土中。
2	有段口縁環	A.口縁部径(16.4)。器高3.3。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一暗茶褐色。F.1/3。G.体部内面に指頭圧痕を残す。H.覆土中。
3	有段口縁環	A.口縁部径14.8。器高4.3。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.白色粒。E.内外一黒褐色。F.3/4。H.覆土中。
4	有段口縁環	A.口縁部径(14.0)。器高4.1。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一黒褐色。F.1/2弱。H.覆土中。
5	有段口縁環	A.口縁部径(14.0)。器高3.7。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一茶褐色。F.口縁部1/3。H.覆土中。

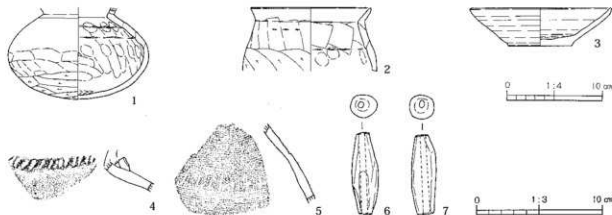
## 第256ab号住居跡（第21図、写真図版6）

G 2 地点調査区中央部の北端に位置する。重複する第221号住居跡を切り、第531・533号土坑に切られている。住居跡の上面や住居西側コーナー部を後世の掘乱に切られているが、遺構の遺存状態は比較的良好な方である。本住居跡は、住居の北東側と南東側を拡張した、いわゆる拡張住居である。

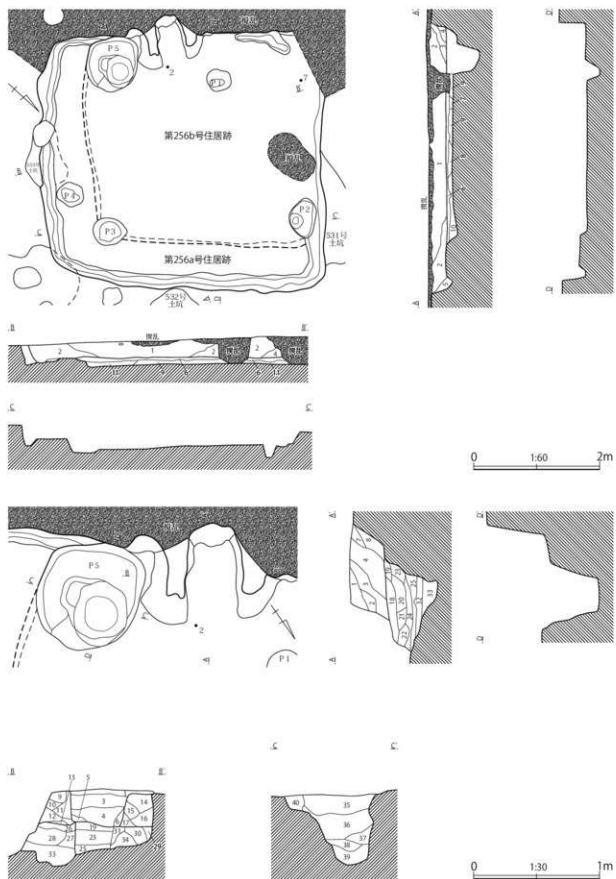
平面形は、コーナー部が丸みをもつ隅丸方形を呈している。規模は、南西～北東方向が4.10m、北西から南東方向が4.53mを測る。住居の主軸方位は、N-134°-Wを向いている。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは43cmある。北西側壁以外の壁の壁下には、壁溝が見られる。ピットは、5カ所検出されているが、その性格が分かるものはP 5 だけである。P 5 は、いわゆる貯蔵穴と呼ばれるもので、カマド左側の住居南側コーナー部付近にある。89cm×80cmの不整円形を呈し、床面からの深さは55cmある。床面は、ロームブロックを含む暗褐色土を平坦に埋め戻した貼床式であるが、住居中央部にはその下に平坦な床面がもう一面確認されており(第256a号住居跡)、本住居が住居の北東側と南東側を拡張したことが分かる。

カマドは、住居南西側壁の中央より若干南側コーナー部に寄った位置に、住居の壁を掘り込んでやや斜めに向いて付設されている。規模は、全長78cm、最大幅81cmある。燃烧部は、奥壁側半分が住居外にある。燃烧面は、住居の床面とほぼ同じ高さと思われる。燃烧部奥壁は、斜めに傾斜して二段に立ち上がっている。袖は、住居の壁を燃烧部奥壁付近から斜めに削り、そこから灰黄色粘土を貼り付けて構築している。煙道部は、すでに削平されているため不明である。

遺物は、住居跡の覆土中から、古代から中世の土器の破片が出土している。No 5 の古墳時代前期の壺の破片は、櫛描文の施文具や波状文の描き方が、本地点の南東側にある北堀新田前遺跡(松本2015)



第20図 第256ab号住居跡出土遺物



第21图 第256ab号住居跡

## 第256ab号住居跡土層説明

- 第1層：暗褐色土層 (径0.5～4 cmのロームブロックを多量、ローム粒子・焼土粒子を少量、白色粒子を微量含む。)
- 第2層：暗褐色土層 (径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。)
- 第3層：暗褐色土層 (径0.5cmのロームブロック・焼土粒子・径0.5～1 cmの粘土ブロックを少量含む。)
- 第4層：暗褐色土層 (径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。)
- 第5層：暗褐色土層 (径0.5cmのロームブロックを少量含む。)
- 第6層：暗褐色土層 (暗褐色土・径0.5～2 cmのロームブロックの混合土。焼土粒子・炭化粒子を微量含む。)
- 第7層：黄褐色土層 (黄褐色土・径0.5～3 cmのロームブロックの混合土。)
- 第8層：暗褐色土層 (径1～3 cmのロームブロックを多量含む。)
- 第9層：暗褐色土層 (径0.5～3 cmのロームブロックを多量、焼土粒子を微量含む。)
- 第10層：黒褐色土層 (径1 cmのロームブロックを多量、ローム粒子を少量含む。しまりはない。)
- 第11層：暗褐色土層 (暗褐色土・径0.5～4 cmのロームブロックの混合土。)
- 第256ab号住居跡カマド・貯蔵穴土層説明
- 第1層：暗褐色土層 (ローム粒子・焼土粒子を少量含む。)
- 第2層：暗褐色土層 (ローム粒子・焼土粒子・径1cmの灰黄色粘土ブロック・白色粒子を少量含む。)
- 第3層：暗褐色土層 (ローム粒子・焼土0.5cmの焼土ブロック・径0.5～2 cmの灰黄色粘土ブロックを少量、白色粒子を微量含む。)
- 第4層：暗褐色土層 (径0.3～0.5cmの灰黄色粘土ブロック・径0.5～1 cmの焼土ブロックを多量、径0.5cmのロームブロックを少量、白色粒子を微量含む。)
- 第5層：暗褐色土層 (径0.5cmのロームブロック・焼土粒子を少量含む。)
- 第6層：灰黄褐色粘土層 (灰黄色粘土ブロック。)
- 第7層：黄褐色土層 (ローム粒子・径0.5cmの焼土ブロックを多量、灰黄色粘土ブロックを少量含む。)
- 第8層：暗褐色土層 (径0.5cmのロームブロック・焼土粒子を多量含む。)
- 第9層：暗褐色土層 (ローム粒子・白色粒子を多量、焼土粒子を微量含む。)
- 第10層：暗褐色土層 (径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子・白色粒子を微量含む。)
- 第11層：暗褐色土層 (径0.5cmのロームブロック・径0.5～1 cmの焼土ブロックを多量、ローム粒子・白色粒子を少量、炭化粒子を微量含む。)
- 第12層：暗褐色土層 (径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子・白色粒子を微量含む。)
- 第13層：灰白色粘土層 (灰白色粘土・径0.5cmのロームブロックの混合土。)
- 第14層：灰黄色粘土層 (灰黄色粘土を主体に、炭化粒子・白色粒子を微量含む。)
- 第15層：暗褐色土層 (暗褐色土・灰黄色粘土の混合土。)
- 第16層：暗褐色土層 (灰黄色粘土ブロックを多量、径0.5cmのロームブロック・焼土粒子を少量、炭化粒子を微量含む。)
- 第17層：暗褐色土層 (焼土ブロックを多量、径0.5cmのロームブロックを少量含む。)
- 第18層：褐色土層 (ローム粒子・焼土粒子・灰白色粘土粒子を多量含む。しまりを有する。)
- 第19層：暗褐色土層 (径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子を少量含む。しまりを有する。)
- 第20層：暗褐色土層 (径0.5～1.5cmのロームブロックを少量、焼土粒子を微量含む。)
- 第21層：暗褐色土層 (径2～4 cmのロームブロックを多量、焼土粒子を微量含む。)
- 第22層：暗褐色土層 (径1～2 cmのロームブロックを多量、焼土粒子を微量含む。)
- 第23層：暗褐色土層 (径0.5～1 cmのロームブロック・焼土ブロックを少量含む。)
- 第24層：暗褐色土層 (径0.5～1 cmのロームブロックを多量、ローム粒子・焼土粒子を少量含む。)
- 第25層：暗褐色土層 (径0.5～1 cmのロームブロック・灰黄色粘土ブロックを多量、焼土粒子を少量含む。)
- 第26層：灰白色粘質土層 (焼土粒子を微量含む。しまりを有する。)
- 第27層：暗褐色土層 (焼土粒子・灰白色粘土粒子を少量含む。)
- 第28層：暗褐色土層 (径1 cmのロームブロック・焼土ブロックを多量含む。)
- 第29層：暗褐色土層 (径1 cmのロームブロックを均一に多量含む。)
- 第30層：暗褐色土層 (径0.5cmのロームブロックを多量、焼土粒子を微量含む。)
- 第31層：暗褐色土層 (粘土粒子を少量、径0.5cmのロームブロックを微量含む。)
- 第32層：暗褐色土層 (径1～3 cmのロームブロックを少量、焼土粒子を微量含む。)
- 第33層：暗褐色土層 (径0.5～1 cmのロームブロックを少量、焼土粒子を微量含む。)
- 第34層：暗褐色土層 (径0.5cmのロームブロック・粘土粒子を少量、ローム粒子・焼土粒子を微量含む。)
- 第35層：暗褐色土層 (径0.5～1 cmのロームブロックを多量、ローム粒子・径1 cmの黄灰色粘土ブロックを少量、焼土粒子を微量含む。)
- 第36層：暗褐色土層 (径0.5～1.5cmのロームブロックを多量、ローム粒子を少量、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。)
- 第37層：褐色土層 (褐色土ブロックを主体とする。しまりはない。)
- 第38層：暗褐色土層 (径2～4 cmのロームブロックを多量、ローム粒子を少量含む。)
- 第39層：暗褐色土層 (暗褐色土・径2～4 cmのロームブロックの混合土。)
- 第40層：暗褐色土層 (ローム粒子を少量含む。)

2号墓出土No 8の二重口緑壺の櫛描文様と類似している。土器以外では、大形の土鍾(No 6・7)が2点出土している。本住居跡の時期は、遺構の重複関係や住居跡の形態から、平安時代頃と考えられる。

第6表 第256ab号住居跡出土遺物観察表

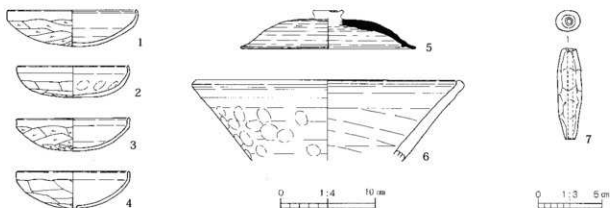
1	中形直口壺	A.残存高9.7。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面上半ナデ・下半半ナデの後ケズリ、内面ナデ。D.白色粒。E.内外一明茶褐色。F.体部のみ。H.カマド外。
2	小形甕	A.口縁部径12.8。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面麓ナデの後ケズリ、内面麓ナデ。D.白色粒。E.内外一茶褐色。F.口縁部1/2。H.覆土中。
3	かわらけ	A.口縁部径15.0、器高4.0。底部径6.8。B.ロクロ成形。C.口縁部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。D.赤色粒、白色粒。E.内外一淡褐色。F.1/3。H.覆土中。
4	壺	B.粘土組織み上げ。凸帯貼り付け。C.胴部外面ハケ、内面ナデ。凸帯上ハケ状工具による刻み。D.白色粒。E.内外一明茶褐色。F.破片。H.覆土中。
5	壺	B.粘土組織み上げ。C.胴部外面脛文部外ミガキ、内面ナデ。脛文は右回りの櫛描による横線文→波状文→横線文の順に上から脛文。D.赤色粒、白色粒。E.内外一明茶褐色。F.破片。H.覆土中。
6	土 鍾	A.長さ6.5、最大径2.1、重さ22.6g。B.手捏ね。C.ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一暗褐色。F.完形。H.覆土中。
7	土 鍾	A.長さ6.3、最大径2.0、重さ25.0g。B.手捏ね。C.ナデ。D.白色粒。E.内外一暗褐色。F.完形。H.覆土中。

### 第257号住居跡(第23図、写真図版7)

G 2地点調査区中央部の西寄りに位置する。重複する第27・28号井戸跡、第540号土坑、第88・91号溝跡に切られており、遺構の遺存状態はあまり良好とは言えない。

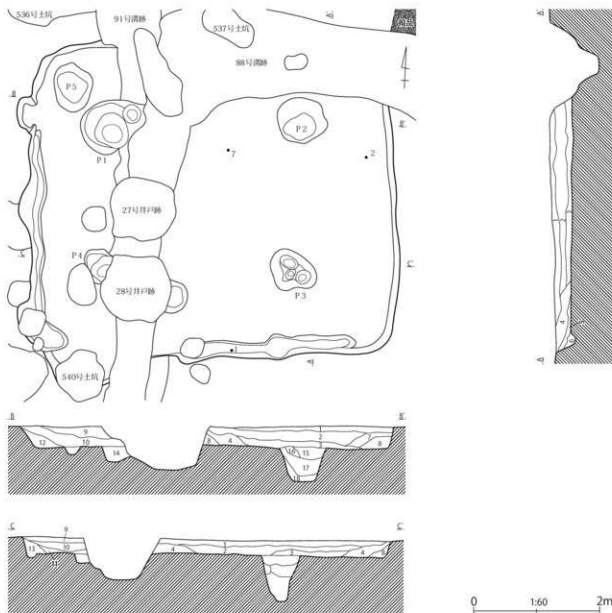
平面形は、コーナー部が丸みをもった隅丸方形を呈している。規模は、南北方向が5.45m、東西方向が5.93mを測る。住居の南側壁は、N-86°-Eの方向を向いている。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは35cmある。西側壁と南側壁の一部には、幅42cm・床面からの深さ33cmの壁溝が見られる。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を平坦に埋め戻した貼床式である。住居中央部は堅く締まっているが、壁際の周辺部はやや軟弱である。ピットは、5カ所検出されている。P 1～P 4は、住居のほぼ対角線上に配置されていることから、住居の上屋を支える4本主柱の柱穴と考えられる。いずれも長さ80cm～113cmの楕円形ぎみの形態で、床面からの深さは54cm～77cmある。P 5は、住居北西側コーナー部付近に位置している。75cm×63cmの楕円形ぎみの形態で、床面からの深さは9cmある。

カマドは、住居跡の残存する範囲内からは検出されていないことから、第88号溝跡に切られている住居北側壁の中央付近に付設されていた可能性が高いと思われる。



第22図 第257号住居跡出土遺物





第23図 第257号住居跡

## 第257号住居跡土層説明

- 第1層：暗褐色土層（白色粒子を多量、径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。）  
 第2層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子・白色粒子を微量含む。）  
 第3層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。）  
 第4層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を多量、白色粒子を少量、焼土粒子を微量含む。）  
 第5層：暗褐色土層（径1～3cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子・白色粒子を微量含む。）  
 第6層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。）  
 第7層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・焼土粒子を少量、白色粒子を微量含む。）  
 第8層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を少量、白色粒子を微量含む。）  
 第9層：暗褐色土層（ローム粒子・白色粒子を少量、径0.5～2cmのロームブロックを微量含む。）  
 第10層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子・白色粒子を少量含む。）  
 第11層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、径1～3cmのロームブロックを少量、焼土粒子を微量含む。）  
 第12層：暗褐色土層（径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を均一に含む。）  
 第13層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を均一に含む。）  
 第14層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含む。しまりはない。）

第15層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、径0.5～1cmのロームブロックを少量、焼土粒子を微量含む。）

第16層：暗褐色土層（径1～5cmのロームブロックを主体に、焼土ブロックを少量含む。）

第17層：暗褐色土層（径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を均一に、焼土粒子を微量含む。しまりはなし。）

第18層：暗褐色土層（径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子の混合土。）

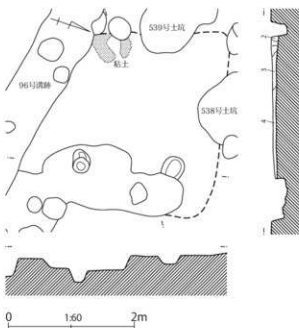
遺物は、住居周辺部の覆土中から土器の破片や自然石が出土している。土器以外では、覆土中から大型の土錘(No7)が1点出土している。No6の在産片口鉢は、中世後期の15世紀頃のもので、重複する第88号溝跡か土坑から混入したものと考えられる。本住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土遺物の様相から、白鳳時代と考えられる。

第7表 第257号住居跡出土遺物観察表

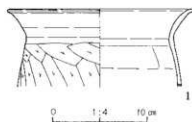
1	環	A.口縁部径13.8、器高3.9。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.白色粒。E.内外一暗茶褐色。F.1/2。H.壁溝上面。
2	環	A.口縁部径11.8、器高3.4。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後下半ケズリ、内面ナデ。D.白色粒。E.内外一淡茶褐色。F.1/2。G.体部内面に指頭圧痕を残す。H.覆土中。
3	環	A.口縁部径(12.0)、器高3.5。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一淡茶褐色。F.1/3。H.覆土中。
4	環	A.口縁部径(12.0)、器高3.9。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.白色粒。E.内外一淡褐色。F.口縁部1/4。G.体部外面に黒斑あり。H.覆土中。
5	須恵器	A.口縁部径(18.6)。B.ロクロ成形。C.口縁部内外面回転ナデ。天井部外面回転ケズリの後上半回転ナデ。D.白色粒。E.内外一暗灰色。F.1/4弱。H.覆土中。
6	在産片口鉢	A.口縁部径(19.0)。B.粘土組織み上げ後ロクロ整形。C.口縁部内外面回転ナデ。体部外面回転ナデ、内面蓋ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一暗灰色。F.口縁部1/6破片。G.体部外面に指頭圧痕を顕著に残す。体部内面下半はよく擦れて摩滅している。混入品。H.覆土中。
7	土錘	A.長さ7.3、最大径1.9、重さ22.6g。B.手捏ね。C.雑なナデ。D.白色粒。E.黒褐色。F.完形。G.外面に指頭圧痕を残す。H.覆土中。

第258号住居跡（第24図、写真図版8）

G 2 地点調査区西側の中央東寄りに位置し、東側には第257号住居跡が近接している。住居跡の西側を第539号土坑に、北側を第538号土坑に、南側を第96号溝跡に切られているため、住居跡の全容は



第24図 第258号住居跡



第25図 第258号住居跡出土遺物

第258号住居跡土層説明

- 第1層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、焼土粒子・炭化物を微量含む。）
- 第2層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子・炭化物を微量含む。）
- 第3層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、ロームブロックを少量含む。）
- 第4層：暗褐色土層（3層に近いが、径0.5～3cmのロームブロックを少量、炭化物を微量含む。）

不明である。本住居跡は、住居の床面下まで強く削平されているため、遺構の遺存状態は劣悪である。

平面形は、残存する住居掘り方の形態から推測すると、コーナー部が丸みをもつ方形か長方形を呈していたと思われる。規模は、東西方向が2.95m程度、南北方向は2.80mまで測れる。床面は、掘り方の状態から推測すると、ロームブロックを含む暗褐色土を埋め戻した貼床式であったようである。ピットは、2カ所検出されているが、本住居跡に伴うものか明確ではない。

カマドは、住居の西側壁の中央付近にあったようで、カマド両袖の痕跡が見られるだけである。それによると、規模は全長が54cm、最大幅が60cm程度の小形で、燃焼部が住居の壁を掘り込まない形態であったようである。

遺物は、残存する住居掘り方の埋土中から、土器の破片が少量出土しただけである。本住居跡の時期は、住居の形態や出土土器の様相から、古墳時代後期後葉頃と推測される。

第8表 第258号住居跡出土遺物観察表

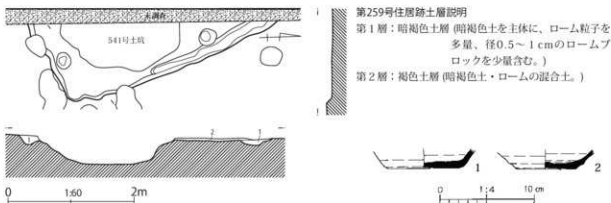
1	長 胴 甕	A. 口縁部径(19.6)。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面尻ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 外一淡褐色、内一暗褐色。F. 上半1/2。H. 掘り方埋土中。
---	-------	--

### 第259号住居跡 (第26図、写真図版9)

G 2 地点調査区西側の西端に位置する。住居跡の中央部を重複する第541号土坑に切られている。調査区内で検出されたのは、住居跡の東側の一部だけであるため、本住居跡の全容は不明である。本住居跡は、住居の床面下まで強く削平されているため、遺構の遺存状態は劣悪である。

平面形は、検出された部分から推測すると、コーナー部がやや丸みをもつ隅丸方形か隅丸長方形を呈するものと思われる。規模は、南北方向は3.05mまで、東西方向は1.42mまで測れる。住居跡の東側壁は、N-19°-Wを向いている。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは15cmある。床面は、掘り方の状態から推測すると、ロームブロックを含む暗褐色土を埋め戻した貼床式であったようである。ピットは、2カ所検出されている。いずれも直径25cmと29cmの円形を呈し、床面からの深さは31cmと36cmある。

遺物は、残存する住居掘り方の埋土中から、古代の土器の破片が少量出土しただけである。本住居跡の時期は、出土土器の様相から平安時代前期前半頃と推測される。



第26図 第259号住居跡及び出土遺物

第9表 第259号住居跡出土遺物観察表

1	須恵器 環	A. 底部径8.4。B. ロク口成形。C. 体部内外面回転ナデ。底部外面回転乾ケズリの後ナデ。D. 黒色粒、白色粒。E. 内外一暗灰色。F. 底部1/2。H. 覆土中。
2	須恵器 環	A. 底部径6.4。B. ロク口成形。C. 体部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。D. 白色粒。E. 外一暗灰色、内一黒灰色。F. 底部のみ。H. 覆土中。

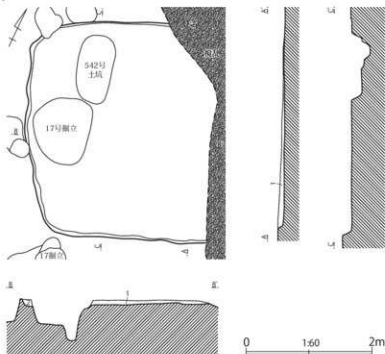
## 第260号住居跡（第27図、写真図版9）

G 2 地点調査区西側の西寄りに位置し、西側には第261号住居跡が、南側には第266号住居跡が近接している。住居跡の西側を第542号土坑と第17号掘立柱建物跡の柱穴によって切れ、北東側を後世の攪乱によって切られているため、住居跡の全容は不明である。住居跡の床面付近まで強く削平されており、遺構の遺存状態は良好とは言えない。

平面形は、残存する部分から推測すると、コーナー部が丸みをもつ隅丸方形か隅丸長方形を呈していたと思われる。住居跡の南東側壁は、N-68°-Eの方向を向いている。規模は、北西～南東方向3.47m、北東～南西方向は3.05mまで測れる。壁は、緩やかに傾斜

して立ち上がり、確認面からの深さは10cmある。残存する壁の壁下には、壁溝は見られない。床面は、ロームブロックを多量に含む暗黄褐色土を平坦に埋め戻した貼床式である。住居中央部は強く縮まっているが、壁際の周辺部はやや軟弱である。住居内施設は、検出されなかった。

遺物は、住居の覆土中から、土器の破片が極少量出土しただけである。本住居跡の時期は、不明である。



第27図 第260号住居跡

## 第260号住居跡土層説明

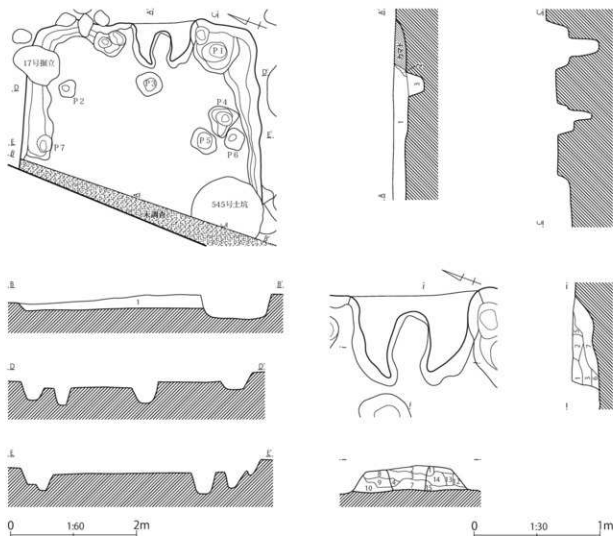
第1層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含む。）

第2層：黄褐色土層（暗褐色土・ロームの混合土。）

## 第261号住居跡（第28図、写真図版10）

G 2 地点調査区西側の西端に位置する。重複する第17号掘立柱建物跡と第545号土坑に切られている。住居跡の西側半分は調査区外にあるため、遺構の全容は不明である。

平面形は、調査区内で検出された部分から推測すると、コーナー部が丸みをもつ隅丸方形か隅丸長方形を呈していたと思われる。住居跡の主軸方位は、N-71°-E方向を向いている。規模は、南北方向が3.05m、東西方向は3.84mまで測れる。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深



第28図 第261号住居跡

## 第261号住居跡土層説明

- 第1層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、浅間山系A軽石・径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子・炭化物を少量含む。）  
 第2層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、黄褐色粘土・焼土粒子を多量、浅間山系A軽石・ロームブロック・ローム粒子・炭化物を少量含む。）  
 第3層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を含む。）

## 第261号住居跡カマド土層説明

- 第1層：暗褐色土層（暗褐色土・粘土粒子の混合土を主体に、焼土粒子を少量含む。）  
 第2層：黄褐色粘土層（黄褐色粘土・ロームの混合土を主体に、暗褐色土・焼土ブロック・焼土粒子を多量含む。）  
 第3層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、焼土ブロック・焼土粒子・粘土粒子を少量、炭化物を微量含む。）  
 第4層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子・粘土粒子を含む。）  
 第5層：暗褐色土層（2層に近いが、焼土粒子を少量、粘土粒子を微量含む。）  
 第6層：暗褐色土層（暗褐色土・粘土粒子の混合土を主体に、焼土粒子を含む。）  
 第7層：黄褐色粘土層（黄褐色粘土・ロームの混合土。焼土粒子・粘土粒子を多量含む。）  
 第8層：暗褐色土層（暗褐色土・黄褐色粘土の混合土を主体に、焼土粒子を微量含む。）  
 第9層：暗褐色土層（暗褐色土・黄褐色粘土の混合土を主体に、径0.5～1cmのロームブロック・焼土粒子・粘土粒子を少量含む。）  
 第10層：暗褐色土層（9層に近いが、焼土ブロック・焼土粒子を多量含む。）  
 第11層：暗褐色土層（暗褐色土・径0.5～0.8cmの粘土ブロック・黄褐色粘土粒子の混合土を主体に、焼土粒子を微量含む。）  
 第12層：暗褐色土層（黄褐色粘土・ロームの混合土を主体に、暗褐色土・焼土ブロック・焼土粒子を多量、炭化物・粘土粒子を微量含む。）

第13層：暗褐色土層（黄褐色粘土・ロームの混合土を主体に、暗褐色土を多量、炭化物・粘土粒子を微量含む。）

第14層：黄褐色粘土層（径2～4cmの粘土ブロック・粘土粒子を主体に、暗褐色土・焼土ブロック・焼土粒子を多量含む。）

第15層：黄褐色土層（暗褐色土・径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子の混合土。）

さは25cmある。検出された各壁の壁下には、壁溝が巡っている。床面は、ロームブロックを多量に含む暗黄褐色土を平坦に埋め戻した貼床式で、全体的に硬く締まっている。ピットは、7ヵ所検出されている。P 1は、いわゆる貯蔵穴と呼ばれるもので、カマド右側の住居南東側コーナー部に位置する。平面形は、72cm×63cmの不整円形ぎみの形態を呈している。確認面からの深さは75cmあり、二段に深くなっている。他のP 2～P 7は、長さ30cm～46cmの楕円形や隅丸方形あるいは長方形ぎみの形態を呈し、P 6が床面からの深さが60cmある以外は、いずれも27cm～35cmある。

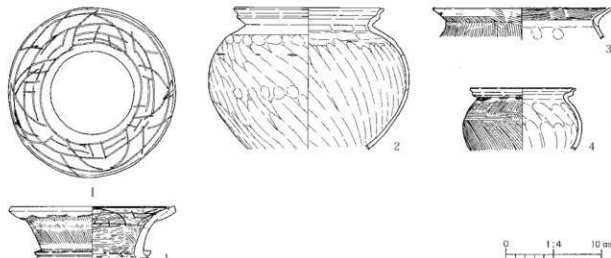
カマドは、住居東側壁の中央やや南側寄りの位置に、壁に対して直角に付設されている。規模は、全長70cm、最大幅94cmを測る。燃焼部は、住居内にある。燃焼面は、住居の床面と同じ高さでほぼ水平に作られている。燃焼部の奥壁は、緩やかに傾斜して煙道部に向かっている。袖は、黄褐色粘土を燃焼部奥壁から廻して構築している。袖内面はあまり焼けていない。煙道部は、既に削平されて残存していなかった。

遺物は、住居跡の覆土中から古墳時代前期～平安時代までの土器の破片が少量出土しただけである。本住居跡の時期は、住居跡の形態や出土遺物の様相から、平安時代前期と考えられる。

#### 第262号住居跡（第30図、写真図版11）

G 2地点調査区西側の南西端に位置する。重複する第264号住居跡に切られている。住居跡の大半は、調査区外にあるため、本住居跡の全容は不明である。

平面形は、不明である。規模は、南北方向は3.13mまで、東西方向は2.23mまで測れる。住居跡の東側壁の方向は、N-16°-Wを向いている。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは25cmある。検出された住居東側壁の壁下には、壁溝は見られなかった。床面は、ロームブロックを多量に含む暗黄褐色土を平坦に埋め戻した貼床式で、住居中央部は比較的堅く締まっているが、周



第29図 第262号住居跡出土遺物

辺部はやや軟弱である。ピットは、住居跡内から3カ所検出されているが、本住居跡に伴うものか明確ではない。

遺物は、住居壁際の床面上から、古墳時代前期の壺や甕の破片が出土している。住居東側壁際の床面上から出土したNo1の複合口縁壺は、口縁部の内面に篋描による4重の横線と四方に開く花卉状の文様を施しており、あまり類例の見られないものである。このNo1の壺は、床面上から胴部以下を欠く口縁部だけが出土していることから、大形の器台として再利用された可能性が高く、出土状態から推測すると、隣から出土したNo2の土器を乗せていた可能性が高いと思われる。No2の土器は、胴部内外面の調整技法から、S字状口縁台付甕ではなく、久下前遺跡C4地点(恋河内2018)の河川跡から出土したS字状口縁の平底鉢と類似した鉢ではないかと推測される。本住居跡の時期は、出土土器の様相から、古墳時代前期と考えられる。

第10表 第262号住居跡出土遺物観察表

1	複合口縁壺	A.口縁部径17.6。B.粘土組織み上げ。頸部凸帯貼り付け。C.口縁部内外面ハケの後ヨコナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一淡褐色。F.口縁部のみ。G.口縁部内面上半に篋描細線による4重の横線と花卉状の文様を施す。H.床面直上。
2	S字状口縁鉢	A.口縁部径(15.8)。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデ、内面指ナデ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.内外一淡褐色。F.口縁部1/4。G.胴部外面に指頭圧痕を残す。H.床面直上。
3	甕	A.口縁部径(19.0)。B.粘土組織み上げ。C.口縁部外面ハケの後上半ヨコナデ、内面ハケ。胴部外面ハケ、内面ナデ。D.白色粒。E.内外一暗褐色。F.口縁部1/4弱。G.頸部内面に指頭圧痕を残す。H.覆土中。
4	S字状口縁小形鉢	A.口縁部径(11.2)。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ハケ、内面指ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一暗茶褐色。F.口縁部1/4。H.覆土中。

#### 第263号住居跡 (第30図、写真図版11)

G2地点調査区西側の南西端に位置する。重複する第264号住居跡に切られ、第548号土坑を切っている。住居の大半を第264号住居跡に切られ、西側は調査区外にあるため、本住居跡の全容は不明である。

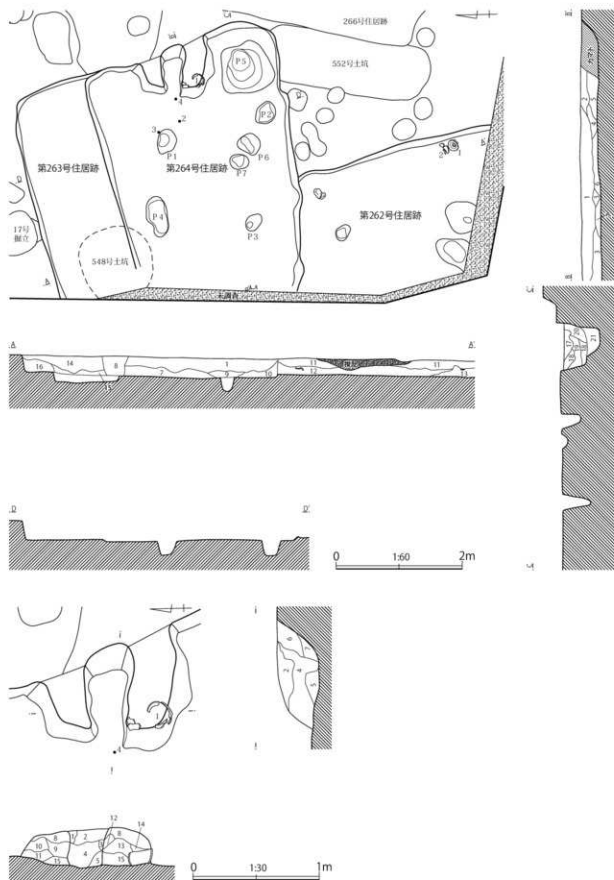
平面形は、残存する部分から推測すると、コーナー部が丸みをもつ隅丸方形か隅丸長方形を呈していたと思われる。規模は、南北方向は1.25mまで、東西方向は3.35mまで測れる。住居跡の北側壁の方向は、N-76°-Eを向いている。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは25cmある。検出された住居各壁の壁下には、壁溝は見られなかった。床面は、ロームブロックを多量に含む暗黄褐色を平坦に埋め戻した貼床式である。ピットは、検出されていない。

遺物は、何も出土しなかった。本住居跡の時期は不明であるが、重複する第264号住居跡と同一住居であった可能性が高い。

#### 第264号住居跡 (第30図、写真図版12)

G2地点調査区西側の南西端に位置する。重複する第262・263号住居跡と第548号土坑を切り、第552号土坑に切られている。住居跡の西側は調査区外にあるため、本住居跡の全容は不明である。

平面形は、検出された部分から推測すると、コーナー部が丸みをもつ隅丸長方形を呈していたと思われる。規模は、南北方向が2.55m、東西方向は4.30mまで測れる。住居跡の主軸は、N-81°-Eを向いている。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは30cmある。調査区内で検出された各壁の壁下には、壁溝は見られなかった。床面は、ロームブロックを含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式で、住居中央部は比較的堅く締まっているが、周辺部はやや軟弱である。ピットは、



第30图 第262·263·264号住居跡



## 第262・263・264号住居跡土層説明

- 第1層：暗褐色土層 (暗褐色土を主体に、浅間山系A軽石・ローム粒子を多量、径0.5～2cmのロームブロックを少量、焼土粒子を微量含む。)
- 第2層：暗褐色土層 (1層に近いが、焼土粒子を多量、粘土粒子を少量含む。)
- 第3層：暗褐色土層 (暗褐色土を主体に、ロームブロック・ローム粒子を多量含む。)
- 第4層：暗褐色土層 (暗褐色土を主体に、浅間山系A軽石・ローム粒子を多量、径0.5～1cmのロームブロック・径3cmの焼土ブロック・焼土粒子を少量含む。)
- 第5層：暗褐色土層 (暗褐色土を主体に、ローム粒子・径0.5～5cmの粘土ブロック・粘土粒子を多量含む。)
- 第6層：暗褐色土層 (暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、径0.5～2cmのロームブロックを少量含む。)
- 第7層：暗褐色土層 (6層に近いが、ロームブロックを微量含む。)
- 第8層：暗褐色土層 (暗褐色土を主体に、ロームブロック・ローム粒子を含む。)
- 第9層：暗褐色土層 (1層に近いが、ローム粒子を少量含む。)
- 第10層：暗褐色土層 (1層に近いが、径0.5～2cmのロームブロックを多量含む。)
- 第11層：暗褐色土層 (暗褐色土を主体に、浅間山系A軽石・径1～4cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含む。)
- 第12層：暗褐色土層 (ローム粒子を多量含む。)
- 第13層：暗褐色土層 (ローム粒子を少量含む。)
- 第14層：暗褐色土層 (暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、浅間山系A軽石・ロームブロックを少量、焼土粒子を微量含む。)
- 第15層：暗褐色土層 (14層に近いが、ローム粒子を少量含む。しまりを有する。)
- 第16層：暗褐色土層 (15層に近いが、ローム粒子を微量含む。)
- 第17層：暗褐色土層 (暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、炭化物を少量含む。)
- 第18層：暗褐色土層 (暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、径0.5～3cmのロームブロック・炭化物を少量含む。)
- 第19層：暗褐色土層 (暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、径0.5～0.8cmのロームブロック・炭化物を少量含む。)
- 第20層：暗褐色土層 (18層に近いが、ロームブロック・ローム粒子を多量含む。)
- 第21層：暗褐色土層 (暗褐色土を主体に、ローム粒子を含む。)

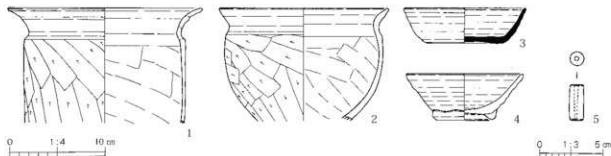
## 第264号住居跡カマド土層説明

- 第1層：暗褐色土層 (暗褐色土・黄褐色粘土の混合土を主体に、焼土ブロック・焼土粒子を少量含む。)
- 第2層：暗褐色土層 (暗褐色土を主体に、ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子を少量、炭化物を微量含む。)
- 第3層：暗褐色土層 (黄褐色粘土を主体に、暗褐色土・焼土ブロック・焼土粒子を含む。)
- 第4層：暗褐色土層 (暗褐色土を主体に、焼土ブロック・焼土粒子・粘土ブロック・粘土粒子を多量含む。)
- 第5層：暗褐色土層 (黄褐色粘土を主体に、焼土ブロックを多量含む。)
- 第6層：暗褐色土層 (暗褐色土ブロック・粘土ブロックの混合土。径0.5～1cmの焼土ブロック・炭化物を少量含む。)
- 第7層：黄褐色粘土層 (径0.5～2cmの焼土ブロック・焼土粒子・径0.5～2cmの暗褐色土ブロック・粘土ブロック・粘土粒子を多量含む。)
- 第8層：暗褐色土層 (暗褐色土・黄褐色粘質土ロームの混合土を主体に、ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含む。)
- 第9層：暗褐色土層 (8層に近いが、焼土ブロック・焼土粒子・黄褐色粘質土ロームを多量含む。)
- 第10層：暗褐色土層 (暗褐色土・黄褐色粘質土ロームの混合土を主体に、ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含む。)
- 第11層：暗褐色土層 (暗褐色土・ロームを主体とする。)
- 第12層：暗褐色土層 (暗褐色土・黄褐色粘質土ロームを主体に、ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含む。)
- 第13層：暗褐色土層 (8層に近いが、黄褐色粘質土ロームを多量含む。)
- 第14層：暗褐色土層 (12層に近いが、暗褐色土を多量含む。)
- 第15層：暗褐色土層 (暗褐色土・粘質土ロームの混合土を主体に、径0.5～4cmの焼土ブロック・焼土粒子を多量含む。)

7カ所検出されている。この中のP5は、いわゆる貯蔵穴と呼ばれるもので、カマド右側の住居南東側コーナー部に位置する。平面形は、80cm×85cmの隅丸方形ぎみの形態を呈している。断面は、二段に深くっており、床面からの深さは70cmある。他のピットについては、その性格は不明である。

カマドは、住居東側壁のほぼ中央に位置に、壁に対して斜めに付設されている。規模は、全長82cm、最大幅128cmを測る。燃焼部は、住居の壁を掘り込まず、住居内にある。燃焼面は、住居の床面より若干低く、燃焼部の壁奥は緩やかに傾斜して煙道部に向かっている。袖は、黄褐色粘質土ロームを住居の壁に直接貼り付けて構築しており、右袖の先端付近にはNo1の土師器裏を伏せて補強している。袖内面は、あまり焼けていない。煙道部は、既に削平されて残存していなかった。

遺物は、住居跡の覆土中やカマド内から、古墳時代中期～平安時代までの土器が混在して出土している。土器以外では、おそらく混入品と思われる石製管玉(No 5)が1点覆土中から出土している。本住居跡の時期は、住居跡の形態やカマド袖の構築材に使用された土器(No 1)の様相から、古墳時代後期後葉頃と考えられる。



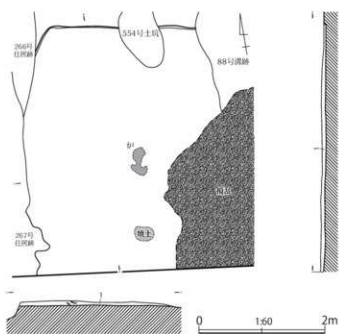
第31図 第264号住居跡出土遺物

第11表 第264号住居跡出土遺物観察表

1	長 胴 甕	A.口縁部径20.6. B.粘土組織み上げ. C.口縁部内外面ヨコナデ. 胴部外面ケズリ、内面ワナデ. D.片岩粒、白色粒. E.内外一茶褐色. F.上半1/2. H.カマド右袖先端。
2	鉢	A.口縁部径(18.0). B.粘土組織み上げ. C.口縁部内外面ヨコナデ. 胴部外面ケズリ、内面ワナデ. D.片岩粒、赤色粒、白色粒. E.内外一淡褐色. F.1/4. H.覆土中。
3	須 恵 器 坪	A.口縁部径(13.0). 器高3.7. 底部径8.2. B.ロクロ成形. C.口縁部内外面回転ナデ. 底部外面回転糸切り後外周回転ケズリ. D.白色針状物質(海綿骨針)、白色粒. E.内外一灰色. F.1/4. G.南北比企窯産. H.覆土中。
4	高台付 坪	A.口縁部径(12.4). 器高4.9. 高台部径(6.7). B.ロクロ成形. 高台部貼り付け. C.口縁部内外面回転ナデ. 底部外面回転糸切り後ナデ. D.白色粒. E.内外一淡灰色. F.1/2. G.還元不良. 混入品. H.覆土中。
5	石 製 管 玉	A.長さ2.8. 直径1.1. 重さ6.7g. C.研磨. 片面穿孔. D.緑色凝灰岩. E.濃緑色. F.完形. H.覆土中。

第265号住居跡 (第32図、写真図版13)

G 2地点調査区西側の南端に位置する。住居跡の西側を第266号住居跡と267号住居跡に、北側を第



第32図 第265号住居跡

554号土坑に、東側を第88号溝跡と後世の攪乱に切られている。本住居跡は床面近くまで強く削平されており、遺構の遺存状態はあまり良好とは言えない。

平面形は、住居跡の南側半分が調査区外にあり、調査区内では北側壁の一部しか残存していないため、不明である。規模は、南北方向は3.91mまで、東西方向は3.15mまで測れる。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは8cmある。残存する北側壁の壁下には、壁溝は見られ

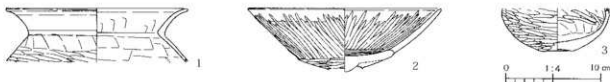
## 第265号住居跡土層説明

第1層：暗褐色土層 (暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、焼土粒子・炭化物・炭化粒子を少量、径0.5～0.8cmのロームブロックを微量含む。)

ない。床面は、ロームブロックを含む暗褐色土を平坦に埋め戻した貼床式である。住居中央部は比較的堅く締まっているが、周辺部はやや軟弱である。ピットは、検出されなかった。

炬は、住居の中央付近に位置する。床面が焼けているだけの地床炬で、平面形は不整形を呈している。規模は、南北方向が40cm、東西方向が25cmを測る。

遺物は、住居跡の覆土中から、古墳時代前期を主体とする土器の破片が少量出土しただけである。本住居跡の時期は、遺構の重複関係や住居跡の形態及び出土遺物の様相から、古墳時代中期前半頃と考えられる。



第33図 第265号住居跡出土遺物

第12表 第265号住居跡出土遺物観察表

1	甕	A.口縁部径19.2。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面麗ナデの後ミガキ風の丁寧なナデ、内面麗ナデ。D.白色粒。E.内外一暗茶褐色。F.口縁部1/2。H.覆土中。
2	高  环	A.口縁部径20.6。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデの後ミガキ。环部外面ミガキ。D.白色粒。E.外一暗茶褐色、内一淡茶褐色。F.环部のみ。H.覆土中。
3	小形直口 壺	A.底部径3.2。B.粘土組織み上げ。C.胴部外面ケズリの後ミガキ、内面麗ナデ。底部外面ミガキ。D.白色粒。E.内外一暗茶褐色。F.胴下半のみ。H.覆土中。

#### 第266号住居跡（第34図、写真図版14・15）

G 2地点調査区西側の南側に位置する。重複する第265号住居跡を切り、第267・268・269・270・273号住居跡や第543・549・550・551・552号土坑に切られている。

平面形は、残存する部分から推測すると、方形を呈していたと思われる。規模は、南北方向が11.02m、東西方向が10.38mを測る大形住居である。住居の主軸方位は、N-15° - Eを向いている。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは38cmある。住居北側壁以外の各壁の壁下には、幅20cm前後、床面からの深さが10cm程度の壁溝が巡っている。床面は、ロームブロックを含む暗褐色土を平坦に埋め戻した貼床式である。住居中央部は比較的堅く締まっているが、周辺部はやや軟弱である。ピットは、住居跡内から多数検出されているが、本住居跡との関係が窺えるのは、P 1～P 5の5カ所である。P 1～P 4は、住居の対角線上に配置されていることから、住居の上屋を支える4本主柱の柱穴と考えられる。いずれも長さ65cm～110cmの楕円形ぎみの形態で、床面からの深さは58cm～84cmある。P 5は、住居南東側コーナー部に位置している。154cm×150cmの不整形円形ぎみの形態で、床面からの深さは80cmある。P 5内からは、完形の土師器の甕や高环の破片などが出土している。

炬は、明確ではないが、住居南東側寄りの床面上に、焼けて不整形形状に赤色化した部分が見られる。これが炬であれば、その位置から見て副炬の一つの可能性が高いと思われる。本住居跡の主炬は、おそらく主柱穴P 1・P 2間か第550号土坑のあたりにあったものと思われる。

遺物は、住居跡の覆土中や貯蔵穴(P 5)内から、古墳時代中期前半を主体とする土器が多数出土している。白鳳時代(No31～No33)や平安時代(No34～No36)の土器も出土しているが、白鳳時代の土器



第34图 第266号住居跡

## 第266号住居跡土層説明

第1層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、浅間山系A軽石・径0.5～5cmのロームブロック・ローム粒子を含む。）

第2層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、浅間山系A軽石・ロームブロックを少量含む。）

第3層：暗褐色土層（径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を含む。）

第4層：暗褐色土層（2層に近いが、ロームブロックを多量含む。）

第5層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、浅間山系A軽石を少量含む。）

第6層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、0.2～0.3cmの炭化物を少量、径0.5～1cmのロームブロックを微量含む。）

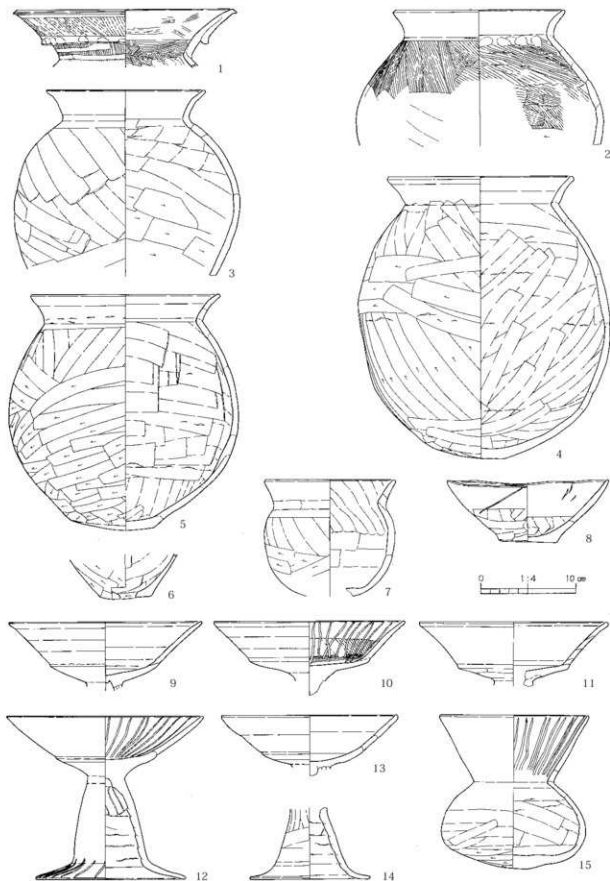
第7層：暗褐色土層（径1.5～4cmのロームブロック・ローム粒子を含む。）

第8層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を多量含む。）

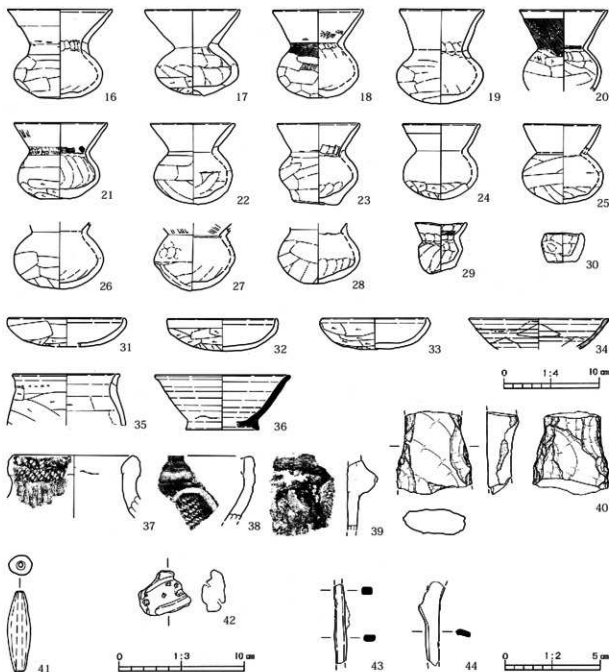
は重複する第273号住居跡から、平安時代の土器は重複する第267～270号住居跡から混入したものと考えられる。本住居跡の時期は、遺構の重複関係や住居跡の形態及び出土遺物の様相から、古墳時代中期前半頃と考えられる。

第13表 第266号住居跡出土遺物観察表

1	壺	A.口縁部径23.6。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ハケの後ヨコナデ。頸部外面ハケの後ヨコナデ。内面ハケ。D.石英、白色粒。E.外一淡黄褐色。内一灰黄褐色。F.口縁部1/3。G.内外面に指頭圧痕を残す。H.覆土中。
2	甕	A.口縁部径18.2。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ハケの後下半径ナデ。内面ハケの後下半径ナデ。D.石英、白色粒。E.内外一淡黄褐色。F.上半1/3。G.頸部内面に指頭圧痕を残す。H.覆土中。
3	甕	A.口縁部径16.8。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面径ナデ。内面径ナデの後下半径ナデ。D.片岩粒、石英、白色粒。E.内外一淡黄褐色。F.上半3/4。H.覆土中。
4	甕	A.口縁部径19.7。器高29.9。底部径3.8。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面径ナデの後ケズリ。内面径ナデ。底部外面ケズリの後ナデ。D.石英、角閃石、雲母、白色粒。E.内外一橙褐色。F.ほぼ完形。H.貯蔵穴内。
5	甕	A.口縁部径20.0。器高25.0。底部径8.8。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面径ナデの後下半径ナデ。内面径ナデ。底部外面ケズリ。D.石英、角閃石、雲母、黒色粒。E.外一橙褐色。内一淡褐色。F.ほぼ完形。H.床面付近。
6	小形甕	A.底部径5.5。B.粘土組織み上げ。C.胴部外面ケズリ。内面径ナデ。底部外面ケズリ。D.石英、角閃石、白色粒。E.内外一明褐色。F.底部のみ。H.覆土中。
7	小形甕	A.口縁部径13.9。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。内面径ナデ。胴部外面径ナデの後下半径ナデ。内面径ナデ。D.石英、白色粒。E.内外一淡黄褐色。F.1/3。H.覆土中。
8	鉢	A.口縁部径17.1。器高6.5。底部径6.1。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面径ナデ。底部外面ナデ。D.石英、白色粒。E.内外一淡黄褐色。F.完形。G.器形はやや歪んでいる。H.覆土中。
9	高 杯	A.口縁部径20.4。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。杯部内外面ナデ。D.石英、雲母、黒色粒。E.内外一淡褐色。F.杯部のみ。H.覆土中。
10	高 杯	A.口縁部径20.3。B.粘土組織み上げ。C.口縁部外面ヨコナデ。内面ハケの後放射状暗文を施す。杯部内外面ナデ。D.石英、角閃石、雲母、白色粒。E.外一橙褐色。内一明赤褐色。F.杯部のみ。H.貯蔵穴内。
11	高 杯	A.口縁部径20.0。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。杯部外面径ナデ。内面ナデ。D.石英、角閃石、雲母、白色粒。E.外一橙褐色。内一明赤褐色。F.杯部1/4。H.覆土中。
12	高 杯	A.口縁部径20.8。器高17.3。脚端部径15.9。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデの後内面に放射状暗文を施す。胴柱部内外面ナデ。脚端部内外面ヨコナデの後外面に放射状暗文を施す。D.石英、角閃石、雲母。E.外一明赤褐色。内一橙褐色。F.杯部2/3。脚部3/4。H.貯蔵穴内。
13	高 杯	A.口縁部径18.7。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。杯部内外面ナデ。D.石英、角閃石、雲母、白色粒。E.内外一明赤褐色。F.杯部のみ。H.貯蔵穴内。
14	高 杯	A.脚端部径12.8。B.粘土組織み上げ。C.胴部外面径ナデ。内面ナデ。脚端部内外面ヨコナデ。D.石英、角閃石、雲母。E.内外一淡褐色。F.脚部のみ。H.覆土中。
15	中形直口壺	A.口縁部径15.8。器高16.3。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデの後内面に放射状暗文を施す。胴部外面径ナデの後下半径ナデ。内面径ナデ。D.石英、角閃石、雲母、白色粒。E.内外一明赤褐色。F.口縁部2/3欠損。H.貯蔵穴内。
16	小形直口壺	A.口縁部径11.0。器高9.5。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面径ナデ。内面ナデ。D.角閃石、白色粒。E.外一淡褐色。内一淡褐色。F.完形。G.頸部内面に指頭圧痕を残す。H.貯蔵穴内。
17	小形直口壺	A.口縁部径10.1。器高9.1。底部径2.2。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面径ナデの後下半径ナデ。内面径ナデ。底部外面ナデ。D.角閃石、白色粒。E.内外一赤褐色。F.1/2。G.内面に指頭圧痕を残す。H.覆土中。
18	小形直口壺	A.口縁部径9.7。器高9.4。底部径1.8。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ハケの後ヨコナデ。胴部外面ハケの後下半径ナデ。内面径ナデ。底部外面ナデ。D.石英、角閃石、白色粒。E.内外一赤褐色。F.完形。G.内面に指頭圧痕を残す。H.覆土中。
19	小形直口壺	A.口縁部径8.9。器高11.1。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面径ナデ。内面ナデ。D.角閃石、白色粒。E.内外一淡褐色。F.3/4。G.内面に指頭圧痕を残す。H.覆土中。



第35图 第266号住居跡出土遺物(1)



第36図 第266号住居跡出土遺物(2)

20	小形直口壺	A.口縁部径9.4。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ハケの後ヨコナデ。胴部内外面笠ナデ。D.角閃石、白色粒。E.内外一淡橙褐色。F.上半のみ。G.内面に指頭圧痕を残す。H.貯藏穴内。
21	小形直口壺	A.口縁部径9.9。器高8.1。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ハケの後ヨコナデ。胴部外面ナデの後下半ケズリ、内面ナデ。D.角閃石、白色粒。E.内外一褐色。F.完形。H.覆土中。
22	小形直口壺	A.口縁部径9.0。器高8.5。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面笠ナデ、内面笠ナデ。D.石英、白色粒。E.内外一橙褐色。F.口縁部1/4欠損。H.貯藏穴内。
23	小形直口壺	A.口縁部径8.8。器高8.6。底部径4.9。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部内外面笠ナデ。底部外面ナデ。D.角閃石、白色粒。E.内外一褐色。F.完形。G.内面に指頭圧痕を残す。H.覆土中。
24	小形直口壺	A.口縁部径8.2。器高8.0。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデの後下半ケズリ、内面ナデ。D.石英。E.内外一明黄褐色。F.完形。H.貯藏穴内。
25	小形直口壺	A.口縁部径8.2。器高8.4。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面笠ナデ、内面ナデ。D.石英、角閃石、白色粒。E.内外一淡褐色。F.口縁部4/5欠損。G.口縁部と胴部は接合しない。器形は図上復元。H.貯藏穴内。
26	小形直口壺	B.粘土組織み上げ。C.胴部外面ナデの後下半笠ナデ、内面指ナデ。D.石英、角閃石、白色粒。E.内外一淡橙褐色。F.口縁部欠損。H.貯藏穴内。

27	小形直口壺	B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ハケの後ヨコナデ。胴部外面ナデの後下半笠ナデ、内面ナデ。D.角閃石、白色粒。E.外一淡橙褐色、内一黒褐色。F.口縁部欠損。G.内外面に指面圧痕を残す。H.覆土中。
28	小形直口壺	B.粘土組織み上げ。C.胴部外面笠ナデ、内面ナデ。D.石英、角閃石、白色粒。E.内外一淡橙褐色。F.口縁部欠損。G.内面に指面圧痕を残す。H.覆土中。
29	小形土器	A.口縁部径5.5、器高5.4、底部径2.9。B.手捏ね。C.口縁部外面ヨコナデ、内面ハケ。胴部外面ナデ、内面指ナデ。D.角閃石、白色粒。E.内外一淡黄褐色。F.完形。G.内外面に指面圧痕を残す。H.覆土中。
30	小形土器	A.口縁部径4.0、器高3.2、底部径2.8。B.手捏ね。C.体部内外面指ナデ。底部外面ナデ。D.片岩粒、白色粒。E.外一明褐色、内一褐色。F.完形。H.覆土中。
31	杯	A.口縁部径12.6、器高3.0。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後下半ケズリ、内面ヨコナデ。D.角閃石、白色粒。E.内外一橙褐色。F.1/5。H.覆土中。
32	杯	A.口縁部径11.8、器高2.9。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後ケズリ、内面ヨコナデ。D.石英、角閃石、白色粒。E.内外一橙褐色。F.完形。H.貯蔵穴内。
33	杯	A.口縁部径11.3、器高3.3。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ヨコナデ。D.角閃石、白色粒。E.外一淡褐色、内一淡橙褐色。F.1/5。H.覆土中。
34	灰陶輪器 埴	A.口縁部径14.7。B.ロコロ成形。C.口縁部内外面回転ナデの後施軸。D.黒色粒。E.外一灰白色、内一灰色。F.口縁部1/5。G.施軸は塗り掛け。H.覆土中。
35	小形台付甕	A.口縁部径11.3。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面笠ナデ。D.片岩粒、石英、角閃石。E.内外一淡橙褐色。F.上半3/4。H.覆土中。
36	須恵器 高台付埴	A.口縁部径14.4、器高5.9、高台部径7.8。B.ロコロ成形。高台部貼り付け。C.口縁部内外面回転ナデ。底部外面回転系切り。高台部内外面回転ナデ。D.片岩粒、石英、白色粒。E.内外一淡黄褐色。F.1/4。G.還元不良。H.覆土中。
37	深鉢	A.口縁部径10.4。B.粘土組織み上げ。C.口縁下に単節RL縄文を施文。D.角閃石、白色粒。E.内外一淡黄褐色。F.口縁部破片。G.縄文時代中期後半加曾利EⅢ式。H.覆土中。
38	深鉢	B.粘土組織み上げ。C.口縁部ミガキ。胴部外面沈線区画内に単節RL縄文を縦位に施文。D.石英、角閃石、白色粒。E.外一淡黄褐色、内一赤褐色。F.口縁部破片。G.縄文時代中期後半加曾利EⅢ式。H.覆土中。
39	深鉢	B.粘土組織み上げ。C.胴部外面隆帯貼り付け後、単節LR縄文を施文。D.角閃石、白色粒。E.内外一淡黄褐色。F.胴部破片。G.縄文時代中期。H.覆土中。
40	打製石斧	A.残存長6.65、最大幅5.95、厚さ2.5、重さ124.71g。C.表裏面とも剥離調整。D.緑色岩類。F.両端部欠損。H.覆土中。
41	土錘	A.長さ6.3、最大径1.8、重さ15.60g。B.手捏ね。C.ナデ。D.角閃石、白色粒。F.完形。H.覆土中。
42	貝塚穴泥岩	A.長さ3.4、最大幅3.9、厚さ1.8、重さ13.46g。F.完形。H.覆土中。
43	鉄製品	A.残存長4.1、最大幅0.6、厚さ0.4、重さ2.08g。B.鍛造。D.鉄製。F.破片。H.覆土中。
44	鉄製品	A.残存長4.4、最大幅0.9、厚さ0.2、重さ2.30g。B.鍛造。D.鉄製。F.破片。H.覆土中。

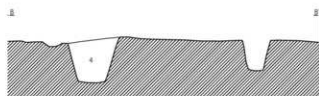
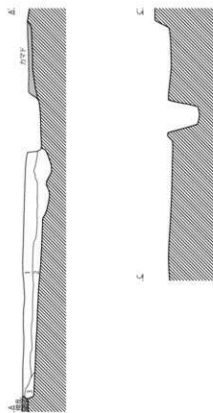
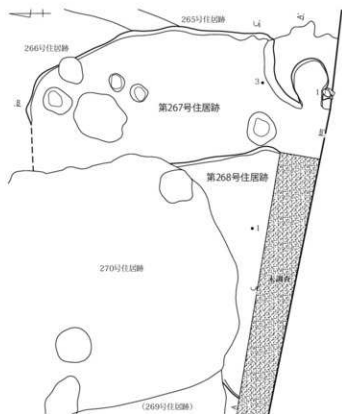
### 第267号住居跡 (第37図、写真図版16)

G 2地点調査区西側の南端に位置する。重複する第268・269・270号住居跡に切れ、第265・266号住居跡を切っている。住居跡の南側半分は調査区外に位置するため、本住居跡の全容は不明である。住居跡の上は、強く削平されており、遺構の遺存状態はあまり良好とは言えない。

平面形は、調査区内で検出された部分から推測すると、コーナー部が丸みをもつ隅丸方形か隅丸長方形を呈していたものと思われる。規模は、東西方向は2.15mまで、南北方向は4.35mまで測れる。住居の主軸方位はN-88°-Eを向いている。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは23cmある。検出された各壁の壁下には、壁溝は見られない。床面は、ロームブロックを含む暗褐色土を平坦に埋め戻した貼床式で、住居中央部は比較的締まっているが、周辺部はやや軟弱である。ピットは、住居跡内から複数検出されているが、本住居跡との関係は不明である。

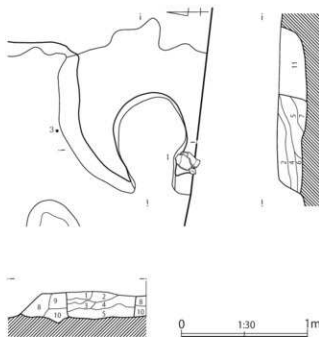
カマドは、住居東側壁に位置し、壁に対してほぼ直角に付設されている。規模は、全長278cm、最大幅230cmを測る。燃焼部は、住居の壁を掘り込まず住居内にある。燃焼面は、住居の床面とほぼ同じ高さで水平に作られており、奥壁は直線的に傾斜して煙道部に向かっている。袖は、黄褐色粘土を含む暗褐色土を燃焼部奥壁から廻して構築されている。右袖の先端部付近からは、No 1の甕が出土し





#### 第267号住居跡カマド土層説明

- 第1層：明赤褐色焼土層（径0.5～5cmの焼土ブロック・焼土粒子を主体に、暗褐色土・炭化物を少量含む。）
- 第2層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、焼土ブロック・焼土粒子を多量含む。）
- 第3層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、焼土ブロック・焼土粒子を多量、炭化物を少量含む。）
- 第4層：暗褐色土層（3層に近いが、焼土ブロック・焼土粒子を少量含む。）
- 第5層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、径0.5～0.8cmのロームブロック・ローム粒子・焼土ブロック・焼土粒子を含む。）
- 第6層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量含む。）
- 第7層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を少量含む。）
- 第8層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ロームブロック・ローム粒子・焼土ブロック・焼土粒子・黄褐色粘質土ロームを多量含む。しまりを有する。）
- 第9層：暗褐色土層（暗褐色土・黄褐色粘質土ロームの混合土を主体に、焼土ブロック・焼土粒子を多量含む。しまりを有する。）
- 第10層：暗褐色土層（ローム粒子を多量含む。）
- 第11層：暗褐色土層（ローム粒子を含む。）



第37図 第267・268号住居跡

## 第267・268号住居跡土層説明

第1層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、径0.5～0.8cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。焼土粒子を少量含む。）

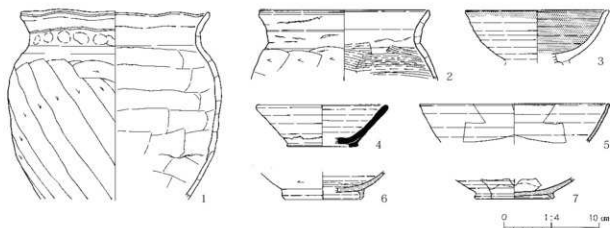
第2層：暗褐色土層（ロームブロックを多量含む。）

第3層：暗褐色土層（ローム粒子を含む。）

第4層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、径0.5～4cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子を微量含む。）

ており、袖の補強にされたものかもしれない。煙道部は、既に削平されているため、不明である。

遺物は、住居跡の覆土中やカマド内から、平安時代中期頃を主体とする土器の破片が出土している。本住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土遺物の様相から、平安時代中期頃と考えられる。



第38図 第267号住居跡出土遺物

第14表 第267号住居跡出土遺物観察表

1	甕	A.口縁部径(20.0)。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ワナデ。D.片岩粒、石英、角閃石、白色粒。E.内外一橙褐色。F.上半1/3。G.口縁部外面に指頭圧痕を残す。H.カマド右袖先端。
2	甕	A.口縁部径18.2。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ハケ。D.石英、角閃石。E.外一明褐色、内一淡褐色。F.口縁部破片。H.覆土中。
3	高台付埴	A.口縁部径(15.2)。B.ロクロ成形。高台部貼り付け。C.口縁部内外面回転ナデ。D.角閃石、白色粒。E.外一明褐色、内一黒色。F.1/3。G.内面黒色処理。酸化焙焼成。H.覆土中。
4	須恵器 高台付埴	A.口縁部径(14.0)。器高4.4、高台部径(7.6)。B.ロクロ成形。高台部貼り付け。C.口縁部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。D.片岩粒、石英。E.内外一灰色。F.1/5。H.覆土中。
5	灰釉陶器 埴	A.口縁部径(20.1)。B.ロクロ成形。C.口縁部内外面回転ナデの後施釉。D.黒色粒。E.内外一灰色。F.口縁部破片。H.覆土中。
6	灰釉陶器 埴	A.高台部径(8.7)。B.ロクロ成形。高台部貼り付け。C.体部内外面回転ナデの後施釉。底部外面回転切り。D.白色粒。E.内外一灰白色。F.高台部1/5。H.覆土中。
7	灰釉陶器 埴	A.高台部径(8.5)。B.ロクロ成形。高台部貼り付け。C.体部内外面回転ナデの後施釉。底部外面回転切り。D.黒色粒。E.内外一灰白色。F.高台部破片。H.覆土中。

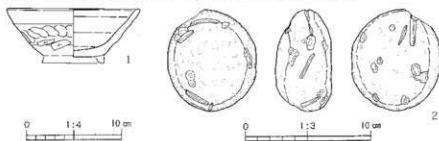
## 第268号住居跡（第37図、写真図版17）

G 2 地点調査区西側の南端に位置する。重複する第269・270号住居跡に切られ、第267号住居跡を切っている。住居跡の南側半分は調査区外に位置するため、本住居跡の全容は不明である。住居跡の上面は、強く削平されており、遺構の遺存状態はあまり良好とは言えない。

平面形は、不明である。規模は、東西方向は3.85mまで、南北方向は1.55mまで測れる。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは41cmある。検出された住居東側壁の壁下には、壁溝は見られない。床面は、ロームブロックを含む暗黄褐色土を平坦に埋め戻した貼床式である。

遺物は、住居跡の覆土中から、平安時代を主体とする土器の破片が少量出土している。土器以外

では、磨り石あるいは砥石として使用されたとと思われる小形の角閃石安山岩(No 2)が出土している。本住居跡の時期は、遺構の重複関係から、平安時代中期頃と考えられる。



第39図 第268号住居跡出土遺物

第15表 第268号住居跡出土遺物観察表

1	高台付環	A.口縁部径(14.0)。B.粘土細積み上げ。高台部貼り付け。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後ケズリ。内面ナデ。D.片岩粒、石英、角閃石、白色粒。E.内外一明褐色。F.3/4。G.体部外面に指頭圧痕を残す。高台部剥離。H.覆土中。
2	磨り石	A.長さ8.2、最大幅7.1、厚さ4.5、重さ178.69g。B.自然石を利用。D.角閃石安山岩。E.ほぼ完形。H.覆土中。

#### 第269号住居跡 (第40図、写真図版18)

G 2 地点調査区西側の南寄りに位置する。重複する第270号住居跡に切られ、第266・268号住居跡を切っている。住居跡の大半を第270号住居跡に切られているため、本住居跡の全容は不明である。すでに住居跡の床面下まで削平されており、残存しているのは住居跡の掘り方部分の一部だけであるため、遺構の遺存状態は劣悪である。

平面形は、残存する掘り方の部分から推測すると、コーナー部が丸みをもつ隅丸方形が隅丸長方形を呈していたと思われる。規模は、南北方向が4.50m、東西方向は0.87mまで測れる。住居跡の西側壁は、N-170°-Wの方向を向いている。床面や壁は不明であるが、西側壁の一部には壁溝が巡っていたようである。

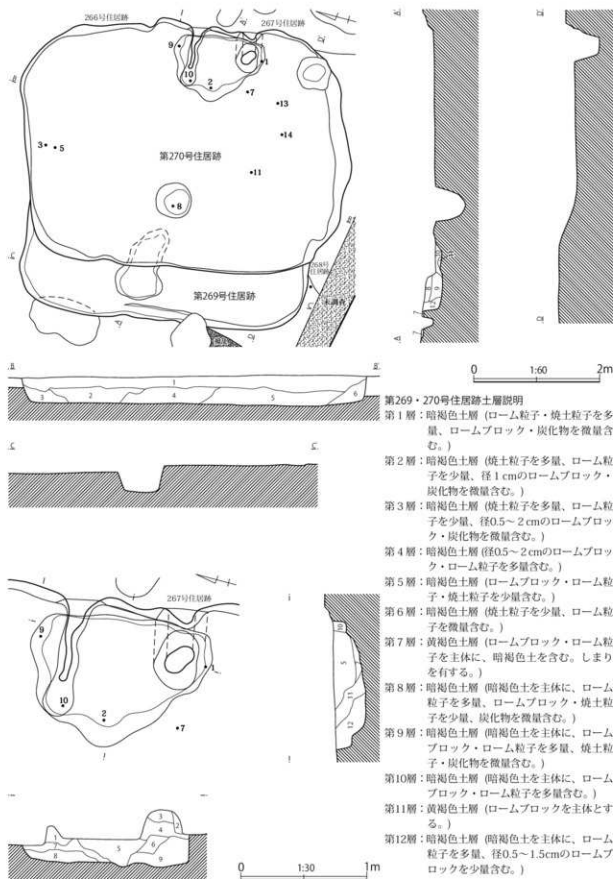
遺物は、何も出土しなかった。本住居跡の時期は、遺構の重複関係から平安時代頃と考えられる。

#### 第270号住居跡 (第40図、写真図版18)

G 2 地点調査区西側の南寄りに位置する。重複する第266・267・268・269号住居跡を切っている。

平面形は、コーナー部が丸みをもつ隅丸長方形を呈している。規模は、東西方向が3.92m、南北方向が5.08mを測る。住居の主軸方位は、N-85°-Eを向いている。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは47cmある。各壁の壁下には、壁溝は見られない。床面は、ロームブロックを多量に含む暗黄褐色土を平坦に埋め戻した貼床式である。住居中央部は比較的堅く締まっているが、周辺部はやや軟弱である。ピットは、住居跡内から2カ所検出されているが、本住居跡との関係は不明である。

カマドは、住居東側壁の中央やや南寄りの位置に、壁に対して直角に付設されている。規模は、全長116cm、最大幅142cmを測る。燃焼部は、住居の壁を掘り込まずに住居内にある。燃焼面は、住居の床面とほぼ同じ高さで推測され、奥壁は緩やかに傾斜して煙道部に向かうようである。袖は、ロームブロックを含む暗黄褐色土を、住居の壁に直接貼り付けて構築している。袖の内面は、あまり焼け



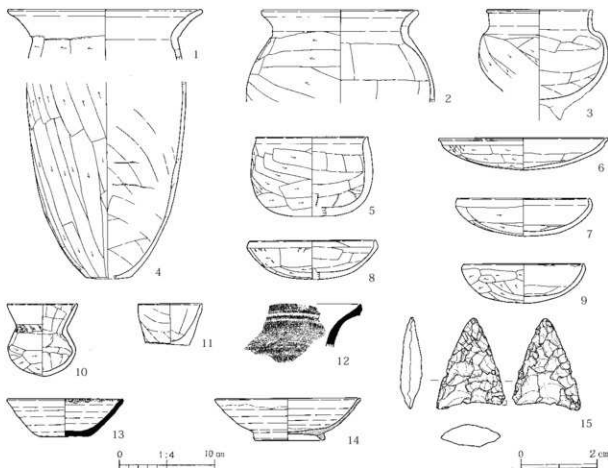
第40図 第269・270号住居跡

## 第270号住居跡カマド土層説明

- 第1層：黄褐色土層 (径0.5～6 cmのロームブロック・ローム粒子を主体に、暗褐色土・焼土粒子を少量含む。)  
 第2層：暗褐色土層 (暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、ロームブロックを少量、焼土粒子を微量含む。)  
 第3層：暗褐色土層 (暗褐色土を主体に、ロームブロック・ローム粒子を多量、焼土ブロックを微量含む。)  
 第4層：暗褐色土層 (黒褐色土・径0.5～3cmのロームブロック・ローム粒子の混合土。焼土ブロック・焼土粒子を微量含む。)  
 第5層：褐色土層 (褐色土を主体に、径0.5～0.8cmのロームブロック・ローム粒子・焼土粒子を多量、炭化物を少量含む。)  
 第6層：褐色土層 (褐色土を主体に、ロームブロック・ローム粒子・焼土粒子を多量、炭化物を少量含む。)  
 第7層：黄褐色土層 (暗褐色土・ロームの混合土。径0.5～1 cmのロームブロックを多量含む。)  
 第8層：黄褐色土層 (暗褐色土・ロームの混合土。径2～4 cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含む。)  
 第9層：黄褐色土層 (径0.5～5 cmのロームブロックを多量、暗褐色土・ローム粒子を少量含む。)  
 第10層：暗褐色土層 (暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、径0.5～0.8cmのロームブロック・焼土粒子を少量含む。)  
 第11層：暗褐色土層 (暗褐色土を主体に、ロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子を少量含む。)  
 第12層：暗褐色土層 (暗褐色土を主体に、径0.5～4 cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。)

ていない。煙道部は、すでに削平されているため不明である。

遺物は、住居跡の覆土中から、古墳時代前期～平安時代の土器が混在して出土している。これらの土器のうち、No 1～No12の古墳時代から白鳳時代の土器は本住居に伴うものではなく、住居跡の重複関係からすると住居に伴う可能性があるものは、No13の須恵器坏とNo14の灰軸陶器埴だけである。土器以外では、縄文時代の石鏃(No15)が覆土中から出土している。本住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土物の様相から、平安時代頃と考えられる。



第41図 第270号住居跡出土遺物

第16表 第270号住居跡出土遺物観察表

1	長 胴 甕	A.口縁部径16.8、B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面笠ナデ。D.石英、角閃石、白色粒。E.内外一淡褐色。F.口縁部4/5。H.覆土中。
2	胴 張 甕	A.口縁部径(20.6)。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面笠ナデ。D.片岩粒、角閃石、チャート。E.内外一淡褐色。F.口縁部破片。H.覆土中。
3	台 付 鉢	A.口縁部径11.2。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面笠ナデ。D.白色粒。E.内外一褐色。F.台部欠損。H.覆土中。
4	長 胴 甕	A.底部径(4.7)。B.粘土組織み上げ。C.胴部外面ケズリ、内面笠ナデ。底部外面ケズリ。D.角閃石、白色粒。E.外一淡褐色。内一淡褐色。F.胴部下半1/3。H.覆土中。
5	鉢	A.口縁部径(11.9)。器高8.4。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面笠ナデ。D.角閃石、チャート、白色粒。E.内外一褐色。F.1/4。H.覆土中。
6	皿	A.口縁部径(18.0)。器高3.4。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面笠ナデ。D.角閃石、白色粒。E.内外一褐色。F.1/4。H.覆土中。
7	坏	A.口縁部径(14.0)。器高4.0。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.角閃石、白色粒。E.内外一褐色。F.完形。H.床面直上。
8	坏	A.口縁部径(13.4)。器高4.1。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面笠ナデ。D.角閃石、白色粒。E.外一淡褐色。内一淡褐色。F.1/3。H.覆土中。
9	坏	A.口縁部径12.7。器高4.2。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.角閃石、白色粒。E.内外一褐色。F.完形。H.覆土中。
10	小形直口壺	A.口縁部径(7.4)。器高7.7。B.粘土組織み上げ。C.口縁部外面ハケの後ヨコナデ。内面笠ナデ。体部外面ナデの後下半ケズリ、内面ナデ。D.石英、角閃石、白色粒。E.内外一淡黄褐色。F.4/5。H.覆土中。
11	坏	A.口縁部径6.8。器高4.4。底部径4.7。B.手捏ね。C.体部内外面ナデ。底部外面ナデ。D.石英、チャート、白色粒。E.内外一淡赤褐色。F.2/3。H.覆土中。
12	須 恵 器 甕	B.粘土組織み上げ後叩き。C.口縁部内外面回転ナデの後外面に縞帯波状文を施す。D.白色粒。E.外一灰白色。内一灰色。F.口縁部破片。H.覆土中。
13	須 恵 器	A.口縁部径12.3。器高4.0。底部径5.3。B.ロクロ成形。C.口縁部内外面回転ナデ。底部外面回転系切り。D.角閃石、白色粒。E.内外一灰色。F.完形。口縁部に油煙付着。H.覆土中。
14	灰 輪 陶 器 埴	A.口縁部径15.5。器高4.4。高台部径7.4。B.ロクロ成形。高台部貼り付け。C.体部内外面回転ナデの後施輪。高台部回転ナデ。底部外面回転系切り。D.黒色粒。E.内外一灰色。F.1/2。G.施輪は漬け掛け。H.覆土中。
15	石 鏝	A.長さ2.43。最大幅1.8。厚さ0.58。重さ1.91g。B.両面剝離調整。D.チャート。F.片脚端部欠損。G.凹基無基。H.覆土中。

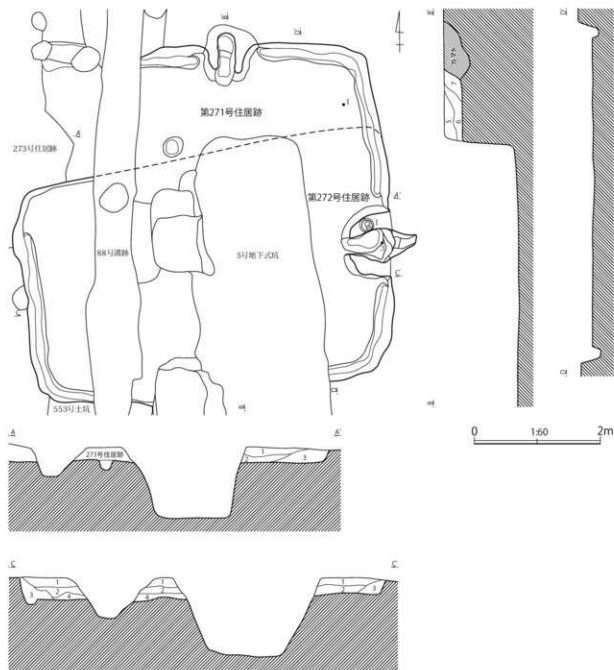
## 第271号住居跡(第42図、写真図版20)

G 2地点調査区中央の南側に位置する。住居跡の大半を重複する第272・273号住居跡、第5号地下式坑、第88号溝跡に切られているため、本住居跡の全容は不明である。

平面形は、残存する部分から推測すると、コーナー部が丸みをもつ隅丸方形か隅丸方形を呈していたと思われる。規模は、東西方向は5.15mまで、南北方向は5.50mまで測れる。住居の主軸方位は、N-3°-Wを向いている。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは30cmある。残存する住居北側と東側壁の壁下には、壁溝が巡っている。床面は、ロームブロックを多量に含む暗黄褐色土を平坦に埋め戻した貼床式である。ピットは、住居跡内から1カ所検出されているが、本住居跡との関係は不明である。

カマドは、住居北側壁の中央やや東寄りの位置に、壁に対してほぼ直角に付設されている。規模は、全長96cm、最大幅70cmを測る。燃焼部は、住居の壁を掘り込んで北側半分は住居外にある。燃焼面は、住居の床面より一段低く、奥壁は緩やかに傾斜して煙道部に向かうようである。袖は、ロームブロック・ローム粒子を含む暗褐色土を、燃焼部奥壁から廻して構築している。袖の内面は、あまり焼けていない。煙道部は、すでに削平されているため不明である。

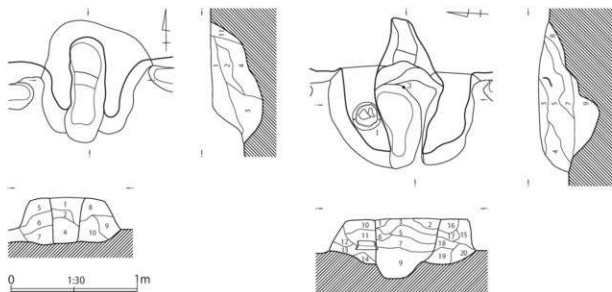
遺物は、住居跡の覆土中から、土器の破片が出土している。土器以外では、覆土中から鉄器の破片が1点出土している。本住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土遺物の様相から、白鳳時代と考えられる。



第42図 第271・272号住居跡

## 第271・272号住居跡土層説明

- 第1層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、径0.5～0.8cmのロームブロックを少量含む。）  
 第2層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ロームブロック・ローム粒子を多量含む。）  
 第3層：暗褐色土層（暗褐色土・ロームの混合土。）  
 第4層：暗褐色土層（暗褐色土・径0.5～6cmのロームブロック・ローム粒子の混合土。）  
 第5層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、ロームブロックを少量、焼土粒子を微量含む。）  
 第6層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、径0.5～2cmのロームブロックを少量、焼土粒子を微量含む。）  
 第7層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、ロームブロック・焼土粒子・黄褐色粘土粒子を少量含む。）



第43図 第271・272号住居跡カマド

## 第271号住居跡カマド土層説明

- 第1層：暗褐色土層（暗褐色土・黒褐色土の混合土。径0.5～1.5cmのロームブロック・径0.5～0.8cmの焼土ブロック・焼土粒子を多量、ローム粒子を微量含む。）
- 第2層：暗褐色土層（ロームブロック・焼土ブロック・焼土粒子を多量、ローム粒子を少量含む。）
- 第3層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子・焼土ブロック・焼土粒子を多量含む。）
- 第4層：暗褐色土層（ロームブロックを多量、焼土ブロック・焼土粒子を少量、ローム粒子を微量含む。）
- 第5層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、焼土ブロック・焼土粒子を微量含む。）
- 第6層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、ロームブロックを少量、焼土ブロック・焼土粒子を微量含む。）
- 第7層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子を少量、焼土ブロックを微量含む。）
- 第8層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、焼土ブロック・焼土粒子を微量含む。）
- 第9層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、焼土ブロック・焼土粒子を微量含む。）
- 第10層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を多量、焼土ブロック・焼土粒子を微量含む。）
- 第11層：暗褐色土層（ローム粒子を含む。）

## 第272号住居跡カマド土層説明

- 第1層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、浅間山系A軽石・ローム粒子・焼土粒子を含む。粘性はなく、しまりを有する。）
- 第2層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ロームブロック・ローム粒子を多量、浅間山系A軽石・焼土粒子を少量含む。粘性はなく、しまりを有する。）
- 第3層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、浅間山系A軽石を少量、焼土粒子を微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）
- 第4層：暗褐色土層（黄褐色粘土・焼土粒子を多量含む。粘性はなく、しまりを有する。）
- 第5層：暗褐色土層（暗褐色土・黄褐色粘土の混合土を主体に、ローム粒子・径0.5～2cmの焼土ブロック・焼土粒子を多量含む。粘性はなく、しまりを有する。）
- 第6層：暗褐色土層（径0.5～1cmの焼土ブロック・焼土粒子を含む。粘性はなく、しまりを有する。）
- 第7層：暗褐色土層（焼土粒子を多量、暗褐色土・灰褐色土・径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。粘性はなく、しまりを有する。）
- 第8層：褐色土層（暗褐色土・径0.5～3cmのロームブロック・ローム粒子の混合土。粘性はなく、しまりを有する。）
- 第9層：褐色土層（褐色土を主体とする。粘性はなく、しまりを有する。）
- 第10層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子・焼土ブロック・焼土粒子を多量含む。）
- 第11層：暗褐色土層（暗褐色土を多量、径0.5～0.8cmのロームブロックを少量含む。）
- 第12層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を多量、焼土ブロック・焼土粒子を少量含む。）
- 第13層：暗褐色土層（暗褐色土を多量、焼土ブロック・焼土粒子を微量含む。）
- 第14層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を少量含む。）
- 第15層：暗褐色土層（ロームを主体とする。）
- 第16層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子・焼土粒子を多量、径0.5～0.8cmの焼土ブロックを微量含む。）

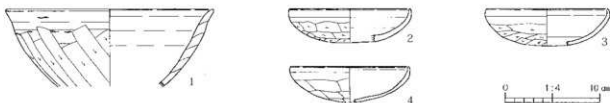


第17層：暗褐色土層（暗褐色土・ロームの混合土。焼土粒子を微量含む。）

第18層：暗褐色土層（ロームを主体に、焼土粒子を少量含む。）

第19層：暗褐色土層（径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を含む。）

第20層：暗褐色土層（暗褐色土・ロームの混合土。）



第44図 第271号住居跡出土遺物

第17表 第271号住居跡出土遺物観察表

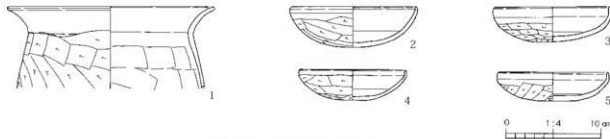
1	鉢	A.口縁部径(22.0)。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一淡茶褐色。F.口縁部1/6。H.覆土中。
2	杯	A.口縁部径(13.0)。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後ミガキ、内面ナデ。D.白色粒。E.内外一淡茶褐色。F.口縁部1/3。H.覆土中。
3	杯	A.口縁部径(13.0)。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後ケズリ、内面ナデ。D.白色粒。E.内外一茶褐色。F.口縁部1/3。H.覆土中。
4	杯	A.口縁部径(12.8)。器高3.8。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後ケズリ、内面ナデ。D.白色粒。E.外一淡褐色、内一暗褐色。F.口縁部1/4。G.器表面は風化により摩滅している。H.覆土中。

第272号住居跡（第42図、写真図版20）

G 2地点調査区中央の南側に位置する。重複する第5号地下式坑と第553号土坑及び第88号溝跡に切られ、第271号住居跡と第273号住居跡を切っている。

平面形は、コーナー部が丸みをもつ隅丸長方形を呈していたと思われる。規模は、東西方向が5.25m、南北方向が3.95mを測る。住居の主軸方位は、N-90°-Eを向いている。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは35cmある。北側壁以外の各壁の壁下には、壁溝が巡っている。床面は、ロームブロックを多量に含む暗黄褐色土を平坦に埋め戻した貼床式である。ピットは、残存する住居跡内からは検出されなかった。

カマドは、住居東側壁のほぼ中央の位置に、壁に対してほぼ直角に付設されている。規模は、全長118cm、最大幅116cmを測る。燃烧部は、住居の壁をあまり掘り込まずに、ほぼ住居内にある。燃烧面は、住居の床面より若干低く、奥壁は緩やかに傾斜して煙道部に向かうようである。袖は、ロームブロック・ローム粒子を含む暗褐色土を、住居の壁に直接貼り付けて構築している。左側袖は、中央部にNo 1の土師器の裏を伏せた状態で埋め込んで芯にしている。袖の内面は、あまり焼けていない。



第45図 第272号住居跡出土遺物

煙道部は、すでに削平されているため不明である。

遺物は、カマド内や住居跡の覆土中から、土器が出土している。本住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土遺物の様相から、白鳳時代と考えられる。

第18表 第272号住居跡出土遺物観察表

1	長 胴 甕	A. 口縁部径22.0。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面瓊ナデ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 内外一淡褐色。F. 上半のみ。G. カマド左側袖の芯に転用。H. カマド左袖内。
2	坏	A. 口縁部径13.6。器高4.3。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後ミガキ、内面ナデ。D. 白色粒。E. 外一茶褐色、内一黒褐色。F. ほぼ完形。G. 内外面に黒色付着物あり。H. 覆土中。
3	坏	A. 口縁部径12.7。器高3.7。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一暗茶褐色。F. ほぼ完形。G. 体部外面に黒斑あり。H. カマド内。
4	坏	A. 口縁部径(11.4)。器高3.3。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一茶褐色。F. 1/3。H. 覆土中。
5	坏	A. 口縁部径11.8。器高3.1。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後ケズリ、内面ナデ。D. 白色粒。E. 内外一茶褐色。F. 3/4。H. 覆土中。

第273号住居跡 (第46図、写真図版22)

G 2 地点調査区西側の南寄りに位置する。重複する第272号住居跡と第551号土坑に切られ、第266号住居跡と第271号住居跡を切っている。

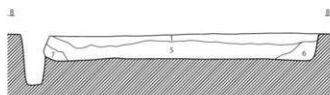
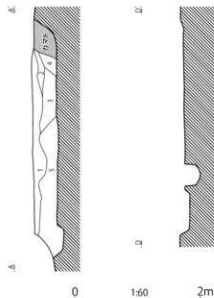
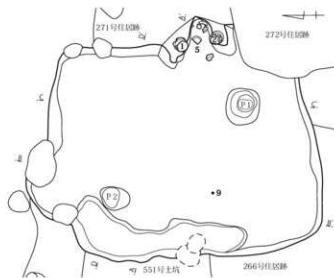
平面形は、コーナー部の丸みが強い隅丸長方形ぎみの形態を呈している。規模は、東西方向が3.89m、南北方向が4.67mを測る。住居の主軸方位は、N-81°-Eを向いている。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは45cmある。残存する各壁の壁下には、壁溝は見られない。床面は、ロームブロックを含む暗黄褐色土を平坦に埋め戻した貼床式である。住居中央部は比較的堅く締まっているが、周辺部はやや軟弱である。ピットは、2カ所検出されている。P 1 と P 2 は、概ね住居の対角線上に位置することから、住居の上屋を支える4本主柱の柱穴の一部の可能性もあるが、明確ではない。床面からの深さは、P 1 が38cm、P 2 が24cmある。

カマドは、住居東側壁の中央やや南側寄りに、壁を掘り込んでほぼ直角に付設されている。規模は、全長72cm、最大幅122cmを測る。燃焼部は住居の壁を掘り込んで作られ、その大半は住居外にある。燃焼面は、住居の床面とほぼ同じ高さで水平をなし、奥壁は緩やかに傾斜して煙道部に向かっている。袖は、黄褐色粘土を盛り上げて構築している。左右の袖の内面には、土師器の甕を伏せて補強している。袖の内面はあまり焼けていない。煙道部は、すでに削平されているため不明である。

遺物は、住居の覆土中やカマド内から土器が出土している。土器以外では、住居西側の壁際から棒状の自然石が6個まとまって出土している。本住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土土器の様相から、白鳳時代と考えられる。

第19表 第273号住居跡出土遺物観察表

1	長 胴 甕	A. 口縁部径23.7。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面瓊ナデ。D. 角閃石、白色粒。E. 外一椀褐色、内一淡椀褐色。F. 上半4/5。G. カマド袖の補強材に転用。H. カマド左袖。
2	長 胴 甕	A. 口縁部径20.9。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面瓊ナデ。D. 角閃石、白色粒。E. 内外一椀褐色。F. 上半4/5。G. カマド袖の補強材に転用。H. カマド右袖。
3	長 胴 甕	A. 底部径(5.0)。B. 粘土組織み上げ。C. 胴部外面ケズリ、内面瓊ナデ。底部外面ケズリ。D. 角閃石、白色粒。E. 外一椀褐色、内一暗椀褐色。F. 底部1/5。H. 覆土中。
4	甕	A. 底部径(5.0)。B. 粘土組織み上げ。C. 胴部外面ケズリ、内面瓊ナデ。底部外面ケズリ。D. 片岩粒、角閃石、白色粒。E. 外一灰褐色、内一淡褐色。F. 底部1/5。H. 覆土中。
5	皿	A. 口縁部径17.8。器高3.5。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ヨコナデ。D. 石英、角閃石、白色粒。E. 外一淡椀褐色、内一淡黄褐色。F. 1/3。G. 内面に黒色付着物あり。H. カマド内。



## 第273号住居跡土層説明

第1層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、浅間山系A軽石・ローム粒子を多量、ロームブロックを少量含む。）

第2層：暗褐色土層（1層に近いが、黄褐色粘土粒子を含む。）

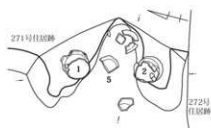
第3層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、粘土粒子を少量、ローム粒子・焼土粒子を微量含む。）

第4層：暗褐色土層（1層に近いが、焼土粒子・粘土粒子を多量含む。）

第5層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、焼土粒子を少量、径0.5～3cmのロームブロックを微量含む。）

第6層：暗褐色土層（1層に近いが、ローム粒子を少量、ロームブロックを微量含む。）

第7層：暗褐色土層（1層に近いが、ロームブロックを微量含む。）



## 第273号住居跡カマド土層説明

第1層：暗褐色土層（暗褐色土・黄褐色粘土の混合土を主体に、ローム粒子を含む。しまりを有する。）

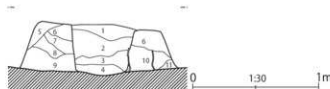
第2層：黄褐色粘土層（暗褐色土・黄褐色粘土の混合土を主体に、焼土粒子を少量含む。しまりを有する。）

第3層：黄褐色粘土層（暗褐色土・黄褐色粘土の混合土を主体に、径0.5～1cmの焼土ブロック・焼土粒子を多量含む。しまりを有する。）

第4層：黄褐色粘土層（暗褐色土・黄褐色粘土の混合土を主体に、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第5層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子・黄褐色粘土粒子を多量、焼土ブロック・炭化物を微量含む。）

第6層：黄褐色粘土層（黄褐色粘土を主体に、ローム粒子を少量、暗褐色土を微量含む。）



第46図 第273号住居跡

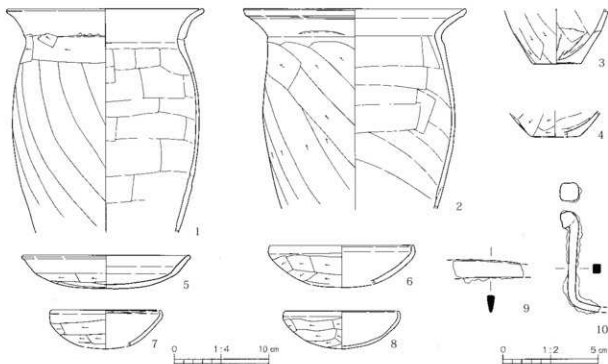
第7層：黄褐色粘土層（黄褐色粘土を主体に、暗褐色土を少量含む。）

第8層：黄褐色粘土層（黄褐色粘土を主体に、ローム粒子を少量含む。）

第9層：黄褐色粘土層（黄褐色粘土を主体に、径0.5～0.8cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子・炭化物を微量含む。）

第10層：黄褐色粘土層（6層に近いが、ロームブロック・炭化物を少量含む。）

第11層：黄褐色粘土層（6層に近いが、ロームブロック・ローム粒子を微量含む。）



第47図 第273号住居跡出土遺物

6	坏	A.口縁部径(15.4)。B.粘土粗積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ヨコナデ。D.角閃石。E.内外一橙褐色。F.1/5。H.覆土中。
7	坏	A.口縁部径(11.6)。B.粘土粗積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ヨコナデ。D.角閃石、白色粒。E.外一淡黄褐色、内一淡黄褐色。F.1/4。G.内面に黒色付着物あり。H.カマド内。
8	坏	A.口縁部径(12.2)。器高4.0。B.粘土粗積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ヨコナデ。D.石英、角閃石、白色粒。E.内外一橙褐色。F.1/5。H.床面直上。
9	刀子	A.残存長3.7、最大幅1.0、最大厚0.4、重さ3.80g。B.鍛造。D.鉄製。F.破片。H.覆土中。
10	鉄釘	A.残存長5.5、最大幅0.6、最大厚0.4、重さ6.17g。B.鍛造。D.鉄製。F.端部欠損。G.断面方形。H.覆土中。

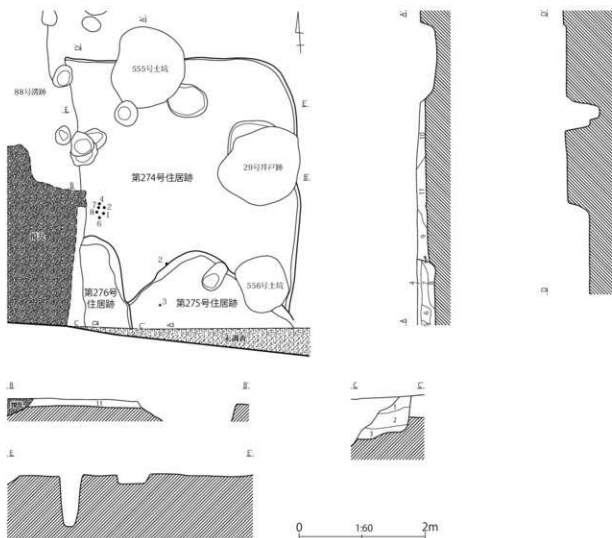
#### 第274号住居跡（第48図、写真図版24）

G 2地点調査区中央の南端に位置する。重複する第275・276号住居跡、第29号井戸跡、第555号土坑、第88号溝跡に切られ、第556号土坑を切っている。住居跡は、床面近くまで削平されており、遺構の遺存状態はあまり良好とは言えない。

平面形は、検出された部分から推測すると、コーナー部の丸みが強い隅丸方形か隅丸長方形を呈していたと思われる。規模は、南北方向は3.90mまで、東西方向は3.50mまで測れる。住居跡の東側壁は、N-10°-Eの方向を向いている。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは16cmある。検出された各壁の壁下には、壁溝は見られない。床面は、ロームブロックを含む暗黄褐色土を平坦に埋め戻した貼床式である。住居中央部は比較的堅く締まっているが、周辺部はやや軟弱

である。ピットは、3カ所検出されているが、本住居跡との関係は不明である。

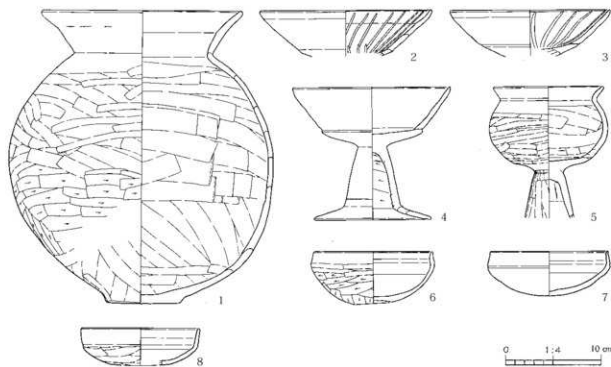
遺物は、住居跡の覆土中から、古墳時代の土器の破片が出土している。本住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土土器の様相から、古墳時代後期初頭頃と考えられる。



第48図 第274・275・276号住居跡

第274・275・276号住居跡土層説明

- 第1層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、径2cmのロームブロックを微量含む。）  
 第2層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、径0.5～0.8cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子を少量、炭化物を微量含む。）  
 第3層：黄褐色土層（暗褐色土・径0.5～4cmのロームブロック・ローム粒子の混泥土。）  
 第4層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、ロームブロック・焼土粒子を少量含む。）  
 第5層：暗褐色土層（4層に近いが、ロームブロックを多量含む。）  
 第6層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、径0.5～4cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。）  
 第7層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、ロームブロック・焼土粒子を少量含む。）  
 第8層：暗褐色土層（7層に近いが、黒みの強い暗褐色土を多量、焼土粒子を微量含む。）  
 第9層：暗褐色土層（7層に近いが、径0.5～0.8cmのロームブロックを多量含む。）  
 第10層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、ロームブロックを少量含む。）  
 第11層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ロームブロック・ローム粒子を少量含む。）



第49図 第274号住居跡出土遺物

第20表 第274号住居跡出土遺物観察表

1	甕	A.口縁部径21.6、器高31.0、底部径7.9。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面麗ナデの後中位ケズリ、内面麗ナデ。D.石英、角閃石、雲母、黒色粒。E.外—淡褐色、内—明赤褐色。F.2/3。H.床面付近
2	高  碗	A.口縁部径18.3。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデの後内面に放射状暗文を施す。D.石英、雲母、黒色粒。E.内外—明赤褐色。F.环部7/8。H.床面付近
3	高  碗	A.口縁部径(17.0)。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデの後内面に放射状暗文を施す。D.石英、角閃石、雲母、白色粒。E.内外—明赤褐色。F.环部1/4。H.覆土中
4	高  碗	A.口縁部径16.8、器高14.0、脚端部径12.4。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。环部内外面ナデ。脚柱部外面ナデ、内面ケズリ。脚端部内外面ヨコナデ。D.石英、雲母、白色粒、黒色粒。E.内外—明赤褐色。F.环部1/8、脚部1/2。H.床面付近
5	脚付 鉢	A.口縁部径(17.6)。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。脚柱部内外面ナデ。D.石英、角閃石、雲母、褐色粒。E.内外—明赤褐色。F.口縁部1/8、脚部1/2。H.覆土中
6	模 倣 碗	A.口縁部径12.7、器高5.6、底部径4.0。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.石英、角閃石、雲母、黒色粒。E.外—褐色、内—明赤褐色。F.7/8。H.床面付近
7	模 倣 碗	A.口縁部径12.5、器高4.7。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。D.石英、角閃石、雲母、白色粒、黒色粒。E.内外—褐色。F.完形。H.床面付近
8	模 倣 碗	A.口縁部径(12.6)。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリの後ナデ、内面ナデ。D.石英、角閃石、雲母、褐色粒。E.内外—淡赤褐色。F.1/4。H.床面付近

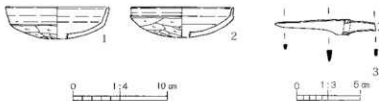
## 第275号住居跡 (第48図、写真図版24)

G 2地点調査区中央の南端に位置する。重複する第276号住居跡に切られ、第274号住居跡と第556号土坑を切っている。住居跡の大半は調査区外にあるため、本住居跡の全容は不明である。

平面形は、検出された部分から推測すると、コーナー部の丸みが強い隅丸方形か隅丸長方形を呈していたと思われる。規模は、北東～南西方向は1.73mまで、北西～南東方向は2.00mまで測れる。住居跡の北西側壁は、N—57°—Eの方向を向いている。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは30cmある。検出された各壁の壁下には、壁溝は見られない。本住居に伴うと考えられるピットは、調査区内で検出された範囲内からは確認されていない。床面は、ロームブロックを含む

暗黄褐色土を平坦に埋め戻した貼床式で、全体的に堅く締まっている。

遺物は、古墳時代後期を主体とする土器の破片が、住居跡の覆土中から少量出土している。土器以外では、覆土中から鉄製の刀子(No 3)の破片が出土している。本住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土土器の様相から、古墳時代後期末頃と考えられる。



第50図 第275号住居跡出土遺物

第21表 第275号住居跡出土遺物観察表

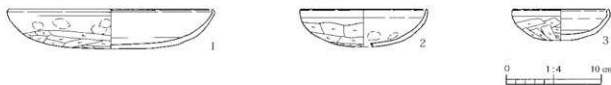
1	模倣 坏	A.口縁部径(11.0)、器高3.4。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一暗茶褐色。F.1/4。G.器形は歪んでいる。H.覆土中。
2	模倣 坏	A.口縁部径(1.0)、器高3.2。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.白色粒。E.内外一淡橙褐色。F.口縁部1/3。H.覆土中。
3	刀 子	A.残存長8.0、最大幅1.2、最大厚0.75、重さ6.1g。B.鍛造。D.鉄製。F.柄端部欠損。G.刃部はかなりすり減っている。刃部と柄部の境に鉄製の鏝。H.覆土中。

第276号住居跡 (第48図、写真図版24)

G2地点調査区中央の南端に位置する。重複する第88号溝跡に切られ、第274号住居跡と第275号住居跡を切っている。住居跡の大半は調査区外にあり、住居跡の西側を後世の掘乱によって切られているため、本住居跡の全容は不明である。

平面形は、検出された部分から推測すると、コーナー部の丸みが強い隅丸方形か隅丸長方形を呈していたと思われる。規模は、北東～南西方向は0.74mまで、北西～南東方向は1.45mまで測れる。住居跡の北東側壁は、N-10°-Wの方向を向いている。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは55cmある。検出された各壁の壁下には、壁溝は見られない。床面は、ロームブロックを含む暗黄褐色土を平坦に埋め戻した貼床式で、全体的に堅く締まっている。

遺物は、白鳳時代を主体とする土器の破片が、住居跡の覆土中から少量出土しただけである。本住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土土器の様相から、白鳳時代と考えられる。



第51図 第276号住居跡出土遺物

第22表 第276号住居跡出土遺物観察表

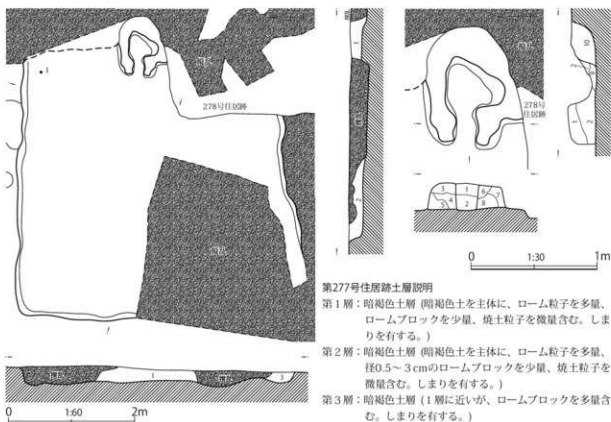
1	皿	A.口縁部径(22.0)、器高4.2。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後下半ケズリ、内面ナデ。D.白色粒。E.内外一明橙褐色。F.1/3。G.体部外面に指頭圧痕を残す。H.覆土中。
2	坏	A.口縁部径(13.6)、器高4.0。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後ケズリ、内面ナデ。D.白色粒。E.内外一暗茶褐色。F.1/3。G.体部内面に指頭圧痕を残す。H.覆土中。
3	坏	A.口縁部径10.2、器高3.3。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後ケズリ、内面ナデ。D.白色粒。E.内外一明橙褐色。F.1/2。H.覆土中。

## 第277号住居跡 (第52図、写真図版24)

G 2地点調査区中央の中央付近に位置し、重複する第278号住居跡に切られている。住居跡の南西側と南東側の一部を後世の攪乱に切られているため、遺構の遺存状態はあまり良好とは言えない。

平面形は、残存する部分から推測すると、コーナー部がやや丸みをもつやや歪んだ隅丸方形を呈している。規模は、東西方向が4.30m程度、南北方向が4.61mを測る。住居の主軸方位は、N-90°-Eを向いている。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは25cmある。残存する各壁の壁下には、壁溝は見られない。床面は、ロームブロックを多量に含む暗黄褐色土を平坦に埋め戻した貼床式である。住居中央部は堅く締まっているが、壁際の周辺部はやや軟弱である。ピットは、住居跡内から検出されていない。

カマドは、住居東側壁の中央付近に、壁に対して直角に付設されていたようである。規模は、全長



## 第277号住居跡土層説明

- 第1層：暗褐色土層 (暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、ロームブロックを少量、焼土粒子を微量含む。しまりを有する。)
- 第2層：暗褐色土層 (暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、径0.5～3cmのロームブロックを少量、焼土粒子を微量含む。しまりを有する。)
- 第3層：暗褐色土層 (1層に近いが、ロームブロックを多量含む。しまりを有する。)

## 第52図 第277号住居跡

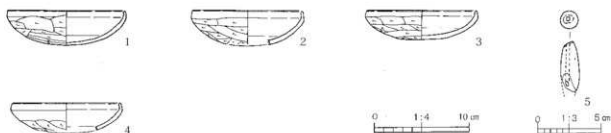
## 第277号住居跡カマド土層説明

- 第1層：暗褐色土層 (暗褐色土を主体に、ローム粒子・焼土ブロック・焼土粒子・黄褐色粘土を少量含む。)
- 第2層：暗褐色土層 (1層に近いが、焼土ブロック・焼土粒子・黄褐色粘土を微量含む。)
- 第3層：暗褐色土層 (暗褐色土・黄褐色粘土の混合土を主体に、焼土ブロック・焼土粒子を多量、ローム粒子を少量含む。)
- 第4層：暗褐色土層 (3層に近いが、焼土ブロック・焼土粒子を少量含む。)
- 第5層：暗褐色土層 (暗褐色土・黄褐色粘土の混合土を主体に、ローム粒子を多量、焼土ブロック・焼土粒子を少量含む。)
- 第6層：暗褐色土層 (暗褐色土・黄褐色粘土の混合土を主体に、径0.5～1cmの焼土ブロック・焼土粒子を多量、ローム粒子を少量含む。)
- 第7層：暗褐色土層 (暗褐色土を主体に、焼土ブロック・焼土粒子を微量含む。)
- 第8層：暗褐色土層 (暗褐色土・黄褐色粘土の混合土を主体に、ローム粒子・焼土粒子を少量含む。)
- 第9層：暗褐色土層 (暗褐色土・ロームの混合土。焼土粒子を少量含む。しまりを有する。)
- 第10層：暗褐色土層 (暗褐色土・ロームの混合土。)



94cm、最大幅78cmを測る。燃焼部は、奥壁側が広く、焚口側が極端に狭くなっており、あまり一般的な形態ではない。燃焼面は、住居の床面とほぼ同じ高さで平坦に作られている。奥壁は、緩やかに傾斜して煙道部に向かっている。袖は、黄褐色粘土を含む暗褐色土を奥壁から廻して構築している。煙道部は、既に削平されているため不明である。

遺物は、住居跡の覆土中から、土器の破片と土錘の破片が出土している。本住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土土器の様相から、白鳳時代と考えられる。



第53図 第277号住居跡出土遺物

第23表 第277号住居跡出土遺物観察表

1	坏	A.口縁部径(12.3)、器高3.7。B.粘土粗積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後ケズリ、内面ナデ。D.白色粒。E.内外一暗茶褐色。F.1/3。H.覆土中。
2	坏	A.口縁部径(11.8)。B.粘土粗積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.白色粒。E.内外一淡茶褐色。F.口縁部1/4。G.体部外面に黒炭あり。H.覆土中。
3	坏	A.口縁部径(11.8)、器高3.1。B.粘土粗積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.白色粒。E.内外一暗褐色。F.1/4。H.覆土中。
4	坏	A.口縁部径(11.6)。B.粘土粗積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後ケズリ、内面ナデ。D.白色粒。E.内外一淡茶褐色。F.口縁部1/3。H.覆土中。
5	土錘	A.残存長4.0、最大幅1.5、重さ7.4g。B.手握ね。C.ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.外一明茶褐色。F.2/3、H.カマド内。

#### 第278号住居跡 (第54図、写真版25・26)

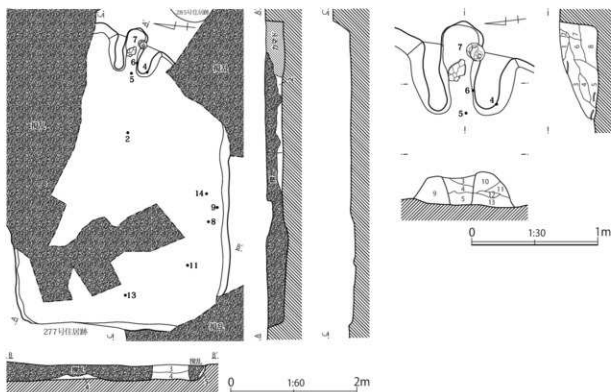
G 2地点調査区中央の中央付近に位置し、重複する第277号住居跡を切っている。住居跡の大半を後世の攪乱に切られているため、遺構の遺存状態はあまり良好とは言えない。

平面形は、残存する部分から推測すると、コーナー部が丸みをもつ隅丸長方形を呈している。規模は、東西方向が4.73m、南北方向が3.35mを測る。住居の主軸方位は、 $N-85^{\circ}-E$ を向いている。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは24cmある。残存する各壁の壁下には、壁溝は見られない。住居東側壁は、カマドの左右で壁の位置が異なっており、段違い壁の可能性が高い。床面は、ロームブロックを多量に含む暗黄褐色土を平坦に埋め戻した貼床式である。住居中央部は強く締まっているが、壁際の周辺部はやや軟弱である。ピットは、住居跡内から検出されていない。

カマドは、住居東側壁の中央付近に、壁を掘り込んで付設されている。規模は、全長72cm、最大幅84cmを測る。燃焼部は、奥壁側のほぼ半分が住居外にある。燃焼面は、住居の床面とほぼ同じ高さで平坦に作られている。奥壁は、直線的に傾斜して煙道部に向かっている。袖は、黄褐色粘土を住居の壁に直接貼り付けて構築している。煙道部は、既に削平されているため不明である。

遺物は、住居跡周辺部の覆土中やカマド内から、土器が比較的多く出土している。土器以外では、

覆土中から土鍾の破片や鉄釘の破片が出土している。本住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土土器の様相から、平安時代前期と考えられる。



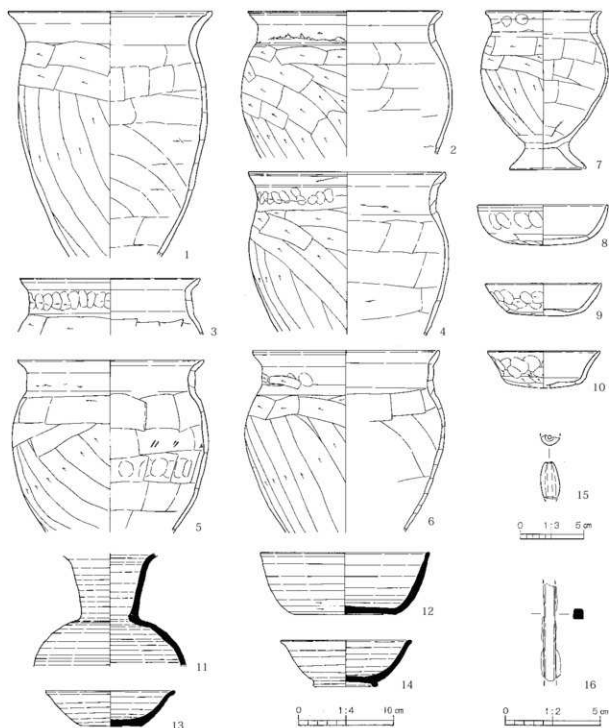
第54図 第278号住居跡

#### 第278号住居跡土層説明

- 第1層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、ロームブロックを少量、焼土粒子を微量含む。しまりを有する。）  
 第2層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、ロームブロックを少量、焼土粒子・黄褐色粘土ブロック・黄褐色粘土粒子を微量含む。しまりを有する。）  
 第3層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、径0.5～3cmのロームブロック・焼土粒子を微量含む。）  
 第4層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、ロームブロック・焼土粒子を微量含む。）  
 第5層：黄褐色土層（暗褐色土・ロームの混合土。）

#### 第278号住居跡カマド土層説明

- 第1層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子・焼土粒子少量、径3cmの焼土ブロック・粘土粒子を微量含む。）  
 第2層：明褐色粘土層（明褐色粘土を主体に、焼土粒子・暗褐色土を少量、炭化物を微量含む。）  
 第3層：暗褐色土層（暗褐色土・明褐色粘土粒子の混合土。焼土ブロック・焼土粒子を微量含む。）  
 第4層：明褐色粘土層（暗褐色土・明褐色粘土ブロックを微量含む。）  
 第5層：赤褐色焼土層（焼土ブロック・焼土粒子を主体に、暗褐色土を少量含む。）  
 第6層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、径0.5～1cmの焼土ブロック・焼土粒子・粘土粒子を多量含む。）  
 第7層：赤褐色焼土層（暗褐色土・径0.5～1.5cmの焼土ブロックの混合土。）  
 第8層：暗褐色土層（7層に近いが、暗褐色土を多量、ローム粒子・炭化物を少量含む。）  
 第9層：黄褐色粘土層（ローム粒子・焼土粒子を少量、黄褐色粘土を微量含む。しまりを有する。）  
 第10層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子・焼土粒子を多量、径0.5～1cmの焼土ブロックを少量含む。しまりを有する。）  
 第11層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子・焼土ブロック・焼土粒子を微量含む。）  
 第12層：黄褐色粘土層  
 第13層：赤褐色焼土層（暗褐色土・径0.5～3cmの焼土ブロック・焼土粒子の混合土。）



第55図 第278号住居跡出土遺物

第24表 第278号住居跡出土遺物観察表

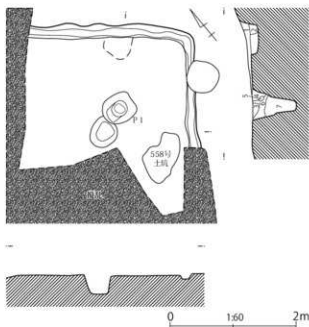
1	長胴甕	A.口縁部径(21.4)。B.粘土粗積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篋ナデ。D.片岩粒、角閃石、白色粒。E.内外一明赤褐色。F.1/2。H.覆土中。
2	甕	A.口縁部径(20.7)。B.粘土粗積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篋ナデ。D.角閃石、白色粒。E.内外一暗褐色。F.上半1/3。H.カマド内。
3	甕	A.口縁部径(18.9)。B.粘土粗積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篋ナデ。D.角閃石、白色粒。E.内外一淡赤褐色。F.上半4/5。G.口縁部外面に指頭圧痕を残す。H.覆土中。
4	甕	A.口縁部径20.9。B.粘土粗積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篋ナデ。D.角閃石、白色粒。E.内外一暗褐色。F.上半1/3。G.口縁部外面に指頭圧痕を残す。H.カマド右側軸。

5	糞	A.口縁部径19.6。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面笠ナデ。D.角閃石、白色粒。E.外一淡橙褐色、内一明褐色。F.上半4/5。G.胴部内面に指頭圧痕を残す。H.カマド内。
6	糞	A.口縁部径19.8。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面笠ナデ。D.片岩粒、角閃石、白色粒。E.内外一明赤褐色。F.上半1/4。G.口縁部外面に指頭圧痕を残す。H.カマド内。
7	小形台付糞	A.口縁部径12.3。器高16.9。台端部径(8.0)。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面笠ナデ。台部内外面ヨコナデ。D.角閃石、長石、白色粒。E.外一淡橙褐色、内一明赤褐色。F.上半4/5。G.口縁部外面に指頭圧痕を残す。H.カマド内。
8	坏	A.口縁部径(11.9)。器高4.3。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後下半ケズリ、内面ナデ。D.角閃石、白色粒。E.内外一橙褐色。F.1/5。G.体部外面に指頭圧痕を残す。H.覆土中。
9	坏	A.口縁部径12.3。器高3.3。底部径8.0。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。底部外面ケズリ。D.角閃石、チャート。E.内外一橙褐色。F.1/2。G.体部外面に指頭圧痕を残す。H.覆土中。
10	坏	A.口縁部径(11.9)。器高3.9。底部径7.7。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデ、内面ヨコナデ。底部外面ケズリ。D.角閃石、白色粒。E.内外一淡橙褐色。F.1/4。G.体部外面に指頭圧痕を残す。H.覆土中。
11	須恵器 長頸壺	B.ロクロ成形。C.内外面回転ナデ。D.石英、片岩粒、角閃石、白色粒。E.内外一淡黄褐色。F.破片。G.還元不良。H.床面付近。
12	須恵器 埴	A.口縁部径(18.0)。器高11.5。底部径10.8。B.ロクロ成形。C.口縁部内外面回転ナデ。体部外面下端回転ケズリ。底部外面回転ケズリ。D.白色針状、石英。E.内外一灰色。F.1/4。H.床面付近。
13	須恵器 坏	A.口縁部径13.7。器高3.8。底部径6.5。B.ロクロ成形。C.口縁部内外面回転ナデ。底部外面回転系切り。D.石英、角閃石。E.内外一灰白色。F.3/4。H.覆土中。
14	須恵器 高台付坏	A.口縁部径14.0。器高4.9。底部径6.8。B.ロクロ成形。高台部貼り付け。C.口縁部内外面回転ナデ。底部外面回転系切り。D.片岩粒、角閃石。E.内外一灰色。F.4/5。H.床面付近。
15	土 罫	A.残存長2.9。最大幅1.5。重さ3.74g。B.手捏ね。C.ナデ。D.白色粒。E.外一橙褐色。F.端部欠損。H.覆土中。
16	棒状鉄製品	A.残存長5.2。最大幅0.5。厚さ0.5。重さ6.50g。B.鍛造。D.鉄製。F.両端部欠損。G.断面方形。H.覆土中。

## 第279号住居跡 (第56図、写真図版27)

G 2地点調査区中央のやや南側寄りに位置する。重複する第558号土坑に切られている。住居跡の大半を後世の掘乱によって切られているため、本住居跡の全容は不明である。

平面形は、残存する部分から推測すると、コーナー部が丸みをもつ隅丸方形か隅丸長方形を呈していたものと思われる。規模は、北東～南西方向は3.00mまで、北西～南東方向は2.85mまで測れる。



第56図 第279号住居跡

壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは10cmある。残存する住居北東側壁と南東側壁の壁下には、幅12cm～25cm、床面からの深さが25cmの壁溝が巡っている。床面は、ロームブロックを多量に含む暗黄褐色土を

## 第279号住居跡土層説明

第1層：暗褐色土層 (暗褐色土を主体に、ローム小ブロック・ローム粒子を少量、径4～5cmのロームブロックを微量含む。)

第2層：暗褐色土層 (1層に近いが、黒みが強い、径5cmのロームブロックを微量含む。)

第3層：暗褐色土層 (暗褐色土を主体に、ロームブロック・ローム粒子を多量含む。)

第4層：暗褐色土層 (暗褐色土を主体に、ローム粒子を含む。)

第5層：黄褐色土層 (暗褐色土・ロームの混合土。)

第6層：暗褐色土層 (暗褐色土を主体に、ロームブロック・ローム粒子を少量含む。)

第7層：暗褐色土層 (暗褐色土を主体に、ロームブロック・ローム粒子を多量含む。)

平坦に埋め戻した貼床式で、全体的に硬く締まっている。ピットは、1カ所検出されている。P1は、おそらく住居の対角線上に配置される4本主柱の柱穴の一部と推測される。55cm×53cmの楕円形ぎみの形態で、床面からの深さは71cmある。

遺物は、住居跡の覆土中から、古代の土器片が少量出土しただけである。本住居跡の時期は、不明である。

#### 第280号住居跡（第57図、写真図版27）

G2地点調査区中央の南端に位置し、重複する第282・284号住居跡や第559号土坑に切られている。住居跡は床面下まで削平されており、住居跡の東側と南側は後世の攪乱によって切られているため、遺構の遺存状態は劣悪である。

平面形は、不明である。規模は、北西～南東方向は2.95mまで、北東～南西方向は3.80mまで測れる。住居跡の北西壁は、N-56°-Eの方向を向いていたようである。住居跡の掘り方は、住居床面下のほぼ全面に及ぶ形態で、ロームブロックやローム粒子を含む暗褐色土で埋められている。

遺物は、住居跡の掘り方埋土から土器の破片が少量出土しただけである。本住居跡の時期は明確ではないが、遺構の重複関係からすると、奈良時代以前と考えられる。

#### 第281号住居跡（第57図、写真図版28）

G2地点調査区中央の南端に位置する。第282号住居跡と重複しているが、相互の新旧関係は不明である。住居跡で明確なのはカマドだけであるため、本住居跡の全容は不明である。

カマドは、住居の南東側壁に付設されていたようである。規模は、全長82cm、幅は86cmまで測れる。燃焼部は、住居内に位置する。燃焼面は、住居の床面とほぼ同じ高さで水平に作られ、ブロック状に焼けて赤色化している。袖は、右側のみ残存している。灰白色粘土ブロックを含む灰褐色土を、住居の壁に直接貼り付けて構築している。袖内面は、あまり焼けていない。煙道部は、燃焼部から水平に住居外に40cmほど延びて立ち上がっている。

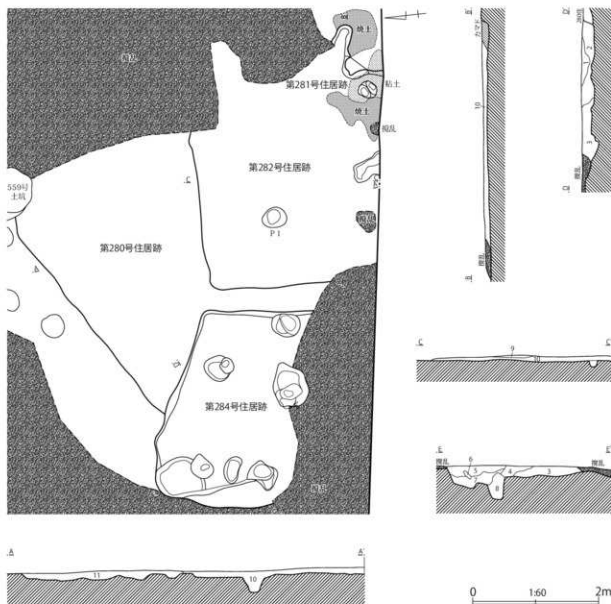
遺物は、カマドの覆土中に混入して古墳時代前期の土器片が出土しただけである。本住居跡の時期は、遺構の重複関係が明らかではなく、本住居跡に伴う遺物もないため不明である。

#### 第282号住居跡（第57図、写真図版28）

G2地点調査区中央の南端に位置する。重複する第280号住居跡を切っているようである。第281号住居跡とも重複しているが、相互の新旧関係は不明である。住居跡の南側は調査区外に位置しているため、本住居跡の全容は不明である。本住居跡の上面は、床面まで削平されており、遺構の遺存状態は劣悪である。

平面形は、検出された部分から推測すると、コーナー部が丸みをもつ隅丸方形か隅丸長方形を呈していたと思われる。規模は、南北方向は2.95mまで、東西方向は3.90mまで測れる。住居の壁は、残存していない。床面は、ロームブロックを多量に含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式のものである。ピットは、1カ所検出されている。P1は、直径40cmの円形を呈し、深さは47cmある。住居の対角線上に位置する可能性もあり、住居の上屋を支える4本主柱の柱穴の一部の可能性もある。

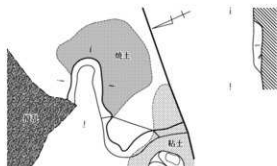
遺物は、古代の土器の破片が少量出土しただけである。本住居跡の時期は、出土遺物の様相から、奈良時代中頃と考えられる。



第57図 第280・281・282・284号住居跡

第280・281・282・284号住居跡土層説明

- 第1層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子・炭化物を微量含む。）  
 第2層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、径0.5～4cmのロームブロックを少量、焼土粒子を微量含む。）  
 第3層：暗褐色土層（2層に近いが、径1～4cmのロームブロックを多量含む。）  
 第4層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ロームブロック・ローム粒子を多量含む。）  
 第5層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。）  
 第6層：暗褐色土層（暗褐色土・ロームの混合土。）  
 第7層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、径0.5～5cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。）  
 第8層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、径0.5～4cmのロームブロック・ローム粒子を含む。）  
 第9層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、ロームブロック・焼土粒子を少量含む。）  
 第10層：暗褐色土層（暗褐色土とロームの互層。）  
 第11層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、ロームブロックを少量含む。）



第58図 第281号住居跡カマド

## 第281号住居跡カマド土層説明

第1層：暗褐色土層（暗褐色土・焼土ブロック・焼土粒子・黄褐色粘土の混合土。）



第59図 第282号住居跡出土遺物

第25表 第282号住居跡出土遺物観察表

1	小形台付甕	A. 台端部径(10.0)。B. 粘土組織み上げ。 C. 台部内外面ヨコナデ。D. 赤色粒、白色粒。 E. 内外一暗褐色。F. 台部1/2弱。H. 覆土中。
2	坏	A. 台端部径(10.0)。B. 粘土組織み上げ。 C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの 後下ケズリ、内面ヨコナデ。D. 赤色粒、 白色粒。E. 内外一淡茶褐色。F. 1/2。G. 体 部内面に指頭圧痕を残す。H. 覆土中。

## 第283号住居跡（第10図、写真図版29）

G 2地点調査区中央部の東側寄りに位置する。重複する第228・229・290号住居跡や第560・561・562号土坑に切られている。住居跡の東西両側を後世の掘削に切られているため、本住居跡の全容は不明である。

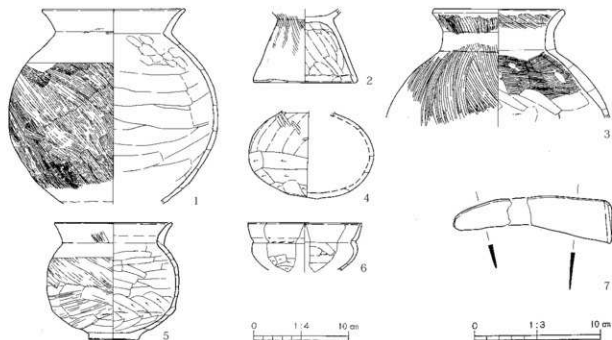
平面形は、不明である。規模は、南北方向は3.15mまで、東西方向は4.50mまで測れる。床面は、ロームブロックを含む暗褐色土を平坦に埋め戻した貼床式で、全体的に堅く締まっている。ピットは、住居跡内から1カ所検出されているが、本住居跡との関係は不明である。

灰は、住居の中央付近に位置する。床面が55cm×20cmの不整の楕円形状に焼けているだけの地床灰である。付帯施設は見られなかった。

遺物は、住居跡の北側の覆土中から、古墳時代前期を主体とする土器の破片が多く出土している。この中のNo 4の中形直口壺は、胴部が扁平化した古墳時代中期後半から後期初頭頃と考えられるもので、本住居に伴うものではない。土器以外では、覆土中からNo 7の鉄鏝が1点出土しているが、曲刃鏝のようであり、本住居に直接伴うものではないであろう。本住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土土器の様相から、古墳時代前期と考えられる。

第26表 第283号住居跡出土遺物観察表

1	甕	A. 口縁部径(15.1)。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ハケ、内面笠ナデ。D. 角閃石、白色粒。E. 内外一淡赤褐色。F. 上半1/5。G. 胴部内面に指頭圧痕を残す。H. 覆土中。
2	S字状口縁台付甕	A. 台端部径11.1。B. 粘土組織み上げ。C. 台部外面ナデの後部分的にハケ、内面指ナデ。D. 角閃石。E. 内外一淡黄褐色。F. 台部4/5。G. 底部内面及び台部内面上端に砂付着。H. 覆土中。
3	甕	A. 口縁部径(14.0)。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデの後ミガキ。胴部外面ハケの後ミガキ、内面ハケの後笠ナデ。D. 石英、長石、チャート。E. 内外一褐色。F. 上半1/4。G. 胴部内面に指頭圧痕を残す。H. 覆土中。
4	中形直口壺	A. 底部径3.2。B. 粘土組織み上げ。C. 胴部外面笠ナデの後下ケズリ、内面ナデ。底部外面ケズリ。D. 角閃石、チャート。E. 内外一淡赤褐色。F. 胴部4/5。H. 覆土中。
5	小形甕	A. 口縁部径(12.4)。器高12.4。底部径5.1。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部外面ハケの後ヨコナデ、内面ヨコナデ。胴部外面笠ナデ、内面笠ナデ。底部外面ナデ。D. 角閃石、チャート、白色粒。E. 外一淡赤褐色、内一明赤褐色。F. 1/4。H. 覆土中。
6	小形鉢	A. 口縁部径(12.0)。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデの後下ケズリ、内面笠ナデ。D. 石英、角閃石、白色粒。E. 外一褐色、内一褐色。F. 破片。H. 覆土中。
7	鉄鏝	A. 長さ(12.5)、最大幅3.7、厚さ0.3、重さ36.08g。B. 鍛造。D. 鉄製。F. 4/5。H. 覆土中。



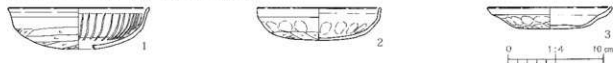
第60図 第283号住居跡出土遺物

## 第284号住居跡 (第57図、写真図版30)

G 2地点調査区中央の南端に位置し、重複する第280号住居跡を切っている。住居跡の西側から南側にかけて後世の攪乱によって切られているため、本住居跡の全容は不明である。本住居跡は、床面下まで削平されており、遺構の遺存状態は劣悪である。

平面形は、残存する部分から推測すると、コーナー部がやや丸みをもつ歪んだ隅丸方形か隅丸長方形を呈していたと思われる。規模は、南北方向は2.30mまで、東西方向は3.05mまで測れる。床面は残存していないが、ロームブロックを含む暗褐色土を埋め戻した貼床式のようなようである。ピットは、住居跡内から複数検出されているが、本住居跡との関係は不明である。

遺物は、住居跡の掘り方埋土中から、奈良時代を主体とする土器の破片が少量出土しただけである。No 3の坏は、平安時代のもので、混入品である。本住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土土器の様相から、奈良時代後半頃と考えられる。



第61図 第284号住居跡出土遺物

第27表 第284号住居跡出土遺物観察表

1	暗文坏	A.口縁部径(15.0)、器高4.4。B.粘土粗積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後下半ケズリ。内面ナデの後放射状暗文を施す。D.赤色粒、白色粒。E.内外一明茶褐色。F.1/3。H.覆土中。
2	坏	A.口縁部径13.2、器高3.5。B.粘土粗積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後下半ケズリ。内面ナデ。D.白色粒。E.内外一淡茶褐色。F.1/2。G.体部内外面に指頭圧痕を残す。H.覆土中。
3	坏	A.口縁部径(13.2)、器高2.3。B.粘土粗積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後下半ケズリ。内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一淡茶褐色。F.1/4。G.体部外面に指頭圧痕を残す。混入品。H.覆土中。

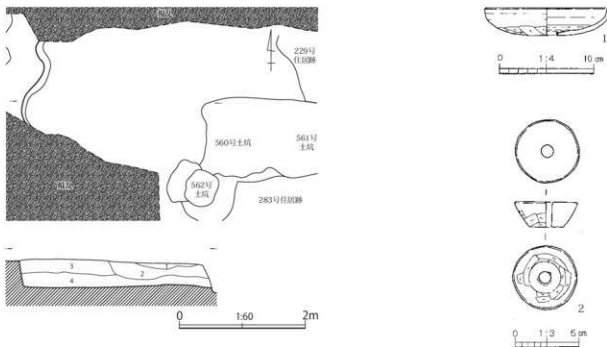


## 第285号住居跡（第62図、写真図版30）

G 2 地点調査区中央の東寄りに位置する。重複する第229号住居跡と第560・561・562号土坑に切られている。住居跡の北側および南西側の大半を後世の攪乱によって切られているため、本住居跡の全容は不明である。

平面形は、不明である。規模は、南北方向は2.40mまで、東西方向は4.45mまで測れる。壁は、住居西側壁しか残存していない。西側壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは45cmある。壁下には、壁溝は見られない。床面は、ロームブロックを多量に含む暗黄褐色土を平坦に埋め戻した貼床式である。

遺物は、住居廃絶後に覆土中に投棄された状態で、土器の破片がまとまって出土している。土器以外では、覆土中からNo2の土製紡錘車が1点出土している。本住居跡の時期は、出土遺物の様相から奈良時代後半頃と考えられる。



第62図 第285号住居跡及び出土遺物

## 第285号住居跡土層説明

第1層：暗褐色土層（ロームを主体とする。しまりを有する。）

第2層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子を少量、小礫を微量含む。）

第3層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、ロームブロック・焼土粒子を少量含む。）

第4層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、径0.5～3cmのロームブロックを少量含む。）

## 第28表 第285号住居跡出土遺物観察表

1	杯	A.口縁部径(13.2)、器高2.9。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後下半ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一淡茶褐色。F.口縁部1/3。H.覆土中。
2	土製紡錘車	A.上面径5.0、下面径2.6、高さ2.0、重さ47.9g。B.手捏ね。C.上下面ナデ。側面ナデの後下半ケズリ。D.白色粒。E.外一暗茶褐色。F.完形。H.覆土中。

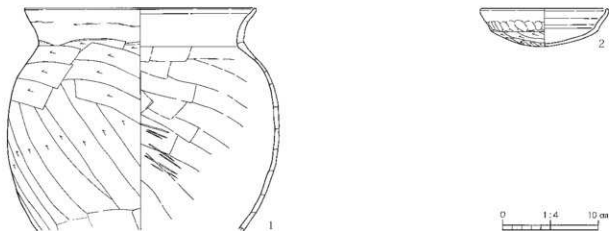
## 第286号住居跡（第11図、写真図版31）

G 2 地点調査区東側の北端に位置する。重複する第229号住居跡に切られ、第227・283号住居跡を切っている。住居跡の西側は、後世の攪乱によって切られているため、本住居跡の全容は不明である。

平面形は、残存する部分から推測すると、コーナー部が丸みをもつ隅丸方形か隅丸長方形を呈していたと思われる。規模は、南西～北東方向は2.80mまで、北東～南西方向は1.25mまで測れる。住居の主軸方位は、N-155°-Eを向いている。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは21cmある。住居の北東側壁と南東側壁の壁下には、壁溝が巡っている。床面は、ロームブロックを多量に含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式である。住居中央部は強く締まっているが、周辺部はやや軟弱である。

カマドは、住居南東側壁に、住居の壁を掘り込んで直角に付設されている。規模は、全長112cm、最大幅92cmを測る。燃烧部は、その大半が住居外にある。燃烧面は、住居の床面よりも一段低く平坦に作られている。奥壁は、直線的に傾斜している。袖は、灰褐色粘土をカマド奥壁付近から廻して構築している。煙道部は、燃烧部から水平に48cmほど延びて立ち上がっており、その先端から裏の上半が出土している。本来は、煙道部の開口部付近に設置されていたものであろうが、煙道部の陥没に伴って下方に落ち込んだのではないかとと思われる。

遺物は、住居跡の覆土中から、土器の破片が多く出土している。本住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土土器の様相から、奈良時代頃と考えられる。



第63図 第286号住居跡出土遺物

第29表 第286号住居跡出土遺物観察表

1	甕	A.口縁部径24.4。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篋ナデ。D.角四石、棕色粒、白色粒。E.内外一赤棕色。F.1/4。H.カマド煙道部。
2	杯	A.口縁部径(13.5)、器高4.0。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.角四石、白色粒。E.内外一橙褐色。F.1/3。G.口縁部外面に指頭圧痕を残す。H.カマド内。

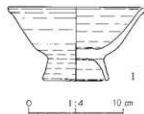
## 第287号住居跡（第65図、写真図版32）

G 2 地点調査区東側の南寄りに位置する。住居跡の大半を後世の攪乱に切られ、カマドの痕跡しか残存していないため、遺構の遺存状態は劣悪である。

カマドは、住居の南東側壁に付設されていたようである。残存する部分では、全長102cm、最大幅

90cmを測る。燃焼部は、住居の壁を掘り込んで、その大半が住居外にある。燃焼面は、住居の床面よりも一段低く平坦に作られていたようであり、奥壁は直線的に傾斜して煙道部に向かっている。袖は、灰褐色粘土を燃焼部奥壁から廻して構築しているようである。袖の内面は、あまり焼けていない。

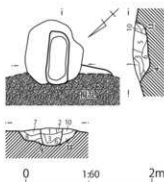
遺物は、カマド内から土器の破片が少量出土しただけである。本住居跡の時期は、出土土器の様相から平安時代中期と考えられる。



第64図 第287号住居跡  
出土遺物

第30表 第287号住居跡出土遺物観察表

1	高台付焼	A.口縁部径(14.6)、器高7.8、高台部径(7.0)。B.ロクロ成形。高台部貼り付け。C.体部及び高台部内外面回転ナズ。D.白釉色。E.内外-灰茶褐色。F.1/4。G.還元不良。H.カマド内。
---	------	--



第65図 第287号住居跡カマド

#### 第287号住居跡カマド土層説明

- 第1層：暗褐色土層（暗褐色土・灰白色粘土の混合土。ロームブロック・焼土粒子を含む。粘性に富み、しまりを有する。）  
 第2層：灰白色粘土層（暗褐色土・灰白色粘土の混合土。焼土粒子を少量含む。）  
 第3層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、灰白色粘土を均一に含む。ロームブロック・ローム粒子・径0.5～0.8cmの焼土ブロック・焼土粒子を含む。粘性に富み、しまりを有する。）  
 第4層：暗褐色土層（2層に近いが、径0.8cmのロームブロック・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）  
 第5層：暗褐色土層（暗褐色土・灰白色粘土の混合土を主体に、ローム粒子・径0.5～2cmの焼土ブロック・焼土粒子を多量含む。粘性に富み、しまりを有する。）  
 第6層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、灰白色粘土を均一に含む。径0.5～2cmのロームブロック・径0.5～0.8cmの焼土ブロック・焼土粒子を含む。粘性に富み、しまりを有する。）

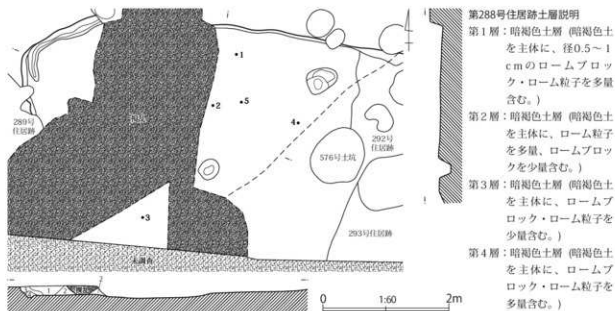
- 第7層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、灰褐色粘土を均一に含む。ロームブロック・ローム粒子・焼土粒子を少量含む。粘性に富み、しまりを有する。）  
 第8層：暗褐色土層（7層に近いが、径0.5～0.8cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。粘性に富み、しまりを有する。）  
 第9層：暗褐色土層（7層に近いが、径1cmのロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）  
 第10層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、灰褐色粘土を均一に含む。ロームブロック・ローム粒子を少量含む。粘性に富み、しまりを有する。）  
 第11層：黄褐色土層（径0.5～6cmのロームブロック・ローム粒子を主体に、暗褐色土を含む。粘性に富み、しまりを有する。）

#### 第288号住居跡（第66図、写真図版33）

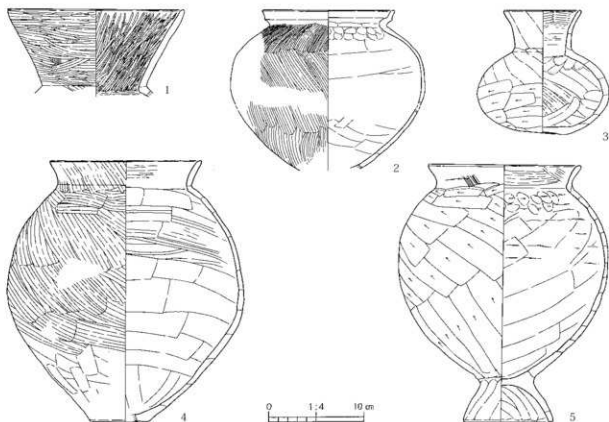
G 2 地点調査区東側の南端に位置する。重複する第289・292号住居跡に切られている。住居跡の中央部を後世の攪乱に切れ、住居跡の南側は調査区外にあるため、本住居跡の全容は不明である。

平面形は、検出された部分から推測すると、コーナー部が丸みをもち、北側壁が弓状に張る隅丸方形か隅丸長方形を呈していたと思われる。規模は、東西方向は7.09mまで、南北方向は4.85mまで測れる。住居の北側壁は、N-98°-Eの方向を向いている。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは20cmある。住居の北西側コーナー部付近の壁下には、壁溝が巡っている。床面は、ロームブロックを多量に含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式である。住居中央部は堅く締まっているが、周辺部はやや軟弱である。ピットは2カ所検出されているが、本住居跡との関係は不明である。

遺物は、住居跡の覆土中から、古墳時代前期を主体とする土器の破片が多く出土している。この中のNo 3の直口壺は、古墳時代後期前葉頃のもので、本住居には伴わないと考えられる。本住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土土器の様相から、古墳時代前期と考えられる。



第66図 第288号住居跡



第67図 第288号住居跡出土遺物

第31表 第288号住居跡出土遺物観察表

1	大形直口壺	A.口縁部径18.6。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ハケの後ミガキ。D.角閃石、チャート、白色粘。E.内外一橙褐色。F.口縁部のみ。H.覆土中。
2	S字状口縁台付甕	A.口縁部径(14.0)。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ハケ、内面髹ナデ。D.石英、角閃石、白色粒。E.外一褐色、内一淡黄褐色。F.上半1/4、下半1/2。G.内面に指頭圧痕を残す。胴部上半と下半は接合しない。器形は図上復元。H.床面付近。

3	中形直口甕	A.口縁部径8.1、器高13.2、底部径5.1。B.粘土粗積み上げ。C.口縁部外面篋ナデ、内面ハケの後ヨコナデ、胴部外面篋ナデの後下半ケズリ、内面指ナデ、底部外面ケズリ。D.石英、チャート、長石、白色粒。E.外一暗褐色、内一淡黄褐色。F.4/5。H.床面付近。
4	平底甕	A.口縁部径16.0、器高27.6、底部径(6.3)。B.粘土粗積み上げ。C.口縁部内外面ハケの後ヨコナデ、胴部外面ハケの後下半篋ナデ、内面篋ナデ。D.片岩粒、角閃石、チャート、長石。E.外一淡黄褐色、内一淡褐色。F.4/5。H.床面付近。
5	台付甕	A.口縁部径(16.1)、器高27.3、台端部径9.5。B.粘土粗積み上げ。C.口縁部内外面ハケの後ヨコナデ、胴部外面ケズリ、内面篋ナデ。台部内外面篋ナデ。D.片岩粒、石英。E.内外一淡褐色。F.2/3。H.床面付近。

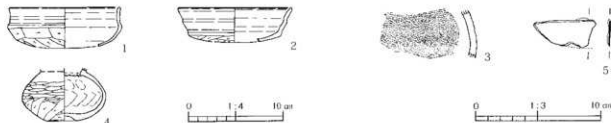
### 第289号住居跡 (第69図、写真図版34)

G 2 地点調査区中央の南端に位置する。重複する第290号住居跡に切られている。住居跡の西側と東側を後世の掘乱によって切られているため、本住居跡の全容は不明である。

平面形は、検出された部分から推測すると、方形か長方形を呈していたものと思われる。規模は、北東～南西方向が4.66m、北西～南東方向は3.20mまで測れる。住居の主軸方位は、N-50°-Eを向いている。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは20cmある。検出された各壁の壁下には、壁溝は見られない。床面は、ロームブロックを多量に含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式である。住居中央部は堅く締まっているが、周辺部はやや軟弱である。ピットは、住居跡内からは検出されていない。

カマドは、住居北東側壁に位置し、壁を若干掘り込んでやや斜めに付設されている。規模は、長さ67cm、最大幅102cmを測る。燃焼部は、大半が住居内にある。燃焼面は、住居の床面とほぼ同じ高さで水平に作られている。奥壁は、緩やかに傾斜して煙道部に向かっている。袖は、ロームブロックを含む暗褐色土を、住居の壁に直接貼り付けて構築している。袖の内面は、あまり焼けていない。煙道部は、既に削平されているため不明である。

遺物は、住居跡の覆土中から、古墳時代後期を主体とする土器の破片が多く出土している。土器以外では、覆土中から鉄器の破片が1点出土している。また、カマド左側の床面付近から、棒状の自然石が8個まとまって出土している。この住居内の集石は、いわゆる編物石と呼ばれるものと類似するが、カマドの傍からまとまって出土した例は、当地域ではほとんど見られない。本住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土土器の様相から、古墳時代後期後葉頃と考えられる。

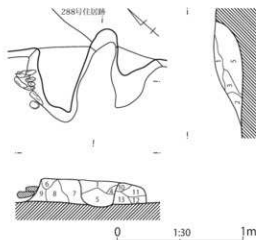
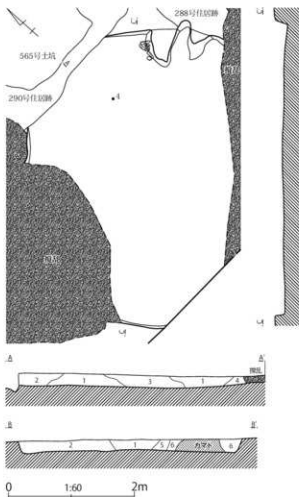


第68図 第289号住居跡出土遺物

第32表 第289号住居跡出土遺物観察表

1	模倣環	A.口縁部径(11.8)。B.粘土粗積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後ケズリ。D.白色粒。E.内外一明茶褐色。F.1/2弱。G.体部外面に黒炭あり。H.覆土中。
2	有段口縁環	A.口縁部径(12.2)。B.粘土粗積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一淡褐色。F.口縁部1/4。H.覆土中。
3	甕	B.粘土粗積み上げ。C.胴部外面右回りの彫描波文(8本筋)帯を上から下に施文後、施文部外ミガキ、内面ミガキ。D.赤色粒、白色粒。E.外一暗褐色、内一淡茶褐色。F.胴部破片。G.弥生後期式。H.覆土中。

4	小形直口壺	A. 底部径3.0, B. 粘土組織み上げ, C. 口縁部内外面ナデ, 胴部外面上半ナデの後ミガキ, 下平ケズリ, 内面荒ナデ, 底部外面ナデ, D. 赤色粒, 白色粒, E. 外一茶褐色, 内一灰茶褐色, F. 胴部のみ, H. 覆土中。
5	刀子	A. 残存長4.9, 最大幅2.1, 厚さ0.1, 重さ4.8g, B. 鍛造, D. 鉄製, F. 刃部先端のみ, H. 覆土中。



## 第289号住居跡土層説明

- 第1層: 暗褐色土層 (暗褐色土を主体に、径0.5~4 cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子を微量含む。)
- 第2層: 黄褐色土層 (暗褐色土を主体に、ローム粒子を均一に含む。ロームブロックを少量含む。)
- 第3層: 暗褐色土層 (暗褐色土を主体に、ロームブロック・ローム粒子を多量含む。)
- 第4層: 黄褐色土層 (径0.5~4 cmのロームブロック・ローム粒子を主体に、暗褐色土を含む。)
- 第5層: 暗褐色土層 (暗褐色土を主体に、ロームブロック・ローム粒子・焼土粒子・暗褐色粘土を多量含む。しまりを有する。)
- 第6層: 暗褐色土層 (暗褐色土を主体に、暗褐色粘土を多量、ロームブロック・ローム粒子を少量含む。しまりを有する。)

## 第69図 第289号住居跡

## 第289号住居跡カマド土層説明

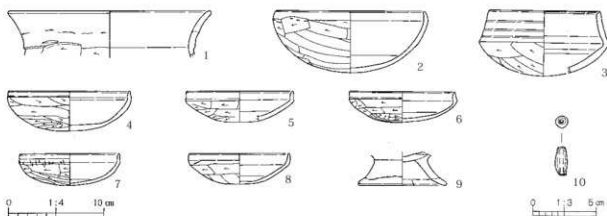
- 第1層: 黄褐色粘土層 (黄褐色粘土・ロームを主体に、焼土粒子を多量、暗褐色土を少量、炭化物を微量含む。しまりを有する。)
- 第2層: 暗褐色土層 (暗褐色土・黄褐色粘土の混合土。焼土ブロック・焼土粒子を多量、ローム粒子を少量含む。)
- 第3層: 暗褐色土層 (暗褐色土・黄褐色粘土の混合土。ローム粒子を多量、焼土ブロック・焼土粒子を少量、径0.5~0.8cmのロームブロックを微量含む。)
- 第4層: 赤褐色焼土層 (赤褐色焼土を主体に、暗褐色土・黄褐色粘土を含む。)
- 第5層: 暗褐色土層 (暗褐色土を主体に、焼土ブロック・焼土粒子を多量含む。)
- 第6層: 褐色土層 (暗褐色土・黄褐色粘質土ローム・ロームの混合土。焼土粒子を微量含む。しまりを有する。)
- 第7層: 黄褐色粘土層 (暗褐色土・黄褐色粘土・径0.5~0.8cmの焼土ブロック・焼土粒子の混合土。しまりを有する。)
- 第8層: 褐色土層 (ロームを主体に、暗褐色土を少量、焼土粒子を微量含む。しまりを有する。)
- 第9層: 暗褐色土層 (暗褐色土・ロームの混合土。暗褐色土を多量含む。しまりを有する。)
- 第10層: 暗褐色土層 (暗褐色土・黄褐色粘土の混合土。焼土ブロック・焼土粒子を多量含む。しまりを有する。)
- 第11層: 暗褐色土層 (暗褐色土・ロームの混合土。暗褐色土を少量含む。しまりを有する。)
- 第12層: 暗褐色土層 (11層に近いが、径0.5~1 cmのロームブロックを多量含む。)
- 第13層: 暗褐色土層 (暗褐色土を主体に、径0.5~3 cmのロームブロック・ローム粒子を含む。)

## 第290号住居跡（第71図、写真図版35）

G 2地点調査区中央の南側に位置する。重複する第228・283号住居跡や第563・564・565号土坑に切られ、第289号住居跡に切られている。住居跡の北東側や北西側及び南西側を後世の攪乱に切られているため、遺構の遺存状態は良好とは言えない。

平面形は、残存する部分から推測すると、コーナー部がやや丸みをもつ隅丸方形を呈していたと思われる。規模は、南北方向が6.25m、東西方向が6.05mを測る。住居跡の東側壁は、N-7°-Eの方向を向いている。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは29cmある。住居東側壁と南側壁の壁下には、壁溝が巡っている。床面は、ロームブロックを含む暗褐色土を平坦に埋め戻した貼床式である。住居跡内からは、カマドやピット等の住居内施設は検出されていない。

遺物は、住居南側の壁際より、古墳時代後期末から白鳳時代初頭頃の土器が多く出土している。出土土器の中の坏には、古墳時代後期の模倣坏の系譜を引く坏と、この時期に出現し北武蔵型坏の祖型となる内屈口縁坏が伴出しており注目される。No 3の有段口縁坏は、古墳時代後期後葉頃のもので、他の土器とは時期の異なる混入品と考えられる。土器以外では、覆土中から完形の土鍾（No10）が1点出土している。本住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土土器の様相から、白鳳時代初頭頃と考えられる。

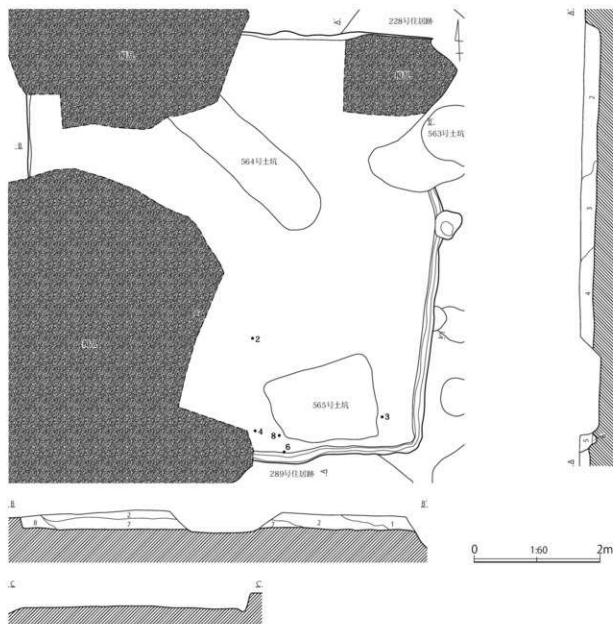


第70図 第290号住居跡出土遺物

第33表 第290号住居跡出土遺物観察表

1	長 頸 甕	A.口縁部径(21.4)。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面窪ナデ。D.角閃石、白色粒。E.内外一橙褐色。F.口縁部破片。H.覆土中。
2	坏	A.口縁部径(15.9)。器高6.5。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ヨコナデ。D.角閃石、黒色粒、白色粒。E.内外一橙褐色。F.1/3。H.覆土中。
3	有段口縁坏	A.口縁部径(11.7)。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.角閃石、E.内外一橙褐色。F.1/5。G.混入品。H.覆土中。
4	坏	A.口縁部径(12.9)。器高4.2。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ヨコナデ。D.角閃石、白色粒。E.外一淡橙褐色、内一橙褐色。F.1/2。H.床面付近。
5	模倣坏	A.口縁部径(11.4)。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ヨコナデ。D.角閃石、チャート。E.内外一橙褐色。F.1/5。H.覆土中。
6	模倣坏	A.口縁部径11.3。器高3.2。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ヨコナデ。D.角閃石。E.内外一淡橙褐色。F.完形。H.床面付近。
7	模倣坏	A.口縁部径(10.5)。器高3.3。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ヨコナデ。D.角閃石、黒色粒。E.内外一橙褐色。F.1/4。H.覆土中。
8	坏	A.口縁部径(10.6)。器高3.2。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後ケズリ、内面ヨコナデ。D.角閃石、白色粒。E.内外一橙褐色。F.1/4。H.覆土中。

9	台付裏	A.1口縁部径9.4。B.粘土層積み上げ。C.台端部径ヨコナデ。D.角閃石、チャート、白色粒。E.内外一淡褐色。F.台部のみ。H.覆土中。
10	土 鏝	A.長さ2.2、最大径0.9、重さ1.43g。B.手捏ね。C.ナデ。D.黒色粒。E.外一橙褐色。F.完形。H.覆土中。



第71図 第290号住居跡

## 第290号住居跡土層説明

- 第1層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、ロームブロックを少量、焼土粒子を微量含む。）  
 第2層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、ロームブロックを微量含む。）  
 第3層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、径0.5～1.5cmのロームブロックを多量、焼土ブロック・焼土粒子を微量含む。）  
 第4層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ロームブロック・ローム粒子を多量含む。）  
 第5層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量含む。）  
 第6層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ロームブロック・ローム粒子を含む。）  
 第7層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ロームブロック・ローム粒子を多量含む。）  
 第8層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を含む。）



## 第291号住居跡（第73図、写真図版36）

G 2地点調査区東側の南寄りに位置する。重複する第292～295号住居跡に切られており、調査区内で検出されたのは住居跡の一部だけであるため、本住居跡の全容は不明である。

平面形は、残存する部分から推測すると、コーナー部がやや丸みをもつ隅丸方形か隅丸長方形を呈していたと思われる。規模は、北西～南東方向は4.02mまで、北東～南西方向は3.85mまで測れる。住居跡の北西側壁は、N-47°-Eの方向を向いている。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは12cmある。検出された各壁の壁下には、壁溝は見られない。床面は、ロームブロックを含む暗黄褐色土を平坦に埋め戻した貼床式で、全体的に硬く締まっている。住居跡内からはピットが3カ所検出されているが、本住居跡との関係は不明である。

炬は、住居北側寄りの位置にあり、2個重複している。いずれも住居の床面を15cm程度掘り窪めた地皿状である。東側の大形の炬は、86cm×55cmの楕円形ぎみの形態で、底面は良く焼けて赤色化している。西側の小形の炬は、72cm×30cmの細長い楕円形ぎみの形態で、底面は部分的に焼けて赤色化している。

遺物は、住居跡の覆土中から、古墳時代前期の土器片や弥生時代後期からの系譜を引く樽式系や吉ヶ谷式系の土器片が、少量出土している。本住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土土器の様相から、古墳時代前期と考えられる。



第72図 第291号住居跡出土遺物

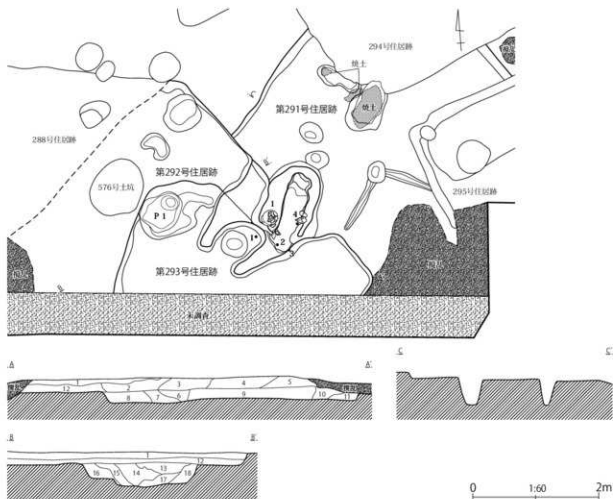
第34表 第291号住居跡出土遺物観察表

1	壺	B.粘土組織み上げ。C.口縁部外面ナデ、内面ミガキ。口唇部にキザミを施す。D.赤色粒、白色粒。E.内外一明黄褐色。F.口縁部破片。G.樽式系？。H.覆土中。
2	甕	B.粘土組織み上げ。C.口縁部外面櫛歯(8本歯)櫛状文(右回り)に施文後、櫛歯波状文(右回り)を施す。内面ミガキ。D.赤色粒、白色粒。E.外一暗褐色、内一淡褐色。F.口縁部破片。G.樽式系。H.床面上。
3	甕	B.粘土組織み上げ。C.胴部外面2連止櫛歯櫛状文(右回り)の後、櫛歯(8本歯)波状文(右回り)に施文。内面ミガキ。D.白色粒。E.内外一暗褐色。F.胴部破片。G.樽式系。H.覆土中。
4	甕	B.粘土組織み上げ。C.胴部外面ハケの後櫛歯波状文を施す。内面窪ナデ。D.白色粒。E.外一黒褐色、内一暗茶褐色。F.胴部破片。G.樽式系。H.覆土中。
5	壺	B.粘土組織み上げ。C.口唇部・口縁部外面縄文、内面ナデ。D.片岩粒、白色粒。E.外一茶褐色、内一暗褐色。F.口縁部破片。G.弥生。H.覆土中。

## 第292号住居跡（第73図、写真図版37）

G 2地点調査区東側の南寄りに位置する。重複する第288・291・293号住居跡を切り、第576号土坑に切られている。調査区内で検出されたのは住居跡の一部だけであり、住居跡の南側半分は調査区外にあるため、本住居跡の全容は不明である。

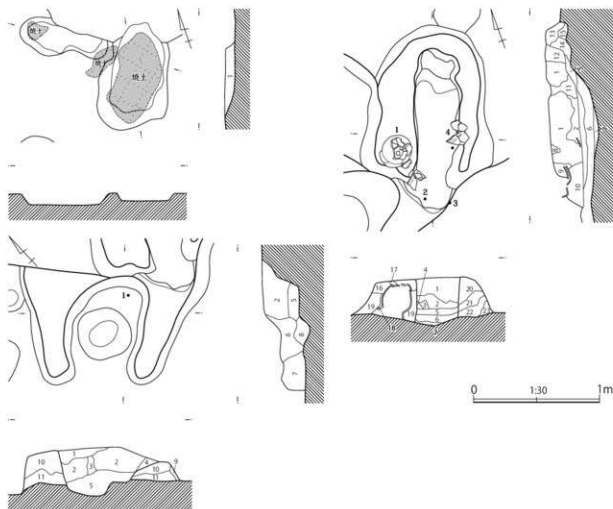
平面形は、不明である。規模は、北東～南西方向は3.96mまで、北西～南東方向は2.45mまで測れる。住居の主軸方位は、N-48°-Eを向いている。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面か



第73図 第291・292・293号住居跡

## 第291・292・293号住居跡土層説明

- 第1層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、浅間山系A軽石・ロームブロックを少量含む。）  
 第2層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子・焼土粒子を多量、径0.5～1.5cmのロームブロックを少量、0.5～0.8cmの炭化物を微量含む。）  
 第3層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ロームブロックを多量含む。）  
 第4層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ロームブロックを少量含む。）  
 第5層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ロームブロックを少量、灰褐色粘土を微量含む。）  
 第6層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ロームブロック・ローム粒子を少量含む。）  
 第7層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、径0.5～3cmのロームブロック・ローム粒子を少量、径3～4cmのロームブロックを微量含む。）  
 第8層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、ロームブロックを少量、焼土粒子を微量含む。）  
 第9層：灰褐色粘土層（灰褐色粘土ブロックを少量、焼土ブロック・焼土粒子・炭化物を微量含む。しまりを有する。）  
 第10層：暗褐色土層（暗褐色土・灰褐色粘土の混合土。焼土粒子を少量、径0.5～0.8cmのロームブロック・炭化物を微量含む。）  
 第11層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、焼土粒子・灰褐色粘土を少量、ロームブロック・炭化物を微量含む。）  
 第12層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、径0.5～1.5cmのロームブロック・焼土粒子を微量含む。）  
 第13層：暗褐色土層（暗褐色土・灰褐色粘土の混合土を主体に、径0.5～1cmの焼土ブロック・焼土粒子を多量、炭化物を少量、ローム粒子を微量含む。しまりを有する。）  
 第14層：暗褐色土層（13層に近いが、径0.5～2cmのロームブロックを多量含む。しまりを有する。）  
 第15層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、焼土ブロック・焼土粒子を多量、炭化物・灰褐色粘土を少量、ローム粒子を微量含む。しまりを有する。）  
 第16層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ロームブロック・ローム粒子を多量、径0.5～1cmの焼土ブロック・焼土粒子を微量含む。）  
 第17層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、焼土ブロック・焼土粒子・炭化物・灰褐色粘土を少量、ローム粒子を微量含む。）  
 第18層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、焼土ブロック・焼土粒子・炭化物・灰褐色粘土を少量、ローム粒子を微量含む。）



第74図 第291号住居跡炉、第292・293号住居跡カマド

## 第291号住居跡炉跡土層説明

第1層：黒褐色土層 (黒褐色土を主体に、ロームブロック・灰褐色粘土を少量、ローム粒子を微量含む。しまりはない。)

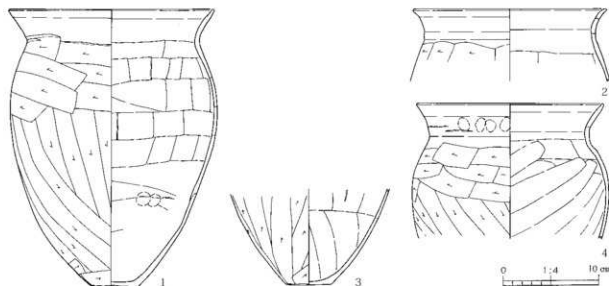
## 第292号住居跡カマド土層説明

- 第1層：褐色土層 (灰褐色粘質土ロームを主体に、焼土ブロック・焼土粒子を含む。)  
 第2層：褐色土層 (1層に近いが、径0.5～3cmの焼土ブロックを含む。)  
 第3層：明赤褐色土層 (焼土ブロックを含む。)  
 第4層：褐色粘土層 (灰褐色粘質土ロームを主体に、焼土ブロック・焼土粒子を多量含む。しまりを有する。)  
 第5層：赤褐色焼土層 (焼土・粘土の混合土。しまりを有する。)  
 第6層：暗褐色土層 (暗褐色土・焼土・灰の混合土。ロームブロック・ローム粒子を含む。しまりを有する。)  
 第7層：赤褐色焼土層 (焼土・粘土の混合土。しまりを有する。)  
 第8層：暗褐色土層 (暗褐色土・褐色粘土の混合土。焼土粒子を含む。しまりを有する。)  
 第9層：褐色土層 (灰褐色粘質土ロームを主体に、暗褐色土を多量、焼土ブロック・焼土粒子を少量含む。)  
 第10層：褐色土層 (9層に近いが、焼土ブロック・焼土粒子を多量含む。)  
 第11層：褐色土層 (焼土ブロック・焼土粒子・褐色粘土の混合土。)  
 第12層：暗褐色土層 (暗褐色土・粘土の混合土。焼土粒子を含む。)  
 第13層：黄褐色粘土層 (暗褐色土・粘土の混合土を主体に、焼土ブロック・焼土粒子を含む。)  
 第14層：暗褐色土層 (13層に近いが、暗褐色土を多量含む。)  
 第15層：暗褐色土層 (13層に近いが、焼土ブロックを多量、焼土粒子を微量含む。)  
 第16層：褐色粘土層 (灰褐色粘質土ロームを主体とする。)  
 第17層：褐色粘土層 (粘土ブロックを主体とする。)  
 第18層：黄褐色粘土層

- 第19層：暗褐色土層（暗褐色土・粘土の混合土。）  
 第20層：灰黄褐色粘土層  
 第21層：赤褐色粘土層（焼土・粘土の混合土。）  
 第22層：黄褐色粘土層（暗褐色土を少量、焼土ブロック・焼土粒子を微量含む。）  
 第23層：黄褐色粘土層（暗褐色土を多量、焼土ブロック・焼土粒子を微量含む。）

#### 第293号住居跡カマド土層説明

- 第1層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ロームブロック・ローム粒子・焼土粒子・灰白色粘土を含む。）  
 第2層：暗褐色土層（暗褐色土・灰白色粘土の混合土。径0.5～1cmの焼土ブロック・焼土粒子を多量、炭化物を少量、ロームブロック・ローム粒子を微量含む。）  
 第3層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を少量、径1cmの焼土ブロックを微量含む。）  
 第4層：暗褐色土層（暗褐色土・灰褐色粘土の混合土。焼土粒子を微量含む。）  
 第5層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ロームブロック・ローム粒子を多量含む。焼土粒子を微量含む。）  
 第6層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、焼土粒子・炭化物を少量、ロームブロック・ローム粒子を微量含む。）  
 第7層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、焼土ブロック・焼土粒子を多量、ロームブロック・ローム粒子・灰褐色粘土を少量含む。）  
 第8層：暗褐色土層（7層に近いが、灰褐色粘土を微量含む。粘性に富む。）  
 第9層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、焼土ブロック・焼土粒子・灰褐色粘土を少量、ロームブロック・炭化物を微量含む。）  
 第10層：灰褐色粘土層（暗褐色土・灰褐色粘土の混合土。焼土粒子を多量、径0.5～2cmの焼土ブロックを少量、炭化物を微量含む。）  
 第11層：暗褐色土層（暗褐色土・灰褐色土の混合土を主体に、径0.5～2cmの焼土ブロック・焼土粒子を少量、ロームブロック・炭化物を微量含む。）



第75図 第292号住居跡出土遺物

第35表 第292号住居跡出土遺物観察表

1	長胴甕	A.口縁部径21.7、器高29.3、底部径5.0。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篋ナデ。底部外面ケズリ。D.角閃石、チャート、白色粒。E.外—淡橙褐色、内—橙褐色。F.4/5、H.カマド内。
2	長胴甕	A.口縁部径(20.4)。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面篋ナデ。D.角閃石、白色粒。E.外—橙褐色、内—明赤褐色。F.口縁部1/3。H.カマド内。
3	長胴甕	A.底部径4.8。B.粘土組織み上げ。C.体部外面ケズリ、内面篋ナデ。底部外面ケズリ。D.角閃石、白色粒。E.内外—橙褐色。F.胴部下半のみ。H.カマド内。
4	長胴甕	A.口縁部径19.8。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面篋ナデ。D.角閃石、白色粒。E.内外—橙褐色。F.胴部上半のみ。G.口縁部外面に指頭圧痕を残す。H.カマド内。

らの深さは20cmある。残存する壁の壁下には、壁溝は見られない。床面は、ロームブロックを含む暗黄褐色土を平坦に埋め戻した貼床式である。住居跡内からはビットが2カ所検出されているが、本住居跡との関係は不明である。

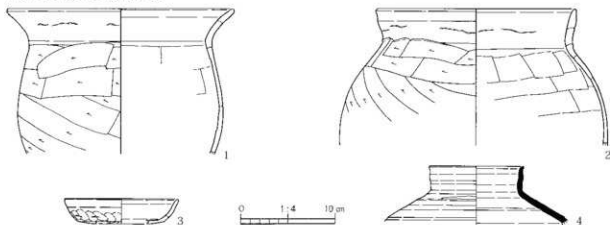
カマドは、住居北東側壁に位置し、壁を掘り込んでやや斜めに付設されている。規模は、長さ150cm、最大幅105cmを測る。燃烧部は、奥壁側の半分が住居外にある。燃烧面は、住居の床面とほぼ同じ高さで水平に作られており、非常によく焼けて赤色化している。奥壁は、緩やかに傾斜して煙道部に向かっている。袖は、灰褐色粘土やロームブロックを含む灰黄褐色粘土を、カマドの奥壁から廻して構築している。左側袖の先端には、土師器の裏を伏せて袖の芯にしている。煙道部は、既に削平されているため不明である。

遺物は、住居跡の覆土中やカマド内から、奈良時代を主体とする土器の破片が出土している。本住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土土器の様相から、奈良時代後半頃と考えられる。

### 第293号住居跡（第73図、写真図版38）

G 2地点調査区東側の南寄りに位置する。重複する第292号住居跡に切られ、第291号住居跡を切っている。調査区内で検出されたのは住居跡の一部だけであり、住居跡の南側半分は調査区外にあるため、本住居跡の全容は不明である。

平面形は不明であるが、住居北東側壁はカマドの左右で壁の位置が異なり、段違いになっている。規模は、北東～南西方向は1.30mまで、北西～南東方向は2.46mまで測れる。住居の主軸方位は、N $-22^{\circ}$ -Eを向いている。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは20cmある。残存する壁の壁下には、壁溝は見られない。床面は、ロームブロックを含む暗褐色土を平坦に埋め戻した貼床式である。住居跡内からは、ピットが1カ所検出されている。P 1は、いわゆる貯蔵穴と呼ばれるもので、カマド左側の住居北側コーナー部に位置する。65cm $\times$ 58cmの楕円形ぎみの形態で、床面からの深さは40cmある。



第76図 第293号住居跡出土遺物

第36表 第293号住居跡出土遺物観察表

1	長 胴 甕	A.口縁部径(24.0)。B.粘土細積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面瓊ナデ。D.角閃石、白色粒。E.外-淡赤褐色、内-明赤褐色。F.口縁部1/5。H.カマド内。
2	胴 張 甕	A.口縁部径21.2。B.粘土細積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面瓊ナデ。D.角閃石、チャート、白色粒。E.内外-橙褐色。F.口縁部1/3。H.カマド内。
3	坏	A.口縁部径(12.0)、器高2.6、底部径(9.2)。B.粘土細積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデ、内面ヨコナデ。底部外面ケズリ。D.角閃石、白色粒。E.内外-淡橙褐色。F.破片。G.体部外面に指面圧痕を残す。H.覆土中。
4	須 恵 器 直 口 壺	A.口縁部径(10.0)。B.ロクロ成形。C.内外面回転ナデ。D.白色粒。E.内外-灰色。F.胴部上半のみ。G.外面に自然輪が掛かる。H.覆土中。

カマドは、住居北東側壁に、壁に対して直角に付設されている。規模は、長さ85cm、最大幅46cmを測る。燃焼部は、住居内にある。燃焼面は、住居の床面とほぼ同じ高さで水平に作られている。奥壁は、緩やかに傾斜して煙道部に向かっている。袖は、褐色粘土を住居の壁に直接貼り付けて構築している。左側袖の先端には、伏せた土師器の甕を埋め込んで芯とし補強にしている。煙道部は、既に削平されているため不明である。

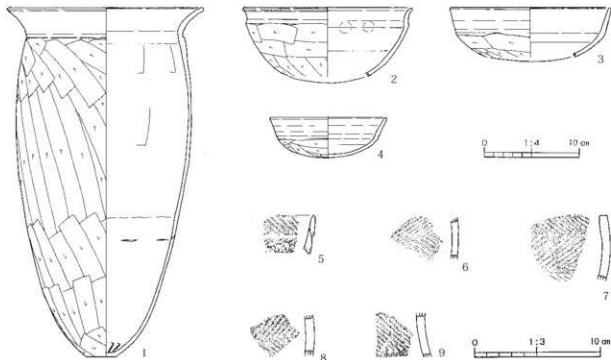
遺物は、住居跡の覆土中やカマド内から、奈良時代を主体とする土器の破片が出土している。本住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土土器の様相から、奈良時代後半頃と考えられる。

#### 第294号住居跡（第78図、写真図版39）

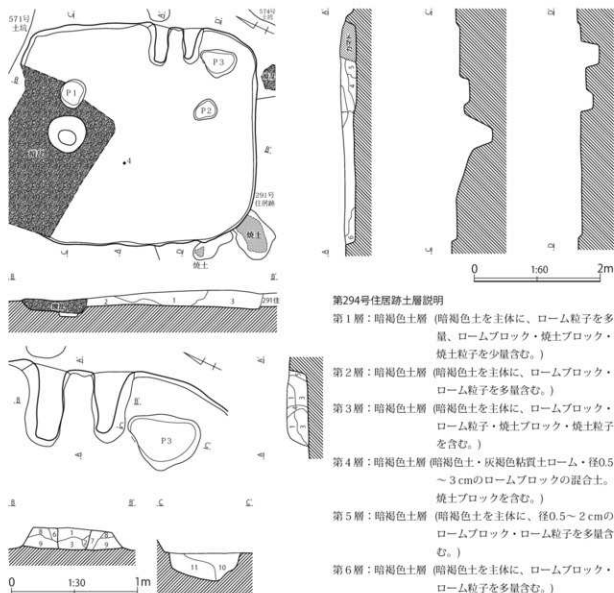
G 2 地点調査区東側の中央付近に位置する。重複する第291号住居跡を切り、住居跡の北西側を後世の攪乱に切られている。

平面形は、コーナー部の丸みが強い隅丸方形を呈している。規模は、北東～南西方向が3.52m、北西～南東方向が3.73mまで測れる。住居の主軸方位は、N-63° - Eを向いている。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは24cmある。検出された各壁の壁下には、壁溝は見られない。床面は、ロームブロックを含む暗褐色土を平坦に埋め戻した貼床式である。ピットは、3カ所検出されている。P 1とP 2は、住居の対角線上に近い位置に配置されていることから、住居の上屋を支える4本主柱の柱穴の可能性もある。長さ40cm程度の不整楕円形ぎみの形態で、床面からの深さは15cm～20cmある。P 3は、いわゆる貯蔵穴と呼ばれるもので、カマド右側の住居東側コーナー部に位置する。58cm×45cmの三角形ぎみの形態で、床面からの深さは22cmある。

カマドは、住居北東側壁の中央やや東側コーナー部寄りに位置し、壁に対してほぼ直角に付設され



第77図 第294号住居跡出土遺物



## 第294号住居跡土層説明

- 第1層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、ロームブロック・焼土ブロック・焼土粒子を少量含む。）
- 第2層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ロームブロック・ローム粒子を多量含む。）
- 第3層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ロームブロック・ローム粒子・焼土ブロック・焼土粒子を含む。）
- 第4層：暗褐色土層（暗褐色土・灰褐色粘質土ローム・径0.5～3cmのロームブロックの混泥土。焼土ブロックを含む。）
- 第5層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。）
- 第6層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ロームブロック・ローム粒子を多量含む。）

第78図 第294号住居跡

## 第294号住居跡カマド土層説明

- 第1層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子・焼土粒子を多量含む。）
- 第2層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を含む。）
- 第3層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、径0.5～1cmのロームブロックを含む。）
- 第4層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。）
- 第5層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、径0.5～1cmのロームブロックを多量含む。）
- 第6層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子・焼土粒子を多量、ロームブロックを少量含む。）
- 第7層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、径0.5～0.8cmの焼土ブロックを含む。）
- 第8層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ロームブロック・ローム粒子・焼土ブロック・焼土粒子を多量含む。）
- 第9層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子・焼土ブロック・焼土粒子を多量、炭化物を少量含む。）
- 第10層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量含む。）
- 第11層：黄褐色土層（暗褐色土を主体に、径0.5～4cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。）

ている。規模は、長さ59cm、最大幅87cmを測る。燃焼部は、住居内にある。燃焼面は、住居の床面と同じ高さで、平坦に作られている。奥壁は、直線的に傾斜して煙道部に向かっている。袖は、ロームブロックを含む暗褐色土を、住居の壁に直接貼り付けて構築している。煙道部は、既に削平されて

いるため不明である。

遺物は、住居跡の覆土中から、古墳時代後期の土器や弥生時代後期の二軒屋式や吉ヶ谷式の系譜を引く土器の破片が少量出土している。本住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土土器の様相から、古墳時代後期後葉頃と考えられる。

第37表 第294号住居跡出土遺物観察表

1	長 胴 甕	A. 口縁部径20.6。器高37.0。底部径(3.2)。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面上半捲ナデ・下半ナデ。底部外面ケズリ。D. 白色粒。E. 外一暗褐色、内一淡褐色。F. ほぼ完形。G. 胴部外面に煤付着。H. 覆土中。
2	大 形 鉢	A. 口縁部径(18.0)。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 白色粒。E. 内外一淡茶褐色。F. 口縁部1/3。H. 覆土中。
3	坏 形 鉢	A. 口縁部径(17.0)。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一明褐色。F. 口縁部1/4破片。H. 覆土中。
4	模 倣 坏	A. 口縁部径(12.4)。器高4.3。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一淡茶褐色。F. 1/2。H. 覆土中。
5	甕	B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部外面縄文・粘土組織み上げ痕下端刺突文、内面ナデ。D. 白色粒。E. 内外一黒褐色。F. 口縁部破片。G. 弥生後期二軒屋式。H. 覆土中。
6	甕	B. 粘土組織み上げ。C. 胴部外面縄文、内面ナデ。D. 白色粒。E. 外一黒褐色、内一黒灰色。F. 胴部破片。G. 弥生後期二軒屋式。H. 覆土中。
7	甕	B. 粘土組織み上げ。C. 胴部外面縄文、内面ナデ。D. 白色粒。E. 外一黒褐色、内一暗褐色。F. 胴部破片。G. 弥生後期二軒屋式。H. 覆土中。
8	甕	B. 粘土組織み上げ。C. 胴部外面縄文、内面ナデ。D. 白色粒。E. 外一淡褐色、内一暗褐色。F. 胴部破片。G. 弥生後期二軒屋式。H. 覆土中。
9	甕	B. 粘土組織み上げ。C. 胴部外面縄文、内面ミガキ。D. 白色粒。E. 内外一淡褐色。F. 胴部破片。G. 弥生後期吉ヶ谷式。H. 覆土中。

#### 第295号住居跡 (第80図、写真図版40)

G 2 地点調査区東側の南東端に位置する。重複する第296・297号住居跡や第574・577号土坑に切られ、第291号住居跡を切っている。住居跡の南側半分は調査区外にあるため、本住居跡の全容は不明である。

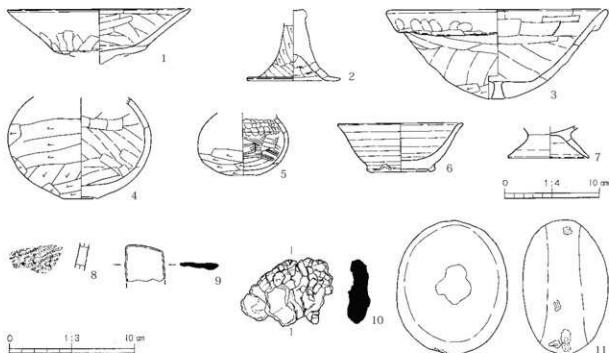
平面形は、検出された部分から推測すると、コーナー部がやや丸みをもつ隅丸方形か隅丸長方形を呈していたと思われる。規模は、北東～南西方向が8.27m、北西～南東方向は4.00mまで測れ、同時期の第266号住居跡に次ぐ規模の住居跡である。住居跡の北西側壁は、N-68° - Eの方向を向いている。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは15cmある。調査区内で検出された各壁の壁下には、壁溝が巡っている。床面は、ロームブロックを含む暗黄褐色土を平坦に埋め戻した貼床式である。住居中央部は比較的堅く締まっているが、周辺部はやや軟弱である。ピットは、2カ所検出されている。P 1 と P 2 は、径53cm～60cm程度の円形を呈し床面からの深さは40cmと47cmある。いずれも住居のコーナー部に位置しており、その配置から住居の上屋を支える4本主柱の柱穴の可能性もあるが、主柱穴のコーナー部寄りの配置は、大形住居ではほとんど例を見ない。

炬は、住居中央部から北西側壁寄りに位置する。68cm×82cmの隅丸方形ぎみの形態を呈し、住居の床面を14cm程度掘り窪めた地皿炬である。

遺物は、住居周辺部の床面付近から、古墳時代中期を主体とする土器の破片が、比較的多く出土している。古墳時代前期後葉頃のNo 2の高坏や、平安時代のNo 6の高台付碗、No 7の小形台付甕は、重複する住居跡からの混入品と考えられる。また、覆土中からNo 9の板状鉄製品の破片やNo 10の鉄滓が出土しているが、本住居との関係は不明である。本住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土土器



の様相から、古墳時代中期前半頃と考えられる。



第79図 第295号住居跡出土遺物

第38表 第295号住居跡出土遺物観察表

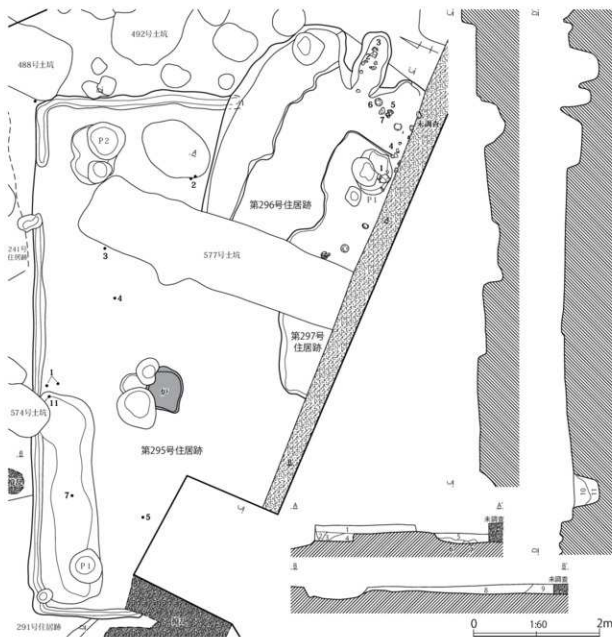
1	高 環	A.口縁部径(19.3)。B.粘土組織み上げ。C.口縁部外面ヨコナデ、内面縦ナデ。D.石英、角閃石、白色粒。E.内外一淡黄褐色。F.環部1/2。H.床面付近。
2	高 環	A.脚端部径(9)。B.粘土組織み上げ。C.脚柱部外面ケズリ、内面ナデ。脚端部内外面ヨコナデ。D.石英、角閃石、白色粒。E.内外一淡褐色。F.脚部2/3。H.覆土中。
3	小形 甕	A.口縁部径(23.5)、器高9.3。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外縦ナデの後下端ケズリ、内面縦ナデ。D.雲母、石英、白色粒。E.外一灰黄色、内一淡黄褐色。F.1/5。H.床面付近。
4	中形直口壺	A.底部径3.7。B.粘土組織み上げ。C.胴部内外面ナデの後下半ケズリ、内面縦ナデ。底部外面ケズリ。D.石英、長石、白色粒。E.内外一淡褐色。F.口縁部欠損。H.覆土中。
5	小形直口壺	A.底部径3.2。B.粘土組織み上げ。C.胴部外面ナデの後下半ケズリ、内面ハケ。底部外面ケズリ。D.角閃石、白色粒。E.外一淡褐色、内一褐色。F.胴部のみ。G.内面に指頭圧痕を残す。H.床面付近。
6	須 恵 器 高台付 埴	A.口縁部径(13.4)、器高5.1、高台部径(7.3)。B.ロコロ成形。高台部貼り付け。C.口縁部内外面回転ナデ。底部外縦回転糸切り。D.片岩粒、雲母。E.外一橙褐色、内一淡黄褐色。F.1/4。酸化焙焼成。H.覆土中。
7	小形台付甕	A.台端部径(8.5)。B.粘土組織み上げ。C.台部内外面ヨコナデ。D.角閃石、白色粒。E.内外一橙褐色。F.台部のみ。H.覆土中。
8	甕	B.粘土組織み上げ。C.胴部外面に羽状縄文(単節LRの軸線に無節Lの2条を付加)。D.白色粒。E.内外一褐色。F.胴部破片。G.弥生時代後期二軒原式。H.覆土中。
9	板状鉄製品	A.残存長2.8、幅3.1、厚さ0.4、重さ7.85g。B.鍛造。D.鉄製。F.破片。H.覆土中。
10	鉄 滓	A.長さ7.5、幅5.4、厚さ1.5、重さ65.56g。F.完形。H.覆土中。
11	磨 石	A.長さ10.6、幅8.7、厚さ6.7、重さ651.85g。B.自然石を利用。C.上面中央に磨面。側面に敲打痕あり。D.安山岩。F.完形。H.床面付近。

#### 第296号住居跡 (第80図、写真図版42)

G2地点調査区東側の南東端に位置する。重複する第297号住居跡や第577号土坑に切られ、第295号住居跡を切っている。住居跡の南側は調査区外にあるため、本住居跡の全容は不明である。

平面形は、検出された部分から推測すると、コーナー部の丸みが強く、北側壁が弓状に張った隅丸

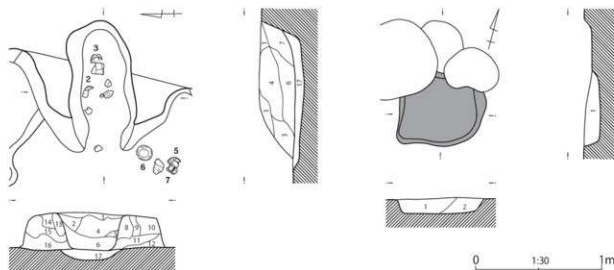
方形か隅丸長方形を呈していたと思われる。規模は、東西方向は3.55mまで、南北方向は2.70mまで測れる。住居の主軸方位は、N-101°-Eを向いている。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確



第80図 第295・296・297号住居跡

第295・296・297号住居跡土層説明

- 第1層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ロームブロック・ローム粒子を含む。）
- 第2層：黒褐色土層（黒褐色土を主体に、ロームブロック・ローム粒子・焼土粒子を多量含む。）
- 第3層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を多量含む。）
- 第4層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子を少量含む。）
- 第5層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、焼土粒子を少量含む。粘性に富む。）
- 第6層：黄褐色土層（径0.5～5cmのロームブロック・ローム粒子を主体に、暗褐色土を微量含む。粘性に富む。）
- 第7層：黄褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を多量含む。粘性に富む。）
- 第8層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、径0.5～5cmのロームブロックを少量含む。しまりを有する。）
- 第9層：暗褐色土層（8層に近いが、ロームが少なく、黒味が強い。）
- 第10層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を多量、黒褐色土ブロックを微量含む。）
- 第11層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を少量含む。）



第81図 第295号住居跡炉、第296号住居跡カマド

## 第295号住居跡炉跡土層説明

- 第1層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、径0.5～1.5cmのロームブロック・ローム粒子を含む。）  
 第2層：黄褐色土層（暗褐色土・ロームの混合土。）

## 第296号住居跡カマド土層説明

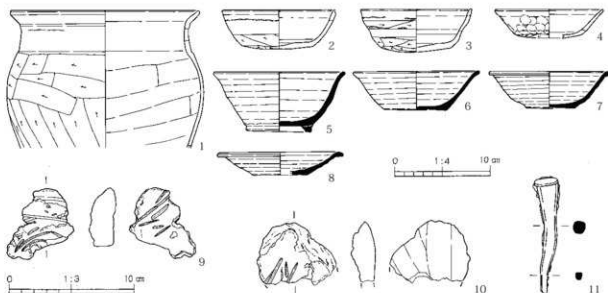
- 第1層：暗褐色土層（暗褐色土・灰褐色粘土の混合土。焼土粒子を多量含む。）  
 第2層：暗褐色土層（暗褐色土・灰褐色粘土の混合土。焼土粒子を少量含む。しまりを有する。）  
 第3層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、灰褐色粘土を多量、焼土粒子を少量含む。）  
 第4層：暗褐色土層（暗褐色土・径0.5～2cmの焼土ブロック・粘土粒子・灰褐色粘土の混合土。しまりを有する。）  
 第5層：灰白色粘土層（粘土ブロックを含む。しまりを有する。）  
 第6層：暗褐色土層（暗褐色土・灰褐色粘質土の混合土。径4cmの焼土ブロックを含む。しまりはない。）  
 第7層：暗褐色土層（暗褐色土・ローム粒子・灰褐色粘土の混合土。径0.5～0.8cmの焼土ブロック・焼土粒子を含む。）  
 第8層：暗褐色土層（暗褐色土・灰褐色粘土の混合土。焼土ブロック・焼土粒子を多量含む。）  
 第9層：暗褐色土層（暗褐色土・灰褐色粘土の混合土。焼土ブロック・焼土粒子を含む。）  
 第10層：暗褐色土層（暗褐色土・灰褐色粘土の混合土。ロームブロック・ローム粒子を多量、炭化物を少量含む。）  
 第11層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、灰褐色粘土を含む。）  
 第12層：暗褐色土層（暗褐色土・ローム・灰褐色粘土の混合土。焼土粒子を少量含む。）  
 第13層：赤褐色土層（暗褐色土・灰褐色粘土の混合土。）  
 第14層：暗褐色土層（暗褐色土・灰褐色粘土の混合土。焼土ブロック・焼土粒子・炭化物を含む。）  
 第15層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、灰褐色粘土を多量、焼土ブロック・焼土粒子・炭化物を少量含む。）  
 第16層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、焼土ブロック・焼土粒子・灰褐色粘土を少量含む。）  
 第17層：暗褐色土層（暗褐色土・ローム・灰褐色粘土の混合土。径0.5～0.8cmの焼土ブロック・焼土粒子を多量、径0.5～1cmのロームブロック・炭化物を少量含む。）

認めからの深さは25cmある。調査区内で検出された各壁の壁下には、明確な壁溝は見られない。床面は、ロームブロックを含む暗褐色土を平坦に埋め戻した貼床式で、全体的に硬く締まっている。本住居跡に伴うビットは、検出されていない。

カマドは、住居東側壁の北東コーナー部寄りに、住居の壁を掘り込んで若干斜めに付設されている。規模は、長さ122cm、最大幅170cmを測る。燃焼部は、奥壁側の東側半分が住居外にある。燃焼面は、住居の床面と同じ高さで、水平に作られている。奥壁は、直線的に傾斜して立ち上がって、煙道部に向かっている。袖は、灰褐色粘土を含む暗褐色土を、住居の壁に直接貼り付けて構築している。袖の内面は、良く焼けて赤色化している。煙道部は、既に削平されているため不明である。

遺物は、カマド内やカマド周辺の床面付近から、平安時代前期後半頃の土器が出土している。土器

以外では、鉄釘の破片や土壁状土製品が出土している。本住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土土器の様相から、平安時代前期後半頃と考えられる。



第82図 第296号住居跡出土遺物

第39表 第296号住居跡出土遺物観察表

1	甕	A.口縁部径(20.0)。B.粘土組織み上げ。C.口縁部外面ヨコナデ、胴部外面ケズリ、内面麗ナデ。D.角閃石、白色粒。E.外-淡橙褐色、内-橙褐色。F.上半のみ。H.カマド内。
2	坏	A.口縁部径12.0。器高4.1。底部径7.6。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後下ケズリ、内面ヨコナデ。底部外面ケズリ。D.角閃石、チャート、白色粒。E.内外-橙褐色。F.3/4。H.カマド内。
3	坏	A.口縁部径11.7。器高4.5。底部径7.6。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後ケズリ、内面ヨコナデ。底部外面ケズリ。D.角閃石、白色粒。E.内外-淡橙褐色。F.ほぼ全形。H.カマド内。
4	坏	A.口縁部径(11.4)。器高3.0。底部径(7.0)。B.粘土組織み上げ。C.口縁部・体部内外面ヨコナデ。底部外面ケズリ。D.角閃石、白色粒。E.内外-淡橙褐色。F.1/3。G.体部外面に指面圧痕を残す。H.カマド内。
5	須恵器 高台付 埴	A.口縁部径14.0。器高6.3。高台部径6.9。B.ロクロ成形。高台部貼り付け。C.口縁部内外面回転ナデ。底部外面麗回転系切り。高台部内外面回転ナデ。D.黒色粒。E.内外-灰色。F.完形。H.床面付近。
6	須恵器 埴	A.口縁部径13.4。器高4.1。底部径6.4。B.ロクロ成形。C.口縁部内外面回転ナデ。底部外面麗回転系切り。D.片岩粒、角閃石。E.外-橙褐色、内-淡黄褐色。F.完形。G.還元不良。H.床面付近。
7	須恵器 埴	A.口縁部径12.7。器高3.9。底部径5.1。B.ロクロ成形。C.口縁部内外面回転ナデ。底部外面麗回転系切り。D.石英、白色粒。E.内外-灰色。F.4/5。H.カマド内。
8	須恵器 皿	A.口縁部径(13.4)。器高2.4。底部径(5.8)。B.ロクロ成形。C.口縁部内外面回転ナデ。底部外面麗回転系切り。D.片岩粒、白色粒。E.内外-橙褐色。F.1/4。G.酸化焙焼成。H.カマド内。
9	土壁状 土製品	A.長さ5.6。幅5.2。厚さ2.0。重さ35.29g。B.手捏ね。C.表面ナデ。D.白色粒。E.外-橙褐色。F.破片。H.カマド内。
10	煎餅状 土製品	A.長さ4.9。幅6.3。厚さ1.9。重さ36.93g。B.手捏ね。C.表面ナデ。D.角閃石、白色粒。E.外-橙褐色。F.破片。G.片面に植物の葉のような圧痕を残す。H.カマド内。
11	鉄釘	A.長さ9.25。幅0.95。厚さ0.95。重さ24.16g。B.鍛造。D.鉄製。F.完形。G.断面は四角。H.覆土中。

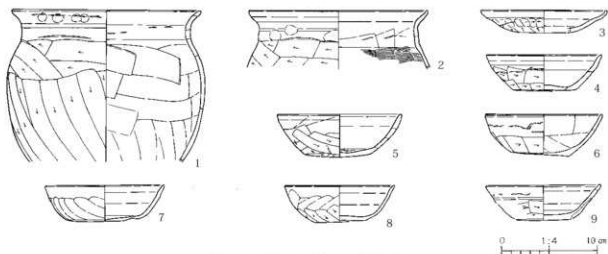
第297号住居跡 (第80図、写真図版43)

G 2 地点調査区東側の南東端に位置する。重複する第577号土坑に切られ、第295・296号住居跡を切っている。住居跡の大半は南側は調査区外にあるため、本住居跡の全容は不明である。

平面形は、検出された部分から推測すると、やや歪んだ方形か長方形を呈していたと思われる。規模は、東西方向が4.03m、南北方向は1.14mまで測れる。住居跡の北側壁は、N-96°-Eの方向を

向いている。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは28cmある。調査区内で検出された各壁の壁下には、明確な壁溝は見られない。床面は、ロームブロックを含む暗褐色土を平坦に埋め戻した貼床式で、全体的に硬く締まっている。ピットは、1ヵ所検出されている。P1は、住居北東側コーナー部に位置する。70cm×60cmの楕円形ぎみの形態で、中央部から北側を後世の方形ピットに切られている。床面からの深さは15cmある。

遺物は、住居跡の覆土中から、平安時代前期後半頃を主体とする土器が多く出土している。本住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土土器の様相から、平安時代前期後半頃と考えられる。



第83図 第297号住居跡出土遺物

第40表 第297号住居跡出土遺物観察表

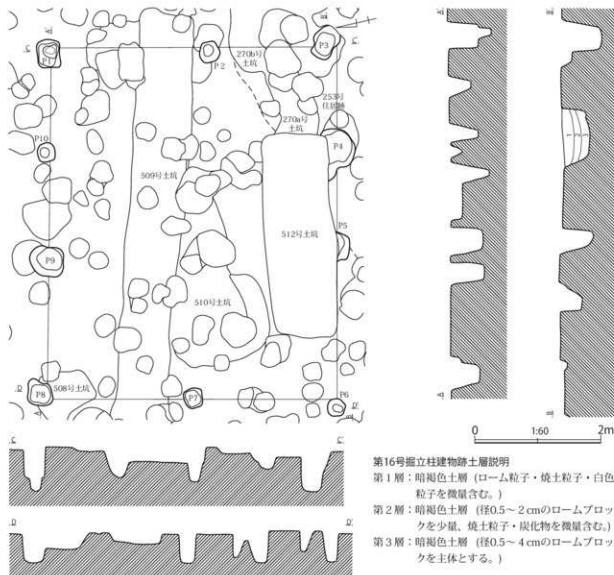
1	甕	A.口縁径(20.0)。B.粘土組織み上げ。C.口縁部外面ヨコナデ、胴部外面ケズリ、内面匱ナデ。D.角閃石、白色粒。E.内外一橙褐色。F.上半のみ。G.口縁部外面に指頭圧痕を残す。H.覆土中。
2	甕	A.口縁径(19.0)。B.粘土組織み上げ。C.口縁部外面ヨコナデ、胴部外面ケズリ、内面ハケ。D.角閃石、白色粒。E.外一灰黄褐色、内一淡橙褐色。F.口縁部破片。G.口縁部外面に指頭圧痕を残す。H.覆土中。
3	杯	A.口縁径(13.4)。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後下半ケズリ、内面ヨコナデ。D.角閃石、白色粒。E.内外一淡橙褐色。F.1/3。G.体部外面に指頭圧痕を残す。H.覆土中。
4	杯	A.口縁径(12.2)。器高3.8、底部径6.8。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後ケズリ、内面ヨコナデ。底部外面ケズリ。D.角閃石、白色粒。E.内外一橙褐色。F.1/2。H.覆土中。
5	杯	A.口縁径13.2。器高4.5。底部径7.0。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後下半ケズリ、内面ナデ。底部外面ケズリ。D.角閃石、チャート、白色粒。E.内外一橙褐色。F.4/5。H.覆土中。
6	杯	A.口縁径12.3。器高4.4。底部径6.3。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後下半ケズリ、内面ナデ。底部外面ケズリ。D.角閃石、白色粒。E.内外一橙褐色。F.完形。G.内面に黒色付着物あり。H.覆土中。
7	杯	A.口縁径12.6。器高3.8。底部径7.5。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデ、内面ヨコナデ。底部外面成形痕。D.角閃石、白色粒。E.外一淡橙褐色、内一橙褐色。F.4/5。H.覆土中。
8	杯	A.口縁径11.7。器高3.9。底部径5.2。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後下半ケズリ、内面ヨコナデ。底部外面ケズリ。D.角閃石、白色粒。E.内外一橙褐色。F.完形。H.覆土中。
9	杯	A.口縁径12.1。器高3.7。底部径(5.8)。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ヨコナデ。底部外面ケズリ。D.角閃石、チャート。E.外一淡橙褐色、内一橙褐色。F.3/4。H.覆土中。

## 2. 掘立柱建物跡

### 第16号掘立柱建物跡 (第84図)

G 2 地点調査区西側の北西端に位置する。重複する第508・512号土坑に切られている。第270・509・510号土坑とも重複関係にあるが、相互の新旧関係は不明である。

建物跡の形態は、東西方向3間、南北方向2間の東西方向に長い長方形を呈する側柱式建物である。



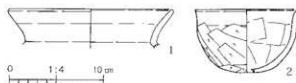
第84図 第16号掘立柱建物跡

規模は、東西方向が5.60m、南北方向が4.60m測る。建物跡の長軸方向は、N-102°-Eを向いている。

柱通りは、東西・南北両方向とも比較的良く、直線状に並んでいる。柱心間は、南北方向は概ね1間2.30mの等間隔であるが、東西方向は真ん中と東端の1間が1.60mの等間隔で、西端の1間は2.40mで広がっている。1間×1間の平面形は、真ん中と東端が長方形、西端は正方形を呈している。

柱穴は、建物の四隅の柱穴が長さ35cm～50cmの隅丸長方形ぎみの形態のものが多く、その他の側柱穴は径30cm程度の円形や長さ50cm～60cmの楕円形を呈している。確認面からの深さは、いずれも深く60cm～78cmある。柱穴覆土は、ロームブロックやローム粒子を含む暗褐色土である。

遺物は、柱穴の覆土中から、混入した古代の土器の破片が少量出土しただけである。本建物跡の時期は明確にできないが、その場所から北側に隣接するE1地点(恋河内・的野2010)やG1地点(松本2013)で検出された中世後期の屋敷跡と関係する建物の可能性が高いと考えられる。



第85図 第16号掘立柱建物跡出土遺物

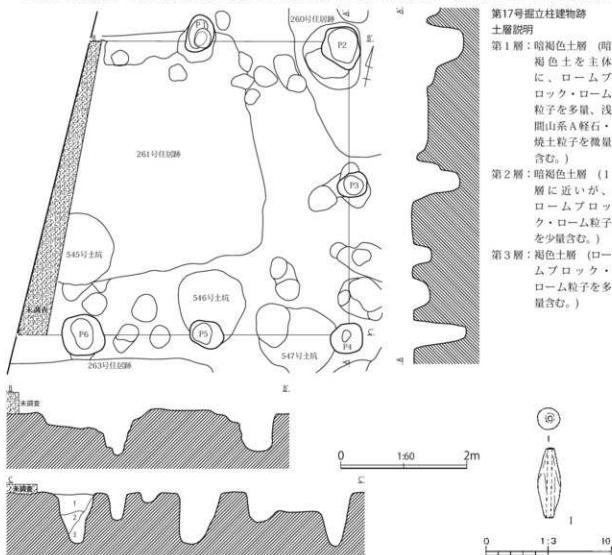
第41表 第16号掘立柱建物跡出土遺物観察表

1	甕	A. 口縁部径17.6. B. 粘土細積み上げ. C. 口縁部内外面ヨコナデ. D. 白色粒. E. 内外一暗褐色. F. 口縁部1/2. H. 柱穴覆土中.
2	小形鉢	A. 口縁部径(11.0). 器高6.7. B. 粘土細積み上げ. C. 口縁部内外面ヨコナデ. 体部外面ケズリ. 内面窪ナデ. D. 片岩粒. 赤色粒. 白色粒. E. 内外一暗茶褐色. F. 1/4. H. 柱穴覆土中.

## 第17号掘立柱建物跡 (第86図、写真版44)

G 2 地点調査区西側の西端に位置する。重複する第546・547号土坑に切れ、第260・261号住居跡を切っている。建物跡の西側は調査区外にあるため、本建物跡の全容は不明である。

建物跡の形態は、南北方向2間、東西方向が3間以上の東西方向に長い長方形を呈する側柱式建物



第86図 第17号掘立柱建物跡及び出土遺物

第42表 第17号掘立柱建物跡出土遺物観察表

1	土 鏝	A長さ5.5. 最大幅1.8. 重さ14.0g. B. 手捏ね. C. 外面ナデ. D. 赤色粒. 白色粒. E. 外一暗茶褐色. F. 完全形. H. 柱穴覆土中.
---	-----	---

と思われる。規模は、南北方向が4.68m、東西方向は4.80mまで測れる。建物跡の長軸方向は、N-80°-Eを向いている。柱通りは、東西・南北両方向とも比較的良く、直線状に並んでいる。柱心間、南北方向は概ね1間2.34mの等間隔、東西方向は概ね1間2.16mの等間隔である。1間×1間の平面形は、ほぼ正方形を呈している。

柱穴は、長さ50cm～70cmの楕円形を呈し、確認面からの深さは55cm～75cmある。柱穴覆土は、ロームブロックやローム粒子を含む暗褐色土である。

遺物は、柱穴の覆土中から、混入した古代の土器の破片や土錘が1点出土しただけである。本建物跡の時期は、遺構の重複関係から平安時代以降の可能性が高いと思われる。

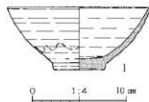
### 3. 井戸跡

#### 第26号井戸跡（第88図）

G 2 地点調査区西側の中央付近に位置し、重複する第93号溝跡を切っている。

井戸掘り方の平面形は、楕円形ぎみの形態を呈している。規模は、北西～南東方向が280cm、北東～南西方向が268cmを測り、G 2 地点で検出された井戸跡の中では最も大きいものである。壁は、上半部が垂直ぎみに落ち込んでおり、南側壁の一部はオーバーハングしている。下半部については未調査のため、井筒の構造や深さなどについては不明である。覆土の堆積は、自然堆積のようである。

遺物は、覆土上層から瀬戸窯系の平碗(No 1)の破片が出土している。この瀬戸窯系の平碗は、古瀬戸後期様式の後Ⅱ期(藤澤1991)に該当するもので、時期は14世紀末～15世紀初頭頃と考えられる。本井戸跡の時期は、中世後期の15世紀後半以降の所産とされる第93号溝跡を切っていることから、それ以降と推測される。



第87図 第26号井戸跡  
出土遺物

第43表 第26号井戸跡出土遺物観察表

1	瀬戸窯系 平碗	A口縁部径(15.2)、器高6.7、高台部径5.4。B.ロクロ成形。高台部削り出し。C.体部内外面回転ナデ。高台部回転窯ケズリ。D.白色粒。E.内外—淡緑褐色。F.1/2。G.体部内外面に灰釉を施す。体部内面にトチン痕あり。H.覆土上層。
---	------------	---

#### 第27号井戸跡（第88図）

G 2 地点調査区中央部の西寄りに位置する。重複する第257号住居跡と第88号溝跡を切っている。南側には第28号井戸跡が近接している。

井戸掘り方の平面形は、不整形の形態を呈している。規模は、南北方向が98cm、東西方向が104cmを測る。壁は、上半部が直線的に傾斜して落ち込んでいる。下半部については未調査のため、井筒の構造や深さなどについては不明である。

遺物は、覆土中から古代の土器片が少量出土しただけである。本井戸跡の時期は、遺構の重複関係から、中世以降と考えられる。

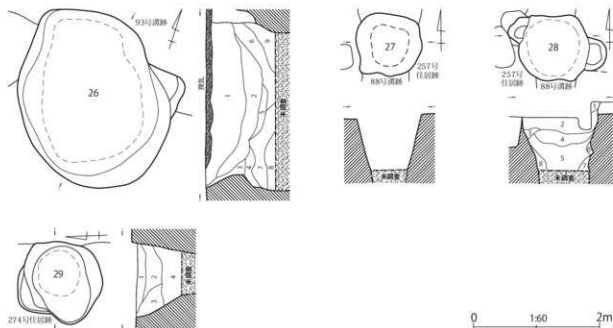
#### 第28号井戸跡（第88図）

G 2 地点調査区中央部の西寄りに位置する。重複する第257号住居跡と第88号溝跡を切っている。



北側には第27号井戸跡が近接している。

井戸掘り方の平面形は、楕円形ぎみの形態を呈している。規模は、南北方向が105cm、東西方向が110cmを測る。壁は、上半部が若干傾斜して落ち込み、下半は円筒状に深くなるようである。井筒の構造や深さについては、下半部が未調査のため不明である。覆土の堆積は、自然堆積のようである。



第88図 第26～29号井戸跡

#### 第26号井戸跡土層説明

- 第1層：暗褐色土層（礫・砂礫を多量、径0.5cmのロームブロック・ローム粒子・焼土粒子・白色粒子を少量含む。）
- 第2層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子・焼土粒子・礫・砂礫を微量含む。）
- 第3層：暗褐色土層（径1～3cmのロームブロックを多量、礫を微量含む。）
- 第4層：暗褐色土層（径0.5～3cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子を微量含む。）
- 第5層：暗褐色土層（径5cmの礫を多量、ローム粒子を少量、炭化粒子を微量含む。）
- 第6層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂礫を微量含む。）
- 第7層：黄褐色土層（径20cmのロームブロックを含む。）
- 第8層：暗褐色土層（暗褐色土・径20cmのロームブロックの混合土。）
- 第9層：暗褐色土層（ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含む。）

#### 第28号井戸跡土層説明

- 第1層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子・白色粒子を多量、焼土粒子を少量含む。）
- 第2層：暗褐色土層（径1～5cmのロームブロック・ローム粒子・灰白色粘土ブロックを多量、白色粒子を少量、焼土粒子を微量含む。）
- 第3層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、径0.5cmのロームブロックを少量含む。）
- 第4層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子・灰白色粘土粒子を少量、焼土粒子を微量含む。）
- 第5層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、径1～3cmのロームブロック・焼土粒子を少量含む。）
- 第6層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を主体とする。）
- 第7層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、径0.5cmのロームブロックを少量含む。）
- 第8層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子を微量含む。）

#### 第29号井戸跡土層説明

- 第1層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子を少量含む。しまりを有する。）
- 第2層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ロームブロック・ローム粒子・焼土粒子を少量含む。しまりを有する。）
- 第3層：暗褐色土層（径0.8～1cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。しまりを有する。）
- 第4層：暗褐色土層（1層に近いが、黒みが強い。粘性に富み、しまりを有する。）

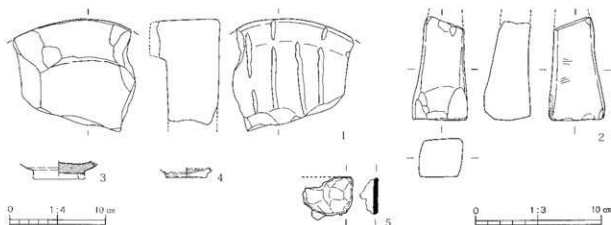
遺物は、覆土中から古代の土器片が少量出土しただけである。本井戸跡の時期は、遺構の重複関係から、中世以降と考えられる。

#### 第29号井戸跡（第88図、写真図版44）

G 2 地点調査区中央部の南寄りに位置する。重複する第274号住居跡を切っている。

井戸掘り方の平面形は、楕円形ぎみの形態を呈している。規模は、南北方向が120cm、東西方向が135cmを測る。壁は、上半部は緩やかに傾斜して落ち込んでいる。下半部は未調査のため不明である。覆土の堆積は、自然堆積のようである。

遺物は、覆土中から少量の古代の土器片とともに、龍泉窯系青磁碗やかかわらの破片、板状の鉄器の破片、粉挽き白(上白)や柱状砥石の破片などが出土している。本井戸跡の時期は、遺構の重複関係や出土遺物の様相から、中世以降と考えられる。



第89図 第29号井戸跡出土遺物

第44表 第29号井戸跡出土遺物観察表

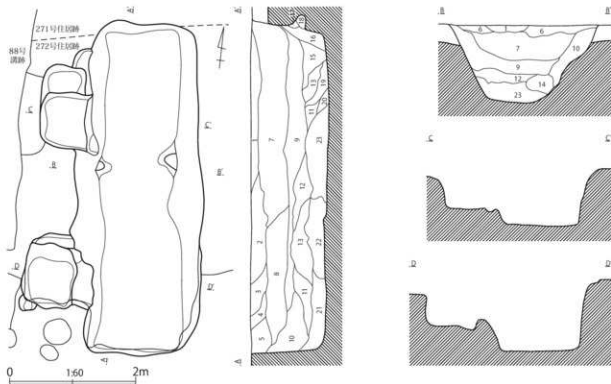
1	粉挽き白 (上白)	A. 残存長11.9、残存幅12.9、厚さ6.7、重さ1220.5g。B. 削り出し。C. 上下側面研磨。D. 安山岩。F. 1/5、G. 下面はよく擦れて、擦目は摩滅している。H. 覆土中。
2	柱状砥石	A. 残存長8.2、最大幅4.4、最大厚3.6、重さ168.8g。B. 削りにより柱状に整形。C. 上下両側面研磨。D. 流紋岩。F. 3/4。H. 覆土中。
3	龍泉窯系 青磁碗	A. 高台部径(5.4)。B. ロクロ成形。高台部削り出し。C. 内外面回転ナデ。底部外面ナデ。D. 白色粒。E. 内外一淡緑色、内一淡灰色。F. 高台部1/4。G. 内外面輪軸。H. 覆土中。
4	かわらけ	A. 底部径4.4。B. ロクロ成形。C. 体部内外面回転ナデ。底部外面回転ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 外一淡褐色、内一淡褐色。F. 底部1/2。H. 覆土中。
5	板状鉄製品	A. 残存長3.9、残存幅3.0、厚さ0.3、重さ12.9g。B. 鍛造。D. 鉄製。F. 破片。H. 覆土中。

#### 4. 地下式坑

##### 第5号地下式坑（第90図、写真図版45・46）

G 2 地点調査区中央の南側寄りに位置し、重複する第271・272号住居跡を切っている。覆土上半に天井部の崩落土と考えられる多量のロームブロックが見られることや、規模や形態等から地下式坑と考えられる。

形態は、南北方向に長い隅丸長方形の室部に、方形の入口部が西側に2カ所並んで付く構造である。室部は、規模が南北方向5.29m、東西方向2.06mを測る。長軸方向は、N—6°—Wを向いており、



第90図 第5号地下式坑

## 第5号地下式坑土層説明

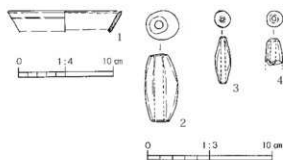
- 第1層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、浅間山系A軽石・ローム粒子・焼土粒子を含む。粘性に富む。）  
 第2層：暗褐色土層（径0.5～0.8cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子を少量含む。粘性に富む。）  
 第3層：暗褐色土層（ローム小ブロック・ローム粒子を多量、径1～1.5cmのロームブロックを少量含む。）  
 第4層：暗褐色土層（ローム小ブロック・ローム粒子を少量、径2cmのロームブロックを微量含む。）  
 第5層：暗褐色土層（ロームブロックを多量、ローム粒子を少量含む。）  
 第6層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を多量含む。粘性に富む。）  
 第7層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、焼土粒子を少量含む。粘性に富む。）  
 第8層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を多量含む。）  
 第9層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量含む。粘性に富む。）  
 第10層：暗褐色土層（7層に近いが、黒みが強い。）  
 第11層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ロームブロック・ローム粒子を含む。）  
 第12層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム小ブロック・ローム粒子を多量、径0.5～2cmのロームブロックを少量含む。）  
 第13層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を少量、ロームブロックを微量含む。）  
 第14層：黄褐色土層（径0.5～20cmのロームブロック・ローム粒子を主体に、暗褐色土を含む。）  
 第15層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、ロームブロックを少量含む。）  
 第16層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ロームブロック・ローム粒子を少量含む。）  
 第17層：褐色土層（暗褐色土・ロームブロック・ローム粒子の混合物。）  
 第18層：褐色土層（暗褐色土を主体に、径0.5～3cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。）  
 第19層：黄褐色土層（径0.5～5cmのロームブロック・ローム粒子を主体に、暗褐色土を含む。）  
 第20層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ロームブロック・ローム粒子を含む。）  
 第21層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を含む。粘性に富む。）  
 第22層：黄褐色土層（径0.5～10cmのロームブロック・ローム粒子を主体に、暗褐色土を含む。粘性に富み、しまりを有する。）  
 第23層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、径0.5～5cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。）

南北方向に流路をとる西側の第88号溝跡と並行している。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは125cmある。北側壁の中央付近には、幅40cm、高さ20cm、奥行き23cmの長方形ぎみの形態を呈する掘り込みが見られる（写真図版46）。底面は、広く平坦に作られている。底面の東西両側壁の中央付近には、黄白色粘土ブロックを貼り付けた間仕切り施設の基部と思われる張り出しが見

られる(写真図版46)。

入口部の竪坑は、室部の壁外にある。平面形は、97cm×80cmのコーナー部が丸みを持つ隅丸長方形を呈している。壁は、垂直ぎみに立ち上がり、確認面からの深さは50cmある。底面は、広く平坦に作られており、室部の底面より25cm~40cm程度高くなっている。

遺物は、覆土中から古代の土器片とともに磁器碗の小破片などが出土している。その他では、土錘が3点出土している。本地下式土坑の時期は、遺構の重複関係や出土遺物の様相から、中世後半以降と考えられる。



第91図 第5号地下式坑出土遺物

第45表 第5号地下式坑出土遺物観察表

1	磁器碗	A.口縁部碎(12.0). B.ロウロ成形. C.口縁部内外面回転ナデ. D.白色粒. E.内外一淡灰白色. F.口縁部1/6. G.内外面施軸. H.覆土中.
2	土錘	A.長さ5.3、最大幅2.6、重さ33.1g. B.手握ね. C.外面ナデ. D.白色粒. E.外一淡燈褐色. F.完形. H.覆土中.
3	土錘	A.長さ3.7、最大幅1.3、重さ3.9g. B.手握ね. C.外面ナデ. D.白色粒. E.外一淡褐色. F.完形. H.覆土中.
4	土錘	A.残存長2.1、最大幅1.3、重さ4.0g. B.手握ね. C.外面ナデ. D.赤色粒、白色粒. E.外一暗茶褐色. F.1/3. H.覆土中.

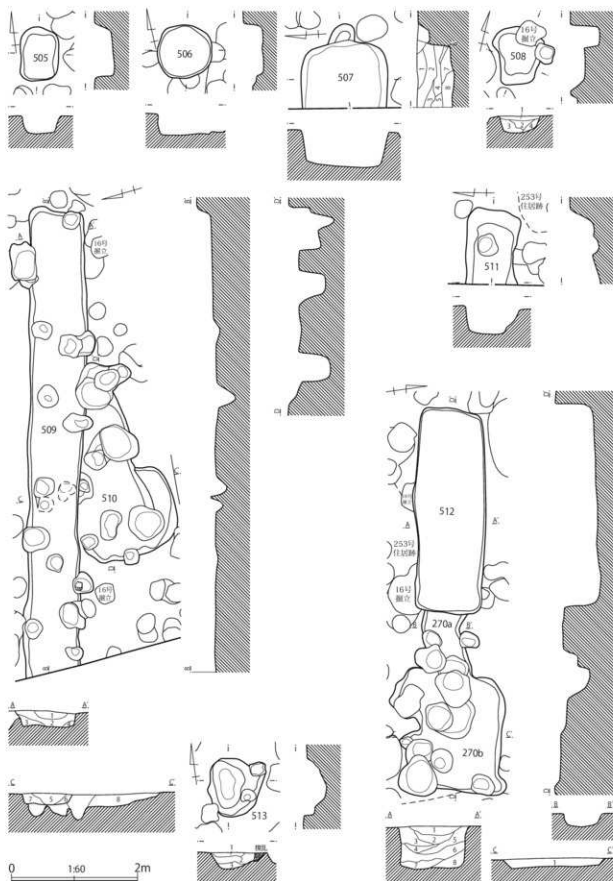
## 5. 土 坑

第46表 G 2 地点土坑一覧表

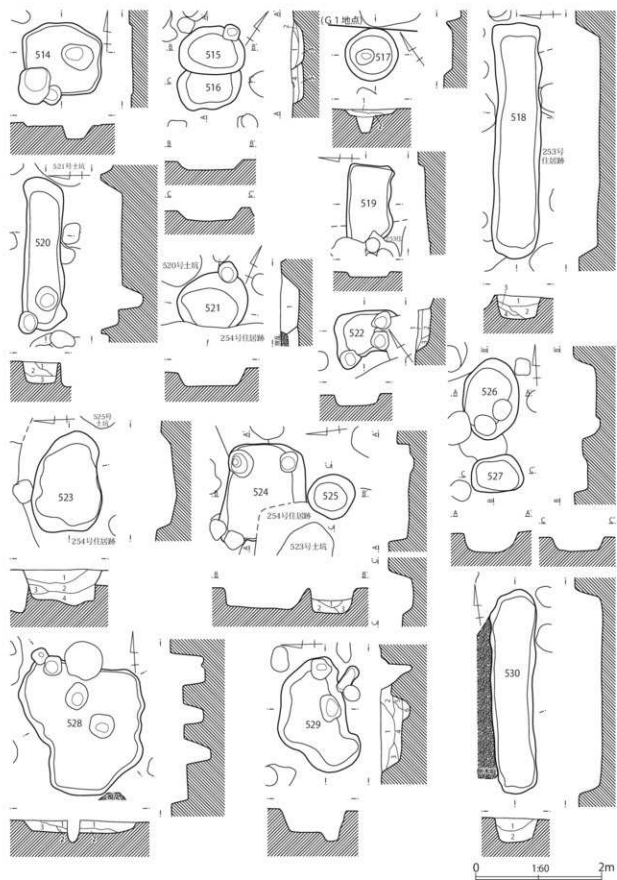
番号	平面形	規模	深さ	出土遺物	時期	備考
270a	不明	(69)×60	21	遺物なし	不明	
270b	不整形	186×183	15	遺物なし	不明	253住を切る。
505	隅丸長方形	84×60	33	土師器1片	不明	
506	円形	86×84	34	土師器片少量	平安以降	
507	不明	141×(105)	60	土師器片多量	平安以降	
508	不整形	93×84	27	遺物なし	中世以降	16掘立を切る。
509	(隅丸長方形)	(738)×93	28	土師器片多数、陶器1片、銭貨(渡来銭)	江戸以降	SK510を切る。
510	不整形	(240)×(159)	24	土師器片少量	平安以降	SK509に切られる。
511	不明	(120)×84	45	土師器片少量	奈良以降	
512	長方形	321×116	72	土師器片多量、須恵器片少量	江戸以降	253住・16掘立を切る。
513	不整形	90×87	36	遺物なし	不明	
514	隅丸長方形	123×108	6	遺物なし	不明	
515	楕円形	105×75	18	土師器片少量	平安以降	SK516を切る。
516	(不整形円形)	99×60	19	土師器片多量	平安以降	SK515に切られる。

517	円形	84×84	14	遺物なし	不明	
518	隅丸長方形	368×48	39	土師・須恵器片少量	平安以降	253住を切る。
519	(隅丸長方形)	(123)×45	15	遺物なし	不明	253住を切る。
520	不整長方形	240×66	36	土師・須恵器片少量	平安以降	
521	不整楕円形	111×(87)	29	土師・須恵器片少量	平安以降	254住を切る。
522	(隅丸長方形)	72×(66)	22	土師器片少量	平安以降	
523	不整楕円形	156×111	57	土師器片多量、刀子片	平安以降	254住を切る。
524	(不整長方形)	150×132	35	瀬戸美濃碗片1、土師器片少量	江戸以降	
525	不整円形	74×70	42	遺物なし	不明	254住を切る。
526	楕円形	128×88	36	土師・須恵器片少量	平安以降	
527	隅丸長方形	84×57	23	瀬戸美濃小皿片、土師器破片2	江戸以降	
528	不整形	212×192	27	土師・須恵器片少量	平安以降	
529	不整形	183×129	51	土師器片少量	不明	
530	不整長方形	324×72	43	遺物なし	不明	
531	不明	(120)×(72)	25	青磁片1、土師器片少量	14世紀頃	256a住を切る。
532	不整方形	90×84	39	土師器片少量	古墳後以降	221住を切る。
533	(不整楕円形)	84×66	30	土師器片少量	平安以降	256a住に切られている。
534	不整円形	90×88	9	土師器片少量	古墳後以降	
535	不整楕円形	210×102	36	土師・須恵器片少量	江戸以降	91・92溝を切る。
536	(隅丸長方形)	(144)×102	18	遺物なし	中世後以前	91溝に切られる。
537	隅丸長方形	90×40	78	遺物なし	中世後以前	88溝に切られる。
538	不整円形	108×106	18	遺物なし	江戸中以降	258住を切る。
539	不整形	148×86	48	須恵器片少量	平安以降	258住を切る。
540	不整円形	78×78	48	遺物なし	白鳳以降	257住を切る。
541	(不整楕円形)	192×(78)	42	土師器片少量	奈良以降	259住を切る。
542	隅丸長方形	108×54	22	遺物なし	不明	260住を切る。
543	不整楕円形	108×78	42	土師・須恵器少量	平安以降	266住を切る。
544	隅丸長方形	162×108	51	銭貨(波来銭)、土師器片少量	中世	
545	(円形)	114×(78)	39	土師器片多量	江戸中以降	261住を切る。
546	不整楕円形	117×105	35	在地産片口鉢、土師・須恵器片少量	江戸中以降	17掘立を切る。
547	不整円形	117×108	33	土師器片多量、須恵器片少量	平安以降	17掘立を切る。
548	(円形)	112×(104)	12	土師器片少量	古墳後以前	263・264住に切られる。
549	不整形	118×84	57	土師器片少量	古墳中以降	266住を切る。
550	隅丸長方形	261×156	17	土師器片多量	古墳後以降	266住を切る。
551	隅丸長方形	207×150	39	遺物なし	白鳳以降	266・273住を切る。

552	隅丸長方形	270×87	15	土師器片多量、須恵器片少量	平安以降	264・266住を切る。
553	隅丸長方形	(153)×(78)	27	骨粉、土師多量、須恵器片少量	江戸以降	272住・88溝を切る。
554	不整楕円形	105×60	9	土師器片少量	古墳中以降	265住を切る。
555	不整円形	126×120	24	土師器片少量	白鳳以降	274住を切る。
556	隅丸長方形	87×75	57	土師器片多量、須恵器片少量	古墳中期	274・275住に切られる。
557	不整形	111×48	42	遺物なし	不明	
558	不整形	81×51	47	遺物なし	不明	279住を切る。
559	不整楕円形	120×84	60	土師器片少量	古墳前以降	280住を切る。
560	不明	126×102	51	土師器片多量、須恵器片少量	奈良	283・285住を切り、SK561に切られる。
561	不整楕円形	168×123	54	土師器片少量	奈良	229・283・285住・SK560を切る。
562	不明	(84)×(81)	12	遺物なし	奈良以降	283・285住を切る。
563	楕円形	120×96	60	土師器片多量	江戸中以降	228住を切る。
564	(隅丸長方形)	(270)×84	30	土師器片少量	白鳳以降	290住を切る。
565	不整長方形	168×135	33	土師器片少量	白鳳以降	290住を切る。
566	不整形	144×102	33	土師器片多量	平安以降	227住を切る。
567	不整形	285×156	21	遺物なし	不明	
568	不整形	90×69	17	土師器片多量	白鳳以降	
569	不整形	258×135	71	ナイフ形石器、土師器片少量	江戸以降	SK571・572を切る。
570	不整長方形	150×108	16	土師器片多量	白鳳以降	227住を切り、SK571に切られる。
571	(隅丸長方形)	(714)×156	45	土師器片多量	江戸以降	227住・SK570を切り、SK569に切られる。
572	不明	69×54	15	土師器片多量	江戸以降	
573	不整形	210×120	54	在地産片口鉢、土師器片多量	江戸以降	SK574を切る。
574	不整形	168×78	27	土師・須恵器片少量	古墳後以降	295住を切り、SK573に切られる。
575	不整楕円形	96×57	78	土師器片多量	古墳後以降	
576	不整円形	87×85	102	土師器片少量	奈良以降	292住を切る。
577	(隅丸長方形)	(441)×132	36	土師器片多量、須恵器片少量	平安以降	295・296・297住を切る。
629				不明		
635				不明		

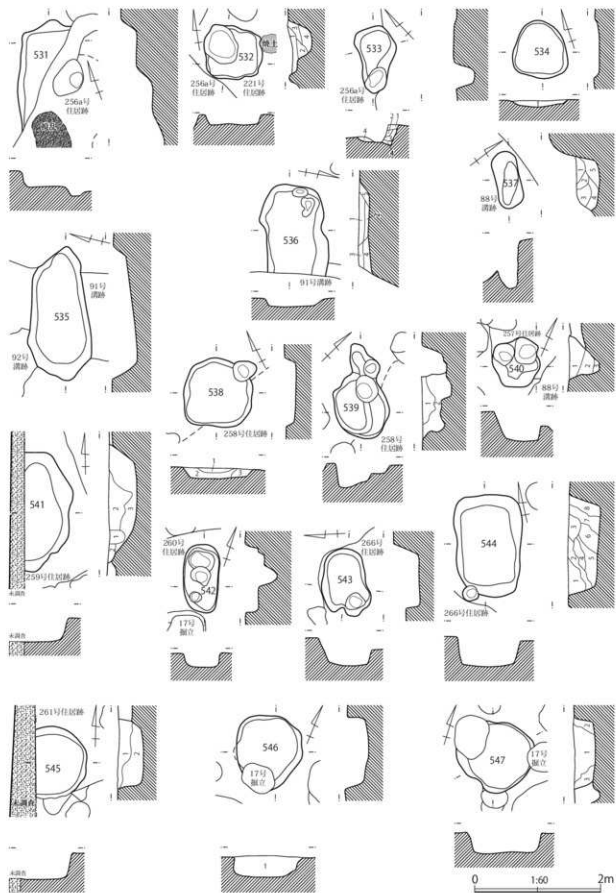


第92图 土坑(1)

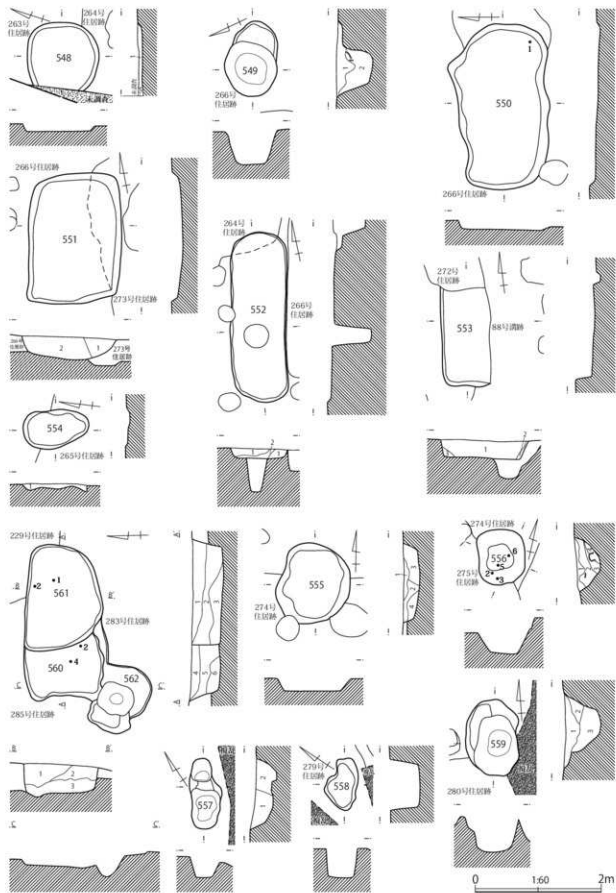


第93图 土坑(2)

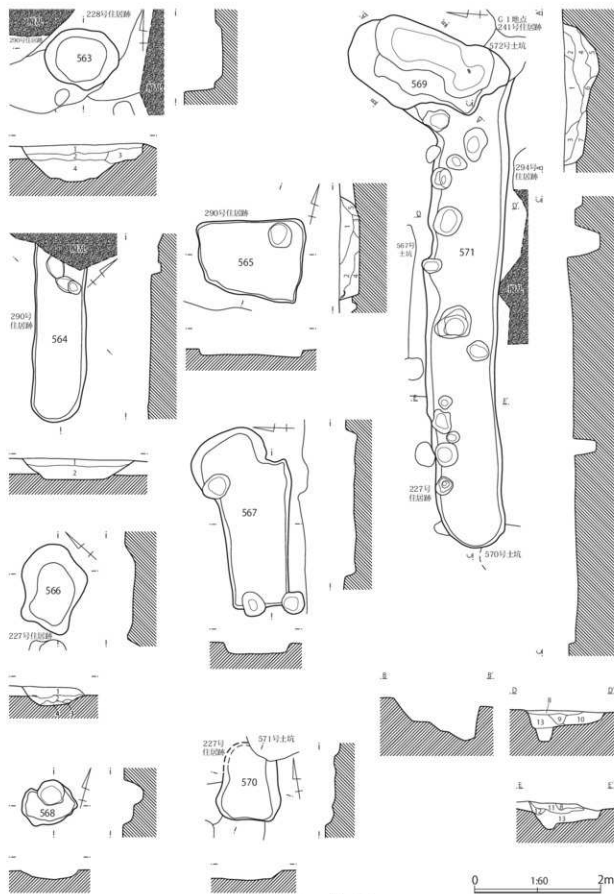




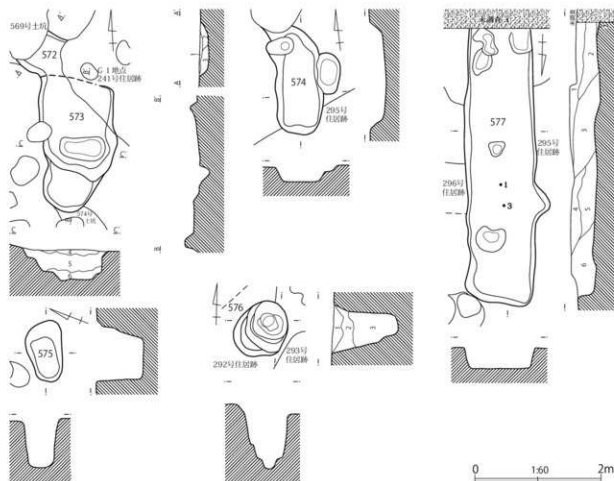
第94图 土坑(3)



第95图 土坑(4)



第96图 土坑(5)



第97図 土 坑 (6)

## 第507号土坑土層説明

第1層：暗褐色土層（ローム粒子・径0.5cmの焼土ブロックを少量、径0.5cmのロームブロック・炭化粒子・白色粒子を微量含む。）

第2層：暗褐色土層（径0.5～2cmの焼土ブロック・焼土粒子を少量、径0.5cmのロームブロック・ローム粒子・炭化粒子を微量含む。）

第3層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を少量含む。）

第4層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を微量含む。）

第5層：黄褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含む。）

第6層：黄褐色土層

第7層：黄褐色土層（径0.5～3cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含む。）

第8層：黄褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を少量、径0.5cmの焼土ブロックを微量含む。）

## 第508号土坑土層説明

第1層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子・白色粒子を少量、焼土粒子を微量含む。）

第2層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロックを少量、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。）

第3層：暗褐色土層（径0.5～3cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。）

第4層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロックを均一に、焼土粒子を微量含む。）

## 第509・510号土坑土層説明

第1層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を少量、鏝を微量含む。）

第2層：暗褐色土層（径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を均一に、焼土粒子・炭化物を微量含む。）

第3層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含む。）

第4層：暗褐色土層（ローム粒子を少量含む。）

第5層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロックを多量、ローム粒子・焼土ブロックを少量含む。）

- 第6層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。）  
 第7層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を微量含む。）  
 第8層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。しまりはない。）

#### 第512号土坑土層説明

- 第1層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子・焼土ブロックを少量、炭化物・白色粒子を微量含む。）  
 第2層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含む。）  
 第3層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、径0.5～2cmのロームブロックを少量、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。）  
 第4層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。）  
 第5層：暗褐色土層（径1～3cmのロームブロック・ローム粒子を多量、炭化物を少量、焼土粒子を微量含む。）  
 第6層：暗褐色土層（径1～3cmのロームブロックを均一に、ローム粒子を多量含む。）  
 第7層：暗褐色土層（径1cmのロームブロックを均一に、ローム粒子・焼土ブロック・焼土粒子・炭化物を微量含む。）  
 第8層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、径1cmのロームブロックを少量含む。）

#### 第270b号土坑土層説明

- 第1層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を均一に、焼土粒子・炭化粒子を少量含む。）

#### 第513号土坑土層説明

- 第1層：暗褐色土層（径1～3cmのロームブロック・ローム粒子を少量、炭化物を微量含む。）  
 第2層：暗褐色土層（暗褐色土・径1～4cmのロームブロックの混合土。ローム粒子を多量含む。）  
 第3層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土ブロックを微量含む。）

#### 第515・516号土坑土層説明

- 第1層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子・炭化物を微量含む。）  
 第2層：暗褐色土層（径1～2cmのロームブロックを多量、ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含む。）  
 第3層：暗褐色土層（径0.5～4cmのロームブロックを多量、ローム粒子・焼土粒子・炭化物を微量含む。）  
 第4層：暗褐色土層（径0.5～3cmのロームブロックを多量、ローム粒子・焼土粒子・炭化物を少量含む。）  
 第5層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、径0.5～3cmのロームブロックを少量、焼土粒子を微量含む。）

#### 第517号土坑土層説明

- 第1層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を少量、白色粒子を微量含む。）  
 第2層：暗褐色土層（径1～3cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子・白色粒子を微量含む。）

#### 第518号土坑土層説明

- 第1層：暗褐色土層（径1cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含む。）  
 第2層：暗褐色土層（径2～4cmのロームブロック・ローム粒子の混合土。焼土粒子を微量含む。）  
 第3層：暗褐色土層（1層に近いが、ロームブロックを微量含む。）  
 第4層：暗褐色土層（径1～2cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。）

#### 第520号土坑土層説明

- 第1層：暗褐色土層（暗褐色土・径1～3cmのロームブロックの混合土。ローム粒子・焼土粒子を少量含む。）  
 第2層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。）  
 第3層：暗褐色土層（径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。）

#### 第521号土坑土層説明

- 第1層：暗褐色土層（暗褐色土・径0.5～5cmのロームブロックの混合土。ローム粒子を多量、焼土粒子を少量含む。）

#### 第522号土坑土層説明

- 第1層：暗褐色土層（白色粒子を多量、ロームブロック・ローム粒子を少量含む。）  
 第2層：暗褐色土層（ロームブロックを多量、焼土粒子・炭化物を少量含む。）  
 第3層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含む。）

#### 第523号土坑土層説明

- 第1層：暗褐色土層（径0.5～2cmのロームブロックを多量、ローム粒子・白色粒子を少量、焼土粒子を少量含む。）  
 第2層：暗褐色土層（径0.5～3cmのロームブロックを多量、ローム粒子を少量、焼土粒子・白色粒子を微量含む。）  
 第3層：暗褐色土層（暗褐色土・径2～3cmの混合土。焼土粒子・白色粒子を微量含む。）

第4層：暗褐色土層 (径0.5～2 cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子・粘土粒子を微量含む。)

#### 第524・525号土坑土層説明

第1層：暗褐色土層 (ローム粒子を多量、径0.5cmのロームブロックを少量、焼土粒子・白色粒子を微量含む。)

第2層：暗褐色土層 (径0.5～1 cmのロームブロックを少量、ローム粒子・炭化物・白色粒子を微量含む。)

第3層：暗褐色土層 (暗褐色土・径0.5～2 cmのロームブロックの混合土。)

#### 第528号土坑土層説明

第1層：暗褐色土層 (径0.5～2 cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子・白色粒子を微量含む。)

第2層：暗褐色土層 (径1 cmのロームブロック・ローム粒子を少量、小礫を微量含む。)

第3層：暗褐色土層 (径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を均一に、白色粒子を少量、炭化物を微量含む。)

#### 第529号土坑土層説明

第1層：暗褐色土層 (径0.5～3 cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子・炭化物粒子・白色粒子を微量含む。)

第2層：暗褐色土層 (径2 cmのロームブロックを多量、ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含む。)

第3層：暗褐色土層 (径2 cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。)

第4層：黄褐色土層 (径0.5～3 cmのロームブロックを主体に、ローム粒子を多量、暗褐色土を少量含む。)

第5層：黄褐色土層 (ロームブロック・ローム粒子の混合土。)

第6層：黄褐色土層 (ロームブロック・ローム粒子の混合土。)

#### 第530号土坑土層説明

第1層：暗褐色土層 (径0.5～1 cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子・白色粒子を微量含む。)

第2層：暗褐色土層 (径0.5～2 cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子を微量含む。)

#### 第532号土坑土層説明

第1層：暗褐色土層 (径0.5cmのロームブロック・ローム粒子・焼土粒子を微量含む。)

第2層：暗褐色土層 (径0.5～1 cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含む。)

第3層：暗褐色土層 (2層に近いが、径0.5～1.5cmのロームブロックを含む。)

第4層：暗褐色土層 (径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子を微量含む。)

#### 第533号土坑土層説明

第1層：暗褐色土層 (ローム粒子を多量、焼土粒子を少量含む。)

第2層：暗褐色土層 (暗褐色土・径0.5～3 cmのロームブロックの混合土。)

第3層：暗褐色土層 (径0.5～1 cmのロームブロックを少量含む。)

第4層：暗褐色土層 (径0.5～3 cmのロームブロックを主体とする。)

#### 第534号土坑土層説明

第1層：暗褐色土層 (径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を少量、白色粒子を微量含む。)

#### 第536号土坑土層説明

第1層：褐色土層 (白色粒子を多量、径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。)

第2層：黄褐色土層 (径0.5～1 cmのロームブロック・ローム粒子の混合土。白色粒子を微量含む。)

第3層：黄褐色土層 (径0.5～1 cmのロームブロック・ローム粒子を多量、白色粒子を少量含む。)

第4層：暗褐色土層 (径0.5～2 cmのロームブロックを多量、ローム粒子を少量、白色粒子を微量含む。)

第5層：暗褐色土層 (径0.5～1 cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含む。)

#### 第537号土坑土層説明

第1層：暗褐色土層 (径0.5～1 cmのロームブロックを多量、ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含む。しまりはない。)

第2層：暗褐色土層 (径2～4 cmのロームブロックを主体に、ローム粒子を多量含む。しまりはない。)

第3層：暗褐色土層 (径2～4 cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。しまりはない。)

第4層：暗褐色土層 (径0.5～1 cmのロームブロック・ローム粒子を少量、褐色土を微量含む。しまりはない。)

第5層：暗褐色土層 (ロームブロックを主体に、ローム粒子を含む。しまりはない。)

#### 第538号土坑土層説明

第1層：暗褐色土層 (暗褐色土を主体に、浅間山系A軽石・ローム粒子を多量、焼土粒子を少量含む。)

第2層：暗褐色土層 (1層に近いが、ロームブロック・ローム粒子を多量含む。)

第3層：暗褐色土層（1層に近いが、暗褐色土層を多量含む。）

#### 第539号土坑土層説明

第1層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ロームブロック・ローム粒子を含む。）  
 第2層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、径2～3cmのロームブロック・ローム粒子を含む。）

#### 第540号土坑土層説明

第1層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、径0.5～1cmのロームブロックを少量、焼土粒子・白色粒子を微量含む。）  
 第2層：暗褐色土層（径1～2cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。）  
 第3層：暗褐色土層（径1～3cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。しまりはない。）

#### 第541号土坑土層説明

第1層：暗褐色土層（根穴。）  
 第2層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、径0.5～1cmのロームブロックを少量含む。）  
 第3層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、径0.5～5cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子を少量含む。）

#### 第544号土坑土層説明

第1層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、径0.5～5cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。）  
 第2層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ロームブロック・ローム粒子を多量含む。）  
 第3層：暗褐色土層（2層に近いが、径0.5～0.8cmのロームブロックを含む。）  
 第4層：暗褐色土層（1層に近いが、径3～5cmのロームブロックを微量含む。）  
 第5層：暗褐色土層（暗褐色土・ロームブロック・ローム粒子を均一に含む。）  
 第6層：暗褐色土層（径0.5～4cmのロームブロックを多量含む。）  
 第7層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、0.8～1.5cmのロームブロックを多量含む。）  
 第8層：暗褐色土層（暗褐色土・径0.5～3cmのロームブロック・ローム粒子の混合土。）

#### 第545号土坑土層説明

第1層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、浅間山系A軽石・ロームブロックを少量含む。）  
 第2層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、浅間山系A軽石・ロームブロック・ローム粒子を含む。）

#### 第546号土坑土層説明

第1層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ロームブロック・ローム粒子を多量、浅間山系A軽石を少量含む。）

#### 第547号土坑土層説明

第1層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を多量、炭化物を少量、径5cmのロームブロックを微量含む。）  
 第2層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、ロームブロックを少量含む。）  
 第3層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、径0.5～0.8cmのロームブロックを少量含む。）

#### 第548号土坑土層説明

第1層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、径0.5～3cmのロームブロックを少量含む。しまりはない。）

#### 第549号土坑土層説明

第1層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、径0.5～0.8cmのロームブロックを少量含む。）  
 第2層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、径0.5～1.5cmのロームブロック・ローム粒子を含む。）

#### 第551号土坑土層説明

第1層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム小ブロック・ローム粒子を多量、径0.5～2cmのロームブロック・焼土粒子を少量含む。）  
 第2層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム小ブロックを多量、径2～3cmのロームブロックを少量含む。）

#### 第552号土坑土層説明

第1層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、浅間山系A軽石・径0.5～0.8cmのロームブロック・ローム粒子を含む。）  
 第2層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を含む。）

**第553号土坑土層説明**

- 第1層：暗褐色土層 (暗褐色土を主体に、径0.5～3cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。)  
 第2層：褐色土層 (暗褐色土・ロームの混合土。)  
 第3層：褐色土層 (暗褐色土・ロームの混合土。)

**第554号土坑土層説明**

- 第1層：暗褐色土層 (暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、径0.5～1.5cmのロームブロックを少量含む。)

**第555号土坑土層説明**

- 第1層：暗褐色土層 (暗褐色土を主体に、径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。)  
 第2層：暗褐色土層 (暗褐色土を主体に、ロームブロック・ローム粒子を含む。)  
 第3層：暗褐色土層 (暗褐色土を主体に、径0.5～0.8cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。)  
 第4層：暗褐色土層 (暗褐色土を主体に、径0.5～0.8cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。)

**第556号土坑土層説明**

- 第1層：暗褐色土層 (暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、ロームブロックを少量含む。粘性に富み、しまりはない。)  
 第2層：暗褐色土層 (暗褐色土を主体に、径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。粘性に富み、しまりはない。)  
 第3層：暗褐色土層 (2層に近いが、ロームブロックを少量含む。粘性に富み、しまりはない。)  
 第4層：暗褐色土層 (暗褐色土を主体に、ロームブロック・ローム粒子を多量含む。粘性に富み、しまりはない。)

**第557号土坑土層説明**

- 第1層：暗褐色土層 (暗褐色土を主体に、径0.5～5cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。)  
 第2層：暗褐色土層 (ロームブロック・ローム粒子を多量含む。)

**第559号土坑土層説明**

- 第1層：暗褐色土層 (暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、ロームブロック・黒褐色土ブロックを少量含む。)  
 第2層：暗褐色土層 (暗褐色土を主体に、ローム粒子・黒褐色土ブロックを少量、ロームブロックを微量含む。)  
 第3層：暗褐色土層 (暗褐色土を主体に、径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を多量、黒褐色土ブロックを少量含む。)

**第560・561・562号土坑土層説明**

- 第1層：暗褐色土層 (暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、ロームブロックを少量含む。しまりを有する。)  
 第2層：暗褐色土層 (暗褐色土を主体に、ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子を多量、径0.8～1cmのロームブロックを微量含む。しまりを有する。)  
 第3層：暗褐色土層 (暗褐色土・径0.5～10cmのロームブロック・ローム粒子の混合土。しまりを有する。)  
 第4層：暗褐色土層 (暗褐色土を主体に、ロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子を少量含む。しまりを有する。)  
 第5層：暗褐色土層 (ロームブロック・ローム粒子を多量含む。しまりを有する。)  
 第6層：暗褐色土層 (暗褐色土・ロームの混合土。径0.5～10cmのロームブロックを微量含む。しまりを有する。)

**第563号土坑土層説明**

- 第1層：暗褐色土層 (暗褐色土を主体に、浅間山系A軽石・ローム小ブロック・ローム粒子を少量、径1～2cmのロームブロック・焼土粒子を微量含む。)  
 第2層：暗褐色土層 (暗褐色土を主体に、ロームブロックを多量、浅間山系A軽石・ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含む。)  
 第3層：黄褐色土層 (暗褐色土・ロームの混合土。ロームブロックを多量含む。)  
 第4層：黄褐色土層 (暗褐色土・ロームの混合土。径0.5～15cmのロームブロックを含む。)

**第564号土坑土層説明**

- 第1層：暗褐色土層 (暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、径0.5～0.8cmのロームブロックを少量、焼土粒子を微量含む。)  
 第2層：暗褐色土層 (暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、ロームブロック・焼土粒子を微量含む。)

**第565号土坑土層説明**

- 第1層：暗褐色土層 (暗褐色土を主体に、ロームブロック・ローム粒子を多量含む。)  
 第2層：暗褐色土層 (暗褐色土を主体に、径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。)  
 第3層：褐色土層 (暗褐色土・径0.5～4cmのロームブロック・ローム粒子の混合土。)  
 第4層：暗褐色土層 (暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、ロームブロックを少量含む。)  
 第5層：暗褐色土層 (暗褐色土を主体に、ロームブロックを多量、ローム粒子を少量含む。)



## 第566号土坑土層説明

- 第1層：暗褐色土層（暗褐色土・灰白色粘土の混合土。焼土ブロック・焼土粒子を少量含む。）  
 第2層：暗褐色土層（1層に近いが、少し黒みが強い。粘性に富む。）  
 第3層：暗褐色土層（暗褐色土・灰白色粘土の混合土。ロームブロック・ローム粒子を含む。粘性に富む。）  
 第4層：暗褐色土層（暗褐色土・灰白色粘土の混合土。ロームブロック・ローム粒子・焼土ブロック・焼土粒子を多量含む。）

## 第569・571号土坑土層説明

- 第1層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、径1cmのロームブロック・焼土粒子を微量含む。）  
 第2層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、黒褐色土を少量、径1cmのロームブロック・ローム粒子・焼土粒子を微量含む。）  
 第3層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ロームブロックを少量、焼土粒子を微量含む。）  
 第4層：黒褐色土層（暗褐色土・黒褐色土の混合土。ローム粒子を少量、ロームブロックを微量含む。粘性に富む。）  
 第5層：褐色土層（暗褐色土・黒褐色土・ロームの混合土。）  
 第6層：黄褐色土層（黄褐色土ロームを主体に、暗褐色土を含む。）  
 第7層：黄褐色土層（黄褐色土ロームを多量に、暗褐色土を少量含む。）  
 第8層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、浅間山系A軽石・ロームブロック・ローム粒子を含む。）  
 第9層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ロームブロックを多量含む。）  
 第10層：暗褐色土層（径0.5～0.8cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子を少量含む。）  
 第11層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ロームブロック・ローム粒子・焼土粒子を少量含む。）  
 第12層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子を少量含む。）  
 第13層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、径0.5～3cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子を少量含む。）

## 第572・573号土坑土層説明

- 第1層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、浅間山系A軽石・ロームブロック・ローム粒子を含む。）  
 第2層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、径0.5～5cmのロームブロック・ローム粒子を含む。）  
 第3層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ロームブロック・ローム粒子を多量含む。）  
 第4層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、浅間山系A軽石・ロームブロック・ローム粒子を含む。）  
 第5層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、径0.5～4cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。）  
 第6層：黄褐色土層（径0.5～10cmのロームブロック・ローム粒子を主体に、暗褐色土を含む。）

## 第576号土坑土層説明

- 第1層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、径0.5～0.8cmのロームブロック・焼土粒子を微量含む。）  
 第2層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子・ロームブロックを多量、焼土粒子を微量含む。）  
 第3層：褐色土層（暗褐色土・径0.5～3cmのロームブロック・ローム粒子の混合土。）

## 第577号土坑土層説明

- 第1層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、径1cmのロームブロックを少量含む。）  
 第2層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロックを少量、径1cmのロームブロックを微量含む。）  
 第3層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロックを多量、径5cmのロームブロックを微量含む。）  
 第4層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロックを多量含む。）  
 第5層：暗褐色土層（径1cmのロームブロック・ローム粒子を多量、径10cmのロームブロックを微量含む。）  
 第6層：暗褐色土層（ロームブロックを多量含む。）  
 第7層：暗褐色土層（径1～2cmのロームブロックを多量含む。）

## 第47表 第507号土坑出土遺物観察表

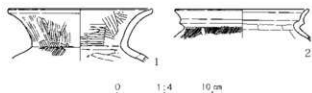
1	壺	A.口縁部径(15.3)。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ハケの後ミガキ。胴部外面ミガキ、内面篋ナデ。D.長石、白色粒。E.内外一淡赤褐色。F.口縁部破片。H.覆土中。
2	S字状口縁台付壺	A.底部径(14.3)。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ハケ、内面篋ナデ。D.片岩粒。E.内外一淡黄褐色。F.口縁部破片。H.覆土中。

## 第48表 第509号土坑出土遺物観察表

1	銭	A.直径2.5、厚さ0.1、重さ2.48g。B.鋳造。D.割製。F.完形。G.「□□元室」。H.覆土中。
---	---	--

## 第49表 第523号土坑出土遺物観察表

1	壺	A.口縁部径(19.3)。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篋ナデ。D.角四石、白色粒。E.内外一橙褐色。F.口縁部破片。H.覆土中。
2	刀子	A.残存長5.6、最大幅1.2、厚さ0.5、重さ7.10g。B.鍛造。D.鉄製。F.破片。H.覆土中。



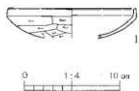
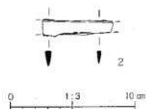
第507号土坑



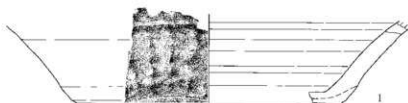
第509号土坑



第523号土坑



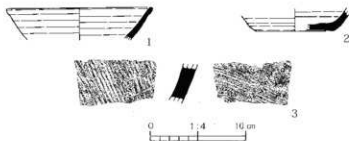
第541号土坑



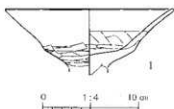
第531号土坑



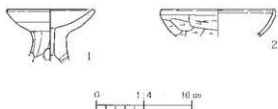
第544号土坑



第547号土坑

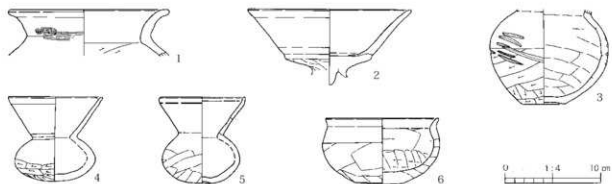


第549号土坑

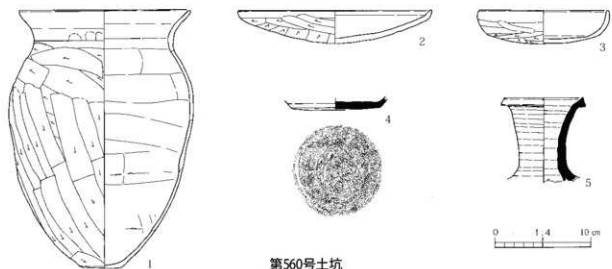


第550号土坑

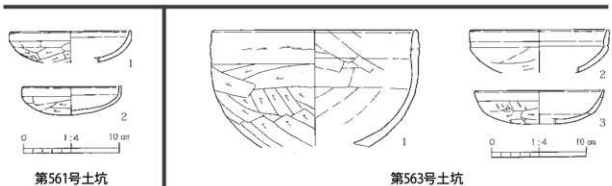
第98图 土坑出土遗物(1)



第556号土坑

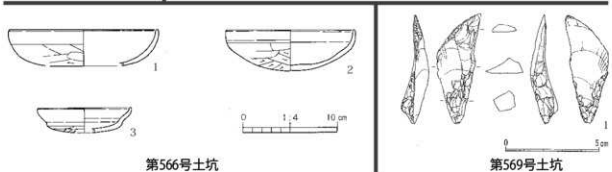


第560号土坑



第561号土坑

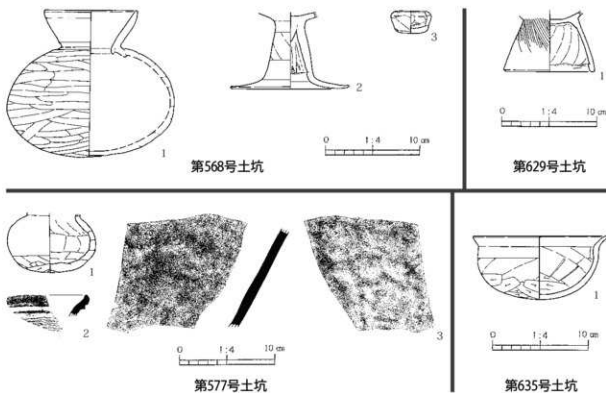
第563号土坑



第566号土坑

第569号土坑

第99图 土坑出土遗物(2)



第100図 土坑出土遺物(3)

第50表 第531号土坑出土遺物観察表

1	火鉢	A. 底部径(27.7)。B. 粘土紐積み上げ後ロクロ整形。C. 胴部内外面回転ナデ。底部外面ナデ。D. チャート、白色粒。E. 内外一黄灰褐色。F. 胴部破片。H. 覆土中。
2	青磁碗	A. 高台部径6.8。B. ロクロ成形。高台部削り出し。C. 内外面回転ナデの後体部施釉。D. 黒色粒。E. 外一灰オリーブ色、内一灰色。F. 底部1/3。H. 覆土中。

第51表 第541号土坑出土遺物観察表

1	杯	A. 口縁部径13.4。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ヨコナデ。D. 角閃石、白色粒。E. 外一明赤褐色、内一淡橙褐色。F. 口縁部破片。H. 覆土中。
---	---	--

第52表 第544号土坑出土遺物観察表

1	銭貨	A. 直径2.6、厚さ0.1、重さ3.21g。B. 鋳造。D. 銅製。F. 宍形。G. 「天聖元宝」北宋銭(初鑄1023年)。H. 覆土中。
---	----	--

第53表 第547号土坑出土遺物観察表

1	須恵器 杯	A. 口縁部径(15.5)。B. ロクロ成形。C. 口縁部内外面回転ナデ。D. 石英、角閃石、白色粒。E. 内外一灰色。F. 口縁部破片。H. 覆土中。
2	須恵器 杯	A. 底部径(8.1)。B. ロクロ成形。C. 体部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。D. 片岩粒、白色粒。E. 内外一灰黄褐色。F. 底部破片。H. 覆土中。
3	須恵器 甕	B. 粘土紐積み上げ後叩き。C. 胴部外面叩き(平行叩き目)、内面ヨコナデ。D. 石英。E. 内外一灰色。F. 胴部破片。H. 覆土中。

第54表 第549号土坑出土遺物観察表

1	高杯	A. 口縁部径(17.7)。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。杯部内外面造ナデ。D. 角閃石、白色粒。E. 内外一明赤褐色。F. 杯部2/3。H. 覆土中。
---	----	--

第55表 第550号土坑出土遺物観察表

1	器台	A. 口縁部径9.3。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。脚柱部内外面ナデ。D. 長石、白色粒。E. 内外一明赤褐色。F. 器受部のみ。H. 床面付近。
2	杯	A. 口縁部径(12.1)。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ヨコナデ。D. 角閃石、石英。E. 内外一橙褐色。F. 口縁部破片。H. 覆土中。

第56表 第556号土坑出土遺物観察表

1	甕	A.口縁部径(17.0)、B.粘土組織み上げ、C.口縁部外面ハケの後ヨコナデ、内面ヨコナデ、胴部外面ナデ、内面ケズリ、D.角閃石、赤色粒、白色粒、E.内外一淡褐色、F.口縁部破片、H.覆土中。
2	高 坏	A.口縁部径17.3、B.粘土組織み上げ、C.口縁部内外面ヨコナデ、坏部内外面ナデ、D.角閃石、白色粒、E.内外一明赤褐色、F.坏部3/4、H.覆土中。
3	小形 甕	A.底部径4.5、B.粘土組織み上げ、C.胴部内外面ナデの後下半ケズリ、内面ナデ、底部外面ケズリ、D.角閃石、白色粒、E.内外一淡褐色、F.口縁部欠損、H.覆土中。
4	小形直口甕	A.口縁部径10.0、器高8.9、B.粘土組織み上げ、C.口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面ナデの後下半ケズリ、内面ナデ、底部外面ケズリ、D.角閃石、白色粒、E.内外一明赤褐色、F.完形、H.覆土中。
5	小形直口甕	A.口縁部径9.1、器高9.1、底部径2.5、B.粘土組織み上げ、C.口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面ナデの後下半ケズリ、内面ナデ、底部外面ナデ、D.角閃石、チャート、白色粒、E.内外一赤褐色、F.完形、H.覆土中。
6	坏	A.口縁部径12.0、器高6.9、底部径4.8、B.粘土組織み上げ、C.口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面ナデの後下半ケズリ、内面ナデ、底部外面ナデ、D.石英、角閃石、チャート、赤色粒、E.内外一淡褐色、F.完形、H.覆土中。

第57表 第560号土坑出土遺物観察表

1	甕	A.口縁部径(18.0)、器高27.2、底部径4.3、B.粘土組織み上げ、C.口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面ケズリ、内面ナデ、底部外面ケズリ、D.角閃石、白色粒、E.内外一明赤褐色、F.1/2、H.覆土中。
2	甕	A.口縁部径20.6、器高3.5、B.粘土組織み上げ、C.口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ケズリ、内面ヨコナデ、D.角閃石、チャート、E.内外一橙褐色、F.3/4、H.覆土中。
3	坏	A.口縁部径(13.7)、器高3.0、B.粘土組織み上げ、C.口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ナデの後下半ケズリ、内面ヨコナデ、D.石英、白色粒、E.内外一淡褐色、F.1/2、H.覆土中。
4	須 恵 器	A.口縁部径9.4、B.ロクロ成形、C.体部内外面回転ナデ、底部外面回転系切り後外周ケズリ、D.白色針状、E.内外一灰白色、F.底部のみ、H.覆土中。
5	須 恵 器	A.口縁部径8.4、B.ロクロ成形、C.口縁部内外面回転ナデ、D.白色粒、E.内外一オリーブ灰色、F.口縁部のみ、G.口縁部内外面に自然輪が付着、H.覆土中。

第58表 第561号土坑出土遺物観察表

1	坏	A.口縁部径(12.4)、B.粘土組織み上げ、C.口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ナデの後下半ケズリ、内面ヨコナデ、D.角閃石、白色粒、E.内外一明赤褐色、F.1/5、H.覆土中。
2	坏	A.口縁部径10.4、器高3.0、B.粘土組織み上げ、C.口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ケズリ、内面ヨコナデ、D.角閃石、チャート、白色粒、E.内外一明赤褐色、F.1/2、H.覆土中。

第59表 第563号土坑出土遺物観察表

1	鉢	A.口縁部径(22.0)、B.粘土組織み上げ、C.口縁部外面ヨコナデ、体部外面ケズリ、内面ナデ、D.石英、角閃石、白色粒、E.内外一褐灰色、F.破片、H.覆土中。
2	坏	A.口縁部径(14.8)、B.粘土組織み上げ、C.口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ナデの後下半ケズリ、内面ヨコナデ、D.石英、角閃石、E.内外一淡褐色、F.破片、H.覆土中。
3	坏	A.口縁部径(13.8)、B.粘土組織み上げ、C.口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ナデの後下半ケズリ、内面ヨコナデ、D.角閃石、白色粒、E.内外一橙褐色、F.1/5、H.覆土中。

第60表 第566号土坑出土遺物観察表

1	坏	A.口縁部径(15.9)、B.粘土組織み上げ、C.口縁部外面ヨコナデ、体部外面ナデの後下半ケズリ、内面ヨコナデ、D.角閃石、白色粒、E.内外一淡褐色、F.破片、G.内面に黒色付着物あり、H.覆土中。
2	坏	A.口縁部径(13.8)、器高4.3、B.粘土組織み上げ、C.口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ナデの後下半ケズリ、内面ヨコナデ、D.石英、角閃石、E.内外一淡褐色、F.破片、H.覆土中。
3	坏	A.口縁部径(9.9)、B.粘土組織み上げ、C.口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ケズリ、内面ヨコナデ、D.角閃石、白色粒、E.内外一橙褐色、F.破片、H.覆土中。

第61表 第568号土坑出土遺物観察表

1	中形直口甕	A.口縁部径9.9、器高15.5、底部径2.3、B.粘土組織み上げ、C.口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面ナデ、内面ナデ、D.角閃石、チャート、白色粒、E.内外一赤褐色、F.4/5、H.覆土中。
2	高 坏	A.脚端部径(12.6)、B.粘土組織み上げ、C.脚柱部外面ナデ、内面絞り目を残す、脚端部内外面ヨコナデ、D.チャート、白色粒、E.外一橙褐色、内一淡褐色、F.脚部のみ、H.覆土中。
3	小形土器	A.口縁部径(3.1)、器高2.3、底部径(3.3)、B.手捏ね、C.外面ナデ、内面指ナデ、D.白色粒、E.内外一淡赤褐色、F.1/3、H.覆土中。

第62表 第569号土坑出土遺物観察表

1	ナイフ形石	A.長さ5.8、最大幅2.3、厚さ1.45、重さ8.12g、B.縦長剥片を素材とする、C.打面は除去され基部として整形される、刃部は明かな加工痕は認められず、使用痕とみられる微細離離が連続する、D.黒曜石(巻科産)、F.ほぼ完形、H.覆土中。
---	-------	---

第63表 第577号土坑出土遺物観察表

1	中形直口壺	A. 底径1.6。B. 粘土組織み上げ。C. 胴部外面篋ナデの後ケズリ、内面篋ナデ。底部外面ナデ。D. 片岩粒、角閃石、白色粒。E. 内外一明赤褐色。F. 胴部のみ。H. 覆土中。
2	須恵器	B. ロクロ成形。C. 口縁部内外面回転ナデ。外面に櫛波状文を施す。D. 石英。E. 外一灰褐色、内一灰色。F. 口縁部破片。H. 覆土中。
3	須恵器	B. 粘土組織み上げ後叩き。C. 胴部内外面ナデ。D. 石英、白色針状。E. 内外一灰色。F. 胴部破片。H. 覆土中。

第64表 第629号土坑出土遺物観察表

1	S字状口縁台付壺	A. 台端径9.5。B. 粘土組織み上げ。C. 台部外面ナデの後ハケ、内面指ナデ。D. 石英、長石、角閃石、チャート。E. 内外一淡黄褐色。F. 台部のみ。G. 台部内面に砂付着。H. 覆土中。
---	----------	---

第65表 第635号土坑出土遺物観察表

1	杯	A. 口縁部径14.0、器高6.5。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後下半ケズリ、内面篋ナデ。D. 石英、角閃石。E. 内外一明赤褐色。F. 完成。H. 覆土中。
---	---	---

## 6. 溝 跡

### 第88号溝跡 (第101図、写真図版50)

G 2 地点調査区中央部の西寄りに位置する。重複する第27・28号井戸跡、第553号土坑、第96号溝跡に切れ、第257・265・271・272・276号住居跡、第537号土坑を切っている。

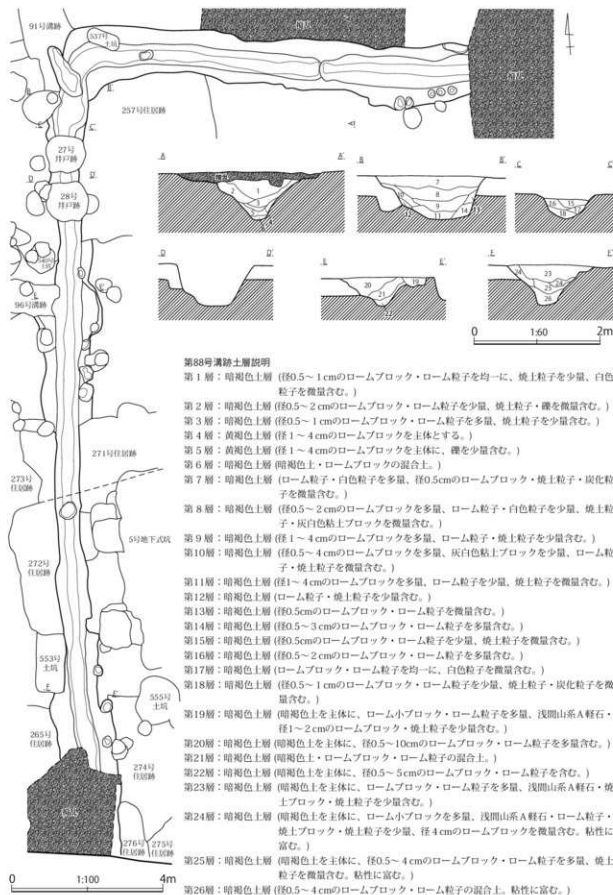
調査区内では、溝跡の北側は東西方向に直線的に伸び、西側はほぼ直角に方向を変えて南北方向に直線的な流路をとっている。本溝跡の東側は、攪乱を挟んで隣接する G 1 地点(松本2013)で検出されており、さらにその東側の G 3 地点(松本2015)や北堀新田遺跡 A 2 地点(松本2015)でもその延長部分が調査されている。本溝跡の南側は、道路を挟んで近接する久下前遺跡の C 3 地点(恋河内2018)では、その延長は検出されていないようである。北側の西端では、北に向かって第91号溝跡が伸びており、溝底面の高さは異なるが、同一の溝と推測される。この第91号溝跡は、北端で西に直角に曲がって(第93号溝跡) H 地点(本書第四章)の第101号溝跡に繋がるものと推測され、さらに南北方向に直線的に伸びる第102号溝跡に連続している。

規模は、北側の東西方向は、上幅が140cm前後・下幅が25cm前後の比較的均一な幅で、確認面からの深さは最高で75cmある。西側の南北方向は、上幅が130cm前後・下幅35cm～50cmの比較的均一な幅で、確認面からの深さは最高で65cmある。断面の形態は、いずれも箱葉形を呈している。壁は、直線的に緩やかに傾斜して立ち上がり、底面は狭く平坦である。覆土は、ロームブロック・ローム粒子・焼土粒子などを含む暗褐色土で、掘り返しの形跡は見られず、土層の堆積状況は自然堆積を示している。

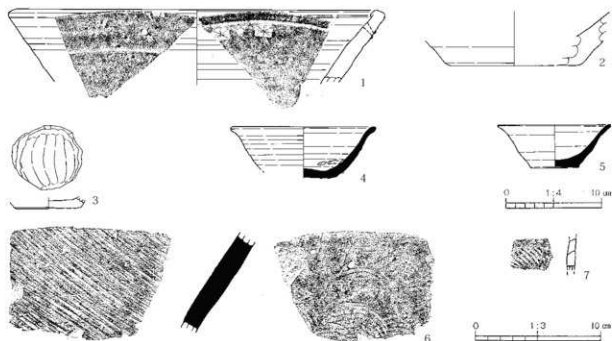
遺物は、古代から中世の土器破片が、覆土中から少量出土しただけである。本溝跡の時期は、遺構の重複関係や同一溝と考えられる他の溝の様相から、中世後期の15世紀後半以降と推測される。

第66表 第88号溝跡出土遺物観察表

1	火 鉢	A. 口縁部径(19.8)。B. 粘土組織み上げ後ロクロ整形。C. 口縁部内外面回転ナデの後、内面に押印を施す。D. 長石、角閃石、白色粒。E. 内外一灰黄色。F. 口縁部破片。G. 口縁部下に焼成前の穿孔あり。H. 覆土中。
2	在 地 産 片 口 鉢	A. 底径(14.7)。B. 粘土組織み上げ後ロクロ整形。C. 体部内外面回転ナデ。底部外面ナデ。D. 片岩粒、角閃石、白色粒。E. 内外一黄灰色。F. 底部破片。H. 覆土中。
3	かわらけ	A. 底径(7.1)。B. ロクロ成形。C. 体部内外面回転ナデ。底部外面回転系切り、内面一定方向の指ナデ。D. 雲母、チャート。E. 内外一淡黄褐色。F. 底部のみ。H. 覆土中。
4	須 恵 器 高 台 付 埴	A. 口縁部径(15.5)。B. ロクロ成形。高台部貼り付け。C. 口縁部内外面回転ナデ。底部外面回転系切り。D. 片岩粒、角閃石、チャート、白色粒。E. 内外一灰白色。F. 1/5。高台部剥離。H. 覆土中。
5	須 恵 器 杯	A. 口縁部径(11.9)、器高4.5、底径4.5。B. ロクロ成形。C. 口縁部内外面回転ナデ。底部外面回転系切り。D. 石英、白色粒。E. 内外一黄灰色。F. 1/4。H. 覆土中。



第101図 第88号溝跡



第102図 第88号溝跡出土遺物

6	須恵器	B.粘土組織み上げ後叩き。C.胴部外面叩き、内面当て道具痕(青海波文)を残す。D.片岩粒、長石。E.外一黒灰色、内一灰色。F.胴部破片。H.覆土中。
7	壺	B.粘土組織み上げ。C.胴部外面単節 R L 縄文。内面ナデ。D.白色粒。E.外一淡赤褐色、内一淡褐色。F.胴部破片。H.覆土中。

## 第91号溝跡 (第106図、写真図版50)

G 2 地点調査区西側の中央付近に位置する。重複する第535号土坑と第92号溝跡に切られ、第257号住居跡と第536号土坑を切っている。

流路は、第88号溝跡の北西コーナーから北に向かって7mほどほぼ直線的に伸び、そこから直角に西に曲がって第93号溝跡として調査区外に伸びている。その西側延長は、H地点(本書第IV章)の第101号溝跡に繋がるものと推測される。

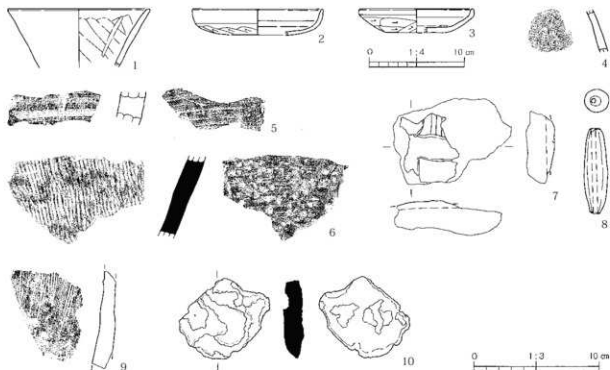
規模は、上幅が100cm、下幅が15cm~45cmの比較的均一な幅で、確認面からの深さは最高で58cmある。断面の形態は、箱葉研を呈している。壁は、直線的に緩やかに傾斜して立ち上がり、底面は狭く平坦である。覆土は、ロームブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・白色粒子などを含む暗褐色土を主体にしている。

遺物は、覆土中から古代の土器破片とともに鉄滓や土錘が出土している。本溝跡の時期は、連続する第88号溝跡や第93号溝跡と同一の溝跡であるため、それらと同じ中世後半の15世紀後半以降と考えられる。

第67表 第91号溝跡出土遺物観察表

1	中形直口壺	A.口縁部径(15.0)。B.粘土組織み上げ。C.口縁部外面ヨコナデ、内面籠ナデ。D.片岩粒、角閃石、白色粒。E.内外一橙褐色。F.口縁部破片。H.覆土中。
2	坏	A.口縁部径(13.9)。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後下半ケズリ、内面ヨコナデ。D.角閃石、白色粒。E.内外一淡黄褐色。F.破片。H.覆土中。
3	坏	A.口縁部径(12.2)、器高2.5、底部径6.2。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後下半ケズリ、内面ヨコナデ。底部外面ケズリ。D.角閃石、白色粒。E.内外一明褐色。F.1/5。H.覆土中。





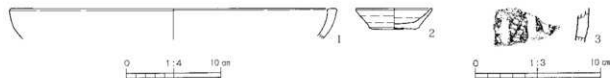
第103図 第91号溝跡出土遺物

4	甕	B. 粘土縦積み上げ。C. 胴部外面ハケの後ナデ、内面ナデ。D. 角閃石、チャート。E. 外—杓褐色、内—淡黄褐色。F. 胴部破片。G. 外面に焼成後の線刻あり。H. 覆土中。
5	平瓦	B. 一枚作り。C. 凹凸両面に糸切り痕を残す。D. 白色粒。E. 内外—灰色。F. 破片。G. 中世瓦。H. 覆土中。
6	須恵器	B. 粘土縦積み上げ後叩き。C. 胴部外面叩き(平行叩き目)、内面ナデ。D. 白色粒。E. 内外—灰色。F. 胴部破片。H. 覆土中。
7	形象埴輪	B. 粘土縦積み上げ。C. 外面ハケ、带状の粘土貼り付け。D. 片岩粒、石英。E. 外—赤褐色。F. 破片。H. 覆土中。
8	土錘	A. 長さ6.6、最大径2.9、重さ20.43g。B. 手握ね。C. ナデ。D. 石英、角閃石、白色粒。E. 外—淡黄褐色。F. 完形。H. 覆土中。
9	形象埴輪	B. 粘土縦積み上げ。C. 外面ハケ、内面ナデ。D. 片岩粒、角閃石、チャート。E. 内外—淡褐色。F. 破片。H. 覆土中。
10	鉄滓	A. 長さ6.4、最大幅6.3、厚さ1.5、重さ91.21g。F. 完形。H. 覆土中。

## 第92号溝跡(第106図、写真図版50)

G2地点調査区西側の中央付近に位置する。重複する第535号土坑に切られ、第91号溝跡を切っている。

流路は、やや北西～南東方向に向けて5mほど直線的な流路を取り、東西の両端は途切れている。規模は、上幅が75cm～95cm、下幅が50cmの比較的均一な幅で、確認面からの深さは最高で33cmある。断面の形態は、逆台形の箱堀を呈している。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、底面は広く平坦である。



第104図 第92号溝跡出土遺物

遺物は、覆土中から縄文時代や古代の土器破片とともに、中世の在産土器のかわらけや内耳鍋の破片が出土している。本溝跡の時期は、遺構の重複関係や出土遺物の様相から、中世後期の15世紀後半以降と推測される。

第68表 第92号溝跡出土遺物観察表

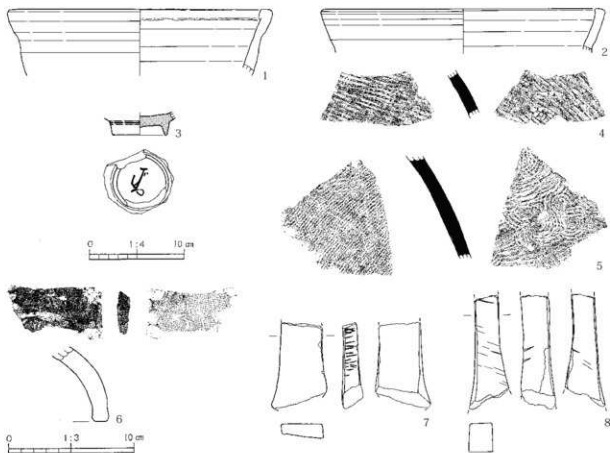
1	内 耳 鍋	A.口縁部径(34.6)。B.粘土粗積み上げ。C.口縁部外面ヨコナデ。D.角四石、チャート、白色粒。E.内外一淡褐色。F.口縁部破片。H.覆土中。
2	かわらけ	A.口縁部径(8.1)、器高2.2、底部径(5.3)。B.ロクロ成形。C.口縁部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。D.角四石。E.内外一淡黄棕色。F.1/3。H.覆土中。
3	深 鉢	B.粘土粗積み上げ。C.胴部外面縦位比線区面内に単節R I.縄文(縦乾がし)、内面ナデ。D.白色粒。E.内外一淡黄棕色。F.胴部破片。G.縄文時代中期加曾利E III式。H.覆土中。

## 第93号溝跡 (第106図、写真図版50)

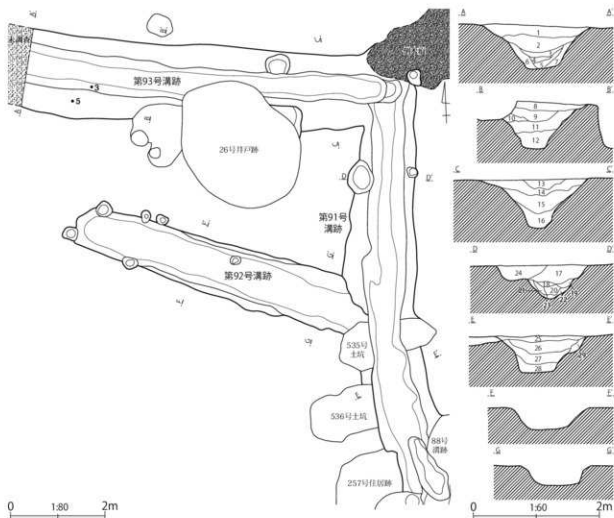
G 2地点調査区西側の中央付近に位置する。重複する第26号井戸跡に切られている。

流路は、同一の溝と考えられる第91号溝跡の北端から、西に向かってほぼ直角に曲がって直線的に延びている。本溝跡の西側は、攪乱によって切られているが、おそらくその西側延長はH地点(本書第IV章)の第101号溝跡に繋がるものと推測される。

規模は、上幅が120cm~130cm、下幅が30cm程度の比較的均一な幅で、確認面からの深さは最高で78cmある。断面の形態は、箱葉研を呈している。壁は、直線的に緩やかに傾斜して立ち上がり、底面は狭く平坦である。覆土は、ロームブロック・ローム粒子・小礫などを含む暗褐色土で、掘り返し



第105図 第93号溝跡出土遺物



第106図 第91・92・93号溝跡

## 第91・92・93号溝跡土層説明

- 第1層：暗褐色土層（白色粒子を多量、径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。）  
 第2層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を均一に、焼土粒子・炭化粒子・白色粒子・径3cmの礫を微量含む。）  
 第3層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を均一に、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。）  
 第4層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を均一に、焼土粒子を微量含む。）  
 第5層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を均一に、炭化粒子・白色粒子・礫を微量含む。）  
 第6層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を多量、礫を微量含む。）  
 第7層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子・礫を微量含む。）  
 第8層：暗褐色土層（ローム粒子・白色粒子を多量、径0.5cmのロームブロック・焼土粒子を微量含む。）  
 第9層：暗褐色土層（ローム粒子を少量、焼土粒子・白色粒子・礫を微量含む。）  
 第10層：暗褐色土層（ローム粒子を少量、径0.5cmのロームブロック・焼土粒子を微量含む。）  
 第11層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロックを均一に、ローム粒子を少量、焼土粒子・礫を微量含む。）  
 第12層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を均一に、焼土粒子・礫を微量含む。）  
 第13層：暗褐色土層（白色粒子を多量、径0.5cmのロームブロック・ローム粒子・焼土粒子を少量含む。）  
 第14層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子・白色粒子を均一に、焼土粒子・礫を微量含む。）  
 第15層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を均一に、焼土粒子を少量、礫を微量含む。）  
 第16層：暗褐色土層（径0.5のロームブロック・ローム粒子を多量、礫を少量含む。）  
 第17層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を均一に、焼土粒子・暗褐色土粒子・白色粒子を微量含む。）  
 第18層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を均一に、焼土粒子を微量含む。）  
 第19層：暗褐色土層（径1cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。）  
 第20層：暗褐色土層（径0.5～3cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。）

- 第21層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子・焼土粒子を少量含む。）  
 第22層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。）  
 第23層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を微量含む。）  
 第24層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子・焼土ブロックを多量、白色粒子・礫を微量含む。）  
 第25層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・白色粒子を少量、ローム粒子・焼土粒子を微量含む。）  
 第26層：暗褐色土層（径0.5～2cmのロームブロックを多量、ローム粒子を少量、焼土粒子・炭化粒子・白色粒子を微量含む。）  
 第27層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、径0.5～3cmのロームブロックを少量、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。）  
 第28層：暗褐色土層（径0.5～4cmのロームブロックを多量、径1cmの焼土ブロックを微量含む。）  
 第29層：暗褐色土層（径0.5～5cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子を微量含む。）

の形跡は見られず、土層の堆積状況は自然堆積を示している。

遺物は、覆土中から古代の土器片とともに、中世の丸瓦や砥石の破片が出土している。本溝跡の時期は、遺構の重複関係や出土遺物の様相から、中世後期の15世紀後半以降と推測される。

第69表 第93号溝跡出土遺物観察表

1	在 地 産 片 口 跡	A.口縁部径(28.2)。B.粘土組織み上げ後ロクロ整形。C.口縁部内外面ヨコナデ。D.角閃石、白色粒。 E.外一淡橙褐色、内一灰黄色。F.口縁部破片。G.還元不良。外面に凝附着。H.覆土中。
2	内 耳 鍋	A.口縁部径(30.1)。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。D.チャート、白色粒。E.内外一灰色。 F.口縁部破片。G.外面に凝附着。H.覆土中。
3	青 磁 埴	A.高台部径5.8。B.ロクロ成形。C.内外面回転ナデ。D.黒色粒。E.外一灰白色、内一灰オリーブ色。 F.底部のみ。G.底部外面に墨書あり。H.覆土中。
4	須 恵 器 費	B.粘土組織み上げ後叩き。C.胴部外面叩き(平行叩き目)、内面当て道具痕を残す。D.白色粒。E.外一黒灰色、 内一灰色。F.胴部破片。H.覆土中。
5	須 恵 器 費	B.粘土組織み上げ後叩き。C.胴部外面叩き(平行叩き目)、内面当て道具痕(青海波文)を残す。D.白色粒。 E.外一黒灰色、内一灰色。F.胴部破片。H.覆土中。
6	丸 瓦	A.厚さ1.4。B.叩き。C.凸面叩きの後ナデ。D.凸面布目疔痕を残す。D.チャート、白色粒。E.凸面一黄灰色、 凹面一灰色。F.破片。H.覆土中。
7	砥 石	A.残存長6.8、最大幅3.9、最大厚1.2。C.各面ともよく磨れている。D.流紋岩。F.破片。H.覆土中。
8	砥 石	A.残存長9.0、最大幅2.6、最大厚2.3。C.各面ともよく磨れている。D.流紋岩。F.両端部欠損。H.覆土中。

#### 第94号溝跡（第107図）

G 2地点調査区西側の西端に位置する。重複する第253号住居跡を切っている。

流路は、直線的にほぼ東西方向に向いているが、溝の東側は途切れている。溝の西側については、調査区外にさらに延びているが、道路を挟んで西側に近接するH地点(本書第四章)ではその延長は検出されていない。

規模は、調査区内では長さ8.55mまで検出されており、幅は100cm～180cmの比較的均一な幅で、確認面からの深さは65cmある。断面の形態は、逆台形を呈している。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、底面は広く平坦である。覆土は、ロームブロックやローム粒子を含む暗褐色土で、堆積状況は概ね自然堆積のようである。覆土上半には比較的大形の自然石が多く投げ込まれており、石白や板碑の破片なども出土している。

本溝跡は、溝の東側が途切れており、覆土も水が流れていたような形跡が見られないことから、土地の区画を目的として掘削された区画溝と考えられる。

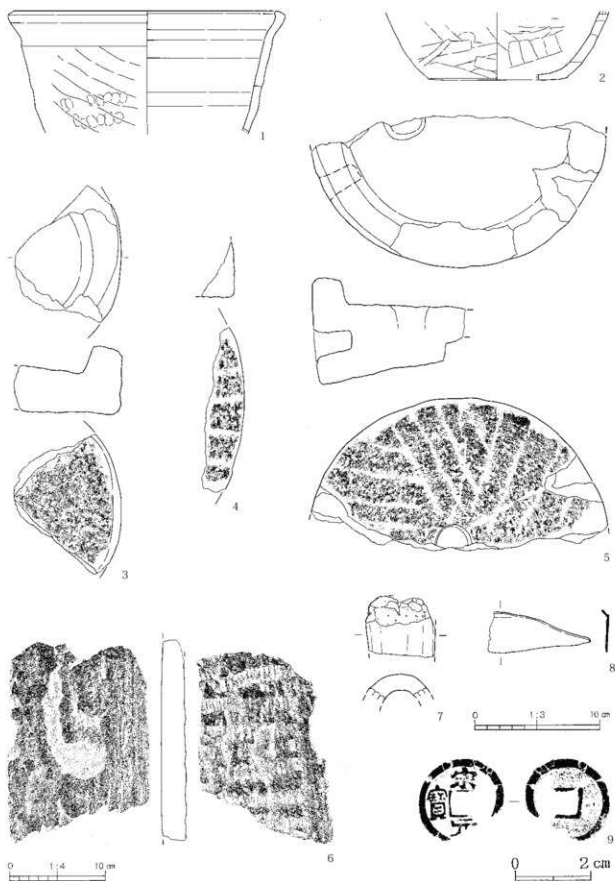
遺物は、古代の土器破片や中世以降の内耳鍋(No 1)、粉挽臼(No 3～5)、板碑(No 6)、羽口(No 7)などの破片、及び板状鉄製品の破片(No 8)や渡来銭の「宋元通宝」(No 9)などが、覆土中から出土している。本溝跡の時期は、遺構の重複関係や出土遺物の様相から、中世後半以降と考えられる。



第107図 第94号溝跡

第70表 第94号溝跡出土遺物観察表

1	内耳鍋	A.口縁部径(29.2)。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデ、内面ヨコナデ。D.片岩粒、角閃石。E.内外一灰黄色。F.口縁部破片。G.胴部外面に指頭圧痕を残す。H.覆土中。
2	内耳鍋	A.底部径(14.8)。B.粘土組織み上げ。C.胴部内外面ナデ。底部外面ナデ。D.石英、角閃石、白色粒。E.外一淡黄褐色、内一黄灰色。F.底部破片。H.覆土中。
3	粉換白(上白)	A.直径(25.8)、高さ7.2、重さ1.15kg。B.荒削りの後ケズリ整形。C.表面と側面研磨。D.安山岩。F.1/6。G.掃り目は摩滅のため不明瞭。H.覆土中。
4	粉換白(上白)	A.重さ0.26kg。B.荒削りの後ケズリ整形。C.側面研磨。D.安山岩。F.破片。G.掃り目は1角のみ残存。H.覆土中。
5	粉換白(上白)	A.直径(30.8)、高さ11.3、重さ5.48kg。B.荒削りの後ケズリ整形。C.表面と側面研磨。D.安山岩。F.1/2割。G.掃り目は6角と推測される。側面に方形の挽き木穴あり。H.覆土中。
6	板碑	A.残存長20.8、厚さ2.5、重さ1.48kg。B.板状に剥離後外形荒削り。C.表面研磨、裏面撃ケズリ。D.緑泥片岩。F.破片。H.覆土中。
7	羽口	A.残存長4.8、幅5.4、厚さ1.3。B.手捏ね。C.内外面ナデ。D.石英、白色粒。F.破片。G.外面上位に発泡痕顯著。内面赤色化。H.覆土中。
8	板状鉄製品	A.残存長6.0、幅3.2、厚さ1.3、重さ11.06g。B.鍛造。D.鉄製。F.破片。G.上端部は折れている。H.覆土中。
9	銭貨	A.直径2.3、厚さ0.1、重さ1.16g。B.铸造。D.割製。F.3/4。G.「宋元通宝」(初铸960年)宋銭。H.覆土中。



第108图 第94号溝跡出土遺物

## 第96号溝跡（第109図、写真図版50）

G 2 地点調査区西側の南側寄りに位置する。重複する第258号住居跡を切っている。流路は、東側の第88号溝跡から西に向かって直線的に伸び、西側は攪乱によって切られている。

規模は、第88号溝跡から7mほど伸びており、幅は80cm前後の均一な幅で、確認面からの深さは32cmある。断面の形態は、逆台形を呈している。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、底面は広く平坦である。覆土は、浅間山系A軽石やロームブロックを含む暗褐色土で、堆積状況は概ね自然堆積のようである。

本溝跡は、溝の西側が途切れており、覆土も水が流れていたような形跡が見られないことから、第88号溝跡の区画と関係した土地の区画を目的として掘削された区画溝と考えられる。

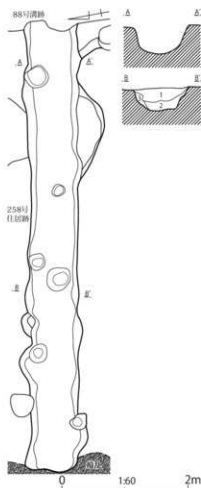
遺物は、縄文時代や古代の土器破片と、中世の内耳鍋の破片が、覆土中から出土しただけである。本溝跡の時期は、江戸時代中期の天明3年(1783年)に噴火した浅間山系A軽石を覆土中に含むことから、江戸時代中期後半以降と考えられる。

## 第96号溝跡土層説明

第1層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、浅間山系A軽石・ロームブロック・埴土粒子を少量含む。）

第2層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム小ブロック・ローム粒子を多量、浅間山系A軽石・埴土粒子を少量、径0.8～1cmのロームブロックを微量含む。）

第3層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子の混合土。）



第109図 第96号溝跡



第110図 第96号溝跡出土遺物

第71表 第96号溝跡出土遺物観察表

1	内 耳 鍋	B.粘土粗積み上げ後ロクロ整形。C.口縁部内外面回転ナデ。D.角閃石。E.内外一黄灰色。F.口縁部破片。H.覆土中。
2	深 鉢	A.底部径6.3。B.粘土粗積み上げ。C.胴部外面単節羽状縄文、内面は器表面剥落のため観察不能。D.片岩粒、石英。E.外一淡褐色、内一明赤褐色。F.底部のみ。G.弥生土器。H.覆土中。

## 7. G 2 地点調査区内出土遺物

久下東遺跡のG 2 地点で、遺構の帰属が不明なものや性格不明のビットから出土した遺物には、古墳時代前期から江戸時代のものが見られる(第111図)。

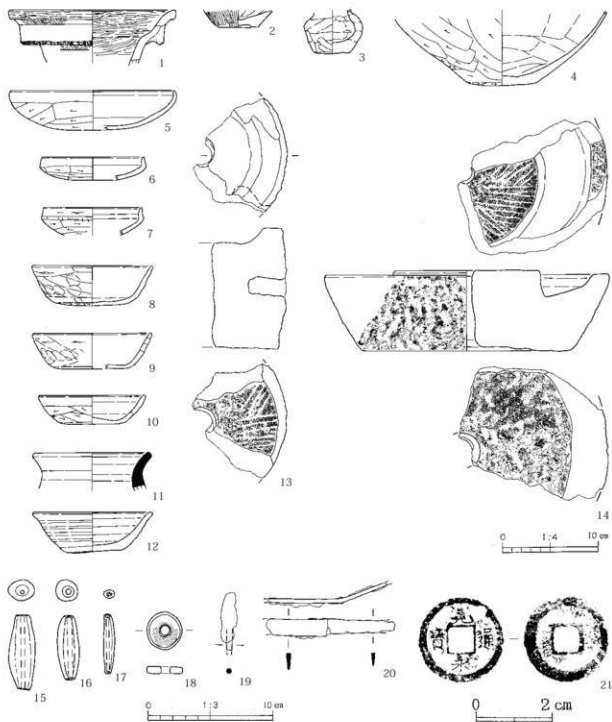
古墳時代前期の遺物は、No 1 の二重口縁壺の破片、No 2 の小型甕の底部破片、No 3 の小形土器の破片がある。

古墳時代後期の遺物は、No 7 の模倣坏がある。これは、口縁部径が10cm程度で口縁部が短い後期

末頃のものである。

白鳳時代の遺物は、No 5とNo 6の土師器環がある。No 5の環は、この時期に出現する内屈口縁環の中で、(大)・(中)・(小)に法量分化したもののうち、(大)の系譜に連なるものである。

奈良・平安時代の遺物は、No 4の胴張甕、No 8～No10の土師器環、No11の須恵器広口壺、No12の須恵器系の環がある。No 4の胴張甕とNo11の須恵器広口壺については、時期を明確にすることができないが、他のNo 8～No10は平安時代前期中頃、No12は平安時代前期末～中期前半頃と推測される。



第111図 G 2地点調査区内出土遺物



中世～近世の遺物は、No13とNo14の茶臼の上臼と下臼の破片、No18の土製品、No21の銭貨がある。茶臼は、おそらくその形態から15世紀後半以降と考えられる。茶臼の破片は、本遺跡や隣接する久下前遺跡でもいくつか出土しているが、No14の下臼は、当地域で一般的によく見られるH地点の第27号溝跡出土のNo8(第283図)や第104号溝跡出土のNo1(第292図)などの形態と違って、受皿部の外側が皿状に削り込まれずに、底部まで直線的になっている。No18の有孔円盤形土製品は、その形状や調整手法から近世以降の可能性が高いと思われるもので、その片面に漆が油分が付着している。No21の銭貨は、江戸時代のいわゆる「寛永通宝」である。字体から見て17世紀末以降に鑄造された通称「新寛永」と呼ばれているものである。

この他、大きさの異なる土錘(No15～No17)や、断面円形の棒状(No19)や刀子状(No20)の鉄製品が出土している。土錘については古代の可能性が高いと思われるが、鉄製品については時期の特定は困難である。

第72表 G2地点調査区内出土土物観察表

1	二重口縁壺	A.口縁部径(17.2)、B.粘土組織み上げ、C.口縁部内外面ハケの後ミガキ、口縁部外面下端にキザミ、D.石英、白色粒、E.内外一淡赤褐色、F.口縁部破片、H.Pr1019。
2	甕	A.底部径4.5、B.粘土組織み上げ、C.胴部外面ハケ、内面髹ナデ、底部外面ナデ、D.角閃石、E.内外一淡黄褐色、F.底部のみ、H.調査区内。
3	小形土器	A.底部径3.8、B.粘土組織み上げ、C.胴部外面髹ナデ、内面指ナデ、底部外面ナデ、D.雲母、白色粒、E.内外一明赤褐色、F.口縁部欠損、G.頸部内面に指頭圧痕を残す、H.調査区内。
4	胴張甕	A.底部径7.4、B.粘土組織み上げ、C.胴部外面ケズリ、内面髹ナデ、底部外面ケズリ、D.片岩粒、角閃石、白色粒、E.外一明赤褐色、内一橙褐色、F.下半3/4、H.調査区内。
5	坏	A.口縁部径(17.3)、器高4.2、B.粘土組織み上げ、C.口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ケズリ、内面ヨコナデ、D.角閃石、白色粒、E.内外一橙褐色、F.1/5、H.調査区内。
6	坏	A.口縁部径(10.8)、B.粘土組織み上げ、C.口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ケズリ、内面ヨコナデ、D.角閃石、白色粒、E.内外一橙褐色、F.破片、H.調査区内。
7	模倣坏	A.口縁部径(10.5)、B.粘土組織み上げ、C.口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ケズリ、内面ヨコナデ、D.白色粒、E.内外一橙褐色、F.破片、H.調査区内。
8	坏	A.口縁部径(12.8)、器高4.3、底部径(7.8)、B.粘土組織み上げ、C.口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ナデ、内面ヨコナデ、底部外面ケズリ、D.角閃石、白色粒、E.内外一橙褐色、F.1/4、G.体部外面に指頭圧痕を残す、H.調査区内。
9	坏	A.口縁部径(11.3)、器高3.7、底部径7.0、B.粘土組織み上げ、C.口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ナデ、内面ヨコナデ、底部外面ケズリ、D.角閃石、赤色粒、E.内外一淡褐色、F.1/3、G.体部外面に指頭圧痕を残す、H.調査区内。
10	坏	A.口縁部径(11.3)、器高3.1、底部径(7.0)、B.粘土組織み上げ、C.口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ケズリ、内面ヨコナデ、底部外面ケズリ、D.角閃石、赤色粒、E.内外一橙褐色、F.1/4、H.Pr486。
11	須恵器 広口壺	A.口縁部径(12.5)、B.ロクロ成形、C.口縁部内外面回転ナデ、D.白色粒、E.内外一灰色、F.口縁部破片、H.Pr377。
12	坏	A.口縁部径12.6、器高4.3、底部径5.7、B.ロクロ成形、C.口縁部内外面回転ナデ、底部外面回転糸切り、D.片岩粒、角閃石、チャート、E.内外一淡橙褐色、F.4/5、G.酸化焙焼成、H.Pr490。
13	茶臼 (上臼)	A.直径(18.5)、高さ12.7、重さ1.39kg、B.荒削りの後ケズリ、C.上下面と側面研磨、D.安山岩、F.1/6、G.下面の掻目は2角が残存、H.調査区内。
14	茶臼 (下臼)	A.直径(30.0)、高さ8.5、重さ1.68kg、B.荒削りの後ケズリ、C.上下面と側面研磨、D.安山岩、F.1/6、G.上面の掻目は3角が残存、H.Pr606。
15	土錘	A.長さ5.8、最大径1.8、重さ20.33g、B.手捏ね、C.ナデ、D.角閃石、白色粒、E.外一淡黄褐色、F.完形、H.Pr634。
16	土錘	A.長さ4.9、最大径1.7、重さ13.72g、B.手捏ね、C.ナデ、D.角閃石、白色粒、E.外一淡橙褐色、F.完形、H.調査区内。
17	土錘	A.長さ4.6、最大径0.9、重さ2.59g、B.手捏ね、C.ナデ、D.白色粒、E.外一淡褐色、F.完形、H.Pr622。
18	有孔円盤形 土製品	A.長さ2.8、厚さ0.6、孔径0.7、重さ5.90g、B.手捏ね、C.ナデ、D.白色粒、E.外一淡褐色、F.完形、G.上面に漆付着、H.Pr629。
19	棒状鉄製品	A.長さ4.6、幅0.5、厚さ0.4、重さ6.58g、B.鍛造、D.鉄製、F.破片、H.調査区内。
20	刀子	A.残存長10.2、幅1.4、厚さ0.4、重さ11.41g、B.鍛造、D.鉄製、F.破片、H.Pr705。
21	銭貨	A.直径2.2、厚さ0.1、重さ2.25g、B.鑄造、D.銅製、F.完形、G.「寛永通宝」新寛永(初鑄1697年)、H.調査区内。

## 第IV章 H地点の調査

### 第1節 H地点の概要

久下東遺跡のH地点は、第III章で報告したG2地点の西側に位置し、標高60mを測る微高地上の平坦部から北側緩斜面にあたる部分に立地している。北側にはD2地点(恋河内2016)が、西側にはF1地点(恋河内2012)と昭和58年(1983年)に発掘調査を実施した第1地点(増田1985)が隣接しており、道路を挟んだ南側には、久下前遺跡のG地点(未報告)が近接している。また、H地点の調査区内には、平成5年(1993年)に発掘調査を実施した第2地点(太田2005)を含んでいる。

H地点の調査区内から検出された遺構は、古代の古墳時代前期から近世の江戸時代の長期に渡るもので、竪穴式住居跡78軒、掘立柱建物跡8棟、井戸跡2基、土坑100基、溝跡16条である。



第112図 久下東遺跡H地点全体図

古墳時代の遺構は、前期～後期の竪穴式住居跡39軒(前期12・中期1・後期26)で、調査区のほぼ全域から密集して検出されている。

前期の遺構は、住居跡12軒(第326・336・340・346・347・348・349・380・381・383・384・391号住居跡)で、調査区の中央部から南東側にかけて分布している。時期は、前期後葉段階のものが主体である。住居の向きや炉の位置は多様であり、同時期同士の重複も多く見られる。この中の第326号住居跡は、規模が8m程度の比較的大形の住居に属する。

中期の遺構は、住居跡1軒(第389号住居跡)だけである。第389号住居跡は、カマドを伴う中期後半の住居跡であるが、カマドが住居の壁よりも内側にある初期カマドの一類型の形態を呈している。

後期の遺構は、住居跡26軒(第320・321・323・324・327・328・329・333・334・335・337・339・341・355・356b・357・368・369・370・373・374・377・378・379・388・392号住居跡)で、時期は後期後半～末頃のものである。これらの住居跡は、調査区の南西側半分を主体に分布しており、住居の向きを地形の等高線と直交する北東方向に向けるものが大半である。カマドの位置は、北東側壁にあるものが主体であるが、北西側・南東側・南西側に付設されるものも少数ながら見られる。

白鳳時代の遺構は、住居跡18軒(第16・18・195・322・330・331・332・338・345・356a・359・362・375・382・385・386・387・390号住居跡)と井戸跡1基(第33号井戸跡)である。住居跡は、古墳時代後期の住居跡と同じく、調査区の南西側半分を主体に分布し、住居の向きを北東方向に向けるものが大半である。カマドの位置も住居の北東側壁が主体であるが、南側壁以外の各壁に付設されるものも少数ながら見られる。

奈良時代の遺構は、住居跡5軒(第354・360・366・371・376号住居跡)と掘立柱建物跡1棟(第31号掘立柱建物跡)で、調査区の南側を主体に分布している。住居の向きは、北東方向2軒、北方向2軒、東方向1軒である。

平安時代の遺構は、住居跡14軒と掘立柱建物跡2棟と土坑5基で、時期は前期から中期前半頃までのものがある。

前期の遺構は、住居跡12軒(第342・343・350・351・352・353・358・361・364・365・367・372号住居跡)と掘立柱建物跡2棟(第32・33号掘立柱建物跡)と土坑5基で、調査区の南東側を主体に分布している。

中期の遺構は、住居跡2軒(第319・344号住居跡)で、調査区の中央部と北西側に散在して分布している。いずれも規模が3m～4mの隅丸方形を呈している。第344号住居跡は、カマドが住居の東側コーナー部に付設されており、当地域の竪穴式住居の終末的な形態に似ている。

中世の遺構は、掘立柱建物跡5棟(第26・27・28・29・30号掘立柱建物跡)、井戸跡1基(第34号井戸跡)、土坑15基、溝跡10条(第27・28ab・29・30・101・102・103・104・106・109号溝跡)で、時期は中世後期の15世紀以降のものが主体である。これらの遺構は、調査区北側の第30号溝跡や東側の第27・28・101・102号溝跡などの直線的な溝によって四角に区画された屋敷地の一つと考えられ、その屋敷地の中央付近に掘立柱建物群が密集している。また、土坑の中には5基の土坑墓があり、密集せずに建物群の周囲に散在した配置をとっている。これらは、南北方向に長軸を持つ隅丸長方形の形態で、埋葬姿勢はいずれも北頭位の横臥屈葬と推測される。全体的に遺物は少ないが、屋敷の居住者の階層性が窺える遺物として、第27号溝跡や第104号溝跡から茶臼の破片が出土しており注目される。

近世以降の遺構は、土坑26基だけである。

## 第2節 検出された遺構と遺物

### 1. 竪穴式住居跡

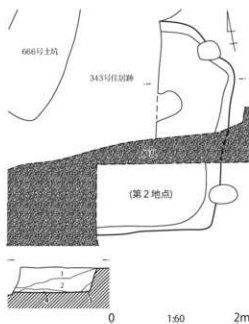
#### 第15(SI-01)号住居跡 (第113図)

H地点調査区の中央部付近に位置する。遺構の西側を重複する第343号住居跡に、南側を攪乱によって切られているため、遺構の遺存状態は良好とは言えない。調査区内で検出されたのは、住居跡の北東側コーナー部付近だけであるが、南側に隣接する第2地点で調査されたSI01(太田2005)が、本住居跡の南東側コーナー部にあたると思われる。

なお、遺構番号は、第2地点ですでにSI-01の番号が付けられているが、本報告では第1地点(増田1985)からの通し番号に変更し、第15号住居跡とした。

平面形は、残存する部分から推測すると、方形か長方形を基調とする形態であったと思われる。規模は、南北方向が3.38m、東西方向は第2地点で1.98mまで測れる。住居跡の東側壁は、N-24°-Eの方向を向いている。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは40cmある。残存する各壁の壁下には、壁溝は見られない。床面は、ロームブロックを多量に含む暗褐色土を、厚く平坦に埋め戻した貼床式である。住居跡の残存する範囲内からは、カマドやビット等の住居内施設は検出されなかった。

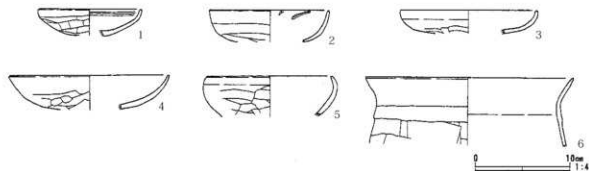
遺物は、古代の土器破片が少量出土しただけである。第2地点の報告書では、本住居跡から出土した遺物として、7世紀後半の白鳳時代から9世紀前半の平安時代前期までの土師器の破片が図示されている(第114図)。しかしながら、これらは覆土中から出土した破片であることから、本住居跡に直接伴うものではなく、住居跡の埋没過程で周囲から混入したものと考えられている(太田2005)。本住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土遺物の様相から、白鳳~平安時代前期前半頃と思われる。



第113図 第15(SI-01)号住居跡

#### 第15(SI-01)号住居跡土層説明

- 第1層：暗褐色土層 (径0.5cmのロームブロック・ローム粒子・焼土粒子・白色粒子を少量含む。)
- 第2層：暗褐色土層 (径0.5~2cmのロームブロック・ローム粒子を中量、焼土粒子・白色粒子を少量含む。)
- 第3層：黄褐色土層 (径0.5~2cmのロームブロックを主体に、暗褐色土を少量含む。)
- 第4層：暗褐色土層 (径2cmのロームブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を微量含む。)



第114図 第15(SI-01)号住居跡出土遺物(太田2005より)

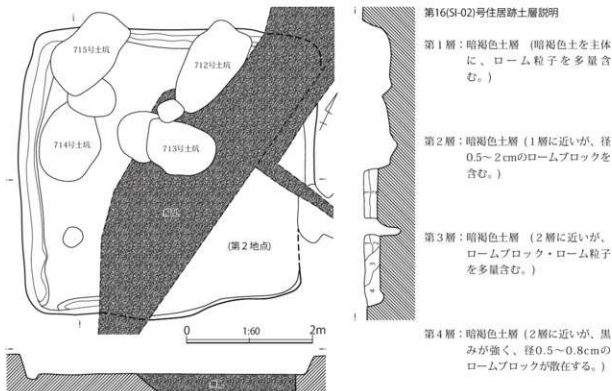
### 第16(SI-02)号住居跡 (第115図、写真図版52)

H地点調査区の中央部付近に位置し、重複する第712～715号土坑に切られている。調査区内で検出されたのは、住居跡の西側半分だけであるが、東側に隣接する第2地点で調査されたSI-02(太田2005)が、本住居跡の東側コーナー部にあたると思われる。

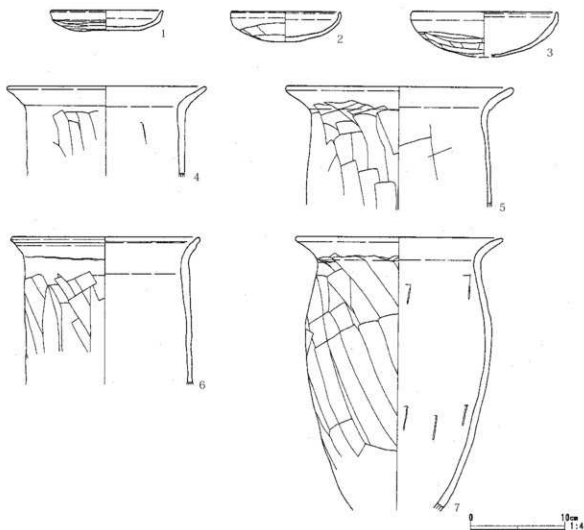
なお、本住居跡の遺構番号は、第2地点の調査ですでにSI-02の番号が付けられているが、本報告では第1地点(増田1985)からの通し番号に変更し、第16号住居跡とした。

平面形は、残存する部分から推測すると、コーナー部がやや丸みをもつ隅丸方形を呈していたと思われる。規模は、北東～南西方向が4.76m、北西～南東方向が4.58mを測る。住居の北西側壁は、N $66^{\circ}$ Eの方向を向いている。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で32cmある。第2地点の調査で検出された部分には見られないが、今回の調査区内で検出された各壁の壁下には、幅25cm前後、床面からの深さが7cm程度の壁溝が巡っている。床面は、ロームブロックを多量に含む暗褐色土を、厚く平坦に埋め戻した貼床式である。住居跡の残存する範囲内からは、カマドやピット等の住居内施設は検出されなかった。

遺物は、H地点の調査区では古代の土器片が少量出土しただけであるが、隣接する第2地点の報告書(太田2005)では、本住居跡から出土した遺物として、7世紀代を主体とする古墳時代後期後葉～白鳳時代頃までの土師器の甕や坏が図示されている(第116図)。本住居跡の時期は、これらの出土遺物の様相から、白鳳時代とすべきであろう。



第115図 第16(SI-02)号住居跡



第116図 第16(SI-02)号住居跡出土遺物(太田2005より)

#### 第18(SI-04)号住居跡(第117図、写真図版52)

H地点調査区の中央部の南側寄りに位置し、重複する第361号住居跡と第706～708号土坑に切れられ、第362号住居跡を切っている。調査区内で検出されたのは、住居跡の南西側半分だけであるが、北側の第2地点で調査されたSI-04(太田2005)が、本住居跡の北東側コーナー部にあたると思われる。

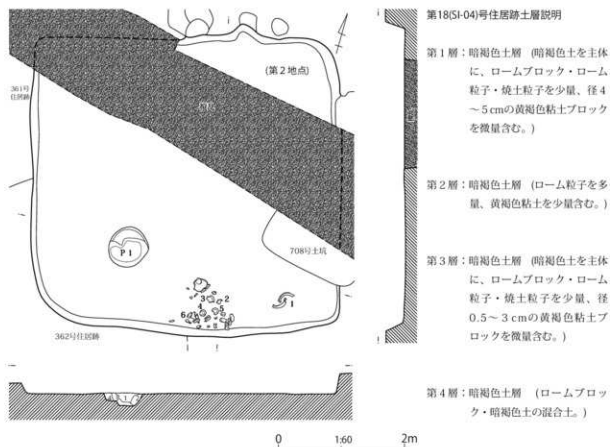
なお、住居番号は、第2地点の調査ですでにSI-04の番号が付けられているが、本報告では第1地点(増田1984)からの通し番号に変更し、第18号住居跡とした。

平面形は、検出された部分から推測すると、コーナー部が丸みをもつ隅丸方形を呈していたと思われる。規模は、南北方向が5.05m、東西方向が4.90mを測る。住居の南側壁は、N-78°-Eの方向を向いている。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは30cmある。検出された各壁の壁下には、壁溝は見られない。床面は、ロームブロックを含む暗褐色土を平坦に埋め戻した貼床式である。ピットは、1カ所検出されている。P1は、住居の南西側に位置する。径65cmの円形を呈し、床面からの深さは23cmある。

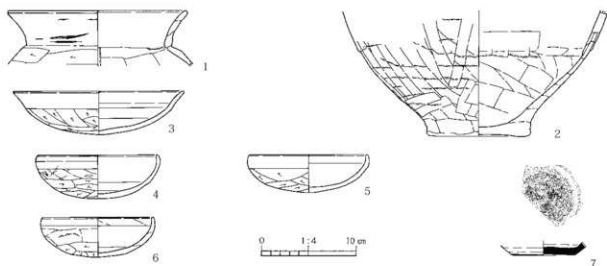
カマドは、残存する住居跡内からは検出されていない。おそらく、住居東側壁の攪乱部分に付設さ

れていたと思われる。

遺物は、住居南側壁の壁際から、白鳳時代を主体とする土器の破片がまとめて出土している。土器以外では、住居西側壁の壁際から、いわゆる編物石と呼ばれる棒状の自然石が6個まとめて出土している。本住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土土器の様相から、白鳳時代と考えられる。



第117図 第18(SI-04)号住居跡



第118図 第18(SI-04)号住居跡出土遺物

第73表 第18号住居跡出土遺物観察表

1	胴張甕	A.口縁部径19.0。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篋ナデ。D.石英、角閃石、白色粒。E.内外一橙褐色。F.口縁部4/5。H.覆土中。
2	甕	A.底部径11.1。B.粘土組織み上げ。C.胴部下平内外面篋ナデ。底部外面ナデ。D.石英、角閃石、白色粒。E.内外一淡橙褐色。F.胴部下平3/4。H.覆土中。
3	皿	A.口縁部径18.0、器高4.6。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ヨコナデ。D.石英、角閃石、白色粒。E.内外一橙褐色。F.3/4。H.覆土中。
4	坏	A.口縁部径12.6、器高4.5。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後下半ケズリ、内面ヨコナデ。D.片岩粒、角閃石、チャート、白色粒。E.内外一橙褐色。F.完形。H.覆土中。
5	坏	A.口縁部径12.6、器高4.0。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ヨコナデ。D.角閃石、白色粒。E.内外一橙褐色。F.3/4。H.覆土中。
6	坏	A.口縁部径11.8、器高4.2。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後下半ケズリ、内面ヨコナデ。D.角閃石、白色粒。E.外一淡黄褐色、内一淡橙褐色。F.1/4。H.覆土中。
7	須恵器 坏	A.底部径(6.9)。B.口ロク成形。C.体部内外面回転ナデ。底部外面篋切り。D.白色粒。E.外一黄灰色、内一灰白色。F.底部2/3。G.底部内面に「×」の記号あり。H.覆土中。

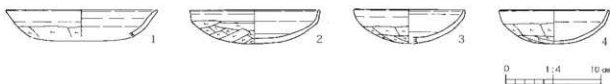
## 第195号住居跡(第120図、写真図版53)

H地点調査区の北端に位置する。重複する第627号土坑に切られる。住居跡の北西側半分は、隣接するF1地点(恋河内2012)で調査されている。

平面形は、コーナー部が丸みをもつ隅丸方形を呈している。規模は、H地点内では南北方向は3.97mまで、東西方向は3.20mまで測れる。住居の主軸方位は、N-90°-Eを向いている。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは16cmある。住居南側壁の壁下には、壁溝が巡っている。床面は、ロームブロックを含む暗褐色土を平坦に埋め戻した貼床式である。住居中央部は堅く締まっているが、周辺部はやや軟弱である。ピットは、住居内から9カ所検出されている。この中でP1とP2は、住居の対角線上に配置されていると推測されることから、住居の上屋を支える4本主柱の柱穴の一部と思われる。P1は、径65cmの円形を呈し、床面からの深さは55cmある。P2は、径45cm程度の円形を呈し、床面からの深さは32cmある。いずれもその内部に直径25cmの円形を呈する柱痕を伴い、二段に深くなっている。

カマドは、住居東側壁の中央やや南寄りに、壁を掘り込んで直角に付設されている。規模は、長さ80cm、幅95cmを測る。燃烧部は、奥壁側半分が住居外にある。燃烧面は、住居の床面より一段低く平坦に作られている。奥壁は、緩やかに傾斜して煙道部に向かっている。袖は、既に崩壊して痕跡も見られない。煙道部は、削平されているため不明である。

遺物は、住居跡の覆土中より、土器の破片が少量出土している。本住居跡の時期は、出土土器の様相から、白鳳時代と考えられる。



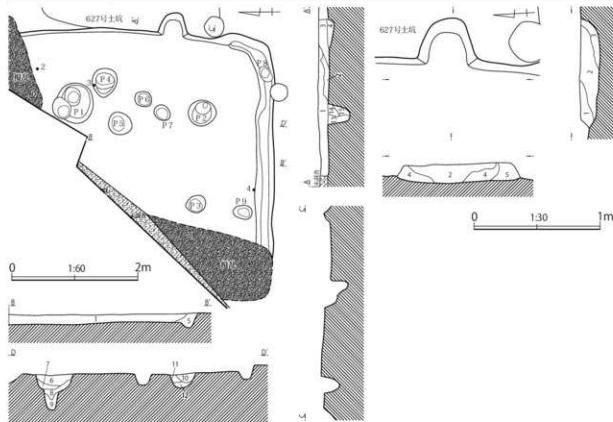
第119図 第195号住居跡出土遺物

第74表 第195号住居跡出土遺物観察表

1	皿	A.口縁部径(16.0)。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一暗茶褐色。F.口縁部1/5。H.覆土中。
2	坏	A.口縁部径13.8、器高3.6。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一淡橙褐色。F.3/4。H.覆土中。



3	环	A.口縁部径(11.8)、器高3.6。B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後下平ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一暗褐色。F.1/4破片。H.覆土中。
4	环	A.口縁部径11.6、器高3.6。B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一淡褐色。F.1/3。H.覆土中。



第120図 第195号住居跡

## 第195号住居跡土層説明

- 第1層：暗褐色土層 (径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を少量、径2cmのロームブロック・焼土粒子を微量含む。)  
 第2層：暗褐色土層 (ローム粒子を多量、径0.5～2cmのロームブロックを少量、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。)  
 第3層：暗褐色土層 (径0.5cmのロームブロック・ローム粒子・焼土粒子を少量含む。)  
 第4層：暗褐色土層 (径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を中量、黒褐色土を微量含む。)  
 第5層：暗褐色土層 (径3cmのロームブロック・ローム粒子を中量含む。)  
 第6層：暗褐色土層 (径1cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。)  
 第7層：暗褐色土層 (径0.5～3cmのロームブロック・ローム粒子を中量含む。)  
 第8層：暗褐色土層 (径0.5～3cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。)  
 第9層：黄褐色土層 (径1～4cmのロームブロックを主体とする。)  
 第10層：暗褐色土層 (径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。)  
 第11層：暗褐色土層 (径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。)  
 第12層：暗褐色土層 (径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を中量含む。)  
 第13層：暗褐色土層 (径1.5cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。)  
 第14層：暗褐色土層 (径1cmのロームブロック・ローム粒子を中量含む。)  
 第15層：暗褐色土層 (径2～4cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。)

## 第195号住居跡カマド土層説明

- 第1層：暗褐色土層 (径0.5cmのロームブロック・ローム粒子・焼土ブロック少量、白色粒子を微量含む。)  
 第2層：暗褐色土層 (径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子・白色粒子を微量含む。)  
 第3層：暗褐色土層 (灰色粘土粒子を中量、径0.5cmのロームブロック・ローム粒子・炭化粒子を微量含む。)  
 第4層：暗褐色土層 (径1cmのロームブロック・ローム粒子を中量、焼土粒子を少量含む。)  
 第5層：暗褐色土層 (径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含む。)

### 第196号住居跡（第121図、写真図版53）

H地点調査区の西端に位置する。重複する第324号住居跡と第81号溝跡に切られている。住居跡の西側半分は、隣接するF1地点（恋河内2012）で調査されている。住居跡の上面は、床面近くまで削平されており、遺構の遺存状態はあまり良好とは言えない。

平面形は、隅丸長方形を呈している。規模は、調査区内では北東～南西方向が3.00m、北西～南東方向は1.75mまで測れる。住居の北東側壁は、 $N-132^{\circ}-E$ の方向を向いている。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは12cmある。住居南西側壁の壁下には、壁溝が巡っている。床面は、ロームブロックを含む暗黄褐色土を平坦に埋め戻した貼床式である。ピットは、住居内から1カ所検出されているが、住居との関係は不明である。

遺物は、住居跡の覆土中から、古代の土器の破片が少量出土しただけである。本住居跡の時期は、遺構の重複関係から、古墳時代後期以前と推測される。

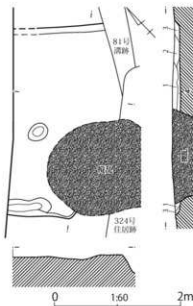
#### 第196号住居跡土層説明

第1層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含む。）

第2層：暗褐色土層（径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。）

第3層：暗褐色土層（径0.5～3cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。）

第4層：暗褐色土層（径1cmのロームブロック・ローム粒子を中量、焼土粒子・黒褐色土を微量含む。）



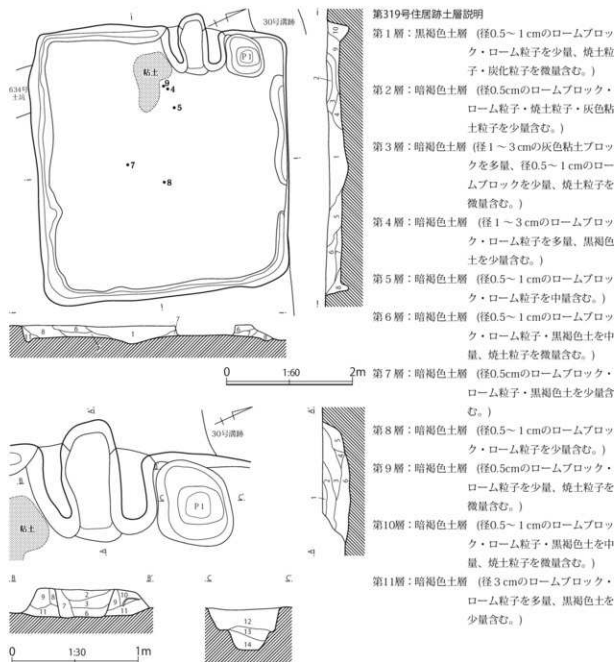
第121図 第196号住居跡

### 第319号住居跡（第122図、写真図版54）

H地点調査区西側の北寄りに位置する。重複する第633・634号土坑と第30号溝跡に切られている。平面形は、コーナー部が丸みをもつ隅丸長方形を呈している。規模は、東西方向が4.13m、南北方向が4.35mを測る。住居の主軸方位は、 $N-65^{\circ}-W$ を向いている。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは30cmある。各壁の壁下には、壁溝が巡っている。床面は、ロームブロックを多量を含む暗黄褐色土を平坦に埋め戻した貼床式で、全体的に堅く締まっている。ピットは、1カ所検出されている。P1は、いわゆる貯蔵穴と呼ばれるもので、カマド右側の住居北西側コーナー部に位置する。65cm×62cmの不整の隅丸長方形を呈している。断面は、二段に深くっており、床面からの深さは31cmある。

カマドは、住居西側壁の中央やや北寄りに、壁を掘り込んでほぼ直角に付設されている。規模は、長さ95cm、幅112cmを測る。燃焼部は、奥壁側が若干住居外にある。燃焼面は、住居の床面より若干低く作られている。奥壁は、緩やかに傾斜して煙道部に向かっている。袖は、灰褐色粘土を含む暗褐色土を住居の壁に直接貼り付けて構築している。袖の内面は、あまり焼けていない。カマド南側の覆土中に灰色粘土の分布が見られるが、カマドが崩壊した粘土の可能性もある。煙道部は、削平されているため不明である。

遺物は、住居跡の覆土中より、土器の破片が少量出土している。本住居跡の時期は、出土土器の様相から、平安時代前期末～中期初頭頃と考えられる。

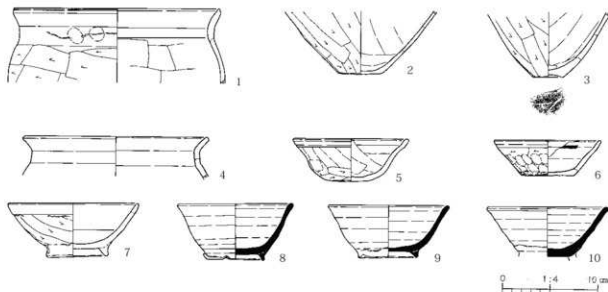


第122図 第319号住居跡

**第319号住居跡カマド・貯蔵穴土層説明**

- 第1層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子・灰色粘土粒子を少量含む。）
- 第2層：暗褐色土層（径0.5～1 cmのロームブロック・径1～2 cmの焼土ブロック・径1～3 cmの灰色粘土ブロックを少量、炭化粒子を微量含む。）
- 第3層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子・焼土粒子・灰色粘土粒子を少量含む。）
- 第4層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。）
- 第5層：暗褐色土層（径1 cmのロームブロック・ローム粒子を中量、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。）
- 第6層：黒褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を中量、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。）
- 第7層：暗褐色土層（径0.5～1 cmのロームブロック・ローム粒子を中量、焼土粒子を少量含む。）
- 第8層：暗褐色土層（焼土粒子・灰白色粘土ブロックを多量、ローム粒子を少量含む。）
- 第9層：黒褐色土層（径2～5 cmのロームブロックを中量、焼土粒子を少量含む。）
- 第10層：暗褐色土層（径0.5～1 cmの焼土ブロック・灰白色粘土粒子を少量含む。）

- 第11層：黒褐色土層 (径0.5～1 cmのロームブロック・ローム粒子・焼土粒子を少量含む。)  
 第12層：暗褐色土層 (径0.5～1 cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含む。)  
 第13層：暗褐色土層 (径0.5 cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含む。)  
 第14層：暗褐色土層 (ローム粒子を中量、径0.5～1 cmのロームブロック・黒褐色土を少量含む。)



第123図 第319号住居跡出土遺物

第75表 第319号住居跡出土遺物観察表

1	甕	A. 口縁部径(21.8)。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面窪ナデ。D. 角閃石、白色粒。E. 外—淡褐色、内—明褐色。F. 口縁部破片。G. 口縁部外面に指頭圧痕を残す。H. 覆土中。
2	甕	A. 底部径4.5。B. 粘土組織み上げ。C. 胴部外面ケズリ、内面窪ナデ。D. 角閃石、白色粒。E. 内外—淡橙褐色。F. 底部1/2破片。H. カマド内。
3	甕	A. 底部径3.0。B. 粘土組織み上げ。C. 胴部外面ケズリ、内面窪ナデ。D. チャート、白色粒。E. 外—淡黄褐色、内—橙褐色。F. 底部3/4破片。G. 底部外面に木炭痕を残す。H. カマド内。
4	甕	A. 口縁部径(19.6)。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面窪ナデ。D. 片岩粒、角閃石、白色粒。E. 内外—明赤褐色。F. 口縁部破片。H. 床面付近。
5	坏	A. 口縁部径12.3。器高4.5。底部径4.8。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデの後下半ケズリ、内面ナデ。底部外面ケズリ。D. 角閃石、チャート、白色粒。E. 内外—橙褐色。F. 1/2。H. 床面付近。
6	坏	A. 口縁部径11.3。器高3.7。底部径5.4。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。底部外面ケズリ。D. 角閃石、チャート、白色粒。E. 内外—橙褐色。F. 1/2。G. 胴部外面に指頭圧痕を残す。内面に墨書あり。H. 覆土中。
7	高台付坏	A. 口縁部径13.8。器高5.7。高台部径6.5。B. 粘土組織み上げ。高台部貼り付け。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ヨコナデ。底部外面ケズリ。D. 片岩粒、角閃石、チャート、白色粒。E. 外—橙褐色、内—淡赤褐色。F. ほぼ完形。H. 覆土中。
8	須恵器高台付坏	A. 口縁部径12.2。器高5.9。高台部径6.4。B. ロクロ成形。高台部貼り付け。C. 口縁部内外面回転ナデ。底部外面回転系切り。D. 片岩粒、石英、角閃石。E. 内外—暗灰黄色。F. 4/5。H. 床面付近。
9	須恵器高台付坏	A. 口縁部径12.8。器高5.6。高台部径6.3。B. ロクロ成形。高台部貼り付け。C. 口縁部内外面回転ナデ。底部外面回転系切り。D. 片岩粒、石英、角閃石。E. 内外—灰色。F. 4/5。H. 覆土中。
10	須恵器高台付坏	A. 口縁部径(12.8)。B. ロクロ成形。高台部貼り付け。C. 口縁部内外面回転ナデ。底部外面回転系切り。D. 石英、角閃石。E. 外—暗灰黄色、内—灰黄色。F. 1/5。H. 覆土中。

## 第320号住居跡 (第124図、写真図版55)

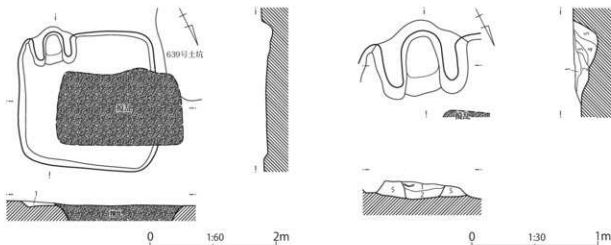
H地点の調査区北西側に位置する。住居跡の中央部を後世の掘乱によって切られているため、遺構の遺存状態は、あまり良好とは言えない。

平面形は、コーナー部の丸みが強い隅丸方形を呈している。規模は、南北方向が2.21m、東西方向が2.18mを測る。住居の主軸方位は、N—155°—Wを向いている。壁は、緩やかに傾斜して立ち上

がり、確認面からの深さは9cmある。残存する各壁の壁下には、壁溝は見られない。床面は、ロームブロックを含む暗黄褐色土を平坦に埋め戻した貼床式である。住居中央部は堅く締まっているが、周辺部はやや軟弱である。

カマドは、住居南側壁の南東側コーナー部寄りの位置に、住居の壁を若干掘り込んで直角に付設されている。規模は、長さ115cm、最大幅150cmある。燃焼部は、ほぼ住居内にある。燃焼面は、住居の床面よりも若干低く、奥壁は、緩やかに傾斜して煙道部に向かっている。袖は、黄灰色粘土ブロックを含む暗灰褐色土を、燃焼部奥壁から廻して構築している。袖の内面は、ほとんど焼けていない。煙道部は、すでに削平されているため不明である。

遺物は、住居跡の覆土中から、古代の土器の破片が少量出土しただけである。本住居跡の時期は、住居跡の形態や出土土器の様相から、古墳時代後期以降と考えられる。



第124図 第320号住居跡

第125図 第320号住居跡  
出土遺物

#### 第320号住居跡土層説明

第1層：黒褐色土層（ローム粒子を少量、径0.5cmのロームブロックを微量含む。）

#### 第320号住居跡カマド土層説明

第1層：灰褐色土層（焼土粒子を多量、ローム粒子を中量含む。）

第2層：黒褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を中量、黄灰色粘土粒子を少量含む。）

第3層：黒褐色土層（径1～2cmの黄灰色粘土ブロックを多量、焼土粒子を少量含む。）

第4層：黒褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を中量、炭化粒子を少量、焼土粒子を微量含む。）

第5層：カマド袖。

#### 第76表 第320号住居跡出土遺物観察表

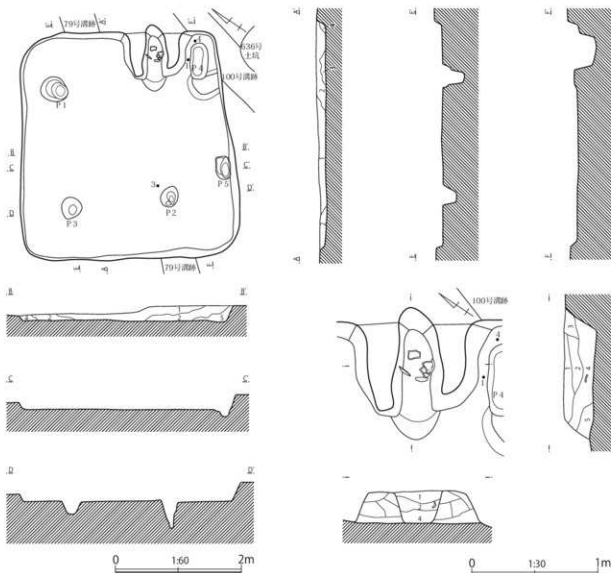
1	小形鉢	A.口縁部径(2.0)。B.粘土粗積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後ケズリ、内面ナデ。D.白色粒。E.内外一暗褐色。F.口縁部1/3破片。H.カマド内。
---	-----	---

#### 第321号住居跡（第126図、写真図版56）

H地点の調査区西側の北寄りに位置する。重複する第79号溝跡と第100号溝跡に切られている。本住居跡の南東側には、第322号住居跡が近接している。

平面形は、コーナー部の丸みが強い隅丸長方形を呈している。規模は、北東～南西方向が3.60m、北西～南東方向が3.48mを測る。住居の主軸方位は、N-54°-Eを向いている。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは25cmある。残存する各壁の壁下には、壁溝は見られない。

床面は、ロームブロックを多く含む暗褐色土を平坦に埋め戻した貼床式で、全体的に堅く締まっている。ピットは、住居内から5カ所検出されている。この中のP1～P3は、ほぼ住居の対角線上に



第126図 第321号住居跡

#### 第321号住居跡土層説明

- 第1層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を少量、径3cmのロームブロック・炭化粒子を微量含む。）  
 第2層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を中量、黒褐色土を少量含む。）  
 第3層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子・灰色粘土粒子を微量含む。）  
 第4層：暗褐色土層（径1～3cmのロームブロック・ローム粒子を中量含む。）  
 第5層：褐色土層（ローム粒子を多量、径0.5～1cmのロームブロックを少量含む。）

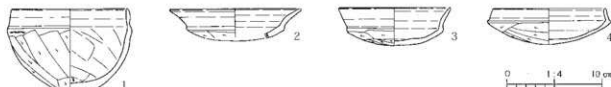
#### 第321号住居跡カマド土層説明

- 第1層：黒褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を中量、径0.5～1cmの焼土ブロック・径0.5～1cmの灰色粘土ブロックを少量含む。）  
 第2層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子・灰色粘土を少量、焼土粒子を微量含む。）  
 第3層：暗褐色土層（径1～3cmの焼土ブロック・灰色粘土を中量、ローム粒子を少量含む。）  
 第4層：暗褐色土層（灰色粘土を多量、径0.5cmのロームブロック・径0.5～1cmの焼土ブロック・焼土粒子を中量含む。）  
 第5層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を中量、焼土粒子・炭化粒子・灰色粘土を少量含む。）  
 カマド袖：土層番号・土層説明なし。

配置されていることから、住居の上屋を支える4本主柱の柱穴の一部と思われる。長さ31cm～40cmの円形や楕円形を呈し、床面からの深さは20cm～42cmある。P4は、いわゆる貯蔵穴と呼ばれるもので、カマド右側の住居東側コーナー部に位置する。28cm×55cmの長い楕円形ぎみの形態を呈し、床面からの深さは40cmある。P4の前には、幅45cm、床面からの高さが5cm程度の土堤状の高まりがある。P5は、住居の南東側壁際の中央付近に位置する。35cm×22cmの楕円形を呈し、床面からの深さは10cmある。その位置から住居入口施設の梯子穴の可能性も考えられる。

カマドは、住居北東側壁の中央から東側コーナー部に寄った位置に、住居の壁に対して直角に付設されている。規模は、長さ205cm、最大幅108cmある。燃焼部は、住居内にある。燃焼面は、住居の床面と同じ高さで水平に作られ、奥壁は、緩やかに傾斜して煙道部に向かっている。袖は、灰褐色粘土を住居の壁に直接貼り付けて構築している。袖の内面は、ほとんど焼けていない。煙道部は、すでに削平されているため不明である。

遺物は、住居跡の覆土中から、土器の破片が少量出土しただけである。本住居跡の時期は、住居跡の形態や出土土器の様相から、古墳時代後期後葉頃と考えられる。



第127図 第321号住居跡出土遺物

第77表 第321号住居跡出土遺物観察表

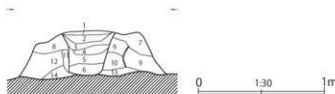
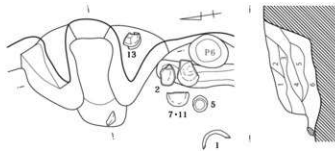
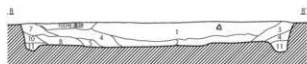
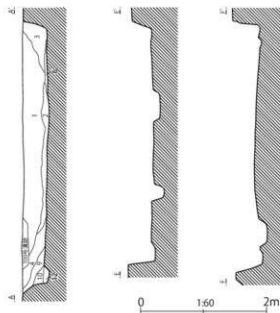
1	小形鉢	A.口縁部径12.4、器高8.5、底部径4.8。B.粘土粗積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後ケズリ、内面ナデ。底部外面ケズリ。D.白色粒。E.外—暗茶褐色、内—暗褐色。F.1/2。G.胴部外面に黒斑あり。H.覆土中。
2	模倣杯	A.口縁部径(14.0)。B.粘土粗積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後ケズリ、内面ナデ。D.白色粒。E.外—淡茶褐色、内—淡褐色。F.口縁部1/4。H.覆土中。
3	模倣杯	A.口縁部径12.0、器高4.0。B.粘土粗積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外—淡橙褐色。F.1/2。H.覆土中。
4	模倣杯	A.口縁部径(12.0)、器高3.8。B.粘土粗積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外—黒褐色。F.1/3。H.覆土中。

### 第322号住居跡(第128図、写真図版57)

H地点の調査区西側の北寄りに位置する。重複する第100号溝跡に切られている。本住居跡の北西側には、第321号住居跡が近接している。

平面形は、コーナー部がやや丸みをもつ隅丸方形を呈している。規模は、東西方向が4.31m、南北方向が4.35mを測る。住居の主軸方位は、N-82°-Eを向いている。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは42cmある。各壁の壁下には、壁溝が巡っている。床面は、ロームブロックを含む暗黄褐色土を平坦に埋め戻した貼床式である。住居中央部から南側は堅く締まっているが、北側から西側の周辺部はやや軟弱である。ピットは、住居内から6カ所検出されている。いずれも床面からの深さが10cm～20cmと浅く、住居との関係は不明である。

カマドは、住居東側壁の中央から南東側コーナー部に寄った位置に、住居の壁に対してほぼ直角に付設されている。規模は、長さ82cm、最大幅114cmある。燃焼部は、住居内にある。燃焼面は、住居の床面とほぼ同じ高さで水平に作られ、奥壁は、緩やかに傾斜して煙道部に向かっている。袖は、



## 第322号住居跡土層説明

第1層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含む。）

第2層：暗褐色土層（径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を中量、焼土粒子を微量含む。）

第3層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。）

第4層：暗褐色土層（径1～3cmのロームブロック・ローム粒子を中量含む。）

第5層：暗褐色土層（径1～2cmのロームブロック・ローム粒子を多量、黒褐色土を少量含む。）

第6層：暗褐色土層（径1～3cmのロームブロックを多量、黒褐色土を微量含む。しまりを有する。）

第7層：暗褐色土層（径0.5～2cmのロームブロックを中量、ローム粒子を少量含む。）

第8層：暗褐色土層（7層に近いが、焼土粒子を微量含む。）

第9層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を少量含む。）

第10層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロックを中量、ローム粒子・黒褐色土を少量含む。）

第11層：暗褐色土層（焼土粒子・炭化粒子を微量含む。）

第12層：暗褐色土層（径1～2cmのロームブロックを中量、ローム粒子を少量含む。しまりはない。）

第128図 第322号住居跡



## 第322号住居跡カマド土層説明

- 第1層：暗褐色土層（ローム粒子を少量、焼土粒子・白色粒子を微量含む。）  
 第2層：暗褐色土層（ローム粒子を中量、焼土粒子を少量、灰色粘土・黒褐色土を微量含む。）  
 第3層：暗褐色土層（径0.3cmのロームブロック・ローム粒子を中量、焼土粒子・灰色粘土粒子を少量含む。）  
 第4層：暗褐色土層（灰色粘土粒子を多量、径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子・焼土ブロック・焼土粒子を中量含む。）  
 第5層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子・灰色粘土粒子を中量、焼土粒子を微量含む。）  
 第6層：暗褐色土層（径1cmのロームブロック・ローム粒子を中量、焼土粒子を少量含む。）  
 第7層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・焼土粒子・白色粒子を少量含む。）  
 第8層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・焼土粒子を中量、炭化粒子を微量含む。）  
 第9層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を中量含む。）  
 第10層：暗褐色土層（灰色粘土粒子を多量、径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。）  
 第11層：暗褐色土層（灰色粘土粒子を多量、焼土粒子を中量、径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。）  
 第12層：暗褐色土層（焼土粒子を多量、径0.5～1cmのロームブロック・灰色粘土粒子を中量含む。）  
 第13層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。）  
 第14層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を中量、焼土粒子・炭化粒子を少量含む。）

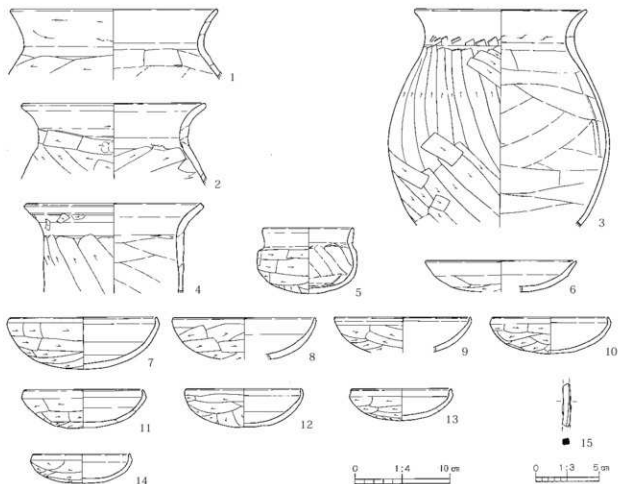
灰褐色粘土ブロックを含む暗灰褐色土を住居の壁に直接貼り付けて構築している。右側袖の付け根付近に、伏せた襖を埋め込んで袖の芯にしている。袖の内面は、ほとんど焼けていない。煙道部は、すでに削平されているため不明である。

遺物は、住居南東側コーナー部付近の床面上や住居跡の覆土中から、土器が多く出土している。土器以外では、覆土中から鉄釘と思われる鉄器の破片が1点出土している。本住居跡の時期は、出土土器の様相から、白鳳時代と考えられる。

本住居跡は、住居の東側壁の南側半分が張り出し、その部分にカマドが付設された特異な形態の住居に見える。しかしながら、その張り出し部分の壁が住居東側壁の北側と平行せず、やや斜めになっていることや、住居床面の硬化範囲も住居南東側に偏っていることから、このカマドを伴う張り出し部分は、小形の別の住居跡が重複していた可能性が高いと思われる。

第78表 第322号住居跡出土遺物観察表

1	胴張裏	A.口縁部径22.0。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篋ナデ。D.片岩粒、角閃石、石英、チャート、白色粒。E.内外一橙褐色。F.口縁部1/2。H.床面直上。
2	長胴裏	A.口縁部径19.6。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。D.角閃石、白色粒。E.内外一淡赤褐色。F.口縁部1/3。H.床面直上。
3	胴張裏	A.口縁部径18.3。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篋ナデ。D.角閃石、白色粒。E.外一淡赤褐色、内一赤褐色。F.上半1/2。H.覆土中。
4	長胴裏	A.口縁部径19.0。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篋ナデ。D.角閃石、石英。E.内外一淡黄褐色。F.上半1/3。H.覆土中。
5	広口短頸壺	A.口縁部径9.7。器高7.0。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篋ナデ。D.角閃石、石英、白色粒。E.内外一淡橙褐色。F.完形。H.床面直上。
6	皿	A.口縁部径16.0。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ヨコナデ。D.角閃石、石英。E.内外一橙褐色。F.1/5。H.覆土中。
7	坏	A.口縁部径15.6。器高5.5。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ヨコナデ。D.角閃石、チャート、白色粒。E.内外一淡赤褐色。F.1/2。H.床面直上。
8	坏	A.口縁部径15.2。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ヨコナデ。D.角閃石。E.外一淡褐色、内一淡橙褐色。F.1/5。H.覆土中。
9	坏	A.口縁部径14.5。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ヨコナデ。D.角閃石、チャート。E.内外一淡褐色。F.1/5。H.覆土中。
10	坏	A.口縁部径12.3。器高3.9。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ヨコナデ。D.角閃石、白色粒。E.内外一淡褐色。F.1/2。H.覆土中。
11	坏	A.口縁部径12.6。器高4.1。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ヨコナデ。D.角閃石、白色粒。E.内外一明赤褐色。F.2/3。H.床面直上。
12	坏	A.口縁部径12.3。器高4.0。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ヨコナデ。D.角閃石、白色粒。E.内外一淡褐色。F.1/2。H.カマド内。



第129図 第322号住居跡出土遺物

13	坏	A.口縁部径10.6、器高3.4。B.粘土細積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ヨコナデ。D.角閃石、白色粒。E.外—淡赤褐色、内—明赤褐色。F.4/5。H.カマ下内。
14	坏	A.口縁部径(10.2)、器高3.1。B.粘土細積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ヨコナデ。D.片岩粒、角閃石、白色粒。E.外—灰黄褐色、内—淡褐色。F.1/3。H.覆土中。
15	鉄製品	A.残存長3.4、幅0.55、厚さ0.45、重さ2.92g。B.鍛造。D.鉄製。F.両端欠損。H.覆土中。

## 第323号住居跡 (第131図、写真版58)

H地点の調査区西端に位置する。重複する第324号住居跡と第81号溝跡に切られている。本住居跡は、床面近くまで掘平されており、残存しているのは住居跡の南側コーナー部付近だけであるため、遺構の遺存状態は劣悪である。

平面形は、残存する部分から推測すると、コーナー部の丸みが強い隅丸方形か隅丸長方形を呈していたと思われる。規模は、南東～北西方向は3.40mまで、南西～北東方向は2.80mまで測れる。住居跡の南東側壁は、N-58°-Eの方向を向いている。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは7cmある。残存する各壁の壁下には、壁溝は見られない。床面は、ロームブロックを多く含む暗黄褐色土を平坦に埋め戻した貼床式である。ピットは、住居跡が残存する範囲内からは検出されていない。

遺物は、何も出土しなかった。本住居跡の時期は、遺構の重複関係から、古墳時代後期後葉以前と

推測される。

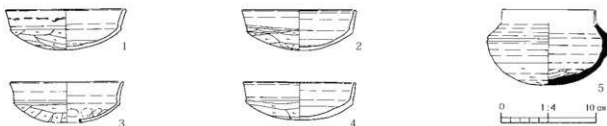
### 第324号住居跡（第131図、写真図版59）

H地点の調査区西端に位置する。重複する第79号溝跡と第81号溝跡に切られ、第196号住居跡と323号住居跡を切っている。

平面形は、コーナー部が丸みをもつ隅丸方形を呈している。規模は、北東～南西方向が4.30m、北西～南東方向が4.80mを測る。住居の主軸方位は、 $N-52^{\circ}-E$ を向いている。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは25cmある。各壁の壁下には、壁溝が巡っている。床面は、ロームブロックを多く含む暗黄褐色土を平坦に埋め戻した貼床式である。住居中央部は強く締まっているが、周辺部はやや軟弱である。ピットは、住居内から2カ所検出されている。P1は、いわゆる貯蔵穴と呼ばれるもので、カマド右側の住居東側コーナー部に位置する。82cm×64cmの長い楕円形ぎみの形態を呈し、床面からの深さは39cmある。P1の前からカマド右袖にかけて、幅30cm、高さ10cm程度のロームブロックを床面上に盛り上げた土堤が巡っている。P2は、住居の南側のコーナー部寄りに位置する。25cm×40cmの楕円形を呈し、床面からの深さは30cmある。その位置からは住居の上屋を支える4本主柱の柱穴の一部の可能性もあるが、他の3本の柱穴が見られないため明確ではない。

カマドは、住居北東側壁の中央から東側コーナー部に寄った位置に、住居の壁を若干掘り込んで壁に対して直角に付設されている。規模は、長さ100cm、最大幅100cmある。燃焼部は、ほぼ住居内にある。燃焼面は、住居の床面より若干低く、奥壁は緩やかに傾斜して煙道部に向かって傾斜している。袖は、ロームブロックや灰褐色粘土を含む黄灰褐色土を住居の壁に直接貼り付けて構築している。袖の内面は、あまり焼けていない。煙道部は、すでに削平されているため不明である。

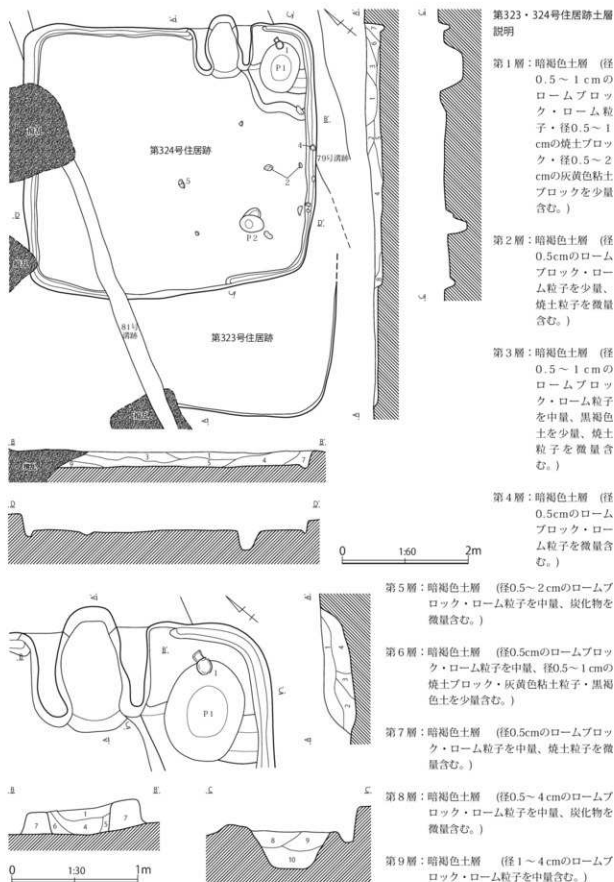
遺物は、住居跡の覆土中から、土師器や須恵器が少量出土しただけである。本住居跡の時期は、住居跡の形態や出土土器の様相から、古墳時代後期後葉頃と考えられる。



第130図 第324号住居跡出土遺物

第79表 第324号住居跡出土遺物観察表

1	模倣環	A. 口縁部径12.6、器高4.3。B. 粘土細積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一淡茶褐色。F. 2/3。H. 覆土中。
2	模倣環	A. 口縁部径12.2、器高4.2。B. 粘土細積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一淡茶褐色。F. 完形。H. 覆土中。
3	模倣環	A. 口縁部径12.0。B. 粘土細積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一淡茶褐色。F. 1/4。H. 覆土中。
4	模倣環	A. 口縁部径12.0、器高4.0。B. 粘土細積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一淡茶褐色。F. 完形。H. 覆土中。
5	須恵器 広口短頸壺	A. 残存高6.7。B. ロクロ成形。C. 体部外面回転ナデの後下半回転ケズリ、内面回転ナデ。底部内面指ナデ。D. 白色粒。E. 内外一淡灰色。F. 体部1/2。H. 覆土中。



第131図 第323・324号住居跡

## 第324号住居跡カマド・貯蔵穴土層説明

第1層：黄褐色土層（径0.5～1 cmのロームブロック・ローム粒子・焼土粒子・黒褐色土を中量含む。）

第2層：黄褐色土層（黄灰色粘土を主体に、径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子・黒褐色土を微量含む。）

第3層：黒褐色土層（径1～2 cmのロームブロック・径0.5～2 cmの焼土ブロックを少量含む。）

第4層：黒褐色土層（径0.5～2 cmのロームブロック・ローム粒子・径1～3 cmの焼土ブロックを多量、黒褐色土を少量、炭化物を微量含む。）

第5層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子・焼土粒子・黒褐色土を少量含む。）

第6層：暗褐色土層（径5 cmの焼土ブロックを多量、ローム粒子・黒褐色土を少量含む。）

第7層：カマド袖。

第8層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。）

第9層：暗褐色土層（径0.5～2 cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。）

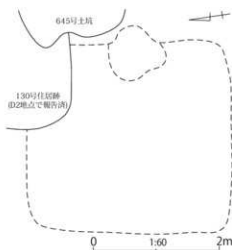
第10層：暗褐色土層（径0.5～3 cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。）

## 第325号住居跡（第132図、写真図版60）

H地点の調査区中央部の北側寄りに位置する。D2地点で報告した第130号住居跡（恋河内2016）と重複しているが、相互の新旧関係は不明である。本住居跡は、すでに住居の床面下まで削平され、住居跡の掘り方部分しか残存していないため、遺構の遺存状態は劣悪である。

平面形は、残存する掘り方から推測すると、隅丸方形を呈していたと思われる。規模は、北東～南西方向が3.05m、北西～南東方向が3.32mを測る。住居の主軸方位は、N-97°-Eを向いていたと思われる。床面は、既に削平されて存在していないが、掘り方土の状況から見て、ロームブロックを含む暗褐色土を埋め戻した貼床式であったようである。住居掘り方の東側壁中央付近に、灰白色粘土の分布が見られることから、その位置にカマドが付設されていた可能性が高い。

遺物は、何も出土しなかった。本住居跡の時期は、不明である。

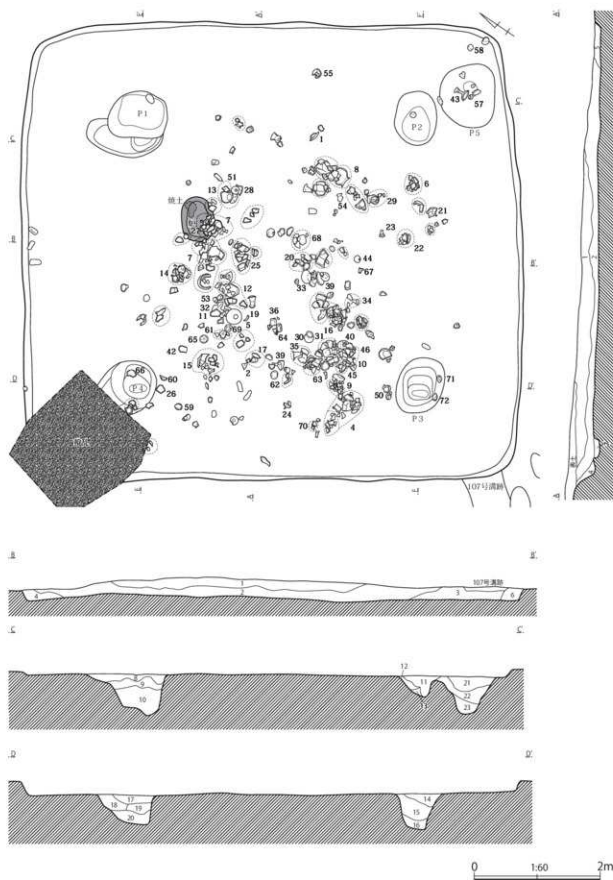


第132図 第325号住居跡

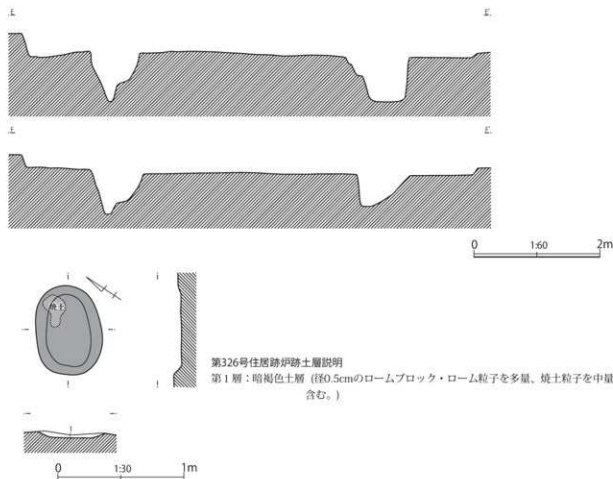
## 第326号住居跡（第133図、写真図版60～62）

H地点の調査区中央部の北側寄りに位置する。重複する第107号溝跡に切られている。本住居跡の北東側半分は、遺構上面が床面近くまで強く削平されており、遺構の遺存状態はあまり良好とは言えない。

平面形は、コーナー部の丸みが強い隅丸方形を呈している。規模は、北東～南西方向が7.15m、北西～南東方向が8.00mを測る。住居の主軸方位は、N-124°-Wを向いている。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で39cmある。残存する各壁の壁下には、壁溝は見られない。床面は、ロームブロックを含む暗褐色土を平坦に埋め戻した貼床式である。住居中央部は強く締まっているが、周辺部はやや軟弱である。ピットは、住居内から5カ所検出されている。P1～P4は、住居の対角線上に配置されていることから、住居の上屋を支える4本主柱の柱穴と考えられる。いずれも長さ90cm前後の楕円形を呈し、床面からの深さは40cm～75cmある。P5は、いわゆる貯蔵穴と呼ばれるもので、住居東側コーナー部付近に位置する。98cm×86cmの不整形を呈し、床



第133图 第326号住居迹(1)



#### 第326号住居跡炉跡土層説明

第1層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子を中量含む。）

#### 第134図 第326号住居跡（2）

#### 第326号住居跡土層説明

- 第1層：黒褐色土層（径1cmのロームブロック・ローム粒子・白色粒子を少量、炭化粒子を微量含む。）  
 第2層：黒褐色土層（径1～3cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含む。）  
 第3層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、径1～3cmのロームブロックを中量含む。）  
 第4層：暗褐色土層（ローム粒子を中量含む。）  
 第5層：黒褐色土層（ローム粒子を少量、径1cmのロームブロック・炭化粒子を微量含む。）  
 第6層：暗褐色土層（径1cmのロームブロック・ローム粒子を微量含む。）  
 第7層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、径3～5cmのロームブロックを中量含む。しまりはない。）  
 第8層：黒褐色土層（径0.5～5cmのロームブロック・ローム粒子・暗褐色土を中量含む。）  
 第9層：黄褐色土層（径2～5cmのロームブロック・ローム粒子を主体に、暗褐色土を少量含む。）  
 第10層：暗褐色土層（径1～3cmのロームブロック・ローム粒子を多量、黒褐色土を少量含む。）  
 第11層：土層説明なし。  
 第12層：土層説明なし。  
 第13層：土層説明なし。  
 第14層：黒褐色土層（径1cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。）  
 第15層：暗褐色土層（径1～3cmのロームブロック・ローム粒子を多量、黒褐色土を中量含む。）  
 第16層：黄褐色土層（径1～2cmのロームブロック・ローム粒子を主体に、黒褐色土を少量含む。）  
 第17層：暗褐色土層（径1cmのロームブロック・ローム粒子・黒褐色土を中量含む。）  
 第18層：暗褐色土層（径1～3cmのロームブロック・ローム粒子を多量、黒褐色土を中量、焼土粒子を微量含む。）  
 第19層：褐色土層（黒褐色土を少量、径1cmのロームブロック・ローム粒子を微量含む。）  
 第20層：黄褐色土層（径1cmのロームブロック・ローム粒子を主体に、黒褐色土を少量含む。）  
 第21層：黒褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。）  
 第22層：黒褐色土層（径2～4cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。）  
 第23層：暗褐色土層（径3～5cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。）

面からの深さは59cmある。P5の内からは、古墳時代前期後葉頃の高環(No43)や小型浅鉢(No57)が出土している。

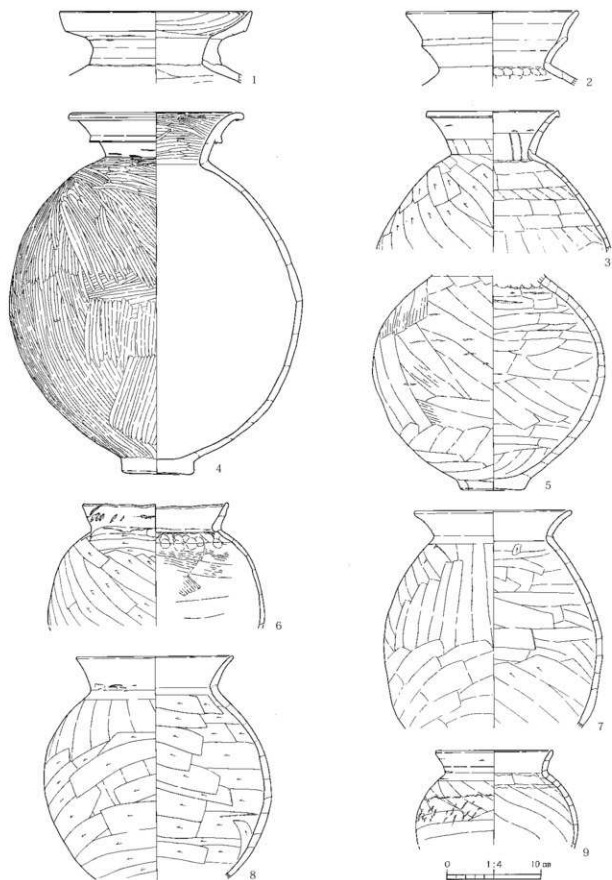
炬は、住居中央部の北西側寄りに位置する。住居の床面を5cm程度掘り窪めた地皿炬で、形態は70cm×54cmの楕円形を呈している。炬石等の付帯施設は見られない。

遺物は、住居跡中央部の覆土中にまとまって、古墳時代前期後葉～後期初頭頃の土器が多量に出土している。これらの土器は、その多くが住居廃絶後の覆土埋没過程に、周辺から投げ込まれたものと考えられる。土器以外では、土鍾や土壁状土製品の破片が覆土中から出土している。本住居跡の時期は、覆土中から古墳時代中期～後期初頭頃の土器が多量に出土しているが、貯蔵穴P5内から古墳時代前期後葉の完形もしくはそれに近い土器が出土し、その他にも古墳時代前期後葉頃の土器が一定量見られることから、古墳時代前期後葉頃と考えられる。

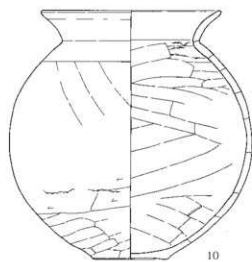
第80表 第326号住居跡出土遺物観察表

1	二重口鉢壺	A.口縁部径20.4。B.粘土組織み上げ。C.口縁部外面ヨコナデ、内面笠ナデ。D.角閃石、白色粒。E.内外一橙褐色。F.口縁部破片。H.覆土中。
2	二重口鉢壺	A.口縁部径18.3。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。D.角閃石、白色粒。E.内外一明赤褐色。F.口縁部1/2。G.頸部内面に指頭圧痕を残す。H.覆土中。
3	壺	A.口縁部径14.1。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ナデの後上半ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面笠ナデ。D.角閃石、石英、白色粒。E.内外一橙褐色。F.1/2。H.覆土中。
4	複合口鉢壺	A.口縁部径18.6。器高38.3。底部径7.6。B.粘土組織み上げ。C.口縁部外面ヨコナデ、内面ミガキ。胴部外面ミガキ、内面ナデ。底部外面ケズリ。D.角閃石、石英、チャート、白色粒。E.外一明赤褐色、内一橙褐色。F.4/5。H.覆土中。
5	壺	A.底部径6.3。B.粘土組織み上げ。C.胴部内外面笠ナデ。底部外面ケズリ。D.角閃石、石英、白色粒。E.内外一明赤褐色。F.胴部下半4/5。H.覆土中。
6	甕	A.口縁部径15.4。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面笠ナデの後上半ハケ。D.角閃石、石英、白色粒。E.内外一橙褐色。F.上半3/4。G.頸部内面に指頭圧痕を残す。H.床面付近。
7	甕	A.口縁部径16.6。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部内外面笠ナデ。D.片岩粒、角閃石、石英、白色粒。E.内外一淡黄褐色。F.1/3。H.覆土中。
8	甕	A.口縁部径16.6。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面笠ナデの後下半ケズリ、内面ケズリ。D.角閃石、石英、白色粒。E.内外一橙褐色。F.4/5。H.覆土中。
9	小形甕	A.口縁部径12.4。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部内外面笠ナデ。D.角閃石、石英、白色粒。E.内外一橙褐色。F.上半のみ。H.覆土中。
10	平底甕	A.口縁部径19.0。器高26.3。底部径8.2。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面笠ナデの後下半ケズリ、内面笠ナデ。底部外面ケズリ。D.角閃石、石英、白色粒。E.外一明赤褐色、内一淡赤褐色。F.2/3。H.覆土中。
11	平底甕	A.口縁部径17.8。器高24.7。底部径6.5。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面笠ナデの後中位ケズリ、内面笠ナデ。底部外面ケズリ。D.角閃石、チャート、白色粒。E.外一明赤褐色、内一淡褐色。F.4/5。H.覆土中。
12	平底甕	A.口縁部径16.6。器高26.3。底部径6.4。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面笠ナデの後上半ケズリ、内面笠ナデ。底部外面ケズリ。D.角閃石、石英、白色粒。E.内外一明赤褐色。F.4/5。H.覆土中。
13	甕	A.口縁部径17.1。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部内外面笠ナデ。D.角閃石、白色粒。E.内外一明赤褐色。F.上半3/4。H.覆土中。
14	平底甕	A.口縁部径15.1。器高23.4。底部径4.8。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ハケの後下半ケズリとミガキ、内面ハケの後上半ケズリ。底部外面ケズリ。D.片岩粒、角閃石、白色粒。E.内外一赤褐色。F.2/3。H.覆土中。
15	平底甕	A.口縁部径16.8。器高26.9。底部径6.5。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ハケの後上半ケズリ、内面ハケの後下半ケズリ・上半笠ナデ。底部外面ケズリ。D.角閃石、石英、白色粒。E.内外一橙褐色。F.4/5。H.覆土中。
16	平底甕	A.口縁部径15.5。器高23.1。底部径6.6。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部内外面笠ナデ。底部外面ナデ。D.片岩粒、角閃石、石英、チャート。E.内外一赤褐色。F.4/5。H.覆土中。
17	小形甕	A.口縁部径12.0。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面笠ナデの後ケズリ、内面笠ナデ。D.片岩粒、角閃石、白色粒。E.内外一明赤褐色。F.上半1/2。G.頸部内面に指頭圧痕を残す。H.覆土中。
18	S字状口縁台付甕	A.口縁部径16.0。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ハケ、内面ナデ。D.角閃石、長石、白色粒。E.内外一橙褐色。F.口縁部1/5。H.覆土中。

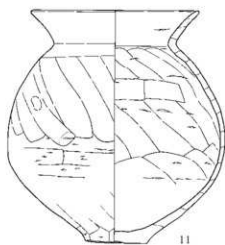




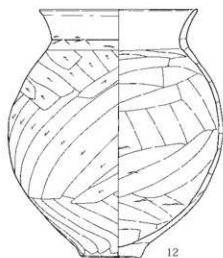
第135图 第326号住居跡出土遺物(1)



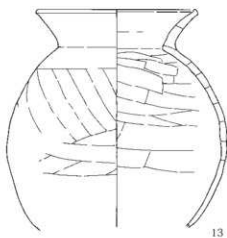
10



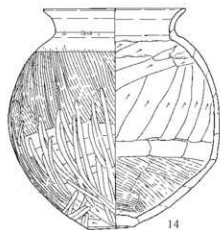
11



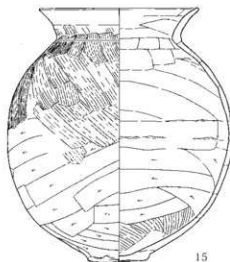
12



13

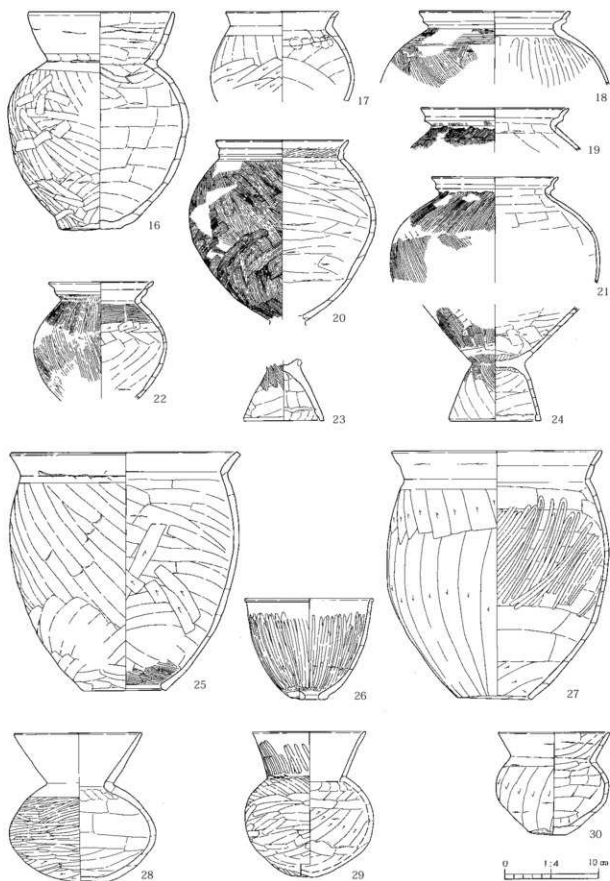


14

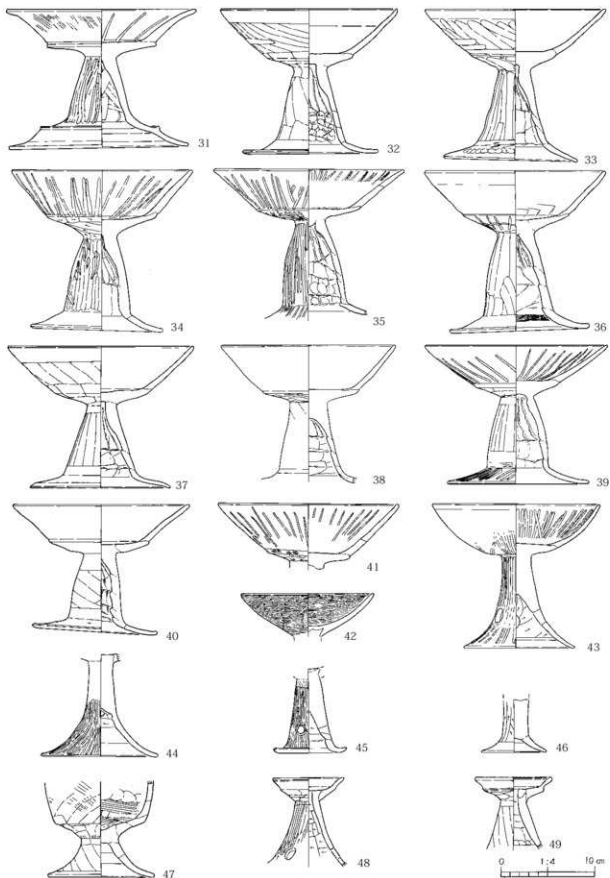


15

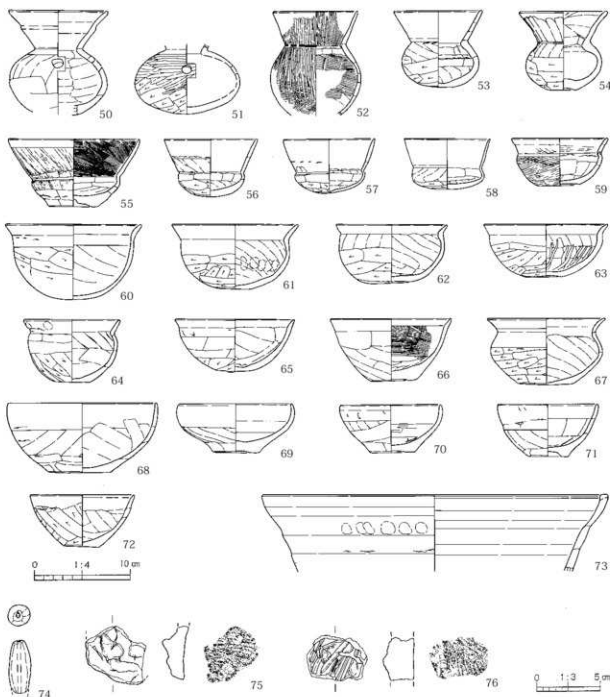
第136图 第326号住居跡出土遺物(2)



第137图 第326号住居跡出土遺物(3)



第138图 第326号住居跡出土遺物(4)



第139図 第326号住居跡出土遺物(5)

19	S字状口縁台付甕	A.口縁部径(15.6)。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ハケ、内面髹ナデ。D.角閃石、石英、白色粒。E.内外一淡褐色。F.口縁部3/4。H.覆土中。
20	S字状口縁台付甕	A.口縁部径14.1。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。頸部内面ハケ。胴部外面ハケ、内面ナデ。D.石英、白色粒。E.内外一明赤褐色。F.4/5。H.覆土中。
21	S字状口縁台付甕	A.口縁部径(13.4)。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後ハケ、内面髹ナデ。D.角閃石、白色粒。E.内外一淡黄褐色。F.上半1/4。H.床面付近。
22	S字状口縁台付甕	A.口縁部径11.1。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後ハケ、内面ハケの後下半髹ナデ。D.角閃石、石英、白色粒。E.内外一淡赤褐色。F.上半1/3。H.床面付近。
23	S字状口縁台付甕	A.台端部径8.5。B.粘土組織み上げ。C.台部外面ナデの後ハケ、内面ナデ。D.角閃石、チャート。E.外一淡黄褐色、内一明赤褐色。F.台部のみ。H.床面付近。
24	S字状口縁台付甕	A.台端部径9.7。B.粘土組織み上げ。C.胴部外面ケズリの後ハケ、内面髹ナデ。台部外面ナデの後ハケ、内面ナデ。D.片岩粒、白色粒。E.外一淡黄色、内一淡褐色。F.台部3/4。G.底部内外面に砂付着。H.覆土中。

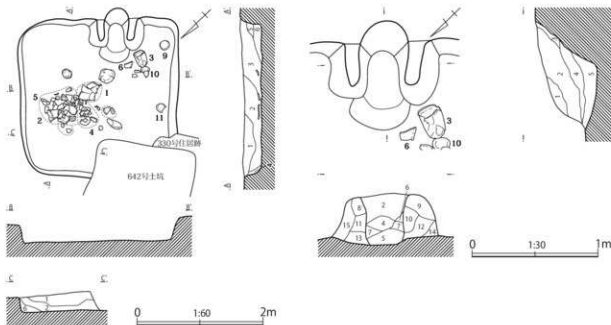
25	大形甌	A.口縁部径24.3、器高25.1、底部径8.8。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面篋ナデ、内面ハケの後篋ナデ。底部内外面ケズリ。D.角閃石、白色粒。E.内外一淡黄褐色。F.3/4。H.覆土中。
26	小形甌	A.口縁部径(13.6)、器高10.7、底部径3.9。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部内外面ミガキ。底部内外面ナデ。D.角閃石、白色粒。E.外一橙褐色、内一黄灰色。F.2/3。H.覆土中。
27	大形甌	A.口縁部径22.2、器高26.4、底部径7.9。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篋ナデの後上ミガキ。底部内外面ケズリ。D.片岩粒、角閃石、石英、チャート、白色粒。E.外一橙褐色、内一赤褐色。F.ほぼ完形。H.覆土中。
28	中形直口甌	A.口縁部径(13.5)、器高15.8、底部径3.6。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後ミガキ、内面篋ナデ。底部外面ケズリ。D.角閃石、白色粒。E.内外一暗赤褐色。F.3/4。G.胴部内面に指頭圧痕を残す。H.覆土中。
29	中形直口甌	A.口縁部径12.0、器高15.3、底部径2.7。B.粘土組織み上げ。C.口縁部外面ヨコナデの後ミガキ、内面ヨコナデ。胴部外面ナデ、内面ケズリの後一部ナデ。底部内外面ナデ。D.角閃石、白色粒。E.外一淡黄褐色、内一淡橙褐色。F.4/5。G.胴部内面に指頭圧痕を残す。H.床面付近。
30	小形鉢	A.口縁部径11.8、器高10.9、底部径4.1。B.粘土組織み上げ。C.口縁部外面ハケの後ヨコナデ、内面篋ナデ。胴部外面ケズリ、内面篋ナデ。底部内外面ナデ。D.長石。E.内外一灰白色。F.ほぼ完形。H.覆土中。
31	有段高坏	A.口縁部径20.0、器高14.8、脚端部径18.9。B.粘土組織み上げ。C.口縁部外面ハケの後ヨコナデ、内面ヨコナデの後放射状暗文。坏部内外面ヨコナデ。脚柱部外面ミガキ。内面上半較り目・下半ナデ。脚端部内外面ヨコナデ。D.角閃石、石英、白色粒。E.内外一明赤褐色。F.4/5。H.覆土中。
32	高坏	A.口縁部径18.8、器高15.4、脚端部径14.4。B.粘土組織み上げ。C.口縁部外面ヨコナデの後篋ナデ、内面ヨコナデ。坏部内外面篋ナデ。脚柱部外面篋ナデ、内面上半較り目・下半ナデ。脚端部内外面ヨコナデ。D.角閃石、白色粒。E.内外一明赤褐色。F.完形。G.脚柱部内面に指頭圧痕を残す。H.覆土中。
33	高坏	A.口縁部径19.2、器高16.1、脚端部径14.2。B.粘土組織み上げ。C.口縁部外面ヨコナデの後指ナデ、内面ヨコナデ。坏部外面ケズリの後ナデ、内面ナデ。脚柱部外面篋ナデ、内面上半較り目・下半ナデ。脚端部内外面ヨコナデ。D.角閃石、白色粒。E.外一赤褐色、内一橙褐色。F.4/5。G.脚端部外面に指頭圧痕を残す。H.覆土中。
34	高坏	A.口縁部径(19.2)、器高17.2、脚端部径(14.0)。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデの後放射状暗文。坏部外面ケズリ、内面篋ナデ。脚柱部外面ナデ、内面上半較り目・下半ナデ。脚端部内外面ヨコナデ。D.角閃石、石英、白色粒。E.外一明赤褐色、内一赤褐色。F.2/3。H.覆土中。
35	高坏	A.口縁部径(20.4)。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデの後放射状暗文。坏部内外面ミガキ。脚柱部外面ミガキ。内面上半較り目・下半ナデ。脚端部外面ヨコナデの後放射状暗文、内面ヨコナデ。D.角閃石、石英、チャート。E.外一赤褐色、内一淡赤褐色。F.1/2。H.覆土中。
36	高坏	A.口縁部径(19.3)、器高17.7、脚端部径(14.9)。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。坏部外面ナデの後ミガキ、内面篋ナデ。脚柱部外面ナデ、内面上半較り目・下半ナデ。脚端部外面ヨコナデ、内面ハケの後ヨコナデ。D.角閃石、白色粒。E.外一赤褐色、内一淡赤褐色。F.2/3。H.覆土中。
37	高坏	A.口縁部径19.6、器高15.0、脚端部径14.7。B.粘土組織み上げ。C.口縁部外面篋ナデの後ヨコナデ、内面ヨコナデ。坏部内外面篋ナデ。脚柱部外面篋ナデ、内面上半較り目・下半ナデ。脚端部内外面ヨコナデ。D.角閃石、白色粒。E.外一明赤褐色、内一橙褐色。F.4/5。H.覆土中。
38	高坏	A.口縁部径18.6。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。坏部内外面篋ナデ。脚柱部外面ナデ、内面上半較り目・下半ナデ。脚端部内外面ヨコナデ。D.角閃石、白色粒。E.内外一明赤褐色。F.4/5。H.覆土中。
39	高坏	A.口縁部径(19.2)、器高14.1、脚端部径15.0。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデの後放射状暗文。坏部内外面篋ナデ。脚柱部外面篋ナデ、内面上半較り目・下半ナデ。脚端部外面ヨコナデの後放射状暗文、内面ヨコナデ。D.角閃石、白色粒。E.外一橙褐色、内一明赤褐色。F.3/4。H.覆土中。
40	高坏	A.口縁部径18.6、器高13.8、脚端部径13.1。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。坏部内外面ナデ。脚柱部外面篋ナデ、内面上半較り目・下半ナデ。脚端部内外面ヨコナデ。D.角閃石、白色粒。E.内外一明赤褐色。F.4/5。H.覆土中。
41	高坏	A.口縁部径19.2。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデの後放射状暗文。D.角閃石、白色粒。E.外一橙褐色、内一明赤褐色。F.坏部のみ。H.覆土中。
42	高坏	A.口縁部径(14.1)。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ミガキ。D.角閃石、石英。E.外一橙褐色、内一淡黄褐色。F.坏部1/3。H.覆土中。
43	高坏	A.口縁部径17.2、器高15.2、脚端部径11.8。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。坏部内外面ミガキ。脚柱部外面ミガキ、内面ケズリ。脚端部内外面ヨコナデ。D.石英、チャート、白色粒。E.内外一橙褐色。F.4/5。G.脚部穿孔は3カ所。H.貯蔵穴P5内。
44	高坏	A.脚端部径12.3。B.粘土組織み上げ。C.脚部外面ケズリの後ミガキ、内面ケズリの後下端ヨコナデ。D.片岩粒、角閃石、石英。E.内外一明赤褐色。F.脚部のみ。H.覆土中。
45	高坏	A.脚端部径(7.8)。B.粘土組織み上げ。C.脚部外面ミガキ、内面上半ケズリの後下端ヨコナデ。D.角閃石。E.内外一淡黄褐色。F.脚部のみ。H.覆土中。
46	高坏	A.脚端部径6.9。B.粘土組織み上げ。C.脚柱部外面ケズリ、脚端部内外面ヨコナデ。D.角閃石、石英、白色粒。E.内外一褐色。F.脚部のみ。H.覆土中。
47	脚坏鉢	A.脚端部径11.3。B.粘土組織み上げ。C.体部内外面ハケの後ナデ。脚端部内外面ヨコナデ。D.片岩粒、角閃石、石英、白色粒。E.外一淡黄褐色、内一橙褐色。F.2/3。G.体部内面に指頭圧痕を残す。H.覆土中。
48	器台	A.口縁部径7.5。B.粘土組織み上げ。C.器受部内外面ヨコナデ。脚部外面ケズリの後ミガキ、内面ケズリ。D.片岩粒、角閃石、白色粒。E.内外一明赤褐色。F.上半3/4。G.脚部穿孔は3カ所。H.覆土中。

49	器 台	A.口縁部径(8.1)。B.粘土組織み上げ。C.器受部内外面ヨコナデ。胴部外面篋ナデ、内面上半ケズリ・下半ナデ。D.片岩粒、角閃石、石英。E.外一明赤褐色、内一明赤褐色。F.上平4/5。G.胴部内面に指頭圧痕を残す。H.覆土中。
50	小形 鉢	A.口縁部径(10.5)。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面篋ナデ。D.角閃石、石英、チャート、白色粒。E.内外一赤褐色。F.2/3。G.体部穿孔は焼成前。H.覆土中。
51	小形 鉢	B.粘土組織み上げ。C.体部外面ケズリの後上半ミガキ、内面ナデ。D.角閃石、チャート、白色粒。E.内外一明赤褐色。F.口縁部欠損。G.体部穿孔は焼成前。H.覆土中。
52	小形直口壺	A.口縁部径(9.0)。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ミガキ。体部外面ハケの後ミガキ、内面ハケ。D.角閃石、白色粒。E.内外一淡褐色。F.1/5。H.覆土中。
53	小形直口壺	A.口縁部径9.4。器高8.1。底部径3.2。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデの後下半ケズリ、内面篋ナデ。底部外面ナデ。D.角閃石、白色粒。E.外一明赤褐色、内一淡赤褐色。F.4/5。H.覆土中。
54	小形直口壺	A.口縁部径9.4。器高8.3。底部径2.4。B.粘土組織み上げ。C.口縁部外面ヨコナデの後篋ナデ、内面ヨコナデ。胴部外面ナデの後下半ケズリ、内面指ナデ。底部内外面ナデ。D.片岩粒、角閃石、石英。E.内外一褐色。F.完形。G.内面に指頭圧痕を残す。H.覆土中。
55	小形 浅鉢	A.口縁部径13.9。器高7.2。底部径5.3。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ハケ。胴部外面ハケの後下半ナデ、内面篋ナデ。底部外面ケズリ。D.角閃石、石英、白色粒。E.内外一褐色。F.ほぼ完形。H.床面付近。
56	小形 浅鉢	A.口縁部径9.9。器高6.1。B.粘土組織み上げ。C.口縁部外面篋ナデの後ヨコナデ、内面ヨコナデ。体部外面ナデの後下半ケズリ、内面篋ナデ。D.角閃石、白色粒、赤色粒。E.内外一淡褐色。F.完形。H.覆土中。
57	小形 浅鉢	A.口縁部径9.7。器高5.7。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後下半ケズリ、内面篋ナデ。D.角閃石、白色粒。E.内外一褐色。F.完形。G.胴部内外面に指頭圧痕を残す。H.貯蔵穴P5内。
58	小形 浅鉢	A.口縁部径9.1。器高5.3。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後下半ケズリ、内面篋ナデ。D.角閃石、石英、白色粒。E.内外一明赤褐色。F.完形。H.床面付近。
59	小形 浅鉢	A.口縁部径(10.2)。器高5.0。底部径4.4。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ハケの後ヨコナデ。胴部外面ハケ、内面篋ナデ。底部内外面ナデ。D.角閃石、白色粒。E.外一淡褐色、内一淡黄褐色。F.3/4。H.覆土中。
60	杯	A.口縁部径(14.4)。器高7.9。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面篋ナデ。D.角閃石、石英、白色粒。E.外一淡赤褐色、内一明赤褐色。F.1/4。H.覆土中。
61	杯	A.口縁部径13.4。器高6.8。底部径3.2。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデの後下半ケズリ、内面篋ナデ。底部外面ナデ。D.角閃石、石英、白色粒。E.内外一明赤褐色。F.ほぼ完形。G.胴部内面に指頭圧痕を残す。H.覆土中。
62	杯 坏	A.口縁部径11.8。器高6.2。底部径4.0。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデの後下半ケズリ、内面篋ナデ。底部外面ケズリ。D.角閃石、石英、白色粒。E.内外一明赤褐色。F.完形。H.覆土中。
63	杯 坏	A.口縁部径13.2。器高5.6。底部径3.3。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデの後ケズリ、内面篋ナデの後放射状暗文。底部外面ケズリ。D.角閃石、石英、白色粒。E.内外一明赤褐色。F.ほぼ完形。H.覆土中。
64	杯 坏	A.口縁部径10.2。器高6.6。底部径3.8。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデの後下半ケズリ、内面篋ナデ。底部外面ナデ。D.角閃石、石英、白色粒。E.内外一褐色。G.口縁部外面に指頭圧痕を残す。F.完形。H.覆土中。
65	杯 坏	A.口縁部径12.7。器高5.6。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデ下半ケズリ、内面篋ナデ。D.角閃石、石英、白色粒。E.内外一明赤褐色。F.完形。H.覆土中。
66	杯 坏	A.口縁部径12.9。器高6.6。底部径5.1。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面篋ナデ、内面ハケの後ナデ。底部内外面ナデ。D.角閃石、チャート、白色粒。E.内外一明赤褐色。F.1/2。H.P4内。
67	杯 坏	A.口縁部径12.4。器高7.0。底部径6.0。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面上・下半ヨコナデ・下半ケズリ、内面篋ナデ。底部外面ケズリ。D.角閃石、白色粒。E.内外一褐色。F.4/5。H.覆土中。
68	埴	A.口縁部径15.7。器高7.3。底部径6.2。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面篋ナデ。底部内外面ナデ。D.角閃石、白色粒。E.内外一明赤褐色。F.完形。H.覆土中。
69	埴	A.口縁部径12.1。器高5.1。底部径5.0。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面篋ナデ、内面ヨコナデ。底部内外面ナデ。D.角閃石、白色粒。E.内外一淡赤褐色。F.完形。H.覆土中。
70	埴	A.口縁部径10.7。器高5.0。底部径4.9。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデ、内面ハケの後篋ナデ。底部内外面ナデ。D.金雲母、白色粒。E.内外一褐色。F.2/3。H.覆土中。
71	埴	A.口縁部径10.6。器高5.5。底部径4.3。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面篋ナデ。底部内外面ナデ。D.角閃石、白色粒。E.内外一褐色。F.完形。H.P3上面。
72	杯 坏	A.口縁部径(11.0)。器高5.5。底部径3.8。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面篋ナデ。底部内外面ケズリ。D.角閃石、石英、チャート。E.内外一淡黄褐色。F.1/2。H.P3上面。
73	内 耳 鍋	A.口縁部径(36.7)。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部内外面ナデ。D.角閃石、チャート。E.外一黒褐色、内一淡褐色。F.口縁部破片。G.胴部外面に指頭圧痕を残す。G.混入品。H.覆土中。
74	土 唾	A.残存長4.15、最大径1.75、重さ11.58g。B.手捏ね。C.ナデ。D.角閃石。E.外一淡褐色。F.3/4。H.覆土中。
75	土 壁 状 土 製 品	A.残存長4.6、最大径4.8、厚さ2.0、重さ24.48g。B.手捏ね。C.外面ナデ。D.石英、チャート。E.外一淡褐色。F.破片。H.覆土中。
76	土 壁 状 土 製 品	A.残存長3.6、最大径4.8、厚さ2.5、重さ35.29g。B.手捏ね。C.外面ナデ。D.角閃石、白色粒。E.外一褐色。F.破片。G.植物の茎のような圧痕を残す。H.覆土中。

## 第327号住居跡（第140図、写真図版63）

H地点の調査区中央部の北側寄りに位置する。重複する第330号住居跡と第642号土坑に切られている。

平面形は、コーナー部が丸みをもつ隅丸方形を呈している。規模は、南東～北西方向が2.53m、北東～南西方向が2.59mを測る。住居の主軸方位は、N-135°-Eを向いている。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは35cmある。残存する各壁の壁下には、壁溝は見られない。



第140図 第327号住居跡

## 第327号住居跡土層説明

- 第1層：黒褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を中量含む。）  
 第2層：黒褐色土層（径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を中量、焼土粒子を微量含む。）  
 第3層：黒褐色土層（径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を中量、焼土粒子を少量含む。）  
 第4層：黒褐色土層（径1～3cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。）  
 第5層：暗褐色土層（径1cmのロームブロック・ローム粒子・黒褐色土を少量含む。）  
 第6層：暗褐色土層（径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。）

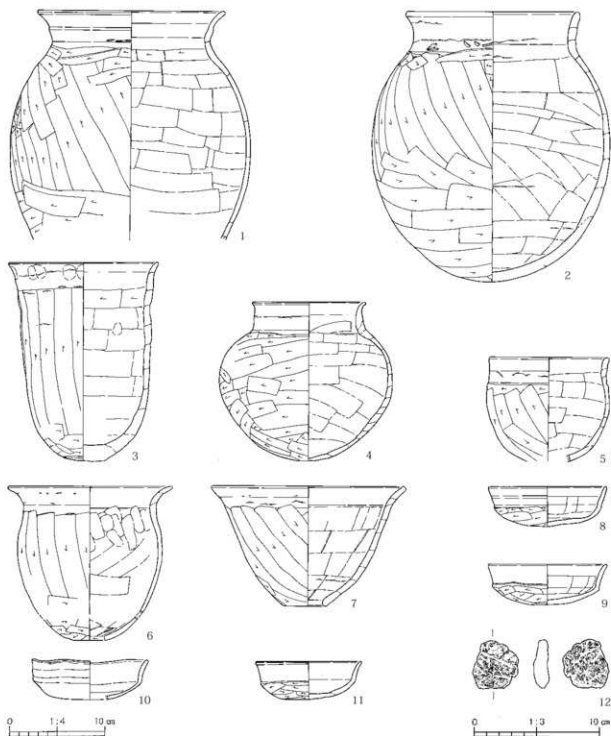
## 第327号住居跡カマド土層説明

- 第1層：暗褐色土層（灰色粘土粒子を多量、径0.5cmのロームブロックを少量含む。）  
 第2層：暗褐色土層（灰色粘土粒子を多量、焼土粒子を中量、径0.5cmのロームブロック・黒褐色土を少量含む。）  
 第3層：暗褐色土層（ローム粒子・灰色粘土粒子を多量、焼土粒子を微量含む。）  
 第4層：暗褐色土層（焼土粒子・灰色粘土粒子を多量、黒褐色土を少量含む。）  
 第5層：暗褐色土層（灰色粘土粒子を多量、径0.5cmのロームブロック・ローム粒子・焼土粒子を少量、炭化粒子・黒褐色土を微量含む。）  
 第6層：暗褐色土層（焼土粒子・灰色粘土粒子を少量、ローム粒子を微量含む。）  
 第7層：暗褐色土層（径0.5cm～1cmのロームブロック・焼土ブロック・灰色粘土粒子・黒褐色土を少量含む。）  
 第8層：暗灰褐色粘土層（ローム粒子・白色粒子を少量含む。）  
 第9層：暗灰褐色粘土層（焼土粒子を少量、ローム粒子・白色粒子を微量含む。）  
 第10層：暗灰褐色粘土層（径1～2cmの焼土ブロックを中量含む。）  
 第11層：暗灰褐色粘土層（ローム粒子・焼土粒子を微量含む。）  
 第12層：暗灰褐色粘土層（暗灰褐色粘土を主体とする。）  
 第13層：暗灰褐色粘土層（ローム粒子・焼土粒子を少量含む。）  
 第14層：暗褐色土層（径2～3cmのロームブロックを多量、焼土粒子・灰色粘土粒子を少量含む。）  
 第15層：暗褐色土層（灰色粘土粒子を中量、径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。）



床面は、ロームブロックを多量に含む暗黄褐色土を平坦に埋め戻した貼床式で、全体的に堅く締まっている。ピットは、検出されなかった。

カマドは、住居南東側壁の中央やや南寄りの位置に、住居の壁をあまり掘り込まずに壁に対して直角に付設されている。規模は、長さ84cm、最大幅88cmある。燃烧部は、ほぼ住居内にある。燃烧面は、住居の床面よりも一段低く、奥壁は、緩やかに傾斜して煙道部に向かっている。袖は、暗灰褐色



第141図 第327号住居跡出土遺物

粘土を、住居の壁に直接貼り付けて構築している。袖の内面は、ほとんど焼けていない。煙道部は、すでに削平されているため不明である。

遺物は、住居中央部の床面付近から、古墳時代後期後葉頃の完形に近い土器がまとめて出土している。本住居跡の時期は、遺構の重複関係や住居跡の形態及び出土土器の様相から、古墳時代後期後葉と考えられる。

第81表 第327号住居跡出土遺物観察表

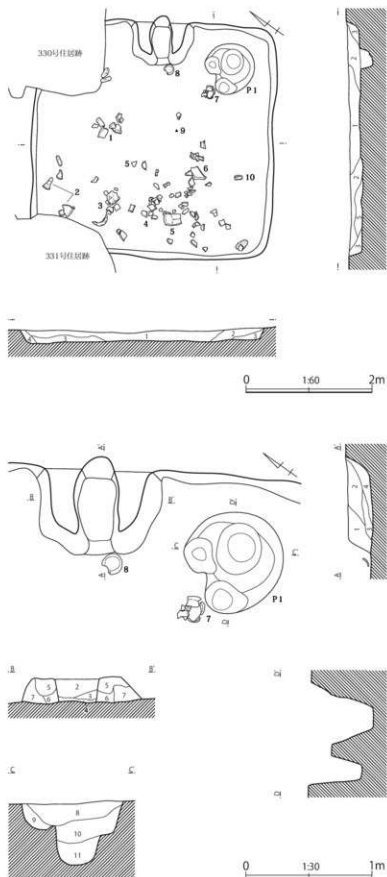
1	胴張甕	A.口縁部径19.8。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篋ナデ。D.角四石、石英、チャート。E.内外一淡橙褐色。F.1/3。H.床面直上。
2	胴張甕	A.口縁部径18.4、器高28.7。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篋ナデ。D.角四石、石英、白色粒。E.内外一淡橙褐色。F.完形。H.床面付近。
3	長胴甕	A.口縁部径15.8。器高21.1、底部径4.5。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篋ナデ。D.片岩粒、石英、チャート。E.外一淡橙褐色、内一褐色。F.4/5。G.口縁部外面に指頭圧痕を残す。H.床面直上。
4	鉢	A.口縁部径12.0、器高16.8。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篋ナデ。D.チャート、赤色粒、白色粒。E.内外一橙褐色。F.4/5。H.床面付近。
5	鉢	A.口縁部径12.7。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篋ナデ。D.片岩粒、角四石、石英、チャート、白色粒。E.外一淡橙褐色、内一橙褐色。F.底部欠損。H.床面付近。
6	小形甕	A.口縁部径17.4、器高16.3、底部径3.2。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篋ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一橙褐色。F.1/5。H.床面付近。
7	小形甕	A.口縁部径20.7、器高12.7、底部径(4.5)。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篋ナデ。D.石英、チャート、白色粒。E.内外一淡橙褐色。F.ほぼ完形。H.覆土中。
8	坏	A.口縁部径12.5、器高4.2。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面篋ナデ。D.白色粒、黒色粒。E.内外一橙褐色。F.完形。H.床面付近。
9	坏	A.口縁部径12.5、器高4.3。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面篋ナデ。D.雲母、チャート。E.内外一橙褐色。F.完形。H.覆土中。
10	坏	A.口縁部径12.3。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面不明瞭、内面ヨコナデ。D.白色粒。E.内外一橙褐色。F.4/5。H.覆土中。
11	坏	A.口縁部径11.2、器高4.0。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ヨコナデ。D.角四石、白色粒。E.内外一淡黄褐色。F.ほぼ完形。H.床面付近。
12	粘土塊	A.長さ3.8、最大幅3.6、厚さ1.2。B.手捏ね。C.外面ナデ。D.白色粒。E.外一淡橙褐色。F.破片。G.植物の茎のような圧痕を残す。H.覆土中。

### 第328号住居跡(第142図、写真図版64・65)

H地点の調査区中央部の北側寄りに位置する。重複する第330号住居跡と第331号住居跡に切られている。

平面形は、コーナー部が丸みをもつ隅丸方形を呈している。規模は、北東～南西方向が3.80m、北西～南東方向が3.95mを測る。住居の主軸方位は、N-56°-Eを向いている。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは20cmある。残存する各壁の壁下には、壁溝は見られない。床面は、ロームブロックを多量に含む暗黄褐色土を平坦に埋め戻した貼床式である。住居中央部は堅く締まっているが周辺部はやや軟弱である。ピットは、1カ所検出されている。P1は、いわゆる貯蔵穴と呼ばれるもので、住居東側コーナー部付近に位置する。形態は、84cm×80cmの不整円形を呈している断面は、二段に深くなっており、床面からの深さは51cmある。

カマドは、住居北東側壁のほぼ中央の位置に、壁に対して直角に付設されている。規模は、長さ77cm、最大幅103cmある。燃焼部は、ほぼ住居内にある。燃焼面は、住居の床面と同じ高さで水平に作られている。奥壁は、緩やかに傾斜して煙道部に向かっている。袖は、灰色粘土粒子やロームブロックを含む暗褐色土を、住居の壁に直接貼り付けて構築している。袖の内面は、ほとんど焼けてい



## 第328号住居跡土層説明

第1層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、径2～5cmのロームブロック・黒褐色土を中量含む。）

第2層：暗褐色土層（径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。）

第3層：黄褐色土層（ローム粒子を多量、径0.5～1cmのロームブロックを中量含む。）

第4層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、径0.5cmのロームブロックを少量含む。）

第5層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、径0.5cmのロームブロック・黒褐色土を少量含む。）

## 第328号住居跡カマド・貯蔵穴土層説明

第1層：暗褐色土層（径1～2cmのロームブロック・ローム粒子・焼土粒子・灰色粘土粒子を中量、黒褐色土を少量含む。）

第2層：暗褐色土層（灰色粘土粒子を多量、径1cmのロームブロック・ローム粒子・焼土ブロック・黒褐色土を少量含む。）

第3層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土ブロック・黒褐色土を微量含む。）

第4層：暗褐色土層（黒褐色土を中量、ローム粒子・焼土粒子を微量含む。）

第5層：暗褐色土層（灰色粘土粒子を多量、焼土粒子・黒褐色土を少量含む。）

第6層：暗褐色土層（灰色粘土粒子を多量、ローム粒子・焼土粒子を中量含む。）

第7層：黄褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を主体とする。）

第8層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を中量、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。）

第9層：暗褐色土層（径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。）

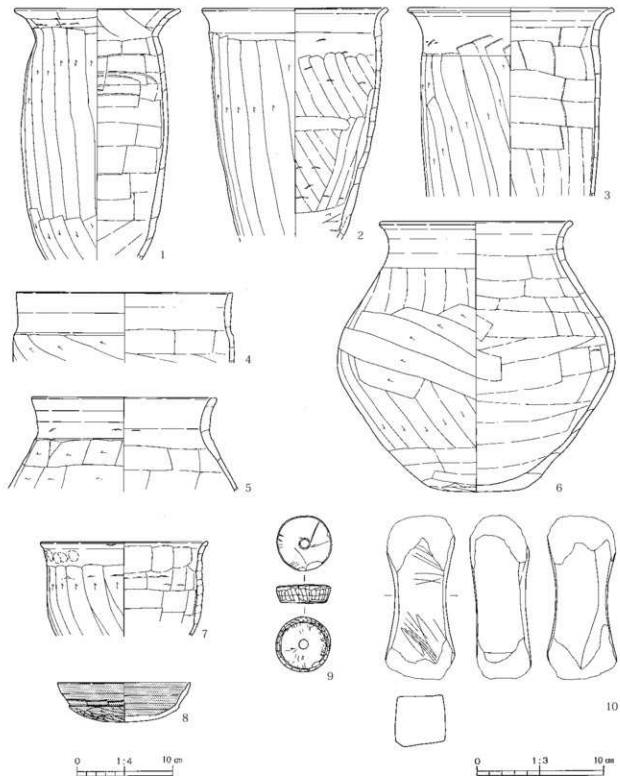
第10層：暗褐色土層（径2cmのロームブロック・黒褐色土を中量含む。）

第11層：暗褐色土層（ローム粒子・黒褐色土を中量含む。）

第142図 第328号住居跡

ない。煙道部は、すでに削平されているため不明である。

遺物は、覆土中や床面付近から、古墳時代後期後葉頃を主体とする土器の破片が多く出土している。土器以外では、石製紡錘車(No9)や柱状砥石(No10)が出土している。本住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土土器の様相から、古墳時代後期後葉頃と考えられる。



第143図 第328号住居跡出土遺物

第82表 第328号住居跡出土遺物観察表

1	長 胴 甕	A.口縁部径17.5。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篋ナデ。D.片岩粒、石英。E.外一淡褐色。内一淡黄褐色。F.4/5。H.床面付近。
2	長 胴 甕	A.口縁部径19.7。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篋ナデ。D.角閃石、石英、チャート。E.内外一淡褐色。F.口縁部～胴部破片。H.床面付近。
3	長 胴 甕	A.口縁部径(20.8)。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篋ナデ。D.片岩粒、角閃石、石英、チャート。E.外一淡褐色、内一淡褐色。F.上半1/4。H.床面付近。
4	大 形 鉢	A.口縁部径22.9。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篋ナデ。D.角閃石、石英、チャート。E.内外一淡赤褐色。F.口縁部のみ。H.覆土中。
5	胴 張 甕	A.口縁部径19.5。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篋ナデ。D.角閃石、石英。E.内外一淡褐色。F.口縁部～胴部4/5。H.覆土中。
6	胴 張 甕	A.口縁部径(20.4)、器高28.6、底部径10.2。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後下位置ナデ、内面篋ナデ。底部外面ケズリ。D.石英、チャート。E.内外一淡褐色。F.1/4。H.床面付近。
7	鉢	A.口縁部径17.7。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篋ナデ。D.片岩粒、角閃石、石英、チャート。E.内外一淡赤褐色。F.上半のみ。H.床面直上。
8	有段口縁杯	A.口縁部径14.0、器高4.1。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ヨコナデ。D.角閃石、白色粒。E.内外一淡赤褐色。F.ほぼ完形。G.内外面黒色処理。H.床面直上。
9	石製紡錘車	A.上面径4.4、下面径3.6、厚さ1.4、重さ38.70g。C.上下面とも丁寧な研磨。側面ケズリ。D.滑石。F.完形。H.床面直上。
10	柱状砥石	A.残存長12.9、最大幅5.5、厚さ4.1、重さ47.115g。B.撃ケズリにより成形。C.3面使用。上面に線状擦過痕。側面平坦な磨り面。D.凝灰岩。F.両端欠損。H.覆土中。

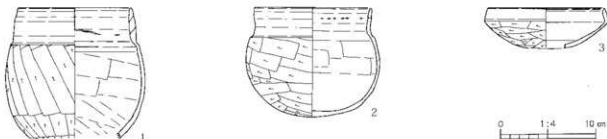
## 第329号住居跡 (第145図、写真図版66)

H地点の調査区西側の中央付近に位置する。重複する第331号住居跡に切られている。

平面形は、残存する部分から推測すると、コーナー部が丸みをもつ隅丸方形か隅丸長方形を呈していたと思われる。規模は、北西～南東方向が4.23m、北東～南西方向は3.38mまで測れる。住居の主軸方位は、N-44°-Wを向いている。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは40cmある。残存する各壁の壁下には、壁溝は見られない。床面は、ロームブロックを含む暗褐色土を平坦に埋め戻した貼床式である。ピットは、検出されていない。

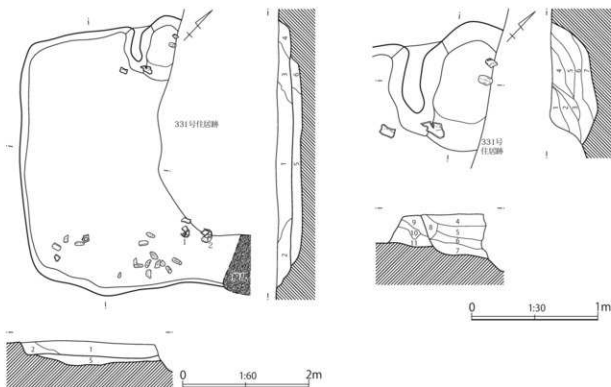
カマドは、住居北西側壁の中央付近に位置に、壁に対して直角に付設されている。規模は、長さ103cm、幅は80cmまで測れる。燃焼部は、ほぼ住居内にある。燃焼面は、住居の床面より一段低く、奥壁は緩やかに傾斜して煙道部に向かっている。袖は、灰色粘土粒子やロームブロックを含む暗褐色土を、住居の壁に直接貼り付けて構築している。袖の内面は、ほとんど焼けていない。煙道部は、すでに削平されているため不明である。

遺物は、カマド内や住居跡の覆土中から古墳時代後期を主体とする土器の破片が少量出土している。土器以外では、南東側壁際の床面付近から、長さ15cm程度の棒状の自然石が11個、南側コーナー部の床面付近から2個が散乱した状態で出土している。本住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土土器



第144図 第329号住居跡出土遺物

の様相から、古墳時代後期後葉頃と考えられる。



第145図 第329号住居跡

#### 第329号住居跡土層説明

- 第1層：暗褐色土層（径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含む。）  
 第2層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を中量、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。）  
 第3層：暗褐色土層（径1～3cmのロームブロック・ローム粒子を中量、焼土粒子・炭化粒子を少量含む。）  
 第4層：暗褐色土層（2層に似る。）  
 第5層：暗褐色土層（径0.5～3cmのロームブロック・ローム粒子・黒褐色土を中量、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。）  
 第6層：暗褐色土層（径0.5～3cmのロームブロック・ローム粒子を多量、黒褐色土を中量、焼土粒子・炭化物を微量含む。）

#### 第329号住居跡力マド土層説明

- 第1層：暗褐色土層（焼土粒子・灰色粘土粒子を中量、径0.5cmのロームブロック・ローム粒子・黒褐色土を少量含む。）  
 第2層：暗褐色土層（焼土粒子を中量、灰色粘土粒子を少量、ローム粒子・黒褐色土を微量含む。）  
 第3層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・径1～3cmの焼土ブロック・黒褐色土を少量含む。）  
 第4層：暗褐色土層（径1～3cmの灰色粘土ブロック・黒褐色土を多量、径0.5～1cmの焼土ブロックを中量、ローム粒子を少量含む。）  
 第5層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・径0.5～1cmの焼土ブロック・灰色粘土粒子・黒褐色土を中量含む。）  
 第6層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子・黒褐色土を中量、焼土粒子を少量含む。）  
 第7層：暗褐色土層（径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子・黒褐色土を少量含む。）  
 第8層：灰色粘土層（灰色粘土を主体に、ロームブロック・ローム粒子を中量、焼土粒子を微量含む。）  
 第9層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子・灰色粘土粒子を中量、焼土粒子・炭化粒子を少量含む。）  
 第10層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子・炭化粒子を少量含む。）  
 第11層：暗褐色土層（径1.5～2cmのロームブロック・ローム粒子・灰色粘土粒子を中量、焼土粒子を微量含む。）

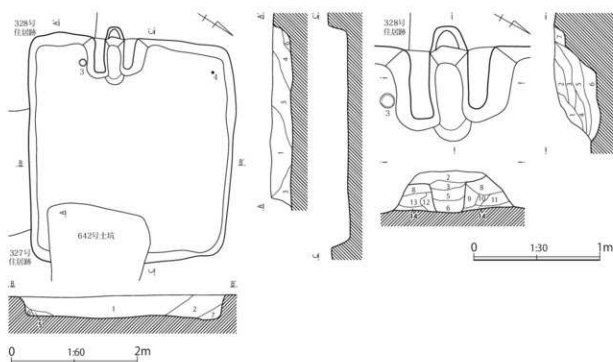
第83表 第329号住居跡出土遺物観察表

1	鉢	A.口縁部径12.0、残存高13.9。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面逆ナデ。D.片岩粒、白色粒。E.内外一淡茶褐色。F.口縁部1/3。G.口縁部外面に黒斑あり。H.覆土中。
2	鉢	A.口縁部径12.5、器高11.6。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面上半逆ナデ・下半丁寧なナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一淡橙褐色。F.ほぼ完形。H.覆土中。
3	模倣杯	A.口縁部径12.4。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.白色粒。E.内外一黒褐色。F.口縁部1/2。H.覆土中。

## 第330号住居跡 (第146図、写真図版67)

H地点の調査区中央部の北側寄りに位置する。重複する第642号土坑に切られ、第327号住居跡と第328号住居跡を切っている。

平面形は、コーナー部が丸みをもつ隅丸長方形を呈している。規模は、南西～北東方向が3.55m、



第146図 第330号住居跡

## 第330号住居跡土層説明

- 第1層: 暗褐色土層 (径0.5～2 cmのロームブロックを中量、焼土粒子・黒褐色土を少量、ローム粒子を微量含む。)
- 第2層: 暗褐色土層 (ローム粒子を中量、径0.5～1 cmのロームブロックを少量含む。)
- 第3層: 暗褐色土層 (ローム粒子を少量、径0.5 cmのロームブロック・焼土粒子を微量含む。)
- 第4層: 暗褐色土層 (径0.5～2 cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。)
- 第5層: 暗褐色土層 (径0.5 cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。)
- 第6層: 暗褐色土層 (径0.5 cmのロームブロック・ローム粒子を中量含む。)
- 第7層: 暗褐色土層 (径0.5 cmのロームブロックを中量、径1 cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。)

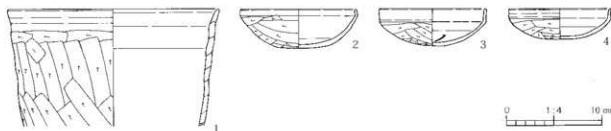
## 第330号住居跡カマド土層説明

- 第1層: 暗褐色土層 (径0.5 cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。)
- 第2層: 暗褐色土層 (径0.5～1 cmのロームブロック・ローム粒子を中量、焼土粒子を微量含む。)
- 第3層: 暗褐色土層 (灰色粘土粒子を多量、径0.5 cmのロームブロック・焼土粒子を少量、暗褐色土を微量含む。)
- 第4層: 暗褐色土層 (ローム粒子・灰色粘土粒子を少量、焼土粒子を微量含む。)
- 第5層: 暗褐色土層 (灰色粘土粒子を多量、径1 cmのロームブロック・径0.5～1 cmの焼土ブロックを少量含む。)
- 第6層: 暗褐色土層 (径0.5 cmのロームブロック・焼土粒子・灰色粘土・黒褐色土を少量含む。)
- 第7層: 粘土・焼土の混合層。
- 第8層: 暗褐色土層 (径0.5 cmのロームブロック・焼土粒子・白色粒子・粘土粒子を少量含む。)
- 第9層: 暗褐色土層 (灰色粘土を多量、径0.5 cmのロームブロック・径0.5 cmの焼土ブロックを少量含む。)
- 第10層: 黒褐色土層 (焼土粒子を少量、粘土粒子を微量含む。)
- 第11層: 暗褐色土層 (ローム粒子・焼土粒子・灰色粘土を微量含む。)
- 第12層: 暗褐色土層 (径0.5～1 cmの焼土ブロック・焼土粒子を多量、径0.5 cmのロームブロック・ローム粒子・黒褐色土を少量含む。)
- 第13層: 黒褐色土層 (灰色粘土粒子を多量、径0.5～1 cmのロームブロック・ローム粒子を中量、焼土粒子を微量含む。)
- 第14層: 暗褐色土層 (径1～2 cmのロームブロックを多量含む。)

南東～北西方向が3.30mを測る。住居の主軸方位は、N-123°-Wを向いている。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは38cmある。残存する各壁の壁下には、壁溝は見られない。床面は、ロームブロックを含む暗褐色土を平坦に埋め戻した貼床式である。住居中央部は堅く締まっているが、周辺部はやや軟弱である。ピットは、検出されていない。

カマドは、住居南西側壁の中央やや南側コーナー部寄りに位置に、壁に対して直角に付設されている。規模は、長さ91cm、最大幅は97cmを測る。燃焼部は、住居内にある。燃焼面は、住居の床面より若干低く、奥壁は緩やかに傾斜して煙道部に向かっている。袖は、灰色粘土ブロックを含む暗褐色土を、住居の壁に直接貼り付けて構築している。袖の内面は、ほとんど焼けていない。煙道部は、すでに削平されているため不明である。

遺物は、住居中央部の床面付近や周辺部の覆土中から、古墳時代後期末～白鳳時代初頭頃を主体とする土器の破片が少量出土している。土器以外では、住居南東側の壁際の覆土中から、長さ15cm程度の棒状の自然石が8個散在した状態で出土している。本住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土土器の様相から、白鳳時代と考えられる。



第147図 第330号住居跡出土遺物

第84表 第330号住居跡出土遺物観察表

1	大形甕	A.口縁部径17.4。B.粘土粗積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。D.片岩粒、白色粒。E.内外一淡褐色。F.口縁部1/2弱。H.覆土中。
2	環	A.口縁部径12.4。器高4.1。B.粘土粗積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後ケズリ、内面ナデ。D.白色粒。E.内外一暗褐色。F.4/5。H.覆土中。
3	模倣環	A.口縁部径11.4。器高4.0。B.粘土粗積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後ケズリ、内面鏡ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一暗茶褐色。F.完形。H.覆土中。
4	模倣環	A.口縁部径10.8。器高3.2。B.粘土粗積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後ケズリ、内面ナデ。D.白色粒。E.内外一暗茶褐色。F.完形。H.覆土中。

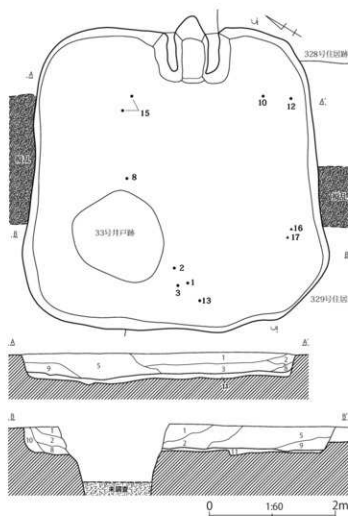
### 第331号住居跡 (第148図、写真図版68)

H地点の調査区西側の中央付近に位置する。重複する第33号井戸跡に切られ、第328号住居跡と第329号住居跡を切っている。

平面形は、コーナー部の丸み強い隅丸長方形を呈している。規模は、北東～南西方向が4.85m、北西～南東方向が4.92mを測る。住居の主軸方位は、N-67°-Eを向いている。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは48cmある。残存する各壁の壁下には、壁溝は見られない。床面は、ロームブロックを含む暗褐色土を平坦に埋め戻した貼床式である。ピットは、検出されていない。

カマドは、住居北東側壁のほぼ中央に位置に、壁に対して直角に付設されている。規模は、長さ107cm、最大幅は123cmを測る。燃焼部は、住居の壁を掘り込まないで住居内にある。燃焼面は、住

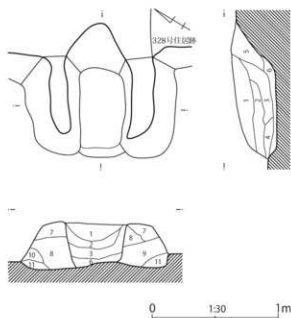




## 第331号住居跡土層説明

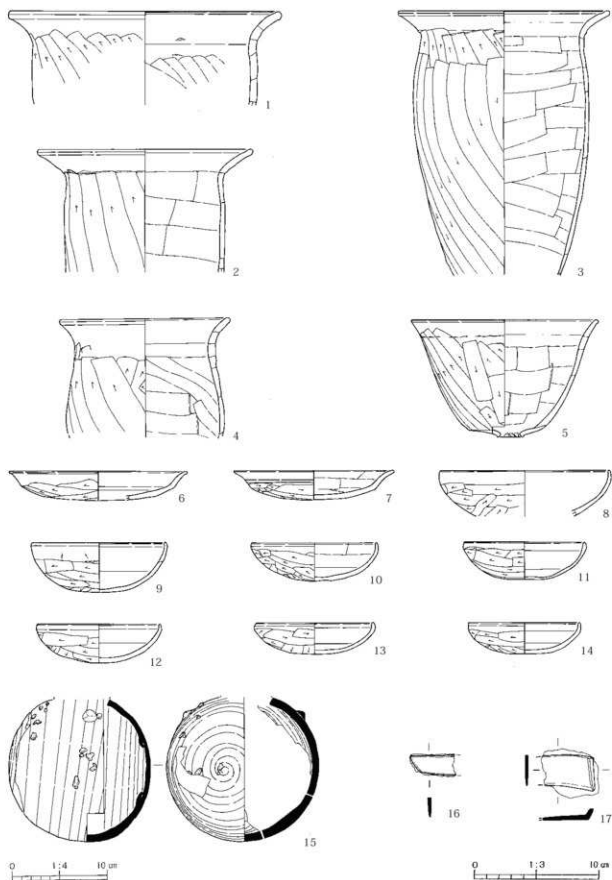
- 第1層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を少量含む。）
- 第2層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子・焼土粒子を少量含む。）
- 第3層：暗褐色土層（径1～5cmのロームブロックを多量、ローム粒子を中量、焼土粒子・炭化粒子を少量含む。）
- 第4層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を中量、焼土粒子を微量含む。）
- 第5層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・焼土粒子を少量含む。）
- 第6層：暗褐色土層（径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を中量、焼土粒子・炭化粒子を少量含む。）
- 第7層：暗褐色土層（径5cmのロームブロックを含む。）
- 第8層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を中量含む。）
- 第9層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含む。）
- 第10層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロックを含む。）
- 第11層：暗褐色土層（径1～3cmのロームブロックを中量含む。しまりを有する。）

## 第331号住居跡カマド土層説明



- 第1層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子・焼土粒子を中量、炭化物・灰色粘土粒子を少量含む。）
- 第2層：暗褐色土層（灰色粘土粒子を中量、径0.5cmのロームブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を少量含む。）
- 第3層：暗褐色土層（灰色粘土粒子を多量、径1～2cmのロームブロック・径0.5～1cmの焼土ブロックを中量、炭化粒子を少量含む。）
- 第4層：暗褐色土層（径0.5～2cmのロームブロックを多量、焼土粒子・粘土粒子を少量含む。）
- 第5層：暗褐色土層（灰色粘土粒子を中量、径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。）
- 第6層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子・灰色粘土を中量、焼土粒子を少量、炭化粒子を微量含む。）
- 第7層：灰色粘土層（灰色粘土を主体に、ローム粒子・焼土粒子・白色粒子を少量含む。）
- 第8層：暗褐色土層（灰色粘土を主体に、径0.5cmの焼土ブロックを中量、ローム粒子を微量含む。）
- 第9層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子・径0.5cmの焼土ブロック・灰色粘土粒子を中量含む。）
- 第10層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。）
- 第11層：暗褐色土層（径1～3cmのロームブロック・ローム粒子を含む。）

第148図 第331号住居跡



第149图 第331号住居跡出土遺物

居の床面より一段低く、水平に作られている。奥壁は、緩やかに傾斜して煙道部に向かっている。袖は、灰色粘土を住居の壁に直接貼り付けて構築している。袖の内面は、ほとんど焼けていない。煙道部は、すでに削平されているため不明である。

遺物は、住居周辺部の覆土中から、土器の破片や自然石が多く出土している。本住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土土器の様相から、白鳳時代と考えられる。

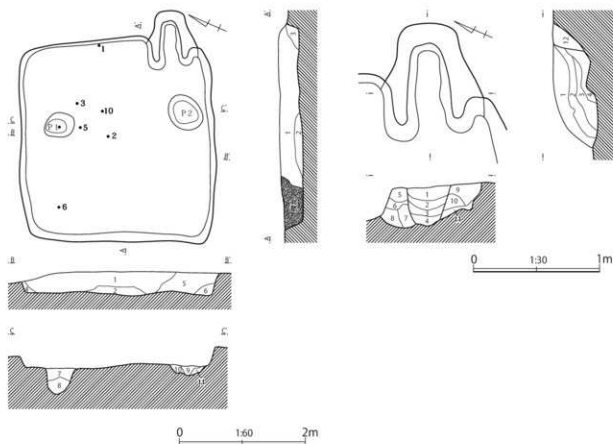
第85表 第331号住居跡出土遺物観察表

1	長 胴 甕	A.口縁部径(28.9)。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面笠ナデ。D.角四石、チャート。E.外一橙褐色、内一淡橙褐色。F.口縁部破片。H.覆土中。
2	長 胴 甕	A.口縁部径(22.8)。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面笠ナデ。D.角四石、白色粒。E.外一淡褐色、内一淡橙褐色。F.口縁部1/4。H.覆土中。
3	長 胴 甕	A.口縁部径22.4。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面笠ナデ。D.角四石、白色粒。E.外一淡橙褐色、内一橙褐色。F.口縁部破片。H.床面付近。
4	長 胴 甕	A.口縁部径(18.0)。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面笠ナデ。D.角四石、石英。E.外一淡褐色、内一淡橙褐色。F.口縁部1/4。H.覆土中。
5	小 形 甕	A.口縁部径(19.8)。器高12.4、底部径2.8。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面笠ナデ。D.角四石、白色粒。E.内外一橙褐色。F.1/3。H.覆土中。
6	皿	A.口縁部径(18.8)。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ヨコナデ。D.角四石、白色粒、黒色粒。E.内外一橙褐色。F.1/3。H.覆土中。
7	皿	A.口縁部径(17.0)。器高3.1。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面笠ナデ。D.角四石、白色粒。E.内外一淡橙褐色。F.1/4。H.覆土中。
8	坏	A.口縁部径(18.0)。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ヨコナデ。D.角四石、石英。E.外一淡黄褐色、内一橙褐色。F.1/5。H.覆土中。
9	坏	A.口縁部径(14.2)。器高5.2。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後ケズリ、内面ヨコナデ。D.白色粒。E.内外一淡橙褐色。F.1/4。H.覆土中。
10	坏	A.口縁部径13.3。器高4.0。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ヨコナデ。D.角四石、チャート。E.内外一橙褐色。F.完形。H.床面付近。
11	坏	A.口縁部径(12.8)。器高3.9。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ヨコナデ。D.角四石、白色粒。E.内外一橙褐色。F.1/3。H.覆土中。
12	坏	A.口縁部径(13.0)。器高4.1。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ヨコナデ。D.角四石、白色粒。E.内外一橙褐色。F.1/3。H.床面付近。
13	坏	A.口縁部径(12.5)。器高3.3。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ヨコナデ。D.片岩粒、角四石、白色粒。E.内外一淡橙褐色。F.1/4。H.床面付近。
14	坏	A.口縁部径(11.8)。器高3.3。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ヨコナデ。D.角四石、石英、安山岩粒。E.内外一橙褐色。F.完形。H.覆土中。
15	須 恵 器 フラスコ形甕	B.ロクロ成形。C.胴部内外面回転ナデ。D.白色粒。E.内外一灰白色。F.胴部1/3。G.胴部外面に自然輪が掛かる。H.覆土中。
16	鉄 製 品 刀	A.残存長3.6、幅1.6、厚さ0.2、重さ4.52g。B.鍛造。D.鉄製。F.刃部破片。H.覆土中。
17	鉄 製 品 鎌	A.残存長4.3、幅2.9、厚さ0.2、重さ28.57g。B.鍛造。D.鉄製。F.基部破片。H.床面付近。

## 第332号住居跡 (第150図、写真図版70)

H地点の調査区中央部の中央付近に位置する。北側には第329号住居跡が、南側には第337号住居跡が近接している。

平面形は、コーナー部が丸みをもつ隅丸長方形を呈している。規模は、北西～南東方向が3.19m、北東～南西方向が3.30mを測る。住居の主軸方位は、N-66°-Eを向いている。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは38cmある。残存する各壁の壁下には、壁溝は見られない。床面は、ロームブロックを多量に含む暗黄褐色土を平坦に埋め戻した貼床式である。住居中央部は堅く締まっているが、周辺部はやや軟弱である。ピットは、2カ所検出されている。P1とP2は、住居北西側壁と南東側壁の壁際中央に位置する。それぞれ長さ45cmと60cmの楕円形を呈し、床面から



第150図 第332号住居跡

## 第332号住居跡土層説明

- 第1層：暗褐色土層（ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含む。）  
 第2層：暗褐色土層（ローム粒子を多量含む。）  
 第3層：暗褐色土層（ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含む。）  
 第4層：暗褐色土層（ローム粒子を多量含む。）  
 第5層：暗褐色土層（ローム粒子を少量、ロームブロックを微量含む。）  
 第6層：暗褐色土層（ローム粒子を少量含む。）  
 第7層：暗褐色土層（径8cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。）  
 第8層：黄褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を主体に、暗褐色土を少量含む。）  
 第9層：暗褐色土層（径5cmのロームブロック・ローム粒子を中量含む。）  
 第10層：黄褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を主体に、暗褐色土を微量含む。）  
 第11層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を含む。）

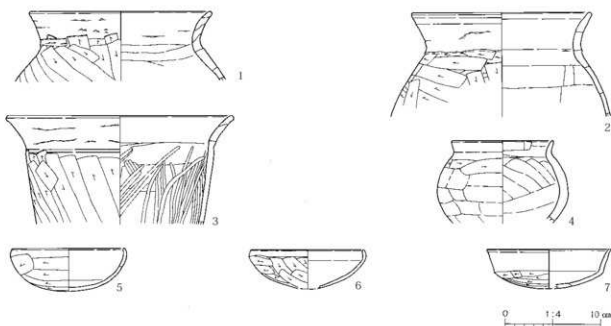
## 第332号住居跡カマド土層説明

- 第1層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を少量含む。）  
 第2層：暗褐色土層（焼土粒子を中量、ローム粒子を微量含む。）  
 第3層：暗褐色土層（焼土粒子を中量、ローム粒子を少量含む。）  
 第4層：黄褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を主体に、暗褐色土を中量、焼土粒子を微量含む。）  
 第5層：土層説明なし。  
 第6層：土層説明なし。  
 第7層：土層説明なし。  
 第8層：土層説明なし。  
 第9層：土層説明なし。  
 第10層：土層説明なし。  
 第11層：土層説明なし。  
 第12層：土層説明なし。

の深さは40cmと15cmある。このP1とP2は、その位置から住居の上屋を支える2本主柱の柱穴の可能性もあるが、明確ではない。

カマドは、住居北東側壁の東側コーナー部寄りに位置に、壁を掘り込んで直角に付設されている。規模は、長さ92cm、最大幅は80cmを測る。燃焼部は、半分が住居外に位置する。燃焼面は、住居の床面より若干低く、奥壁は直線的に煙道部に向かっている。袖は、灰色粘土ブロックを含む暗灰褐色土を、燃焼部奥壁から廻して構築している。袖の内面は、ほとんど焼けていない。煙道部は、すでに削平されているため不明である。

遺物は、古墳時代後期末から白鳳時代の土器の破片が、住居中央部の覆土中から多量に出土している。これらの土器破片は、その出土状況から住居廃絶後の覆土埋没過程で周辺から投棄されたものと考えられる。本住居跡の時期は、出土土器の様相から、白鳳時代と考えられる。



第151図 第332号住居跡出土遺物

第86表 第332号住居跡出土遺物観察表

1	胴張甕	A.口縁部径19.3。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面笊ナデ。D.角閃石、石英、白色粒。E.内外一橙褐色。F.口縁部4/5。H.床面付近。
2	胴張甕	A.口縁部径19.0。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面笊ナデ。D.角閃石、石英、白色粒。E.外一淡褐色、内一淡橙褐色。F.口縁部4/5。H.覆土中。
3	大形甕	A.口縁部径(24.0)。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面笊ナデの後雑なミガキ。D.角閃石、白色粒。E.外一明橙褐色、内一淡橙褐色。F.口縁部1/4。H.覆土中。
4	広口短頸甕	A.口縁部径(10.8)。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデの後ケズリ、内面笊ナデ。D.角閃石、白色粒。E.内外一橙褐色。F.1/5。H.覆土中。
5	坏	A.口縁部径(11.9)。器高4.5。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ヨコナデ。D.角閃石、白色粒。E.外一淡橙褐色、内一橙褐色。F.1/5。H.床面付近。
6	坏	A.口縁部径(12.0)。器高4.1。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面笊ナデ。D.角閃石、白色粒。E.内外一橙褐色。F.1/4。H.覆土中。
7	模倣坏	A.口縁部径(13.0)。器高4.1。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面笊ナデ。D.赤色粒。E.外一淡橙褐色、内一橙褐色。F.1/4。H.覆土中。

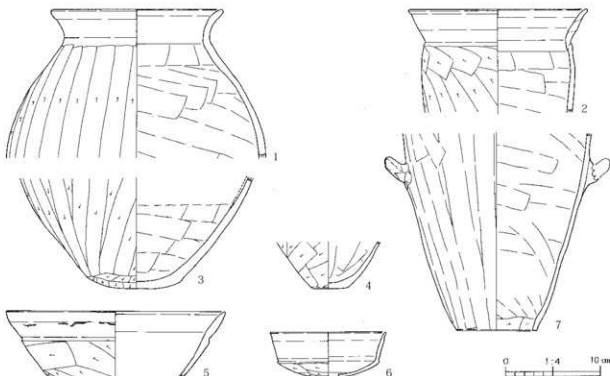
## 第333号住居跡（第154図、写真図版72）

H地点調査区西側の中央付近に位置する。住居跡の西側半分を重複する第335号住居跡に切られているため、本住居跡の全容は不明である。

平面形は、残存する部分から推測すると、コーナー部が丸みの強い歪んだ隅丸長方形を呈していたと思われる。規模は、東西方向は2.55mまで、南北方向は2.85mまで測れる。住居の主軸方位は、N-73°-Eを向いている。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは18cmある。残存する各壁の壁下には、壁溝は見られない。床面は、ロームブロックを多量に含む暗黄褐色土を平坦に埋め戻した貼床式である。カマド前から住居中央部の南側にかけては堅く締まっているが、周辺部はやや軟弱である。ピットは、1カ所検出されている。P1は、カマド左側の東側壁際に位置する。56cm×70cmのやや不整の隅丸長方形を呈している。断面は、二段に深くっており、確認面からの深さは43cmある。P1は、位置的には一般的ではないが、形態的には貯蔵穴の可能性が高い。

カマドは、住居東側壁の南東側コーナー部寄りに位置し、壁を若干掘り込んでやや斜めに付設されている。規模は、長さ104cm、最大幅は86cmを測る。燃烧部は、住居内にある。燃烧面は、住居の床面より若干低く、奥壁は緩やかに傾斜して煙道部に向かっている。袖は、暗灰色粘土ブロックを住居壁面に直接貼り付けて構築している。袖の内面は、あまり焼けていない。煙道部は、すでに削平されているため不明である。

遺物は、カマドの焚口部や住居北東側コーナー部の床面付近から、古墳時代後期の土器の破片が多く出土している。この中のNo7の把手付大形甕は、胎土の感じから在地産ではなく搬入品と考えられる。また、No6の模倣坏は、その形態的特徴から6世紀前半に位置づけられ、本遺跡で集落が希薄となる時期の土器として注目される。土器以外では、住居中央部の床面上から、長さ15cm前後の

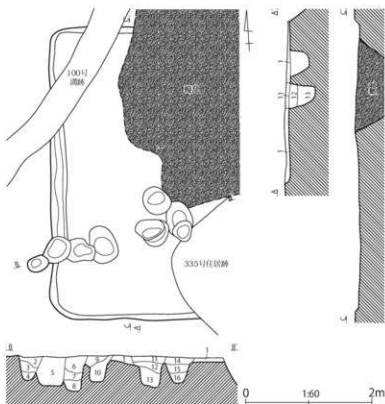


第152図 第333号住居跡出土遺物

自然石が離れて5個出土している。本住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土土器の様相から、古墳時代後期後半頃と考えられる。

第87表 第333号住居跡出土遺物観察表

1	胴張甕	A.口縁部径18.2。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篋ナデ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.内外一明茶褐色。F.上半1/2。H.床面直上。
2	長胴甕	A.口縁部径(19.0)。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篋ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.外一淡橙褐色、内一黒褐色。F.口縁部1/3。H.覆土中。
3	胴張甕	A.底部径10.0。B.粘土組織み上げ。C.胴部外面ケズリ、内面篋ナデ。底部外面ケズリ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.内外一暗茶褐色。F.下半のみ。H.床面直上。
4	長胴甕	A.口縁部径(12.4)。器高4.8。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ヨコナデ。D.白色粒。E.外一淡橙褐色、内一暗赤褐色。F.1/2弱。H.床面直上。
5	大形鉢	A.口縁部径(23.2)。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面丁寧ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一暗茶褐色。F.口縁部1/4強。H.床面直上。
6	模倣坏	A.口縁部径(12.4)。器高4.8。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ヨコナデ。D.白色粒。E.外一淡橙褐色、内一暗赤褐色。F.1/2弱。G.混入品と思われる。H.覆土中。
7	大形甕	A.底部径8.4。B.粘土組織み上げ。C.胴部内外面篋ナデ。底部内面ケズリ。D.赤色粒、褐色粒、白色粒。E.内外一明褐色。F.下半のみ。G.胴部外面に黒炭あり。H.床面直上。



第153図 第334号住居跡

第334号住居跡土層説明

- 第1層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子・白色粒子を微量含む。）
- 第2層：暗褐色土層（ローム粒子を中量、径0.5cmのロームブロックを少量、白色粒子を微量含む。）
- 第3層：暗褐色土層（径0.5～3cmのロームブロック・ローム粒子を中量含む。）
- 第4層：暗褐色土層（ローム粒子を主体に、径1～3cmのロームブロックを中量含む。）
- 第5層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子・白色粒子を中量、焼土粒子を微量含む。）
- 第6層：暗褐色土層（0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子・白色粒子を中量、炭化粒子を微量含む。）
- 第7層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、径0.5～1cmのロームブロックを中量含む。）
- 第8層：暗褐色土層（ローム粒子を主体に、径0.5～3cmのロームブロックを多量含む。）
- 第9層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を中量、焼土粒子を微量含む。）

- 第10層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を少量、黒褐色土を微量含む。）
- 第11層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を少量、白色粒子を微量含む。）
- 第12層：暗褐色土層（径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を中量、黒褐色土を少量、焼土粒子を微量含む。）
- 第13層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、径0.5～2cmのロームブロックを中量、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。）
- 第14層：11層と同じ。
- 第15層：12層と同じ。
- 第16層：13層と同じ。

### 第334号住居跡（第153図、写真図版73）

H地点調査区西側の中央付近に位置する。重複する第335号住居跡と第100号溝跡に切られている。住居跡の東側を後世の掘削によって切られており、残存しているのは住居跡の西側半分だけであるため、本住居跡の全容は不明である。

平面形は、残存する部分から推測すると、コーナー部が丸みをもつ隅丸方形か隅丸長方形を呈していたと思われる。規模は、南北方向が4.63m、東西方向は2.90mまで測れる。住居の西側壁は、 $N-5^{\circ}-E$ の方向を向いている。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは15cmある。住居西側壁の壁下の一部には、壁溝が巡っている。床面は、ロームブロックを含む暗褐色土を平坦に埋め戻した貼床式である。

遺物は、住居跡の覆土中から、古墳時代前期～白鳳時代の土師器や須恵器の破片が少量出土しただけである。本住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土土器の様相から、古墳時代後期後葉以前と考えられる。

### 第335号住居跡（第154図、写真図版73・74）

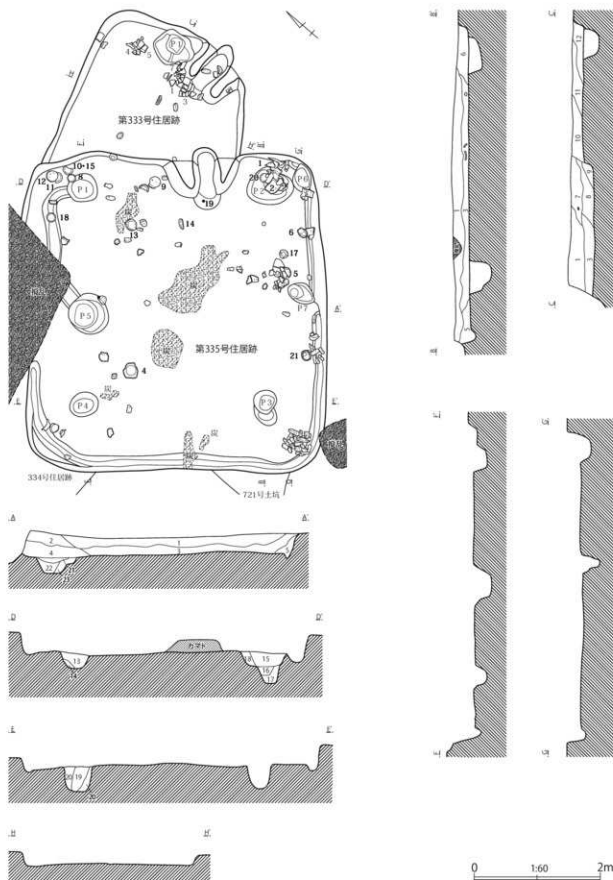
H地点調査区西側の中央付近に位置する。重複する第721号土坑に切れ、第333・334号住居跡を切っている。

平面形は、コーナー部の丸みが強い隅丸長方形を呈している。規模は、北東～南西方向が5.05m、北西～南東方向が4.80mを測る。住居の主軸方位は、 $N-49^{\circ}-E$ を向いている。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは40cmある。住居北東側壁以外の各壁の壁下には、壁溝がめぐっている。北西側壁北側の溝は、他の部分の壁溝と異なって壁下よりも内側にあり、P1とP5をつなぐように掘られていることから、壁溝とは異なった性格の溝であった可能性も考えられる。床面は、ロームブロックを多量に含む暗黄褐色土を平坦に埋め戻した貼床式で、全体的に硬く締まっている。床面上には、炭化粒子の分布が多く見られる。ピットは、7カ所検出されている。これらのピットは、その位置から6本主柱の可能性もあるが、やや配置がずれている部分もあり、明確ではない。P2は、カマド右側の住居東側コーナー部に位置し、いわゆる貯蔵穴と呼ばれているものである。平面形は、55cm×75cmの楕円形を呈している。断面は、二段に深くっており、確認面からの深さは40cmある。上面や内部からは土器が出土している。

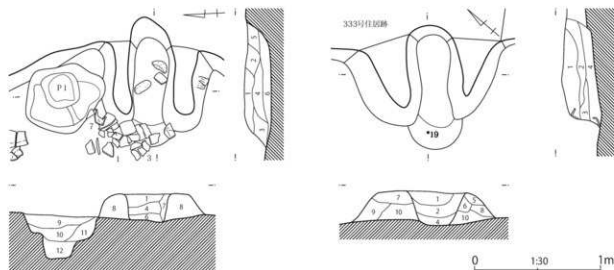
カマドは、住居北東側壁の中央やや東側コーナー部寄りに位置し、壁を若干掘り込んで直角に付設されている。規模は、長さ98cm、最大幅は124cmを測る。燃烧部は、大半が住居内にある。燃烧面は、住居の床面と同じ高さで若干傾斜して作られている。奥壁は、緩やかに傾斜して煙道部に向かっている。袖は、暗灰色粘土ブロックを含む暗褐色土を住居壁面に直接貼り付けて構築している。袖の内面は、あまり焼けていない。煙道部は、すでに削平されているため不明である。

遺物は、住居中央部の床面付近や壁際の覆土中から、古墳時代後期後半を主体とする土器の破片が多く出土している。これらの土器は、住居の廃絶に伴って遺棄されたものと、廃絶後の覆土の埋没過程で周囲から投棄されたものがあるようである。土器以外では、住居南側コーナー部の床面付近から、編物石の可能性が高い長さ15cm前後の自然石が多数集石された状態で出土している。本住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土土器の様相から、古墳時代後期後葉頃と考えられる。





第154图 第333・335号住居跡



第155図 第333・335号住居跡カマド

## 第333・335号住居跡土層説明

- 第1層：暗褐色土層（径0.5～3cmのロームブロック・ローム粒子を中量、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。）  
 第2層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。）  
 第3層：暗褐色土層（径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子・径0.5～2cmの焼土ブロック・焼土粒子・炭化粒子・炭化粒を中量含む。）  
 第4層：暗褐色土層（径1～2cmのロームブロック・ローム粒子を中量、焼土粒子・炭化粒子を少量、灰色粘土粒子を微量含む。）  
 第5層：黄褐色土層（ローム粒子を主体とする。）  
 第6層：黒褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子・炭化粒子を中量、焼土粒子を微量含む。）  
 第7層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子・焼土粒子を中量、炭化粒子を少量含む。）  
 第8層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を中量含む。）  
 第9層：暗褐色土層（径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を多量、炭化粒子を中量含む。）  
 第10層：暗褐色土層（ローム粒子を中量、径0.5～1cmのロームブロック・黒褐色土を少量含む。）  
 第11層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を中量、焼土粒子・灰色粘土粒子・黒褐色土を少量含む。）  
 第12層：暗褐色土層（径3cmの灰色粘土ブロックを中量、焼土粒子・炭化粒子を少量含む。）  
 第13層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。）  
 第14層：暗褐色土層（径0.5～3cmのロームブロックを主体とする。）  
 第15層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を中量、径2cmの炭化ブロックを少量、焼土粒子を微量含む。）  
 第16層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含む。）  
 第17層：暗褐色土層（径1cmのロームブロック・ローム粒子を中量含む。）  
 第18層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を中量含む。）  
 第19層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を中量、焼土粒子・炭化粒子を少量含む。）  
 第20層：暗褐色土層（径1cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子・炭化粒子を少量含む。）  
 第21層：暗褐色土層（径1.5cmのロームブロック・ローム粒子を中量含む。）  
 第22層：暗褐色土層（径0.5～3cmのロームブロック・ローム粒子を中量、炭化粒子を微量含む。）  
 第23層：黄褐色土層（径2～4cmのロームブロック・ローム粒子を主体とする。）

## 第333号住居跡カマド・貯蔵穴土層説明

- 第1層：暗褐色土層（焼土ブロック・焼土粒子・径0.5～2cmの灰色粘土ブロックを中量、径0.5cmのロームブロック・ローム粒子・炭化粒子を少量含む。）  
 第2層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・灰色粘土ブロックを多量含む。）  
 第3層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を中量、焼土粒子・炭化粒子を少量含む。）  
 第4層：暗褐色土層（焼土ブロック・焼土粒子・炭化粒子・径0.5～4cmの灰色粘土ブロックを少量含む。）  
 第5層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子・焼土粒子を少量、炭化粒子を微量含む。）  
 第6層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子・径0.5cmの焼土ブロック・焼土粒子を中量、灰色粘土ブロックを少量含む。）  
 第7層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子・焼土粒子を少量含む。）  
 第8層：カマド袖。

- 第9層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を中量、焼土粒子・黒褐色土を少量含む。）  
 第10層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子・焼土粒子を少量含む。）  
 第11層：暗褐色土層（径1～2cmのロームブロック・ローム粒子を中量、黒褐色土を含む。）  
 第12層：土層説明なし。

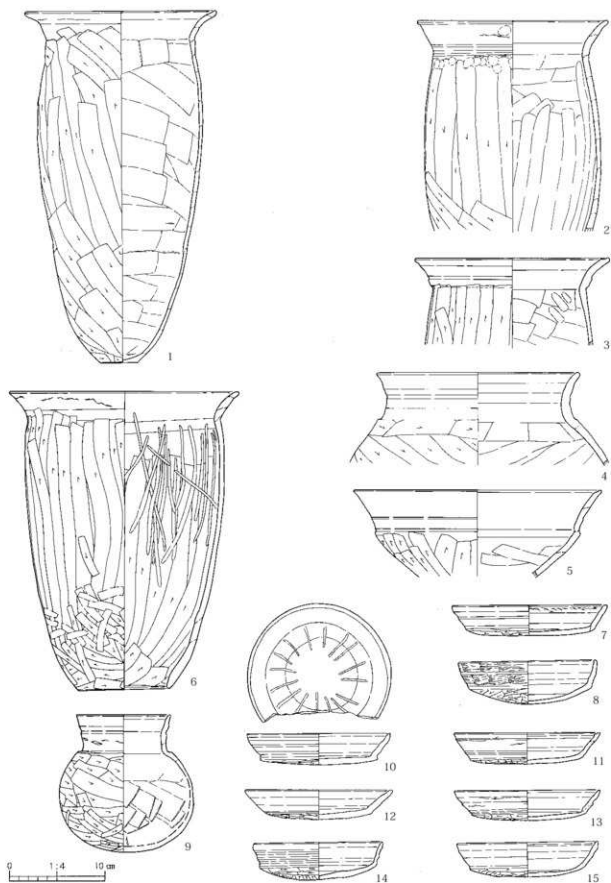
## 第335号住居跡カマド土層説明

- 第1層：黄褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子・径0.5cmの焼土ブロック・焼土粒子・灰黄色粘土を少量含む。）  
 第2層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子・灰黄色粘土粒子を中量、焼土粒子・炭化粒子を少量含む。）  
 第3層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子・灰黄色粘土粒子を中量、焼土粒子を少量含む。）  
 第4層：暗褐色土層（径0.5～3cmのロームブロック・ローム粒子・灰黄色粘質土を中量、焼土粒子・炭化粒子を少量含む。）  
 第5層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を中量、焼土粒子・炭化粒子を少量含む。）  
 第6層：暗褐色土層（径1～3cmの焼土ブロックを含む。）  
 第7層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子・焼土粒子・灰色粘土を微量含む。）  
 第8層：暗褐色土層（径0.5～2cmの焼土ブロック・焼土粒子を多量、径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を中量、炭化粒子を少量含む。）  
 第9層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子・灰色粘土を微量含む。）  
 第10層：暗褐色土層（灰色粘土粒子を多量、径0.5cmのロームブロック・ローム粒子・焼土粒子を微量含む。）

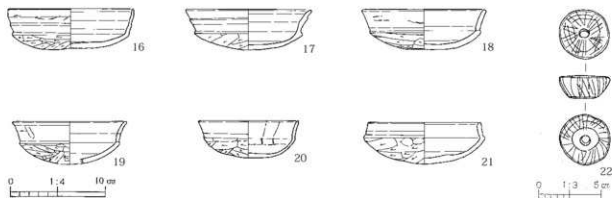
本住居跡は、床面上に炭化粒子の分布が多く見られ、覆土中にも焼土粒子が顕著に見られることから、あるいは消失した可能性もあろう。

第88表 第335号住居跡出土遺物観察表

1	長 胴 甕	A.口縁部径20.2、器高37.2、底部径4.0。B.粘土細積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篋ナデ。底部外面ケズリ。D.角閃石、チャート、白色粒。E.外-淡橙褐色、内-淡赤褐色。F.4/5。H.P2上面。
2	長 胴 甕	A.口縁部径(20.2)。B.粘土細積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篋ナデ。D.片岩粒、角閃石、石英、チャート。E.外-明赤褐色、内-橙褐色。F.1/3。G.頸部外面に指摺り痕を残す。H.P2内。
3	長 胴 甕	A.口縁部径20.6。B.粘土細積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篋ナデ。D.片岩粒、角閃石、チャート。E.外-淡橙褐色、内-橙褐色。F.口縁部1/4。H.P2内。
4	胴 張 甕	A.口縁部径21.6。B.粘土細積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篋ナデ。D.角閃石、石英、チャート、白色粒。E.内外-橙褐色。F.上半のみ。H.床面付近。
5	大 形 鉢	A.口縁部径(26.2)。B.粘土細積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面篋ナデ。D.角閃石、チャート、白色粒。E.内外-暗茶褐色。F.口縁部1/5。H.床面付近。
6	大 形 甕	A.口縁部径(24.2)。器高31.6、底部径9.6。B.粘土細積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ケズリの複雑なミガキ。D.角閃石、石英。E.内外-淡橙褐色。F.3/4。H.覆土中。
7	有段口縁杯	A.口縁部径(16.4)。器高3.2。B.粘土細積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ヨコナデ。D.片岩粒、角閃石、石英、白色粒。E.内外-淡黄褐色。F.3/4。G.口縁部内面に指摺り痕を残す。H.覆土中。
8	有段口縁杯	A.口縁部径14.7。器高4.6。B.粘土細積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ヨコナデ。D.角閃石、石英。E.内外-淡橙褐色。F.完形。H.床面直上。
9	直 口 甕	A.口縁部径9.9。器高14.5。B.粘土細積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面篋ナデ。D.片岩粒、角閃石、チャート、白色粒。E.内外-明赤褐色。F.完形。H.床面直上。
10	有段口縁杯	A.口縁部径(26.2)。器高3.3。B.粘土細積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ヨコナデの後放射状割吻。D.角閃石、白色粒。E.内外-淡褐色。F.4/5。G.内面赤彩。H.床面付近。
11	有段口縁杯	A.口縁部径15.5。器高3.3。B.粘土細積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ヨコナデ。D.角閃石、白色粒。E.内外-黒褐色。F.3/4。H.床面直上。
12	有段口縁杯	A.口縁部径15.6。器高3.1。B.粘土細積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ヨコナデ。D.片岩粒、角閃石、チャート、白色粒。E.外-淡黄褐色、内-灰黄褐色。F.完形。H.床面付近。
13	有段口縁杯	A.口縁部径15.4。器高3.2。B.粘土細積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ヨコナデ。D.片岩粒、角閃石、チャート、白色粒。E.外-明赤褐色、内-淡褐色。F.完形。H.覆土中。
14	有段口縁杯	A.口縁部径13.8。器高3.9。B.粘土細積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ヨコナデ。D.角閃石、石英。E.内外-淡黄褐色。F.完形。H.覆土中。
15	有段口縁杯	A.口縁部径15.0。器高3.6。B.粘土細積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ヨコナデ。D.角閃石、石英、白色粒。E.内外-淡褐色。F.3/4。H.床面付近。
16	有段口縁杯	A.口縁部径13.4。器高4.3。B.粘土細積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ヨコナデ。D.片岩粒、角閃石、白色粒。E.内外-灰黄褐色。F.完形。H.覆土中。
17	有段口縁杯	A.口縁部径13.4。器高4.2。B.粘土細積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ヨコナデ。D.角閃石、白色粒。E.外-明赤褐色、内-淡赤褐色。F.ほぼ完形。H.覆土中。
18	横 筒 甕	A.口縁部径13.1。器高4.3。B.粘土細積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ヨコナデ。D.角閃石、石英。E.内外-橙褐色。F.完形。H.覆土中。



第156图 第335号住居跡出土遺物(1)



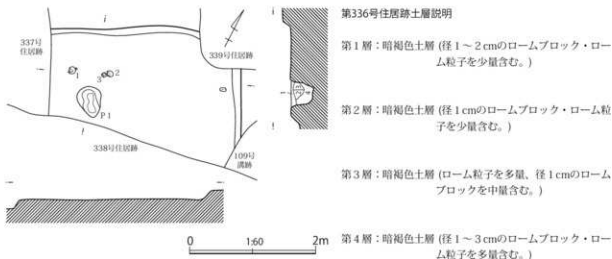
第157図 第335号住居跡出土遺物(2)

19	模倣環	A. 口縁部径12.1, B. 粘土縮積み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ヨコナデ。D. 角閃石、白色粒。E. 内外一橙褐色。F. 1/4。H. 覆土中。
20	模倣環	A. 口縁部径10.6、器高3.9。B. 粘土縮積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ヨコナデ。D. 角閃石、チャート。E. 内外一橙褐色。F. 完形。H. P2内。
21	模倣環	A. 口縁部径11.9、器高4.4。B. 粘土縮積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ヨコナデ。D. 角閃石、白色粒。E. 外一橙褐色、内一明赤褐色。F. 完形。H. 覆土中。
22	石製紡錘車	A. 上面径3.0、下面径2.2、厚さ1.8、重さ39.92g。B. 荒削りにより成形。C. 上下面とも研磨。側面ケズリの後研磨。D. 滑石。F. 完形。H. 覆土中。

## 第336号住居跡(第158図、写真図版75)

H地点調査区の中央に位置する。重複する第337・338・339号住居跡や第109号溝跡に切られている。住居跡の上面は、住居の床面近くまで削平されているため、遺構の遺存状態はあまり良好とはいえない。

平面形は、残存する部分から推測すると、コーナー部が丸みをもつ隅丸方形か隅丸長方形を呈していたと思われる。規模は、北西～南東方向は2.10mまで、北東～南西方向は3.10mまで測れる。住居の北西側壁は、N-63°-Eの方向を向いている。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは15cmある。残存する各壁の壁下には、壁溝は見られない。床面は、ロームブロックを含む暗褐色土を平坦に埋め戻した貼床式である。ピットは、1カ所検出されている。P1は、住居中央部



第336号住居跡土層説明

第1層：暗褐色土層(径1～2cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。)

第2層：暗褐色土層(径1cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。)

第3層：暗褐色土層(ローム粒子を多量、径1cmのロームブロックを中量含む。)

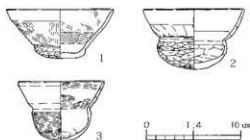
第4層：暗褐色土層(径1～3cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。)

第158図 第336号住居跡

の北西側に位置する。52cm×40cmの楕円形ぎみの形態を呈し、床面からの深さは36cmある。

遺物は、住居北西側の壁寄りの覆土中から、古墳時代前期の小形浅鉢が3点出土している。土器以外では、住居北東側の壁際より、自然石が1個出土している。

本住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土土器の様相から、古墳時代前期と考えられる。



第159図 第336号住居跡出土遺物

第89表 第336号住居跡出土遺物観察表

1	小形浅鉢	A.口縁部径11.4、器高5.2。B.粘土細積み上げ。C.口縁部内外面ハケの後ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一淡茶褐色。F.ほぼ完形。H.覆土中。
2	小形浅鉢	A.口縁部径10.8、器高6.4。B.粘土細積み上げ。C.口縁部内外面ナデの後ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面脂ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一淡褐色。F.2/3。H.覆土中。
3	小形浅鉢	A.口縁部径(9.2)、器高6.3。B.粘土細積み上げ。C.口縁部外面ヨコナデ、内面ハケの後ヨコナデ。体部外面ハケの後ナデ、内面ナデ。D.白色粒。E.内外一明茶褐色。F.3/4。H.覆土中。

第337号住居跡 (第160図、写真図版76)

H地点調査区の中央に位置する。重複する第338号住居跡に切られ、第336号住居跡を切っている。

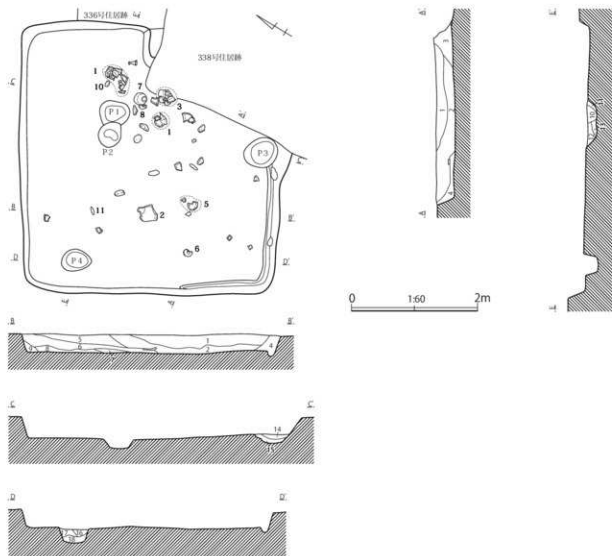
平面形は、コーナー部が丸みをもつ隅丸方形を呈している。規模は、北東～南西方向が4.30m、北西～南東方向が4.33mを測る。住居の主軸方位は、N-61°-Eを向いている。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは30cmある。南東側と南西側壁の壁下には、一部壁溝がめぐっている。床面は、ロームブロックを含む暗褐色土を平坦に埋め戻した貼床式で、全体的に硬く締まっている。ピットは、4カ所検出されているが、いずれもその性格は不明である。

カマドは、住居北東側壁の中央付近に位置している。左側袖の一部しか残存していないため、カマドの全容は不明である。規模は、残存長が60cm、残存幅が30cmを測る。袖は、暗灰褐色粘土ブロックを含む暗褐色土を、住居の壁に直接貼り付けて構築している。

遺物は、住居中央部の床面付近や覆土中から、古墳時代後期を主体とする土器が多く出土している。No4の高環脚部とNo8の小型直口壺は、古墳時代前期と中期のもので、混入品である。土器以外では、刃先による線条痕を持つ角閃石安山岩の自然石を利用した砥石(No10)が床面付近から出土し、住居中央部や南東側壁際から棒状の自然石が散在的に出土している。また、混入品ではあるが、覆土中から長さが11cmの当地域では最大級の剣形石製模造品(No11)が出土しており注目される。本住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土土器の様相から、古墳時代後期後葉頃と考えられる。

第90表 第337号住居跡出土遺物観察表

1	長 胴 甕	A.口縁部径(20.0)、推定高(37.0)、底部径5.8。B.粘土細積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面笠ナデ。底部外面ケズリ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.外上半一淡褐色・外下半一暗褐色、内一淡褐色。F.1/2。G.上半と下半は接合しない。器形は図上復元。H.床面付近。
2	胴 張 甕	A.口縁部径(20.0)。B.粘土細積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部ナデの後外面ケズリ、内面笠ナデ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.内外一茶褐色。F.上半1/4。H.覆土中。
3	鉢	A.口縁部径14.4、器高13.4。B.粘土細積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面笠ナデ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.内外一淡茶褐色。F.ほぼ完形。G.体部外面に黒斑あり。H.床面付近。
4	高 環	A.脚端部径13.4。B.粘土細積み上げ。C.脚部外面ミガキ、内面ハケの後ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一淡茶褐色。F.脚部のみ。G.円孔は縦2個1組で3カ所。H.床面付近。
5	有段口縁環	A.口縁部径15.8、器高3.8。B.粘土細積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一淡褐色。F.ほぼ完形。H.床面付近。



第160図 第337号住居跡

## 第337号住居跡土層説明

第1層：黒褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を中量、径2cmのロームブロック・白色粒子を少量、焼土粒子を微量含む。）

第2層：暗褐色土層（径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を中量、焼土粒子・白色粒子を少量含む。）

第3層：黒褐色土層

第4層：暗褐色土層

第5層：暗褐色土層

第6層：暗褐色土層

第7層：暗褐色土層

第8層：黄褐色土層

第9層：黄褐色土層

第10層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。）

第11層：黄褐色土層（径1cmのロームブロック・ローム粒子を主体とする。）

第12層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を中量含む。）

第13層：暗褐色土層（径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を含む。）

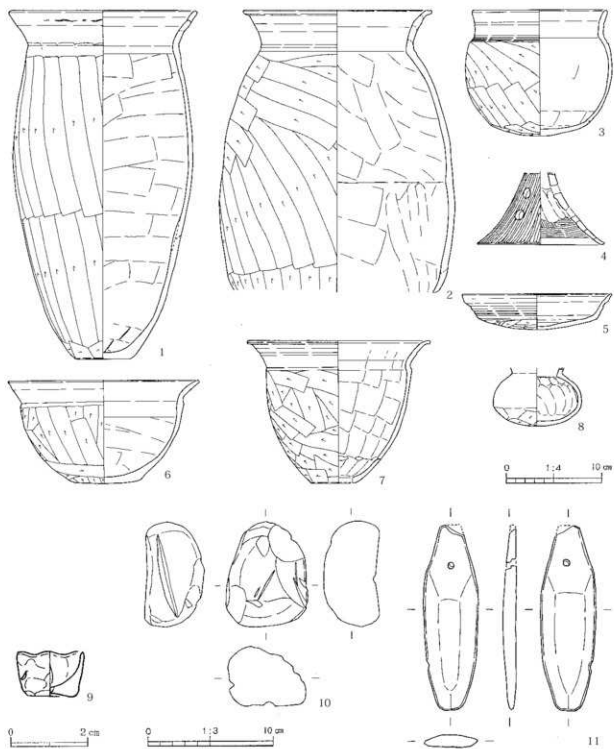
第14層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を含む。）

第15層：暗褐色土層

第16層：暗褐色土層（径0.5～3cmのロームブロック・ローム粒子を中量、焼土粒子を微量含む。）

第17層：暗褐色土層（径0.5～3cmのロームブロック・ローム粒子を多量、黒褐色土を少量含む。）

第18層：黄褐色土層（ローム粒子を多量、径2～5cmのロームブロックを中量含む。）



第161図 第337号住居跡出土遺物

6	鉢	A.口縁部径19.4、器高15.1、底部径4.7。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面指ナデ。底部外面ケズリ。D.片岩粒、白色粒。E.内外一暗褐色。F.ほぼ完形。G.混入品。H.覆土中。
7	小形甕	A.口縁部径19.4、器高15.1、底部径4.7。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面指ナデ。底部外面ケズリ。D.片岩粒、白色粒。E.内外一暗褐色。F.ほぼ完形。H.床面付近。
8	小形直口壺	A.残存高6.2。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデの後下半ケズリ、内面指ナデ。D.白色粒。E.内外一淡茶褐色。F.胴部のみ。G.混入品。H.覆土中。
9	小形土器	A.口縁部径(3.6)、器高2.3、底部径2.2。B.手摺ね。C.内外面ナデ。D.白色粒。E.内外一暗褐色。F.1/2。H.覆土中。



10	砥石	A.長さ8.3、幅6.5、厚さ4.5、重さ158.4g。B.自然石を使用。D.角四石、安山岩。F.完形。G.片側はよく磨れて若干窪んでいる。H.床面付近。
11	石製模造品 (側形)	A.長さ11.0、最大幅3.2、厚さ0.8、重さ37.6g。B.板状に剥離後整形。C.表裏面・側面とも研磨。D.緑色片岩。F.完形。G.両面穿孔。混入品。H.覆土中。

### 第338号住居跡（第162回）

H地点調査区の中央に位置する。重複する第661号土坑と第109号溝跡に切られ、第336・337号住居跡を切っている。

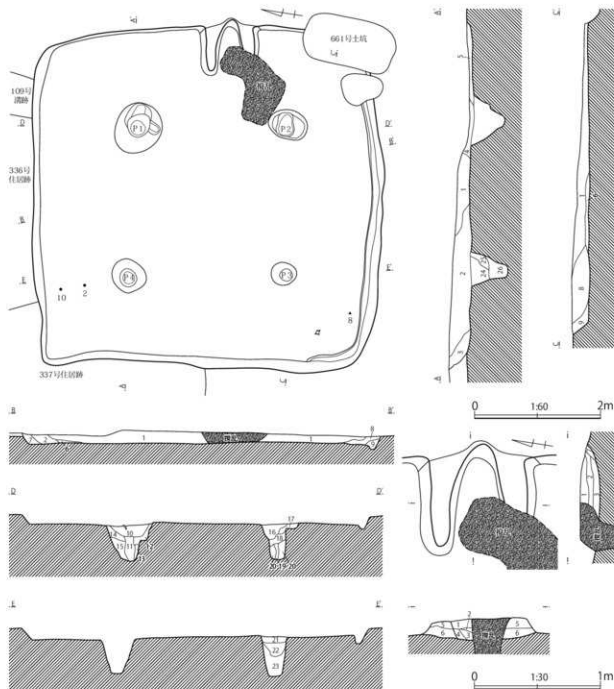
平面形は、コーナー部の丸み強い隅丸方形を呈している。規模は、東西方向が5.41m、南北方向が5.60mを測る。住居の主軸方位は、N-82°-Eを向いている。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは35cmある。南側壁の壁下には、壁溝が巡っている。床面は、ロームブロックを多量に含む暗黄褐色土を平坦に埋め戻した貼床式で、全体的に硬く締まっている。ピットは、4カ所検出されている。P1～P4は、住居の対角線上に配置されていることから、住居の上屋を支える4本支柱の柱穴と考えられる。P1とP2は、長さ63cm～80cmの楕円形を呈し、二段に深くなっている。床面からの深さは、それぞれ61cmと57cmある。P3とP4は、長さ40cm～55cmの円形ぎみの形態を呈し、床面からの深さは、それぞれ66cmと54cmある。

カマドは、住居東側壁の中央やや南側寄りの位置に、住居の壁に対して直角に付設されている。カマド右袖の半分を、後世の攪乱によって切られている。規模は、全長91cm、最大幅92cmを測る。燃焼部は、住居の床面より若干低く作られている。奥壁は、緩やかに傾斜して立ち上がって煙道部に向かっていている。袖は、暗褐色粘土ブロックを含む暗褐色土を、カマド奥壁から廻して構築している。煙道部は、すでに削平されているため不明である。

遺物は、住居周辺部の覆土中から土器の破片が出土している。土器以外では、住居南西側のコーナー部の床面付近から、性格不明の鉄製品の破片が多く散在して出土している。本住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土土器の様相から、白鳳時代と考えられる。

第91表 第338号住居跡出土遺物観察表

1	長胴甕	A.口縁部径(20.2)。B.粘土細積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面籠ナデ。D.白色粒。E.内外一淡褐色。F.口縁部1/4。H.覆土中。
2	皿	A.口縁部径(20.8)。器高3.7。B.粘土細積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ヨコナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一明褐色。F.1/4。H.覆土中。
3	杯	A.口縁部径(15.0)。B.粘土細積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ヨコナデ。D.白色粒。E.内外一淡茶褐色。F.口縁部1/4。H.掘り方埋土内。
4	須恵器 高台付塊	A.高台部径(10.0)。B.クロロ成形。C.底部外面回転ナデ、内面ナデ。高台部回転ナデ。D.白色粒。E.内外一淡灰色。F.高台部1/2。H.覆土中。
5	杯	A.口縁部径15.0。器高5.0。B.粘土細積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後ケズリ、内面ヨコナデ。D.白色粒。E.外一暗茶褐色、内一淡茶褐色。F.1/4。H.覆土中。
6	模倣杯	A.口縁部径(12.2)。B.粘土細積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一淡茶褐色。F.口縁部1/3。H.覆土中。
7	鉄製品	A.残存長16.1、最大幅9.2、厚さ0.6、重さ47.20g。B.鍛造。D.鉄製。F.破片。G.断面円形。H.床面付近。
8	鉄製品	A.残存長12.4、最大幅6.5、厚さ0.6、重さ48.76g。B.鍛造。D.鉄製。F.破片。G.断面円形。H.床面付近。
9	鉄製品	A.残存長8.1、最大幅1.4、厚さ0.8、重さ12.91g。B.鍛造。D.鉄製。F.破片。G.断面円形。H.床面付近。
10	土 錘	A.残存長5.4、最大径1.3、重さ9.1g。B.手捏ね。C.丁寧なナデ。D.白色粒。E.黒茶褐色。F.端部欠損。H.覆土中。
11	砥石	A.長さ13.2、最大幅5.0、厚さ3.0、重さ290.8g。B.自然石を利用。C.各面ともよく磨れている。D.流紋岩。F.完形。H.覆土中。



第162図 第338号住居跡

## 第338号住居跡土層説明

第1層：暗褐色土層

第2層：黒褐色土層

第3層：黒褐色土層

第4層：暗褐色土層

第5層：暗褐色土層 (径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。)

第6層：暗褐色土層 (径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子・炭化粒子を少量含む。)

第7層：暗褐色土層 (径0.5～3cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子・炭化粒子を少量、白色粒子・黒褐色土を微量含む。)

第8層：暗褐色土層 (径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を多量、炭化粒子・黒褐色土を微量含む。)

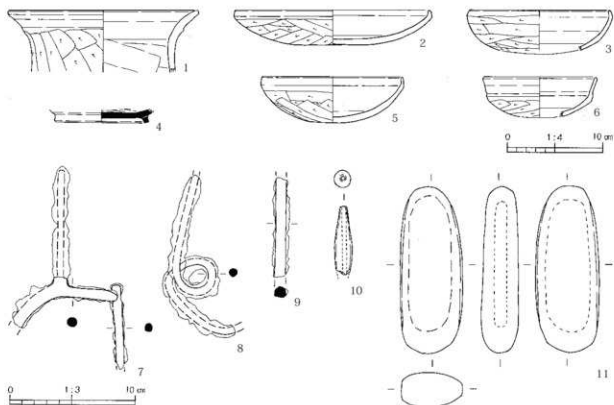
第9層：暗褐色土層 (ローム粒子を多量、径0.5cmのロームブロックを中量、炭化粒子を少量含む。)

第10層：暗褐色土層 (径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を多量、黒褐色土を少量、焼土粒子を微量含む。)

- 第11層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、径1cmのロームブロックを少量、黒褐色土を微量含む。）  
 第12層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。）  
 第13層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。）  
 第14層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、径1～3cmのロームブロックを少量含む。）  
 第15層：暗褐色土層（径1～3cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。）  
 第16層：暗褐色土層（径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。）  
 第17層：土層説明なし。  
 第18層：土層説明なし。  
 第19層：土層説明なし。  
 第20層：土層説明なし。  
 第21層：黄褐色土層（径1～2cmのロームブロック・ローム粒子を多量、黒褐色土を少量含む。）  
 第22層：黄褐色土層（径0.5～3cmのロームブロック・ローム粒子を少量、黒褐色土を微量含む。）  
 第23層：黄褐色土層（径0.5～3cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。）  
 第24層：暗褐色土層（径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を多量、黒褐色土を少量、焼土粒子を微量含む。）  
 第25層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を少量、炭化粒子を微量含む。）  
 第26層：暗褐色土層（径0.5～3cmのロームブロック・ローム粒子・黒褐色土を少量含む。）

## 第338号住居跡カマド土層説明

- 第1層：暗褐色土層（褐色粘土粒子を多量、ローム粒子・径0.5～1cmの焼土ブロック・焼土粒子を少量含む。）  
 第2層：暗褐色土層（褐色粘土粒子を多量、焼土粒子・炭化粒子を中量、ローム粒子を少量含む。）  
 第3層：暗褐色土層（焼土粒子・炭化粒子・褐色粘土粒子を多量、ローム粒子を少量含む。）  
 第4層：暗褐色土層（褐色粘土粒子を多量、径0.5cmのロームブロック・ローム粒子・焼土粒子を微量含む。）  
 第5層：暗褐色土層（褐色粘土粒子を多量、ローム粒子・焼土粒子を少量、白色粒子を微量含む。）  
 第6層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子・焼土粒子・褐色粘土粒子を多量、炭化粒子・白色粒子を微量含む。）  
 第7層：土層説明なし。



第163図 第338号住居跡出土遺物

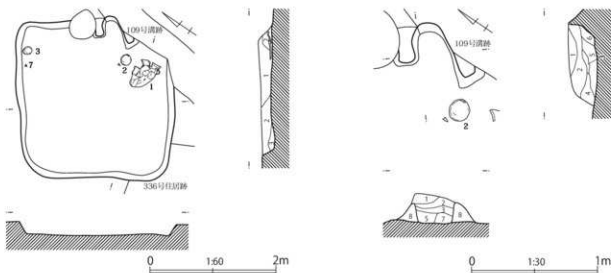
## 第339号住居跡（第164図、写真図版77）

H地点調査区の中央に位置する。重複する第109号溝跡に切られ、第336号住居跡を切っている。

平面形は、コーナー部の丸みが強い隅丸方形を呈している。規模は、北東～南西方向が2.50m、北西～南東方向が2.55mを測る。住居の主軸方位は、N-57°-Eを向いている。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは22cmある。各壁の壁下には、壁溝は見られない。床面は、ロームブロックを含む暗褐色土を平坦に埋め戻した貼床式で、全体的にやや軟弱である。ピットは、検出されていない。

カマドは、住居北東側壁の中央よりやや東側コーナー部寄りに位置し、住居の壁に対して直角に付設されている。規模は、全長44cm、最大幅74cmを測る。燃焼部は、住居の床面とほぼ同じ高さで水平に作られている。奥壁は、垂直ぎみに立ち上がって煙道部に向かっている。袖は、暗褐色粘土ブロックを含む暗褐色土を、住居の壁に直接貼り付けて構築している。煙道部は、すでに削平されているため不明である。

遺物は、カマド前や住居北側コーナー部近くの床面上から、完形に近い土器や鉄製鎌が出土している。土器以外では、覆土中から有孔石製品や土製紡錘車が出土している。また、この他に縄文時代の石鏃(第295図No18)や中世前期の龍泉窯系蹄連弁文青磁碗の破片なども、覆土中に混入して出土している。本住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土土器の様相から、古墳時代後期後葉頃と考えられる。



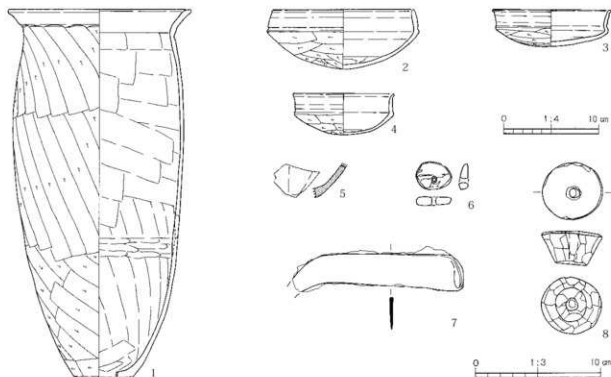
第164図 第339号住居跡

## 第339号住居跡土層説明

- 第1層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を中量、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。）  
 第2層：暗褐色土層（径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を中量含む。）  
 第3層：暗褐色土層（径0.5～3cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。）

## 第339号住居跡カマド土層説明

- 第1層：黄褐色土層（灰黄色粘土粒子を多量、焼土粒子を中量、径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。）  
 第2層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子・焼土粒子を少量含む。）  
 第3層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子・径0.5～2cmの焼土ブロック・焼土粒子・黒褐色土を微量含む。）  
 第4層：暗褐色土層（径0.5cmの焼土ブロック・焼土粒子を多量、径2cmのロームブロック・ローム粒子・炭化粒子を微量含む。）  
 第5層：暗褐色土層（径1～3cmのロームブロック・ローム粒子を多量、灰黄色粘土粒子を少量、焼土粒子を微量含む。）  
 第6層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含む。）  
 第7層：暗褐色土層（径1cmのロームブロック・ローム粒子・焼土粒子を中量含む。）  
 第8層：カマド袖。



第165図 第339号住居跡出土遺物

第92表 第339号住居跡出土遺物観察表

1	長頸甕	A.口縁部径19.4、器高39.1、底部径6.4。B.粘土細積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面澁ナデ。底部外面ケズリ。D.白色粒。E.内外一淡褐色。F.3/4。H.床面直上。
2	模倣杯	A.口縁部径15.0、器高6.3。B.粘土細積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ヨコナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一暗茶褐色。F.完形。G.体部外面に黒斑あり。H.床面付近。
3	模倣杯	A.口縁部径12.6、器高3.9。B.粘土細積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一淡褐色。F.ほぼ完形。G.体部外面に黒斑あり。H.床面直上。
4	模倣杯	A.口縁部径10.8、器高4.4。B.粘土細積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一淡褐色。F.1/2。G.器形は歪んでいる。H.覆土中。
5	龍泉窯系青磁碗	B.口ロ成形成。C.体部内外面回転ナデの後施釉。外面に簡速弁文を施文。D.白色粒。E.内外一淡緑色、肉一淡灰色。F.破片。H.覆土中。
6	石製品	A.縦2.16、横2.79、厚さ0.7、重さ6.0g。C.表裏面未調整。側面研磨。D.滑石。F.完形。G.両面穿孔。H.カマド内。
7	鉄製鎌	A.残存長13.8、幅2.8、厚さ0.4、重さ58.72g。C.鍛造。D.鉄製。F.先端部欠損。H.床面直上。
8	土製紡錘車	A.上面径4.4~4.6、下面径2.5~2.7、高さ2.7、重さ52.98g。C.上面ナデ、下面及び側面澁ケズリ。D.白色粒、黒色粒。F.ほぼ完形。H.覆土中。

## 第340号住居跡 (第166図、写真図版78)

H地点調査区中央部の中央付近に位置する。重複する第341・342号住居跡や第652・656・657号土坑に切られている。住居跡の上面を床面近くまで削平されているため、遺構の遺存状態はあまり良好ではない。

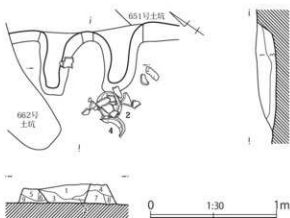
平面形は、残存する部分から推測すると、コーナー部の丸みが強い隅丸方形か隅丸長方形を呈していたと思われる。規模は、南西～北東方向は4.60mまで、南東～北西方向は2.40mまで測れる。住居の南東側壁は、N-42°-Eの方向を向いている。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは15cmある。残存する各壁の壁下には、壁溝は見られない。床面は、ロームブロックを多量に含む暗黄褐色土を平坦に埋め戻した貼床式である。住居中央部は比較的硬く締まっているが、周辺



第166图 第340·341号住居跡

## 第340・341号住居跡土層説明

- 第1層：暗褐色土層（径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子・白色粒子を中量、焼土粒子を微量含む。）  
 第2層：暗褐色土層（径2cmのロームブロック・ローム粒子を中量含む。しまりを有する。）  
 第3層：暗褐色土層（径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を中量、炭化粒子を微量含む。）  
 第4層：暗褐色土層（径0.5～3cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子・白色粒子を微量含む。）  
 第5層：暗褐色土層（径1～3cmのロームブロック・ローム粒子を多量、炭化粒子を微量含む。）  
 第6層：暗褐色土層（径1～2cmのロームブロック・ローム粒子を中量含む。）  
 第7層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。）  
 第8層：暗褐色土層（径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を中量含む。）  
 第9層：暗褐色土層（ローム粒子を中量、径0.5～1cmのロームブロックを少量含む。しまりはない。）  
 第10層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を少量、黒褐色土を微量含む。）  
 第11層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。）  
 第12層：暗褐色土層（径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子・黒褐色土を中量含む。）  
 第13層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を中量、焼土粒子・黒褐色土を少量含む。）  
 第14層：暗褐色土層（径1～2cmのロームブロック・ローム粒子を中量、白色粒子を少量含む。）  
 第15層：暗褐色土層（径0.5～3cmのロームブロック・ローム粒子を少量、炭化粒子を微量含む。）  
 第16層：暗褐色土層（径3～5cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。）  
 第17層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を少量、径2cmのロームブロックを微量含む。）  
 第18層：暗褐色土層（径1～2cmのロームブロック・ローム粒子を中量含む。）  
 第19層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。）  
 第20層：暗褐色土層（径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含む。）  
 第21層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を中量、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。）  
 第22層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含む。）  
 第23層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、径0.5cmのロームブロックを中量、黒褐色土を少量含む。）  
 第24層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を中量、径3cmのロームブロック・炭化粒子を少量含む。）  
 第25層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を中量、焼土粒子・径3cmの灰黄色粘土ブロックを微量含む。）  
 第26層：暗褐色土層（径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を多量、黒褐色土を少量、焼土粒子・径1cmの灰黄色粘土ブロックを微量含む。）



第167図 第341号住居跡カマド

## 第341号住居跡カマド土層説明

- 第1層：暗褐色土層（径1cmのロームブロック・ローム粒子・径0.5～2cmの焼土ブロック・焼土粒子・灰褐色粘土粒子を中量含む。）  
 第2層：灰褐色粘土層（ローム粒子を微量含む。）  
 第3層：黒褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子・焼土粒子を中量、炭化粒子を微量含む。）  
 第4層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・径0.5～1cmの灰褐色粘土ブロックを中量、焼土粒子を微量含む。）  
 第5層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子・焼土粒子を微量含む。）  
 第6層：暗褐色土層（径1cmの灰褐色粘土ブロックを中量、径0.5cmのロームブロック・ローム粒子・焼土粒子を微量含む。）

- 第7層：灰褐色粘土層（径1cmのロームブロック・焼土粒子・暗褐色土を微量含む。）  
 第8層：暗褐色土層（灰褐色粘土ブロックを多量、径0.5cmのロームブロック・径0.5～1cmの焼土ブロックを中量含む。）  
 第9層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を中量、焼土粒子を微量含む。）

部はやや軟弱である。ピットは、7カ所検出されている。P1は、いわゆる貯蔵穴の可能性が推測されるもので、住居南側コーナー部に位置する。65cm×75cmの隅丸長方形を呈し、床面からの深さは15cmある。この他のピットは、住居との関係は不明である。

遺物は、住居周辺部の床面付近から、土器の破片が少量出土しただけである。本住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土土器の様相から、古墳時代前期と考えられる。

## 第341号住居跡 (第166図、写真図版78・79)

H地点調査区中央部の中央付近に位置する。重複する第107号溝跡や第651・656・662号土坑に切られ、第340号住居跡を切っている。

平面形は、コーナー部の丸みが強い隅丸方形を呈している。規模は、北東～南西方向が4.20m、北西～南東方向が4.55mを測る。住居の主軸方位は、N-60°-Eを向いている。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは21cmある。北東側壁以外の各壁下には、壁溝が巡っている。床面は、ロームブロックを含む暗褐色土を平坦に埋め戻した貼床式である。住居中央部は比較的硬く締まっているが、周辺部はやや軟弱である。ピットは、P8～P10の3カ所検出されている。この中のP8は、いわゆる貯蔵穴と呼ばれているもので、カマド右側の住居東側コーナー部付近に位置している。55cm×55cmの不整形円形を呈し、床面からの深さは33cmある。

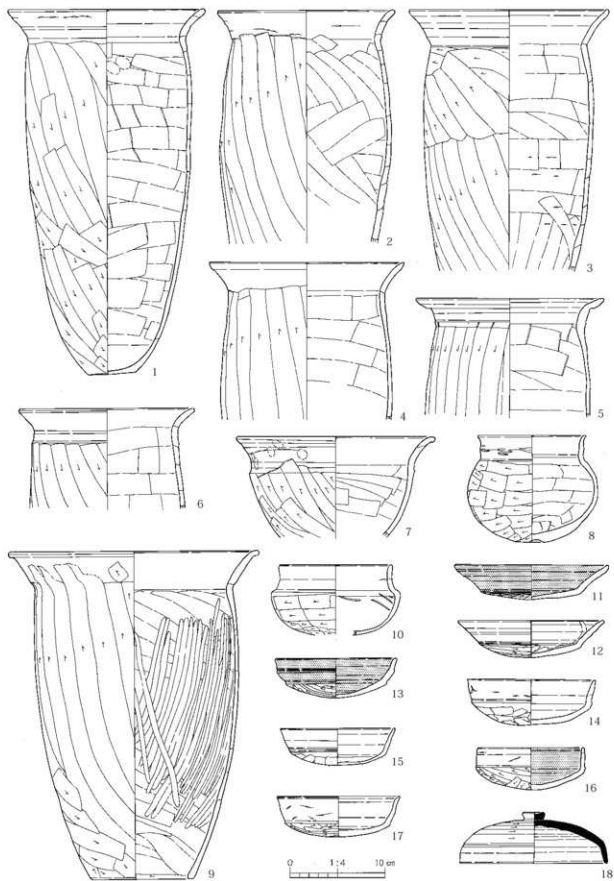
カマドは、住居北東側壁のほぼ中央に位置し、壁に対して直角に付設されている。規模は、全長50cm、最大幅80cmを測る。燃焼部は、住居内にある。燃焼面は、住居の床面とほぼ同じ高さで水平に作られている。燃焼部奥壁は、緩やかに立ち上がって煙道部に向かっている。袖は、ロームブロックや灰褐色粘土ブロックを含む暗褐色土を、住居の壁に直接貼り付けて構築している。袖の内面は、あまり焼けていない。煙道部は、すでに削平されているため不明である。

遺物は、住居の床面付近から、古墳時代後期後半を主体とする土器が多数出土している。本住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土土器の様相から、古墳時代後期後半と考えられる。

第93表 第341号住居跡出土遺物観察表

1	長 胴 甕	A.口縁部径20.8、器高38.7、底部径5.0。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面瓦ナデ。底部外面ケズリ。D.角四石、石英、白色粒。E.外一橙褐色、内一明赤褐色。F.4/5。H.床面直上。
2	長 胴 甕	A.口縁部径18.8。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面瓦ナデ。D.角四石、チャート、白色粒。E.内外一橙褐色。F.4/5。H.カマド右袖先端。
3	長 胴 甕	A.口縁部径(21.2)。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面瓦ナデ。D.片岩粒、角四石、石英、チャート。E.内外一淡黄褐色。F.4/5。H.床面直上。
4	長 胴 甕	A.口縁部径(20.7)。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面瓦ナデ。D.角四石、石英、白色粒。E.内外一橙褐色。F.1/4。H.カマド右袖先端。
5	長 胴 甕	A.口縁部径20.0。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面瓦ナデ。D.角四石、石英、白色粒。E.内外一橙褐色。F.3/4。H.床面直上。
6	長 胴 甕	A.口縁部径18.5。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面瓦ナデ。D.角四石、石英、白色粒。E.外一淡橙褐色、内一橙褐色。F.上半1/3。H.床面直上。
7	大 形 鉢	A.口縁部径21.2。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面瓦ナデ。D.角四石、白色粒。E.外一明赤褐色、内一淡黄褐色。F.上半3/4。H.床面直上。
8	鉢	A.口縁部径11.4、器高11.3。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面瓦ナデ。D.チャート、白色粒。E.内外一橙褐色。F.完形。H.床面直上。
9	大 形 甕	A.口縁部径26.4、器高34.7、底部径10.9。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデの後雑なミガキ。D.片岩粒、石英。E.外一橙褐色、内一淡赤褐色。F.ほぼ完形。H.床面直上。
10	鉢	A.口縁部径12.1。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面瓦ナデ。D.角四石、白色粒。E.外一明赤褐色、内一黒色。F.1/4。H.覆土中。
11	有段口縁環	A.口縁部径16.3、器高3.8。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ヨコナデ。D.角四石、石英。E.内外一淡黄褐色。F.完形。G.内外面黒色処理。H.床面付近。
12	有段口縁環	A.口縁部径15.5、器高4.0。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ヨコナデ。D.片岩粒、角四石、石英、白色粒。E.外一淡赤褐色、内一赤褐色。F.完形。H.床面直上。
13	有段口縁環	A.口縁部径12.9、器高4.2。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ヨコナデ。D.角四石、石英、白色粒。E.外一橙褐色、内一明赤褐色。F.完形。G.内外面黒色処理。H.床面直上。
14	模 倣 環	A.口縁部径13.5、器高4.8。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ヨコナデ。D.金雲母、チャート、白色粒。E.内外一橙褐色。F.完形。H.床面直上。
15	模 倣 環	A.口縁部径12.2、器高3.9。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ヨコナデ。D.金雲母、チャート、角四石、白色粒、赤色粒。E.内外一橙褐色。F.完形。H.床面直上。





第168图 第341号住居跡出土遺物

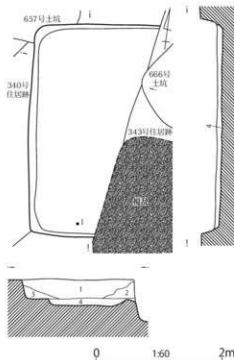
16	模倣環	A.口縁部径11.4、器高4.5。B.粘土細積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ヨコナデ。D.片岩粒、角閃石、白色粒。E.外—淡褐色、内—明赤褐色。F.完形。H.床面直上。
17	模倣環	A.口縁部径13.0、器高4.3。B.粘土細積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ヨコナデ。D.片岩粒、角閃石、白色粒。E.外—橙褐色、内—淡黄褐色。F.完形。H.床面直上。
18	須恵器 杯蓋	A.口縁部径15.8、器高5.4。B.ロクロ成形、揃み部貼り付け。C.外面回転ナデの後天井回転ケズリ、内面回転ナデ。D.石英、白色粒。E.外—黄褐色、内—暗灰色。F.完形。G.還元不良。H.床面直上。

## 第342号住居跡（第169図、写真図版80）

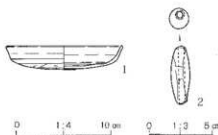
H地点調査区中央部の中央付近に位置する。重複する第343号住居跡や第657・666号土坑に切れ、第340号住居跡を切っている。住居跡の東側は、後世の攪乱等によって切られているため、本住居跡の全容は不明である。

平面形は、残存する部分から推測すると、コーナー部が丸みを持つ隅丸方形か隅丸長方形を呈していたと思われる。規模は、南北方向が3.39m、東西方向は2.00mまで測れる。住居の西側壁は、N-4°-Wの方向を向いている。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは30cmある。残存する各壁の壁下には、溝壁は見られない。床面は、ロームブロックを含む暗褐色土を平坦に埋め戻した貼床式である。ピットは、検出されていない。

遺物は、住居跡の覆土中から土器や土鏝の破片が少量出土しただけである。本住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土土器の様相から、奈良時代末から平安時代前期初頭頃と考えられる。



第169図 第342号住居跡



第170図 第342号住居跡出土遺物

## 第342号住居跡土層説明

- 第1層：暗褐色土層（径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を中量、黒褐色土を少量、焼土粒子・白色粒子を微量含む。）  
 第2層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子・焼土粒子・白色粒子を少量含む。）  
 第3層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を中量、焼土粒子を微量含む。）  
 第4層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を中量、径3～5cmのロームブロック・焼土粒子を少量含む。しまりを有する。）

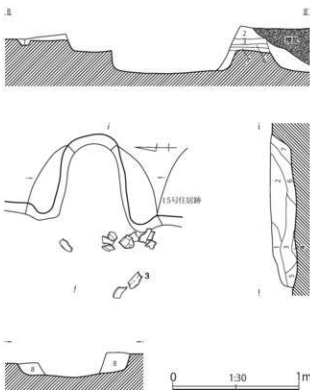
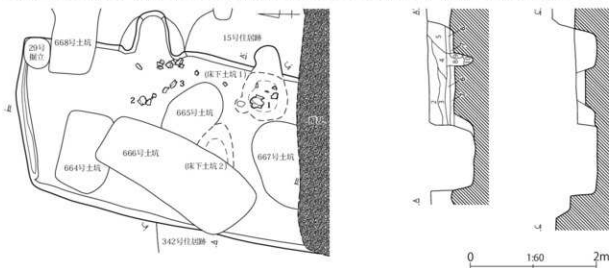
## 第94表 第342号住居跡出土遺物観察表

1	環	A.口縁部径12.4、器高2.5。B.粘土細積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後ケズリ、内面ナデ。D.白色粒。E.内外—淡茶褐色。F.1/2。H.覆土中。
2	土鏝	A.長さ4.6、最大幅1.6、重さ9.8g。B.手摺ね。C.ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.灰褐色。F.完形。H.覆土中。

## 第343号住居跡（第171図、写真図版80）

H地点調査区中央部の中央付近に位置する。重複する第29号掘立柱建物跡や第664～668号土坑に切れ、第15・342号住居跡を切っている。

平面形は、残存する部分から推測すると、コーナー部が丸みをもつ歪んだ隅丸長方形を呈していたと思われる。規模は、東西方向が2.85m、南北方向は4.47mまで測れる。住居の主軸方位は、N-84°



第171図 第343号住居跡

#### 第343号住居跡カマド土層説明

- 第1層：暗褐色土層（径1～2cmの灰褐色粘土ブロックを多量、径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を中量、焼土粒子を少量含む。）
- 第2層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子・径0.5cmの焼土ブロック・焼土粒子・灰褐色粘土粒子を中量、白色粒子を微量含む。）
- 第3層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子・灰褐色粘土粒子を中量、白色粒子・黒褐色土を少量含む。）
- 第4層：黄褐色土層（ロームを主体とする。）
- 第5層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を中量、焼土粒子を少量、白色粒子を微量含む。）
- 第6層：暗褐色土層（ローム粒子を中量、径0.5～1cmのロームブロック・焼土粒子・炭化粒子を少量、黒褐色土を微量含む。）
- 第7層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、径0.5cmのロームブロックを中量、黒褐色土を少量、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。）
- 第8層：カマド袖。

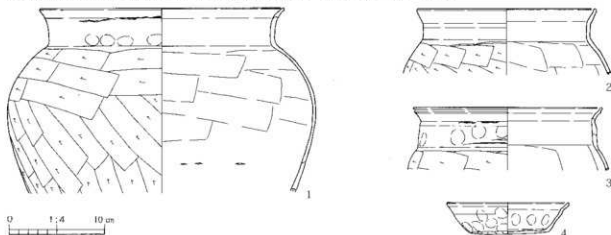
#### 第343号住居跡土層説明

- 第1層：暗褐色土層（径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を中量、焼土粒子を微量含む。）
- 第2層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子・白色粒子を中量、焼土粒子を微量含む。）
- 第3層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、径0.5cmのロームブロック・焼土粒子を中量、白色粒子を少量含む。）
- 第4層：暗褐色土層（径1～2cmのロームブロック・白色粒子を中量、ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含む。）
- 第5層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を中量、白色粒子を少量、焼土粒子を微量含む。）
- 第6層：暗褐色土層（径1～3cmのロームブロック・ローム粒子・径1～2cmの焼土ブロック・径0.5～1cmの灰白色粘土ブロックを中量、黒褐色土を微量含む。しまりを有する。）
- 第7層：暗褐色土層（ローム・暗褐色土の互層。焼土粒子・白色粒子を少量含む。しまりを有する。）
- 第8層：暗褐色土層（径2～5cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子・白色粒子を微量含む。）
- 第9層：暗褐色土層（径1～2cmのロームブロック・ローム粒子・白色粒子を微量含む。）
- 第10層：黄褐色土層（暗褐色土を多量含む。）

—Eを向いている。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは42cmある。残存する各壁のうち、北側壁の壁下には、溝が巡っている。床面は、ロームブロックを含む暗黄褐色土を平坦に埋め戻した貼床式である。床面下からは、いわゆる床下土坑が2カ所検出されている。ピットは、検出されていない。

カマドは、住居東側壁の北側寄りに位置し、壁を掘り込んでやや斜めに付設されている。規模は、全長73cm、最大幅103cmを測る。燃焼部は、その大半が住居の壁外にある。燃焼面は、住居の床面とほぼ同じ高さで水平に作られている。奥壁は、緩やかに傾斜して煙道部に向かっている。袖は、住居の壁内にあまり突出していないが、燃焼部の奥壁から廻して構築している。袖の内面は、あまり焼けていない。煙道部は、すでに削平されているため不明である。

遺物は、カマド周辺の東側壁際の床面付近から土器が出土している。本住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土土器の様相から、平安時代前期中頃から後半頃と考えられる。



第172図 第343号住居跡出土遺物

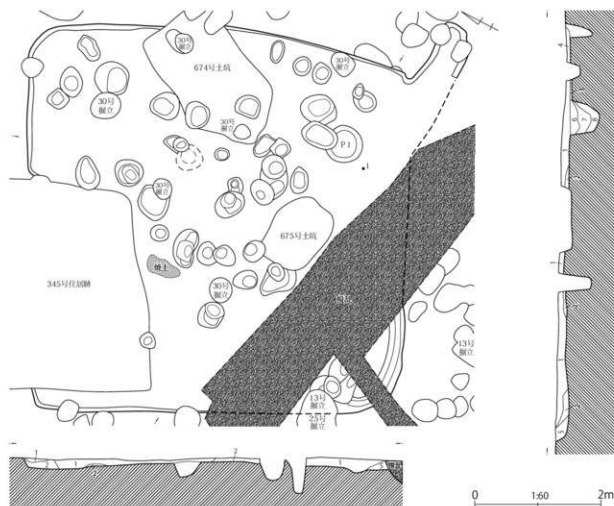
第95表 第343号住居跡出土遺物観察表

1	甕	A.口縁部径(26.0)。B.粘土組積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篋ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外—淡茶褐色。F.上半1/4。G.口縁部外面に指頭圧痕を残す。H.床面付近。
2	甕	A.口縁部径(19.0)。B.粘土組積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篋ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外—明茶褐色。F.口縁部1/4。H.覆土中。
3	甕	A.口縁部径(20.0)。B.粘土組積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篋ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外—明茶褐色。F.口縁部1/2弱。G.口縁部外面に指頭圧痕を残す。H.覆土中。
4	坏	A.口縁部径13.0。器高3.4。底部径8.3。B.粘土組積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデ、内面ヨコナデ。底部外面ケズリ。D.白色粒。E.内外—暗茶褐色。F.3/4。G.体部内外面に指頭圧痕を残す。H.覆土中。

### 第344号住居跡 (第173図、写真図版81)

H地点調査区中央部の中央東寄りに位置する。重複する第674・675号土坑に切られ、第345号住居跡や第30号掘立柱建物跡を切っている。住居跡の南側コーナー部は、第2地点(太田2005)で検出されている。住居跡の上面は、床面近くまで削平されているため、遺構の遺存状態はあまり良好とは言えない。

平面形は、コーナー部の丸みが強いやや歪んだ隅丸方形を呈している。規模は、北東～南西方向が6.16m、北西～南東方向が5.75mを測る。住居の主軸方位は、N-62°—Eを向いている。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは20cmある。第2地点で調査された南側コーナー部

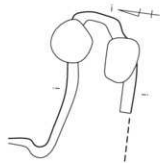


## 第344号住居跡土層説明

- 第1層：暗褐色土層（径0.5～2 cmのロームブロック・ローム粒子を中量、  
焼土粒子・炭化粒子を少量含む。）
- 第2層：暗褐色土層（径1～4 cmのロームブロック・ローム粒子を多量、  
焼土粒子・炭化粒子を微量含む。）
- 第3層：暗褐色土層（径2～4 cmのロームブロック・ローム粒子の混合  
土。しまりを有する。）
- 第4層：暗褐色土層（径0.5～3 cmのロームブロック・ローム粒子を少量、  
径0.5～1 cmの焼土ブロック・白色粒子を微量含む。）
- 第5層：暗褐色土層（径0.5 cmのロームブロック・ローム粒子を中量、白色  
粒子を少量含む。）
- 第6層：暗褐色土層（径0.5～1 cmのロームブロック・ローム粒子を中量、  
白色粒子を少量含む。）
- 第7層：暗褐色土層（径0.5～2 cmのロームブロック・ローム粒子を中量、  
焼土粒子・白色粒子を微量含む。）
- 第8層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、径1～3 cmのロームブロックを  
中量含む。）

## 第344号住居跡カマド土層説明

- 第1層：暗褐色土層（白色粒子を多量、径0.5 cmのロームブロック・ローム  
粒子を中量含む。）
- 第2層：暗褐色土層（径0.5 cmのロームブロック・焼土粒子を多量、白色粒  
子を微量含む。）
- 第3層：暗褐色土層（焼土粒子・白色粒子を中量、炭化粒子を微量含む。）

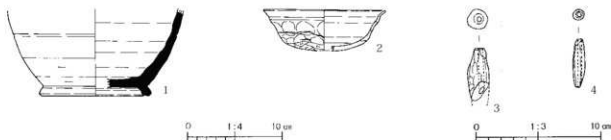


第173図 第344号住居跡

の壁下には、壁溝が巡っている。床面は、ロームブロックを含む暗黄褐色土を平坦に埋め戻した貼床式である。住居中央部は比較的固く締まっているが、周辺部は軟弱である。住居中央部のやや西側寄りの床面上には、焼土の分布がみられる。ピットは、住居跡内やその周辺から多数検出されているが、住居との関係は不明である。

カマドは、住居の東側コーナー部に付設されている。住居壁外に延びる煙道部が残存しているだけであるが、燃焼部と煙道部が同じ高さで水平に延びるカマドの形態であった可能性が高い。規模は、全長118cm、幅56cmを測る。

遺物は、住居跡の覆土中から、少量の土師器や須恵器の破片と土錘が2個出土している。本住居跡の時期は、住居跡やカマドの形態から、平安時代中期頃の可能性が高いと思われる。



第174図 第344号住居跡出土遺物

第96表 第344号住居跡出土遺物観察表

1	須恵器 高台付壺	A.高台部径(11.8)。B.粘土組積み上げ後ロクロ整形。高台部貼り付け。C.胴外面回転ナデの後下端回転ケズリ、内面回転ナデ。底部外面回転ケズリ後中央ナデ。D.白色粒。E.内外一暗灰色。F.胴部下半1/2。H.床面付近。
2	坏	A.口縁部径(13.0)。器高4.3。B.粘土組積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後下半ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一淡茶褐色。F.1/4。H.カマド内。
3	土錘	A.残存長4.1、最大幅1.7、重さ9.1g。B.手捏ね。C.ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.黒褐色。F.1/2。H.覆土中。
4	土錘	A.長さ3.8、最大幅1.0、重さ2.5g。B.手捏ね。C.ナデ。D.白色粒。E.淡褐色。F.ほぼ完形。H.覆土中。

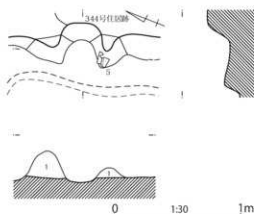
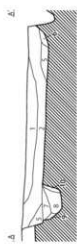
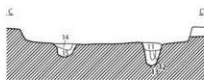
### 第345号住居跡 (第175図、写真図版81)

H地点調査区中央部の中央東寄りに位置する。重複する第344号住居跡と第670号土坑に切られている。

平面形は、残存する部分から推測すると、コーナー部が丸みをもつ平行四辺形状にかなり歪んだ隅丸長方形を呈していたと思われる。規模は、北東～南西方向が3.35m、北西～南東方向が3.20mを測る。住居の主軸方位は、N-63°-Eを向いている。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは32cmある。残存する各壁の壁下には、壁溝は見られない。床面は、ロームブロックを多量に含む暗黄褐色土を平坦に埋め戻した貼床式で、全体的に固く締まっている。カマド前の床下から、139cm×165cmの規模の大きな隅丸長方形を呈する床下土坑が検出されている。ピットは、住居内の西側から4ヵ所検出されているが、住居跡との関係は不明である。この中のP1は、74cm×58cmの楕円形を呈し、その中から古墳時代前期の完形の台付甕(No7)が出土していることから、本住居跡よりも古い時期の土坑と考えられる。P2～P5は、長さ38cm～58cmの楕円形を呈し、床面からの深さは21cm～35cmある。

カマドは、住居北東側壁の中央付近に位置し、壁に対して直角に付設されている。規模は、全長

34cm、最大幅80cmを測る。燃焼部は、大半が住居内にある。燃焼面は、住居床面より低く、奥壁は緩やかに立ち上がって煙道部に向かっている。袖は、ロームブロックを含む暗褐色土を、住居の壁に直接貼り付けて構築している。煙道部は、すでに削平されているため不明である。



#### 第345号住居跡土層説明

- 第1層：暗褐色土層（ローム粒子・白色粒子を中量、径0.5cmのロームブロック・焼土粒子を少量含む。）  
 第2層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、径1cmのロームブロックを中量、焼土粒子・白色粒子を少量含む。）  
 第3層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を中量含む。）  
 第4層：暗褐色土層（径1～3cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子を少量含む。）  
 第5層：暗褐色土層（ローム粒子を中量、径0.5cmのロームブロック・焼土粒子を微量含む。）  
 第6層：黄褐色土層（ロームを主体とする。）  
 第7層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子を少量含む。）  
 第8層：暗褐色土層（径1～3cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。）

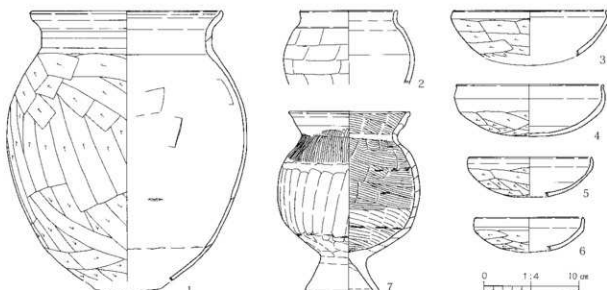
- 第9層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子を少量含む。）  
 第10層：黄褐色土層（暗褐色土・黒褐色土を少量含む。）  
 第11層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含む。）  
 第12層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を微量含む。）  
 第13層：暗褐色土層（径1～2cmのロームブロック・ローム粒子を中量含む。）  
 第14層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含む。）  
 第15層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を中量含む。）  
 第16層：暗褐色土層（径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を微量含む、粘性に富む。）  
 第17層：暗褐色土層（16層に近いが、粘性はない。）  
 第18層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含む。）  
 第19層：黄褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を主体に、暗褐色土を少量含む。）  
 第20層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を中量、焼土粒子を少量含む。）  
 第21層：暗褐色土層（径1cmのロームブロック・ローム粒子・径1～2cmの灰褐色粘土ブロックを多量、焼土粒子を少量含む。）

#### 第345号住居跡カマド土層説明

- 第1層：カマド袖。

第175図 第345号住居跡

遺物は、住居跡の中央部の覆土中から、白鳳時代を主体とする土器の破片がまとまって出土している。本住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土土器の様相から白鳳時代と考えられる。



第176図 第345号住居跡出土遺物

第97表 第345号住居跡出土遺物観察表

1	胴張裏	A.口縁部径(20.4)、残存高28.6、B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面笠ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.外一淡褐色、内一淡茶褐色。F.2/3。G.胴部外面に覆付着。H.覆土中。
2	鉢	A.口縁部径(10.4)。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一明茶褐色。F.口縁部1/4。G.器表面は荒れている。H.覆土中。
3	杯	A.口縁部径16.4。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.白色粒。E.内外一明褐色。F.口縁部1/2。H.覆土中。
4	杯	A.口縁部径(15.6)。器高5.5。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後下半ケズリ、内面ヨコナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一淡褐色。F.1/2。H.覆土中。
5	杯	A.口縁部径(13.2)。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後下半ケズリ、内面ヨコナデ。D.白色粒。E.内外一明茶褐色。F.口縁部1/4。H.覆土中。
6	杯	A.口縁部径(11.6)。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後ケズリ、内面ナデ。D.白色粒。E.内外一明茶褐色。F.口縁部1/3。H.覆土中。
7	台付裏	A.口縁部径13.0。器高19.1。台端部径(7.8)。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。内面ハケの後ヨコナデ。胴部外面ナデの後上半ハケ・下半笠ナデ、内面ハケ。台面外面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.外一暗茶褐色、内一黒灰色。F.ほぼ充形。G.混入品。H。P.1内。

### 第346号住居跡 (第177図、写真図版82)

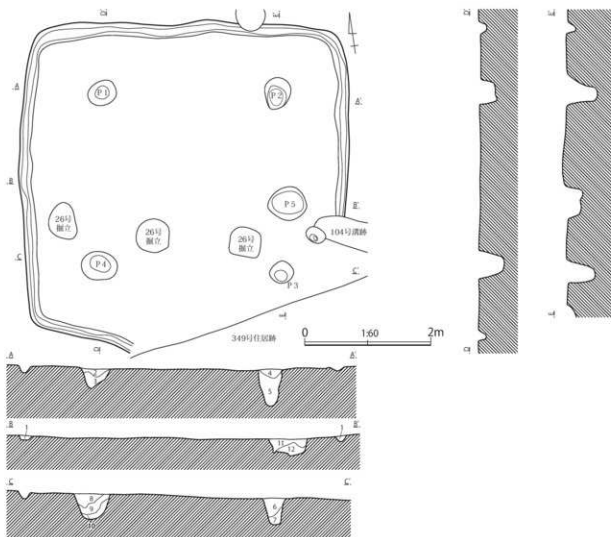
H地点調査区東側の北寄りに位置する。重複する第349号住居跡、第26号掘立柱建物跡、第104号溝跡に切られている。第347号住居跡や第348号住居跡とも重複しているが、新旧関係は不明である。本住居跡は、住居の床面まで削平されており、遺構の遺存状態はあまり良好とは言えない。

平面形は、コーナー部が丸みをもつ隅丸方形を呈している。規模は、南北方向が5.16m、東西方向が5.20mを測る。壁は、既に削平されているため不明であるが、各壁下には壁溝が巡っている。床面は、貼床式のようなものである。ピットは、住居跡内から5カ所検出されている。P1～P4は、ほぼ住居の対角線上に配置されていることから、住居の上屋を支える4本主柱の柱穴と考えられる。長さ25cm～56cmの楕円形を呈し、確認面からの深さは30cm～57cmある。P5は、主柱穴P2・P3間



にあるが、本住居跡との関係は不明である。炉は、すでに削平されていると思われる。

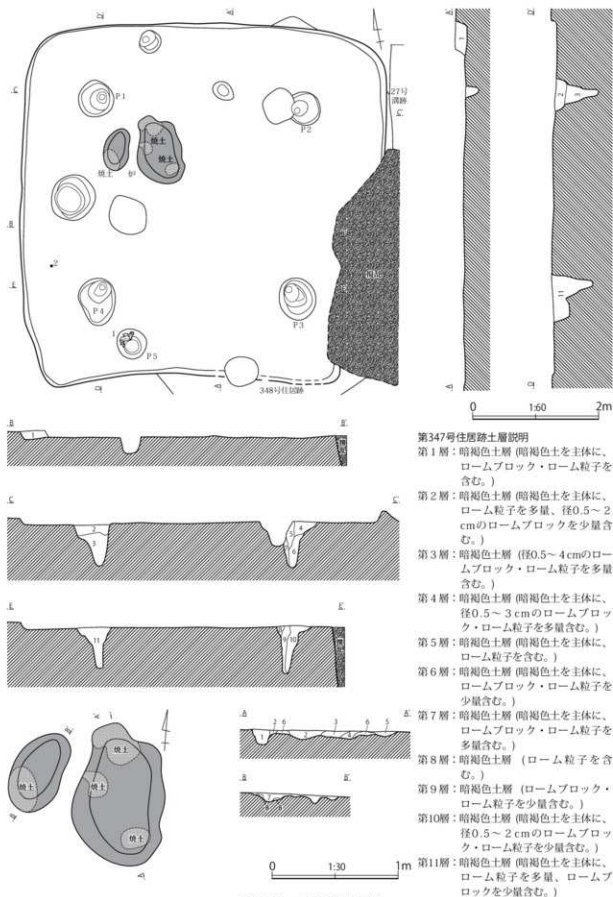
遺物は、住居跡の覆土中から、古墳時代前期～奈良時代頃までの土器の破片が少量混在して出土している。本住居跡の時期は、遺構の重複関係から、古墳時代前期と思われる。



第177図 第346号住居跡

#### 第346号住居跡土層説明

- 第1層：褐色土層（径0.5～3cmのロームブロック・ローム粒子・暗褐色土を含む。）
- 第2層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ロームブロック・ローム粒子を多量含む。）
- 第3層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を少量含む。）
- 第4層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を多量含む。）
- 第5層：暗褐色土層（ローム粒子を多量含む。）
- 第6層：褐色土層（ロームブロック・ローム粒子・暗褐色土を含む。）
- 第7層：黄褐色土層（径0.5～5cmのロームブロック・ローム粒子を主体に、暗褐色土を含む。）
- 第8層：黄褐色土層（径0.5～4cmのロームブロック・ローム粒子を主体に、暗褐色土を含む。）
- 第9層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を含む。）
- 第10層：褐色土層（ロームブロックを少量含む。）
- 第11層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量含む。）
- 第12層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、径0.5～5cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。）



第178図 第347号住居跡

## 第347号住居跡伊踏土層説明

- 第1層：黒褐色土層（黒褐色土を主体に、ロームブロック・ローム粒子を含む。）  
 第2層：暗褐色土層（炭化物・暗褐色土の混合土を主体に、径0.5～5cmのロームブロック・ローム粒子を含む。）  
 第3層：黄褐色土層（ローム粒子・暗褐色土の混合土を主体に、焼土粒子を多量含む。）  
 第4層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を少量含む。）  
 第5層：黄褐色土層（ロームブロック・ローム粒子の混合土を主体に、焼土粒子を含む。）  
 第6層：赤褐色土層（被熱赤化したロームを主体とする。）  
 第7層：黒褐色土層（炭化物・暗褐色土の混合土を主体に、ローム粒子・焼土粒子を含む。）  
 第8層：明赤褐色土層（被熱赤化したロームを主体とする。）

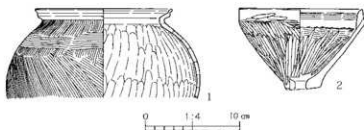
## 第347号住居跡（第178図、写真図版83）

H地点調査区東側の北寄りに位置する。重複する第348号住居跡に切られている。第348号住居跡に住居の床面まで削平されているため、遺構の遺存状態は劣悪である。

平面形は、コーナー部の丸みが強い隅丸方形を呈している。規模は、南北方向が5.67m、東西方向が5.78mを測る。住居の主軸方位は、N-19°-Eを向いている。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは16cmある。各壁の壁下には、壁溝は見られない。床面は、ロームブロックを多量に含む暗黄褐色土を平坦に埋め戻した貼床式である。住居中央部は比較的堅く締まっているが、周辺部はやや軟弱である。ピットは、8カ所検出されている。この中のP1～P4は、住居の対角線上に配置されていることから、住居の上屋を支える4本主柱の柱穴と考えられる。形態は、長さ55cm～75cmの円形や楕円形を呈し、床面からの深さは62cm～75cmある。P5は、住居南側壁際の南西側コーナー部に寄った場所にあり、位置的には貯蔵穴の可能性もある。径50cmの円形を呈し、床面からの深さは40cmある。P5上面からは、No1のS字状口縁台付甕が出土している。

炉は、平面形が楕円形を呈する大小2カ所の炉が、住居中央部の北西側寄りの位置に近接して見られる。いずれも、住居の床面を6cm程度掘り窪めた地皿炉で、付帯施設は見られない。

遺物は、住居跡の覆土中から、土器の破片が少量出土しただけである。本住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土土器の様相から、古墳時代前期と考えられる。



第179図 第347号住居跡出土遺物

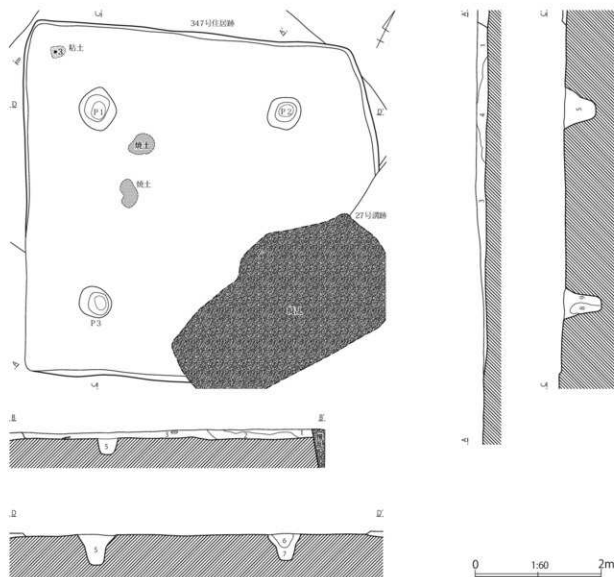
## 第98表 第347号住居跡出土遺物観察表

1	S字状口縁台付甕	A.口縁部径14.6。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ハケ、内面指ナデ。D.片岩粒、白色粒。E.内外一明茶褐色。F.上半のみ。G.外面に黒斑あり。H.P5上面。
2	小形甕	A.口縁部径13.2。器高8.6。底部径3.8。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部内外面ハケの後ミガキ。底部外面ナデ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.内外一明茶褐色。F.3/4。G.底部穿孔は焼成前。H.床面付近。

## 第348号住居跡（第180図、写真図版83）

H地点調査区東側の北寄りに位置する。重複する第27号溝跡に切られ、第347号住居跡を切っている。住居跡の上面は、床面近くまで強く掘平されており、遺構の遺存状態は劣悪である。

平面形は、コーナー部が丸みをもつやや歪んだ隅丸長方形を呈している。規模は、北西～南東方向



第180図 第348号住居跡

## 第348号住居跡土層説明

- 第1層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、ロームブロックを少量含む。）  
 第2層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、径0.5～5cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。）  
 第3層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、径0.5～3cmのロームブロック・焼土粒子・炭化物を微量含む。）  
 第4層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、径0.5～4cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。）  
 第5層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、径0.5～1cmのロームブロックを微量含む。）  
 第6層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ロームブロック・ローム粒子を微量含む。）  
 第7層：黄褐色土層（径0.5～0.8cmのロームブロック・ローム粒子・暗褐色土を含む。）  
 第8層：黒褐色土層（黒褐色土を主体に、ロームブロック・ローム粒子を含む。）  
 第9層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、径0.5～3cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。）

が5.65m、北東～南西方向が5.70mを測る。住居の主軸方位は、N-25°-Wを向いている。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは19cmある。各壁の壁下には、壁溝は見られない。床面は、ロームブロックを含む暗黄褐色土を平坦に埋め戻した貼床式である。住居中央部は比較的堅く締まっているが、周辺部はやや軟弱である。西側コーナー部の床面上には、暗灰色粘土の塊が置かれている。ピットは、3カ所検出されている。P1～P3は、住居の対角線上に配置されていること

から、住居の上屋を支える4本主柱の柱穴の一部と考えられる。形態は、長さ55cm～70cmの不整円形や楕円形を呈し、床面からの深さは41cm～60cmある。

炬は、住居中央部の西側寄りの位置に2カ所近接してある。平面形が、不整の円形や楕円形ぎみの形態で、いずれも住居の床面を9cm程度掘り窪めた地皿炬である。炬石等の付帯施設は見られない。

遺物は、住居跡の覆土中から、土器の破片が少量出土しただけである。本住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土土器の様相から、古墳時代前期と考えられる。



第181図 第348号住居跡出土遺物

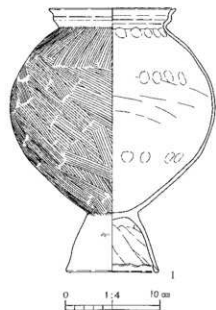
第99表 第348号住居跡出土遺物観察表

1	複合口縁壺	A.口縁部径(17.0)。B.粘土粗積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。頸部内外面ナデ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.内外一明茶褐色。F.口縁部1/4。H.覆土中。
2	碗	A.口縁部径(11.8)。B.粘土粗積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。D.白色粒。E.内外一暗茶褐色。F.口縁部1/2弱。H.覆土中。
3	鉢	A.口縁部径12.0。器高10.5。底部径4.5。B.粘土粗積み上げ。底部貼り付け。C.口縁部外面ナデ、内面ハケ。胴部外面ハケの後縁ナデ、内面ハケ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一淡茶褐色。F.ほぼ完形。G.口縁部外面に指頭圧痕を残す。H.床面付近。
4	S字状口縁台付甕	A.口縁部径(18.0)。B.粘土粗積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデの後ハケ、内面ナデ。D.小石、赤色粒、白色粒。E.外一暗褐色、内一明褐色。F.口縁部1/6。H.覆土中。

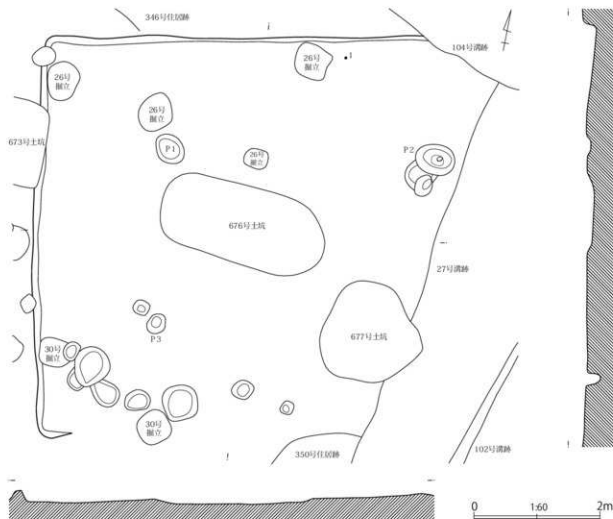
### 第349号住居跡（第183図、写真図版84）

H地点調査区東側の中央付近に位置する。重複する第26・30号掘立柱建物跡、第673・676・677号土坑、第27・104号溝跡に切られ、第346号住居跡を切っている。住居跡の上面は、床面近くまで強く掘平されており、遺構の遺存状態は劣悪である。

平面形は、コーナー部が丸みを持つ隅丸長方形を呈している。規模は、北西～南東方向が6.40m、北東～南西方向は7.35mまで測れる。住居跡の北西側壁は、N-80°-Eの方向を向いている。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは18cmある。残存する各壁の壁下には、壁溝は見られない。床面は、ロームブロックを多量に含む暗黄褐色土を平坦に埋め戻した貼床式である。住居中央部は比較的堅く締まっているが、周辺部はやや軟弱である。ピットは、住居跡内から多数検出されているが、住居との関係は不明なものが多い。この中でP1～P3は、ほぼ住居の対角線上にあることから、住居の上屋を支える4本主柱の柱穴の一部と



第182図 第349号住居跡出土遺物



第183図 第349号住居跡

思われる。長さ35cm～52cmの楕円形を呈し、床面からの深さは、それぞれ21cm・67cm・38cmある。

遺物は、住居跡の覆土中から、土器の破片が少量出土しただけである。本住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土土器の様相から、古墳時代前期と考えられる

第100表 第349号住居跡出土遺物観察表

I	S字状口縁台付甕	A.口縁部径(13.4)、器高28.0、台端部径9.8。B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ハケ、内面ナデ。D.片岩粒、白色粒。E.内外一黒褐色。F.1/2。H.床面付近。
---	----------	---

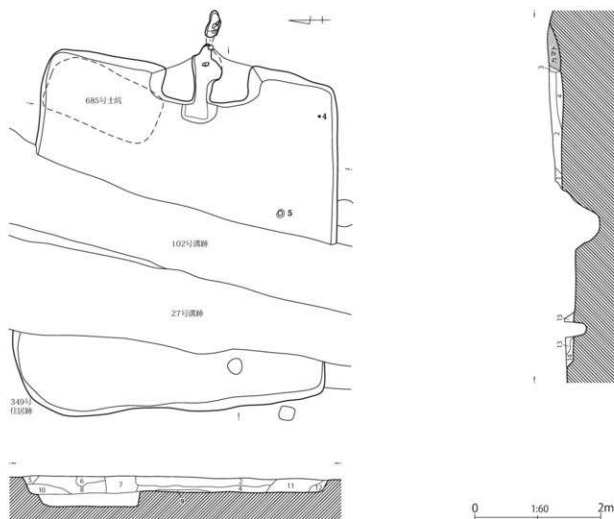
### 第350号住居跡 (第184図、写真図版84・85)

H地点調査区東側の中央付近に位置する。重複する第27・102号溝跡に切られ、第685号土坑を切っている。住居跡の北西側は、第349号住居跡と近接しているが、相互の重複関係は不明である。

平面形は、コーナー部が丸みを持つやや台形状に歪んだ隅丸長方形を呈している。規模は、東西方向が5.72m、南北方向が4.85mを測る。住居の主軸方向は、N-91°-Eを向いている。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは30cmある。残存する各壁の壁下には、壁溝は見られない。床面は、ロームブロックを含む暗褐色土を平坦に埋め戻した貼床式である。住居中央部は硬く

縮まっているが、周辺部はやや軟弱である。ピットは、住居跡内からは検出されていない。

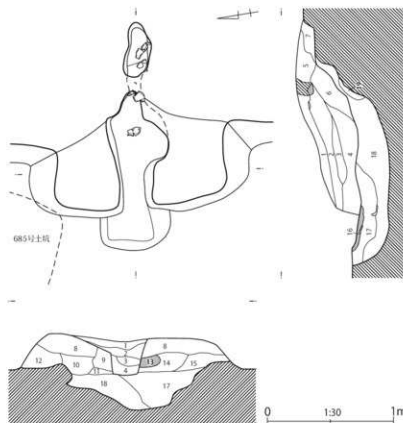
カマドは、住居東側壁のほぼ中央付近に位置し、住居の壁を若干掘り込んで直角に付設されている。



第184図 第350号住居跡

#### 第350号住居跡土層説明

- 第1層：暗褐色土層 (暗褐色土を主体に、ローム粒子を含む。)  
 第2層：暗褐色土層 (暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、ロームブロック・焼土粒子・炭化物を少量含む。)  
 第3層：暗褐色土層 (2層に近いが、灰黄褐色粘質土を含む。)  
 第4層：暗褐色土層 (2層に近いが、焼土粒子を多量含む。)  
 第5層：暗褐色土層 (暗褐色土を主体に、ローム粒子を含む。しまりを有する。)  
 第6層：暗褐色土層 (浅間山系A軽石を多量含む。しまりを有する。)  
 第7層：暗褐色土層 (5層に近いが、黒みが強い。しまりを有する。)  
 第8層：暗褐色土層 (暗褐色土を主体に、径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子・焼土粒子を含む。しまりを有する。)  
 第9層：暗褐色土層 (灰白色粘質土を含む。しまりを有する。)  
 第10層：暗褐色土層 (暗褐色土を主体に、ロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含む。しまりを有する。)  
 第11層：暗褐色土層 (暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、径0.5～1cmのロームブロックを少量、焼土粒子を微量含む。しまりを有する。)  
 第12層：暗褐色土層 (ローム粒子を多量含む。)  
 第13層：土層説明なし。  
 第14層：土層説明なし。



第185図 第350号住居跡カマド

- 第9層：暗褐色土層（焼土ブロック・焼土粒子を多量含む。）  
 第10層：暗褐色土層（8層に近いが、ロームブロック・ローム粒子を多量含む。）  
 第11層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を多量、暗褐色土を少量含む。）  
 第12層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子・黄褐色粘土を多量含む。）  
 第13層：明赤褐色土層（焼土ブロック・灰黄褐色粘土・暗褐色土を含む。）  
 第14層：暗褐色土層（灰黄褐色粘土を多量、焼土ブロック・焼土粒子・暗褐色土を含む。）  
 第15層：暗褐色土層（焼土粒子を微量含む。）  
 第16層：明赤褐色土層（焼土ブロック・焼土粒子を主体に、暗褐色土を含む。）  
 第17層：明赤褐色土層（暗褐色土を主体に、径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子・焼土ブロック・焼土粒子を含む。）  
 第18層：暗褐色土層（黄褐色粘土を多量含む。）  
 第19層：土層説明なし。

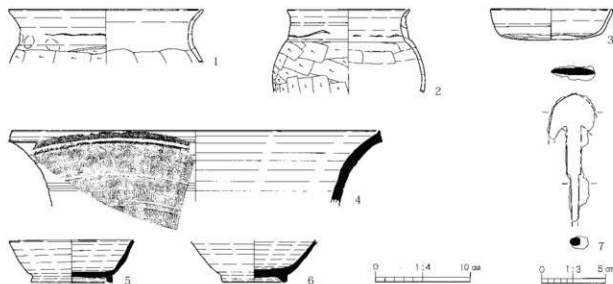
## 第350号住居跡カマド土層説明

- 第1層：暗褐色土層（灰黄褐色粘土を少量、焼土粒子を微量含む。）  
 第2層：明赤褐色土層（焼土ブロック・暗褐色土を含む。）  
 第3層：明赤褐色土層（焼土ブロックを主体とする。）  
 第4層：明赤褐色土層（暗褐色土を主体に、径0.5～2cmの焼土ブロック・焼土粒子を多量、炭化物を少量含む。）  
 第5層：暗褐色土層（黄褐色粘土・暗褐色土の混合土を主体に、径0.5～1.5cmの焼土ブロック・焼土粒子を多量含む。）  
 第6層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を少量、焼土ブロック・焼土粒子を微量含む。）  
 第7層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、径0.5～0.8cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土ブロック・焼土粒子を微量含む。）  
 第8層：暗褐色土層（黄褐色粘土・暗褐色土の混合土を主体に、ロームブロック・ローム粒子・焼土粒子を含む。）

規模は、全長182cm、最大幅175cmを測る。燃焼部は、奥壁側の半分が住居の壁外にある。燃焼面は、住居の床面よりも若干低く、ほぼ水平に作られている。奥壁は、緩やかに傾斜して煙道部に至る。袖は、ロームブロックや黄褐色粘土を含む暗褐色土を、住居の壁に直接貼り付けて構築している。煙道部は、燃焼部奥壁から14cmほど水平に延びて上方に立ち上がっている。

遺物は、カマド内や住居東側の覆土中から、土師器や須恵器の破片が出土している。土器以外では、鉄鏝が1点覆土中から出土している。これらの出土遺物のうち、No 4とNo 5の須恵器とNo 7の鉄鏝は、本住居跡よりも古い時期のものであり、混入品と考えられる。本住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土土器の様相から、平安時代前期と考えられる。





第186図 第350号住居跡出土遺物

第101表 第350号住居跡出土遺物観察表

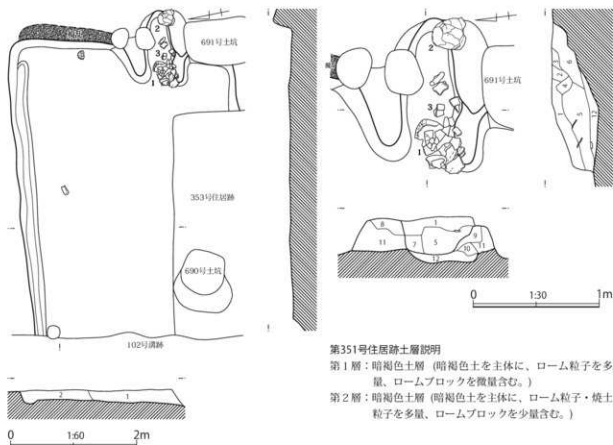
番号	遺物	観察内容
1	甕	A. 口縁部径20.6。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面澁ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一茶褐色。F. 口縁部1/3。G. 口縁部外面に指頭圧痕を残す。H. カマド内。
2	小形台付甕	A. 口縁部径13.0。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面澁ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一暗茶褐色。F. 上半1/3。H. 覆土中。
3	坏	A. 口縁部径12.8。器高3.2。底部径10.2。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデ、内面ヨコナデ。底部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一茶褐色。F. 1/2強。H. 覆土中。
4	須恵器 甕	A. 口縁部径29.2。B. 粘土紐積み上げ後叩き。C. 口縁部外面縦ハケの後8本歯の櫛描波状文を3段以上施す。内面回転ナデ。D. 白色粒。E. 内外一灰色。F. 口縁部1/6。H. 覆土中。
5	須恵器 高台付埴	A. 口縁部径13.2。器高4.5。高台部径8.7。B. ロクロ成形。高台貼り付け。C. 口縁部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り後回転澁ケズリ。高台部回転ナデ。D. 白色針状(海綿骨針)、白色粒。E. 内外一暗灰色。F. はば完形。H. 覆土中。
6	須恵器 高台付埴	A. 高台部径7.0。B. ロクロ成形。高台貼り付け。C. 体部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。高台部回転ナデ。D. 白色粒。E. 内外一黒灰色。F. 体部下のみ。H. 覆土中。
7	鉄 針	A. 残存長10.3。鉄身幅3.8・鉄身厚さ0.5。茎部幅0.7・茎部厚さ0.6。重さ30.36g。B. 鍛造。D. 鉄製。F. 茎部先端欠損。G. 胴身は両丸作りで、逆刺をもつ。H. 覆土中。

## 第351号住居跡 (第187図、写真図版86)

H地点調査区東側の中央付近に位置する。重複する第353号住居跡や第691号土坑及び第102号溝跡に切られている。

平面形は、コーナー部が丸みを持つ隅丸長方形を呈している。規模は、南北方向が3.65m、東西方向は4.75mまで測れる。住居の主軸方向は、N-97°-Eを向いている。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは20cmある。残存する各壁のうち、北側壁の壁下には壁溝が巡っている。床面は、ロームブロックを多量に含む暗黄褐色土を平坦に埋め戻した貼床式で、全体的に硬く締まっている。残存する住居跡内からは、ピットは検出されていない。

カマドは、住居東側壁の中央南側寄りに位置し、住居の壁を掘り込んで直角に付設されている。規模は、全長118cm、最大幅104cmを測る。燃烧部は、奥壁側の半分が住居の壁外にある。燃烧面は、住居の床面とほぼ同じ高さで、若干傾斜して作られている。奥壁は、緩やかに傾斜して煙道部に向かっている。燃烧部の焚口部付近からNo 1の土師器甕や、奥壁部分からNo 2の土師器甕が横転した



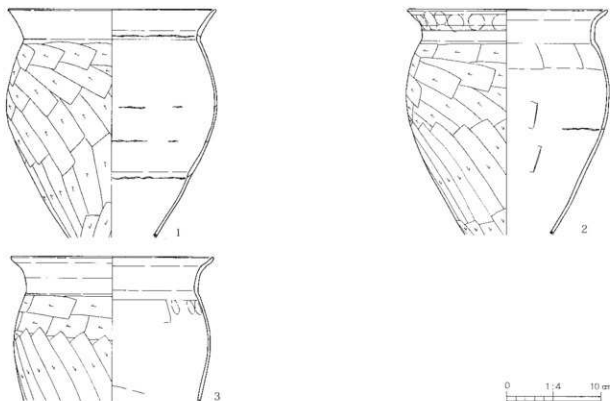
第187図 第351号住居跡

## 第351号住居跡カマド土層説明

- 第1層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子・焼土粒子を少量含む。）  
 第2層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子・焼土ブロック・焼土粒子を少量含む。）  
 第3層：暗褐色土層（ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含む。）  
 第4層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子・焼土粒子・黄褐色粘土を少量含む。）  
 第5層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ロームブロック・ローム粒子・焼土ブロック・焼土粒子を微量含む。）  
 第6層：暗褐色土層（焼土ブロック・焼土粒子を少量、ロームブロック・ローム粒子を微量含む。）  
 第7層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、径0.5～0.8cmの焼土ブロック・焼土粒子を多量、ローム粒子を少量含む。）  
 第8層：暗褐色土層（ローム粒子・黄褐色粘土・灰白色粘土・暗褐色土を多量、ロームブロック・焼土粒子を少量含む。）  
 第9層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、焼土粒子を多量、ローム粒子を少量含む。）  
 第10層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、焼土粒子を少量含む。）  
 第11層：暗褐色土層（ロームブロックを主体とする。）  
 第12層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を含む。）

状態で出土している。おそらく、No 1の土師器裏は燃烧部で掛けられていたものと思われる、No 2の土師器裏は煙道部の補強に使われていたものと推測される。袖は、ロームブロックや灰白色粘土を含む暗褐色土を、住居の壁に斜めに切り込んだ面に貼り付けて構築している。煙道部は、すでに削平されているため不明である。

遺物は、カマド内や住居中央部の覆土中から、土器が出土している。本住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土土器の様相から、奈良時代末から平安時代初頭頃と考えられる。



第188図 第351号住居跡出土遺物

第102表 第351号住居跡出土遺物観察表

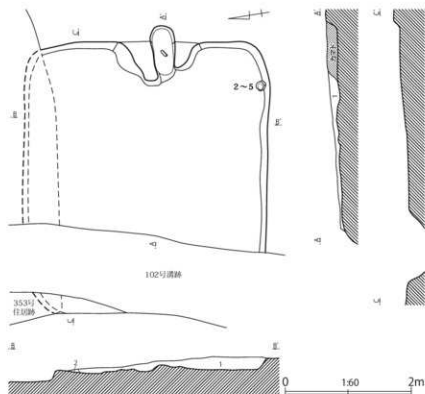
1	甕	A.口縁部径22.0。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.外—淡茶褐色。内—暗茶褐色。F.上半1/2。H.カマド内。
2	甕	A.口縁部径21.2。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面荒ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外—淡茶褐色。F.底部欠損。G.口縁部外面に指面圧痕を残す。H.カマド内。
3	甕	A.口縁部径21.4。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面荒ナデ。D.白色粒。E.内外—赤茶褐色。F.上半1/3。H.カマド内。

## 第352号住居跡（第189図、写真図版87）

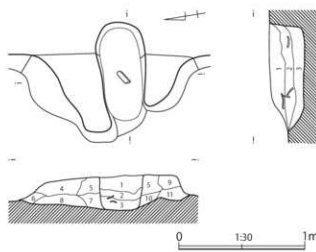
H地点調査区東側の南側寄りに位置する。重複する第353号住居跡や第102号溝跡に切られている。住居跡の上面は、床面近くまで削平されており、遺構の遺存状態はあまり良好とは言えない。

平面形は、残存する部分から推測すると、コーナー部が丸みを持つ隅丸長方形を呈していたと思われる。規模は、東西方向は3.33mまで、南北方向は3.60mまで測れる。住居の主軸方向は、N-100°-Eを向いている。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは20cmある。残存する各壁の壁下には、壁溝は見られない。床面は、ロームブロックを含む暗黄褐色土を平坦に埋め戻した貼床式で、全体的にやや軟弱である。残存する住居跡内からは、ピットは検出されていない。

カマドは、住居東側壁のほぼ中央に位置し、住居の壁を掘り込んで直角に付設されている。規模は、全長92cm、最大幅150cmを測る。燃焼部は、奥壁側の半分が住居の壁外にある。燃焼面は、住居の床面より一段低く平坦に作られている。奥壁は、垂直ぎみに立ち上がっている。袖は、黄橙色粘土を含む暗褐色土を、住居の壁に直接貼り付けて構築している。煙道部は、すでに削平されているため不明である。



102号住跡



第189図 第352号住居跡

第10層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子・粘土粒子を多量、焼土粒子を微量含む。）

第11層：褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子・粘土粒子・暗褐色土を少量、焼土ブロックを微量含む。）

#### 第352号住居跡土層説明

第1層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、径0.5～1.5cmのロームブロック・焼土粒子を少量含む。）

第2層：黄褐色土層（ローム粒子を主体に、暗褐色土を含む。）

#### 第352号住居跡カマド土層説明

第1層：暗褐色土層（黄褐色粘土・暗褐色土の混合土を主体に、焼土ブロック・焼土粒子を多量、ロームブロック・ローム粒子を少量含む。）

第2層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子・焼土ブロック・焼土粒子・黄褐色粘土を少量含む。）

第3層：暗褐色土層（径0.5～0.8cmのロームブロック・ローム粒子・焼土ブロック・焼土粒子を含む。しまりを有する。）

第4層：暗褐色土層（黄褐色粘土・暗褐色土の混合土を主体に、ローム粒子・焼土粒子を多量含む。）

第5層：暗褐色土層（焼土粒子・黄褐色粘土を多量、ローム粒子を少量含む。）

第6層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子・焼土粒子を含む。）

第7層：暗褐色土層（黄褐色粘土を多量、ローム粒子・焼土粒子を少量含む。）

第8層：黄褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を主体に、暗褐色土を含む。）

第9層：暗褐色土層（黄褐色粘土・暗褐色土の混合土を主体に、焼土粒子を少量含む。）

遺物は、カマド内からNo1の甕の破片が出土し、住居南側壁際の床面上からNo2の土師器杯とNo3～No5の須恵器杯が重なって出土している。この中のNo5の須恵器杯には、体部外面に焼成後の線刻による篋記号が見られる。本住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土土器の様相から、平安時代前期と考えられる。



第190図 第352号住居跡出土遺物

第103表 第352号住居跡出土遺物観察表

1	甕	A.口縁部径17.0。B.粘土粗積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ハケの後淺ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一暗茶褐色。F.口縁部1/3。H.カマド内。
2	杯	A.口縁部径12.0。器高3.1。底部径10.1。B.粘土粗積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデ、内面ヨコナデ。底部外面ケズリ。D.白色粒。E.内外一暗茶褐色。F.完形。H.床面直上。
3	須恵器	A.口縁部径12.6。器高4.1。底部径7.3。B.ロクロ成形。C.口縁部内外面回転ナデ。底部外面回転系切り。D.白色粒。E.内外一黒灰色。F.ほぼ完形。H.床面直上。
4	須恵器	A.口縁部径12.4。器高3.9。底部径6.2。B.ロクロ成形。C.口縁部内外面回転ナデ。底部外面回転系切り。D.白色粒。E.内外一白灰色。F.完形。H.床面直上。
5	須恵器	A.口縁部径12.2。器高3.5。底部径6.0。B.ロクロ成形。C.口縁部内外面回転ナデ。底部外面回転系切り。D.白色粒。E.内外一暗灰色。G.体部外面に焼成後の細い線刻あり。F.完形。H.床面直上。

## 第353号住居跡 (第191図、写真図版88)

H地点調査区東側の南側寄りに位置する。重複する第689・690号土坑と第102・103号溝跡に切られ、第351・352号住居跡を切っている。

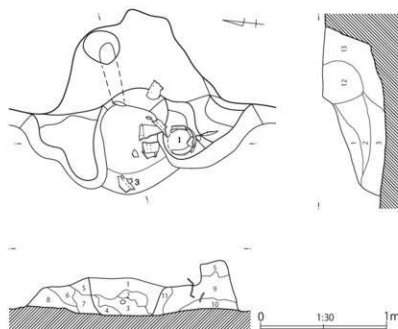
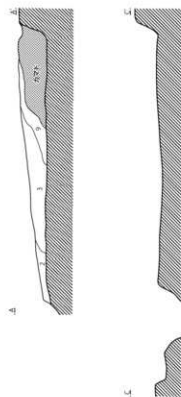
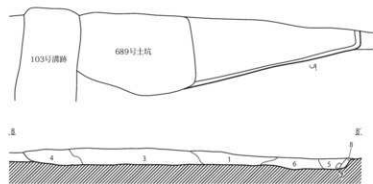
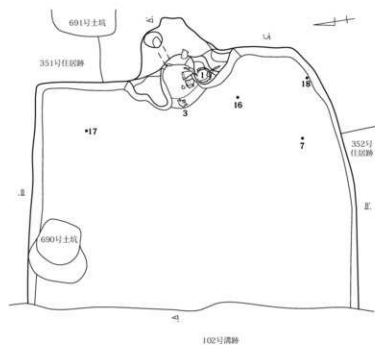
平面形は、コーナー部が丸みを持つ歪んだ隅丸長方形を呈している。規模は、東西方向が5.95m、南北方向が5.29mを測る。住居の主軸方位は、N-100°-Eを向いている。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは37cmある。残存する各壁の壁下には、壁溝は見られない。床面は、ロームブロックを含む暗褐色土を平坦に埋め戻した貼床式である。ピットは、検出されなかった。

カマドは、住居東側壁の中央に位置し、壁に対してやや斜めに付設されている。規模は、全長147cm、最大幅190cmを測る。燃焼部は、住居内にある。燃焼部は、住居の床面よりも若干低く平坦に作られており、段を持たずにそのまま煙道部に移行している。袖は、黄褐色粘土を含む暗褐色土を、住居の壁に貼り付けて構築している。煙道部は、住居の壁外に53cmほど水平に延びて上方に立ち上がっている。

遺物は、カマド内や住居跡の覆土中から、奈良時代～平安時代前期の土器が出土している。本住居跡の時期は、遺構の重複関係から、平安時代前期と考えられる。

第104表 第353号住居跡出土遺物観察表

1	長胴甕	A.口縁部径24.5。B.粘土粗積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面淺ナデ。D.角四石、石英、白色粒。E.外一橙褐色、内一明赤褐色。F.上半1/3。H.カマド右袖内。
2	胴強甕	A.口縁部径26.0。B.粘土粗積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面淺ナデ。D.角四石、白色粒。E.外一淡橙褐色、内一灰褐色。F.上半1/5。G.口縁部外面に指頭圧痕を残す。H.覆土中。
3	長胴甕	A.口縁部径21.0。B.粘土粗積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面淺ナデ。D.角四石、チャート、白色粒。E.外一明赤褐色、内一淡褐色。F.上半1/5。H.カマド内。
4	小形台付甕	A.口縁部径12.4。B.粘土粗積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面淺ナデ。D.角四石、白色粒。E.内外一淡黄褐色。F.上半3/4。G.口縁部外面に指頭圧痕を残す。H.覆土中。
5	甕	A.口縁部径14.7。器高2.4。B.粘土粗積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。底部外面ケズリ、内面ナデ。D.片岩粒、角四石、石英、白色粒。E.内外一橙褐色。F.1/5。H.カマド内。
6	甕	A.口縁部径14.6。器高3.1。B.粘土粗積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。底部外面ケズリ、内面ナデ。D.角四石、石英、白色粒。E.内外一橙褐色。F.ほぼ完形。H.覆土中。



第191图 第353号住居跡

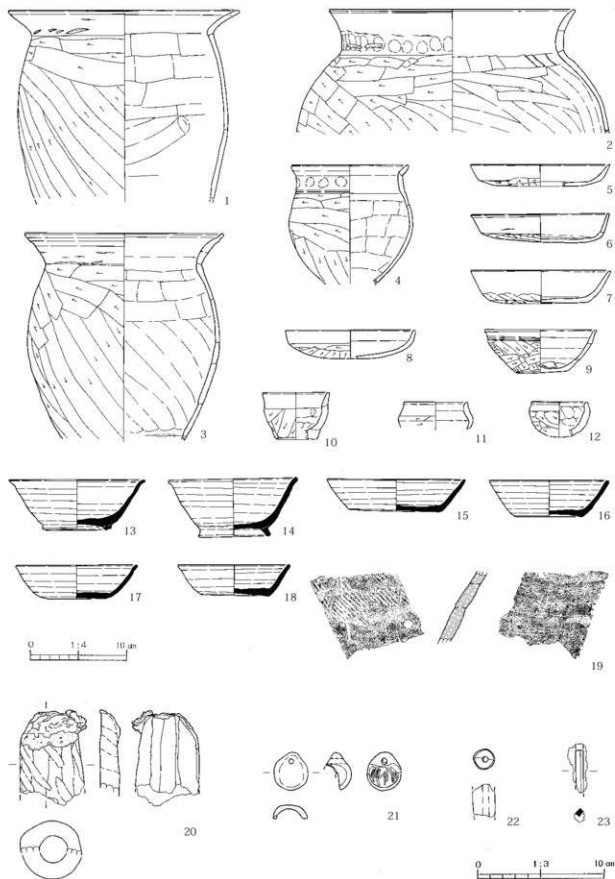
## 第353号住居跡土層説明

- 第1層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子・焼土粒子を多量、径0.5～1cmのロームブロック・炭化物を少量含む。）  
 第2層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子・焼土粒子を多量、ロームブロックを少量、炭化物を微量含む。）  
 第3層：暗褐色土層（黄褐色粘土・暗褐色土の混合土を主体に、径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子・焼土粒子を多量、炭化物を少量含む。）  
 第4層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、ロームブロックを少量、焼土粒子を微量含む。）  
 第5層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子・炭化物を少量含む。）  
 第6層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、焼土粒子を少量、ロームブロックを微量含む。）  
 第7層：暗褐色土層（径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を含む。）  
 第8層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、ロームブロックを少量含む。）  
 第9層：暗褐色土層（黄褐色粘土を主体とする。しまりを有する。）

## 第353号住居跡カマド土層説明

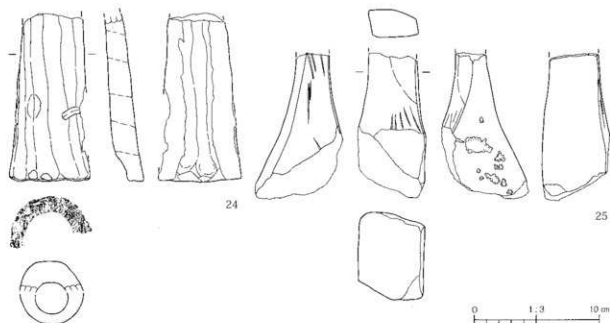
- 第1層：黄褐色粘土層（焼土ブロックを多量、焼土粒子・暗褐色土を少量含む。）  
 第2層：黄褐色粘土層（暗褐色土を少量、ロームブロックを微量含む。）  
 第3層：黄褐色粘土層（焼土粒子を多量含む。）  
 第4層：黄褐色粘土層（径0.5～1cmの焼土ブロック・焼土粒子を多量、暗褐色土を微量含む。）  
 第5層：暗褐色土層（黄褐色粘土・暗褐色土の混合土を主体に、焼土ブロック・焼土粒子を微量含む。）  
 第6層：黄褐色粘土層（暗褐色土を少量含む。）  
 第7層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、焼土ブロック・焼土粒子・黄褐色粘土を少量含む。）  
 第8層：暗褐色土層（径0.5～3cmのロームブロックを微量含む。）  
 第9層：黄褐色粘土層（焼土粒子を微量含む。）  
 第10層：暗褐色土層（ローム粒子を多量含む。）  
 第11層：暗褐色土層（焼土粒子を多量含む。）  
 第12層：暗褐色土層（黄褐色粘土・暗褐色土の混合土を主体に、焼土ブロック・焼土粒子を多量含む。）  
 第13層：暗褐色土層（焼土粒子を少量含む。）

7	環	A.口縁部径14.8、器高3.4、底部径10.6。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。底部外面ヨコナデ。D.角閃石、石英、白色粒。E.内外一淡褐色。F.1/2。H.覆土中。
8	環	A.口縁部径(13.8)。器高3.0。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。底部外面ナデの後ケズリ、内面ヨコナデ。D.角閃石、石英、白色粒。E.内外一明赤褐色。F.1/4。H.覆土中。
9	環	A.口縁部径11.8、器高4.6、底部径5.5。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。底部外面ケズリ、内面ヨコナデ。底部外面ケズリ、内面笠ナデ。D.角閃石、白色粒。E.内外一橙褐色。F.4/5。H.覆土中。
10	小形土器	A.口縁部径(7.1)、器高4.9、底部径(4.3)。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。底部外面ケズリ、内面指ナデ。底部外面ケズリ。D.角閃石、白色粒。E.内外一明赤褐色。F.1/4。H.覆土中。
11	小形土器	A.口縁部径(6.8)。B.手捏ね。C.口縁部内外面ヨコナデ。底部外面ケズリ、内面ナデ。D.片岩粒、角閃石、E.内外一明赤褐色。F.口縁部1/5。H.覆土中。
12	小形土器	A.口縁部径(6.0)。B.手捏ね。C.口縁部内外面ヨコナデ。底部外面ケズリ、内面指ナデ。D.角閃石。E.内外一淡黄褐色。F.1/5。H.覆土中。
13	須恵器 高台付埴	A.口縁部径(14.0)、器高5.3、高台部径7.3。B.ロクロ成形、高台部貼り付け。C.口縁部内外面回転ナデ。底部外面回転系切り、高台部内外面回転ナデ。D.角閃石、石英。E.内外一灰褐色。F.1/3。H.覆土中。
14	須恵器 高台付埴	A.口縁部径13.6、器高6.1、高台部径7.7。B.ロクロ成形、高台部貼り付け。C.口縁部内外面回転ナデ。底部外面回転系切り、高台部内外面回転ナデ。D.石英、白色粒。E.内外一黄灰色。F.2/3。H.覆土中。
15	須恵器 環	A.口縁部径14.6、器高3.4、底部径9.8。B.ロクロ成形。C.口縁部内外面回転ナデ。底部外面回転ケズリ。D.白色針状、石英、白色粒。E.内外一灰色。F.ほぼ完形。G.南北企産。H.覆土中。
16	須恵器 環	A.口縁部径(12.6)、器高3.8、底部径7.0。B.ロクロ成形。C.口縁部内外面回転ナデ。底部外面回転系切り。D.石英。E.内外一灰白色。F.1/4。H.覆土中。
17	須恵器 環	A.口縁部径(12.8)、器高3.5、底部径6.1。B.ロクロ成形。C.口縁部内外面回転ナデ。底部外面回転系切り後回転ケズリ。D.白色針状、石英。E.内外一灰色。F.2/3。G.南北企産。H.覆土中。
18	須恵器 環	A.口縁部径11.8、器高3.3、底部径7.3。B.ロクロ成形。C.口縁部内外面回転ナデ。底部外面回転系切り。D.片岩粒、石英。E.内外一灰白色。F.3/4。H.覆土中。
19	常滑窯系 甕	B.粘土組織み上げ後叩き。C.胴部外面ナデの後押印文。内面ナデ。D.白色粒。E.外一褐色、内一灰褐色。F.胴部破片。H.覆土中。
20	羽 口	A.残存長7.4、最大幅4.9、厚さ1.4。B.手捏ね。C.内外面ナデ。D.石英、白色粒。E.外一淡黄褐色、内一淡褐色。F.上半1/2。G.先端部外面は発泡及びガラス化が著しい。H.覆土中。
21	土 鈴	A.長さ2.9、最大幅2.7、厚さ0.5、重さ7.02g。B.手捏ね。C.外面ナデ、内面身調整。D.角閃石。E.内外一黒褐色。F.2/3。H.覆土中。



第192图 第353号住居跡出土遺物(1)





第193図 第353号住居跡出土遺物(2)

22	土 錘	A. 残存長2.7、最大幅1.8、重さ6.84g。B. 手握ね。C. ナデ。D. 白色粒。E. 外-淡黄橙色。F. 破片。H. 覆土中。
23	鉄 製 品	A. 残存長3.4、最大幅0.6、厚さ0.4、重さ5.79g。B. 鍛造。D. 鉄製。F. 破片。H. 覆土中。
24	土 製 支 脚	A. 残存長13.2、最大幅4.5、厚さ1.8。B. 粘土細積み上げ。C. 内外面ナデ。D. 角閃石、白色粒。E. 外-褐灰色、内-灰褐色。F. 1/4。H. 覆土中。
25	柱 状 砥 石	A. 残存長11.4、最大幅5.2、厚さ6.5、重さ395.8g。B. 荒削り後ケズリ整形。C. 4面使用上面及び側面に線状擦過痕、下面は平滑な磨り面。D. 流紋岩。F. 両端部欠損。H. 覆土中。

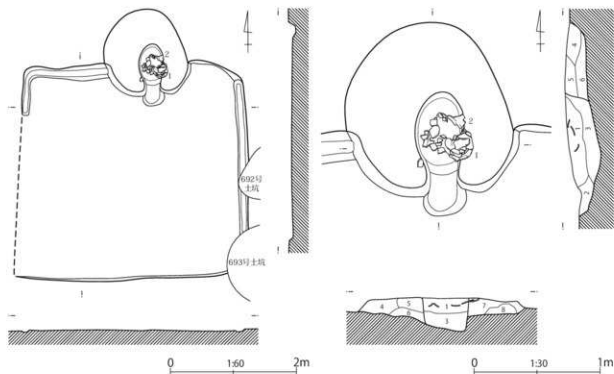
## 第354号住居跡(第194図、写真図版89)

H地点調査区東側の南東端に位置する。重複する第692・693号土坑に切られている。本住居跡の上面は、床面近くまで強く削平されているため、遺構の遺存状態はあまり良好とは言えない。

平面形は、コーナー部が丸みをもつ隅丸方形を呈している。規模は、南北方向が3.50m、東西方向が3.53mを測る。住居の主軸方位は、 $N-0^{\circ}-E$ を向いている。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは5cmある。北側壁と西側壁の一部及び東側壁の壁下には、壁溝が巡っている。床面は、ロームブロックを含む暗褐色土を平坦に埋め戻した貼床式である。住居中央部は比較的堅く締まっているが、周辺部は軟弱である。ピットは、検出されなかった。

カマドは、住居北側壁の中央に位置し、壁を掘り込んで直角に付設されている。規模は、全長154cm、最大幅130cmを測る。燃烧部は、その半分が住居外にある。燃烧部は、住居の床面よりも一段低くほぼ平坦に作られている。奥壁は、直線的に傾斜して煙道部に向かっている。燃烧部内からは、甕が出土している。袖は、黄橙色粘土を含む暗褐色土を、燃烧部の奥壁から廻って構築している。煙道部は、すでに削平されているため不明である。

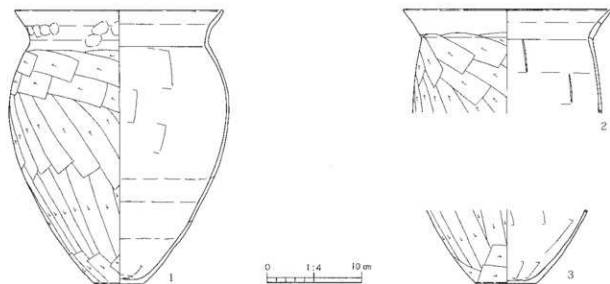
遺物は、カマド内や住居跡の覆土中から、土器が出土している。本住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土土器の様相から、奈良時代後半頃と考えられる。



第194図 第354号住居跡

## 第354号住居跡カマド土層説明

- 第1層：暗褐色土層（黄褐色粘土・暗褐色土の混合土を主体に、焼土粒子を含む。しまりを有する。）  
 第2層：暗褐色土層（ロームブロックを多量、ローム粒子・焼土粒子を少量含む。しまりを有する。）  
 第3層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を少量、焼土ブロック・焼土粒子を微量含む。しまりを有する。）  
 第4層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、径0.5～2cmのロームブロック・焼土粒子を少量含む。しまりを有する。）  
 第5層：暗褐色土層（黄褐色粘土・暗褐色土の混合土を主体に、焼土ブロック・焼土粒子を含む。しまりを有する。）  
 第6層：暗褐色土層（粘土粒子を少量、径0.5～0.8cmの焼土ブロックを微量含む。しまりを有する。）  
 第7層：暗褐色土層（粘土粒子を少量、ロームブロックを微量含む。しまりを有する。）  
 第8層：暗褐色土層（粘土粒子を少量含む。しまりを有する。）



第195図 第354号住居跡出土遺物

第105表 第354号住居跡出土遺物観察表

1	糞	A.口縁部径(22.0)、器高29.0、底部径5.0。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面窪ナデ。底部外面ケズリ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一暗茶褐色。F.1/3。G.口縁部外面に指頭圧痕を残す。H.カマド内。
2	糞	A.口縁部径(22.0)。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面窪ナデ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.内外一暗茶褐色。F.上半1/3。H.カマド内。
3	糞	A.底部径6.4。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面窪ナデ。底部外面ケズリ。D.白色粒。E.外一暗褐色、内一淡褐色。F.底部のみ。H.カマド内。

## 第355号住居跡（第196図、写真図版90）

H地点調査区東側の南東端に位置する。重複する第356a・356b号住居跡に切られている。調査区内で検出されたのは住居跡の北側壁の一部だけであり、東側は調査区外にあるため、本住居跡の全容は不明である。

平面形は、不明である。規模は、北西～南東方向は1.55mまで測れる。住居の北側壁は、N-73°-Eの方向を向いている。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは25cmある。検出された北側壁の壁下には、壁溝は見られない。床面は、ロームブロックを含む暗褐色土を平坦に埋め戻した貼床式である。ピットは、検出されなかった。

遺物は、住居跡の覆土中から、土師器製の破片が1片出土しただけである。本住居跡の時期は、遺構の重複関係から、古墳時代後期以前と思われる。

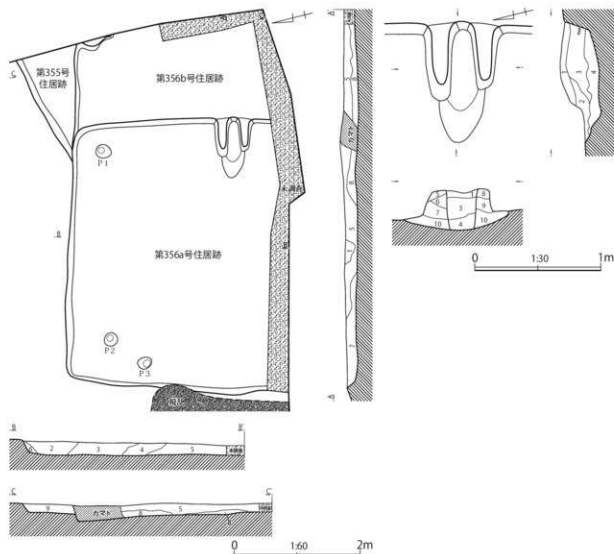
## 第356a号住居跡（第196図、写真図版90）

H地点調査区東側の南東端に位置する。重複する第355・356b号住居跡を切っている。住居跡の南側半分は調査区外にあるため、本住居跡の全容は不明である。

平面形は、調査区内で検出された部分から推測すると、コーナー部が丸みをもつ隅丸方形が隅丸長方形を呈していたと思われる。規模は、東西方向が4.25m、南北方向が3.28mを測る。住居の主軸方位は、N-105°-Eを向いている。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは25cmある。調査区内で検出された各壁の壁下には、壁溝は見られない。床面は、ロームブロックを含む暗黄褐色土を平坦に埋め戻した貼床式である。ピットは、3カ所検出されている。いずれも直径23cm程度の円形を呈し、床面からの深さは18cm～29cmある。P1とP2は、いずれも住居コーナー部に寄った場所にあり、概ね住居の対角線上に配置されているが、支柱と関係するものか不明である。

カマドは、住居東側壁に位置し、住居の壁に対して直角に付設されている。規模は、全長94cm、最大幅58cmを測る。燃焼部は、住居内にある。燃焼部は、住居の床面より若干低く、ほぼ平坦に作られている。奥壁は、直線的に傾斜して煙道部に向かっている。袖は、粘土粒子やロームブロックを含む暗褐色土を、住居の壁に直接貼り付けて構築している。煙道部は、すでに削平されているため不明である。

遺物は、住居跡の覆土中から、古墳時代後期後葉頃～白鳳時代頃までの土器の破片が出土している。遺構の重複関係からすると、おそらく第197図No1～No4の新しい白鳳時代頃のもの本住居跡に関係すると思われる。本住居跡の時期は、カマドは古墳時代的な形態であるが、遺構の重複関係や出土土器の様相から、白鳳時代頃と推測される。



第196図 第355・356a・356b号住居跡

## 第355・356a・356b号住居跡土層説明

第1層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を含む。）

第2層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、径0.5～2cmのロームブロックを少量含む。粘性に富み、しまりはない。）

第3層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子・焼土粒子を少量、径0.5～1cmのロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりはない。）

第4層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ロームブロックを多量、ローム粒子・焼土粒子を少量含む。粘性に富み、しまりはない。）

第5層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ロームブロック・ローム粒子を少量含む。粘性に富み、しまりはない。）

第6層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量含む。粘性に富み、しまりはない。）

第7層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、径0.5～2cmのロームブロックを少量含む。粘性に富み、しまりはない。）

第8層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、ロームブロックを少量含む。粘性に富み、しまりはない。）

第9層：土層説明なし。

## 第356a号住居跡力マド土層説明

第1層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、焼土粒子を少量含む。）

第2層：暗褐色土層（ローム粒子・暗褐色土の混合土を主体に、ロームブロックを少量含む。）

第3層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を含む。）

- 第4層：暗褐色土層（径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を含む。）  
 第5層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子を少量含む。）  
 第6層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子・焼土粒子を少量含む。）  
 第7層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、粘土粒子を多量、焼土粒子・粘土粒子を少量含む。）  
 第8層：黄褐色土層（ロームブロックを主体とする。）  
 第9層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、粘土粒子を多量、ローム粒子・焼土粒子を少量含む。）  
 第10層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、径0.5～0.8cmのロームブロック・ローム粒子・焼土粒子を少量含む。）

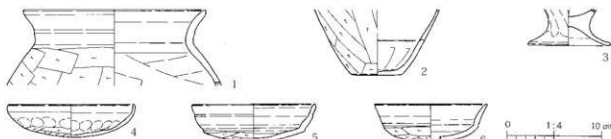
### 第356b号住居跡（第196図、写真図版90）

H地点調査区東側の南東端に位置する。重複する第356a号住居跡に切られ、第355号住居跡を切っている。住居跡の大半は調査区外にあるため、本住居跡の全容は不明である。

平面形は、不明である。規模は、南北方向は3.10mまで、東西方向は1.50mまで測れる。住居の主軸方位は、N-165°-Wを向いている。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは24cmある。調査区内で検出された各壁の壁下には、壁溝は見られない。床面は、ロームブロックを含む暗褐色土を平坦に埋め戻した貼床式である。ピットは、検出されなかった。

カマドは、住居の北側壁に付設されている。調査区内で検出されたのは、カマドの左側袖の一部だけであるため、カマドの全容は不明である。

遺物は、住居跡の覆土中から、古墳時代後期後葉頃～白鳳時代頃までの土器の破片が出土しているが、遺構の重複関係からすると、おそらく第197図No5とNo6の古い古墳時代後期頃のもの本住居跡に関係すると思われる。本住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土土器の様相から、古墳時代後期後葉頃と推測される。



第197図 第356ab号住居跡出土遺物

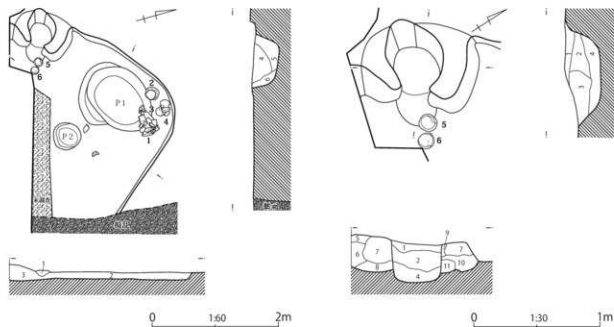
第106表 第356ab号住居跡出土遺物観察表

1	胴張裏	A.口縁部径(19.4)。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ツナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一暗灰褐色。F.口縁部1/4強。H.覆土中。
2	長胴裏	A.底部径5.4。B.粘土組織み上げ。C.胴部外面ケズリ、内面ツナデ。底部外面ケズリ。D.白色粒。E.内外一暗茶褐色。F.底部のみ。H.覆土中。
3	高杯	A.脚端部径(8.8)。B.粘土組織み上げ。C.脚柱部外面指ナデ。脚端部内外面ナデ。D.白色粒。E.外一淡褐色、内一黒褐色。F.脚部1/2。H.覆土中。
4	杯	A.口縁部径13.4。器高3.5。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後下半ケズリ、内面ヨコナデ。D.白色粒。E.内外一明茶褐色。F.1/2強。G.体部内外面に指頭土痕を残す。H.覆土中。
5	有段口縁杯	A.口縁部径(13.2)。器高4.0。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一黒褐色。F.1/2弱。H.覆土中。
6	模倣杯	A.口縁部径(12.0)。器高4.0。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.外一淡灰褐色、内一明褐色。F.口縁部1/4。H.覆土中。

## 第357号住居跡 (第198図、写真図版91・92)

H地点調査区東側の南端に位置する。重複する第358号住居跡を切っている。住居跡の南側の大半は、調査区外にあるため、本住居跡の全容は不明である。

平面形は、検出された部分から推測すると、コーナー部の丸みが強い隅丸長方形か隅丸方形を呈していたと思われる。規模は、北西～南東方向は2.75mまで、北東～南西方向は2.95mまで測れる。住居の主軸方位は、N-141°-Eを向いている。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの



第198図 第357号住居跡

## 第357号住居跡土層説明

- 第1層：暗褐色土層 (暗褐色土を主体に、灰白色粘土ブロックを多量含む。粘性に富み、しまりはない。)  
 第2層：暗褐色土層 (暗褐色土を主体に、径0.5～2 cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。)  
 第3層：暗褐色土層 (焼土粒子・粘土粒子を少量含む。粘性に富み、しまりはない。)  
 第4層：暗褐色土層 (暗褐色土を主体に、径0.5～1.5 cmのロームブロック・ローム粒子を多量、径0.5～1 cmの黒褐色土ブロックを微量含む。)  
 第5層：黄褐色土層 (ローム粒子を多量、暗褐色土を少量、径0.5～1 cmの黒褐色土ブロックを微量含む。)  
 第6層：暗褐色土層 (暗褐色土を主体に、径0.5～5 cmのロームブロック・ローム粒子を多量、径0.5～1 cmの黒褐色土ブロックを微量含む。)

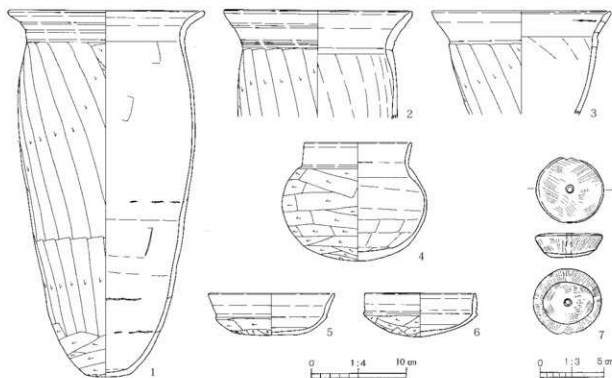
## 第357号住居跡カマド土層説明

- 第1層：黄褐色粘土層 (径0.5～4 cmの焼土ブロック・焼土粒子・粘土の混合土を主体に、炭化物を微量含む。)  
 第2層：暗褐色土層 (暗褐色土を主体に、焼土粒子を多量、径0.5～1 cmのロームブロック・ローム粒子を少量、炭化物を微量含む。)  
 第3層：暗褐色土層 (粘土・暗褐色土の混合土を主体に、径0.5～2 cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。)  
 第4層：暗褐色土層 (暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、焼土粒子を少量含む。)  
 第5層：暗褐色土層 (黄褐色粘土を主体に、ローム粒子・焼土粒子を含む。しまりを有する。)  
 第6層：暗褐色土層 (焼土粒子・粘土粒子を少量含む。しまりを有する。)  
 第7層：黄褐色粘土層 (粘土ブロックを主体に、暗褐色土を含む。しまりを有する。)  
 第8層：暗褐色土層 (暗褐色土を主体に、径0.5～4 cmのロームブロック・ローム粒子を含む。しまりを有する。)  
 第9層：暗褐色土層 (暗褐色土を主体に、粘土を含む。しまりを有する。)  
 第10層：暗褐色土層 (粘土・暗褐色土の混合土。しまりを有する。)  
 第11層：暗褐色土層 (暗褐色土を主体とする。しまりを有する。)

深さは25cmある。検出された各壁の壁下には、壁溝は見られない。床面は、ロームブロックを含む暗黄褐色土を平坦に埋め戻した貼床式で、全体的に固く締まっている。ピットは、2カ所検出されている。P1は、いわゆる貯蔵穴と呼ばれるもので、カマド右側の住居北側コーナー部に位置する。85cm×120cmの楕円形を呈し、床面からの深さは40cmある。P2は、住居の対角線上に位置すると思われ、4本柱穴の一つである可能性が高い。径45cmの円形を呈し、床面からの深さは42cmある。

カマドは、住居北西側壁の中央付近に位置し、壁に対して直角に付設されている。規模は、全長84cm、最大幅94cmを測る。燃烧部は、住居内にある。燃烧面は、住居の床面よりも低く平坦に作られている。奥壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、煙道部に向かっている。袖は、黄橙色粘土を住居の壁に直接貼り付けて構築している。煙道部は、すでに削平されているため不明である。

遺物は、カマド前や住居北側コーナー部付近の床面付近から、土器が多く出土している。土器以外では、覆土中から石製紡錘車が出土している。本住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土土器の様相から、古墳時代後期後半頃と考えられる。



第199図 第357号住居跡出土遺物

第107表 第357号住居跡出土遺物観察表

1	長胴甕	A.口縁部径28.0、器高39.0、底部径4.8。B.粘土細積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面笠ナデ。底部外面ケズリ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.内外一淡茶褐色。F.3/4。H.床面付近。
2	長胴甕	A.口縁部径20.0。B.粘土細積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面笠ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一淡褐色。F.口縁部のみ。H.床面付近。
3	小形甕	A.口縁部径19.0。B.粘土細積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面丁寧なナデ。D.白色粒。E.外一淡褐色、内一暗茶褐色。F.上半3/4。H.床面付近。
4	鉢	A.口縁部径(11.4)、器高12.6。B.粘土細積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面笠ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一淡橙褐色。F.1/2。H.床面付近。
5	模倣杯	A.口縁部径13.4、器高4.4。B.粘土細積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一明橙褐色。F.完形。H.床面直上。

6	模倣環	A.口縁部径11.8、器高4.6。B.粘土細積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.白色粒。E.内外一明橙褐色。F.ほぼ完形。H.床面直上。
7	石製模造品	A.上面径5.45×5.2、下面径4.1×3.35、高さ2.0、重さ67.41g。B.荒削り後ケズリ整形。C.各面とも研磨。D.流紋岩。F.ほぼ完形。H.カマド内。

### 第358号住居跡（第201図）

H地点調査区東側の南端に位置する。重複する第357号住居跡や第698・699・700号土坑及び102号溝跡に切られている。住居跡の南側の大半は、調査区外にあるため、本住居跡の全容は不明である。

平面形は、検出された部分から推測すると、コーナー部が丸みをもつ歪んだ隅丸長方形か隅丸方形を呈していたと思われる。規模は、東西方向が5.26m、南北方向は3.03mまで測れる。住居跡の北側壁は、N-91°-Eの方向を向いている。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは20cmある。検出された各壁の壁下には、壁溝は見られない。床面は、ロームブロックを含む暗黄褐色土を平坦に埋め戻した貼床式である。ピットは、検出されていない。

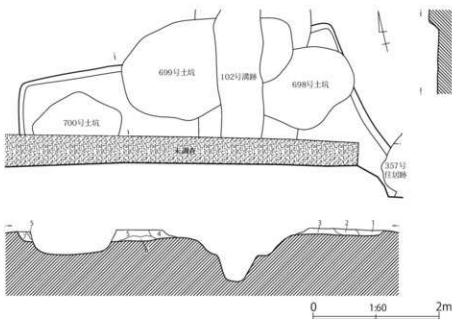
遺物は、住居跡の覆土中から、土器の破片が少量出土しただけである。本住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土土器の様相から、平安時代前期と考えられる。



第200図 第358号住居跡  
出土遺物

第108表 第358号住居跡出土遺物観察表

1	環	A.口縁部径(12.0)、器高3.8、底部径(7.2)。B.粘土細積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデ、内面ヨコナデ。底部外面ケズリ。D.白色粒。E.内外一淡茶褐色。F.1/4。G.体部外面に指頭圧痕を残す。H.覆土中。
---	---	--



第201図 第358号住居跡

#### 第358号住居跡土層説明

- 第1層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を微量含む。）
- 第2層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を少量含む。）
- 第3層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、径0.5～1 cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含む。）
- 第4層：褐色土層（径0.5～2 cmのロームブロック・ローム粒子・暗褐色土を含む。）
- 第5層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子を少量含む。）

第6層：暗褐色土層（暗褐色土を主体とする。）

第7層：暗褐色土層（ローム粒子を少量、径0.5～5 cmのロームブロックを微量含む。）



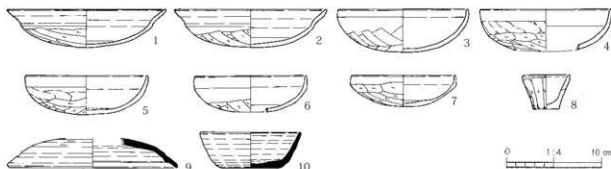
## 第359号住居跡(第203図、写真図版93・94)

H地点調査区東側の南側に位置する。重複する第701・702・705号土坑に切られている。

平面形は、コーナー部の丸みが強い隅丸長方形を呈している。規模は、東西方向が5.25m、南北方向が4.30mを測る。住居の主軸方位は、N-82°-Eを向いている。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは45cmある。検出された各壁の壁下には、壁溝は見られない。床面は、ロームブロックを含む暗黄褐色土を平坦に埋め戻した貼床式である。住居中央部は比較的堅く締まっているが、周辺部はやや軟弱である。ピットは、2カ所検出されている。P1は、いわゆる貯蔵穴と呼ばれるもので、カマド右側の住居南東側コーナー部に位置する。75cm×107cmの隅丸長方形を呈し、床面からの深さは25cmある。P1の上面からは完形に近い土師器の皿や環が並べられた状態で多く出土している。P2は、住居南西側コーナー部に位置する。形態は、35cm×30cmの楕円形を呈し、床面からの深さは16cmある。

カマドは、住居東側壁のほぼ中央に、壁を掘り込んで直角に付設されている。規模は、全長162cm、最大幅118cmある。燃焼部は、半分が住居の壁外にある。燃焼面は、住居の床面より低く、平坦に作られている。奥壁は、緩やかに傾斜して煙道部に向かっている。袖は、黄褐色粘土やロームブロックを含む暗褐色土を、燃焼部奥壁から廻して構築している。袖の内面は、あまり焼けていない。煙道部は、すでに削平されているため不明である。

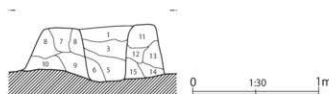
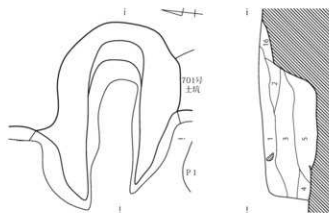
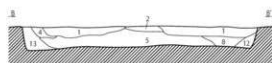
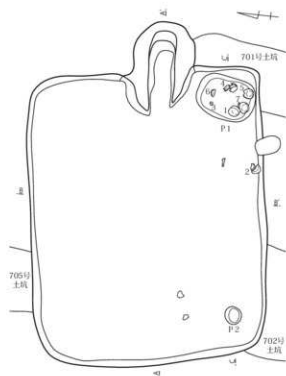
遺物は、貯蔵穴上面から、土師器の皿や環が多く出土している。本住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土土器の様相から、白鳳時代と考えられる。



第202図 第359号住居跡出土遺物

第109表 第359号住居跡出土遺物観察表

1	皿	A.口縁部径16.8、器高4.0。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ヨコナデ。D.赤色粒、白色粒。E.外-淡茶褐色、内-暗褐色。F.ほぼ完形。H.貯蔵穴(P1)上面。
2	皿	A.口縁部径16.2、器高4.0。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.外-淡茶褐色、内-明褐色。F.口縁部1/4。H.貯蔵穴(P1)内。H.床面付着。
3	環	A.口縁部径(14.0)、器高4.6。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後下半ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.外-淡茶褐色、内-明褐色。F.口縁部1/4。H.貯蔵穴(P1)内。
4	環	A.口縁部径(14.0)。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後下半ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.外-淡茶褐色、内-淡褐色。F.口縁部1/2強。H.貯蔵穴(P1)上面。
5	環	A.口縁部径13.0、器高4.1。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後下半ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.外-明褐色、内-淡茶褐色。F.ほぼ完形。G.体部外面に黒斑あり。H.貯蔵穴(P1)上面。
6	環	A.口縁部径(12.0)、器高3.8。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後下半ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外-明褐色。F.口縁部1/4。H.貯蔵穴(P1)内。
7	環	A.口縁部径11.2、器高3.3。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ヨコナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外-淡茶褐色。F.ほぼ完形。H.貯蔵穴(P1)上面。



第203図 第359号住居跡

## 第359号住居跡土層

## 説明

## 第1層：暗褐色土層

(暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、ロームブロック・焼土ブロック・焼土粒子を少量含む。)

## 第2層：暗褐色土層

(暗褐色土を主体に、径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子・焼土粒子を多量含む。)

## 第3層：暗褐色土層

(ロームブロック・ローム粒子・焼土ブロック・焼土粒子を多量含む。)

第4層：暗褐色土層 (ロームブロック・ローム粒子を多量、焼土ブロック・焼土粒子を少量含む。)

第5層：暗褐色土層 (ローム粒子を多量、径0.5～2cmのロームブロック・焼土ブロック・焼土粒子を少量含む。)

第6層：暗褐色土層 (ロームブロック・ローム粒子・焼土粒子を多量含む。)

第7層：暗褐色土層 (径4～5cmのロームブロック・ローム粒子・焼土粒子を多量含む。)

第8層：暗褐色土層 (ロームブロック・ローム粒子・焼土ブロック・焼土粒子を少量含む。)

第9層：暗褐色土層 (ローム粒子・焼土ブロック・焼土粒子を多量、ロームブロックを少量含む。)

第10層：暗褐色土層 (ローム粒子・径0.5～0.8cmの焼土ブロック・焼土粒子を多量、ロームブロックを少量含む。)

第11層：暗褐色土層 (ローム粒子を多量、ロームブロック・焼土粒子を少量含む。)

第12層：暗褐色土層 (ローム粒子を多量、焼土粒子を少量含む。)

0 1.60 2m

0 1.30 1m

- 第13層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を多量、焼土ブロック・焼土粒子を少量含む。）  
 第14層：灰白色粘土層（粘土・暗褐色土を含む。粘性に富み、しまりを有する。）  
 第15層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、0.5～0.8cmのロームブロックを少量、焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）  
 第16層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、径0.5～4cmのロームブロック・ローム粒子・焼土ブロック・焼土粒子を多量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

#### 第359号住居跡カマド土層説明

- 第1層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、浅間山系A軽石・径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子・焼土ブロック・焼土粒子を少量含む。）  
 第2層：暗褐色土層（焼土ブロック・焼土粒子を多量、ロームブロック・ローム粒子を少量含む。）  
 第3層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を多量、ロームブロック・焼土ブロックを少量含む。）  
 第4層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を多量、ロームブロック・焼土ブロック・黄白色粘土ブロックを少量含む。）  
 第5層：暗褐色土層（ロームブロックを多量、ローム粒子・焼土ブロックを少量、焼土粒子を微量含む。）  
 第6層：暗褐色土層（黄褐色粘土・暗褐色土の混合土を主体に、焼土粒子を少量、ローム粒子を微量含む。）  
 第7層：暗褐色土層（黄褐色粘土・暗褐色土の混合土を主体に、径0.5～0.8cmのロームブロック・ローム粒子・焼土ブロック・焼土粒子を多量含む。）  
 第8層：暗褐色土層（黄褐色粘土・暗褐色土の混合土を主体に、浅間山系A軽石・ロームブロック・焼土ブロックを多量、ローム粒子を少量含む。）  
 第9層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ロームブロック・ローム粒子・焼土ブロック・焼土粒子を多量、黄褐色粘土を少量含む。）  
 第10層：暗褐色土層（黄褐色粘土を主体に、ロームブロック・ローム粒子・暗褐色土を多量、焼土ブロック・焼土粒子を少量含む。）  
 第11層：暗褐色土層（黄褐色粘土・暗褐色土を主体に、焼土ブロックを多量、ロームブロック・ローム粒子・焼土粒子を少量含む。）  
 第12層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ロームブロック・ローム粒子を少量、焼土ブロック・焼土粒子を微量含む。）  
 第13層：暗褐色土層（ロームブロックを多量、ローム粒子・焼土ブロック・焼土粒子を少量含む。しまりを有する。）  
 第14層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子・焼土ブロックを多量、焼土粒子を少量含む。）  
 第15層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子を微量含む。）  
 第16層：明赤褐色土層（焼土ブロック。）

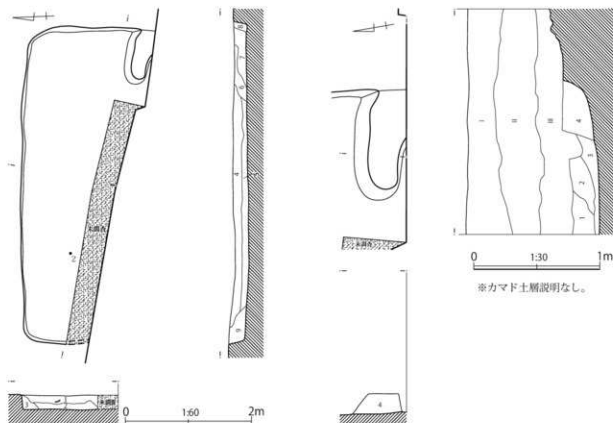
8	小形土器	A.口縁部径(5.0)、器高3.6、底部径2.8。B.粘土粗積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後ケズリ、内面ナデ。底部外面ケズリ。D.白色粒。E.内外一明茶褐色。F.1/2。G.外面に黒斑あり。H.覆土中。
9	須恵器蓋	A.口縁部径(18.0)。B.口ロ成形成。C.口縁部内外面回転ナデ。天井部外面回転ケズリ、内面回転ナデ。D.白色粒。E.内外一灰色。F.口縁部1/4強。H.覆土中。
10	須恵器坏	A.口縁部径(10.8)、器高3.8、底部径(6.8)。B.口ロ成形成。C.内外面回転ナデ。底部外面回転条切り。D.白色粒。E.内外一暗灰色。F.口縁部1/4強。H.覆土中。

#### 第360号住居跡（第204図、写真図版95）

H地点の調査区南端に位置する。重複する第702号土坑に切られている。住居跡の南側半分は調査区外にあるため、本住居跡の全容は不明である。

平面形は、調査区内で検出された部分から推測すると、コーナー部が丸みをもつ隅丸方形か隅丸長方形を呈していると思われる。規模は、東西方向が4.95m、南北方向は1.99mまで測れる。住居の主軸方位は、N-92°-Eを向いている。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは25cmある。検出された各壁の壁下には、壁溝は見られない。床面は、ロームブロックを含む暗黄褐色土を平坦に埋め戻した貼床式である。住居中央部は比較的強く締まっているが、周辺部はやや軟弱である。ピットは、検出されていない。

カマドは、住居東側壁に、壁に対してほぼ直角に付設されているようである。規模は、長さ85cm、幅は42cmまで測れる。燃焼部は、住居内にある。燃焼面は、住居床面と同じ高さで、奥壁は、直線的に傾斜して煙道部に向かっている。袖は、暗灰色粘土を燃焼部の奥壁から廻して構築しているよう



第204図 第360号住居跡

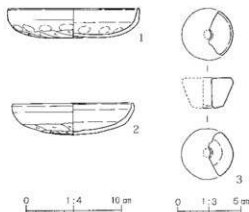
## 第360号住居跡土層説明

- 第1層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、焼土粒子を微量含む。しまりを有する。）  
 第2層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、径0.5～2cmのロームブロックを少量、焼土粒子を微量含む。しまりを有する。）  
 第3層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量含む。しまりを有する。）  
 第4層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、径0.5～3cmのロームブロック・ローム粒子・焼土粒子を少量含む。しまりを有する。）  
 第5層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、ロームブロック・焼土粒子を少量含む。粘性に富み、しまりを有する。）  
 第6層：暗褐色土層（径0.5～0.8cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子を少量含む。しまりを有する。）  
 第7層：暗褐色土層（径0.5～0.8cmのロームブロック・ローム粒子・焼土粒子を多量含む。しまりを有する。）  
 第8層：暗褐色土層（径0.5～3cmのロームブロック・ローム粒子・焼土粒子を少量含む。しまりを有する。）  
 第9層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を少量、ロームブロックを微量含む。しまりを有する。）

である。袖の内面は、あまり焼けていない。煙道部は、調査区外にあるため、不明である。

第110表 第360号住居跡出土遺物観察表

1	杯	A.口縁部径(14.0)、器高3.1。B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後下半ケズリ、内面ヨコナデ。D.白色粒。E.内外一淡茶褐色。F.口縁部1/4。G.体部内外面に指頭王痕を残す。H.覆土中。
2	杯	A.口縁部径(13.0)、器高3.3。B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後下半ケズリ、内面ヨコナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一茶褐色。F.口縁部1/3。H.覆土中。
3	土製紡錘車	A.上面径(4.0)、下面径(2.4)、高さ2.4。B.手捏ね。C.全面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.外一明褐色。F.1/3。H.覆土中。



第205図 第360号住居跡出土遺物

遺物は、住居跡の覆土中から、土器や土製紡錘車の破片が少量出土している。本住居跡の時期は、出土土器の様相から、奈良時代末頃と考えられる。

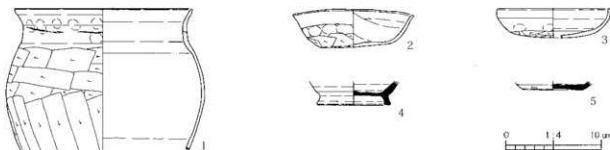
### 第361号住居跡（第207図、写真図版52・96）

H地点調査区中央部の南側に位置する。重複する第709・710・711号土坑に切られ、第18・362・369号住居跡を切っている。本住居跡は、調査時にはその形態がよくわからなかったものであるが、整理作業において残存するカマドと住居跡の壁から推測したものである。

平面形は、残存する部分から推測すると、コーナー部が丸みをもつ5.60m程度の隅丸方形を呈していたと思われる。住居の主軸方位は、N-43°-Eを向いている。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは25cmある。確認された北西側と南西側壁の壁下には、壁溝が巡っている。床面は、ロームブロックを含む暗褐色土を平坦に埋め戻した貼床式である。ピットは、住居跡内から複数検出されているが、住居との関係は不明である。

カマドは、住居の北東側壁に付設されていたと思われる。規模は、全長126cm、最大幅124cmを測る。燃焼部は、おそらく住居内にあると思われる。燃焼面は、住居の床面と同じ高さで水平に作られている。奥壁は、傾斜して立ち上がり、煙道部に向かっている。袖は、黄褐色粘土を含む暗褐色土を、燃焼部奥壁から廻して構築している。煙道部は、すでに削平されているため不明である。

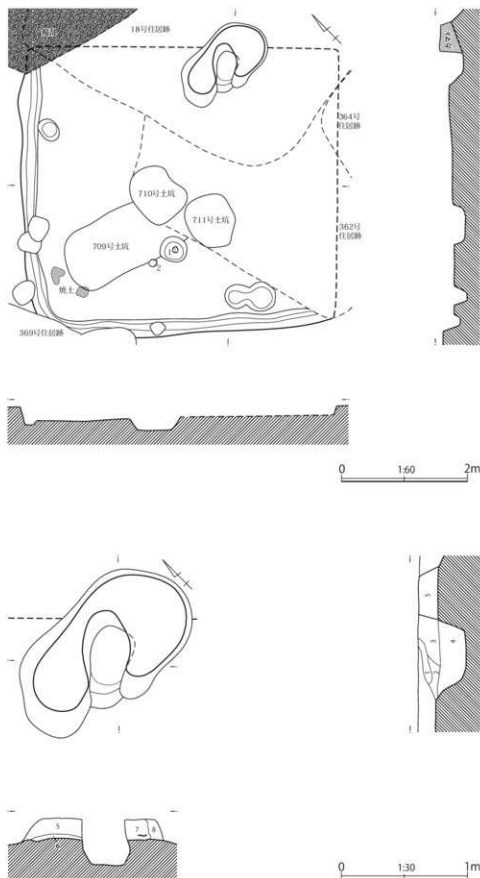
遺物は、住居跡の覆土中から、土器が出土している。本住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土土器の様相から、平安時代前期と考えられる。



第206図 第361号住居跡出土遺物

第111表 第361号住居跡出土遺物観察表

1	甕	A.口縁部径18.8。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一淡茶褐色。F.口縁部1/2。G.口縁部外面に指頭圧痕を残す。H.ピット内。
2	坏	A.口縁部径12.0~12.8。器高4.1。底部径7.2~7.7。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後下半ケズリ、内面ナデ。底部外面ケズリ。D.白色粒。E.内外一淡褐色。F.完形。G.体部外面に指頭圧痕を残す。H.覆土中。
3	坏	A.口縁部径(12.0)。器高3.1。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一淡茶褐色。F.口縁部1/3。G.体部外面に指頭圧痕を残す。H.覆土中。
4	須恵器高台付埴	A.高台部径7.8。B.ロクロ成形。高台部貼り付け。C.体部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り後、高台部回転ナデ。D.黒色粒、白色粒。E.外一暗灰色、内一灰色。F.高台部2/3。H.覆土中。
5	須恵器坏	A.底部径6.4。B.ロクロ成形。C.体部外面回転ナデの後下端回転ケズリ、内面回転ナデ。底部外面回転ケズリ。D.白色粒。E.内外一暗灰色。F.底部のみ。H.カマド内。

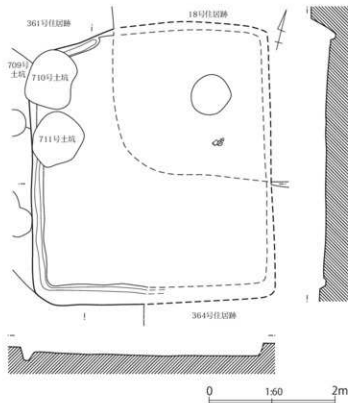


第207図 第361号住居跡

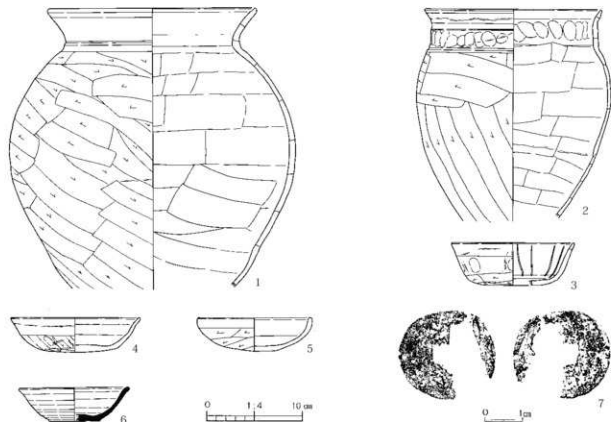
## 第362号住居跡（第208図、写真図版52）

H地点調査区中央部の南側に位置する。重複する第18・361・364号住居跡や第709・710・711号土坑に切られている。本住居跡は、住居の西側半分しか残存していないため、遺構の全容は不明である。

平面形は、コーナー部が丸みをもつ隅丸方形か隅丸長方形を呈していたと思われる。規模は、南北方向が4.40m、東西方向は1.80mまで測れる。住居の西側壁は、N-16°-Wの方向を向いている。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは30cmある。残存する各壁の壁下には、壁溝が巡っている。床面は、ロームブロックを含む暗黄褐色土を平坦に埋め戻した貼床式である。住居中央部は比較的堅



第208図 第362号住居跡



第209図 第362号住居跡出土遺物

く締まっているが、周辺部はやや軟弱である。ピットは、検出されていない。

遺物は、住居跡の覆土中から、白鳳時代～平安時代前期の土器が少量出土している。住居跡の重複関係からすると、本住居跡に伴う可能性が考えられるものは、No 1とNo 5の白鳳時代のもので、No 2・3・4・6の平安時代の土器は、第364号住居跡からの混入と推測される。本住居跡の時期は、遺構の重複関係から、白鳳時代と考えられる。

第112表 第362号住居跡出土遺物観察表

1	胴 張 甕	A. 口縁部径(22.1)、B. 粘土組織み上げ、C. 口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面ケズリ、内面篋ナデ、D. 角四石、石英、E. 内外一淡黄褐色、F. 1/4、H. 覆土中。
2	甕	A. 口縁部径18.7、B. 粘土組織み上げ、C. 口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面ケズリ、内面篋ナデ、D. 角四石、白色粒、E. 内外一橙褐色、F. 底部欠損、G. 口縁部外面に指頭圧痕を残す、H. 覆土中。
3	暗 文 杯	A. 口縁部径(13.0)、器高4.5、底部径(7.8)、B. 粘土組織み上げ、C. 口縁部外面ヨコナデ、内面ヨコナデの後放射状暗文、底部外面ケズリ、内面ナデ、D. 角四石、白色粒、E. 内外一橙褐色、F. 1/5、G. 体部外面に指頭圧痕を残す、H. 覆土中。
4	杯	A. 口縁部径(13.6)、器高3.7、底部径8.1、B. 粘土組織み上げ、C. 口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ナデ、内面ヨコナデ、底部外面ケズリ、内面ナデ、D. 角四石、石英、白色粒、E. 内外一淡黄褐色、F. 1/2、G. 体部外面に指頭圧痕を残す、H. 覆土中。
5	杯	A. 口縁部径(12.2)、器高3.5、B. 粘土組織み上げ、C. 口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ケズリ、内面ヨコナデ、D. 角四石、白色粒、E. 外一明赤褐色、内一橙褐色、F. 1/4、H. 覆土中。
6	須 恵 器 杯	A. 口縁部径(11.6)、器高3.5、底部径5.4、B. ロクロ成形、C. 口縁部内外面回転ナデ、底部外面回転糸切り、D. 白色粒、E. 内外一灰白色、F. 1/4、G. 外面に火罨痕あり、H. 覆土中。
7	銭 貨	A. 直径2.3、厚さ0.1、重さ2.57g、B. 鋳造、D. 刷製、F. 2/3、H. 覆土中。

### 第363号住居跡 (欠番)

### 第364号住居跡 (第210図、写真図版97・98)

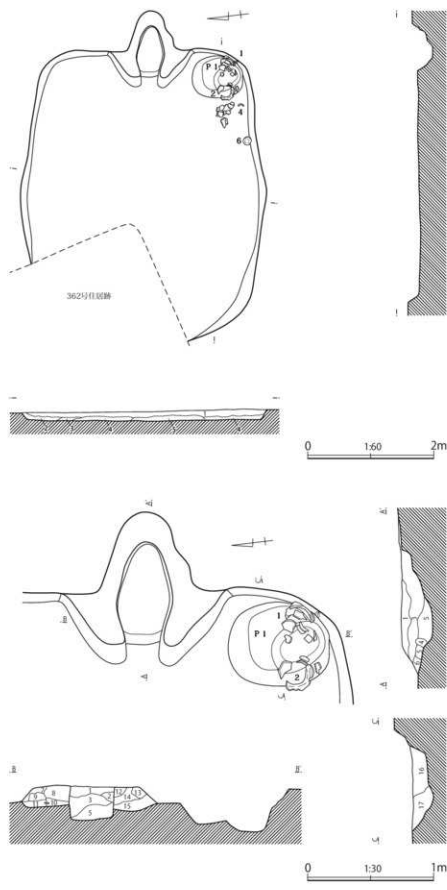
H地点調査区中央部の南端に位置する。重複する第362号住居跡を切っている。北側の第18号住居跡とも接しているが、相互の新旧関係は不明である。住居跡の上面は、床面近くまで削平されており、遺構の遺存状態はあまり良好とはいえない。

平面形は、コーナー部の丸み強い隅丸長方形を呈している。規模は、東西方向が4.50m、南北方向が4.00mを測る。住居の主軸方位は、N-105°—Eを向いている。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは15cmある。検出された各壁の壁下には、壁溝は見られない。床面は、ロームブロックを含む暗黄褐色土を平坦に埋め戻した貼床式である。住居中央部は比較的堅く締まっているが、周辺部はやや軟弱である。ピットは、1カ所検出されている。P 1は、いわゆる貯蔵穴と呼ばれるもので、カマド右側の住居南東側コーナー部に位置する。67cm×80cmの楕円形を呈し、床面からの深さは27cmある。P 1の上面からは、土師器の甕が出土している。

カマドは、住居東側壁の中央に、壁を掘り込んで直角に付設されている。規模は、全長122cm、最大幅134cmある。燃焼部は、半分が住居の壁外にある。燃焼面は、住居の床面より低く、奥壁に向かってやや傾斜して作られている。奥壁は、緩やかに傾斜して煙道部に向かっている。袖は、黄褐色粘土を含む暗褐色土を、燃焼部奥壁から廻して構築している。袖の内面は、あまり焼けていない。煙道部は、すでに削平されているため不明である。

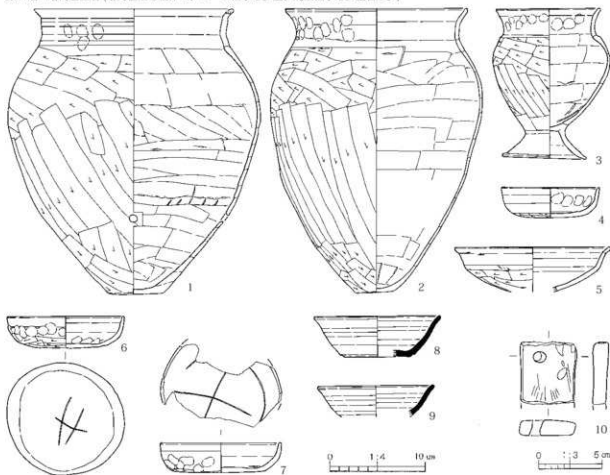
遺物は、住居南東側のコーナー部や壁際の覆土中から、土器が多く出土している。本住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土土器の様相から、平安時代前期と考えられる。





第210図 第364号住居跡

- 第8層：暗褐色土層（焼土粒子・黄褐色粘土を多量、焼土ブロックを少量含む。）  
 第9層：暗褐色土層（炭化物・黄褐色粘土の互層。）  
 第10層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、焼土ブロック・焼土粒子・黄褐色粘土を含む。）  
 第11層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ロームブロック・ローム粒子を多量含む。）  
 第12層：暗褐色土層（ローム粒子・黄褐色粘土を多量、焼土ブロック・焼土粒子を少量含む。）  
 第13層：暗褐色土層（ロームブロック・炭化物の互層。）  
 第14層：暗褐色土層（黄褐色粘土を多量、焼土ブロック・焼土粒子を少量含む。）  
 第15層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、径0.5~0.8cmのロームブロック・ローム粒子を微量含む。）  
 第16層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、径0.5~3cmのロームブロックを少量含む。）  
 第17層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、焼土粒子を少量含む。）



第211図 第364号住居跡出土遺物

第113表 第364号住居跡出土遺物観察表

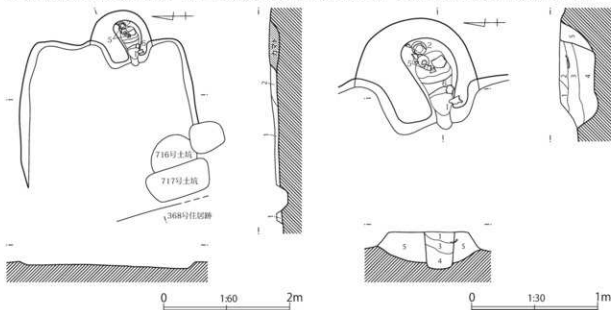
1	甕	A. 底部径5.8。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面笠ナデ。D. 角四石、白色粒。E. 外一橙褐色、内一赤褐色。F. 1/3。G. 胴部下半に焼成後の穿孔あり。口符取部外面に指頭圧痕を残す。H. P1内。
2	甕	A. 口縁部径19.2。器高30.2。底部径4.2。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面笠ナデ。D. 角四石、白色粒。E. 外一橙褐色、内一明赤褐色。F. 3/4。G. 口縁部外面に指頭圧痕を残す。H. P1内。
3	小形台付甕	A. 口縁部径11.1。器高15.9。台端部径8.9。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面笠ナデ。台部内外面ヨコナデ。D. 角四石、石英、白色粒。E. 外一灰褐色、内一淡赤褐色。F. 3/4。G. 口縁部内外面に指頭圧痕を残す。H. P1内。
4	坏	A. 口縁部径10.4。器高3.2。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後下半ケズリ、内面ナデ。D. 角四石、石英、白色粒。E. 外一橙褐色、内一明赤褐色。F. 1/4。G. 体部内面に指頭圧痕を残す。H. 覆土中。
5	皿	A. 口縁部径11.4。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ヨコナデ。D. 角四石、石英、チャート。E. 内外一橙褐色。F. 1/4。H. 覆土中。
6	坏	A. 口縁部径12.4。器高3.4。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後下半ケズリ、内面ナデ。D. 角四石、チャート、白色粒。E. 内外一橙褐色。F. 完形。G. 体部外面に焼成後の記号あり。内外面に指頭圧痕を残す。H. 床面付近。

7	环	A.口縁部径(12.9)、器高3.2。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデ、内面ナデ。底部外面ケズリ。D.角閃石、石英、白色粒。E.内外—赤褐色。F.1/3。G.底部内面に焼成後の記号あり。体部外面に指頭圧痕を残す。H.覆土中。
8	須恵器 环	A.口縁部径(13.4)、器高4.3、底部径(7.1)。B.ロクロ成形。C.口縁部内外面回転ナデ。底部外面回転系切り。D.片岩粒、白色粒。E.内外—黄灰色。F.1/5。H.覆土中。
9	須恵器 环	A.口縁部径(12.4)。B.ロクロ成形。C.口縁部内外面回転ナデ。D.石英。E.内外—黄灰色。F.1/4。H.覆土中。
10	砥石	A.残存長4.9、幅4.4、厚さ1.2、重さ41.66g。C.1面使用。擦過痕及び刃痕あり。D.凝灰岩。F.端面欠損。G.穿孔は両面穿孔。H.覆土中。

### 第365号住居跡 (第212図、写真図版99)

H地点調査区中央部の南側に位置する。重複する第716・717号土坑に切られている。西側の第368号住居跡と接しているが、相互の新旧関係は不明である。住居跡の上面は、床面近くまで削平されているため、遺構の遺存状態は不明である。

平面形は、残存する部分から推測すると、コーナー部が丸みを持つやや歪んだ隅丸方形か隅丸長方形を呈していたと思われる。規模は、南北方向が2.85m、東西方向は2.30mまで測れる。住居の主軸方位は、N-90°-Eを向いている。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは10cmある。残存する各壁の壁下には、壁溝は見られない。床面は、ロームブロックを含む暗黄褐色土を平坦に埋め戻した貼床式である。住居中央部は比較的強く締まっているが、周辺部はやや軟弱である。



第212図 第365号住居跡

#### 第365号住居跡土層説明

- 第1層：暗褐色土層 (暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、径0.5~1.5cmのロームブロックを少量、炭化粒子を微量含む。)  
 第2層：暗褐色土層 (焼土粒子・黄褐色粘土を少量含む。)

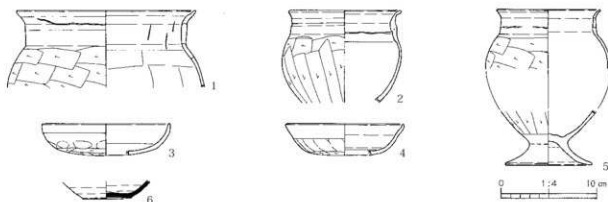
#### 第365号住居跡カマド土層説明

- 第1層：暗褐色土層 (黄褐色粘土・暗褐色土の混合土を主体に、ローム粒子・焼土粒子・炭化物を含む。しまりを有する。)  
 第2層：暗褐色土層 (黄褐色粘土・暗褐色土の混合土を主体に、ローム粒子・径0.5~3cmの焼土ブロック・焼土粒子・炭化物を含む。しまりを有する。)  
 第3層：暗褐色土層 (暗褐色土を主体に、黄褐色粘土を少量含む。しまりを有する。)  
 第4層：暗褐色土層 (径0.5~1cmのロームブロック・ローム粒子・暗褐色土の混合土。しまりを有する。)  
 第5層：土層説明なし。

ピットは検出されなかった。

カマドは、東側壁の中央やや南側に位置し、壁を掘り込んでやや斜めに付設されている。規模は、全長90cm、最大幅78cmある。燃焼部は、その大半が住居の壁外にある。燃焼面は、住居の床面より低く、ほぼ平坦に作られている。奥壁は、緩やかに傾斜して煙道部に向かっている。燃焼部内の奥壁側からは、No2やNo5の小形台付甕が出土しており、該期の小形台付甕がカマドで使用されていたことが窺える。袖は、粘土やロームブロックを含む暗褐色土を、燃焼部奥壁から廻して構築している。袖の内面は、あまり焼けていない。煙道部は、すでに削平されているため不明である。

遺物は、カマド内や住居跡の覆土中から、土器の破片が多く出土している。本住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土土器の様相から、平安時代前期と考えられる。



第213図 第365号住居跡出土遺物

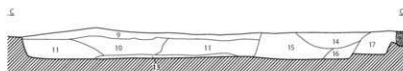
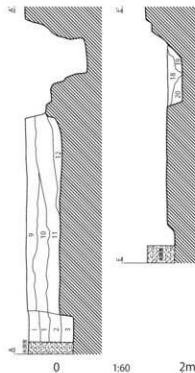
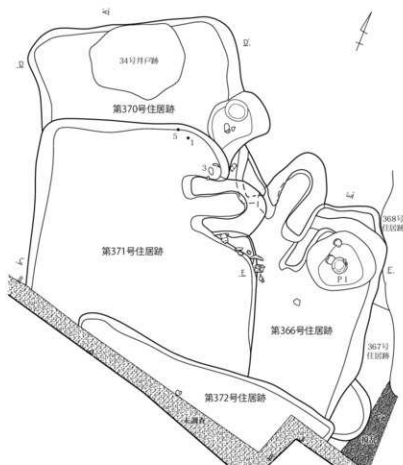
第114表 第365号住居跡出土遺物観察表

番号	遺物	観察内容
1	甕	A.口縁部径(19.0)。B.粘土粗積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外—淡茶褐色。F.口縁部1/3。H.覆土中。
2	小形台付甕	A.口縁部径12.0。B.粘土粗積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外—淡茶褐色。F.上半のみ。H.カマド内。
3	坏	A.口縁部径(13.6)。B.粘土粗積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後下半ケズリ、内面ナデ。D.白色粒。E.内外—淡褐色。F.口縁部1/4。G.体部外面に指頭圧痕を残す。H.カマド内。
4	坏	A.口縁部径(12.6)。B.粘土粗積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデ、内面ヨコナデ。底部外面ケズリ。D.白色粒。E.内外—淡茶褐色。F.口縁部1/4弱。H.カマド内。
5	小形台付甕	A.口縁部径(11.0)、台端部径9.2。B.粘土粗積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。台部内外面ヨコナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外—淡茶褐色。F.口縁部1/2、台部完形。H.カマド内。
6	須恵器坏	A.底部径5.2。B.ロクロ成形。C.体部内外面回転ナデ。底部外面回転系切り。D.白色粒。E.内外—暗灰色。F.底部のみ。H.カマド内。

### 第366号住居跡 (第214図)

H地点調査区中央部の南端に位置する。重複する第368・370・371・372号住居跡に切られて、第367号住居跡を切っている。

平面形は、残存する部分から推測すると、コーナー部が丸みをもつ隅丸方形か隅丸長方形を呈していたと思われる。規模は、南北方向は3.30mまで、東西方向は2.10mまで測れる。住居の主軸方位は、N-175°-Eを向いている。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは23cmある。残存する各壁の壁下には、壁溝は見られない。床面は、ロームブロックを含む暗褐色土を平坦に埋め戻した貼床式である。ピットは、1カ所検出されている。P1は、いわゆる貯蔵穴と呼ばれるもので、



#### 第366・370・371・372号住居跡土層説明

第1層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、径0.5～2cmのロームブロックを少量、浅間山系A軽石を微量含む。）

第1層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、ロームブロック・焼土粒子を少量含む。）

第2層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、径0.5～0.8cmのロームブロック・焼土粒子を少量含む。）

第3層：暗褐色土層（径0.5～3cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子を少量含む。）

第4層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子・焼土粒子を少量含む。）

第5層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、径0.5～5cmのロームブロック・焼土粒子を少量含む。）

第6層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、径0.5～1.5cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子を少量含む。）

第7層：暗褐色土層（6層に近いが、黒みが強い、粘性に富む。）

第8層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を多量含む。）

第9層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を多量、浅間山系A軽石・焼土ブロック・焼土粒子を少量含む。）

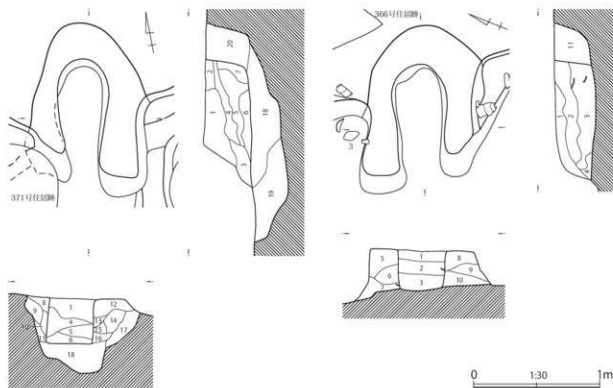
第10層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、径0.5～4cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。）

第11層：暗褐色土層（ローム粒子を少量、径0.5～2cmのロームブロックを微量含む。）

第12層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子・暗褐色土の混合土。）

第214図 第366・370・371・372号住居跡

- 第13層：暗褐色土層 (径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を含む。)  
 第14層：暗褐色土層 (暗褐色土を主体に、径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。)  
 第15層：暗褐色土層 (ロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子を少量含む。)  
 第16層：暗褐色土層 (ロームブロック・ローム粒子を多量含む。)  
 第17層：暗褐色土層 (ロームブロック・ローム粒子を少量含む。)  
 第18層：暗褐色土層 (暗褐色土を主体に、ロームブロック・ローム粒子・焼土ブロック・焼土粒子を多量含む。)  
 第19層：暗褐色土層 (径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子・焼土ブロック・焼土粒子を多量含む。)  
 第20層：暗褐色土層 (径1～1.5cmのロームブロック・焼土ブロック・焼土粒子を多量、ローム粒子を少量、径4cmのロームブロックを微量含む。)



第215図 第366・371号住居跡カマド

## 第366号住居跡カマド土層説明

- 第1層：暗褐色土層 (黄褐色粘土・暗褐色土の混合土を主体に、ローム粒子を多量、焼土ブロック・焼土粒子を少量、径0.5～3cmのロームブロック・黒褐色土を微量含む。)  
 第2層：黄褐色土層 (黄褐色粘土を主体に、焼土粒子を多量、径0.5～3cmの焼土ブロックを微量含む。)  
 第3層：黄褐色土層 (焼土ブロック・焼土粒子を微量含む。)  
 第4層：暗褐色土層 (黄褐色粘土を多量、径0.5～1cmの焼土ブロックを微量含む。)  
 第5層：暗褐色土層 (焼土ブロック・焼土粒子を多量含む。)  
 第6層：暗褐色土層 (ローム粒子・黄褐色粘土を多量、焼土ブロック・焼土粒子を少量、ロームブロックを微量含む。しまりを有する。)  
 第7層：黄褐色土層 (黄褐色粘土を主体に、焼土粒子・黒褐色土を含む。)  
 第8層：黄褐色土層 (黄褐色土・暗褐色土の混合土を主体に、ローム粒子・焼土ブロック・焼土粒子を含む。)  
 第9層：黄褐色土層 (黄褐色土・暗褐色土の混合土を主体に、焼土ブロック・焼土粒子・黄褐色粘土を多量、ローム粒子を少量含む。)  
 第10層：黄褐色土層 (黄褐色土・暗褐色土の混合土を主体に、焼土ブロック・焼土粒子を多量、ローム粒子を少量含む。)  
 第11層：黄褐色土層 (焼土ブロック・焼土粒子・黄褐色粘土を多量、ローム粒子・暗褐色土を少量含む。)  
 第12層：黄褐色土層 (焼土ブロック・焼土粒子・暗褐色土を多量、ローム粒子・黄褐色粘土を少量含む。)  
 第13層：黄褐色土層 (焼土ブロック・焼土粒子を多量、ローム粒子・黄褐色粘土・暗褐色土を少量含む。)  
 第14層：黄褐色土層 (黄褐色土・暗褐色土の混合土を主体に、焼土ブロック・焼土粒子を多量、ローム粒子を少量含む。)  
 第15層：黄褐色土層 (焼土ブロック・焼土粒子・暗褐色土を多量、黄褐色粘土を少量含む。)

第16層：黄褐色土層（焼土ブロック・焼土粒子・黄褐色粘土を多量、ローム粒子を少量含む。）

第17層：黄褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を主体に、暗褐色土を含む。）

第18層：黄褐色土層（黄褐色土・暗褐色土の混合土を主体に、径0.5～0.8cmの焼土ブロック・焼土粒子を多量含む。）

第19層：褐色土層（黄褐色土・暗褐色土の混合土を主体に、径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子・焼土ブロック・焼土粒子を含む。）

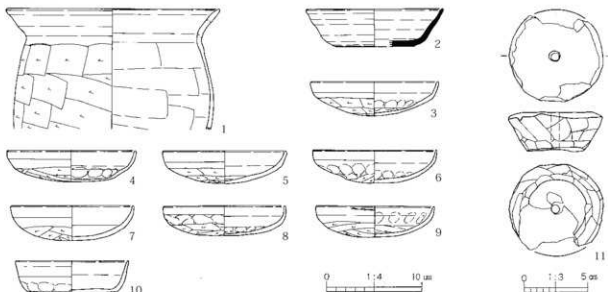
第20層：土層説明なし。

第371号住居跡カマド土層説明なし。

カマド右側の住居北東側コーナー部に位置する。95cm×100cmの隅丸長方形もしくは楕円形ぎみの形態を呈し、床面からの深さは23cmある。P1内からは土師器の甕や坏が出土している。

カマドは、住居北側壁に、壁を掘り込んでほぼ直角に付設されている。規模は、全長130cm、最大幅94cmを測る。燃焼部は、その大半が住居外にある。燃焼面は、住居の床面と同じ高さで水平に作られている。奥壁は、直線的に傾斜して煙道部に向かっている。袖は、黄褐色粘土を燃焼部奥壁から廻して構築している。袖の内面は、あまり焼けていない。煙道部は、すでに削平されているため不明である。

遺物は、P1の貯蔵穴内や住居跡の覆土中から、奈良時代の土器が多く出土している。土器以外では、上面径が7.5cmある大形の土製紡錘車(No11)が覆土中から出土している。この土製紡錘車は、No2の須恵器坏と同じく、胎土中に白色針状物質(海绵骨針)を顕著に含んでおり、比企地方からの搬入品である可能性が考えられる。本住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土土器の様相から、奈良時代と考えられる。



第216図 第366号住居跡出土遺物

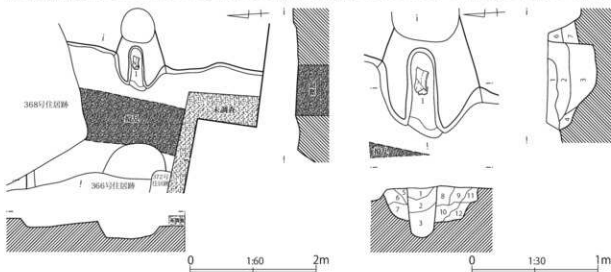
第115表 第366号住居跡出土遺物観察表

番号	器名	観察内容
1	甕	A. 口縁部径22.6。B. 粘土粗積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面笊ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一明茶褐色。F. 上半のみ。H. P1内。
2	須恵器坏	A. 口縁部径14.6、器高4.0、底部径8.2。B. ロクロ成形。C. 体部内外面回転ナデ。底部外面回転ケズリ。D. 白色粒、白色針状(海绵骨針)。E. 内外一暗灰色。F. 1/2。G. 南比企窯産。H. 覆土中。
3	坏	A. 口縁部径13.6、器高3.7。B. 粘土粗積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後下半ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一淡茶褐色。F. 1/2弱。G. 体部内面に指頭圧痕を残す。H. 覆土中。
4	坏	A. 口縁部径13.6、器高3.3。B. 粘土粗積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後下半ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一茶褐色。F. 3/4。G. 体部内面に指頭圧痕を残す。H. P1内。

5	坏	A.口縁部径13.2、器高3.5。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後下半ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.外一暗褐色、内一淡褐色。F.3/4。H. P 1内。
6	坏	A.口縁部径13.2、器高3.5。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後下半ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一暗褐色。F.ほぼ完形。G.体部内面に指頭圧痕を残す。H.覆土中。
7	坏	A.口縁部径13.0、器高3.7。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後下半ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一淡褐色。F.ほぼ完形。H. P 1内。
8	坏	A.口縁部径13.0、器高3.2。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後下半ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一淡褐色。F.1/2。G.体部内面に指頭圧痕を残す。H.覆土中。
9	坏	A.口縁部径12.6、器高3.3。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後下半ケズリ、内面ナデ。D.白色粒。E.内外一淡褐色。F.4/5。G.体部内面に指頭圧痕を残す。H.覆土中。
10	坏	A.口縁部径(12.0)、器高3.4、底部径(9.4)。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデ、内面ヨコナデ。底部外面ケズリ、内面ナデ。D.白色粒。E.内外一明茶褐色。F.1/4。G.体部外面に指頭圧痕を残す。混入品。H.覆土中。
11	土製鈴鐺車	A.上面径7.5、下面径4.6、高さ3.1、重さ146.37g。B.手捏ね。C.上下面ともナデ。側面ケズリ。D.白色粒、白色針状(海綿骨針)、小礫。E.外一黒色。F.2/3。H.覆土中。

## 第367号住居跡 (第217図)

H地点調査区中央部の南端に位置する。重複する第366・372号住居跡に切れ、第368号住居跡を切っている。住居跡上面は床面近くまで強く削平されており、中央部を攪乱に切られているため、遺構の遺存状態は良好とは言えない。住居跡の南側は調査区外にあるため、本住居跡の全容は不明であ



第217図 第367号住居跡

## 第367号住居跡カマド土層説明

- 第1層：暗褐色土層 (黄棕色粘土を主体に、ローム粒子・焼土粒子を含む。しまりを有する。)
- 第2層：暗褐色土層 (ローム粒子・径0.5～1cmの焼土ブロック・焼土粒子を含む。しまりを有する。)
- 第3層：暗褐色土層 (1層に近いが、黒みが強い。しまりを有する。)
- 第4層：暗褐色土層 (径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子・焼土粒子を含む。しまりを有する。)
- 第5層：暗褐色土層 (黄棕色粘土・暗褐色土の混合土を主体に、径0.5～0.8cmの焼土ブロック・焼土粒子を少量含む。しまりを有する。)
- 第6層：暗褐色土層 (径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含む。しまりを有する。)
- 第7層：褐色土層 (径0.5～1.5cmのロームブロック・ローム粒子・焼土ブロック・焼土粒子を少量含む。しまりを有する。)
- 第8層：暗褐色土層 (焼土ブロック・焼土粒子を多量、ローム粒子を少量含む。しまりを有する。)
- 第9層：暗褐色土層 (ロームブロックを多量、ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含む。しまりを有する。)
- 第10層：暗褐色土層 (ロームブロック・ローム粒子・焼土ブロック・焼土粒子を多量含む。しまりを有する。)
- 第11層：暗褐色土層 (ローム粒子を多量、径2～3cmのロームブロック・焼土粒子を微量含む。しまりを有する。)
- 第12層：褐色土層 (ロームブロック・ローム粒子を多量、焼土ブロック・焼土粒子を少量含む。しまりを有する。)



る。

平面形は、調査区内で検出された部分から推測すると、方形が長方形を呈していたと思われる。規模は、東西方向は2.15mまで、南北方向は3.15mまで測れる。住居の主軸方位は、N-95°-Eの方向を向いている。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは、14cmある。調査区内で検出された各壁の壁下には、壁溝は見られない。床面は、ロームブロックを含む暗褐色土を平坦に埋め戻した貼床式である。ピットは、検出されていない。

カマドは、住居東側壁に位置し、住居の壁を掘り込んで若干斜めに付設されている。規模は、残存長76cm、最大幅84cmを測る。燃焼部は、奥壁側の一部が住居の壁外にある。燃焼面は、カマド第2層下面あたりと推測される。住居の床面よりも一段低く、平坦に作られている。奥壁は、垂直ぎみに立ち上がり、煙道部に向かっている。袖は、黄褐色粘土やロームブロックを含む暗褐色土をカマド奥壁から廻して構築している。煙道部は、すでに削平されているため不明である。

遺物は、カマド内や住居跡の覆土中から、平安時代前期を主体とする土器の破片が少量出土している。土器以外では、覆土中から5cm程度の鉄滓(重さ31.7g)が1個出土している(写真図版183)。本住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土遺物の様相から、平安時代前期と考えられる。



第218図 第367号住居跡出土遺物

第116表 第367号住居跡出土遺物観察表

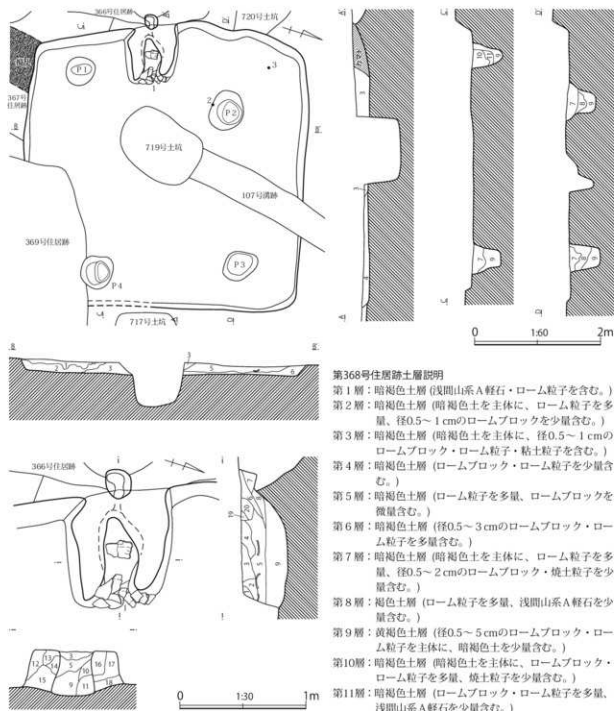
1	甕	A.口縁部径(28.0)。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面従ナデ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.内外一淡茶褐色。F.口縁部1/4。G.口縁部外面に指頭圧痕を残す。H.カマド内。
2	小形台付甕	A.台端部径8.4。B.粘土組織み上げ。C.台部内外面ヨコナデ。D.白色粒。E.内外一暗茶褐色。F.台部のみ。H.覆土中。

### 第368号住居跡 (第219図、写真図版100)

H地点調査区中央部の南端に位置する。重複する第367・369号住居跡や第719・720号土坑及び第107号溝跡に切られ、第366号住居跡を切っている。住居跡の上面は、床面近くまで削平されているため、遺構の遺存状態はあまり良好とは言えない。

平面形は、コーナー部が丸みをもつ隅丸方形を呈している。規模は、東西方向、南北方向とも4.50mを測る。住居の主軸方位は、N-78°-Eを向いている。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは20cmある。検出された各壁の壁下には、壁溝は見られない。床面は、ロームブロックを含む暗褐色土を平坦に埋め戻した貼床式である。住居中央部は比較的固く締まっているが、周辺部はやや軟弱である。ピットは、4ヵ所検出されている。この中のP2～P4は、住居の平面形と相似する住居の対角線上に配置されていることから、住居の上屋を支える4本主柱の柱穴の一部と考えられる。長さ45cm～62cmの不整形円形や楕円形を呈し、床面からの深さは45cm～50cmある。

カマドは、住居西側壁のほぼ中央や南側寄りに位置し、住居の壁に対して直角に付設されている。



第219図 第368号住居跡

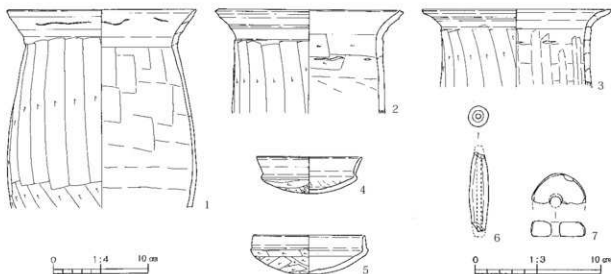
## 第368号住居跡カマド土層説明

- 第1層：暗褐色土層（黄褐色粘土・暗褐色土の混合土を主体に、焼土粒子を多量含む。）  
 第2層：黄褐色粘土層（黄褐色粘質土ロームを主体に、ローム粒子を含む。）  
 第3層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、焼土ブロック・黄褐色粘土を含む。）  
 第4層：暗褐色土層（黄褐色粘土を主体に、焼土粒子を多量、暗褐色土を少量含む。）  
 第5層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、径0.5～0.8cmの焼土ブロック・黄褐色粘土を含む。粘性に富み、しまりを有する。）  
 第6層：暗褐色土層（黄褐色粘土・暗褐色土の混合土を主体に、ローム粒子を含む。）  
 第7層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子・黄褐色粘土を少量含む。）  
 第8層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、径0.5～3cmのロームブロック・ローム粒子・焼土ブロック・焼土粒子を含む。）

- 第9層：暗褐色土層 (暗褐色土を主体に、焼土ブロック・黄褐色粘土を少量含む。)  
 第10層：暗褐色土層 (暗褐色土を主体に、径0.5～0.8cmのロームブロック・ローム粒子を含む。)  
 第11層：暗褐色土層 (暗褐色土を主体に、径0.5～3cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。)  
 第12層：黄褐色粘土層 (黄褐色粘土を主体に、暗褐色土を含む。)  
 第13層：暗褐色土層 (黄褐色粘土・暗褐色土の混合土を主体に、径0.5～0.8cmのロームブロック・ローム粒子・焼土ブロック・焼土粒子を多量含む。)  
 第14層：暗褐色土層 (暗褐色土を主体に、ロームブロック・ローム粒子・焼土ブロック・焼土粒子・黄褐色粘土を含む。)  
 第15層：暗褐色土層 (黄褐色粘土を主体に、径1～2cmのロームブロック・ローム粒子・焼土ブロック・焼土粒子を含む。)  
 第16層：暗褐色粘土層 (暗褐色土を主体に、焼土粒子を多量含む。)  
 第17層：黄褐色粘土層 (黄褐色粘土を主体に、焼土粒子を少量含む。)  
 第18層：暗褐色土層 (黄褐色粘土・暗褐色土・ロームブロック・ローム粒子の混合土。)  
 第19層：黄褐色粘土層 (黄褐色粘土を主体に、焼土ブロック・焼土粒子を多量含む。)  
 第20層：黄褐色粘土層 (黄褐色粘土・暗褐色土の混合土。)

規模は、全長105cm、最大幅84cmを測る。燃焼部は、住居内にある。燃焼面は、住居の床面よりも一段高く、水平に作られている。奥壁は、緩やかに傾斜して煙道部に向かっている。袖は、黄褐色粘土を住居の壁に直接貼り付けて構築している。袖の内面は、ほとんど焼けていない。煙道部は、30cmほど住居の壁外に水平に延びて上方に向かっている。カマドの焚口部からは、No1 甕が横になった状態で出土しており、袖先端が焚口天井部の補強に使われていたものと考えられる。

遺物は、住居のカマド内や覆土中から、土器の破片が出土している。土器以外では、覆土中からNo6の土錘やNo7の石製紡錘車の破片が出土している。このうちのNo7は、その形態から石製紡錘車としたが、該期の一般的な石製紡錘車に見られる断面逆台形の形態とは異なり、古い時代の断面長方形の形態を呈しており、また砂岩のような軟質で軽量の石材を使用している点からも、あるいは紡錘車とは異なる性格のものかもしれない。本住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土土器の様相から、古墳時代後期後半頃と考えられる。



第220図 第368号住居跡出土遺物

第117表 第368号住居跡出土遺物観察表

1	長胴甕	A.口縁部径(20.0)。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篋ナデ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.内外一茶褐色。F.上半1/3。H.カマド焚口部。
2	長胴甕	A.口縁部径(20.0)。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篋ナデ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.内外一明茶褐色。F.口縁部1/4。H.覆土中。

3	長 鬚 甕	A.口縁部径(20.0)。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.内外一暗茶褐色。F.口縁部1/4。H.覆土中。
4	模 倣 坏	A.口縁部径(11.2)。器高3.9。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.白色粒。E.内外一淡褐色。F.口縁部1/4。H.覆土中。
5	模 倣 坏	A.口縁部径(12.0)。器高4.1。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面丁寧なナデ。D.白色粒。E.内外一淡褐色。F.1/2。H.覆土中。
6	土 罌	A.残存長6.3、最大径1.6、重さ13.5g。B.手捏ね。C.ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一淡褐色。F.両端部欠損。H.覆土中。
7	石製紡錘車	A.上下面径4.2、高さ1.1、重さ13.0g。B.削り。C.研磨。D.砂岩。F.1/2。H.覆土中。

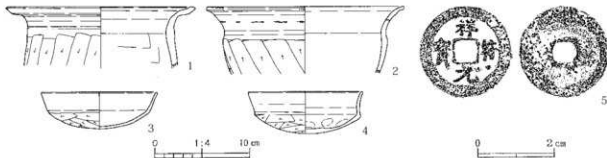
### 第369号住居跡（第222図、写真図版101）

H地点調査区中央部の南端に位置する。重複する第361号住居跡に切られ、第368号住居跡を切っている。住居跡の上面は、一部床面近くまで削平されているため、遺構の遺存状態はあまり良好とは言えない。

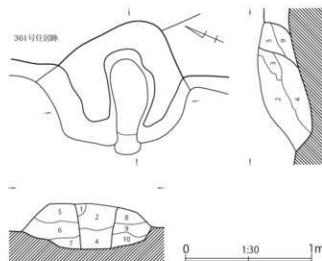
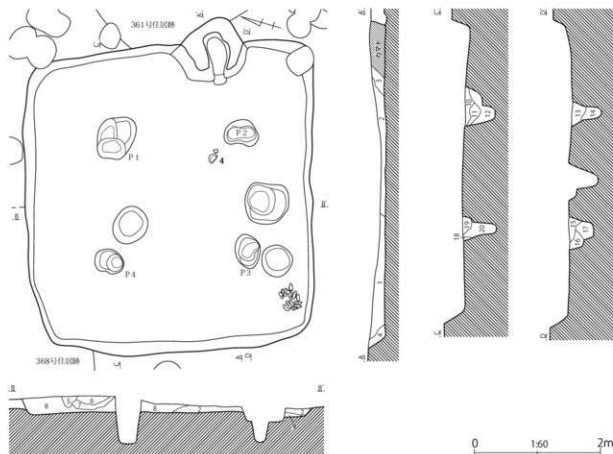
平面形は、コーナー部が丸みをもつ隅丸長方形を呈している。規模は、東西方向が4.80m、南北が4.55mを測る。住居の主軸方位は、N-75°-Eを向いている。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは25cmある。検出された各壁の壁下には、壁溝は見られない。床面は、ロームブロックを含む暗黄褐色土を平坦に埋め戻した貼床式である。住居中央部は比較的固く締まっているが、周辺部はやや軟弱である。ピットは、4カ所検出されている。P1～P4は、住居の対角線上に配置されていることから、住居の上屋を支える4本主柱の柱穴と考えられる。長さ45cm～75cmの不整形や楕円形を呈し、床面からの深さは40cm～52cmある。

カマドは、住居東側壁のほぼ中央やや南側寄りに位置し、住居の壁を掘り込んで直角に付設されている。規模は、全長103cm、最大幅116cmを測る。燃烧部は、一部が住居の壁外にある。燃烧面は、住居の床面よりも一段低く、奥壁に向かって斜めに作られている。奥壁は、緩やかに傾斜して煙道部に向かっている。袖は、黄橙色粘土やロームブロックを含む暗褐色土を、燃烧部の奥壁から廻して構築している。袖の内面は、あまり焼けていない。煙道部は、すでに削平されているため不明である。

遺物は、住居中央部の床面付近や覆土中から、古墳時代後期を主体とする土器の破片が出土している。土器以外では、住居南西側コーナー部の床面上から、長さ15cm～20cm程度の棒状の自然石が13個集石されたような状態で、まとまって出土している。また、中世の渡来銭である祥符元宝(No5)が覆土中から混入して出土している。本住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土土器の様相から、古墳時代後期後葉頃と考えられる。



第221図 第369号住居跡出土遺物



第222図 第369号住居跡

- 第11層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。）  
 第12層：黄褐色土層（径0.5～5cmのロームブロック・ローム粒子・暗褐色土を含む。）  
 第13層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、径0.5～1.5cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。）  
 第14層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ロームブロック・ローム粒子を多量含む。粘性に富み、しまりを有する。）  
 第15層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、径0.5～1cmのロームブロックを少量含む。）  
 第16層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、径0.5～2cmのロームブロックを少量含む。）  
 第17層：黄褐色土層（径0.5～4cmのロームブロック・ローム粒子・暗褐色土を含む。）  
 第18層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を含む。）  
 第19層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、ロームブロックを少量含む。）  
 第20層：暗褐色土層（ローム粒子を多量含む。）  
 第369号住居跡カマド土層説明なし。

## 第369号住居跡土層説明

- 第1層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、径0.5～4cmのロームブロックを微量含む。）  
 第2層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ロームブロック・ローム粒子を多量、径0.5～2cmの暗褐色土ブロックを微量含む。）  
 第3層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ロームブロック・ローム粒子・粘土粒子を多量、焼土ブロック・焼土粒子を少量含む。）  
 第4層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を多量含む。）  
 第5層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、ロームブロックを少量、焼土粒子・炭化物を微量含む。）  
 第6層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子・径0.5～1cmの焼土ブロック・焼土粒子を多量、炭化物を少量、浅間山系A軽石を微量含む。）  
 第7層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土ブロックを多量、炭化物を少量、浅間山系A軽石・焼土粒子を微量含む。）  
 第8層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を多量、暗褐色土ブロックを微量含む。）  
 第9層：褐色土層（径0.5～5cmのロームブロック・ローム粒子の混合土。）  
 第10層：黄褐色土層（径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子・暗褐色土を含む。）

第118表 第369号住居跡出土遺物観察表

1	長 胴 甕	A.口縁部径(20.0)。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.外一淡褐色、内一明褐色。F.口縁部1/4。H.覆土中。
2	大 形 鉢	A.口縁部径(21.0)。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。D.白色粒。E.内外一明茶褐色。F.口縁部1/4弱。H.覆土中。
3	模 倣 坏	A.口縁部径12.0。器高3.9。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一淡褐色。F.3/4。H.覆土中。
4	模 倣 坏	A.口縁部径12.2。器高4.4。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.外一淡褐色、内一淡褐色。F.3/4。G.器形は歪んでいる。体部内面に指頭圧痕を残す。H.床面付近。
5	銭 貨	A.直径2.40、厚さ0.1、重さ2.92g。B.鋳造。D.割製。F.完形。G.「祥符元宝」(初鋳1009年)。北宋銭。H.覆土中。

## 第370号住居跡 (第214図、写真図版102)

H地点調査区中央部の南側に位置する。重複する第371号住居跡と第34号井戸跡に切られ、第366号住居跡を切っている。

平面形は、コーナー部の丸み強い隅丸長方形か隅丸長方形を呈していたと思われる。規模は、北東～南西方向が3.30m、北西～南東方向は1.85mまで測れる。住居の主軸方位は、N-63° -Eを向いている。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは44cmある。残存する各壁の壁下には、壁溝は見られない。床面は、ロームブロックを含む暗褐色土を平坦に埋め戻した貼床式である。ピットは、検出されていない。

遺物は、住居跡の覆土中から、古墳時代の土器の破片が少量出土している。本住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土遺物の様相から、古墳時代後期と考えられる。

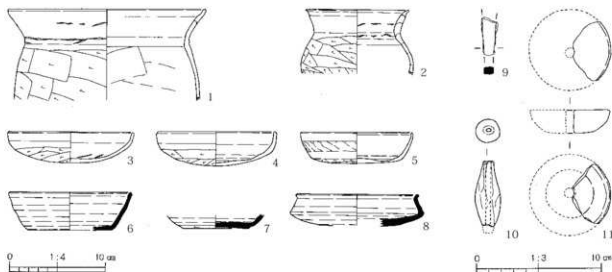
## 第371号住居跡 (第214図、写真図版102)

H地点調査区中央部の南側に位置する。重複する第372号住居跡に切られ、第366・370号住居跡を切っている。

平面形は、コーナー部の丸み強い隅丸長方形を呈していたと思われる。規模は、北東～南西方向が3.60m、北西～南東方向は3.55mまで測れる。住居の主軸方位は、N-70° -Eを向いている。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは55cmある。調査区内で検出された各壁の壁下には、壁溝は見られない。床面は、ロームブロックを含む暗褐色土を平坦に埋め戻した貼床式である。住居中央部は比較的堅く締まっているが、周辺部はやや軟弱である。ピットは、検出されていない。

カマドは、住居北東側壁の北側コーナー部に寄った位置に、壁を掘り込んで直角に付設されている。規模は、全長126cm、最大幅90cmを測る。燃焼部は、奥壁側が若干住居外に位置する。燃焼面は、住居の床面とほぼ同じ高さで、平坦に作られている。奥壁は、垂直ぎみに立ち上がり、煙道部に向かっている。袖は、黄褐色粘土やロームブロックを含む暗褐色土を、奥壁から廻して構築している。袖の内面は、あまり焼けていない。煙道部は、すでに削平されているため不明である。

遺物は、カマド周辺の壁際から、奈良時代を主体とする土器が出土している。この中のNo5の環は、平安時代のもので、本住居に伴うものではなく混入品である。土器以外では、鉄製品の破片(No9)、土錘(No10)、土製紡錘車の破片(No11)などが、覆土中から出土している。本住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土遺物の様相から、奈良時代と考えられる。



第223図 第371号住居跡出土遺物

第119表 第371号住居跡出土遺物観察表

1	長 胴 甕	A.口縁部径(21.0)。B.粘土粗積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面麗ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外—淡茶褐色。F.口縁部1/3。H.覆土中。
2	小形台付甕	A.口縁部径(11.0)。B.粘土粗積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面丁寧ナデ。D.白色粒。E.内外—暗茶褐色。F.口縁部1/3。H.覆土中。
3	杯	A.口縁部径13.4。器高3.3。B.粘土粗積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後下平ケズリ、内面ナデ。D.白色粒。E.内外—茶褐色。F.ほぼ完成形。H.覆土中。
4	杯	A.口縁部径12.8。器高3.6。B.粘土粗積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後下平ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外—淡茶褐色。F.1/2。H.覆土中。
5	杯	A.口縁部径12.0。器高3.3。B.粘土粗積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデ、内面ヨコナデ。底部外面ケズリ。D.白色粒。E.内外—暗茶褐色。F.ほぼ完成形。H.覆土中。
6	須恵器 杯	A.口縁部径(13.0)。器高4.0、底部径(8.8)。B.ロクロ成形。C.口縁部内外面回転ナデ。底部外面ケズリ。D.白色針状(海綿骨針)、白色粒。E.内外—暗灰色。F.1/4。G.南比企窯産。H.覆土中。
7	須恵器 杯	A.底部径6.8。B.ロクロ成形。C.体部内外面回転ナデ。底部外面回転条切り後外周回転ケズリ。D.白色粒。E.内外—淡灰色。F.底部のみ。H.覆土中。
8	須恵器 杯	A.口縁部径(13.0)。B.ロクロ成形。C.内外面回転ナデ。D.白色粒。E.内外—暗灰色。F.1/4。G.内面に降灰による自然釉がかかる。環としたが蓋の可能性が高い。H.覆土中。
9	鉄製品	A.残存長3.1。最大幅1.4。厚さ0.5。重さ4.88g。B.鍛造。D.鉄製。F.破片。G.断面長方形。H.覆土中。
10	土 錘	A.残存長5.1。最大径2.0。重さ4.88g。B.手捏ね。D.白色粒。E.茶褐色。F.端部欠損。H.覆土中。
11	土製紡錘車	A.上面径(6.4)。下面径(3.8)。高さ1.9。重さ20.7g。B.手捏ね。C.4上面ケズリの後ナデ。下面・側面ケズリ。D.赤色粒、白色粒。E.暗茶褐色。F.1/4。H.覆土中。

## 第372号住居跡 (第214図)

H地点調査区中央部の南端に位置する。重複する第366・371号住居跡を切っている。住居跡の南側は調査区外にあるため、本住居跡の全容は不明である。

平面形は、コーナー部が丸みを持つ隅丸方形が隅丸長方形を呈していたと思われる。規模は、東西方向が4.35m、南北方向は1.03mまで測れる。住居跡の北側壁は、N-90°—Eの方向を向いている。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは71cmある。調査区内で検出された各壁の壁下には、壁溝は見られない。床面は、ロームブロックを含む暗褐色土を平坦に埋め戻した貼床式である。ピットは、検出されていない。

遺物は、住居跡の覆土中から、土器の破片が出土している。本住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土遺物の様相から、平安時代前期頃と考えられる。

### 第373号住居跡（第224図、写真図版103）

H地点調査区中央部の南西側に位置する。重複する第374・375号住居跡に切られている。住居跡の上面は、床面近くまで削平されているため、遺構の遺存状態はあまり良好とは言えない。

平面形は、コーナー部が丸みを持つ隅丸方形か隅丸長方形を呈していたと思われる。規模は、北東～南西方向が2.29m、北西～南東方向が2.60mを測る。住居の主軸方位は、N-72°-Eを向いている。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは10cmある。各壁の壁下には、壁溝は見られない。床面は、ロームブロックを含む暗褐色土を平坦に埋め戻した貼床式である。ピットは、検出されていない。

カマドは、住居南西側壁の中央より南側に寄った位置に付設されている。左側袖は後世の擾乱によって切られており、右側袖だけが残存している。規模は、全長42cm、幅は59cmまで測れる。燃焼部は、住居内にある。燃焼面は、住居の床面とほぼ同じ高さで、水平に作られている。奥壁は、緩やかに立ち上がり、煙道部に向かっている。袖は、黄橙色粘土やロームブロックを含む暗黄褐色土を、住居の壁に貼り付けて構築している。煙道部は、すでに削平されているため不明である。

遺物は、住居跡の覆土中から、古墳時代後期の土器の破片が少量出土しただけである。本住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土土器の様相から、古墳時代後期と考えられる。

### 第374号住居跡（第224図、写真図版104）

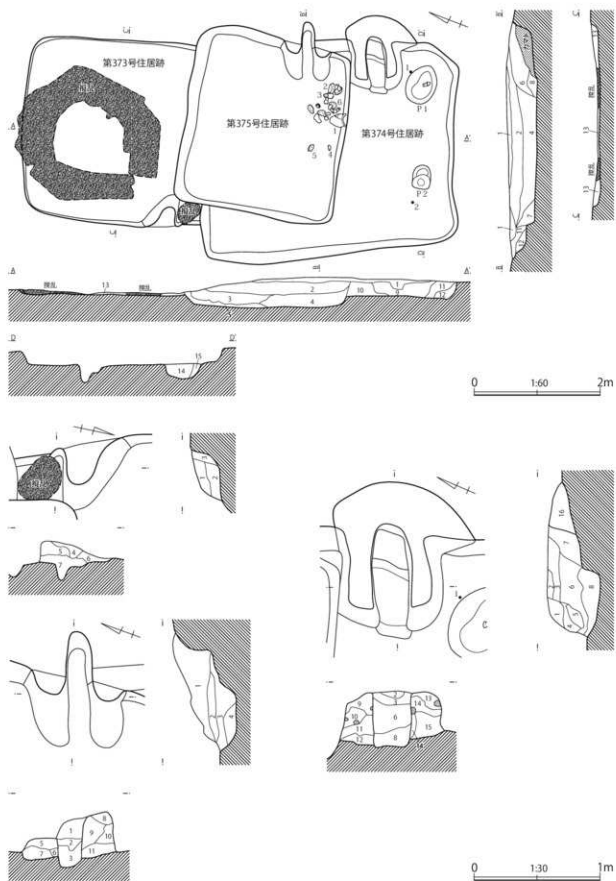
H地点調査区中央部の南西側に位置する。重複する第375号住居跡に切れ、第373号住居跡を切っている。

平面形は、コーナー部の丸みが強い隅丸長方形を呈している。規模は、北東～南西方向が3.36m、北西～南東方向が4.05mを測る。住居の主軸方位は、N-70°-Eを向いている。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは27cmある。残存する各壁の壁下には、壁溝は見られない。床面は、ロームブロックを含む暗褐色土を平坦に埋め戻した貼床式である。住居中央部は比較的強く締まっているが、周辺部はやや軟弱である。ピットは、2カ所検出されている。P1は、いわゆる貯蔵穴と呼ばれるもので、カマド右側の住居東側コーナー部に位置している。65cm×45cmの楕円形を呈し、床面からの深さは24cmある。P2は、住居南側コーナー部近くに位置する37cm×28cmの楕円形を呈し、床面からの深さは27cmある。

カマドは、住居北東側壁の東側コーナー部寄りに位置し、壁を掘り込んで垂直に付設されている。規模は、全長124cm、最大幅82cmを測る。燃焼部は、住居内にある。燃焼面は、住居の床面よりも一段低く平坦に作られている。奥壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、煙道部に向かっている。袖は、黄橙色粘土やロームブロックを含む暗褐色土を、燃焼部奥壁から廻して構築している。煙道部は、すでに削平されているため不明である。

遺物は、住居跡の覆土中から土器の破片が出土している。本住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土遺物の様相から、古墳時代後期後半と考えられる。





第224图 第373~375号住居跡

## 第373・374・375号住居跡土層説明

- 第1層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ロームブロック・ローム粒子を多量、浅間山系A軽石・焼土粒子を少量含む。）  
 第2層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、径0.7～0.8cmのロームブロックを少量、焼土ブロック・焼土粒子を微量含む。）  
 第3層：暗褐色土層（ローム粒子を少量、径0.5～0.8cmのロームブロック・焼土ブロック・焼土粒子を微量含む。）  
 第4層：暗褐色土層（径0.8～0.9cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土ブロック・焼土粒子を微量含む。）  
 第5層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、径0.5～1cmのロームブロックを少量、焼土ブロック・焼土粒子を微量含む。）  
 第6層：暗褐色土層（ロームブロック・焼土粒子を多量、焼土ブロックを微量含む。）  
 第7層：暗褐色土層（径0.5～0.8cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土ブロック・焼土粒子を微量含む。）  
 第8層：暗褐色土層（ロームブロック・焼土粒子を多量、ローム粒子・黄褐色粘土を少量含む。粘性に富み、しまりを有する。）  
 第9層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、径0.5～5cmのロームブロックを微量含む。）  
 第10層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を多量、焼土ブロック・焼土粒子を微量含む。）  
 第11層：暗褐色土層（ローム粒子を少量、焼土ブロック・焼土粒子を微量含む。）  
 第12層：暗褐色土層（径0.5～3cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土ブロック・焼土粒子を微量含む。）  
 第13層：土層説明なし。  
 第14層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、径3～4cmのロームブロックを微量含む。）  
 第15層：黄褐色土層（ロームブロック・ローム粒子・暗褐色土を含む。）

## 第373号住居跡カマド土層説明

- 第1層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含む。）  
 第2層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子・焼土粒子を微量含む。）  
 第3層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、径0.5～3cmのロームブロック・ローム粒子を含む。）  
 第4層：暗褐色土層（黄褐色粘土・暗褐色土の混合土を主体に、焼土ブロック・焼土粒子を少量含む。）  
 第5層：黄褐色粘土層（粘土・暗褐色土を少量含む。）  
 第6層：黄褐色土層（径10cmのロームブロック・ローム粒子・焼土ブロック・焼土粒子を少量含む。）  
 第7層：暗褐色土層（径0.5～4cmのロームブロック・ローム粒子・焼土ブロック・焼土粒子を少量含む。）

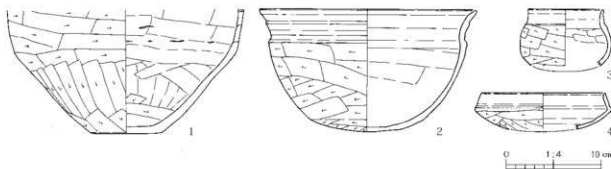
## 第374号住居跡カマド土層説明

- 第1層：暗褐色土層（黄褐色粘土・暗褐色土の混合土を主体に、ロームブロック・ローム粒子・焼土ブロック・焼土粒子を少量含む。）  
 第2層：暗褐色土層（黄褐色粘土・暗褐色土の混合土を主体に、焼土ブロック・焼土粒子を多量、ロームブロック・ローム粒子を少量含む。）  
 第3層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子・焼土ブロック・焼土粒子を多量、黄褐色粘土を少量含む。）  
 第4層：黄褐色粘土層（黄褐色粘土を主体に、焼土ブロック・焼土粒子を多量、暗褐色土を少量含む。）  
 第5層：明赤褐色粘土層（焼土ブロック・黄褐色粘土を少量含む。）  
 第6層：黄褐色粘土層（黄褐色粘土・暗褐色土の混合土を主体に、焼土ブロック・焼土粒子を多量含む。）  
 第7層：黄褐色粘土層（ロームブロック・ローム粒子・焼土ブロック・焼土粒子を多量含む。）  
 第8層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、焼土ブロック・焼土粒子を少量含む。）  
 第9層：暗褐色土層（黄褐色粘土・暗褐色土の混合土を主体に、ロームブロック・ローム粒子・径0.5～1cmの焼土ブロック・焼土粒子を含む。しまりを有する。）  
 第10層：暗褐色土層（黄褐色粘土・暗褐色土の混合土を主体に、ロームブロック・ローム粒子・径3～4cmの焼土ブロック・焼土粒子を含む。しまりを有する。）  
 第11層：暗褐色土層（黄褐色粘土・暗褐色土の混合土を主体に、焼土ブロック・焼土粒子を多量、ロームブロック・ローム粒子を少量含む。しまりを有する。）  
 第12層：褐色土層（ロームブロック・ローム粒子・黄褐色粘土を含む。しまりを有する。）  
 第13層：暗褐色土層（黄褐色粘土・暗褐色土の混合土を主体に、ローム粒子を多量含む。しまりを有する。）  
 第14層：暗褐色土層（黄褐色粘土・暗褐色土の混合土を主体に、黄褐色粘土ブロックを含む。しまりを有する。）  
 第15層：暗褐色土層（黄褐色粘土・暗褐色土の混合土を主体に、ローム粒子・ロームブロックを多量含む。しまりを有する。）  
 第16層：土層説明なし。

## 第375号住居跡カマド土層説明

- 第1層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、径0.5～3cmのロームブロック・ローム粒子・径0.5～2cmの焼土ブロック・焼土粒子・黄褐色粘土を多量含む。しまりは無い。）  
 第2層：黄褐色粘土層（黄褐色粘土・暗褐色土の混合土を主体に、焼土粒子を多量含む。）  
 第3層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、焼土ブロック・焼土粒子・黄褐色粘土を含む。）  
 第4層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子・焼土ブロック・焼土粒子・黄褐色粘土を含む。）

- 第5層：暗褐色土層（黄褐色粘土・暗褐色土の混合土を主体に、ローム粒子を多量、焼土粒子・炭化物を少量含む。）  
 第6層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子・炭化物を少量含む。）  
 第7層：暗褐色土層（ローム粒子・黄褐色粘土を多量、焼土粒子・炭化物を少量含む。）  
 第8層：暗褐色土層（黄褐色粘土・暗褐色土の混合土を主体に、ローム粒子・焼土粒子を少量、浅間山系A軽石を微量含む。）  
 第9層：暗褐色土層（ロームブロックを多量、ローム粒子・焼土粒子を少量、浅間山系A軽石を微量含む。）  
 第10層：暗褐色土層（黄褐色粘土を多量、ローム粒子・焼土粒子を少量、浅間山系A軽石を微量含む。）  
 第11層：暗褐色土層（黄褐色粘土・暗褐色土の混合土を主体に、径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子を少量、浅間山系A軽石を微量含む。）



第225図 第374号住居跡出土遺物

第120表 第374号住居跡出土遺物観察表

1	胴張裏	A. 底部径7.6。B. 粘土細積み上げ。C. 胴部外面ケズリ、内面荒ナデ。底部外面ケズリ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 内外一暗茶褐色。F. 下半のみ。H. 覆土中。
2	大形鉢	A. 口縁部径(23.0)。器高13.0。B. 粘土細積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面荒ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一明茶褐色。F. 1/2。H. 覆土中。
3	広口短頸甕	A. 口縁部径(8.0)。B. 粘土細積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面上半指ナデ・下半丁寧ナデ。D. 白色粒。E. 内外一淡茶褐色。F. 上半1/4。H. 覆土中。
4	模倣坏	A. 口縁部径(13.2)。B. 粘土細積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 白色粒。E. 内外一黒褐色。F. 口縁部1/3。H. 覆土中。

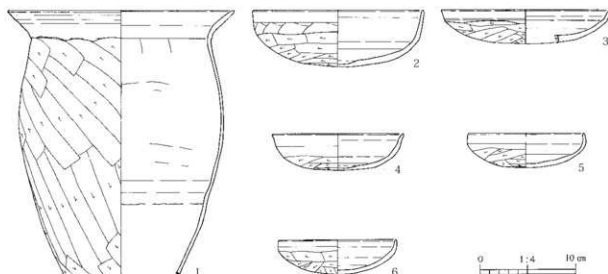
## 第375号住居跡（第224図、写真図版104）

H地点調査区中央部の南西側に位置する。重複する第373・374号住居跡を切っている。

平面形は、コーナー部が丸みを持つ隅丸方形を呈している。規模は、北東～南西方向が2.85m、北西～南東方向が2.60mを測る。住居の主軸方位は、N-80°-Eを向いている。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは50cmある。各壁の壁下には、壁溝は見られない。床面は、ロームブロックを含む暗褐色土を平坦に埋め戻した貼床式である。住居中央部は比較的堅く締まっているが、周辺部はやや軟弱である。ピットは、検出されていない。

カマドは、住居北東側壁の東側コーナー寄りに位置し、壁に対してやや斜めに付設されている。規模は、全長92cm、最大幅78cmを測る。燃焼部は、その半分が住居外にある。燃焼面は、カマド第2層あたりと思われ、住居の床面よりも若干高く平坦に作られている。奥壁は、垂直直みに立ち上がり、煙道部に向かっている。袖は、黄褐色粘土やロームブロックを含む暗褐色土を、住居の壁に貼り付けて構築している。煙道部は、すでに削平されているため不明である。

遺物は、住居南東側壁際の覆土中から、土器の破片がまとめて出土している。本住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土遺物の様相から、白鳳時代末から奈良時代初頭と考えられる。



第226図 第375号住居跡出土遺物

第121表 第375号住居跡出土遺物観察表

1	長胴甕	A.口縁部径(24.0)。B.粘土細積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面尻ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一明茶褐色。F.口縁部1/2弱。H.覆土中。
2	坏	A.口縁部径18.0。器高6.0。B.粘土細積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後下半ケズリ、内面ナデ。D.白色粒。E.内外一淡茶褐色。F.ほぼ完形。H.覆土中。
3	皿	A.口縁部径(18.0)。B.粘土細積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.白色粒。E.内外一明褐色。F.口縁部1/4弱。H.覆土中。
4	坏	A.口縁部径(14.0)。器高3.9。B.粘土細積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後下半ナデ、内面ヨコナデ。D.白色粒。E.内外一暗茶褐色。F.1/2。H.体面付近。
5	坏	A.口縁部径12.4。器高3.7。B.粘土細積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一明茶褐色。F.完形。H.床面付近。
6	坏	A.口縁部径12.6。器高3.6。B.粘土細積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後ケズリ、内面ヨコナデ。D.白色粒。E.外一暗茶褐色、内一明茶褐色。F.ほぼ完形。H.覆土中。

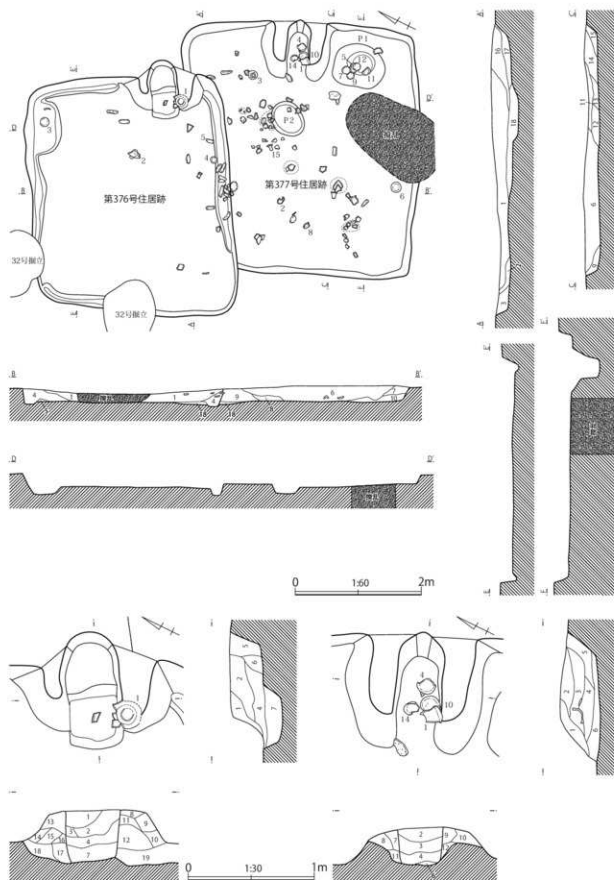
## 第376号住居跡 (第227図、写真図版106)

H地点調査区中央部の西側寄りに位置する。重複する第32号掘立柱建物跡に切られ、第377号住居跡を切っている。

平面形は、コーナー部が丸みを持つ隅丸長方形を呈している。規模は、北東～南西方向が3.76m、北西～南東方向が3.24mを測る。住居の主軸方位は、N-60°-Eを向いている。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは20cmある。住居南側コーナー部以外の壁の壁下には、壁溝が巡っている。床面は、ロームブロックを含む暗黄褐色土を平坦に埋め戻した貼床式である。住居中央部は比較的堅く締まっているが、周辺部はやや軟弱である。ピットは、検出されていない。

カマドは、住居北東側壁の東側コーナー部寄りに位置し、壁を掘り込んで直角に付設されている。規模は、全長93cm、最大幅120cmを測る。燃焼部は、奥壁側が住居外にある。燃焼面は、カマド第7層の上面あたりと思われる、住居の床面とほぼ同じ高さで水平に作られている。奥壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、煙道部に向かっている。袖は、褐色粘土粒子やロームブロックを含む暗褐色土を、住居の壁に貼り付けて構築している。右側袖の先端には、土師器の甕を伏せて補強している。煙道部は、すでに削平されているため不明である。

遺物は、カマド内や住居東側の壁際から、土器や棒状の自然石が多く出土している。本住居跡の時



第227图 第376·377号住居跡

## 第376・377号住居跡土層説明

- 第1層：暗褐色土層 (径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子を少量、炭化粒子を微量含む。)
- 第2層：暗褐色土層 (径1～4cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。)
- 第3層：暗褐色土層 (径1～2cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。)
- 第4層：暗褐色土層 (径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を多量、炭化粒子を微量含む。)
- 第5層：黄褐色土層 (径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を多量とする。)
- 第6層：暗褐色土層 (径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を多量、径3cmのロームブロック・焼土粒子・炭化粒子を微量含む。)
- 第7層：暗褐色土層 (径0.5～3cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。)
- 第8層：暗褐色土層 (ローム粒子を多量、径0.5cmのロームブロックを少量、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。)
- 第9層：暗褐色土層 (径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を多量、炭化粒子を微量含む。)
- 第10層：暗褐色土層 (径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。)
- 第11層：暗褐色土層 (径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含む。)
- 第12層：暗褐色土層 (径0.5～3cmのロームブロック・ローム粒子を多量、白色粒子・炭化粒子を微量含む。)
- 第13層：暗褐色土層 (径1～2cmのロームブロック・ローム粒子を多量、径0.5～3cmの焼土ブロックを微量含む。)
- 第14層：暗褐色土層 (径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を多量、径3cmの灰黄色粘土ブロックを少量、焼土粒子を微量含む。)
- 第15層：暗褐色土層 (径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を多量、黒褐色土を少量、焼土粒子を微量含む。)
- 第16層：暗褐色土層 (径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を少量、炭化粒子を微量含む。)
- 第17層：暗褐色土層 (径1～2cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。)
- 第18層：黒褐色土層 (径0.5～4cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子・炭化物を少量含む。)

## 第376号住居跡カマド土層説明

- 第1層：褐色粘質土層 (白色粒子を中量、径0.5cmのロームブロック・ローム粒子・焼土粒子を少量含む。粘性に富む。)
- 第2層：褐色粘質土層 (径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子・焼土粒子・白色粒子を少量、炭化粒子を微量含む。粘性に富む。)
- 第3層：褐色粘質土層 (径0.5～1cmの焼土ブロック・褐色粘土の混合土。)
- 第4層：褐色粘質土層 (径0.5cmのロームブロック・ローム粒子・焼土粒子を少量含む。)
- 第5層：暗褐色土層 (径0.5～2cmの焼土ブロック・焼土粒子を多量、径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。)
- 第6層：褐色粘質土層 (径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子を微量含む。)
- 第7層：暗褐色土層 (褐色粘土粒子を多量、径0.5cmのロームブロック・ローム粒子・焼土粒子を微量含む。)
- 第8層：暗褐色土層 (径0.5cmのロームブロック・焼土粒子・白色粒子・黒褐色土を少量含む。)
- 第9層：暗褐色土層 (ローム粒子・白色粒子を多量、炭化粒子を微量含む。)
- 第10層：暗褐色土層 (径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子・白色粒子を微量含む。)
- 第11層：暗褐色土層 (褐色粘土粒子を多量、ローム粒子を少量、焼土粒子・炭化粒子・白色粒子を微量含む。)
- 第12層：暗褐色土層 (褐色粘土粒子を多量、径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含む。)
- 第13層：暗褐色土層 (褐色粘土粒子を多量、白色粒子を中量、径0.5cmの焼土ブロック・径2cmの黒褐色土ブロックを少量、径0.5～1cmのロームブロックを微量含む。)
- 第14層：褐色粘土層 (褐色粘土粒子を主体に、ローム粒子・焼土粒子・径2cmの黒褐色土ブロックを少量含む。)
- 第15層：暗褐色土層 (径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子・炭化粒子を少量含む。)
- 第16層：暗褐色土層 (径0.5～1cmのロームブロックを少量、焼土粒子を微量含む。)
- 第17層：暗褐色土層 (径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子・径0.5～1cmの焼土ブロックを多量、炭化粒子を微量含む。)
- 第18層：暗褐色土層 (径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を多量、炭化粒子を少量、焼土粒子を微量含む。)
- 第19層：暗褐色土層 (径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を少量、炭化粒子を微量含む。)

## 第377号住居跡カマド土層説明

- 第1層：暗褐色土層 (径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子・径0.5cmの焼土ブロック・炭化物を少量含む。)
- 第2層：暗褐色土層 (径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を多量、径0.5cmの焼土ブロックを少量、炭化物・黒褐色土を微量含む。)
- 第3層：暗褐色土層 (径0.5cmのロームブロック・ローム粒子・焼土粒子・黒褐色土を少量含む。)
- 第4層：暗褐色土層 (黒褐色土を多量、径0.5cmのロームブロック・ローム粒子・焼土粒子を少量含む。)
- 第5層：暗褐色土層 (径0.5cmの焼土ブロックを多量、灰黄色粘土粒子・黒褐色土を少量含む。)
- 第6層：黄灰色粘土層 (径0.5cmのロームブロック・ローム粒子・径0.5～1cmの焼土ブロック・黒褐色土を多量含む。)
- 第7層：暗褐色土層 (黄灰色粘土粒子を多量、径0.5cmのロームブロック・ローム粒子・焼土粒子・白色粒子を微量含む。)
- 第8層：暗褐色土層 (ローム粒子・黄灰色粘土粒子を多量、径1cmのロームブロック・黒褐色土を少量、焼土粒子・白色粒子を微量含む。)

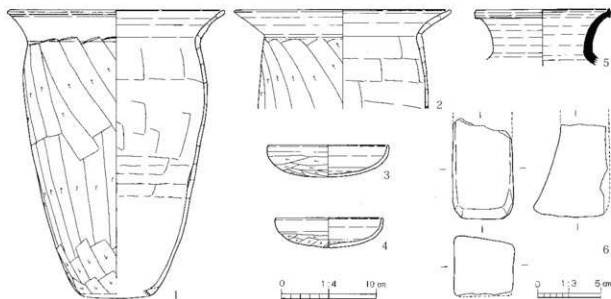
第9層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子・黄灰色粘土粒子を多量、黒褐色土を少量、焼土粒子・白色粒子を微量含む。）

第10層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子・白色粒子を少量、炭化粒子を微量含む。）

第11層：暗褐色土層（径1cmのロームブロック・ローム粒子・径0.5cmの焼土ブロック・焼土粒子を少量含む。）

第12層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を多量、黒褐色土を少量、焼土粒子を微量含む。）

期は、遺構の重複関係や出土遺物の様相から、奈良時代と考えられる。



第228図 第376号住居跡出土遺物

第122表 第376号住居跡出土遺物観察表

1	長 胴 甕	A.口縁部径23.0、器高(30.6)、底部径(7.8)。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面上半笠ナデ・下半丁平ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一淡褐色。F.底部欠損。G.胴部外面に煤付着。H.カマド右側袖先端。
2	長 胴 甕	A.口縁部径23.0。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後ケズリ、内面笠ナデ。D.白色粒。E.内外一暗褐色。F.口縁部4/5。H.床面付近。
3	杯	A.口縁部径13.0、器高3.4。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一淡褐色。F.完形。H.壁溝上面。
4	杯	A.口縁部径11.6、器高3.2。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一明茶褐色。F.完形。H.床面付近。
5	須 恵 器 蓋	A.口縁部径(14.2)。B.粘土組織み上げ後クロコ整形。C.口縁部内外面回転ナデ。D.白色針状物質、白色粒。E.内外一暗褐色。F.口縁部1/3。G.南比企窯産。H.覆土中。
6	柱 状 砥 石	A.残存長8.0、最大幅4.9、最大厚5.8、重さ300.5g。B.削り。C.上下両側面研磨。D.流紋岩。F.1/2。H.床面付近。

第377号住居跡（第227図、写真図版107・108）

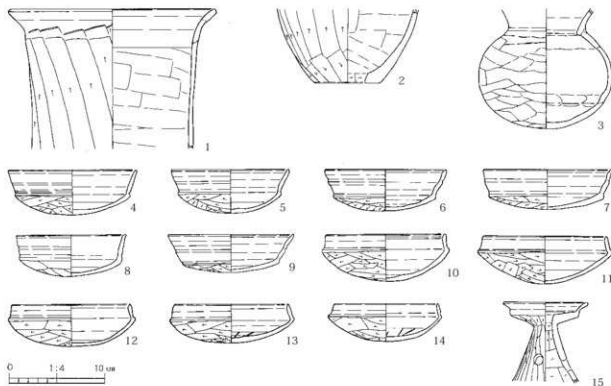
H地点調査区中央部の西側寄りに位置する。重複する第376号住居跡に切られている。

平面形は、コーナー部が丸みを持つ隅丸方形を呈している。規模は、北東～南西方向が4.00m、北西～南東方向が3.72mを測る。住居の主軸方位は、N-65°-Eを向いている。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは33cmある。残存する各壁の壁下には、壁溝は見られない。床面は、ロームブロックを含む暗黄褐色土を平坦に埋め戻した貼床式である。住居中央部は比較的堅く締まっているが、周辺部はやや軟弱である。ピットは、2カ所検出されている。P1は、いわゆる貯

蔵穴と呼ばれるもので、カマド右側の住居東側コーナー部に位置する。73cm×85cmの楕円形ぎみの形態を呈し、確認面からの深さは65cmある。P1内の上半からは、完形に近い環が4個体正位に並んだ状態で出土している。P2は、住居中央部のカマド前に位置する。50cm×65cmの楕円形を呈し、確認面からの深さは27cmある。

カマドは、住居北東側壁の中央に位置し、壁に対して直角に付設されている。規模は、全長95cm、最大幅110cmを測る。燃焼部は、住居内にある。燃焼面は、住居の床面とほぼ同じ高さで水平に作られている。奥壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、煙道部に向かっている。袖は、黄灰色粘土やロームブロックを含む暗褐色土を、住居の壁に貼り付けて構築している。煙道部は、すでに削平されているため不明である。

遺物は、カマドや貯蔵穴内やその周辺及び住居中央部の床面付近から、古墳時代後期後半を主体とする土器や自然石が多く出土している。本住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土遺物の様相から、古墳時代後期後半頃と考えられる。



第229図 第377号住居跡出土遺物

第123表 第377号住居跡出土遺物観察表

1	長頸甕	A.口縁部径(22.0)。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面窪ナデ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.内外一淡茶褐色。F.口縁部1/4。H.カマド内。
2	小形甕	A.底部径6.8。B.粘土組織み上げ。C.胴部外面ケズリ、内面窪ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一暗茶褐色。F.底部1/2。G.外面に黒斑あり。底部外面に木炭痕を残す。H.床面付近。
3	中形直口甕	A.残存高12.7。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面上半笠ナデ・下半ケズリの後ナデ、内面ナデ。D.白色粒。E.内外一淡茶褐色。F.口縁部欠損。G.底部外面に黒斑あり。H.床面付近。
4	有段口縁環	A.口縁部径13.6。器高5.7。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.白色粒。E.内外一暗褐色。F.2/3。H.カマド内。
5	有段口縁環	A.口縁部径11.4。器高4.6。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.白色粒。E.内外一淡褐色。F.ほぼ完形。H.貯蔵穴内。



6	有段口縁環	A.口縁部径13.0、器高4.4。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.白色粒。E.内外一黒褐色。F.完形。H.床面直上。
7	有段口縁環	A.口縁部径13.6、器高4.2。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.白色粒。E.内外一黒褐色。F.ほぼ完形。H.貯蔵穴内。
8	有段口縁環	A.口縁部径11.6、器高4.4。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一淡褐色。F.ほぼ完形。H.覆土中。
9	有段口縁環	A.口縁部径13.4、器高4.0。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.内外一明茶褐色。F.完形。H.貯蔵穴内。
10	模倣環	A.口縁部径12.8、器高5.0。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ヨコナデ。D.白色粒。E.内外一暗褐色。F.完形。H.カマド内。
11	模倣環	A.口縁部径13.2、器高5.1。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ヨコナデ。D.白色粒。E.内外一黒褐色。F.3/4。H.貯蔵穴内。
12	模倣環	A.口縁部径12.6、器高4.5。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ヨコナデ。D.白色粒。E.内外一黒茶褐色。F.完形。H.貯蔵穴内。
13	模倣環	A.口縁部径12.2、器高4.1。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.外一黒茶褐色、内一暗茶褐色。F.1/2。H.貯蔵穴内。
14	模倣環	A.口縁部径11.2、器高4.0。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一暗茶褐色。F.2/3。H.カマド内。
15	器台	A.口縁部径9.0。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。器外部外面ケズリ、内面ヨコナデ。脚部外面ミガキ、内面ケズリ。D.白色粒。E.内外一明茶褐色。F.脚端欠損。G.脚部穿孔2カ所以上。混入品。H.覆土中。

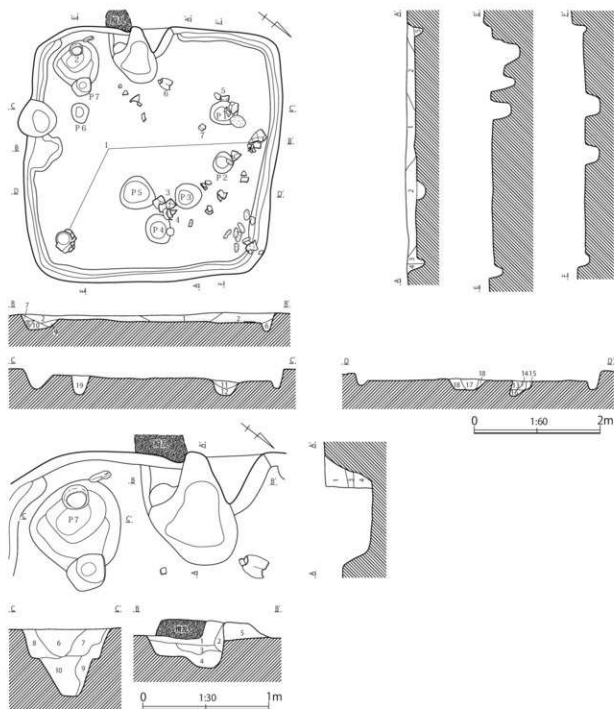
### 第378号住居跡（第230図、写真図版109）

H地点調査区中央部の南側に位置する。北西側には第377号住居跡が、南西側には第375号住居跡が近接している。

平面形は、コーナー部が丸みを持つ隅丸方形を呈している。規模は、北東～南西方向が4.05m、北西～南東方向が3.97mを測る。住居の主軸方位は、N-120°-Wを向いている。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは18cmある。各壁の壁下には、壁溝が巡っている。床面は、ロームブロックを多量に含む暗黄褐色土を平坦に埋め戻した貼床式である。住居中央部は比較的堅く締まっているが、周辺部はやや軟弱である。ピットは、7カ所検出されている。この中のP1とP6は、概ね住居の対角線上に位置することから、住居の上屋を支える4本主柱の主柱穴の一部の可能性が考えられる。長さが45cmと33cmの楕円形を呈し、床面からの深さは31cmと23cmある。P7は、いわゆる貯蔵穴と呼ばれるもので、カマド左側の住居南側コーナー部に位置する。52cm×71cmの不整形ぎみの形態を呈し、二段に深くになっている。確認面からの深さは53cmある。P7内からは、土師器の甕が出土している。

カマドは、住居南西側壁の中央から南側コーナー部寄りに位置し、壁に対して直角に付設されている。規模は、全長90cm、最大幅100cmを測る。燃焼部は、住居内にある。燃焼面は、カマド第3層の上面あたりと考えられる。住居の床面より一段低く水平に作られている。奥壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、煙道部に向かっている。袖は、黄灰色粘土やロームブロックを含む暗褐色土を、住居の壁に貼り付けて構築している。煙道部は、すでに削平されているため不明である。

遺物は、カマド前や住居周辺部の床面付近から、土器が多く出土している。土器以外では、住居の北側コーナー部付近の床面上から、長さ20cm前後の棒状の自然石が8個まとまって出土している。本住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土遺物の様相から、古墳時代後期後葉頃と考えられる。



第230図 第378号住居跡

## 第378号住居跡土層説明

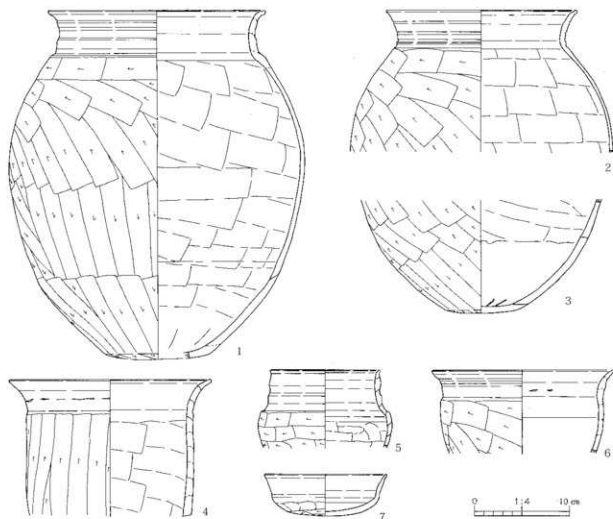
- 第1層：暗褐色土層（径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を少量含む。）  
 第2層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子・炭化物を少量含む。）  
 第3層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。）  
 第4層：暗褐色土層（ローム粒子を微量含む。）  
 第5層：暗褐色土層（径1～3cmのロームブロックを多量含む。）  
 第6層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、径0.5cmのロームブロック・炭化粒子・黒褐色土を少量含む。）  
 第7層：黄褐色土層（ローム粒子を多量含む。）  
 第8層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、炭化粒子を微量含む。）

- 第9層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。）  
 第10層：黄褐色土層（ローム粒子を多量、径0.5～2cmのロームブロック・炭化粒子を少量含む。）  
 第11層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、径0.5～2cmのロームブロックを少量含む。）  
 第12層：暗褐色土層（径0.5～3cmのロームブロック・ローム粒子を含む。）  
 第13層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を多量、炭化粒子を少量含む。）  
 第14層：黄褐色土層（径2～4cmのロームブロック・ローム粒子を含む。）  
 第15層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。）  
 第16層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、径0.5cmのロームブロック・黒褐色土を少量含む。）  
 第17層：黄褐色土層（径1～4cmのロームブロック・ローム粒子を主体に、暗褐色土を少量含む。）  
 第18層：暗褐色土層（径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。）  
 第19層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子・炭化粒子を少量含む。）

#### 第378号住居跡カマド・貯蔵穴土層説明

- 第1層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子・径0.5cmの焼土ブロック・焼土粒子・径0.5～1cmの黄灰色粘土ブロックを多量、炭化粒子を微量含む。）  
 第2層：暗褐色土層（径3cmのロームブロックを含む。）  
 第3層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子・焼土粒子を多量、炭化物を微量含む。）  
 第4層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、径0.5cmのロームブロックを少量、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。）  
 第5層：土層説明なし。  
 第6層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子・黒褐色土を多量含む。）  
 第7層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子を微量含む。）  
 第8層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を少量含む。）  
 第9層：黄褐色土層（ローム粒子を多量、径0.5～1cmのロームブロックを中量、黒褐色土を少量含む。）  
 第10層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子を少量含む。）





第231図 第378号住居跡出土遺物

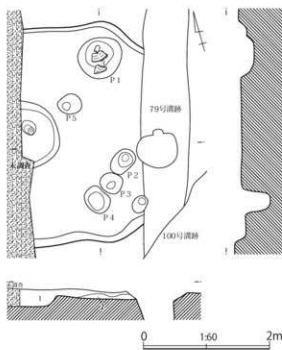
第124表 第378号住居跡出土遺物観察表

1	胴張甕	A.口縁部径23.0、器高(37.0)、底部径11.2。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。D.白色粒。E.内外一明茶褐色。F.上半1/2、下半2/3。G.胴部外面に黒斑あり。上半と下半は接合しない。器形は図上復元。H.床面付近。
2	胴張甕	A.口縁部径(20.2)。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。D.黒色粒、白色粒。E.外一暗褐色、内一淡茶褐色。F.口縁部1/2弱。H.貯蔵穴(P7)内。
3	胴張甕	A.底部径7.6。B.粘土組織み上げ。C.胴部外面ケズリ、内面ナデの後部ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.外一明茶褐色、内一淡褐色。F.下半のみ。G.胴部外面に黒斑あり。H.床面付近。
4	長胴甕	A.口縁部径(21.4)。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.内外一暗茶褐色。F.上半1/2。H.床面付近。
5	鉢	A.口縁部径(11.6)。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.片岩粒、白色粒。E.内外一暗茶褐色。F.口縁部1/3。H.床面付近。
6	大形鉢	A.口縁部径19.2。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面丁寧なナデ。D.片岩粒、白色粒。E.内外一暗褐色。F.上半のみ。H.床面付近。
7	模倣坏	A.口縁部径(13.0)、器高4.4。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後下半ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一淡暗褐色。F.口縁部1/4。H.床面付近。

## 第379号住居跡 (第232図、写真図版110)

H地点の調査区西端に位置する。重複する第79号溝跡に切られている。住居跡の西側は、調査区外にあるため、本住居跡の全容は不明である。

平面形は、不明である。規模は南北方向が3.55m、東西方向は2.00mまで測れる。住居跡の北側壁は、N-101°-Eの方向を向いている。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは12cmある。検出された各壁の壁下には、壁溝は見られない。床面は、ロームブロックを多量に含む暗黄褐色土を平坦に埋め戻した貼床式である。ピットは、住居内から5カ所検出されている。P1は、72cm×65cmの不整円形を呈し、床面からの深さは17cmある。その形態や位置から、貯蔵穴の可能性もある。P1上面からは、No3の甕の破片が出土している。P2～P5は、住居との関係は不明である。



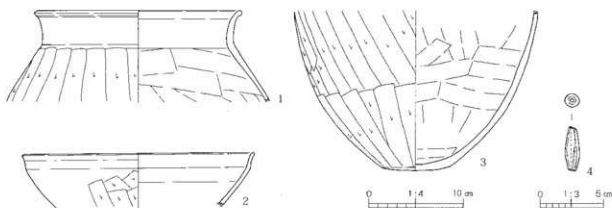
第232図 第379号住居跡

遺物は、住居跡の覆土中から土器の破片が少量出土している。本住居跡の時期は、出土土器の様相から、古墳時代後期後半頃と考えられる。

## 第379号住居跡土層説明

第1層：暗褐色土層 (径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を少量、炭化物を微量含む。)

第2層：暗褐色土層 (径1～3cmのロームブロックを多量、ローム粒子を少量、炭化物を微量含む。)



第233図 第379号住居跡出土遺物

第125表 第379号住居跡出土遺物観察表

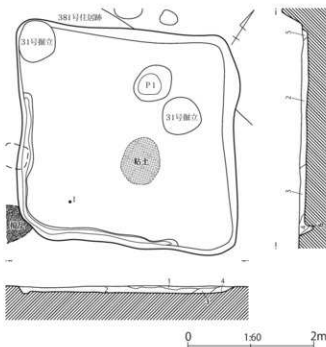
1	胴張甕	A. 口縁部径(22.0)。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面笠ナデ。D. 白色粒。E. 内外一明茶褐色。F. 口縁部1/5。H. 覆土中。
2	大形鉢	A. 口縁部径12.8。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面笠ナデの後ケズリ、内面笠ナデ。D. 白色粒。E. 内外一茶褐色。F. 口縁部1/2。H. 覆土中。
3	胴張甕	A. 底部径7.2。B. 粘土組織み上げ。C. 胴部外面ケズリ、内面笠ナデ。底部外面ケズリ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 外一明茶褐色、内一淡褐色。F. 下半のみ。G. 胴部外面に黒痕あり。H. P1上面。
4	土 錘	A. 長さ3.5、最大径1.1、重さ3.7g。B. 手摺ね。C. ナデ。D. 白色粒。E. 外一淡褐色。F. 完成。H. 覆土中。

## 第380号住居跡（第234図、写真図版110）

H地点調査区西側の中央付近に位置する。重複する第31号掘立柱建物跡と第381号住居跡に切られている。

平面形は、コーナー部が丸みを持つやや平行四辺形ぎみに歪んだ隅丸方形を呈している。規模は、北東～南西方向が3.55m、北西～南東方向が3.47mを測る。住居の北西側壁は、N-61° - Eの方向を向いている。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは10cmある。住居南西側と南東側壁の壁下には、壁溝が巡っている。床面は、ロームブロックを含む暗黄褐色土を平坦に埋め戻した貼床式である。住居中央部の床面上には粘土ブロックや粘土粒子の分布が見られたが、その性格は不明である。ピットは、1カ所検出されている。P1は、住居中央部の北寄りに位置する。55cm×65cmの楕円形を呈し、床面からの深さは52cmある。灰やカマドは検出されなかった。

遺物は、住居跡の覆土中から、土器の破片が少量出土しただけである。本住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土土器の様相から、古墳時代前期頃と思われる。



第234図 第380号住居跡

## 第380号住居跡土層説明

- 第1層：暗黄褐色土層（第381号住居跡の貼り床面。）  
 第2層：暗褐色土層（径1～4cmのロームブロック・ローム粒子を多量、径5cmの灰色粘土ブロックを微量含む。）  
 第3層：暗褐色土層（径2～4cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。）  
 第4層：暗褐色土層（径1～2cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子を微量含む。）  
 第5層：暗褐色土層（径0.5～3cmのロームブロック・ローム粒子を含む。）  
 第6層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含む。）



第235図 第380号住居跡出土遺物

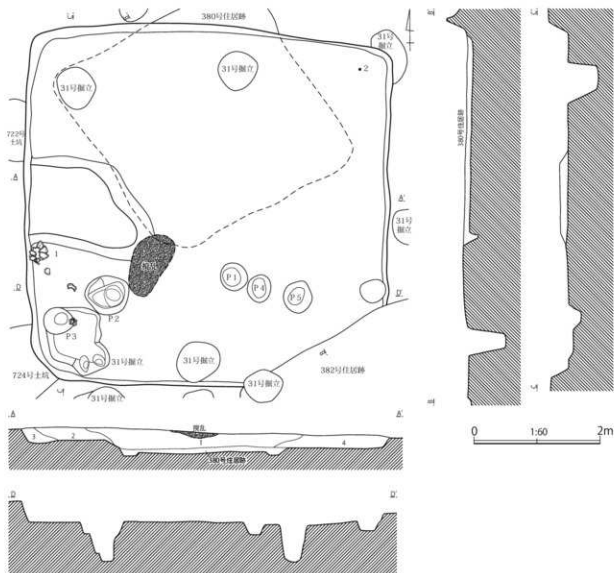
第126表 第380号住居跡出土遺物観察表

1	高 環	A. 口縁部径(12.0)。B. 粘土層積み上げ。C. 坏部内外面ミガキ。D. 白色粒。E. 内外一明茶褐色。F. 坏部2/3。H. 覆土中。
2	S字状口縁台付 甕	A. 台端部径(8.0)。B. 粘土層積み上げ。C. 台部外面ナデの後ハケ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一淡灰褐色。F. 台部1/4。H. 覆土中。
3	平 底 甕	A. 底部径5.0。B. 粘土層積み上げ。C. 胴部内外面ナデ。底部外面ナデ。D. 片岩粒、白色粒。E. 内外一明茶褐色。F. 底部1/2。H. 覆土中。

## 第381号住居跡 (第236図、写真図版111)

H地点調査区西側の中央付近に位置する。重複する第31・33号掘立柱建物跡や第302号住居跡に切られ、第380号住居跡を切っている。

平面形は、コーナー部が丸みをもつ隅丸方形を呈している。規模は、南北方向が5.71m、東西方向が5.80mを測る。住居の北側壁は、N-91°-Eの方向を向いている。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは30cmある。各壁の壁下には、壁溝は見られない。床面は、ロームブロックを多量に含む暗黄褐色土を平坦に埋め戻した貼床式である。全体的に堅く締まっている。住居西側の壁際には、床面と同じようなロームブロックを多量に含む暗黄褐色土を盛って平坦にした段状



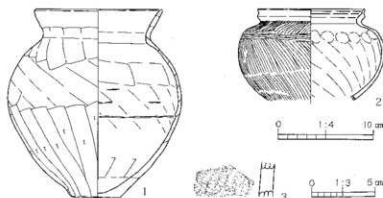
第236図 第381号住居跡

## 第381号住居跡土層説明

- 第1層：暗褐色土層 (径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含む。)  
 第2層：暗褐色土層 (径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を多量、黒褐色土を少量含む。)  
 第3層：暗褐色土層 (径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。)  
 第4層：暗褐色土層 (径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を多量、炭化粒子を微量含む。)

の高まりがみられる。ピットは、5カ所検出されている。この中のP3は、住居南西側コーナー部に位置することから、貯蔵穴の可能性も考えられる。90cm×85cmの隅丸方形ぎみの形態を呈し、床面からの深さは20cmある。P2とP5は、ほぼ住居の対角線上に位置することから、住居の上屋を支える4本主柱の柱穴の一部と考えられる。形態は、P2は65cm×70cmの不整形形、P5は50cm×45cmの楕円形を呈し、床面からの深さはP2が64cm、P5が60cmある。

遺物は、住居壁際の床面上や覆土中から、土器が出土している。本住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土土器の様相から、古墳時代前期と考えられる。



第237図 第381号住居跡出土遺物

第127表 第381号住居跡出土遺物観察表

1	平底甕	A. 口縁部径13.6、器高20.0、底部径5.2。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面笠ナデの後下半ケズリ、内面笠ナデ。底部外面ケズリ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 外一暗褐色、内一暗褐色。F. ほぼ完形。G. 外面は二次焼成を受けて荒れている。H. 床面直上。
2	S字状口縁小形鉢	A. 口縁部径(11.4)。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ハケ、内面指ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 外一明褐色、内一淡褐色。F. 口縁部1/4強。G. 胴部内面に指部圧痕を残す。H. 覆土中。
3	深鉢	B. 粘土組織み上げ。C. 外面縄文(L.R)、内面ナデ。D. 白色粒、無繊維。E. 内外一暗褐色。F. 胴部破片。G. 縄文前前半。H. 覆土中。

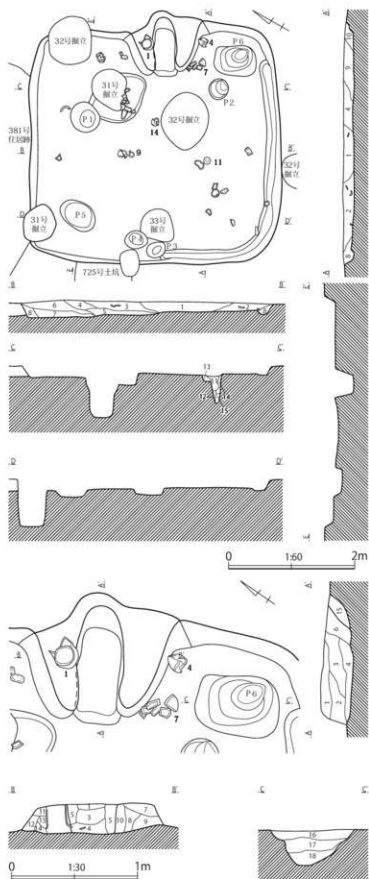
### 第382号住居跡（第238図、写真図版111・112）

H地点の調査区西側の南側寄りに位置する。重複する第31・32・33号掘立柱建物跡や第725号土坑に切れ、第381号住居跡を切っている。

平面形は、コーナー部の丸み強い隅丸方形を呈している。規模は、北東～南西方向が3.90m、北西～南東方向が4.05mを測る。住居の主軸方位は、N-60°-Eを向いている。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは25cmある。南東側から南西側の壁下の一部には、壁溝が巡っている。床面は、ロームブロックを含む暗褐色土を平坦に埋め戻した貼床式で、全体的にやや軟弱である。ピットは、6カ所検出されている。この中のP2とP5は、住居の対角線上に配置されていることから、住居の上屋を支える4本主柱の柱穴の一部の可能性が考えられる。それぞれ直径30cmの円形や長さ60cmの楕円形を呈し、床面からの深さは43cmと13cmある。P6は、いわゆる貯蔵穴と呼ばれるもので、カマド右側の住居東側コーナー部に位置する。平面形は、50cm×68cmの隅丸長方形を呈し、床面からの深さは40cmある。

カマドは、住居北東側壁のほぼ中央に位置し、住居の壁を若干掘り込んで直角に付設されている。規模は、全長106cm、最大幅138cmを測る。燃焼部は、大半が住居内にある。燃焼面は、住居の床面よりも一段低く平坦に作られている。奥壁は、緩やかに傾斜して煙道部に向かっている。袖は、灰色粘土やロームブロックを含む暗褐色土を、燃焼部の奥壁から廻して構築している。左側袖は、袖の中に伏せた土器の甕を埋め込んで芯にしている。袖の内面は、あまり焼けていない。煙道部は、すでに





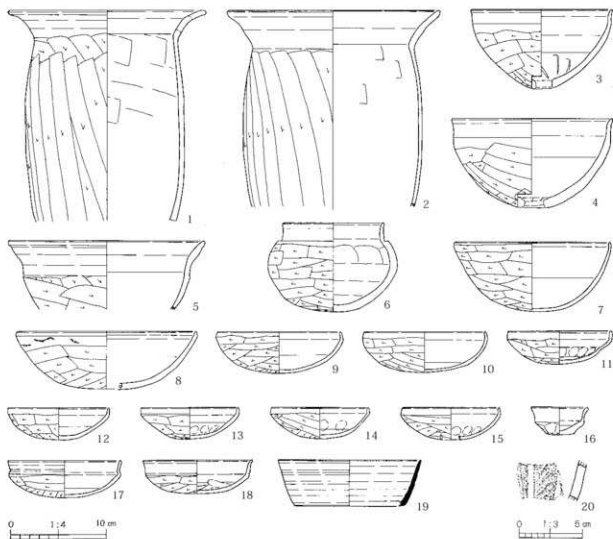
## 第382号住居跡土層説明

- 第1層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。）
- 第2層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロックを多量、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。）
- 第3層：暗褐色土層（径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子を微量含む。）
- 第4層：暗褐色土層（径1～4cmのロームブロックを多量含む。）
- 第5層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。）
- 第6層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロックを多量、焼土粒子を微量含む。）
- 第7層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を含む。）
- 第8層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子を微量含む。）
- 第9層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、径0.5cmのロームブロック・焼土粒子・炭化粒子を少量含む。）
- 第10層：暗褐色土層（径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を多量、径0.5cmの焼土ブロックを少量含む。）
- 第11層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、径0.5～1cmのロームブロックを少量、炭化物を微量含む。）
- 第12層：黄褐色土層（ローム粒子を主体に、径1cmのロームブロックを多量含む。）
- 第13層：黄褐色土層（径3cmのロームブロックを主体とする。）
- 第14層：黄褐色土層（径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子の混合土を主体に、炭化物を微量含む。）
- 第15層：黄褐色土層（径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子の混合土を主体に、炭化物を少量含む。）

第238図 第382号住居跡

## 第382号住居跡カマド・貯蔵穴土層説明

- 第1層：暗褐色土層 (径0.5cmのロームブロック・ローム粒子・焼土粒子・白色粒子を少量含む。)  
 第2層：暗褐色土層 (灰色粘土を多量、径0.5cmのロームブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を微量含む。)  
 第3層：暗褐色土層 (灰色粘土を多量、径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含む。)  
 第4層：暗褐色土層 (灰色粘土を多量、径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を中量、焼土粒子・炭化物を少量含む。)  
 第5層：灰色粘質土層 (径1cmの焼土ブロックを少量含む。)  
 第6層：灰色粘質土層 (径0.5～2cmの焼土ブロックを少量含む。)  
 第7層：暗褐色土層 (白色粒子・灰色粘土粒子を多量、径0.5cmのロームブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を少量含む。)  
 第8層：暗褐色土層 (灰色粘土粒子を多量、径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子・径0.5～1cmの焼土ブロックを少量、炭化粒子・白色粒子を微量含む。)  
 第9層：暗褐色土層 (径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子・灰色粘土粒子を多量、焼土粒子・白色粒子を微量含む。)  
 第10層：暗褐色土層 (灰色粘土粒子を多量、焼土粒子・炭化粒子を少量含む。)  
 第11層：暗褐色土層 (径0.5cmのロームブロック・ローム粒子・灰色粘土粒子を少量、炭化物を微量含む。)  
 第12層：暗褐色土層 (灰色粘土粒子を多量、ローム粒子・炭化物を微量含む。)  
 第13層：暗褐色土層 (径0.5～1cmの灰色粘土ブロックを少量、ローム粒子・炭化物を微量含む。)  
 第14層：暗褐色土層 (径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を少量、炭化物・径0.5cmの灰色粘土ブロックを微量含む。)  
 第15層：土層説明なし。  
 第16層：暗褐色土層 (径1cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子・炭化粒子を少量含む。)  
 第17層：暗褐色土層 (径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を多量、炭化粒子を少量含む。)  
 第18層：暗褐色土層 (径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。)



第239図 第382号住居跡出土遺物

削平されているため不明である。

遺物は、カマド周辺や住居跡の覆土中から、白鳳時代を主体とする土器の破片が多く出土している。本住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土土器の様相から、白鳳時代と考えられる。

第128表 第382号住居跡出土遺物観察表

1	長 胴 甕	A. 口縁部径20.8。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篋ナデ。D. 白色粒、黒色粒。E. 外一暗褐色、内一暗茶褐色。F. 上半のみ。H. カマド袖内。
2	長 胴 甕	A. 口縁部径22.6。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篋ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一淡褐色。F. 口縁部3/4。H. 覆土中。
3	小 形 甕	A. 口縁部径(15.0)。器高8.4。底部径1.8。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面篋ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 外一淡褐色、内一明褐色。F. 1/3。G. 底部焼成前穿孔。H. 覆土中。
4	小 形 甕	A. 口縁部径(17.0)。器高9.5。底部径3.5。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面篋ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 外一淡褐色、内一明褐色。F. 1/2。G. 底部焼成前穿孔。H. 覆土中。
5	鉢	A. 口縁部径(20.8)。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一淡褐色。F. 口縁部1/4弱。H. 覆土中。
6	広口短頸甕	A. 口縁部径(10.8)。器高9.5。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一明褐色。F. 1/2。G. 底部外面に黒斑あり。H. 床面付近。
7	鉢	A. 口縁部径16.4。器高7.4。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面丁寧ナデ。D. 黒色粒、白色粒。E. 内外一淡褐色。F. 3/4。H. 覆土中。
8	鉢	A. 口縁部径(19.0)。器高6.1。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後ケズリ、内面ナデ。D. 黒色粒、白色粒。E. 内外一淡褐色。F. 1/4。H. 覆土中。
9	杯	A. 口縁部径13.2。器高4.5。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 黒色粒、白色粒。E. 内外一淡褐色。F. ほぼ完形。H. 覆土中。
10	杯	A. 口縁部径(13.0)。器高4.4。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 黒色粒、白色粒。E. 内外一淡褐色。F. 1/2。H. 覆土中。
11	杯	A. 口縁部径11.0。器高3.5。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一淡褐色。F. 完形。G. 体部内面に指頭圧痕を残す。H. 床面付近。
12	杯	A. 口縁部径10.8。器高3.4。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 外一淡褐色、内一淡茶褐色。F. 1/2強。G. 体部外面に黒斑あり。H. 覆土中。
13	杯	A. 口縁部径(10.4)。器高3.3。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一淡褐色。F. 1/2強。G. 体部内面に指頭圧痕を残す。H. 床面付近。
14	杯	A. 口縁部径10.4。器高3.3。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一暗茶褐色。F. 2/3。G. 体部内面に指頭圧痕を残す。体部外面に黒斑あり。H. 覆土中。
15	杯	A. 口縁部径(10.4)。器高3.3。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 黒色粒、白色粒。E. 内外一茶褐色。F. 1/2強。G. 体部内面に指頭圧痕を残す。H. 床面付近。
16	小 形 杯	A. 口縁部径(6.0)。器高2.9。底部径(3.0)。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデ、底部外面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一暗茶褐色。F. 口縁部1/4。H. 覆土中。
17	模 倣 杯	A. 口縁部径(12.0)。器高4.0。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一淡褐色。F. 1/2。H. 覆土中。
18	模 倣 杯	A. 口縁部径(11.6)。器高3.5。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面指ナデ。D. 白色粒。E. 外一淡茶褐色、内一茶褐色。F. 1/3。H. 覆土中。
19	須 恵 器 杯	A. 口縁部径(15.2)。器高4.9。底部径(11.6)。B. ロコロ成形。C. 口縁部内外面回転ナデ。底部外面回転ケズリ。D. 白色粒。E. 内外一暗茶褐色。F. 1/2弱。H. 覆土中。
20	深 鉢	B. 粘土組織み上げ。C. 胴部外面覆土線区画内を縄文(RL)履帯がし施文、内面ナデ。D. 黒色粒、白色粒。E. 外一淡褐色、内一暗褐色。F. 胴部破片。G. 縄文時代中期加曾利EⅢ式。H. 覆土中。

### 第383号住居跡 (第240図、写真図版113)

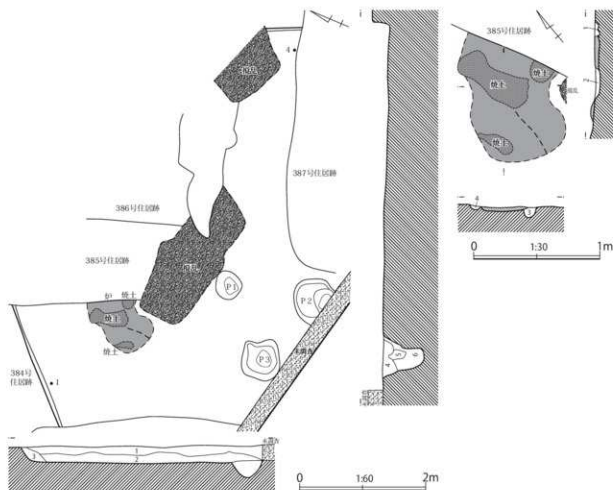
H地点調査区西側の南端に位置する。重複する第385～388号住居跡に切れ、第384号住居跡を切っている。住居跡の南側は調査区外にあるため、本住居跡の全容は不明である。

平面形は、不明である。規模は、北東～南西方向は3.30mまで、北西～南東方向は4.50mまで測れる。住居跡の北西側壁は、N-44°-Eの方向を向いている。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは26cmある。残存する各壁の壁下には、壁溝は見られない。床面は、ロームブロックを含む暗褐色土を平坦に埋め戻した貼床式である。住居中央部は比較的堅く締まっているが、

周辺部はやや軟弱である。ピットは、南側から3カ所検出されているが、それらの性格は不明である。

炉は、住居の南西側壁に寄った場所にある。炉の北東側を第385号住居跡に切られているため、全容は不明である。住居の床面を若干掘り窪めた地皿炉で、底面は部分的に赤色化している。

遺物は、住居跡の床面付近や覆土中から、古墳時代前期を主体とする土器の破片が出土している。本住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土土器の様相から、古墳時代前期と考えられる。



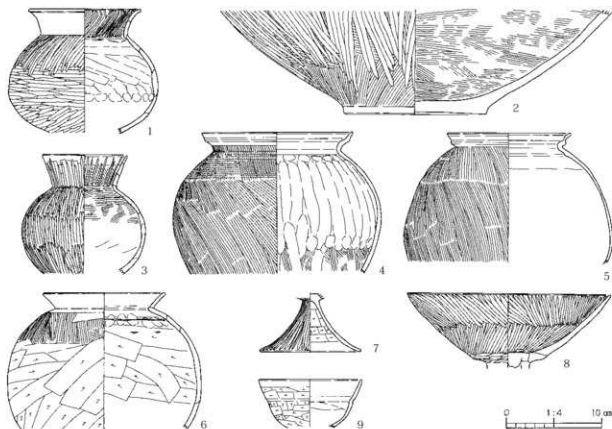
第240図 第383号住居跡

#### 第383号住居跡土層説明

- 第1層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、浅間山系A軽石・ロームブロック・ローム粒子・焼土粒子を少量含む。）  
 第2層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を多量、浅間山系A軽石・焼土粒子を少量含む。）  
 第3層：暗褐色土層（浅間山系A軽石・ローム粒子・焼土粒子を少量含む。）  
 第4層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、径0.5～3cmのロームブロック・ローム粒子・黒褐色土を含む。粘性に富む。）  
 第5層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ロームブロック・ローム粒子を含む。粘性に富む。）  
 第6層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。粘性に富む。）

#### 第383号住居跡炉跡土層説明

- 第1層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ロームブロック・ローム粒子を多量含む。）  
 第2層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、ロームブロックを少量含む。）  
 第3層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を少量含む。）  
 第4層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を微量含む。）



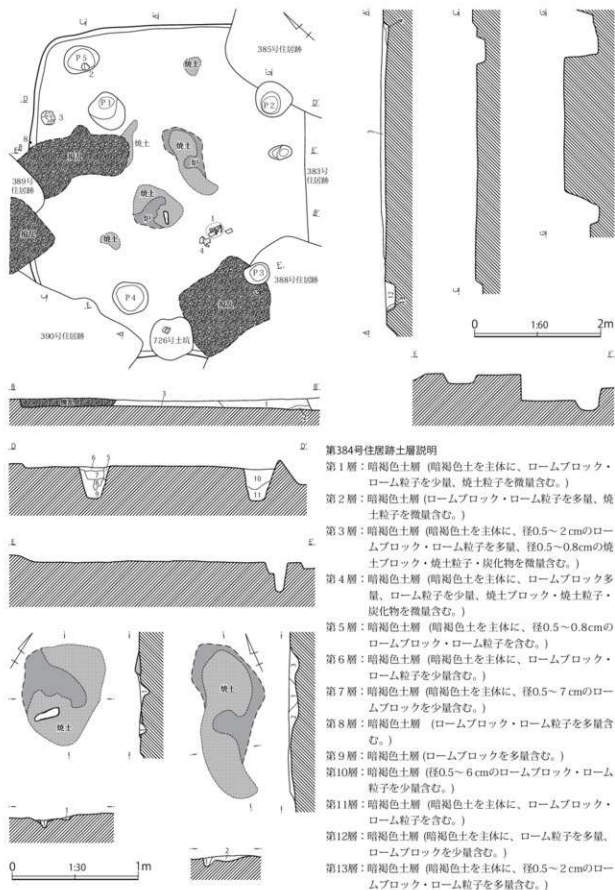
第241図 第383号住居跡出土遺物

第129表 第383号住居跡出土遺物観察表

1	広口壺	A. 口縁部径11.8。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部外面ヨコナデ。内面ヨコナデの後ミガキ。胴部外面ミガキ。内面上半笠ナデ・下半丁寧ナデ。D. 白色粒。E. 内外一淡褐色。F. 上半2/3。H. 床面付近。
2	大形壺	A. 底部径15.2。B. 粘土組織み上げ。C. 胴部外面ハケの後ミガキ。内面ハケ。底部外面ミガキ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 内外一茶褐色。F. 底部のみ。H. 覆土中。
3	小形壺	A. 口縁部径9.0。B. 粘土組織み上げ。C. 口唇部内外面ヨコナデ。口縁部外面ケズリの後雑なミガキ。内面ハケの後雑なミガキ。胴部外面ハケの後ミガキ。内面ナデの後上半ハケ。D. 白色粒。E. 内外一暗褐色。F. 1/3。H. 覆土中。
4	S字状口縁台付壺	A. 口縁部径(16.0)。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ハケ。内面ハケの後上半指ナデ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 外一淡黄褐色、内一暗褐色。F. 上半1/4強。H. 床面付近。
5	S字状口縁台付壺	A. 口縁部径(13.0)。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ハケ。内面ナデ。D. 白色粒。E. 外一淡褐色、内一暗褐色。F. 上半1/4。H. 覆土中。
6	甕	A. 口縁部径(13.0)。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ハケの後ケズリ。内面ナデの後上半ケズリ。D. 白色粒。E. 内外一暗茶褐色。F. 上半1/4。H. 覆土中。
7	高杯	A. 脚端部径10.8。B. 粘土組織み上げ。C. 脚部外面ミガキ。内面ナデの後上半ケズリ。D. 白色粒。E. 内外一淡褐色。F. 脚部1/2。G. 脚部外面に赤彩を施す。H. 覆土中。
8	高杯	A. 口縁部径(21.6)。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ミガキ。杯部外面ミガキ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一明茶褐色。F. 杯部1/4。H. 覆土中。
9	小形浅鉢	A. 口縁部径(11.0)。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデの後外面ケズリ。体部外面ケズリ。内面ナデ。D. 白色粒。E. 外一淡褐色、内一明茶褐色。F. 口縁部1/4。H. 覆土中。

## 第384号住居跡(第242図、写真図版114)

H地点調査区西側の南側に位置する。重複する第383・385・388・389・390号住居跡や第726号土坑に切られている。住居跡の上は、住居の床面近くまで削平されているため、遺構の遺存状態はあまり良好とは言えない。



第242図 第384号住居跡

## 第384号住居跡炉跡1土層説明

第1層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含む。）

## 第384号住居跡炉跡2土層説明

第1層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、径0.5～3cmの焼土ブロックを少量含む。）

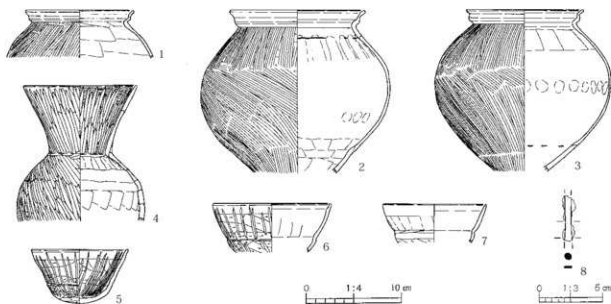
第2層：褐色土層（径0.5～4cmのロームブロック・ローム粒子を含む。）

第3層：褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を含む。）

平面形は、残存する部分から推測すると、コーナー部が丸みをもつ隅丸方形を呈していたと思われる。規模は、北東～南西方向が5.30m、北西～南東方向は4.40mまで測れる。住居の主軸方位は、N-128°-Wを向いている。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは15cmある。残存する各壁下には、壁溝は見られない。床面は、ロームブロックを含む暗黄褐色土を平坦に埋め戻した貼床式である。住居中央部は比較的堅く締まっているが、周辺部はやや軟弱である。ピットは、5カ所検出されている。この中のP1～P3は、住居の対角線上に位置すると思われることから、住居の上屋を支える4本主柱の柱穴の一部と推測される。長さ40cm～60cmの楕円形や不整形を呈し、床面からの深さは51cm～54cmある。

炉は、住居中央部に2カ所ある。いずれも住居の床面を若干掘り窪めた地皿炉で、底面は部分的に赤色化している。西側の炉には、炉の南東側寄りに長さ22cmの棒状の炉石が設置されている。

遺物は、住居中央部や壁際の床面付近から、土器が出土している。土器以外では、棒状の鉄器の破片(No8)が覆土中から出土している。本住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土土器の様相から、古墳時代前期と考えられる。



第243図 第384号住居跡出土遺物

第130表 第384号住居跡出土遺物観察表

1	S字状口縁台付裏	A.口縁部径(11.4)。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ハケ、内面麗ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一淡褐色。F.口縁部3/4。H.床面付近。
2	S字状口縁台付裏	A.口縁部径14.4。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後ハケ、内面ナデ。D.片岩粒、白色粒。E.外一暗褐色、内一暗茶褐色。F.台面欠損。H.床面付近。

3	S字状口縁台付甕	A.口縁部径12.4。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ハケ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一暗褐色。F.1/2。H.床面付近。
4	中形直口甕	A.口縁部径(12.0)。B.粘土組織み上げ。C.口縁部外面ミガキ、内面ハケの後ミガキ。胴部外面ケズリの後ミガキ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一暗茶褐色。F.上半1/2。H.床面付近。
5	小形浅鉢	A.口縁部径10.2。器高5.7。B.粘土組織み上げ。C.口縁部外面ヨコナデ・ナデの後雑なミガキ。胴部体ケズリの後雑なミガキ、内面ナデの後雑なミガキ。D.白色粒。E.内外一暗茶褐色。F.完形。H.覆土中。
6	小形浅鉢	A.口縁部径(10.6)。B.粘土組織み上げ。C.口縁部・体部外面ケズリの後雑なミガキ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一暗褐色。F.口縁部1/3。H.覆土中。
7	小形浅鉢	A.口縁部径(11.0)。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後下平ケズリ、内面ナデ。D.白色粒。E.内外一暗褐色。F.口縁部1/4。H.覆土中。
8	棒状鉄製品	A.残存長3.7、幅1.1、厚さ0.5、重さ2.71g。B.鍛造。D.鉄製。F.破片。H.覆土中。

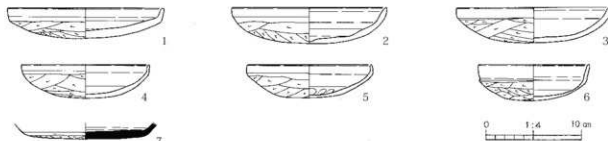
### 第385号住居跡 (第245図、写真図版116)

H地点調査区西側の南寄りに位置する。重複する第386号住居跡に切れ、第383号住居跡と第384号住居跡を切っている。住居跡の南東側壁を後世の掘乱によって切られているため、本住居跡の全容は不明である。

平面形は、残存する部分と主柱穴の位置から推測すると、コーナー部が丸みを持つ隅丸方形を呈していたと思われる。規模は、北東～南西方向が4.90m、北西～南東方向は4.35mで測れる。住居の主軸方位は、N-23°-Wを向いている。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは20cmある。検出された各壁の壁下には、壁溝が巡っている。床面は、ロームブロックを含む暗黄褐色土を平坦に埋め戻した貼床式で、全体的に硬く締まっている。ピットは、4カ所検出されている。P1～P4は、P3とP4が若干ずれているが、ほぼ住居の対角線上に配置されていることから、住居の上屋を支える4本主柱の柱穴と考えられる。長さ45cm～65cmの円形や楕円形を呈し、床面からの深さは44cm～50cmある。

カマドは、住居北西側壁のほぼ中央に位置し、住居の壁を掘り込んで直角に付設されている。規模は、全長96m、最大幅108mを測る。燃焼部は、奥壁側半分が住居外にある。燃焼面は、住居の床面よりも若干低く、奥壁に向かってやや傾斜して作られている。奥壁は、垂直ぎみに立ち上がっている。袖は、黄橙色粘土を含む暗褐色土を、住居の壁に直接貼り付けて構築している。煙道部は、すでに削平されているため不明である。

遺物は、住居跡の覆土中から、白鳳時代を主体とする土師器や須恵器が出土している。本住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土土器の様相から、白鳳時代と考えられる。

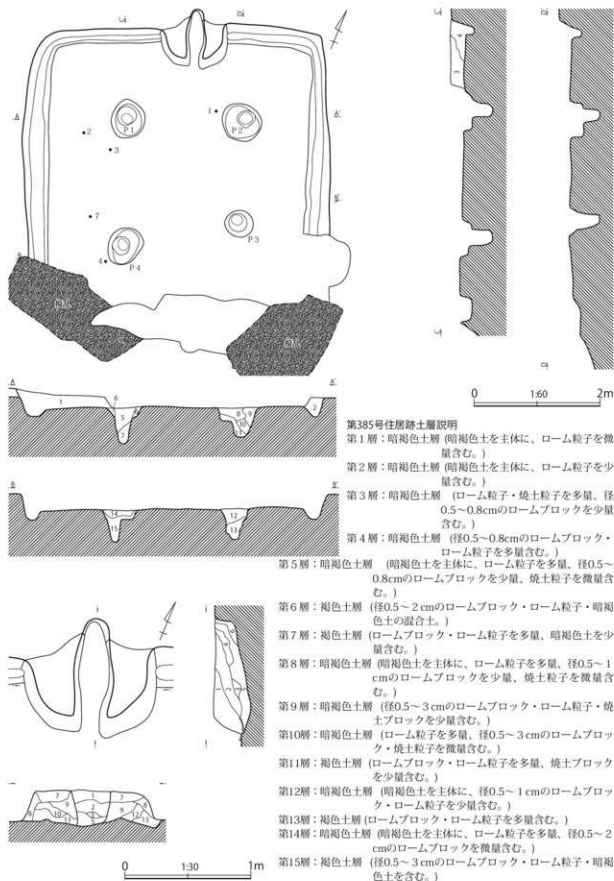


第244図 第385号住居跡出土遺物

第131表 第385号住居跡出土遺物観察表

1	皿	A.口縁部径16.6。器高3.2。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後ケズリ、内面ナデ。D.白色粒。E.内外一淡茶褐色。F.2/3。H.覆土中。
---	---	---





第245図 第385号住居跡

## 第385号住居跡カマド土層説明

- 第1層：暗褐色土層（黄棕色粘土・暗褐色土の混合土を主体に、ローム粒子・径0.5～0.8cmの焼土ブロック・焼土粒子・炭化物を少量含む。）
- 第2層：暗褐色土層（径0.5～0.8cmのロームブロック・ローム粒子・黄褐色粘土を少量含む。）
- 第3層：明赤褐色土層（焼土ブロックを主体とする。）
- 第4層：明赤褐色土層（径0.5～5cmの焼土ブロックを主体に、黄褐色粘土を含む。）
- 第5層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を多量、黄褐色土を少量含む。）
- 第6層：黄褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を主体に、焼土粒子を少量含む。）
- 第7層：暗褐色土層（黄褐色粘土・暗褐色土の混合土。）
- 第8層：暗褐色土層（黄棕色土・暗褐色土の混合土。）
- 第9層：暗褐色土層（黄棕色粘土・暗褐色土の混合土を主体に、径0.5～2cmの焼土ブロック・焼土粒子を多量、径1cmのロームブロックを少量含む。）
- 第10層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を含む。）
- 第11層：暗褐色土層（黄棕色粘土・暗褐色土の混合土を主体に、ロームブロック・焼土ブロック・焼土粒子を少量含む。）
- 第12層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を少量含む。）
- 第13層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を多量含む。）

2	皿	A.口縁部径16.6、器高3.8。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一淡茶褐色。F.1/2。H.覆土中。
3	皿	A.口縁部径16.4、器高3.7。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一淡茶褐色。F.2/3。H.覆土中。
4	杯	A.口縁部径13.6、器高3.6。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一淡茶褐色。F.1/3。H.覆土中。
5	杯	A.口縁部径13.4、器高3.5。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一明褐色。F.ほぼ完形。H.覆土中。
6	模倣杯	A.口縁部径11.8、器高3.9。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一淡褐色。F.2/3。H.覆土中。
7	須恵器杯	A.底部径13.6。B.ロクロ成形。C.体部内外面回転ナデ。底外面手持筒ケズリの後外周回転ケズリ、内面細いカキメ状の回転ナデ。D.白色粒。E.内外一暗灰色。F.底部1/3。H.覆土中。

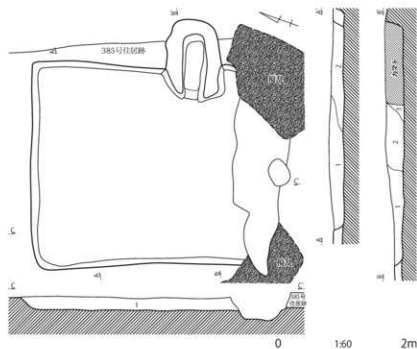
## 第386号住居跡（第246図、写真図版116）

H地点調査区西側の南寄りに位置する。重複する第383・384・385号住居跡を切っている。

平面形は、コーナー部が丸みを持つ隅丸長方形を呈している。規模は、北東～南西方向が3.23m、北西～南東方向が3.45mを測る。住居の主軸方位は、N-70°-Eを向いている。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは22cmある。残存する各壁の壁下には、壁溝は見られない。床面は、ロームブロックを含む暗黄褐色土を平坦に埋め戻した貼床式である。ピットは、検出されていない。

カマドは、住居北東側壁の中央やや東側コーナー部寄りに位置し、住居の壁を掘り込んでほぼ直角に付設されている。規模は、全長128m、最大幅92mを測る。燃焼部は、奥壁側半分が住居外にある。燃焼面は、住居の床面よりも一段低く、ほぼ平坦に作られている。奥壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、煙道部に向かっている。袖は、黄棕色粘土やロームブロックを含む暗褐色土を、燃焼部奥壁から廻して構築している。煙道部は、すでに削平されているため不明である。

遺物は、住居跡の覆土中から、白鳳時代を主体とする土師器や須恵器の破片が少量出土している。本住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土土器の様相から、白鳳時代と考えられる。



## 第386号住居跡土層説明

第1層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、ロームブロック・焼土粒子を少量含む。）

第2層：暗褐色土層（径0.5～0.8cmのロームブロックを多量含む。）

第3層：暗褐色土層（ロームブロック・焼土粒子を多量、焼土ブロックを少量含む。）

## 第386号住居跡カマド土層説明

第1層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子・黄褐色粘土を多量、径1cmのロームブロック・径0.5～2cmの焼土ブロック・焼土粒子を少量含む。）

第2層：暗褐色土層（ローム粒子・径0.5～1cmの焼土ブロック・焼土粒子・黄褐色粘土を多量、ロームブロックを少量含む。）

第3層：暗褐色土層（黄褐色粘土・暗褐色土の混合土を主体に、焼土粒子を含む。）

第4層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子を少量含む。）

第5層：暗褐色土層（黄褐色粘土を多量含む。）

第6層：褐色土層（ロームブロック・ローム粒子・黄褐色粘土・暗褐色土の混合土を主体に、径0.5～1cmの焼土ブロック・焼土粒子を少量含む。）

第7層：暗褐色土層（黄褐色粘土・暗褐色土の混合土を主体に、ロームブロック・ローム粒子を含む。）

第8層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子・黄褐色粘土を多量、径0.5～1cmのロームブロック・径0.5～0.8cmの焼土ブロック・焼土粒子を少量含む。）

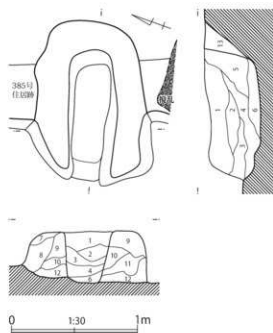
第9層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、ロームブロック・焼土ブロック・焼土粒子・黄褐色粘土を少量含む。）

第10層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子・焼土ブロック・焼土粒子・黄褐色粘土を少量含む。）

第11層：暗褐色土層（径0.5～1.5cmの焼土ブロック・焼土粒子を多量、ロームブロック・ローム粒子・黄褐色粘土を少量含む。）

第12層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を多量、焼土ブロック・焼土粒子・黄褐色粘土を少量含む。）

第13層：土層説明なし。



第246図 第386号住居跡



第247図 第386号住居跡出土遺物

第132表 第386号住居跡出土遺物観察表

1	須恵器 坏	A.口縁部径(17.2)。B.ロクロ成形。C.体部内外面回転ナデ。D.白色粒。E.内外一暗灰色。F.口縁部1/6。H.覆土中。
2	須恵器 坏	A.底部径(7.4)。B.ロクロ成形。C.体部内外面回転ナデ。底部外面静止糸切り。D.白色粒。E.内外一灰色。F.底部1/4。H.覆土中。
3	坏	A.口縁部径(10.8)。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後ケズリ。内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一明褐色。F.口縁部1/4。H.覆土中。
4	甕	B.粘土組織み上げ。C.頸部外面に柳葉状文(2連止)を右回りに施した後、胴部外面に柳葉状文を上から右回りに施す。D.赤色粒、白色粒。E.外一淡褐色、内一暗灰褐色。F.胴部破片。G.弥生時代後期轉式系。H.覆土中。

## 第387号住居跡(第248回、写真図版118)

H地点調査区中央部の南西端に位置する。重複する第383号住居跡を切っている。住居跡の南側半分は調査区外にあるため、本住居跡の全容は不明である。

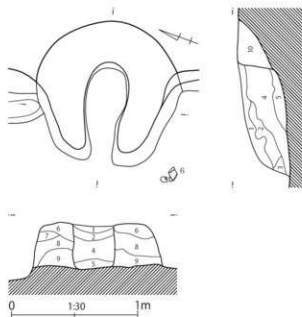
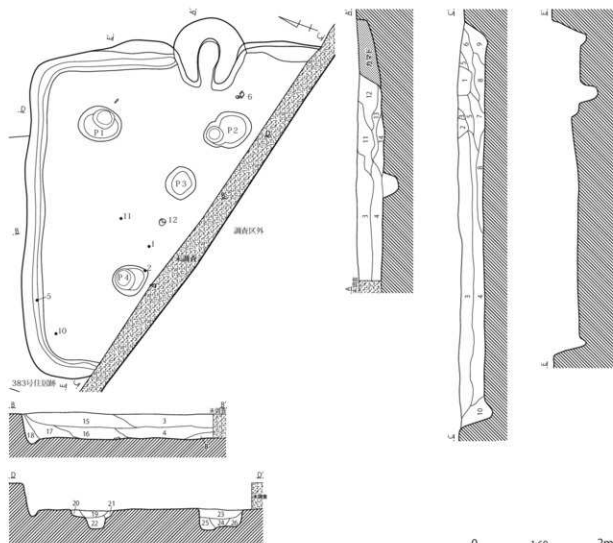
平面形は、調査区内で検出された部分から推測すると、コーナー部が丸みを持つ隅丸方形か隅丸長方形を呈していたと思われる。規模は、北東～南西方向が5.15m、北西～南東方向が4.35mを測る。住居の主軸方位は、N-73°-Eを向いている。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは40cmある。調査区内で検出された各壁の壁下には、壁溝が巡っている。床面は、ロームブロックを含む暗黄褐色土を平坦に埋め戻した貼床式で、全体的に堅く締まっている。ピットは、4カ所検出されている。この中のP1とP4は、住居の対角線上に位置し、柱痕も見られることから、支柱穴の可能性もある。

カマドは、住居北東側壁のほぼ中央に位置し、住居の壁を掘り込んでほぼ直角に付設されている。規模は、全長113cm、最大幅110cmを測る。燃焼部は、奥壁側が住居外にある。燃焼面は、住居の床面とほぼ同じ高さで、奥壁に向かってやや斜めに作られている。奥壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、煙道部に向かって傾斜している。袖は、暗褐色粘土を含む暗褐色土を、燃焼部奥壁から廻して構築している。煙道部は、すでに削平されているため不明である。

遺物は、住居跡の覆土中から、土師器や須恵器の破片が多く出土している。本住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土土器の様相から、白鳳時代と考えられる。

第133表 第387号住居跡出土遺物観察表

1	長胴甕	A.口縁部径(22.0)。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ヨコナデ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.内外一淡茶褐色。F.口縁部1/3。H.覆土中。
2	胴強甕	A.口縁部径(21.0)。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面淺ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一明褐色。F.口縁部1/3。H.覆土中。
3	皿	A.口縁部径(20.0)。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一淡茶褐色。F.口縁部1/4。H.覆土中。
4	皿	A.口縁部径(18.0)。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一明褐色。F.口縁部1/4強。H.覆土中。
5	坏	A.口縁部径(13.2)。器高5.0。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後ケズリ、内面ナデ。D.白色粒。E.内外一淡茶褐色。F.1/2弱。H.覆土中。
6	坏	A.口縁部径(13.6)。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後ケズリ、内面ナデ。D.白色粒。E.内外一淡茶褐色。F.口縁部1/2。H.覆土中。
7	坏	A.口縁部径12.6。器高3.2。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ヨコナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一明褐色。F.1/2弱。H.覆土中。
8	坏	A.口縁部径11.6。器高3.2。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ヨコナデ。D.白色粒。E.内外一明褐色。F.1/2。H.覆土中。
9	坏	A.口縁部径(16.2)。器高3.2。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ヨコナデ。D.白色粒。E.内外一明褐色。F.1/2。H.覆土中。
10	坏	A.口縁部径10.4。器高3.2。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一淡茶褐色。F.2/3。G.体部外面に黒斑あり。H.覆土中。



## 第387号住居跡土層説明

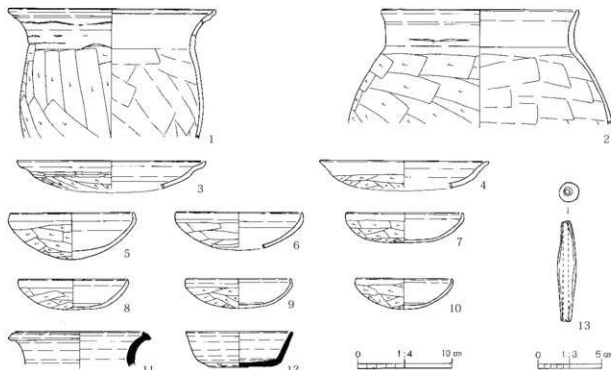
- 第1層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、浅間山系A軽石・ロームブロック・ローム粒子を少量含む。）
- 第2層：暗褐色土層（浅間山系A軽石・径0.5～1cmのローム粒子を少量含む。）
- 第3層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、径0.5～2cmのロームブロックを少量含む。）
- 第4層：暗褐色土層（ローム粒子を少量、ロームブロックを微量含む。）
- 第5層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、ロームブロックを微量含む。）
- 第6層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を微量含む。）
- 第7層：暗褐色土層（ロームブロックを微量含む。）
- 第8層：暗褐色土層（黒褐色土・暗褐色土の混合土を主体に、径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を含む。）
- 第9層：暗褐色土層（径0.5～5cmのロームブロック・ローム粒子を含む。）
- 第10層：暗褐色土層（ローム粒子を多量含む。）
- 第11層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を多量含む。）

第248図 第387号住居跡

- 第12層：暗褐色土層（焼土ブロック・焼土粒子を多量、黄褐色粘土を少量含む。）  
 第13層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、径0.5～2cmのロームブロックを少量含む。）  
 第14層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を微量含む。）  
 第15層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、径2cmのロームブロックを微量含む。）  
 第16層：暗褐色土層（焼土ブロック・焼土粒子を多量、ローム粒子・黄褐色粘土を少量含む。）  
 第17層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、径0.5～2cmのロームブロックを微量含む。）  
 第18層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。）  
 第19層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、ロームブロックを少量含む。）  
 第20層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。）  
 第21層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を微量含む。）  
 第22層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を多量含む。）  
 第23層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、径0.5～0.8cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子・炭化物を少量含む。）  
 第24層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子・炭化物を少量含む。）  
 第25層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子・炭化物を少量含む。）  
 第26層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化物を少量含む。）

## 第387号住居跡カマド土層説明

- 第1層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、黄褐色粘土を多量、ローム粒子・焼土粒子を少量含む。）  
 第2層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、焼土ブロック・焼土粒子・黄褐色粘土を多量、ローム粒子少量含む。）  
 第3層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子・焼土ブロック・焼土粒子・黄褐色粘土を少量含む。）  
 第4層：黄褐色粘土層（黄褐色粘土を主体に、径0.5～1cmの焼土ブロック・焼土粒子を多量、暗褐色土を少量含む。）  
 第5層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子・焼土ブロック・焼土粒子・黄褐色粘土を微量含む。）  
 第6層：暗褐色土層（黄褐色粘土・暗褐色土の混合土を主体に、ローム粒子・径0.5～0.8cmの焼土ブロック・焼土粒子を多量含む。）  
 第7層：暗褐色土層（黄褐色粘土・暗褐色土の混合土を主体に、焼土粒子を含む。）  
 第8層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、焼土ブロック・焼土粒子を多量、黄褐色粘土を少量含む。）  
 第9層：暗褐色土層（焼土ブロック・焼土粒子・黄褐色粘土を多量含む。）  
 第10層：土層説明なし。



第249図 第387号住居跡出土遺物

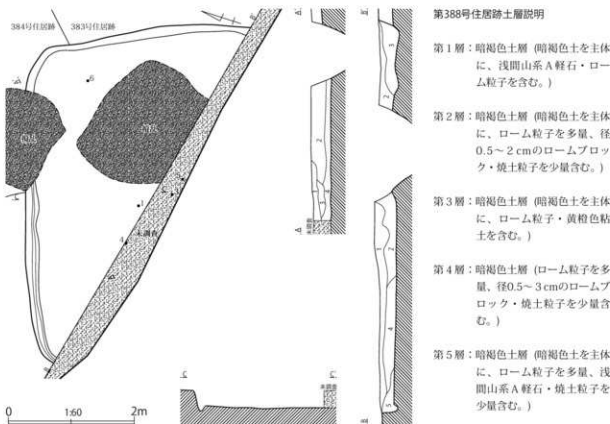
11	須 恵 器 口 壺	A.口縁部径(15.0)。B.ロクロ成形。C.口縁部内外面回転ナデ。D.白色粒。E.内外一黒灰色。F.口縁部1/4。G.口縁部内面に降灰による自然輪がかかる。H.覆土中。
12	須 恵 器 杯	A.口縁部径11.4、器高3.8、底部径6.4。B.ロクロ成形。C.体部内外面回転ナデ。底部外面回転遊ケズリ。D.白色粒、黒色粒。E.内外一灰色。F.1/2強。H.覆土中。
13	土 鉢	A.長さ7.9、最大幅1.5、重さ13.8g。B.手捏ね。C.ナデ。D.白色粒。E.外一暗茶褐色。F.完形。H.覆土中。

### 第388号住居跡 (第250図、写真図版119)

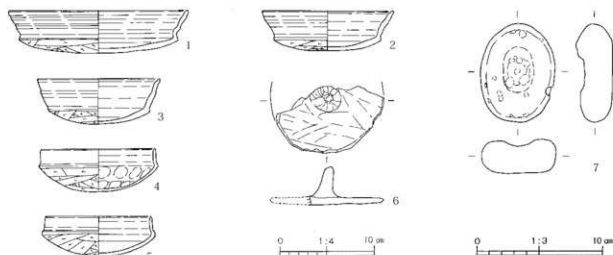
H地点調査区西側の南端に位置する。重複する第727号土坑と後世の攪乱に切られ、第383・384号住居跡を切っている。本住居跡の南側半分は調査区外にあるため、本住居跡の全容は不明である。

平面形は、検出された部分から推測すると、コーナー部が丸みをもつ隅丸方形か隅丸長方形を呈していたと思われる。規模は、北東～南西方向は5.00mまで、北西～南東方向は3.50mまで測れる。住居の北西側壁は、N-70°-Eの方向を向いている。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは35cmある。北西側壁の壁下には、壁溝が巡っている。床面は、ロームブロックを含む暗黄褐色土を平坦に埋め戻した貼床式である。ピットは、検出されなかった。

遺物は、住居跡の覆土中から、古墳時代後期後半を主体とする土器の破片が多く出土している。本住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土土器の様相から、古墳時代後期後半と考えられる。



第250図 第388号住居跡



第251図 第388号住居跡出土遺物

第134表 第388号住居跡出土遺物観察表

1	有段口縁環	A.口縁部径(19.0)、器高4.5。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.白色粒。E.内外一暗褐色。F.口縁部1/3。H.覆土中。
2	有段口縁環	A.口縁部径(14.0)、器高4.2。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.片岩粒、白色粒。E.内外一黒茶褐色。F.口縁部1/4。H.覆土中。
3	有段口縁環	A.口縁部径13.0、器高4.8。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.白色粒。E.内外一暗褐色。F.ほぼ完形。H.覆土中。
4	模倣環	A.口縁部径(12.2)、器高4.5。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.白色粒。E.内外一暗褐色。F.口縁部1/3。G.体部内面に指頭圧痕を残す。H.覆土中。
5	模倣環	A.口縁部径(11.2)、器高4.2。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.白色粒。E.外一暗褐色、内一暗茶褐色。F.1/2。G.体部外面に黒斑あり。H.覆土中。
6	蓋	A.口縁部径(12.0)、器高4.0。B.手捏ね。揃み部貼り付け。C.内外面丁寧ナデ。D.白色粒。E.外一淡褐色、内一暗褐色。F.1/2弱。H.覆土中。
7	凹石	A.長さ7.8、最大幅5.9、厚さ2.9、重さ70.3g。C.背面はよく磨れている。D.角閃石安山岩。F.完形。H.覆土中。

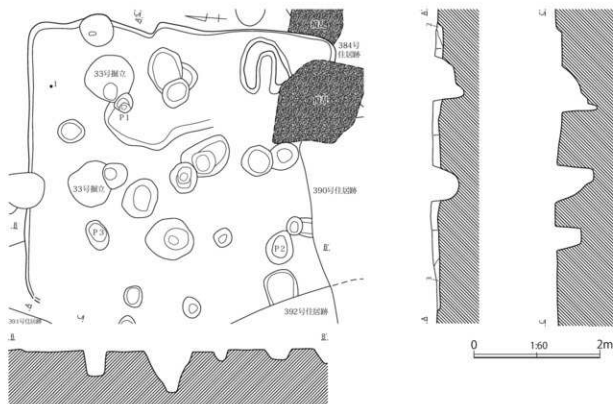
## 第389号住居跡 (第252図、写真図版119)

H地点調査区西側の南西端に位置する。重複する第390・392号住居跡に切れ、第384号住居跡を切っている。住居跡の北西側は第391号住居跡と接しているが、相互の新旧関係は不明である。住居跡の上面は、住居の床面近くまで強く削平されているため、遺構の遺存状態はあまり良好とは言えない。

平面形は、コーナー部が丸みをもつ隅丸方形を呈すると思われる。規模は、東西方向が4.39m、南北方向が4.94mを測る。住居の主軸方位は、N-87°-Eを向いている。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは14cmある。残存する各壁の壁下には、壁溝は見られない。床面は、ロームブロックを多量に含む暗黄褐色土を平坦に埋め戻した貼床式である。ピットは、住居跡内から多数検出されている。この中のP1~P3は、住居のほぼ対角線上に配置されていることから、住居の上屋を支える4本主柱の柱穴の一部と推測される。長さ30cm~55cmの不整形円形や楕円形を呈し、床面からの深さは、それぞれ55cm・17cm・37cmある。

カマドは、住居東側壁際の南東コーナー部寄りに位置し、住居の壁に接しないで壁から離れた内側にあり、いわゆるカマド出現期に見られる諸形態の一類型に類似した形態を呈している。規模は、全長90cm、最大幅85cmを測る。燃焼部は、住居の床面とほぼ同じ高さで、水平に作られている。袖は、





## 第389号住居跡土層説明

- 第1層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を少量、径5cmのロームブロック・径5cmの焼土ブロック・炭化物を微量含む。）  
 第2層：暗褐色土層（径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。）  
 第3層：黄褐色土層（ロームブロックを主体とする。）

## 第389号住居跡カマド土層説明

- 第1層：赤褐色土層（径0.5cmの焼土ブロック・焼土粒子を多量、径0.5cmのロームブロック・ローム粒子・黒褐色土を少量含む。）  
 第2層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化物を微量含む。）  
 第3層：暗褐色土層（径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を多量、炭化粒子を微量含む。）

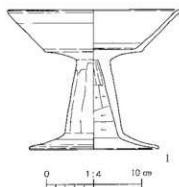
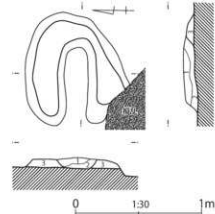
## 第252図 第389号住居跡

ロームブロックを多量に含む暗褐色土を、燃焼部と壁から馬蹄形に巡らせて構築している。煙道部の存在及びその形態については不明である。

遺物は、覆土中から土器の破片が少量出土しただけである。本住居跡の時期は、遺構の重複関係やカマドの形態及び出土土器の様相から、古墳時代中期後半頃と考えられる。

## 第135表 第389号住居跡出土遺物観察表

1	高	環	A. 口縁部径(18.4)、器高14.8、脚端部径13.8。B. 粘土積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。環部内外面ナデ。脚柱部外面ケズリの後ナデ、内面ケズリ。脚端部内外面ヨコナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一茶褐色。F. 1/2。H. 覆土中。

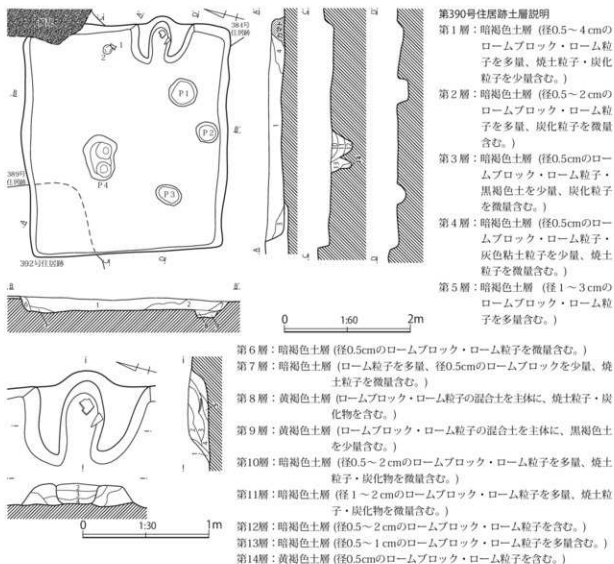


第253図 第389号住居跡出土遺物

## 第390号住居跡 (第254図、写真図版120)

H地点調査区西側の南西端に位置する。重複する第384・389・392号住居跡を切っている。

平面形は、コーナー部が丸みを持つ隅丸長方形を呈している。規模は、東西方向が3.65m、南北方向が3.35mを測る。住居の主軸方位は、N-75°-Eを向いている。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは35cmある。各壁の壁下には、壁溝は見られない。床面は、ロームブロック多量を含む暗黄褐色土を平坦に埋め戻した貼床式である。住居中央部は堅く締まっているが、周辺



## 第254図 第390号住居跡

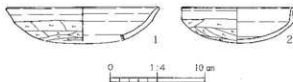
## 第390号住居跡カマド土層説明

- 第1層：暗褐色土層 (径0.5 cmのロームブロック・ローム粒子・黒褐色土を多量含む。)
- 第2層：暗褐色土層 (径0.5～3 cmのロームブロック・ローム粒子・焼土粒子・黒褐色土を多量、径1 cmの焼土ブロックを少量含む。)
- 第3層：暗褐色土層 (径0.5 cmのロームブロック・ローム粒子・焼土粒子・黒褐色土を多量含む。)
- 第4層：暗褐色土層 (黒褐色土を多量、径0.5～1 cmのロームブロック・ローム粒子・焼土粒子を少量含む。)
- 第5層：暗褐色土層 (黒褐色土を多量、径0.5 cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含む。)
- カマド袖：土層説明なし。

部はやや軟弱である。ピットは、4カ所検出されている。この中のP1とP3は、ほぼ住居の対角線上にあることから、住居の上屋を支える4本主柱の柱穴の可能性が考えられる。長さ45cm程度の円形や楕円形を呈し、床面からの深さはいずれも20cm程度ある。P2は、径37cmの円形を呈し、床面からの深さは10cmある。住居南側壁際の中央に位置することから、入口部の梯子穴の可能性もある。

カマドは、住居東側壁の中央やや南寄りに位置し、住居の壁を若干掘り込んでほぼ直角に付設されている。規模は、全長76cm、最大幅102cmある。燃焼部は、住居の床面と同じ高さで、水平に作られている。奥壁は、緩やかに立ち上がって煙道部に向かっている。袖は、暗灰色粘土ブロックを含む暗褐色土を、燃焼部の奥壁から廻って構築している。

出土遺物は、カマド内や住居跡の覆土中から、土器の破片が出土している。本住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土土器の様相から、白鳳時代と考えられる。



第255図 第390号住居跡出土遺物

第136表 第390号住居跡出土遺物観察表

1	皿	A.口縁部径16.2。B.粘土類積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ヨコナデ。D.白色粒。E.内外一淡茶褐色。F.口縁部1/4。H.床面付近。
2	模倣杯	A.口縁部径12.0、器高3.8。B.粘土類積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ヨコナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一明茶褐色。F.完形。H.床面付近。

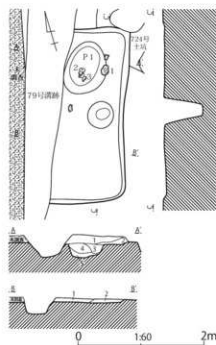
### 第391号住居跡（第256図、写真図版121）

H地点調査区西側の南西端に位置する。重複する第724号土坑と第79号溝跡に切られている。住居跡の南東側は第389号住居跡と接しているが、相互の新旧関係は不明である。住居跡の西側は調査区外にあるため、本住居跡の全容は不明である。

平面形は、検出された部分から推測すると、コーナー部がやや丸みをもつ隅丸方形か隅丸長方形を呈していたと思われる。規模は、南北方向が2.50m、東西方向は1.20mまで測れる。住居の東側壁は、N-19°-Eの方向を向いている。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは10cmある。検出された各壁の壁下には、壁溝は見られない。床面は、ロームブロックを含む暗黄褐色土を平坦に埋め戻した貼床式である。

ピットは、1カ所検出されている。P1は、住居北東側コーナー部付近に位置する。87cm×65cmの楕円形を呈し、床面からの深さは25cmある。上面からは、土器の破片が出土している。P1は、その位置や形態から見て、貯蔵穴の可能性が高いと思われる。

遺物は、P1の上面や覆土中から、土器の破片が出土している。本住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土遺物から、古墳時代前期と考えられる。



第256図 第391号住居跡

## 第391号住居跡土層説明

第1層：暗褐色土層（径0.5～1 cmのロームブロック・ローム粒子少量、焼土粒子・白色粒子を微量含む。）

第2層：暗褐色土層（径1～2 cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。）

第3層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、径0.5 cmのロームブロックを少量含む。）

第4層：暗褐色土層（径0.5～2 cmのロームブロック・ローム粒子を多量、黒褐色土を微量含む。）

第5層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、径3 cmのロームブロックを少量含む。）



第257図 第391号住居跡出土遺物

第137表 第391号住居跡出土遺物観察表

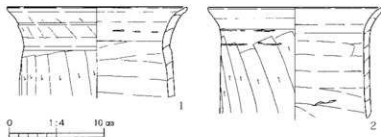
1	高	環	B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ミガキ。脚部外面ミガキ、内面ナデ。D.白色粒。E.内外一明茶褐色。F.口縁部と脚端部欠損。G.脚部円孔は縦2個1組でおそらく3カ所。H.覆土中。
2	器	台	A.口縁部径8.8。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。器受部内外面ミガキ。脚部外面ミガキ、内面上半ケズリ・下半ハケ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.内外一明褐色。F.上半のみ。G.脚部円孔は縦2個1組で3カ所。H.P 1上面。
3	器	台	A.口縁部径8.0。器高8.0。脚端部径11.2。B.粘土組織み上げ。C.口縁部・器受部内外面ミガキ。脚部外面ミガキ、内面上半ケズリ・下半ナデ。D.白色粒。E.内外一明茶褐色。F.器受部1/2欠損。G.脚部円孔は4カ所。H.P 1上面。

## 第392号住居跡（第259図、写真図版122）

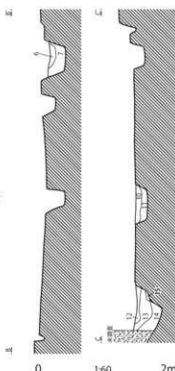
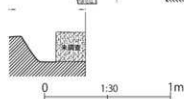
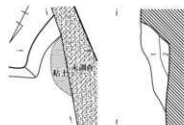
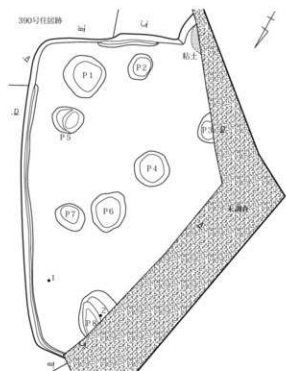
H地点調査区西側の南西端に位置する。重複する第390号住居跡に切られている。本住居跡の南西側は調査区外にあるため、本住居跡の全容は不明である。

平面形は、コーナー部の丸み強い隅丸方形か隅丸長方形を呈していたと思われる。規模は、南東～北西方向は5.15mまで、北東～南西方向は3.25mまで測れる。住居の主軸方位は、N-151° - Eを向いている。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは41cmある。検出された各壁の壁下には、壁溝が巡っている。床面は、ロームブロックを多量に含む暗黄褐色土を平坦に埋め戻した貼床式である。住居中央部は比較的強く締まっているが、周辺部はやや軟弱である。ピットは、8カ所検出されているが、住居との関係は不明である。

カマドは、住居南東側壁の中央付近に、壁を掘り込んで直角に付設されている。調査区内で検出されたのは、カマドの半分だけであるため、カマドの全容は不明である。規模は、長さは52cmまで、幅は34cmまで測れる。燃焼部は、奥壁側の半分が住居の壁外にある。燃焼面は、住居の床面とほぼ同じ高さで平坦に作られており、底面には粘土の分布が見られる。奥壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、煙道部に向かっている。袖は、見られなかった。煙道部は、すでに削平されているため不明である。



第258図 第392号住居跡出土遺物



## 第392号住居跡土層説明

- 第1層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子・焼土粒子・白色粒子を少量含む。）
- 第2層：暗褐色土層（径0.5～3cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。）
- 第3層：暗褐色土層（径0.5～3cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。）
- 第4層：暗褐色土層（径0.5～4cmのロームブロック・ローム粒子を多量、径1cmの焼土ブロック・黒褐色土を微量含む。）

- 第5層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子・黒褐色土を少量含む。）
- 第6層：暗褐色土層（径1～2cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。）
- 第7層：暗褐色土層（径0.5～3cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。）
- 第8層：暗褐色土層（径2～3cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。）
- 第9層：暗褐色土層（径0.5～3cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。）
- 第10層：暗褐色土層（径1～2cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子を微量含む。）
- 第11層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。）
- 第12層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。）
- 第13層：暗褐色土層（0.5～3cmのロームブロック・ローム粒子を多量、黒褐色土を少量、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。しまりは無い。）
- 第14層：黄褐色土層（ローム粒子を主体とする。）
- 第15層：灰褐色土層（径1～2cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。）

## 第259図 第392号住居跡

## 第392号住居跡カマド土層説明

第1層：暗褐色土層 土層説明なし。

第2層：暗褐色土層 土層説明なし。

## 第138表 第392号住居跡出土遺物観察表

1	長 胴 甕	A.口縁部径(19.2)。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篋ナデ。D.片岩粒、白色粒。E.外一淡茶褐色、内一黒色。F.口縁部1/3。H.覆土中。
2	長 胴 甕	A.口縁部径(18.6)。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篋ナデ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.内外一茶褐色。F.口縁部1/4。H.P.8内。

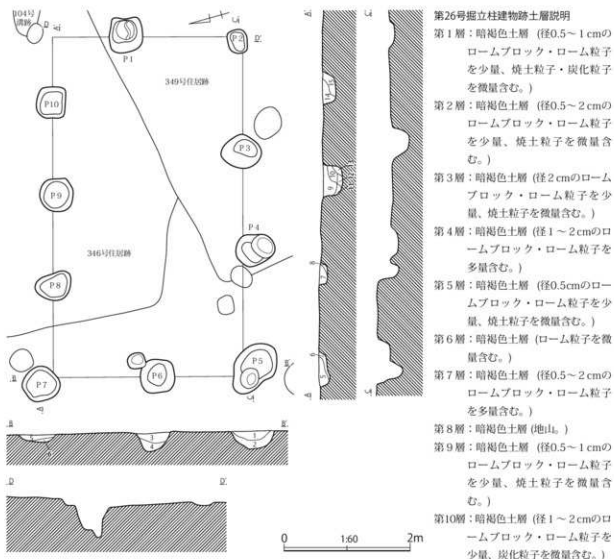
遺物は、住居跡の覆土中から土器が出土している。土器以外では、覆土中から長さ3 cm程度の鉄滓(重さ11.2g)が1点出土している。本住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土土器の様相から、古墳時代後期後半頃と考えられる。

## 2. 掘立柱建物跡

### 第26号掘立柱建物跡 (第260図、写真図版123)

H地点調査区東側の北側寄りに位置する。重複する第346・349号住居跡を切っている。

建物跡の形態は、南北方向に長い長方形を呈する側柱式と推測される。南北方向は東西両側とも2間で対応しているが、東西方向は北側柱穴列が4間、南側柱穴列が3間で間数が異なっており、建物



第260図 第26号掘立柱建物跡

跡とするには構造的にやや無理があるかもしれない。規模は、東西方向が5.40m、南北方向が3.10mを測る。建物跡の長軸方位は、 $N-104^{\circ}-E$ を向いている。

柱通りは、東西・南北両方向とも比較的良く、直線状に並んでいる。柱心間は、南北方向は東側柱穴列は不揃いのようなようであるが、西側柱穴列は1間1.55mの等間隔である。1間×1間の平面形は、建物跡の北側半分が正方形、南側半分が長方形を呈している。

柱穴は、隅丸方形・楕円形・不正円形など様々の形態が見られるが、規模は長さ50cm～60cm程度のもので主体である。確認面からの深さは、12cm～42cmある。柱穴覆土は、ロームブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子などを含む暗褐色土である。覆土の堆積状況が、柱痕を残さず自然堆積を示すものが大半であることから、本建物の柱は抜き取られた可能性が高いと思われる。

遺物は、柱穴覆土中から古墳時代前期～平安時代前期までの土器の小破片が少量出土しただけである。本建物跡の時期は、明確にはできないが、建物跡であるとすれば建物の長軸方向が東側の第101号溝跡と同じであることや、第102号溝跡と直交していることから、それらの溝跡によって区画された屋敷に關係するものと推測される。

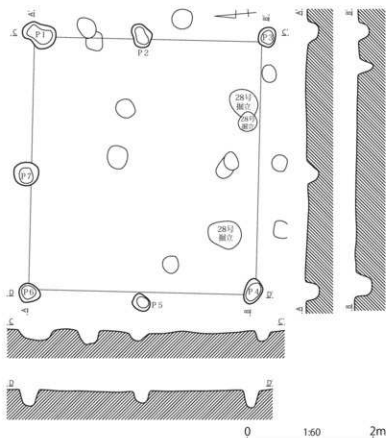
#### 第27号掘立柱建物跡（第261図、写真図版123）

H地点調査区中央部の北側寄りに位置する。第28号掘立柱建物跡と重複關係にあるが、相互の新旧關係は不明である。

建物跡の形態は、東西方向2間、南北方向2間の、東西方向に若干長い長方形を呈する側柱式建物である。規模は、東西方向が4.00m、南北方向が3.60mを測る。建物跡の長軸方位は、 $N-96^{\circ}-E$ を向いている。

柱通りは、東西・南北両方向とも比較的良く、ほぼ直線状に並んでいる。柱心間は、南北方向は1間1.80mの等間隔である。東西方向は、北側柱穴列が1間2.00mの等間隔であるが、南側柱穴列は中心の柱穴が見られないため不明である。1間×1間の平面形は、東西方向がやや長い長方形を呈している。

柱穴は、長さ30cm～40cm程度の円形や楕円形を呈し、確認面からの深さは16cm～28cmある。



第261図 第27号掘立柱建物跡

遺物は、柱穴覆土中から古墳時代前期～平安時代前期までの土師器の小破片が少量出土しただけである。本建物跡の時期は、明確にはできないが、建物跡や柱穴の形態からすると、中世以降の可能性が高いと思われる。

#### 第28号掘立柱建物跡（第262図、写真図版123）

H地点調査区中央部の中央付近に位置する。重複する第663・670号土坑に切られている。第27・29号掘立柱建物跡とも重複関係にあるが、相互の新旧関係は不明である。

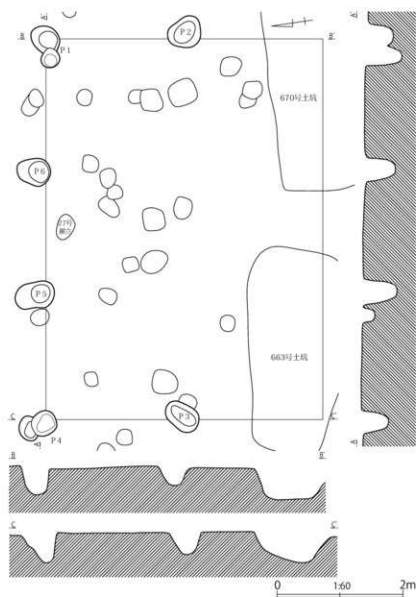
建物跡の形態は、東西方向3間、南北方向がおそらく2間と推測される東西方向に長い長方形を呈する側柱式建物のようなものである。

規模は、東西方向が6.00m、南北方向は不明である。建物跡の長軸方位は、 $N-97^{\circ}-E$ を向いている。

柱通りは、東西・南北両方向とも比較的良く、ほぼ直線状に並んでいる。柱心間は、東西方向は1間2.00mの等間隔で、南北方向は北側の1間が2.20mである。1間×1間の平面形は、ほぼ正方形を呈している。

柱穴は、長さ41cm～65cm程度の楕円形を呈するものが多く、確認面からの深さは30cm～60cmある。

遺物は、柱穴の覆土中から古代の土器の小破片が少量出土しただけである。本建物跡の時期は、明確にはできないが、建物跡の長軸方向が東側の第26号掘立柱建物跡とほぼ同じ方向であることから、第26号掘立柱建物跡と同じ層敷を構成する建物群の一つである可能性もある。



第262図 第28号掘立柱建物跡



### 第29号掘立柱建物跡 (第263図、写真図版123)

H地点調査区中央部の中央付近に位置する。重複する第654・659・663号土坑に切られ、第343号住居跡を切っている。第28号掘立柱建物跡とも重複関係にあるが、相互の新旧関係は不明である。

建物跡の形態は、東西方向が2間、南北方向が1間の東西方向に長い長方形を呈する側柱式建物と推測される。規模は、東西方向が5.20m、南北方向は4.00mまで測れる。建物跡の長軸方位は、 $N-94^{\circ}-E$ を向いている。

柱通りは、東西方向の北側柱穴列のP1・P4・P5は直線状に並び、南側柱穴列のP2とP3はいずれも直角の位置に配置されている。柱心間は、東西方向が1間2.60mの等間隔で、南北方向は1間4.00mである。1間×1間の平面形は、南北方向に長い長方形を呈している。

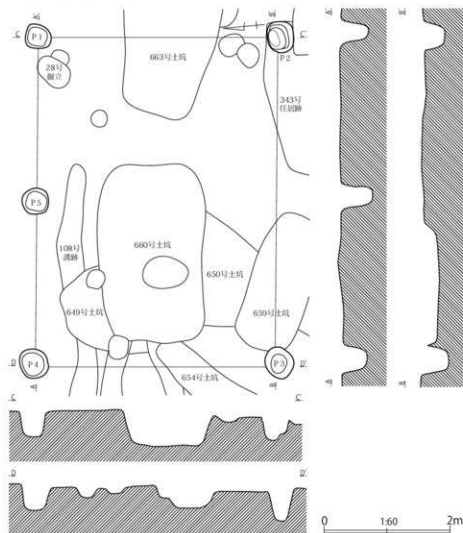
柱穴は、長さ40cm～50cm程度の円形や楕円形を呈し、確認面からの深さは40cm～54cmある。

遺物は、柱穴覆土中から古代の土器の小破片が少量と、P3内から中世後期の土釜の破片が1片出土しただけである。本建物跡の時期は、明確にはできないが、建物跡の長軸方向が北東側にある第27号掘立柱建物跡と同じ方向を向いており、柱穴の形態も類似していることから、第27号掘立柱建物跡と同じ中世後半以降の可能性が高いと思われる。

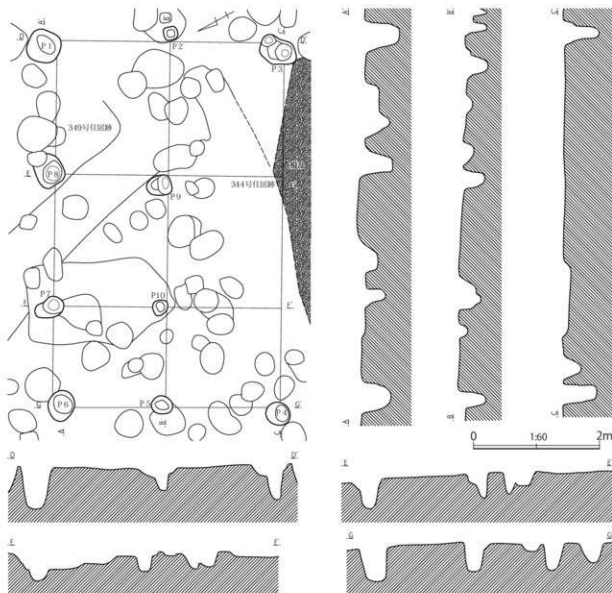
### 第30号掘立柱建物跡 (第264図、写真図版123)

H地点の調査区東側の中央付近に位置する。重複する第674号土坑に切られ、第344・349号住居跡を切っている。

建物跡の形態は、東西方向が3間、南北方向が2間の東西方向に長い長方形を呈する総柱式建物の



第263図 第29号掘立柱建物跡



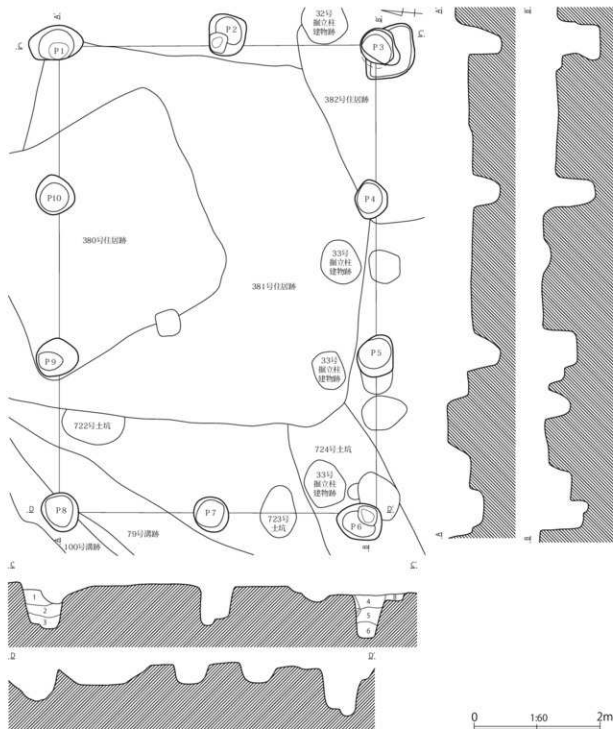
第264図 第30号掘立柱建物跡

ようである。規模は、東西方向が5.80m、南北方向は3.60mを測る。建物跡の長軸方位は、N-117° - Eを向いている。

柱通りは、比較的良好だが、南北方向の柱通りは東側の2列が直線上に乗らず蛇行ぎみである。柱心間は、南北方向は1間1.80mの等間隔である。東西方向は、東側と真ん中の1間が2.10mの等間隔で、西側の1間が1.60mで他に比べて短くなっている。1間×1間の平面形は、東西方向が長い長方形を呈している。

柱穴は、東西方向の側柱穴が長35cm～60cmの楕円形ぎみの形態を呈しているが、真ん中の棟持柱か東柱の柱穴列は長さ20cm程度の楕円形で、側柱穴に比べて規模が小さくなっている。確認面からの深さは、側柱穴は48cm～66cmあり、真ん中の棟持柱か東柱の柱穴は35cm～45cmで若干浅くなっている。

遺物は、柱穴の覆土中から古墳時代後期～平安時代前期までの土師器の破片が少量出土しただけである。本建物跡の時期は、明確にはできないが、建物跡や柱穴の形態からすると、中世以降の可能性が高いと思われる。



第265図 第31号掘立柱建物跡

## 第31号掘立柱建物跡土層説明

- 第1層：暗褐色土層（径0.5～2 cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。）  
 第2層：暗褐色土層（径0.5～1 cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。）  
 第3層：暗褐色土層（ローム粒子・径3 cmの粘土ブロックを少量含む。）  
 第4層：暗褐色土層（径0.5～1 cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子・炭化物を少量含む。）  
 第5層：暗褐色土層（径0.5 cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。）  
 第6層：暗褐色土層（ローム粒子を主体に、径2～4 cmのロームブロックを多量含む。）  
 第7層：暗褐色土層（径0.5～3 cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子・黒褐色土を少量含む。）  
 第8層：暗褐色土層（径0.5～1 cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子を微量含む。）

## 第31号掘立柱建物跡（第265図、写真図版123）

H地点調査区西側の南側寄りに位置する。重複する第724号土坑や第100号溝跡に切れ、第380～382号住居跡を切っている。第32・33号掘立柱建物跡とも重複関係にあるが、相互の新旧関係は不明である。

建物跡の形態は、東西方向が3間、南北方向が2間の東西方向に長い長方形を呈する側柱式建物である。規模は、東西方向が7.40m、南北方向は5.00mを測る。建物跡の長軸方位は、N-86°-Eを向いている。

柱通りは、非常に良く、いずれの柱穴列とも直線上に並んでいる。柱心間は、東西・南北両方向とも1間2.50mの等間隔である。1間×1間の平面形は、方形を呈している。

柱穴は、長さ56cm～88cmの円形・楕円形・不整形円の形態を呈している。確認面からの深さは、30cm～80cmあるが、P2とP7の棟持柱は他の側柱穴よりも若干浅くなっている。柱穴覆土は、ロームブロック・ローム粒子・焼土粒子を含む暗褐色土を主体にしている。P6とP8の覆土の堆積状況が自然堆積を示すことから、本建物の柱は抜き取られた可能性が高いと思われる。

遺物は、柱穴の覆土中から、古代の土師器や須恵器の破片が少量出土しただけである。本建物跡の時期は、遺構の重複関係や建物跡の形態から、奈良時代末頃と考えられる。



第266図 第31号掘立柱建物跡出土遺物

第139表 第31号掘立柱建物跡出土遺物観察表

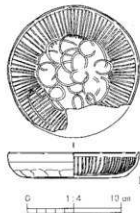
1	坏	A.口縁部径12.4、器高3.6、B.粘土粗積み上げ、C.口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ナデの後下半ケズリ、内面ナデ、D.白色粒、E.内外一明茶褐色、F.1/4、H.柱穴覆土中。
2	坏	A.口縁部径12.2、器高3.0、B.粘土粗積み上げ、C.口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ナデの後下半ケズリ、内面ナデ、D.赤色粒、白色粒、E.内外一明茶褐色、F.1/4、H.柱穴覆土中。

## 第32号掘立柱建物跡（第268図、写真図版123）

H地点調査区西側の南側寄りに位置する。重複する第376号住居跡や第382号住居跡を切っている。第31号掘立柱建物跡とも重複関係にあるが、相互の新旧関係は不明である。

建物跡の形態は、東西方向が3間、南北方向が2間の東西方向に長い長方形を呈する側柱式建物である。規模は、東西方向が6.00m、南北方向は4.40mを測る。建物跡の長軸方位は、N-90°-Eを向いている。

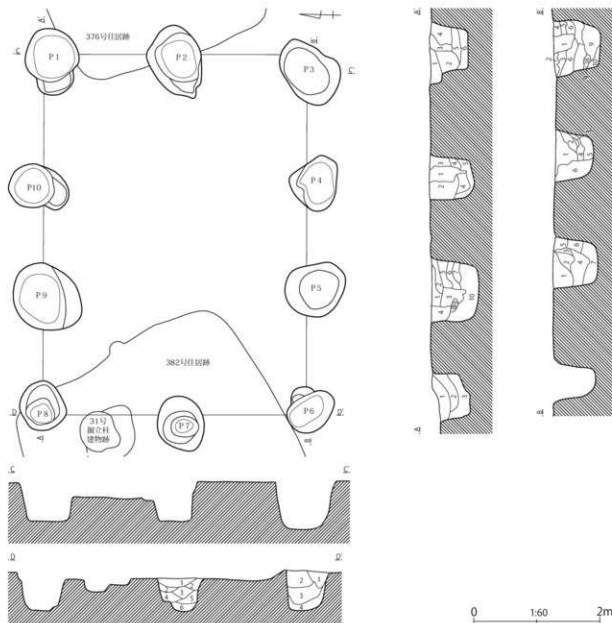
柱通りは、非常に良く、いずれの柱穴列とも直線上に並んでいる。柱心間は、南北方向が1間2.20mの等間隔、東西方向が1間2.00mの等間隔である。1間×1間の平面形は、方形を呈している。



第267図 第32号掘立柱建物跡出土遺物

第140表 第32号掘立柱建物跡出土遺物観察表

1	暗文坏	A.口縁部径14.0、器高2.7、底部径10.6、B.粘土粗積み上げ、C.口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ナデ、内面ナデの後放射状暗文、底部外面ケズリ、内面ナデの後螺旋状暗文を施す、D.赤色粒、白色粒、E.内外一明茶褐色、F.3/4、H.P10覆土中。
---	-----	---



第268図 第32号掘立柱建物跡

## 第32号掘立柱建物跡土層説明

## &lt; P 1 &gt;

第1層：暗褐色土層（径1～2cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子・白色粒子を微量含む。）

第2層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含む。）

第3層：暗褐色土層（径1～3cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。）

第4層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、径1～4cmのロームブロックを中量、黒褐色土を少量含む。）

第5層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。）

第6層：暗褐色土層（径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。）

## &lt; P 3 &gt;

第1層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、径0.5～1cmのロームブロックを少量含む。）

第2層：褐色土層（径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子・暗褐色土の混合土。）

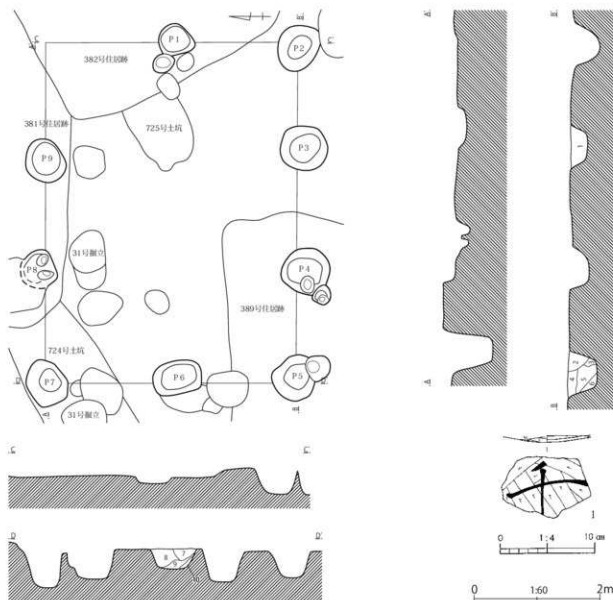
第3層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を多量含む。）

第4層：褐色土層（暗褐色土を多量、ロームブロック・ローム粒子を少量含む。）

第5層：褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を多量、黒褐色土を少量含む。）

第6層：暗褐色土層（径0.5～3cmのロームブロック・ローム粒子・暗褐色土の混合土。）

- 第7層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、径0.5～2 cmのロームブロック・ローム粒子を含む。）
- 第8層：暗褐色土層（径0.5～1 cmのロームブロック・ローム粒子・暗褐色土ブロックを含む。）
- 第9層：暗褐色土層（暗褐色土を主体とする。）
- 第10層：黄褐色土層（径0.5～5 cmのロームブロック・ローム粒子を多量、暗褐色土を少量含む。）
- <P4>
- 第1層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、径0.5～2 cmのロームブロックを少量、焼土粒子を微量含む。）
- 第2層：暗褐色土層（ロームブロック・暗褐色土を多量含む。）
- 第3層：黄褐色土層（ローム粒子を多量、暗褐色土を微量含む。）
- 第4層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、径0.5～1 cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。）
- 第5層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ロームブロック・ローム粒子を多量含む。）
- 第6層：褐色土層（径0.5～3 cmのロームブロック・ローム粒子・暗褐色土の混合土。）
- <P5>
- 第1層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム小ブロック・ローム粒子を多量、径3～4 cmのロームブロック・炭化物を微量含む。）
- 第2層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ロームブロックを多量、ローム粒子・炭化物を微量含む。）
- 第3層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ロームブロックを多量、ローム粒子を少量、炭化物を微量含む。）
- 第4層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を少量含む。）
- 第5層：褐色土層（径0.5～1.5 cmのロームブロック・ローム粒子・暗褐色土の混合土。）
- 第6層：暗褐色土層（ローム粒子・暗褐色土を少量含む。）
- 第7層：褐色土層（ロームブロック・ローム粒子・暗褐色土の混合土。）
- <P6>
- 第1層：暗褐色土層（径0.5～3 cmのロームブロックを多量含む。）
- 第2層：暗褐色土層（径0.5～2 cmのロームブロック・ローム粒子・炭化物・白色粒子を少量含む。）
- 第3層：暗褐色土層（径1～2 cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。）
- 第4層：暗褐色土層（径1～2 cmのロームブロックを少量含む。）
- <P7>
- 第1層：暗褐色土層（径0.5～1 cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含む。）
- 第2層：暗褐色土層（径2～4 cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子を微量含む。）
- 第3層：暗褐色土層（径0.5 cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含む。）
- 第4層：暗褐色土層（径0.5～1 cmのロームブロック・ローム粒子を少量、炭化物を微量含む。）
- 第5層：暗褐色土層（径0.5～2 cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子・炭化物を微量含む。）
- 第6層：暗褐色土層（径0.5 cmのロームブロック・ローム粒子・径8 cmの粘土ブロックを多量含む。）
- <P8>
- 第1層：暗褐色土層（径0.5～3 cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子・白色粒子を微量含む。）
- 第2層：暗褐色土層（径0.5 cmのロームブロック・ローム粒子を微量含む。）
- 第3層：暗褐色土層（ローム粒子を微量含む。）
- <P9>
- 第1層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ロームブロック・ローム粒子を少量含む。）
- 第2層：褐色土層（径0.5～4 cmのロームブロック・ローム粒子・暗褐色土の混合土。）
- 第3層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、径0.5～1.5 cmのロームブロックを多量、ローム粒子を少量含む。）
- 第4層：褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を多量、暗褐色土を少量含む。）
- 第5層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ロームブロック・ローム粒子を多量含む。）
- 第6層：褐色土層（径0.5～4 cmのロームブロック・ローム粒子を多量、暗褐色土を少量含む。）
- 第7層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ロームブロック・ローム粒子を含む。）
- 第8層：暗褐色土層（暗褐色土を多量含む。）
- 第9層：褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を少量含む。）
- 第10層：褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を多量含む。）
- <P10>
- 第1層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、径0.5～2 cmのロームブロックを少量含む。）
- 第2層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、径0.5～2 cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。）
- 第3層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量含む。）
- 第4層：暗褐色土層（暗褐色土を主体とする。）
- 第5層：黄褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を多量、暗褐色土を微量含む。）



第269図 第33号掘立柱建物跡及び出土遺物

## 第33号掘立柱建物跡土層説明

- 第1層：暗褐色土層（ローム粒子・暗褐色土の混合土。径0.5～1cmのロームブロックを少量含む。）  
 第2層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含む。）  
 第3層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を少量、炭化粒子を微量含む。）  
 第4層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子を少量含む。）  
 第5層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。）  
 第6層：暗褐色土層（径1cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。）  
 第7層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含む。）  
 第8層：暗褐色土層（径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を少量、炭化粒子を微量含む。）  
 第9層：暗褐色土層（径2～4cmのロームブロックを多量、ローム粒子を少量含む。）  
 第10層：暗褐色土層（径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。）

第141表 第33号掘立柱建物跡出土遺物観察表

1	環	B.粘土組織み上げ。C.体部外面ケズリ、内面ナデ。D.白色粒。E.内外一淡茶褐色。F.底部破片。G.外面に「千」の墨書あり。H.覆土中。

柱穴は、長さ80cm～110cmの円形や楕円形ぎみの形態を呈している。確認面からの深さは、63cm～76cmある。柱穴覆土の土層観察の結果によれば、柱痕と考えられる土層が多く柱穴覆土に見られることから、本建物はそのまま廃絶されたと思われる。

遺物は、柱穴の覆土中から、古墳時代前期～平安時代前期までの土師器や須恵器の破片が少量出土しただけである。本建物跡の時期は、遺構の重複関係や建物跡の形態及び出土遺物の様相から、平安時代前期頃と考えられる。

### 第33号掘立柱建物跡（第269図、写真図版123・124）

H地点調査区西側の南側寄りに位置する。重複する第724号土坑に切られ、第381・382・389号住居跡を切っている。第31号掘立柱建物跡とも重複関係にあるが、相互の新旧関係は不明である。

建物跡の形態は、東西方向が3間、南北方向が2間の東西方向に長い長方形を呈する側柱式建物である。規模は、東西方向が5.40m、南北方向は4.00mを測る。建物跡の長軸方位は、N-90°-Eを向いている。

柱通りは、非常に良く、いずれの柱穴列とも直線上に並んでいる。柱心間は、南北方向が1間2.00mの等間隔、東西方向が1間1.80mの等間隔である。1間×1間の平面形は、方形を呈している。

柱穴は、長さ60cm～80cmの楕円形ぎみの形態を呈している。確認面からの深さは、25cm～80cmあるが、棟持柱のP1とP6は、他の側柱穴に比べて若干浅くなっている。柱穴覆土は、ロームブロック・ローム粒子・焼土粒子を含む暗褐色土を主体にしている。

遺物は、柱穴覆土中から、古墳時代前期～平安時代の土師器や須恵器の破片が少量出土しただけであるが、柱穴覆土中からは、坯の底部外面に大きく「千」と墨書された破片(第269図)が出土している。本建物跡の時期は、遺構の重複関係や建物跡の形態から、平安時代前期頃と考えられる。

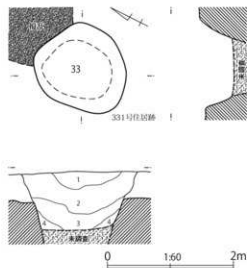
## 3. 井戸跡

### 第33号井戸跡（第270図、写真図版124）

H地点調査区西側の中央付近に位置する。重複する第331号住居跡を切っている。

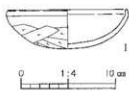
井戸掘り方の平面形は、南北方向に長い楕円形ぎみの形態を呈している。規模は、南北方向が1.55m、東西方向が1.35mを測る。壁は、上半部は直線的に傾斜して落ち込んでいる。下半部が未調査のため、井筒の構造や井戸の深さなどについては不明である。覆土の堆積は、井戸上半は自然堆積のようである。

遺物は、古墳時代後期～白鳳時代を主体とする土師器や須恵器などの土器の破片が、覆土上半から多く出土している。本井戸跡の時期は、遺構の重複関係や出土遺物の様相から、白鳳時代と考えられる。



第270図 第33号井戸跡





第271図 第33号井戸跡  
出土遺物

第33号井戸跡土層説明

- 第1層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を微量含む。）  
 第2層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含む。）  
 第3層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子・炭化物を少量含む。）  
 第4層：暗褐色土層（粘土粒子を多量、径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を少量、黒褐色土を微量含む。）

第142表 第33号井戸跡出土遺物観察表

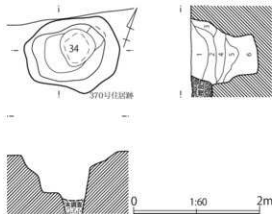
1	坏	A. 口縁部径(12.8)、器高4.2。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後ケズリ、内面ナデ。D. 白色粒。E. 内外淡褐色。F. 1/3。H. 覆土中。
---	---	--

第34号井戸跡（第272図）

H地点調査区西側の南寄りに位置する。重複する第370号住居跡を切っている。

井戸掘り方の平面形は、東西方向に長い楕円形ぎみの形態を呈している。規模は、南北方向が1.23m、東西方向が1.55mを測る。壁は、上半が漏斗状に緩やかに傾斜し、下半は円筒状を呈し、二段に落ち込んでいる。下半部が未調査のため、井筒の構造や深さなどについては不明である。覆土の堆積は、概ね自然堆積のようである。

遺物は、古墳時代前期と奈良・平安時代の土師器や須恵器の小破片が、覆土上半から数片出土しただけである。本井戸跡の時期は、遺構の重複関係や出土遺物の様相及び井戸上半の掘り方の形態から、中世後頃と推測される。



第272図 第34号井戸跡

第34号井戸跡土層説明

- 第1層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を多量、浅間山系A軽石・焼土ブロック・焼土粒子を少量含む。）  
 第2層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロックを多量含む。）  
 第3層：暗褐色土層（ローム粒子を多量含む。）  
 第4層：暗褐色土層（径0.5～5cmのロームブロックを少量含む。）  
 第5層：暗褐色土層（ロームブロックを多量含む。しまりを有する。）  
 第6層：褐色土層（ロームブロック・ローム粒子・暗褐色土の混合土。しまりを有する。）

## 4. 土 坑

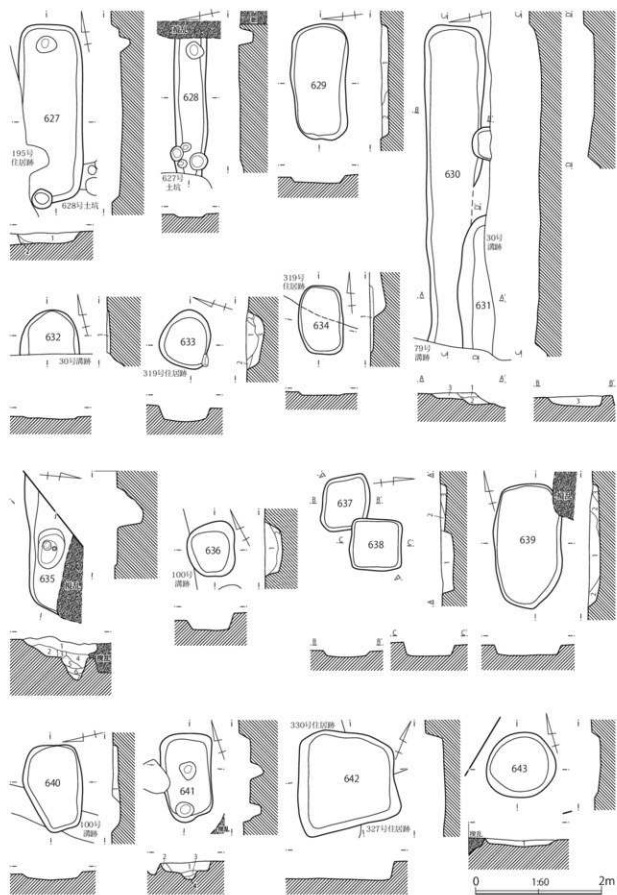
第143表 H地点土坑一覧表

番号	平面形	規模	深さ	出土遺物	時期	備考
627	隅丸長方形	283×(100)	17		近世以降	195住・SK628を切る。
628	不明	(214)×50	6		"	SK627に切られる。
629	隅丸長方形	182×88	13	土師・須恵器片少量	平安以降	
630	隅丸長方形	(508)×97	20	土師・須恵器片少量	中世	SK631・79溝に切られる。
631	不明	(211)×(56)	22	土師器3片	"	30・79溝に切られ、SK630を切る。
632	不明	94×(70)	5		中世以前	30溝に切られる。

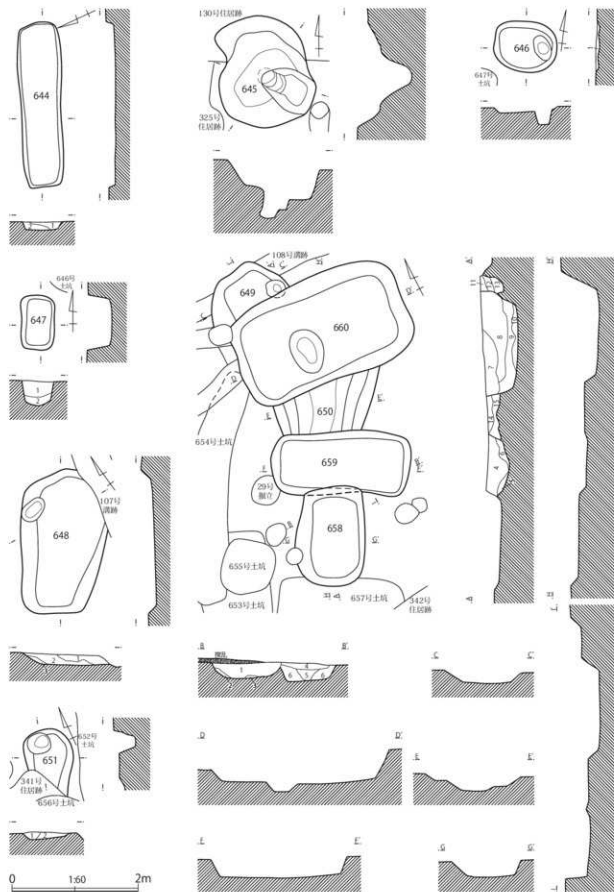
633	楕円形	93×80	30		古代末以降	319住を切る。
634	隅丸長方形	109×72	6		"	319住を切る。
635	不明	(154)×(70)	67	土師器片多量、須恵器高台付坏	平安前期末	
636	不整長方形	87×75	29	土師器5片	平安以降	100溝に切られる。
637	不整長方形	86×75	9	土師・須恵器7片	近世以降	
638	隅丸方形	83×82	24	土師器片少量	"	
639	不整長方形	199×108	19		"	
640	不整形	137×95	15	土師器4片	平安以降	100溝に切られる。
641	隅丸長方形	142×80	40	土師器6片	古墳後以降	
642	不整方形	164×162	30		近世以降	330・327住を切る。
643	円形	110×104	14	土師器7片	平安以降	
644	隅丸長方形	262×71	15	土師・須恵器27片、埴輪1片	"	
645	不整形	190×169	43	土師・須恵器片多量	平安中期以降	130住を切る。
646	隅丸長方形	100×81	9			
647	隅丸長方形	87×52	39	土師・須恵器片少量、銭貨2(景徳元宝、天聖元宝)	中世	
648	(隅丸長方形)	229×138	25	土師器片多量	平安	107溝に切られる。
649	不明	130×(68)	22			
650	不明	162×(88)	28			
651	不明	(88)×78	10			341住を切る。
652	不明	(306)×116	30			340住を切る。
653	隅丸長方形	208×138	16	土師器片少量		SK654・656に切られる。
654	隅丸長方形	375×58	35	土師・灰軸片少量	平安中期以降	SK655に切られ、SK653を切る。
655	隅丸方形	88×87	44	土師器1片		SK653・654を切る。
656	隅丸長方形	180×104	38	土師器片少量	古墳後期以降	340・341住を切る。
657	(不整形)	201×165	24			340・342住を切る。
658	隅丸長方形	160×112	28	土師器片少量	平安以降	SK659を切る。
659	隅丸長方形	222×100	33	土師・須恵器片少量	"	29掘立・SK650を切り、SK658に切られる。
660	隅丸長方形	282×173	57	土師器片多量、瀬戸窯系磁片	近世以降	SK649・650を切る。
661	隅丸長方形	148×78	28	土師・須恵器片少量	"	338住・107溝を切る。
662	隅丸長方形	135×48	23		"	341住・107溝を切る。
663	隅丸長方形	322×164	55	龍泉窯系磁器1片、土師・須恵器片多量	"	28掘立を切る。
664	隅丸長方形	127×82	54			343住を切り、SK666に切られる。
665	不明	(98)×74	42			343住を切る。
666	隅丸長方形	258×104	76	土師・須恵器・灰軸片多量	平安以降	342・343住・SK666を切る。

667	不 明	133×(74)	28	土師器片少量	平 安 以 降	343住を切る。
668	隅丸長方形	168×90	19	土師器片少量		343住・29掘立を切る。
669	隅丸長方形	166×118	48	歯片、銭貨1(開元通宝)	中 世	102・103溝を切る。
670	隅丸長方形	330×127	55	土師・須恵器片少量、常滑窯系 甕片	近 世 以 降	345住、28掘立を切る。
671	不 明	(122)×120	25	土師・須恵器片少量、瀬戸窯系 歯片	中 世	
672	隅丸長方形	133×58	14	土師器片少量	古 代 以 降	
673	不整長方形	176×134	18	土師・須恵器片少量、在地産片 口鉢片	中 世 後 期	349住を切る。
674	不 整 形	233×132	21	土師器片多量、須恵器片少量	近 世 以 降	344住を切る。
675	隅丸長方形	118×91	14			344住を切る。
676	隅丸長方形	268×125	11	在地産片口鉢片	近 世 後 半	349住を切る。
677	不 整 円 形	162×158	37	在地産片口鉢片、窪み石	"	349住を切り、27溝を切る。
678	不整長方形	84×70	8		"	
679	隅丸長方形	236×106	10	土師器、常滑窯系甕片少量	"	
680	不 明	(154)×(148)	22	土師器2片、須恵器1片	"	SK681に切られる。
681	隅丸長方形	678×136	42	土師・須恵器片少量、鉄滓1	"	SK680を切る。
682	欠 番	×				
683	隅丸長方形	380×142	44	土師・須恵器片少量	近 世	101溝を切る。
684	不整長方形	232×166	74	土師器10片	平 安 以 降	
685	隅丸長方形	183×96	54	土師器8片、須恵器1片	平 安 以 前	350住に切られる。
686	(不 整 形)	236×(140)	31	かわらけ、土師・須恵器片少量、 鉄滓2	中 世	106溝に切られる。
687	隅丸長方形	204×67	47	土師・須恵器片多量	近 世 以 降	106溝を切る。
688	隅丸長方形	90×77	18	土師器片少量	平 安 以 降	
689	(隅丸長方形)	(190)×128	29		近 世 後 半	353住、102・103溝を切る。
690	不 整 円 形	98×93	22	土師器片少量		353住を切る。
691	隅丸長方形	104×74	32	骨小片多数、銭貨5(太平通宝、 祥符通宝、熙寧元宝、紹聖元宝、 大観通宝)	中 世 以 降	351住を切る。
692	不 明	(112)×100	42	土師器片少量		354住を切る。
693	(不整円形)	(134)×132	14	土師器片少量		354住を切る。
694	不整楕円形	97×88	17	土師器片多量	古墳後期以降	
695	隅丸長方形	136×79	42	土師・須恵器片少量		
696	隅丸長方形	104×86	13	土師器片少量	近 世 後 半	SK697に切られる。
697	隅丸長方形	212×116	14	土師器片少量	"	SK696を切る。
698	(不 整 形)	(148)×128	38	土師器片少量	平 安 以 降	102溝に切られ、358住を切る。
699	楕 円 形	276×158	61	遺物なし。	平 安	102溝に切られ、358住を切る。

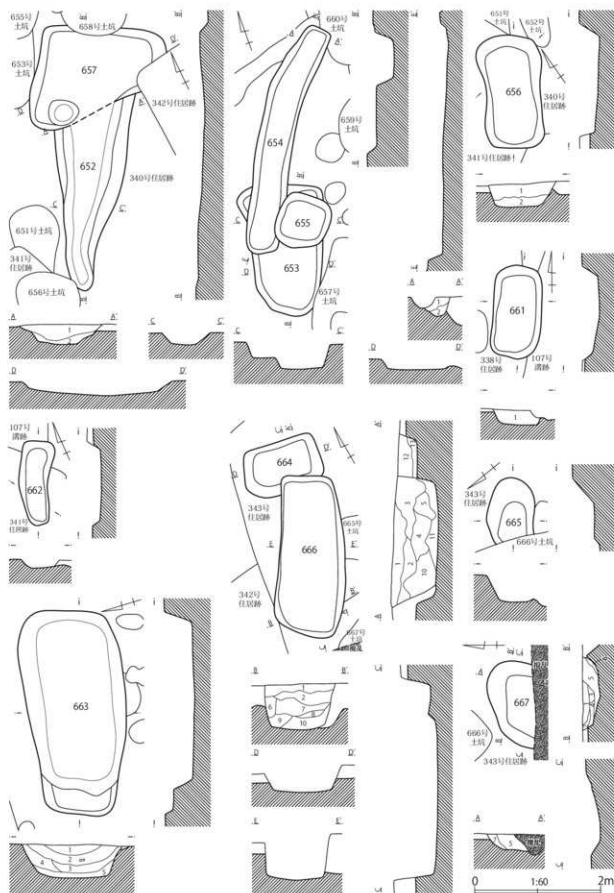
700	隅丸長方形	140×(69)	39	遺物なし。	平 安	358住を切る。
701	隅丸長方形	358×109	27	土師器片少量	中世後期以降	359住を切る。
702	不 明	176×175	15	土師・須恵器片少量、椀型鉄滓	近 世 後 半	359・360住を切る。
703	不 明	(76)×76	37	土師・須恵器片少量	〃	SK705に切られる。
704	円 形	78×75	38	土師・須恵器片少量	平 安 以 降	SK705に切られる。
705	(隅丸長方形)	(183)×101	34	土師器片多量、須恵器・灰釉片少量	近 世 後 半	359住を切る。SK703・705に切られる。
706	(不整楕円形)	(98)×67	37	龍泉窯系青磁碗	中 世	18住を切り、SK705に切られる。
707	不 明	(73)×(45)	40			SK708に切られ、18住・SK706を切る。
708	不 明	164×(60)	44			18住・SK706・707を切る。
709	隅丸長方形	211×99	39	須恵器	平 安 前 期	361住を切り、SK710に切られる。
710	隅丸長方形	92×75	42	人骨片少数、歯16	中 世	361・362住・SK709を切る。
711	不 整 円 形	86×75	24			361・362住を切る。
712	不整楕円形	154×84	28			16住を切る。
713	不整楕円形	114×86	40			
714	楕 円 形	120×98	43			16住を切る。
715	隅丸長方形	141×86	41	骨片	中 世	16住を切る。
716	円 形	80×72	23		〃	365住を切り、SK717に切られる。
717	隅丸長方形	104×50	7	骨片、土師器片少量	〃	365住・SK716を切る。
718	隅丸長方形	280×60	23	土師・須恵・陶器・在地産片口鉢片	中 世 後 期	107溝に切られる。
719	不 整 形	134×101	48	土師器片少量	古 墳 以 降	368住・107溝を切る。
720	不 整 形	(86)×79	40			368住を切る。
721	不 明	87×(72)	19	土師器片少量	古 代 以 降	335住を切る。
722	(楕 円 形)	100×(51)	33	土師器片少量	〃	381住を切る。
723	楕 円 形	82×58	33	土師器片少量	奈良・平安以降	
724	(隅丸長方形)	(308)×136	23	土師器片多量	古 代 以 降	381・391住、31・33掘立を切る。
725	不 明	(116)×90	18	土師器片少量	〃	382住を切る。
726	不 整 円 形	68×66	23			384住を切る。
727	不 明	81×62	24	古墳前～後期土器片少量		388住を切る。



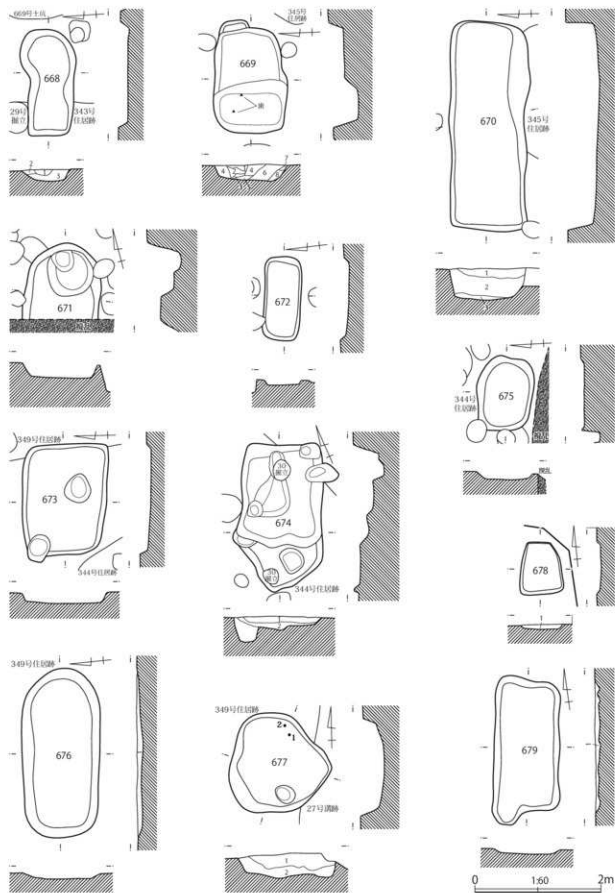
第273图 土坑(1)



第274图 土坑(2)

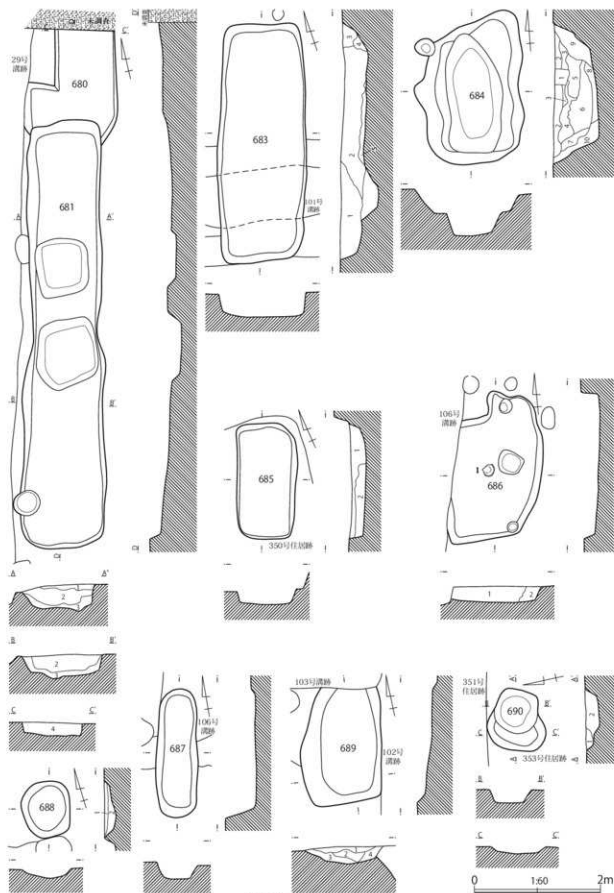


第275图 土坑(3)

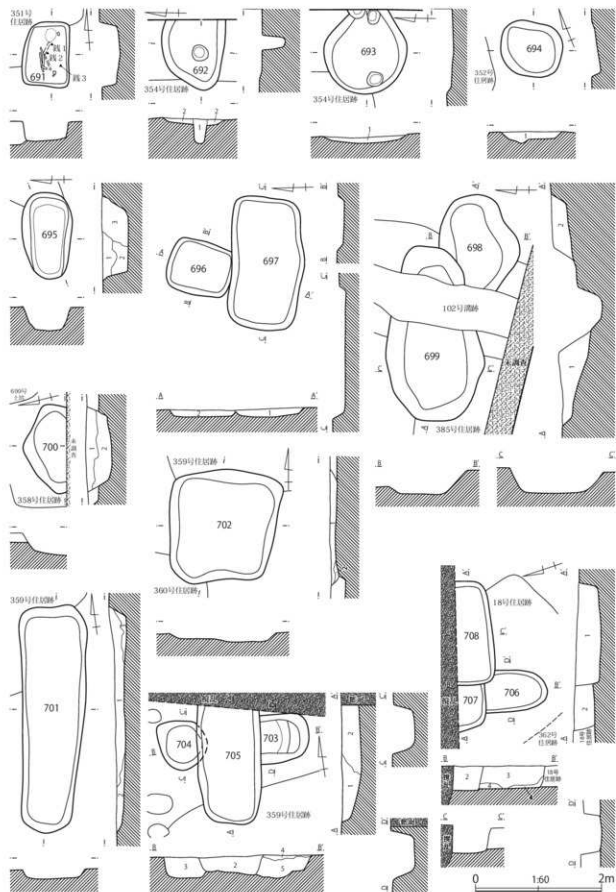


第276图 土坑(4)

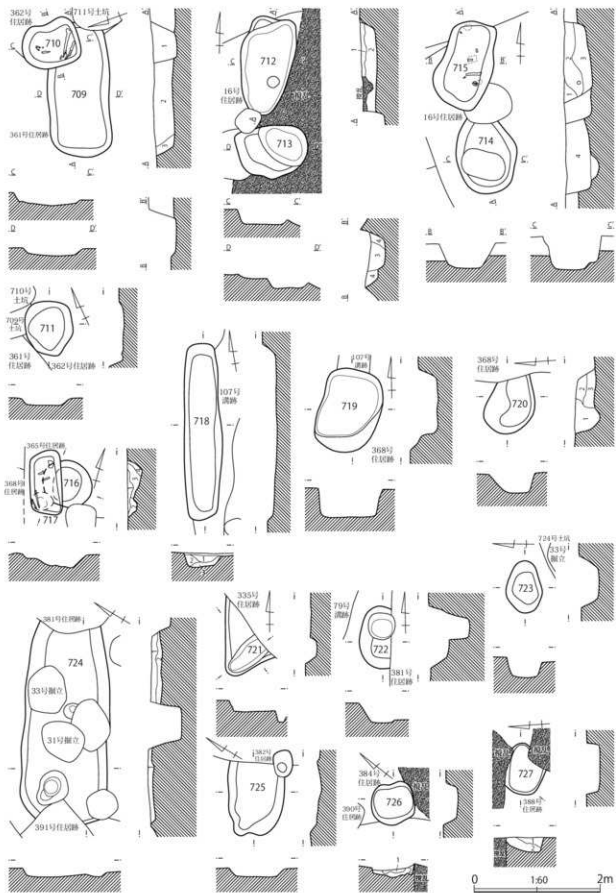




第277图 土坑(5)



第278图 土坑(6)



第279图 土坑(7)

## 第627号土坑土層説明

第1層：暗褐色土層 (径0.5～1 cmのロームブロック・ローム粒子を少量、白色粒子を微量含む。)

第2層：暗褐色土層 (径0.5～5 cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含む。)

## 第629号土坑土層説明

第1層：暗褐色土層 (径0.5～3 cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子・白色粒子を微量含む。)

第2層：暗褐色土層 (径0.5～2 cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子・白色粒子を微量含む。)

## 第630・631号土坑土層説明

第1層：暗褐色土層 (径0.5 cmのロームブロック・ローム粒子を少量、径3 cmのロームブロックを微量含む。)

第2層：暗褐色土層 (径0.5 cmのロームブロック・ローム粒子を多量、径3 cmのロームブロックを微量含む。)

第3層：暗褐色土層 (径0.5～2 cmのロームブロックを多量、ローム粒子を少量含む。しまりは無い。)

## 第632号土坑土層説明

第1層：暗褐色土層 (径0.5 cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。)

## 第633号土坑土層説明

第1層：黒褐色土層 (径0.5 cmの焼土ブロック・焼土粒子を多量、径0.5 cmのロームブロック・炭化粒子を少量、ローム粒子・黒褐色土を微量含む。)

第2層：黒褐色土層 (径0.5～2 cmのロームブロック・ローム粒子を少量、炭化物を微量含む。)

第3層：黒褐色土層 (径0.5～1 cmのロームブロック・ローム粒子・焼土粒子を少量含む。)

## 第634号土坑土層説明

第1層：暗褐色土層 (径0.5 cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。)

## 第635号土坑土層説明

第1層：暗褐色土層 (径0.5 cmのロームブロック・ローム粒子を少量、径2 cmのロームブロック・焼土粒子・炭化粒子・白色粒子を微量含む。)

第2層：暗褐色土層 (径0.5～1 cmのロームブロック・ローム粒子を多量、黒褐色土を少量、焼土粒子・白色粒子を微量含む。)

第3層：黄褐色土層 (ローム粒子を主体とする。)

第4層：暗褐色土層 (径0.5～1 cmのロームブロック・ローム粒子・黒褐色土を多量、焼土粒子を少量含む。)

第5層：暗褐色土層 (径0.5 cmのロームブロック・ローム粒子・径0.5～1 cmの焼土ブロックを少量、炭化物を微量含む。)

第6層：暗褐色土層 (ローム粒子を多量含む。)

第7層：暗褐色土層 (径0.5～2 cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。)

## 第636号土坑土層説明

第1層：暗褐色土層 (径0.5～3 cmのロームブロック・ローム粒子を多量、炭化物・白色粒子を少量含む。)

第2層：黄褐色土層 (径0.5～1 cmのロームブロック・ローム粒子を主体とする。)

## 第637・638号土坑土層説明

第1層：暗褐色土層 (径0.5～2 cmのロームブロック・ローム粒子を多量、径0.5 cmの焼土ブロックを少量含む。しまりは無い。)

第2層：暗褐色土層 (径0.5～3 cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子・炭化物を微量含む。)

第3層：暗褐色土層 (径0.5 cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子・炭化物を微量含む。)

## 第639号土坑土層説明

第1層：暗褐色土層 (径0.5～1 cmのロームブロック・ローム粒子を少量、白色粒子を微量含む。)

第2層：暗褐色土層 (ローム粒子を多量、径0.5～1 cmのロームブロックを少量含む。)

第3層：暗褐色土層 (径1～3 cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。)

## 第640号土坑土層説明

第1層：黄褐色土層 (ロームブロック・ローム粒子を含む。)

## 第641号土坑土層説明

第1層：暗褐色土層 (径1～3 cmのロームブロックを多量含む。しまりは無い。)

第2層：暗褐色土層 (径2 cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。)

第3層：暗褐色土層 (ローム粒子を多量、径0.5 cmのロームブロックを少量含む。)

第4層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、ロームブロックを少量含む。）

**第643号土坑土層説明**

第1層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子・焼土粒子を少量含む。）

**第644号土坑土層説明**

第1層：暗褐色土層（ローム粒子・白色粒子を少量含む。）

第2層：暗褐色土層（径1cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。）

**第646号土坑土層説明**

第1層：黒褐色土層（径1～2cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子を微量含む。）

**第647号土坑土層説明**

第1層：暗褐色土層（径0.5～3cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子・白色粒子を少量含む。）

第2層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、径3cmのロームブロックを少量含む。）

**第648号土坑土層説明**

第1層：暗褐色土層（径1cmのロームブロック・ローム粒子を多量、砂質土を微量含む。）

第2層：暗褐色土層（径1～3cmのロームブロック・ローム粒子を多量、白色粒子を微量含む。）

第3層：暗褐色土層（ローム粒子・暗褐色土の混合土。）

**第649・650・658・659・660号土坑土層説明**

第1層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を多量、径3cmのロームブロック・白色粒子を少量、焼土粒子を微量含む。）

第2層：暗褐色土層（径1～2cmのロームブロック・ローム粒子を多量、白色粒子を少量含む。）

第3層：暗褐色土層（径1cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。）

第4層：暗褐色土層（径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を多量、径3cmのロームブロック・白色粒子・黒褐色土を微量含む。）

第5層：暗褐色土層（径0.5～3cmのロームブロック・ローム粒子を多量、白色粒子を微量含む。）

第6層：黒褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。）

第7層：暗褐色土層（径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子・白色粒子を微量含む。）

第8層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、径0.5～3cmのロームブロックを中量、白色粒子を少量、焼土粒子を微量含む。）

第9層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、径1～5cmのロームブロックを少量、白色粒子を微量含む。）

第10層：暗褐色土層（径1～5cmのロームブロック・ローム粒子・暗褐色土の混合土。）

第11層：暗褐色土層（白色粒子を多量、径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。）

第12層：暗褐色土層（ローム粒子・白色粒子を微量含む。）

第13層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を多量、炭化粒子を微量含む。）

第14層：暗褐色土層（径0.5～3cmのロームブロックを多量、ローム粒子を少量、焼土粒子・炭化粒子・白色粒子を微量含む。）

第15層：暗褐色土層（焼土粒子を多量、径0.5～3cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。）

**第651号土坑土層説明**

第1層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土ブロック・焼土粒子・白色粒子を少量、炭化粒子を微量含む。）

第2層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を少量、径3cmのロームブロック・焼土粒子・白色粒子を微量含む。）

**第652・657号土坑土層説明**

第1層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子・白色粒子を少量、焼土粒子を微量含む。）

第2層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子・焼土粒子を微量含む。）

**第653・654・655号土坑土層説明**

第1層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を多量、径3～5cmのロームブロック・白色粒子を少量含む。）

第2層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を多量、白色粒子を少量含む。）

**第656号土坑土層説明**

第1層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を多量、径2cmのロームブロック・焼土粒子を少量、白色粒子を微量含む。）

第2層：暗褐色土層（径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を多量、径1cmの焼土ブロック・焼土粒子を少量、炭化粒子を微量含む。）

#### 第661号土坑土層説明

第1層：暗褐色土層（径1～3cmのロームブロックを多量、ローム粒子を少量、焼土粒子・白色粒子を微量含む。）

#### 第663号土坑土層説明

第1層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子・白色粒子を微量含む。）

第2層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含む。）

第3層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロックを少量、焼土粒子・黒褐色土を微量含む。）

第4層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子を微量含む。）

第5層：黄褐色土層（径1～2cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。）

#### 第664・666号土坑土層説明

第1層：暗褐色土層（径0.5～3cmのロームブロック・ローム粒子を多量、白色粒子を少量、焼土粒子を微量含む。）

第2層：暗褐色土層（径0.5～5cmのロームブロック・ローム粒子を多量、黒褐色土を少量含む。）

第3層：暗褐色土層（径1～4cmのロームブロック・ローム粒子を多量、黒褐色土ブロックを少量、焼土粒子・白色粒子を微量含む。）

第4層：黒褐色土層（径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を多量、炭化粒子を少量含む。）

第5層：暗褐色土層（径1～3cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。）

第6層：暗褐色土層（径2cmのロームブロック・ローム粒子を多量、径2cmの粘土ブロックを少量、焼土粒子を微量含む。）

第7層：黄褐色土層（径1～3cmのロームブロック・ローム粒子を多量、暗褐色土を少量、焼土粒子を微量含む。）

第8層：黒褐色土層（径1～3cmのロームブロック・ローム粒子を主体に、暗褐色土を少量含む。）

第9層：黄褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を主体に、黒褐色土を多量含む。）

第10層：黄褐色土層（径0.5～3cmのロームブロック・ローム粒子・暗褐色土の混合土。）

第11層：黄褐色土層（径0.5～1cmの粘土ブロックを主体に、暗褐色土を少量含む。）

第12層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を少量、白色粒子を微量含む。）

第13層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子を微量含む。）

#### 第667号土坑土層説明

第1層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、径1cmのロームブロックを中量、焼土粒子・黒褐色土を少量含む。）

第2層：黄褐色土層（径1cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子を微量含む。）

第3層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含む。）

第4層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を多量、黒褐色土を少量、焼土粒子を微量含む。）

第5層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子・炭化粒子を少量含む。）

第6層：暗褐色土層（径0.5～3cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。）

第7層：暗褐色土層（径1～3cmのロームブロック・ローム粒子を多量、炭化物を少量、焼土粒子を微量含む。）

#### 第668号土坑土層説明

第1層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を多量、炭化粒子を微量含む。）

第2層：暗褐色土層（径2cmのロームブロックを多量、ローム粒子・黒褐色土を少量含む。）

第3層：黄褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を主体とする。）

#### 第669号土坑土層説明

第1層：黄褐色土層（径0.5～4cmのロームブロック・ローム粒子を主体に、暗褐色土を少量含む。）

第2層：暗褐色土層（径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。）

第3層：暗褐色土層（砂質土を主体とする。）

第4層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。）

第5層：暗褐色土層（径1～2cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。）

第6層：暗褐色土層（径0.5～3cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子・白色粒子を微量含む。）

第7層：暗褐色土層（径1～2cmのロームブロック・ローム粒子を含む。）

第8層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。）

#### 第670号土坑土層説明

第1層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を多量、白色粒子を中量、径0.5～2cmの焼土ブロックを少量含む。）

第2層：暗褐色土層（径1～5cmのロームブロック・ローム粒子を多量、白色粒子を少量含む。）

第3層：黄褐色土層 (径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を主体に、暗褐色土を少量含む。)

#### 第674号土坑土層説明

第1層：暗褐色土層 (径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子・白色粒子を多量、焼土粒子・炭化粒子を少量含む。)

第2層：暗褐色土層 (径1～2cmのロームブロック・ローム粒子を多量、白色粒子を少量含む。)

#### 第676号土坑土層説明

第1層：暗褐色土層 (暗褐色土を主体に、浅間山系A軽石・ローム粒子を多量、径0.5～5cmのロームブロックを少量含む。)

#### 第677号土坑土層説明

第1層：暗褐色土層 (暗褐色土を主体に、浅間山系A軽石・ローム粒子・焼土粒子を少量含む。)

第2層：暗褐色土層 (暗褐色土を主体に、径0.5～3cmのロームブロック・ローム粒子を含む。)

#### 第678号土坑土層説明

第1層：暗褐色土層 (暗褐色土を主体に、浅間山系A軽石・ロームブロック・ローム粒子を多量含む。)

#### 第679号土坑土層説明

第1層：暗褐色土層 (暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、浅間山系A軽石・径0.5～1cmのロームブロックを少量含む。)

#### 第680・681号土坑土層説明

第1層：暗褐色土層 (暗褐色土を主体に、浅間山系A軽石を多量、ロームブロック・ローム粒子を少量含む。)

第2層：暗褐色土層 (暗褐色土を主体に、径0.5～4cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。)

第3層：暗褐色土層 (暗褐色土を主体に、浅間山系A軽石を多量、径3～5cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。)

第4層：暗褐色土層 (暗褐色土を主体に、ローム小ブロック・ローム粒子を多量、径2cmのロームブロックを少量含む。)

#### 第683号土坑土層説明

第1層：暗褐色土層 (暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、浅間山系A軽石を少量、径0.5～1cmのロームブロックを微量含む。)

第2層：暗褐色土層 (暗褐色土を主体に、径0.5～4cmのロームブロック・ローム粒子を多量、浅間山系A軽石を少量含む。)

第3層：褐色土層 (径0.5～3cmのロームブロック・ローム粒子・暗褐色土の混合土。)

第4層：黄褐色土層 (径0.5～4cmのロームブロック・ローム粒子を主体に、暗褐色土を含む。)

第5層：暗褐色土層 (暗褐色土を主体に、径0.5～1.5cmのロームブロック・ローム粒子を含む。)

#### 第684号土坑土層説明

第1層：暗褐色土層 (暗褐色土を主体に、ローム粒子を微量含む。粘性・しまりともない。)

第2層：暗褐色土層 (ローム粒子を少量、ロームブロックを微量含む。粘性・しまりともない。)

第3層：暗褐色土層 (ローム粒子を中量、ロームブロックを微量含む。粘性・しまりともない。)

第4層：暗褐色土層 (ローム粒子を多量、ロームブロックを微量含む。粘性・しまりともない。)

第5層：暗褐色土層 (ロームブロック・ローム粒子・黒褐色土を微量含む。粘性に富み、しまりはない。)

第6層：黒褐色土層 (黒褐色土を主体に、径5cmのロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりはない。)

第7層：暗褐色土層 (ローム粒子を少量、ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりはない。)

第8層：黄褐色土層 (ロームブロック・ローム粒子を主体に、黒褐色土を含む。粘性に富み、しまりはない。)

第9層：黄褐色土層 (径0.5～5cmのロームブロック・黄褐色ローム粒子・黄褐色土・暗褐色土を含む。)

第10層：黄褐色土層 (ロームブロックを多量、ローム粒子・黄褐色土・暗褐色土を少量含む。粘性に富み、しまりはない。)

#### 第685号土坑土層説明

第1層：暗褐色土層 (暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、径0.5～1.5cmのロームブロック・焼土ブロック・焼土粒子を少量含む。)

第2層：暗褐色土層 (ローム粒子を多量、径0.5～3cmのロームブロック・焼土ブロック・焼土粒子を少量含む。)

#### 第686号土坑土層説明

第1層：暗褐色土層 (ロームブロックを多量、焼土粒子を微量含む。)

第2層：黄褐色土層 (径0.5～6cmのロームブロックを主体に、暗褐色土を含む。)

#### 第688号土坑土層説明

第1層：暗褐色土層 (径0.5～4cmのロームブロック・ローム粒子・暗褐色土の混合土を主体に、焼土粒子を多量含む。)

第2層：黄褐色土層 (ロームブロック・ローム粒子を主体に、暗褐色土を少量含む。しまりを有する。)

## 第689号土坑土層説明

- 第1層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、浅間山系A軽石・ローム粒子・焼土粒子を少量、炭化物を微量含む。）  
 第2層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、浅間山系A軽石・焼土粒子を少量、径0.5～2cmのロームブロック・炭化物を微量含む。）  
 第3層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子を少量、炭化物を微量含む。）  
 第4層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子・焼土粒子を少量、炭化物を微量含む。）

## 第690号土坑土層説明

- 第1層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、径0.5～5cmのロームブロック・焼土粒子・炭化物を少量、小礫を微量含む。）  
 第2層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、ロームブロックを少量、小礫を微量含む。）

## 第692号土坑土層説明

- 第1層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、径0.5～0.8cmのロームブロックを少量含む。）  
 第2層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を少量、径0.5～5cmのロームブロック・焼土粒子を微量含む。）

## 第693号土坑土層説明

- 第1層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を少量、径0.5～5cmのロームブロック・焼土粒子を微量含む。）

## 第694号土坑土層説明

- 第1層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子・炭化物を微量含む。しまりを有する。）

## 第695号土坑土層説明

- 第1層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、径0.5～0.8cmのロームブロック・ローム粒子を含む。）  
 第2層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。）  
 第3層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。）

## 第696・697号土坑土層説明

- 第1層：褐色土層（ロームブロック・ローム粒子・暗褐色土の混合土を主体に、浅間山系A軽石を多量含む。）  
 第2層：褐色土層（浅間山系A軽石・ロームブロック・ローム粒子を多量含む。しまりを有する。）

## 第698・699号土坑土層説明

- 第1層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、径0.5～6cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土ブロック・焼土粒子を少量含む。）  
 第2層：土層説明なし。

## 第700号土坑土層説明

- 第1層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、ロームブロック・焼土粒子を少量含む。）  
 第2層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、径0.5～5cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子を少量含む。）

## 第701号土坑土層説明

- 第1層：暗褐色土層（径0.5～4cmのロームブロック・ローム粒子・焼土粒子を多量含む。しまりを有する。）  
 第2層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を多量、ロームブロックを微量含む。しまりを有する。）  
 第3層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を多量、径0.5～0.8cmのロームブロックを微量含む。しまりを有する。）

## 第702号土坑土層説明

- 第1層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を少量、浅間山系A軽石・ロームブロックを微量含む。）  
 第2層：黄褐色土層（ロームブロック・ローム粒子・暗褐色土の混合土。）

## 第703・704・705号土坑土層説明

- 第1層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、焼土粒子を少量、径0.5～3cmのロームブロックを微量含む。）  
 第2層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、焼土粒子を少量、径0.5～2cmのロームブロックを微量含む。）  
 第3層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、径0.5～3cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。）  
 第4層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、浅間山系A軽石・径0.5～1.5cmのロームブロックを少量含む。）  
 第5層：暗褐色土層（径0.5～4cmのロームブロック・ローム粒子を多量、浅間山系A軽石を少量含む。）



## 第706・707・708号土坑土層説明

第1層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、径0.5～2cmのロームブロックを少量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第2層：土層説明なし。

第3層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ロームブロック・ローム粒子を少量含む。）

第4層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ロームブロック・ローム粒子を多量含む。）

## 第709・710号土坑土層説明

第1層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、径0.5～1.5cmのロームブロック・ローム粒子・焼土ブロック・焼土粒子を少量含む。）

第2層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土ブロック・焼土粒子を少量含む。）

第3層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、ロームブロック・焼土ブロック・焼土粒子を少量含む。）

## 第712・713号土坑土層説明

第1層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、ロームブロックを少量含む。）

第2層：褐色土層（径0.5～5cmのロームブロック・ローム粒子・暗褐色土の混合土。）

第3層：黄褐色土層（ローム粒子・暗褐色土の混合土を主体に、径0.5～3cmのロームブロックを多量含む。）

第4層：褐色土層（ローム粒子・暗褐色土の混合土を主体に、径0.5～1cmのロームブロックを多量含む。）

## 第714・715号土坑土層説明

第1層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、径0.5～1.5cmのロームブロックを少量含む。）

第2層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を少量含む。）

第3層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を多量含む。）

第4層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、径0.5～1cmのロームブロック・径0.5～0.8cmの黒褐色土ブロックを少量含む。）

## 第716・717号土坑土層説明

第1層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を含む。）

第2層：褐色土層（径0.5～3cmのロームブロック・ローム粒子・暗褐色土を多量含む。）

第3層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ロームブロック・ローム粒子を少量含む。）

第4層：暗褐色土層（3層に近いが、黒みが強い。）

## 第718号土坑土層説明

第1層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を少量、炭化粒子を微量含む。）

第2層：暗褐色土層（径1.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。）

第3層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を多量、径0.5cmの粘土ブロックを少量含む。）

## 第720号土坑土層説明

第1層：暗褐色土層（径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子・暗褐色土の混合土を主体に、焼土粒子を少量含む。）

第2層：褐色土層（ロームブロック・ローム粒子・焼土粒子を少量含む。）

第3層：黄褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子を少量含む。）

## 第724号土坑土層説明

第1層：暗褐色土層（白色粒子を多量、径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。）

第2層：黄褐色土層（径2cmのロームブロック・ローム粒子を多量、暗褐色土を少量含む。）

## 第726号土坑土層説明

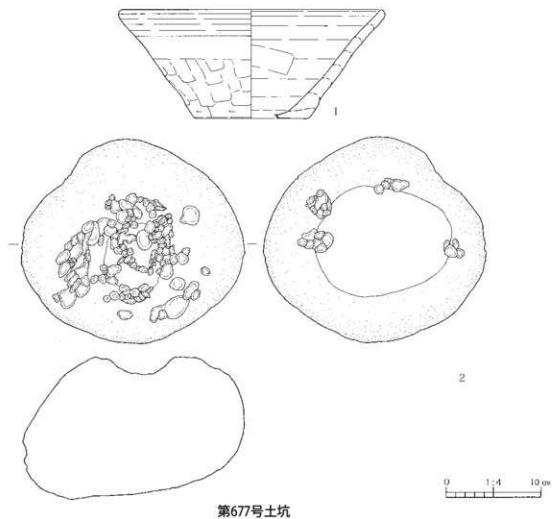
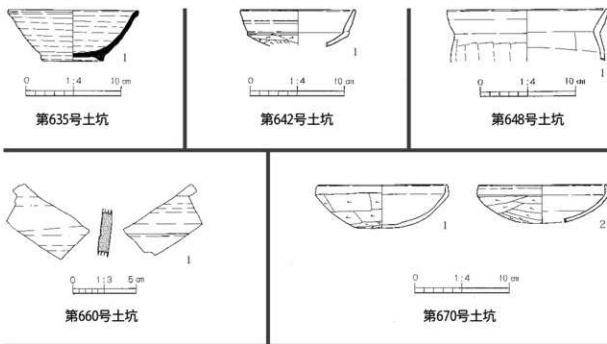
第1層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を含む。）

第2層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を含む。）

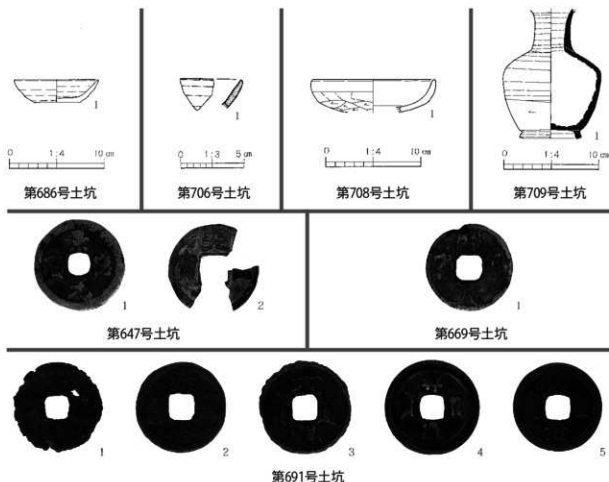
## 第727号土坑土層説明

第1層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を少量、径2cmのロームブロックを微量含む。）

第2層：暗褐色土層（ローム粒子を少量、径0.5～5cmのロームブロックを微量含む。）



第280图 土坑出土遺物(1)



第281図 土坑出土遺物(2)

第144表 第635号土坑出土遺物観察表

1	須恵器 高台付環	A.口縁部径13.8、器高5.4、高台部径6.5。B.ロク口成形。高台部貼り付け。C.口縁部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。高台部内外面回転ナデ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.内外一淡灰色。F.完形。G.未野産。H.覆土中。
---	-------------	---

第145表 第642号土坑出土遺物観察表

1	模倣環	A.口縁部径(12.2)。B.粘土粗積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ヨコナデ。D.角閃石、石英、白色粒。E.内外一明赤褐色。F.口縁部1/4。H.覆土中。
---	-----	---

第146表 第647号土坑出土遺物観察表

1	銭	貨	A.直径24.17mm、厚さ1.07mm、重さ2.8g。B.鑄造。D.割製。F.完形。G.「景德元宝」(初鑄1004年)。北宋銭。H.覆土中。
2	銭	貨	A.厚さ1.07mm、重さ(1.5g)。B.鑄造。D.割製。F.2/3。G.「天聖元宝」(初鑄1023年)。北宋銭。篆書体。H.覆土中。

第147表 第648号土坑出土遺物観察表

1	小形甕	A.口縁部径(17.0)。B.粘土粗積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部内外面回転ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一明茶褐色。F.口縁部1/3。H.覆土中。
---	-----	---

第148表 第660号土坑出土遺物観察表

1	瀬戸窯系 壺	B.ロク口成形。C.胴部内外面回転ナデ。D.白色粒。E.外一淡緑灰色、内一淡灰色。F.完形。G.未野産。H.覆土中。
---	-----------	--

第149表 第669号土坑出土遺物観察表

1	銭	貨	A.直径22.98mm、厚さ1.04mm、重さ2.0g。B.鑄造。D.割製。F.完形。G.「開元通宝」(初鑄621年)。H.覆土中。
---	---	---	--

第150表 第670号土坑出土遺物観察表

1	坏	A.口縁部径13.8、器高4.6。B.粘土粗積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ヨコナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一明橙褐色。F.3/4。H.覆土中。
2	坏	A.口縁部径(13.6)。B.粘土粗積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ヨコナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一明茶褐色。F.1/3。H.覆土中。

第151表 第677号土坑出土遺物観察表

1	在地産片口鉢	A.口縁部径(28.2)、器高11.5、底部径(12.4)。B.粘土粗積み上げ後ロクロ整形。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後下端ケズリ、内面ヨコナデ。底部外面ナデ。D.片岩粒、白色粒。E.内外一淡灰褐色。F.1/3。G.内面下半は良く磨れている。還元不良。H.底面付近。
2	窪み石	A.長さ21.8、幅23.6、厚さ15.1、重さ5.550g。B.自然石を利用。C.表面中央にケズリ・敲打による楕円状の窪み。裏面中央付近は摩滅顯著。D.角閃石安山岩。F.ほぼ完形。H.覆土中。

第152表 第686号土坑出土遺物観察表

1	かわらけ(燈明皿)	A.口縁部径(9.0)、器高2.4、底部径5.0。B.ロクロ成形。C.口縁部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。D.赤色粒、白色粒。E.内外一暗茶褐色。F.1/3。G.口唇部に油垢付着。H.覆土中。
---	-----------	---

第153表 第691号土坑出土遺物観察表

1	銭貨	A.直径23.71mm、厚さ0.91mm、重さ1.6g。B.鋳造。D.崩裂。F.完形。G.「太平通宝」(初鑄976年)。北宋銭。H.No1。
2	銭貨	A.直径23.94mm、厚さ1.03mm、重さ2.6g。B.鋳造。D.崩裂。F.完形。G.「熙寧元宝」(初鑄1068年)。北宋銭。篆書体。H.No2。
3	銭貨	A.直径24.75mm、厚さ1.10mm、重さ2.8g。B.鋳造。D.崩裂。F.完形。G.「大観通宝」(初鑄1107年)。北宋銭。H.No3。
4	銭貨	A.直径25.08mm、厚さ1.07mm、重さ3.0g。B.鋳造。D.崩裂。F.完形。G.「祥符通宝」(初鑄1109年)。北宋銭。H.No3。
5	銭貨	A.直径23.51mm、厚さ1.27mm、重さ2.8g。B.鋳造。D.崩裂。F.完形。G.「紹聖元宝」(初鑄1094年)。北宋銭。篆書体。H.No3。

第154表 第706号土坑出土遺物観察表

1	龍泉窯系青磁碗	B.ロクロ成形。C.口縁部内外面回転ナデ。D.黒色粒。E.内外一オリーブ灰色。F.口縁部破片。G.内外面に施釉。H.覆土中。
---	---------	--

第155表 第708号土坑出土遺物観察表

1	坏	A.口縁部径(13.1)。B.粘土粗積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後ケズリ、内面ヨコナデ。D.角閃石、チャート。E.内外一淡橙黄色。F.1/5。H.覆土中。
---	---	--

第156表 第709号土坑出土遺物観察表

1	須恵器長頸壺	A.高台部径6.5。B.ロクロ成形。高台部貼り付け。C.外面回転ナデの後胴部下半回転ケズリ、内面回転ナデ。底部外面回転糸切り。高台部内外面回転ナデ。D.石英、白色粒。E.内外一灰色。F.口縁部欠損。H.覆土中。
---	--------	---

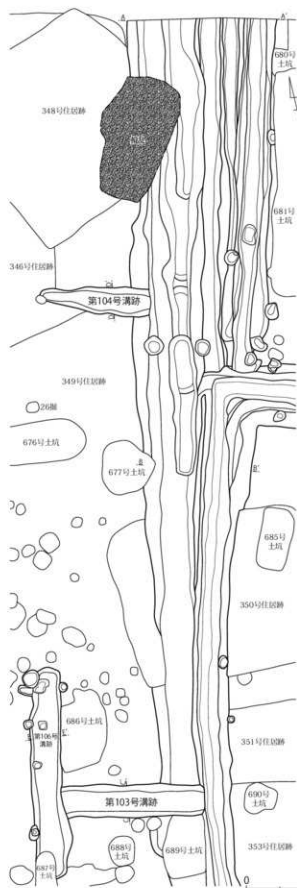
## 5. 溝跡

### 第27号溝跡(第282図、写真図版134)

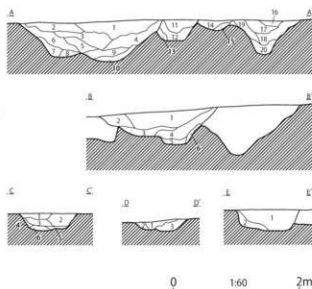
H地点調査区東側の中央から北側にかけて位置する。重複する第348・349・350号住居跡や第28a・102号溝跡を切り、第677号土坑に切られている。

流路は、調査区内では南北方向に向いて直線的に延びるが、南側は徐々に浅くなって削平されている。本溝跡の北側延長は、北側に隣接するD2地点(恋河内2016)やD1地点(恋河内・的野2010)で調査されており、さらにその北東側にあるE2地点(恋河内2016)の第44号溝跡に繋がると推測される。

規模は、上幅が110cm~235cmの比較的均一な幅で、確認面からの深さは調査区北側の壁面で最高64cmある。断面の形態は、底面がやや狭い逆台形の箱堀のような形態を呈している。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、底面はやや狭く平坦である。覆土は、上半の第282図土層断面A-A'の第1~4層とB-B'の第1~3層で浅間山系A軽石を含むことが記載されているが、北側に隣接するD



第282図 第27・28a・28b・29・103・104・106号溝跡

第27・28a・28b・29・103・104・106号溝跡土層説明  
<A-A'>

- 第1層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム小ブロック・ローム粒子を多量、浅間山系A軽石・焼土粒子を少量、径2～4cmのロームブロックを微量含む。）
- 第2層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、浅間山系A軽石を多量、ロームブロック・ローム粒子を少量含む。）
- 第3層：暗褐色土層（浅間山系A軽石を多量、径0.5～0.8cmのロームブロック・ローム粒子を微量含む。）
- 第4層：暗褐色土層（浅間山系A軽石を多量、ローム小ブロック・ローム粒子を少量、径1cmのロームブロックを微量含む。）
- 第5層：暗褐色土層（浅間山系A軽石を多量、ロームブロックを少量、ローム粒子を微量含む。粘性に富む。）
- 第6層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を多量含む。）
- 第7層：暗褐色土層（ローム小ブロック・ローム粒子を多量、径4～5cmのロームブロックを微量含む。）
- 第8層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を微量含む。）
- 第9層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を少量含む。）
- 第10層：黄褐色土層（ロームブロック・ローム粒子・暗褐色土の混合土。）
- 第11層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、浅間山系A軽石を多量、ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含む。）
- 第12層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、浅間山系A軽石を多量、径0.5～1.5cmのロームブロック・ローム粒子・焼土粒子を微量含む。）
- 第13層：黄褐色土層（ロームブロック・ローム粒子・暗褐色土の混合土。）
- 第14層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ロームブロック・ローム粒子を含む。）
- 第15層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、径3～4cmのロームブロックを含む。）
- 第16層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を含む。）
- 第17層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、ロームブロックを少量含む。）
- 第18層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を多量含む。）
- 第19層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、径0.5～1.5cmのロームブロックを微量含む。）
- 第20層：黄褐色土層（径0.5～6cmのロームブロック・ローム粒子・暗褐色土の混合土。）

## &lt;B-B&gt;

第1層：暗褐色土層（浅間山系A軽石を多量、ロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子・炭化物を微量含む。しまりを有する。）

第2層：暗褐色土層（浅間山系A軽石・ローム粒子を多量、ロームブロックを少量、焼土粒子・炭化物を微量含む。）

第3層：暗褐色土層（浅間山系A軽石・ローム粒子を多量、径0.5～1cmのロームブロック・焼土粒子・炭化物を微量含む。）

第4層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、ロームブロック・焼土粒子・炭化物を微量含む。しまりを有する。）

第5層：暗褐色土層（ローム粒子を多量含む。しまりを有する。）

第6層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を含む。）

## &lt;C-C&gt;

第1層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、浅間山系A軽石を少量、ロームブロック・焼土粒子を微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）

第2層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子を少量含む。粘性はなく、しまりを有する。）

第3層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、径1cmのロームブロックを微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）

第4層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、径1～1.5cmのロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第5層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、ロームブロックを少量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第6層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を多量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

## &lt;D-D&gt;

第1層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ロームブロック・ローム粒子を微量含む。）

第2層：暗褐色土層（ローム粒子を少量、ロームブロックを微量含む。）

第3層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、径0.5～1cmのロームブロックを微量含む。）

## &lt;E-E&gt;

第1層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、径0.5～1.5cmのロームブロックを少量含む。）

第2層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、ロームブロックを微量含む。）

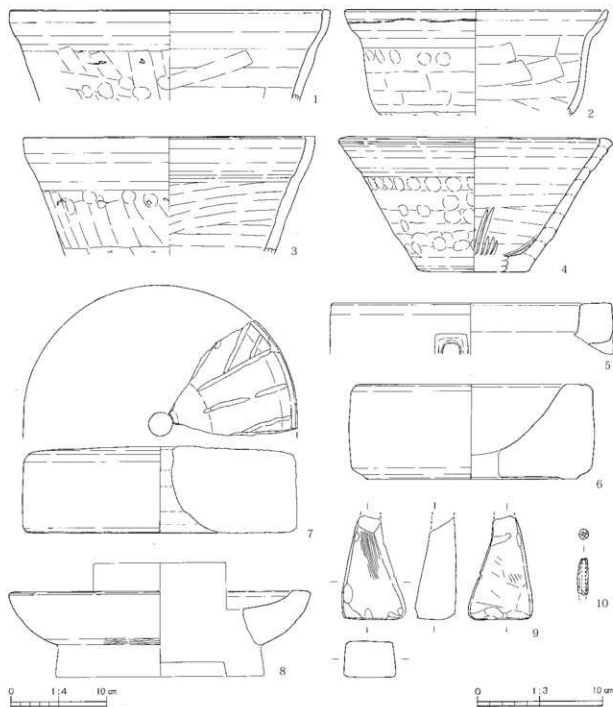
1地点やD2地点では、同溝の覆土中に浅間山系A軽石は観察されていないことから、H地点では本溝跡の一部で近世後半に掘り返しがあったのかもしれない。また、H地点ではそれ以前にも本溝跡が若干ずれて掘り返された痕跡が見られる。

遺物は、古代の土師器や須恵器、中世の龍泉窯系青磁碗、常滑窯系甕、在地産の内耳鍋や片口鉢及び播鉢などの破片が出土している。土器や陶磁器以外では、古代の土錐の破片、中世の柱状砥石、安山岩製の茶臼(下臼)や粉挽臼(下臼)及び石鉢の破片と、角閃石安山岩製の大形の窪み石が2個出土している。本溝跡の時期は、遺構の重複関係や出土遺物の様相から、中世後期の15世紀後半以降と推測される。

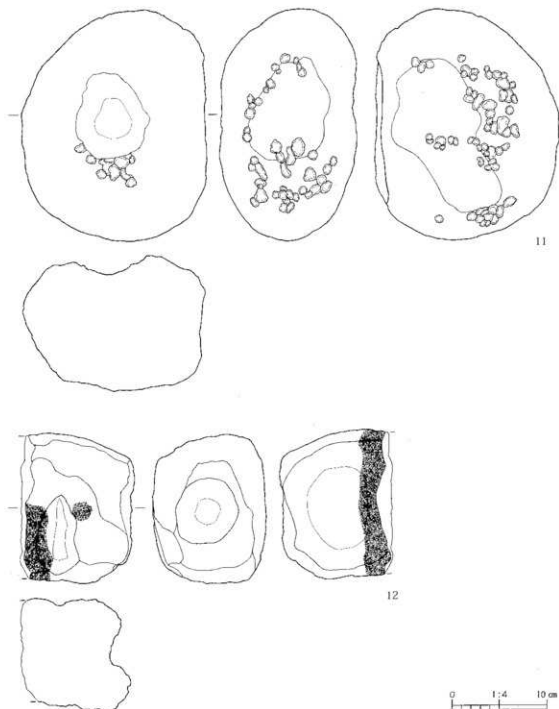
第157表 第27号溝跡出土遺物観察表

1	内 耳 鍋	A.口縁部径(34.0)、B.粘土組織み上げ、C.口縁部内外面ヨコナデ、胴部内外面笠ナデ、D.白色粒、E.外一黒灰色、内一暗灰色、F.口縁部1/6、G.外面に煤付着、H.覆土中。
2	内 耳 鍋	A.口縁部径(28.0)、B.粘土組織み上げ、C.口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面笠ナデの後下端ケズリ、内面笠ナデ、D.白色粒、E.内外一暗灰色、F.口縁部1/4、G.胴部外面に煤付着、指頭圧痕を残す、還元焼成、H.覆土中。
3	内 耳 鍋	A.口縁部径(31.0)、B.粘土組織み上げ、C.口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面笠ナデの後下端ケズリ、内面指ナデ、D.白色粒、E.内外一灰色、F.口縁部1/6、G.胴部外面に指頭圧痕を残す、H.覆土中。
4	播 鉢	A.口縁部径(29.0)、器高(14.3)、底部径(12.0)、B.粘土組織み上げ後ロクロ整形、C.口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面ナデ、内面ヨコナデの後下半に摺り目を施す、底部外面ナデ、D.赤色粒、白色粒、E.外一暗褐色、内一黒褐色、F.口縁部1/8、下半1/4弱、G.口縁部と胴部は接合しない、器形は図上復元、胴部外面に指頭圧痕を顕著に残す、内面下半はよく磨れている、底部外縁摩滅顕著、H.覆土中。
5	粉 挽 臼 (上 臼)	A.直径(30.0)、残存高5.4、B.粗削後整形、C.各面とも研磨、D.安山岩、F.上端1/4弱、G.側面に挽き穴あり、H.覆土中。
6	石 鉢	A.口縁部径(25.6)、高さ10.0、高台部径(22.6)、B.粗削後整形、C.上下面とも丁寧な研磨、側面雑な研磨、D.安山岩、F.1/4、G.上下面とも使用面の可能性が高い、H.覆土中。
7	茶 臼 (下 臼)	A.直径(29.0)、高さ9.1、重さ1952g、B.粗削後整形、C.上下面・側面とも研磨、D.安山岩、F.1/6、G.上面はよく磨れて摺り目は摩滅している、H.覆土中。
8	茶 臼 (下 臼)	A.受皿部径(32.0)、重さ302.0g、B.粗削後整形、C.内外面とも研磨、受皿部外面下端にケズリによる縁条痕あり、D.安山岩、F.受皿部1/10、H.覆土中。
9	砥 石	A.残存長8.2、最大幅5.0、最大厚3.2、重さ146.0g、B.粗削後整形、C.各面ともよく磨れている、D.流紋岩、F.端部欠損、H.覆土中。

10	土 鐘	A.残存長2.9、最大径0.8、重さ1.8g。B.手握ね。C.ナデ。D.白色粒。E.外一茶褐色。F.端部欠損。H.覆土中。
11	窪み石	A.長さ24.6、最大径19.6、厚さ14.3、重さ6000g。B.自然石を利用。C.表面中央に敷き・摩痕による楕円状の窪み。片側側面に平坦な砥面。裏面中央に砥面敲打痕。D.角閃石安山岩。F.ほぼ完形。H.覆土中。
12	窪み石	A.長さ15.9、最大径12.1、厚さ11.8、重さ1736g。B.自然石を利用。C.表面に敷き・摩痕による窪み。裏面中央は摩耗。D.角閃石安山岩。F.破片。G.表面に保付着。H.覆土中。



第283図 第27号溝跡出土遺物(1)



第284図 第27号溝跡出土遺物（2）

#### 第28ab号溝跡（第282図、写真図版134）

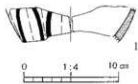
H地点調査区東側の北寄りに位置する。重複する第27号溝跡に切られ、第29号溝跡と第101号溝跡を切っている。H地点の調査区内では、本溝跡は2条重複している。

流路は、溝跡の南側は第102号溝跡と重複し、そのまま北に向かって直線的に延びている。その北側の延長は、隣接するD1・D2地点(恋河内・的野2010、恋河内2016)で検出されている。南側の延長は、道路を挟んで近接する久下前遺跡G地点(未報告)で検出されている。



規模は、第28a号溝跡は、溝の上幅60cm前後の比較的均一な幅で、確認面からの深さは最高34cmある。第28b号溝跡は、溝の上幅が50cm前後、確認面からの深さは最高16cm程度ある。断面の形態は、第28a号溝跡と第28b号溝跡とも、逆台形の箱堀を呈している。壁は、直線的に緩やかに傾斜して立ち上がり、底面は広く平坦である。覆土は、ロームブロックやローム粒子を含む暗褐色土を主体としており、土層の堆積状態は基本的に自然堆積を示している。第28a号溝跡の覆土中(A-A'第11・12層)では浅間山系A軽石が観察されているため、江戸時代中期後半以降に一部掘り返されたことが窺える。

遺物は、古代の土師器や須恵器の破片と、中世の龍泉窯系鎚蓮弁文青磁碗の破片が、覆土中から出土しただけである。本溝跡の時期は、出土遺物や他地点の様相から、中世後期の15世紀後半以降と考えられる。



第285図 第28号溝跡出土遺物

第158表 第28号溝跡出土遺物観察表

1	龍泉窯系青磁碗	B.ロクロ成形。C.体部内外面回転ナデの後施軸。外面に鎚蓮弁文を施す。D.白色粒。E.内外-淡緑灰色、内-淡灰色。F.体部破片。H.覆土中。
---	---------	--

### 第29号溝跡 (第282図、写真図版134)

H地点調査区東側の北寄りに位置する。重複する第28号溝跡に切られている。

流路は、調査区内では南北方向に直線的に延び、溝の南端は第101号溝跡に繋がっている。北側延長は、隣接するD1・D2地点(恋河内・的野2010、恋河内2016)で検出されている。

規模は、上幅が100cm前後の比較的均一な幅で、確認面からの深さは最高54cmある。断面の形態は、底面がやや狭い逆台形の箱堀研堀のような形態を呈している。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、底面はやや狭く平坦である。覆土は、ロームブロックやローム粒子を含む暗褐色土を主体としており、土層の堆積状態は自然堆積を示している。

遺物は、古代の土師器や須恵器の破片と、中世の在産片口鉢やかかわらけの破片が、覆土中から出土しただけである。本溝跡の時期は、出土遺物や他地点の様相から、中世後期と考えられる。

本溝跡は、D2地点の報告(恋河内・的野2010)ではその北側延長をE2地点の第44号溝跡と考えたが、本地点の調査で溝の南端が東西方向に直線的に延びる第101号溝跡に繋がっていることから、D2地点の北側で東側に直角に曲がって、規模や断面の形態が類似するE1地点(恋河内・的野2010)の第56号溝跡に繋がる可能性もある。E1地点とG1・G3地点の第56号溝跡、G2地点とH地点の第101号溝跡とともに、中世後半の屋敷地を四角に圍繞する区画溝であった可能性が窺えよう。



第286図 第29号溝跡出土遺物

第159表 第29号溝跡出土遺物観察表

1	かわらけ?	A.口縁部径(12.0)、器高3.0、底部径7.6。B.手捏ね?。C.口縁部内外面回転ナデ。底部外面ナデ。D.雲母粒、白色粒。E.内外-淡褐色。F.口縁部1/4張。H.覆土中。
---	-------	--

## 第30号溝跡（第287図、写真図版134）

H地点調査区中央部から西側の北寄りに位置する。重複する第79号溝跡に切れ、第319号住居跡や第631・632号土坑を切っている。

流路は、調査区内では東西方向に向いて直線的に伸びている。本溝跡の東側延長は、隣接するD2地点(恋河内2016)で検出されており、第28号溝跡の手前で途切れている。西側延長は、隣接するF1地点(恋河内2012)でほぼ直角に曲がって北側に流路をとる第80号溝跡か、さらにその西側の第82号溝跡に繋がる可能性が高い。

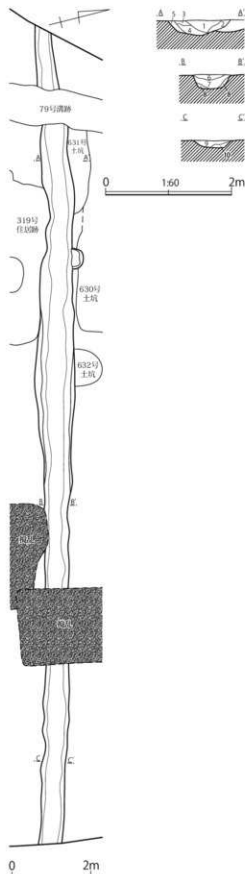
規模は、調査区内では約22mに渡って検出されており、上幅は27cm～62cmの比較的均一な幅で、確認面からの深さは最高で25cmある。断面の形態は、逆台形の箱堀を呈している。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、底面は広く平坦である。覆土は、上半がロームブロックやローム粒子を含む暗褐色土で、下半が黒褐色土である。

本溝跡は、溝の両端が途切れていると推測されるため、覆土も水が恒常的に流れていたような形跡が見られないことから、土地の区画を目的として掘削された区画溝と考えられる。

遺物は、覆土中から古墳時代前期～平安時代までの土師器や須臾器の破片が少量出土しただけである。本溝跡の時期は、遺構の重複関係やD2地点の様相から、中世以降と推測される。

## 第30号溝跡土層説明

- 第1層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。）  
 第2層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を微量含む。）  
 第3層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を微量含む。）  
 第4層：暗褐色土層（径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。）  
 第5層：暗褐色土層（径0.5～2cmのロームブロックを多量、ローム粒子を少量含む。）  
 第6層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を少量、白色粒子を微量含む。）  
 第7層：暗褐色土層（径0.5～3cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。）  
 第8層：黒褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。）  
 第9層：黒褐色土層（径0.5cmのロームブロックを多量、ローム粒子を少量含む。）  
 第10層：黒褐色土層（径0.5～3cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。）



第287図 第30号溝跡

**第79号溝跡（第288図、写真図版135）**

H地点調査区西側に位置する。重複する第321・324・379・391号住居跡、第31号掘立柱建物跡、第630・631号土坑、第30・100号溝跡を切っている。

流路は、調査区内では若干蛇行ぎみに南西から北東方向に向いている。本溝跡の南西側延長は、隣接する第1地点(増田1985)の溝3と推測され、北東側延長は隣接するF1地点(恋河内2012)で検出されている。

規模は、上幅が50cm～100cmの比較的均一な幅で、確認面からの深さは最高で40cmある。断面の形態は、逆台形を呈する箱堀である。壁は、直線的に緩やかに傾斜して立ち上がり、底面は広く平坦である。覆土は、ロームブロックやローム粒子を含む暗褐色土を主体にしており、土層の堆積状態は自然堆積を示している。

遺物は、覆土中から古墳時代前期～平安時代までの土師器や須恵器の破片が少量出土しただけである。本溝跡の時期は、遺構の重複関係や他地点の様相から、中世以降と推測される。

本溝跡は、西側に近接する第81号溝跡と約3.5mの間隔を保って並走していることから、両溝の間を通路とした道の側溝であった可能性が高いと思われる。

**第81号溝跡（第288図、写真図版135）**

H地点調査区の西端に位置する。重複する第196・323・324号住居跡を切っている。

流路は、調査区内では南西から北東方向に向いて直線的に伸びている。本溝跡の南西側延長は、隣接する第1地点(増田1985)の溝2と繋がり、北東側延長は隣接するF1地点(恋河内2012)で検出されている。

規模は、上幅が40cm前後の比較的均一な幅で、確認面からの深さは25cmある。断面の形態は、逆台形を呈する箱堀である。壁は、直線的に緩やかに傾斜して立ち上がり、底面は広く平坦である。

遺物は、覆土中から土器の破片が少量出土しただけである。本溝跡の時期は、出土遺物や他地点の様相から、中世以降と推測される。

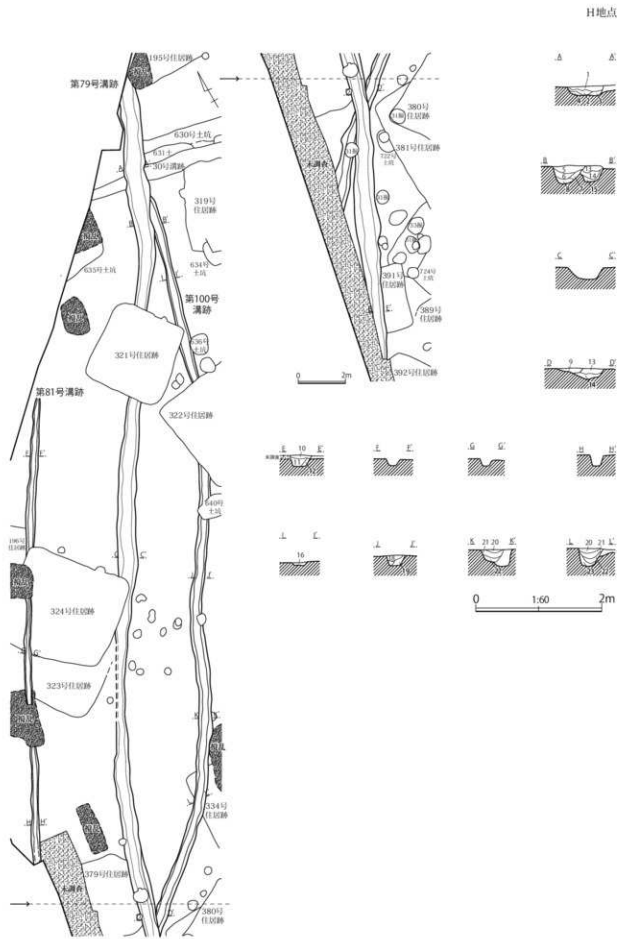
本溝跡は、東側に近接する第79号溝跡と約3.5mの間隔を保って並走していることから、両溝の間を通路とした道の側溝であった可能性が高いと思われる。

**第100号溝跡（第288図、写真図版135）**

H地点調査区西側に位置する。重複する第79号溝跡に切られて、第321・322・334号住居跡や第31号掘立柱建物跡及び第640号土坑を切っている。

流路は、調査区内では南西から北東方向に向いて、弓状に湾曲している。本溝跡の北側は第79号溝跡に切られているため明確ではないが、南側延長は隣接する第1地点(増田1985)では検出されていない。

規模は、上幅が50cm前後の比較的均一な幅で、確認面からの深さは最高で42cmある。断面の形態は、逆台形を呈する箱堀である。壁は、直線的に緩やかに傾斜して立ち上がり、底面は広く平坦である。覆土は、ロームブロックやローム粒子を含む暗褐色土を主体にしており、土層の堆積状態は自然堆積を示している。



第288图 第79・81・100号溝跡

## 第79・81・100号溝跡土層説明

- 第1層：暗褐色土層（径1～2cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。）  
 第2層：暗褐色土層（径2～3cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。）  
 第3層：暗褐色土層（径3cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。）  
 第4層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子・黒褐色土を少量含む。）  
 第5層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子・白色粒子を少量含む。）  
 第6層：暗褐色土層（径1～2cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含む。）  
 第7層：暗褐色土層（径1～3cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。）  
 第8層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。）  
 第9層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。）  
 第10層：暗褐色土層（白色粒子を多量、ローム粒子を少量含む。）  
 第11層：暗褐色土層（径1～2cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。）  
 第12層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。）  
 第13層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を少量、白色粒子を微量含む。）  
 第14層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含む。）  
 第15層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を少量含む。）  
 第16層：暗褐色土層（ロームブロックを多量、ローム粒子を少量含む。）  
 第17層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を多量、白色粒子を少量含む。）  
 第18層：暗褐色土層（径0.5～5cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。）  
 第19層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。）  
 第20層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子・白色粒子を微量含む。）  
 第21層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を少量、白色粒子を微量含む。）  
 第22層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子・白色粒子を微量含む。）  
 第23層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、径1～3cmのロームブロックを少量含む。）

遺物は、古墳時代前期～平安時代までの土師器や須恵器の破片が、覆土中から少量出土しただけである。

## 第101号溝跡（第289図、写真図版135・136）

H地点調査区東側の中央部北寄りに位置する。重複する第683号土坑に切られている。

流路は、調査区内では東西方向に直線的に延び、溝の西端は南側に直角に曲がって第102号溝跡として直線的に延びている。溝の東側は、調査区外に延びているが、その延長は東側に近接するG2地点（本書第三章）の第93号溝跡に繋がると推測される。

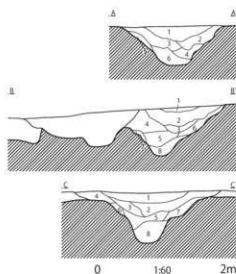
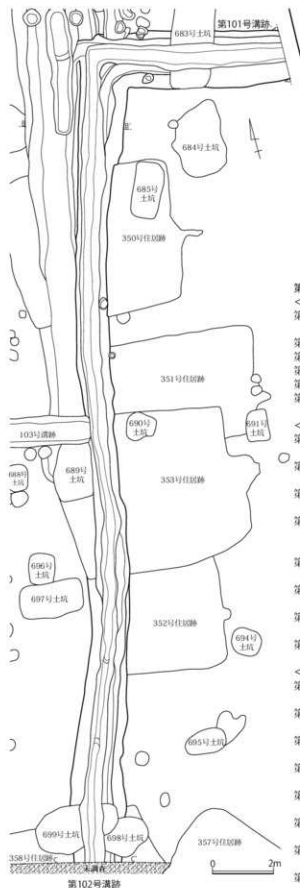
規模は、上幅が200cm前後の均一な幅で、確認面からの深さは60cmある。断面の形態は、箱葉研を呈している。壁は、直線的に緩やかに傾斜して立ち上がり、底面は狭く平坦である。覆土は、ロームブロックやローム粒子を含む暗褐色土を主体にしている。溝の掘り返しは見られず、土層の堆積状態は自然堆積を示している。

遺物は、覆土中から土器の破片が少量出土しただけである。本溝跡の時期は、他の溝跡との関係から、中世後期の15世紀後半以降と推測される。

本溝跡は、南側の第102号溝跡や東側のG2地点の第88・91・93号溝跡と繋がる同一の溝で、屋敷地を四角に区画することを目的として掘削された区画溝と考えられる。

## 第102号溝跡（第289図、写真図版135）

H地点調査区東側の中央付近から南側にかけて位置している。重複する第689号土坑と第27号溝跡に切れ、第350・351・352・353・358号住居跡と第698・699号土坑を切っている。



## 第101・102号溝跡土層説明

## &lt;A-A'&gt;

- 第1層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、小礫を少量、径1～1.5cmのロームブロックを微量含む。）  
 第2層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を少量含む。）  
 第3層：暗褐色土層（ロームブロックを多量、ローム粒子を少量含む。）  
 第4層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を多量含む。）  
 第5層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子・暗褐色土の混合土。）  
 第6層：暗褐色土層（ロームブロックを多量、ローム粒子を微量含む。しまりを有する。）

## &lt;B-B'&gt;

- 第1層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、浅間山系A軽石・ローム粒子を含む。）  
 第2層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム粒子を少量、ロームブロック・焼土粒子を微量含む。）  
 第3層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、ロームブロックを少量、焼土粒子を微量含む。）  
 第4層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、ローム小ブロック・ローム粒子を多量、径0.5～1cmのロームブロック・焼土粒子を少量含む。）  
 第5層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子を少量、暗褐色土を微量含む。）  
 第6層：暗褐色土層（径0.5～4cmのロームブロック・ローム粒子を多量、暗褐色土を微量含む。）  
 第7層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、径0.5～0.8cmのロームブロックを少量含む。）  
 第8層：暗褐色土層（暗褐色土粘質土・暗褐色土の混合土を主体に、ロームブロック・ローム粒子を多量含む。粘性に富む。）

## &lt;C-C'&gt;

- 第1層：暗褐色土層（暗褐色土を主体に、浅間山系A軽石・ローム粒子・焼土粒子を少量、炭化物を微量含む。）  
 第2層：暗褐色土層（浅間山系A軽石・ローム粒子・焼土粒子を少量、ロームブロック・炭化物を微量含む。）  
 第3層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、焼土粒子を少量、ロームブロック・炭化物を微量含む。）  
 第4層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を少量、ロームブロック・炭化物を微量含む。）  
 第5層：暗褐色土層（焼土粒子を少量、ロームブロック・ローム粒子・炭化物を微量含む。）  
 第6層：暗褐色土層（径0.5～5cmのロームブロック・暗褐色土の混合土。）  
 第7層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を少量、径0.5～1cmのロームブロック・炭化物を微量含む。）  
 第8層：褐色土層（径0.5～5cmのロームブロック・ローム粒子・暗褐色土の混合土。粘性に富み、しまりを有する。）

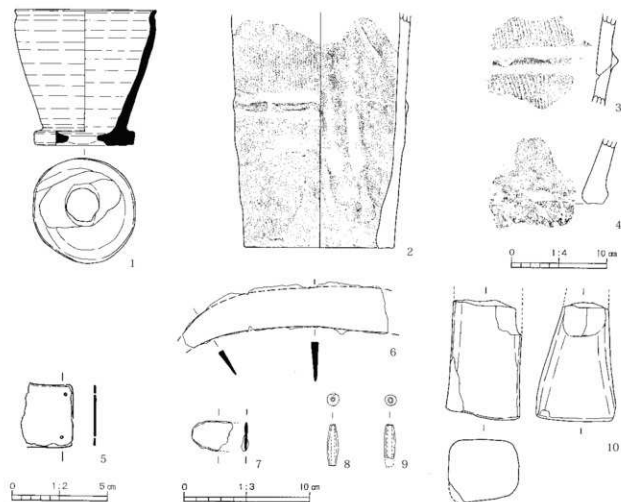
第289図 第101・102号溝跡

流路は、調査区内では南北方向に向いてほぼ直線的に伸び、北端で第101号溝跡として東に向かって直角に曲がっている。その東側延長は、G 2 地点の第93号溝跡に一致すると推測される。

規模は、上幅が100cm～200cmの均一な幅で、確認面からの深さは最高で78cmある。断面の形態は、箱葉研を呈している。壁は、直線的に緩やかに傾斜して立ち上がり、底面は狭く平坦である。覆土は、ロームブロックやローム粒子を含む暗褐色土を主体としている。覆土は、ロームブロックやローム粒子を含む暗褐色土を主体としている。土層の堆積状態は、概ね自然堆積を示している。

遺物は、土師器や須恵器と埴輪などの破片、銅製帯金具や鉄鎌及び土錘や砥石の破片が、覆土中から出土している。これらは、いずれも本溝跡の時期より古い古代のもので、重複する古代の住居跡から混入したものと考えられる。本溝跡の時期は、他の溝跡との関係から、中世後期の15世紀後半以降と推測される。

本溝跡は、北側の第101号溝跡や東側のG 2 地点の第88・91・93号溝跡と繋がる同一の溝で、屋敷地を四角に区画することを目的として掘削された区画溝と考えられる。



第290図 第102号溝跡出土遺物

第160表 第102号溝跡出土遺物観察表

1	須恵器鉢	A. 口縁部径(15.0)、器高14.4、底部径10.6。B. 粘土組織み上げ後ロクロ整形。C. 内外面回転ナデ。D. 白色粒。E. 内外一暗灰色。F. 2/3。G. 底部に焼成後の穿孔あり。H. 覆土中。
2	円筒埴輪	A. 基部径(16.0)。B. 粘土組織み上げ。凸帯貼り付け。C. 外面ハケ、内面ナデの後上半ハケ。凸帯ヨコナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 外一淡茶褐色。内一暗茶褐色。F. 下半1/3。H. 覆土中。
3	円筒埴輪	A. 粘土組織み上げ。凸帯貼り付け。C. 外面ハケ、内面ナデの後ハケ。凸帯ヨコナデ。D. 小石、白色粒。E. 外一暗灰色、内一暗茶褐色。F. 破片。H. 覆土中。
4	円筒埴輪	A. 粘土組織み上げ。C. 外面ハケ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一暗赤茶褐色。F. 破片。H. 覆土中。
5	銅製帯金具	A. 残存長3.3、最大幅2.8、厚さ0.1、重さ5.78g。B. 鋳造?。D. 割製。F. 破片。G. 円孔をコーナ部に持つ。H. 覆土中。
6	鉄 鎌	A. 残存長16.5、最大幅5.2、厚さ0.4、重さ96.76g。B. 鍛造。D. 鉄製。F. 3/4。H. 覆土中。
7	板状鉄製品	A. 残存長3.2、最大幅2.3、厚さ0.2、重さ4.0g。B. 鍛造。D. 鉄製。F. 破片。H. 覆土中。
8	土 錘	A. 長さ3.3、最大径0.9、重さ2.3g。B. 手捏ね。C. ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 明褐色。F. ほぼ完形。H. 覆土中。
9	土 錘	A. 残存長2.7、最大径0.9、重さ1.8g。B. 手捏ね。C. ナデ。D. 白色粒。E. 明茶褐色。F. 3/4。H. 覆土中。
10	砥 石	A. 残存長9.5、最大幅5.9、最大厚6.3、重さ584.5g。B. 粗削り後製削り整形。C. 各面ともよく磨れている。D. 安山岩。F. 1/2。H. 覆土中。

## 第103号溝跡 (第282図、写真図版136)

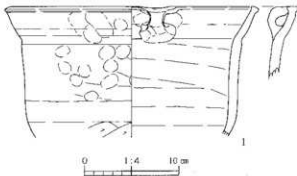
H地点調査区東側の中央付近に位置する。重複する第689号土坑に切られている。

流路は、調査区内では東西方向に4.3mほど直線的に延び、南北方向に直線的に延びる東側の第102号溝跡と西側の第106号溝跡を直角に繋いでいる。

規模は、上幅が100cm程度の均一な幅で、確認面からの深さは最高で28cmある。断面の形態は、逆台形の箱堀を呈している。壁は、直線的に緩やかに傾斜して立ち上がり、底面は広く平坦である。覆土は、ロームブロックやローム粒子を含む暗褐色土を主体にしている。土層の堆積状態の観察からは、上半の第1～3層と下半の第4～6層の違いから、掘り返された可能性もある。

遺物は、古墳時代前期～平安時代前期までの土師器や須恵器の破片と、中世後期の内耳鍋の破片などが少量出土している。この内耳鍋は、口縁部の調整手法や橋状を呈する内耳の形態から、15世紀前半頃と推測される(空河内2009)。本溝跡の時期は、遺構の重複関係や出土土器の様相から、中世後期の15世紀前半以降と推測される。

本溝跡は、東側の第102号溝跡と西側の第106号溝跡を直線的に直角に繋ぐ流路をとり、覆土中に流水や滞水の痕跡が見られないことから、区画と第106号溝跡の排水を目的として掘削された区画溝と考えられる。



第291図 第103号溝跡出土遺物

第161表 第103号溝跡出土遺物観察表

1	内耳鍋	A. 口縁部径(27.0)。B. 粘土組織み上げ後ロクロ整形。内耳貼り付け。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面上半ナデ・下半ケズリの後ナデ。内面ナデ。D. 白色粒。E. 内外一暗褐色。F. 1/6。G. 胴部外面に炭附着。胴部外面に指頭圧痕を多数残す。H. 覆土中。
---	-----	--

## 第104号溝跡 (第282図、写真図版135)

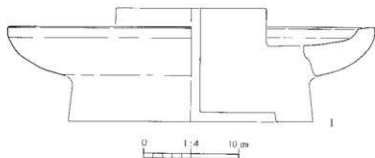
H地点調査区東側の北側寄りに位置する。重複する第346・349号住居跡を切っている。流路は、南北



方向に直線的に延びる第27号溝跡から、直角にほぼ西に向いて3.4mほど直線的に延びている。溝の西側は、徐々に浅くなって掘平されている。

規模は、上幅が40cm～80cmあり、確認面からの深さは最高で18cmある。断面の形態は、逆台形の箱堀を呈している。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、底面は広く平坦である。覆土は、ロームブロックやローム粒子を含む暗褐色土を主体にしている。

遺物は、覆土中から古墳時代前期～奈良・平安時代の土師器の破片や、中世の茶臼(下臼)の破片(No 1)が出土している。本溝跡の時期は、遺構の重複関係や出土遺物の様相から、中世後期の15世紀後半以降と推測される。



第292図 第104号溝跡出土遺物

本溝跡は、その西端が途切れているが、その約20m延長には同じく東西方向に直線的な流路をとる第109号溝跡がある。この第109号溝跡は、直角に曲がって南に流路を変えていることから、区画溝と考えられ、東側の第27号溝跡と西側の第109号溝跡とともに、土地を方形か長方形に区画する区画溝の一部であった可能性が推測される。

第162表 第104号溝跡出土遺物観察表

1	茶 (下 臼)	白 (臼)	A. 受皿径(39.0)。B. 削り出し。C. 内外面とも丁寧な研磨。D. 安山岩。F. 受皿部1/5。G. 受皿部の内外面に煤付着。H. 覆土中。
---	---------------	----------	--

### 第105号溝跡 (第293図)

H地点調査区中央部の南端に位置する。重複する第364号住居跡を切っている。流路は、直線的にほぼ東西方向に向いているが、両端部は途切れている。

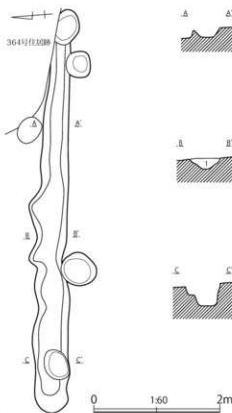
規模は、全長が5.85mあり、上幅は27cm～62cmの比較的均一な幅で、確認面からの深さは16cmある。断面の形態は、逆台形を呈している。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、底面は広く平坦である。覆土は、浅間山系A軽石やローム粒子を含む暗褐色土の単一層である。

本溝跡は、溝の両端が途切れており、覆土も単一層で水が流れていたような形跡が見られないことから、土地の区画を目的として掘削された区画溝と考えられる。

遺物は、覆土中から、古代の土器の破片が少量出土した

#### 第105号溝跡土層説明

第1層：暗褐色土層 (暗褐色土を主体に、浅間山系A軽石・ローム粒子を多量、径5cmのロームブロックを少量含む。)



第293図 第105号溝跡

けである。本溝跡の時期は、覆土中に江戸時代中期の天明3年(1783年)に噴火した浅間山系A軽石を多量に含むことから、江戸時代中期後半以降と考えられる。

#### 第106号溝跡 (第282図)

H地点調査区東側の中央付近に位置する。重複する第687号土坑に切られ、第686号土坑を切っている。本溝跡の南側は、東西方向に向く小規模な溝と重複しているが、相互の新旧関係は不明である。

流路は、東側の第102号溝跡と並走するように、概ね南北方向に向いて直線的に6.3mほど延び、南北の両端は途切れている。

規模は、上幅が100cm前後の均一な幅で、確認面からの深さは最高で34cmある。断面の形態は、逆台形の箱堀を呈している。壁は、直線的に緩やかに傾斜して立ち上がり、底面は広く平坦である。覆土は、ロームブロックやローム粒子を含む暗褐色土を主体にしている。

遺物は、奈良・平安時代の土師器や須恵器の破片が、覆土中から少量出土しただけである。本溝跡の時期は、東側の第103号溝跡と繋がっていることから、第102・103号溝跡と同時期中世後期の15世紀前半以降と推測される。

本溝跡は、東側の第102号溝跡と並走し、両溝を第103号溝跡が「工」字状に繋いでいることから、東側の第101・102号溝跡とG2地点の第88・91・93号溝跡による区画に伴う区画溝と考えられる。

#### 第107号溝跡 (第294図)

H地点調査区中央部に位置する。重複する第661・662・719号土坑に切られ、第326・340・341・368号住居跡及び第648・718号土坑を切っている。第108・109号溝跡とも重複しているが、相互の新旧関係は不明である。

流路は、東側の第102号溝跡と並走するように、概ね南北方向に向いて若干蛇行ぎみに延びており、その南北の両端は途切れているようである。

規模は、上幅が40cm～80cmの均一な幅で、確認面からの深さは最高で18cmある。断面の形態は、逆台形の箱堀を呈している。壁は、直線的に緩やかに傾斜して立ち上がり、底面は広く平坦である。覆土は、焼土粒子・ロームブロック・ローム粒子を含む暗褐色土を主体にしている。

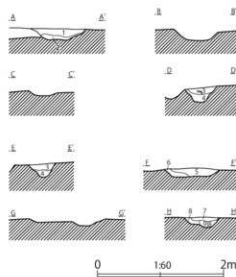
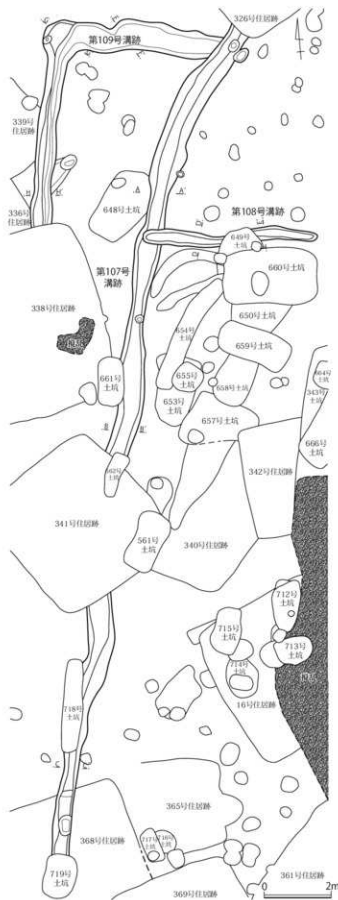
遺物は、古墳時代前期～平安時代の土師器や須恵器の破片が、覆土中から少量出土しただけである。また、残存長26.18mm・幅8.73mm・厚さ4.58mmの骨の小破片が1点出土している。本溝跡の時期は、遺構の重複関係から、中世以降と推測される。

本溝跡は、東側の第102号溝跡と並走する様相が窺えるが、溝跡の規模や形態が異なっていることから、同一時期で同じ性格の溝とは思われず、第102号溝跡がある程度埋没して土地の境界として機能した段階における土地を区画する目的の溝と推測される。

#### 第108号溝跡 (第294図、写真図版136)

H地点調査区中央部に位置する。第649号土坑や第107号溝跡と重複しているが、それらとの新旧関係は不明である。

流路は、第107号溝跡から東に5.2mほど若干蛇行ぎみに延び、溝の東西両側とも途切れている。



#### 第107・108・109号溝跡土層説明

- 第1層：暗褐色土層（焼土粒子を多量、径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を少量、白色粒子を微量含む。）
- 第2層：暗褐色土層（径1cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子・白色粒子を微量含む。）
- 第3層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子・白色粒子を微量含む。）
- 第4層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子・白色粒子を微量含む。）
- 第5層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を少量、径2cmのロームブロックを微量含む。）
- 第6層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。）
- 第7層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子・焼土粒子・白色粒子を少量含む。）
- 第8層：暗褐色土層（径1～3cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。）
- 第9層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を少量、白色粒子を微量含む。）

第294図 第107～109号溝跡

規模は、上幅が40cm前後の均一な幅で、確認面からの深さは最高で22cmある。断面の形態は、「V」字形に近い箱葉研堀を呈している。壁は、直線的に緩やかに傾斜して立ち上がり、底面は狭く平坦である。覆土は、焼土粒子・ロームブロック・ローム粒子を含む暗褐色土を主体にしている。

遺物は、古墳時代前期～後期の土師器の破片が、覆土中から少量出土しただけである。本溝跡の時期は、遺構の重複関係や覆土の状態から、中世以降と推測される。

#### 第109号溝跡（第294図、写真図版136）

H地点調査区中央部に位置する。重複する第336・338・339号住居跡を切っている。東側の第107号溝跡とも重複しているが、相互の新旧関係は不明である。

流路は、南北方向に直線的に伸び、北端で直角に曲がって東に向いて直線的に伸びている。その東側20m延長には、同様に東西方向に直線的な流路をとる第104号溝跡があり、両者は関係性を持つと思われる。

規模は、東西方向を向く北側が上幅80cm前後、南北方向を向く西側が上幅55cm前後の均一な幅で、確認面からの深さは最高で15cmある。断面の形態は、逆台形の箱堀を呈している。壁は、直線的に緩やかに傾斜して立ち上がり、底面は広く平坦である。覆土は、ロームブロック・ローム粒子を含む暗褐色土を主体にしている。

遺物は、古墳時代前期～奈良時代の土師器や須恵器の破片が、覆土中から少量出土しただけである。本溝跡の時期は、遺構の重複関係や覆土の状態から、中世後期の15世紀後半以降と推測される。

本溝跡は、直角に曲がる流路をとり、その東側延長にある第104号溝跡との関係から、区画溝と考えられ、東側の第27号溝跡と東側の第103号溝跡とともに、土地を方形か長方形に区画する区画溝の一部であった可能性が推測される。

## 6. H地点調査区内出土遺物

H地点の調査区内出土の遺物は、遺構の帰属が明確でないものや、性格不明のピットから出土したものがあつた(第295図)。遺構の帰属が明確でないものは、そのほとんどが調査区の南西側から出土している。

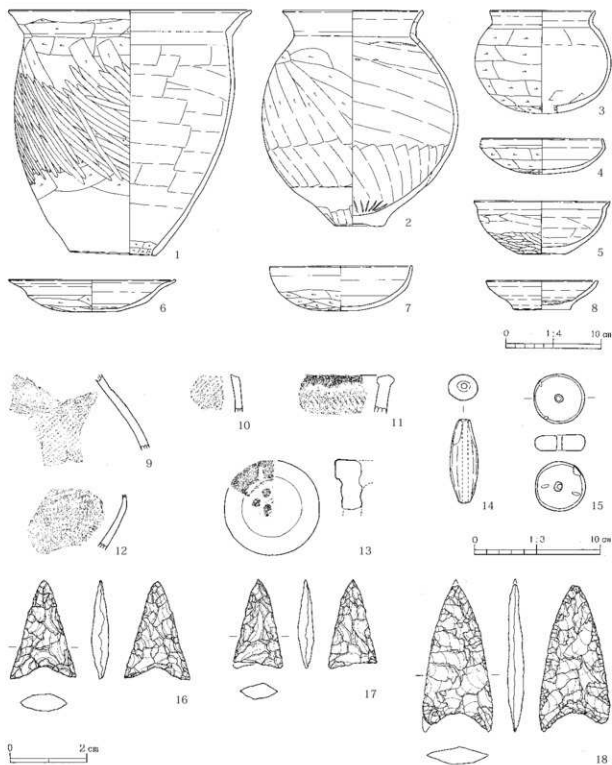
図示した遺物は、縄文時代から江戸時代までのものがあつた。

縄文時代の遺物は、No16とNo18の凹基無茎式とNo17の平基無茎式の打製石鏃と、中期中葉頃と思われるNo11の深鉢の破片がある。No18の打製石鏃は、No16やNo17の一般的な石鏃に比べて、長さや重さが2倍程度の大形のもので、当地域ではあまり例を見ないものである。

弥生時代のものは、後期の東関東系の二軒屋式土器と関係すると思われるNo9・10・12の土器の破片と、No15の断面長方形の土製紡錘車がある。これらの土器片と土製紡錘車は、いずれも同じピットのP60から出土しており、同時期の可能性が高いと思われる。

古墳時代のものは、中期と後期のものがある。中期のものはNo2の平底の甕で、その形態から5世紀前半頃の中期前半と考えられる。後期のものは、No1の大形甕とNo5の坏及びNo3の鉢がある。これらは時間差があり、大形甕と坏は5世紀末頃の後期初頭、鉢は7世紀前半頃の後期後葉頃と考えられる。

白鳳時代から奈良時代のもは、No 4の内屈口縁環とNo 6の皿及びNo 7の環がある。No 4の内屈口縁環は7世紀中頃、No 6の皿は7世紀末～8世紀初頭頃、No 7の環は8世紀前半頃と考えられる。おそらくNo 14の土錘も、この時期の可能性が高いと思われる。



第295図 H地点調査区内出土遺物

中世のものは、No8のかわらけがある。形態的特徴から中世後期の15世紀後半～16世紀前半頃と思われる。

江戸時代のもは、No13の軒棧瓦がある。棧瓦の軒丸部分の破片で、中心に三巴文とその外縁に連珠文を配する文様構成と思われる。

第163表 H地点調査区内出土遺物観察表

1	大形甕	A.口縁部径25.8、器高26.0、底部径9.2。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデの後ケズリその後中位ミガキ、内面ヨコナデ。底部内側ケズリ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一明茶褐色。F.3/4。G.胴部外面に黒斑点あり。H.調査区南西側。
2	平底甕	A.口縁部径15.0、器高22.8、底部径5.3。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデの後ケズリ、内面ヨコナデ。底部外面ナデ。D.白色粒。E.内外一暗褐色。F.3/4。G.口縁部外面に煤付着。H.調査区南西側。
3	鉢	A.口縁部径11.2、器高10.9。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.白色粒。E.内外一淡茶褐色。F.ほぼ完形。G.体部外面に黒斑あり。H.調査区南西側。
4	坏	A.口縁部径13.0、器高3.8。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一淡茶褐色。F.ほぼ完形。H.調査区南西側。
5	坏	A.口縁部径14.4、器高5.6、底部径4.7。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後下ケズリその後ミガキ、内面丁寧なナデ。D.白色粒。E.内外一明茶褐色。F.ほぼ完形。H.Pt33内。
6	皿	A.口縁部径17.6、器高3.4。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後ケズリ、内面ヨコナデ。D.白色粒。E.内外一明茶褐色。F.ほぼ完形。H.Pt73内。
7	坏	A.口縁部径15.2、器高4.8。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後下ケズリ、内面ヨコナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一暗褐色。F.ほぼ完形。H.Pt73内。
8	かわらけ	A.口縁部径(11.7)、器高3.1、底部径6.0。B.ロクロ成形。C.口縁部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り、内面一定方向のナデ。D.白色粒。E.内外一淡褐色。F.1/3。G.底部内面に煤付着。H.Pt363内。
9	甕	B.粘土組織み上げ。C.胴部外面上半部描波状文と横線文(いずれも4本歯右回り)・下半部縄文(RL)を横位施文、内面ヨコナデ。D.白色粒。E.外一黒褐色、内一暗褐色。F.胴部破片。G.弥生時代後期東関東系。H. Pt60内。
10	甕	B.粘土組織み上げ。C.胴部外面羽状縄文(上半RL、下半RL)、内面ナデ。D.白色粒。E.内外一黒褐色。F.胴部破片。G.弥生時代後期二軒屋式。H. Pt60内。
11	深鉢	B.粘土組織み上げ。C.口縁部外面縄文(RL)横位施文、内面ナデ。D.雲母粒、白色粒。E.内外一暗茶褐色。F.口縁部破片。G.縄文時代中期前半。H.調査区内。
12	不明	B.粘土組織み上げ。C.胴部外面縄文、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一暗茶褐色。F.胴部破片。G.弥生時代後期?。H. Pt60内。
13	軒棧瓦	A.軒丸径(7.6)、瓦当面厚さ2.1。B.瓦当貼り付け。C.側面ナデ。D.白色粒。E.灰色。F.軒丸部分1/6。G.瓦当文様は、外縁に連珠文、中心に三巴文を配す。H.調査区南西側。
14	土鉢	A.長さ6.6、最大径2.2、重さ26.4g。B.手捏ね。C.ナデ。D.白色粒。E.黒褐色。F.完形。H.調査区内。
15	土製紡車	A.直径4.0、高さ1.4、重さ26.42g。B.手捏ね。C.上下面ともナデ。D.褐色粒、小礫。E.内外一明褐色。F.完形。G.浅い溝が2カ所ある。H. Pt60内。
16	石鑑	A.長さ2.63、最大径1.75、厚さ0.47、重さ1.49g。B.両面剥離調整。D.チャート。F.完形。G.凹基無茎。H.第324号住居跡覆土。
17	石鑑	A.長さ2.35、最大径1.3、厚さ0.48、重さ0.91g。B.両面剥離調整。D.安山岩。F.片脚欠損。F.平基無茎。H.第324号住居跡覆土。
18	石鑑	A.残存長3.09、最大径1.85、厚さ0.45、重さ2.75g。B.両面剥離調整。D.チャート。F.先端部・片脚欠損。G.凹基無茎。H.第339号住居跡覆土。

## 第V章 自然科学分析

### 第1節 久下東遺跡・浅見山I遺跡出土の二軒屋式土器の胎土分析

藤根 久・米田恭子（パレオ・ラボ）

#### 1. はじめに

土器の胎土分析は、一般的には製作地の推定を目的として行われる場合が多い。しかしながら、胎土中に含まれる岩石片の鉱物組成から、その砂粒物が示す地域がいずれであるかを推定するのは容易ではない。

土器などの焼物は、基本材料として粘土と砂粒などの混和材で構成されるが、粘土材料は比較的良質と思える粘土層から採取されたことが、粘土採掘坑の調査から推察される(藤根・今村2001)。また、粘土自体に珪藻化石やプラント・オパール、放散虫化石が混在している場合があり、材料として使用した粘土が生成された時の環境を示す。

一方、混和材としての砂粒物は、粘土層からの粘土採取の際に、粘土層の上下層や周辺に分布する砂層などから採取されたと考えられる。東海地域では、弥生時代後期の赤彩されたパレススタイル土器が知られているが、パレススタイル土器のうち3分の1程度は、砂粒物として火山ガラスが多量に含まれている(藤根1998、車崎ほか1996)。これらの火山ガラスは、粘土採取場所の上下層や周辺に分布するテフラ層と考えられる。このように胎土分析においては、粘土や混和材について、微化石やテフラなどの鉱物を含めての検討が必要であり、粘土や砂粒物、混和物の特徴について調べたうえで、周辺地質と比較・検討する必要がある。

久下東遺跡と浅見山I遺跡は、埼玉県本庄市早稲田の杜地内に所在する遺跡である。発掘調査では、古墳時代から平安時代の竪穴式住居跡などの遺構が検出されており、本書で報告する久下東遺跡G2地点の第294号住居跡や以前報告した浅見山I遺跡(松本・大熊2009)の調査区内から、弥生時代後期の二軒屋式と思われる土器の破片が出土した。ここでは、この二軒屋式土器について、薄片の偏光顕微鏡観察を行い、粘土の種類と砂粒組成、混和物の特徴を調べ、土器の胎土材料について検討した。

#### 2. 試料と方法

試料は、久下東遺跡から出土した二軒屋式土器3点と、浅見山I遺跡から出土した二軒屋式土器2点の、合計5点である(第164表)。

土器は、岩石カッターを用いて2×3cm程度を切り出し、恒温乾燥機により乾燥させた。次に、全体にエポキシ系樹脂を含浸させて固化処理を行い、スライドガラスに接着した。薄片作製面を平滑にして、エポキシ系樹脂で固化処理を行い、精密岩石薄片作製機およびガラス板を用いて研磨した。その後、厚さ0.1mm程度に切断した後、さらに研磨して、厚さ0.02mm前後の薄片を作製した。最後に、仕上げとしてコーティング剤を塗布した。

作製した土器薄片は、偏光顕微鏡を用いて薄片全面に含まれる微化石類(珪藻化石、骨針化石など)、鉱物、大型砂粒の特徴、その他の混和物等について、観察と記載を行った。なお、ここで採用した微化石類や岩石、鉱物の各分類群の特徴は、以下の通りである。

第164表 分析した土器試料とその詳細

分析No	種類	遺跡	出土地点	遺構	図版番号	時期	土器型式	備考
1	土器片	久下東遺跡	G2	第294号住居跡	第778-5	弥生時代後期	二軒屋式土器	関東北西部(橋本県)
2	土器片				第778-6			
3	土器片				第778-7			
4	土器片	第1238-55						
5	土器片	第1238-56						
		浅見山1遺跡	—	遺構外				

## [珪藻化石]

珪酸質の殻をもつ微小な藻類で、大きさは10～数百 $\mu\text{m}$ 程度である。珪藻は、海水域から淡水域に広く分布する。小杉(小杉1988)や安藤(安藤1990)は、現生珪藻に基づいて環境指標種群を設定し、具体的な環境復原を行っている。ここでは、種あるいは属が同定できる珪藻化石(海水種、淡水種)を分類した。

## [骨針化石]

海綿動物の骨格を形成する小さな珪質、石灰質の骨片で、細い管状や針状である。海綿動物の多くは海水産であるが、淡水産も23種ほどが知られ、湖や池、川の底に横たわる木や貝殻などに付着して生育する。したがって、骨針化石は水成環境を指標する。

## [植物珪酸体化石]

主にイネ科植物の細胞組織を充填する非晶質含水珪酸体であり、長径約10～50 $\mu\text{m}$ 前後である。一般にプラント・オパールとも呼ばれ、イネ科草本やスゲ、シダ、トクサ、コケ類などに存在する。

## [胞子化石]

胞子は、直径約10～30 $\mu\text{m}$ 程度の珪酸質の球状粒子である。水成堆積物中に多く見られるが、土壌中にも含まれる。

## [石英・長石類]

石英および長石類は、いずれも無色透明の鉱物である。長石類のうち、後述する双晶などのように、光学的な特徴をもたないものは石英と区別するのが困難な場合が多く、一括して扱う。

## [長石類]

長石は、大きく斜長石とカリ長石に分類される。斜長石は、双晶(主として平行な縞)を示すものと累帯構造(同心円状の縞)を示すものに細分される(これらの縞は組成の違いを反映している)。カリ長石は、細かい葉片状の結晶を含むもの(パーサイト構造)と格子状構造(微斜長石構造)を示すものに分類される。また、ミルメカイトは斜長石と虫食い状石英との連晶(微文象構造という)である。累帯構造を示す斜長石は、火山岩中の結晶(斑晶)に見られることが多い。パーサイト構造を示すカリ長石は、花崗岩などケイ酸分の多い深成岩などに産出する。

## [雲母類]

一般的には黒雲母が多く、黒色から暗褐色で、風化すると金色から白色になる。形は板状で、へき開(規則正しい割れ目)にそって板状に剥がれ易い。薄片上では、長柱状や層状に見える場合が多い。花崗岩などケイ酸分の多い火成岩に普遍的に産し、変成岩類や堆積岩類にも産出する。

## [輝石類]

主として斜方輝石と単斜輝石とがある。斜方輝石(主に紫蘇輝石)は、肉眼ではビール瓶のような淡褐色および淡緑色などの色を呈し、形は長柱状である。ケイ酸分の少ない深成岩類や火山岩類、ホル



ンフェルスなどのような高温で生じた変成岩類に産する。単斜輝石(主に普通輝石)は、肉眼では緑色から淡緑色を呈し、柱状である。主としてケイ酸分の少ない火山岩類や、ケイ酸分の最も少ない火成岩類や変成岩類にも産出する。

[角閃石類]

主として普通角閃石であり、色は黒色から黒緑色で、薄片上では黄色から緑褐色などである。形は、細長く平たい長柱状である。閃緑岩のような、ケイ酸分が中間的な深成岩類や変成岩類、火山岩類に産出する。

[ガラス質]

透明の非結晶の物質で、電球のガラス破片のような薄く湾曲したガラス(バブル・ウォール型：記載ではバブル型と略す)や、小さな泡をたくさんもつガラス(軽石型)などがある。主に火山噴火により噴出した噴出物(テフラ)である。

[片理複合石英類]

石英、長石類、岩片類などの粒子が集合し、片理構造を示す岩石である。雲母片岩や結晶片岩、片麻岩、粘板岩などと考えられる。

[砂岩質・泥岩質]

石英、長石類、岩片類などの粒子が集合し、基質部分をもつ。構成粒子の大きさが約0.06mm以上のものを砂岩質、約0.06mm未満のものを泥岩質とした。

[複合石英類]

複合石英類は、石英が集合している粒子で、基質(マトリックス)の部分をもたないものである。個々の石英粒子の粒径は、粗粒から細粒までさまざまである。ここでは便宜的に、粒径が0.01mm未満の粒子を微細、0.01~0.05mmの粒子を小型、0.05~0.10mmの粒子を中型、0.10mm以上の粒子を大型と分類した。微細結晶の集合体である場合には、堆積岩類のチャートなどに見られる特徴がある。

[斑晶質・完晶質]

斜長石や輝石・角閃石などの結晶からなる斑晶構造を示し、基質は微細な鉱物やガラス質物からなる岩石である。直交ニコルの観察において、結晶度が高い岩石片である。

[流紋岩質]

石英や長石などの結晶からなる斑晶構造を示し、基質は微細な鉱物やガラス質物からなり、主に流理構造を示す岩石である。

[凝灰岩質]

ガラス質で斑晶質あるいは完晶質構造を持つ粒子のうち、直交ニコルの観察において結晶度が低く、全体的に暗い岩石片である。

[不明粒子]

下方ボーラーのみ、直交ボーラーのいずれにおいても不透明な粒子や、変質して鉱物あるいは岩石片として同定不可能な粒子を不明粒子とした。



これらの土器胎土中には、水成環境を指標する珪藻化石や骨針化石は含まれていなかった。なお、段丘堆積物は、旧河川の堆積物であっても珪藻化石や骨針化石が含まれない場合が多いため、これら土器の粘土材料には段丘堆積物中の粘土層が利用された可能性が考えられる。

### 3.2. 砂粒組成による分類

本稿で設定した分類群は、構成される鉱物種や構造的特徴から設定した分類群であるが、地域を特徴づける源岩とは直接対比できない。したがって、胎土中の鉱物と岩石粒子の岩石学的特徴は、地質学的状況に一義的に対応しない。特に、深成岩類を構成する鉱物は粒度が大きいため、細粒質の砂粒からなる胎土の場合には、深成岩類の推定が困難な場合が多い。

ここでは、比較的大型の砂粒と鉱物群の特徴により、起源岩石の推定を行った(第167表)。岩石の推定では、片理複合石英類が片岩類(A/a)、複合石英類(大型)が深成岩類(B/b)、複合石英類(微細)などが堆積岩類(C/c)、斑晶質・完晶質が火山岩類(D/d)、凝灰岩質や結晶度の低い火山岩が凝灰岩類(E/e)、流紋岩質が流紋岩類(F/f)、ガラス質がテフラ(G/g)である。

今回の試料の土器胎土中の砂粒組成は、表4の組み合わせに従い、3群(C群、C a群、F c群)に分類された。以下に、各分類群の砂粒物の特徴について述べる。

#### 1) 主に堆積岩類からなるC群(久下東遺跡2点:分析No.1、2)

これらの胎土中には、複合石英類(微細)や砂岩質からなる堆積岩類が特徴的に含まれていた。その他では、ガラス質のテフラ、凝灰岩類、片理複合石英類、深成岩類がわずかに含まれていた。なお、この2点は、粘土の種類を含めて砂粒組成が酷似する。

#### 2) 主に堆積岩類と片岩類からなるC a群(久下東遺跡1点:分析No.3)

この胎土中には、複合石英類(微細)や砂岩質からなる堆積岩類のほか、片理複合石英類からなる片岩類が含まれていた。また、片岩類起源の細粒輝石類が特徴的に多く含まれていた。

#### 3) 主に流紋岩類と堆積岩類からなるF c群(浅見山I遺跡2点:分析No.4、5)

透明ガラス質からなる流紋岩類のほか、複合石英類(微細)や砂岩質からなる堆積岩類が含まれていた。この2点は、粘土の種類を含めて砂粒組成が酷似する。

### 3.3. 土器胎土の材料の特徴

土器胎土の粘土材料は、粘土中に含まれていた微化石類により、a) 淡水成粘土(2点)、b) その他粘土(3点)、の2種類に分類された。また、土器胎土中の砂粒組成は、1) 主に堆積岩類からなるC群(2点)、2) 主に堆積岩類と片岩類からなるC a群(1点)、3) 主に流紋岩類と堆積岩類からなるF c群(2点)、の3種類に分類された。

第167表 岩石片の起源と組み合わせ

		第1出露群						
		A	B	C	D	E	F	G
岩石片 の 出 露 群	a	片岩類	Ba	Ca	Da	Ea	Fa	Ga
	b	深成岩類	Ab	Cb	Db	Eb	Fb	Gb
	c	堆積岩類	Ac	Bc	Dc	Ec	Fc	Gc
	d	火山岩類	Ad	Bd	Cd	Ed	Fd	Gd
	e	凝灰岩類	Ae	Be	Ce	De	Fe	Ge
	f	流紋岩類	Af	Bf	Cf	Df	Ef	Gf
	g	テフラ	Ag	Bg	Cg	Dg	EG	Gg

久下東遺跡の3点の二軒屋式土器は、2群に分類された。分析No.1と分析No.2は、粘土が淡水成粘土、砂粒組成がC群に分類され、材料において酷似する。一方、分析No.3の土器は、その他の粘土で、砂粒組成において片岩類を特徴的に含む(Ca群)。久下東遺跡周辺域を含めた埼玉県北部から群馬県南部にかけては、ジュラ紀の三波川帯片岩類(第296図の凡例SmやSbなど)が広く分布しており、分析No.3の砂粒組成は隣接地域の基盤岩類を反映した遺跡周辺の砂粒組成を示すと考えられる。浅見山I遺跡から出土した2点の二軒屋式土器(分析No.4、5)は、いずれもその他粘土で、主に流紋岩類と堆積岩類からなる砂粒組成Fc群である。特に、流れを示す流紋岩類(写真2-4f)や、無色透明ガラス質からなる流紋岩類(写真2-4g)が特徴的に含まれ、両者の土器は砂粒組成が酷似する。なお、久下東遺跡の分析No.1と分析No.2に含まれる流紋岩類の砂粒は少量であった。

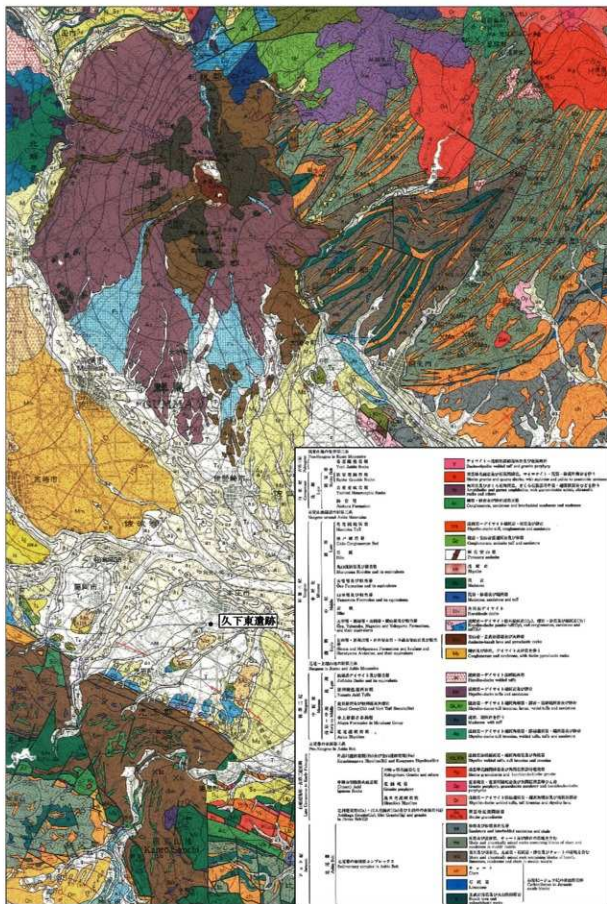
近接地における流紋岩類としては、寄居町の南東域に分布するデイサイト-流紋岩溶結凝灰岩及び花崗斑岩(第296図の凡例Y)である。また、群馬県みどり市の笠懸町地区の新第三紀中新世の馬見岡凝灰岩(流紋岩-デイサイト凝灰岩・礫岩及び砂岩：第296図の凡例Mt)が分布する。さらに、群馬県太田市の金山・八王子丘陵に流紋岩-デイサイト軽石凝灰岩(図296の凡例Oy)が分布する。利根川上流域あるいは渡良瀬川上流域でも、赤城火山の北側地域に新第三紀中新世の流紋岩-デイサイト溶結凝灰岩など(第296図のOk.Nr.As.Kt)が広く分布する。なお、二軒屋式土器の標識遺跡に近い地域では、鬼怒川中流から上流域の中禅寺湖周辺(渡良瀬川上流域に続く)に新第三紀鮮新世~中新世の流紋岩類が広範囲にわたって分布する(第297図のLc.Er.Krなど)。

土器胎土中の砂粒物は、地層中の砂層の組成と考えるが、基盤岩から削られて地層中に供給された砂粒物であり、河川の流域や海域環境などによって砂層組成は大きく異なると考えられる。産地についてより詳しく調べるためには、土器材料が採取されたと考えられる粘土層や砂層について調査する必要がある。

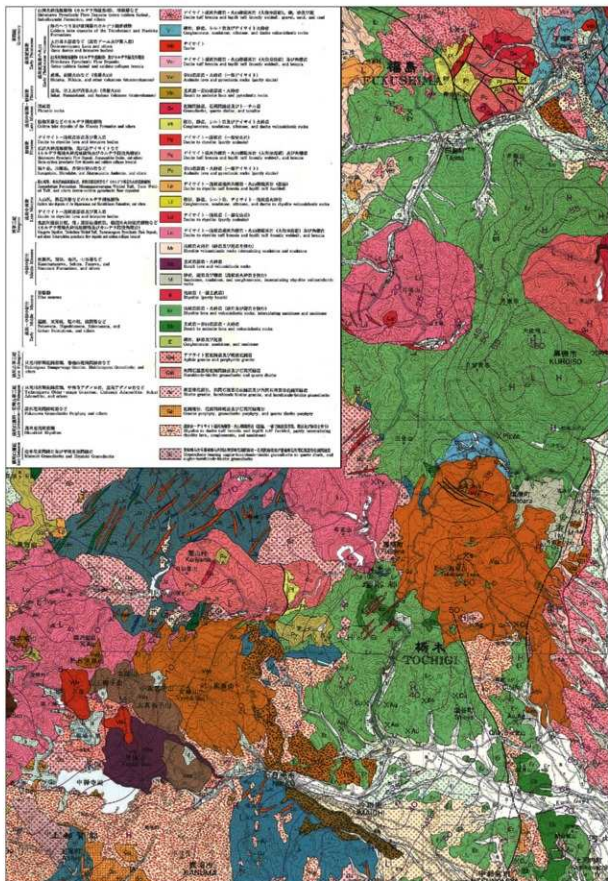
今回の分析の結果、少なくとも浅見山I遺跡で出土した流紋岩類を特徴的に含む二軒屋式土器2点は、久下東遺跡周辺の砂粒組成と異なっていたため、粘土の種類とともに、標識遺跡の地域の二軒屋式土器と比較してみる価値がある。

#### 引用文献

- 安藤一男(1990)「淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用」『東北地理』42(2) 73-88  
 地学団体研究会・地学事典編集委員会編(1981)『増補改訂 地学事典』1612p 平凡社  
 藤根 久(1998)「東海地域(伊勢-三河湾周辺)の弥生および古墳土器の材料」『土器・墓が語る：美濃の独自性 弥生から古墳へ』108-117  
 東海考古学フォーラム岐阜大会実行委員会  
 藤根 久・今村美智子(2001)「第3節 土器の胎土材料と粘土採取坑対象堆積物の特徴」『成志江中遺跡』262-277 日本道路公団・伊勢崎市・群馬県埋蔵文化財調査事業団  
 小杉正人(1988)「珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用」『第四紀研究』27 1-20  
 車崎正彦・松本 完・藤根 久・菱田 量・古橋美智子(1996)「土器胎土の材料-粘土の起源を中心に-」『日本考古学協会第62回大会研究発表要旨』153-156 日本考古学協会。  
 須藤定久・牧本 博・藁 光男・宇野沢 昭・滝沢文教・坂本 亨・駒澤正夫・広島俊男(1991)『20万分の1地質図編「宇都宮」』地質調査所  
 山元孝広・滝沢文教・高橋 浩・久保和也・駒澤正夫・広島俊男・須藤定久(2000)『20万分の1地質図編「日光」』地質調査所  
 小島 敦子(2012)『上新田中道東遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第528集



第296図 遺跡周辺の地質図(1)



第297図 遺跡周辺の地質図(2)

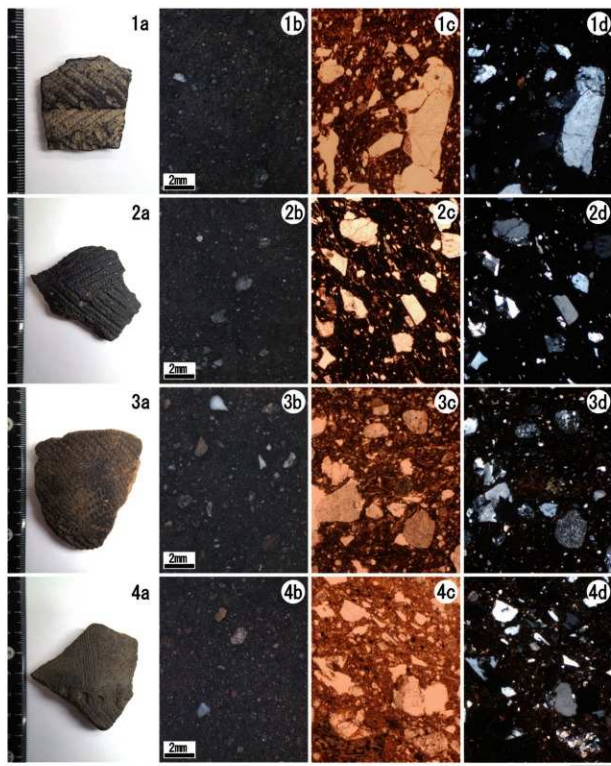


写真1 土器試料と胎土の偏光顕微鏡写真(1)

1a-1d.分析No.1 2a-2d.分析No.2 3a-3d.分析No.3 4a-4d.分析No.4

c解放ニコル(スケール:500 $\mu$ m)、d直交ニコル(スケール:500 $\mu$ m)

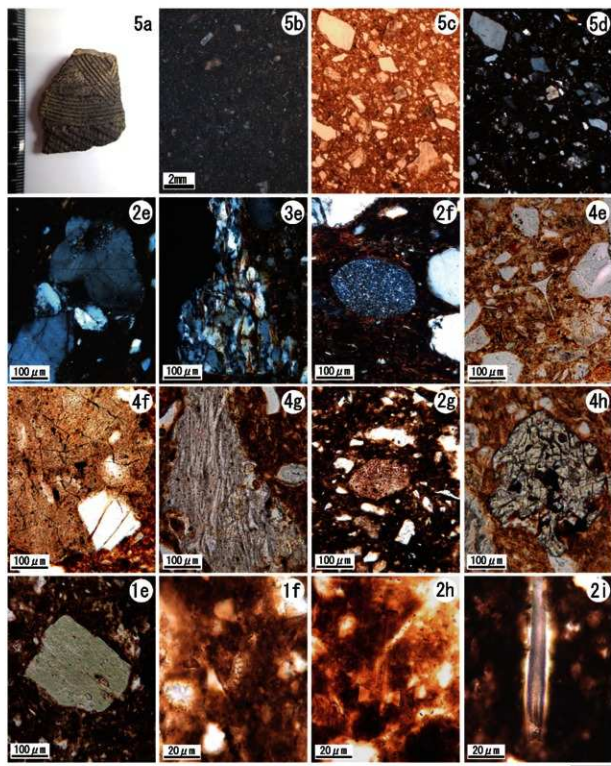


写真2 土器試料と胎土の偏光顕微鏡写真(2)

5a-5d.分析No.5

2e.複合石英類(大型) 3e.片理複合石英類 2f.複合石英類(微細) 3e.ガラス質(バブル型)

4f.流紋岩質 4g.流紋岩質(透明ガラス質) 2g.凝灰岩質 4h.斜方輝石

1e.角閃石類 1f.海水種珪藻化石Coccinodiscus属/Thalassiosira属

2h.淡水種珪藻化石Pinnularia属 2i.骨針化石

c.解放ニコル(スケール:500 μm)、d.直交ニコル(スケール:500 μm)



## 第VI章 まとめ

### 第1節 出土遺物の様相

今回報告した久下東遺跡のG2地点とH地点の調査では、主に旧石器時代から江戸時代の多彩な遺物が出土している。ここでは、それらの出土した遺物の中で、原始～古代の土器の様相を中心に述べてまとめたい。本遺跡における集落形成以前の旧石器時代～弥生時代の遺物については、個体数が少ないため個別的な説明を主とし、集落形成以後の古墳時代～平安時代の土器については、従来の土器形式の区分に合わせて、Ⅰ期(五領式・石田川式)、Ⅱ期(和泉式)、Ⅲ期(鬼高式)、Ⅳ期(真間式)、Ⅴ期(国分式)に大別して(恋河内2012)その概要を述べる。時代的には、Ⅰ期～Ⅲ期は古墳時代前期～後期、Ⅳ期は白鳳時代～奈良時代、Ⅴ期(国分式)は平安時代前期～中期に概ね対応する。

#### 1. 旧石器時代～弥生時代の遺物

##### 旧石器時代の遺物

旧石器時代の遺物は、G2地点の江戸時代以降の第569号土坑の覆土中に混入して、黒曜石製のナイフ形石器が1点出土している(第99図)。本遺跡や隣接する久下前遺跡では、ナイフ形石器はこの他にも久下東遺跡D1地点第122号住居跡(恋河内・的野2010)とE3地点第178号土坑(恋河内2016)、久下前遺跡A1地点河川跡(恋河内・的野2010)で見られるが、いずれも後世の遺構の覆土中に混入して出土したものである。当地方でローム層下の調査によって旧石器時代の石器が出土したのは、本遺跡南側の大久保山残丘上の浅見山I遺跡だけであり、ローム層中から茂呂型を含む黒曜石製のナイフ形石器2点が出土し、後世の遺構の覆土中から頁岩製の荒屋型彫刻刀形石器と黒曜石製の有槌尖頭器が1点ずつ出土している(松本・大熊2009)。

##### 縄文時代の土器

縄文時代の土器は、本遺跡や南側に隣接する久下前遺跡では、遺構は検出されていないが早期～晩期の土器片が少量見られる。G2・H地点では、後世の遺構の覆土中に混入して、前期～中期の土器の破片が少量出土しただけである(第298図)。

H地点第381号住居跡No3は、胎土中の繊維の混入は顕著でないが、比較的大きな節の単節縄文を施す前半の黒浜式と考えられる。

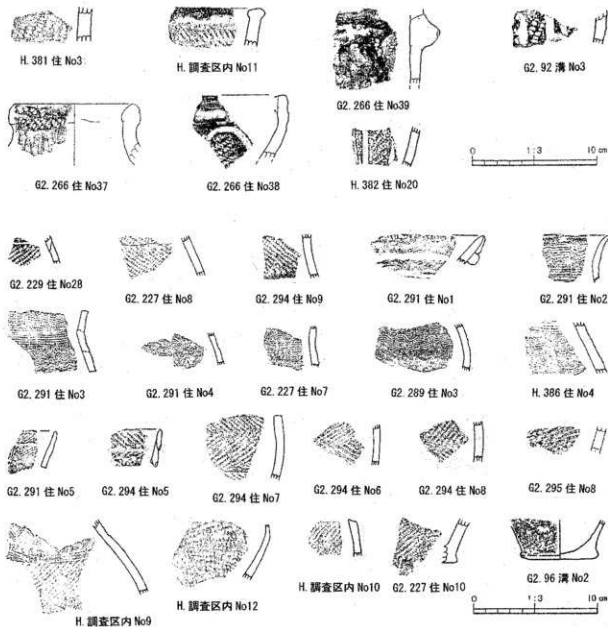
H地点調査区内No11とG2地点第266号住居跡No39は、口縁部の形態や貼り付け隆帯上に単節縄文を施す特徴などから、中期中頃のものではないかと思われる。

G2地点第92号溝跡No3、第266号住居跡No37と38及びH地点第382号住居跡No20は、中期後葉の加曾利EⅢ式である。

##### 弥生時代の土器

弥生時代の土器は、同じビットから出土したH地点調査区内No9・10・12以外は、後世の遺構の覆土中に混入して、中期～後期の土器の破片が出土している(第298図)。その多くは後期のもので、G2地点から出土している。後期の土器片は、吉ヶ谷式・樽式・二軒屋式など多系統のものが見られ、当地域の該期の特徴をよく表している。

G2地点第229号住居跡No28は、横位施文の縄文帯の上下を沈線で区画する文様構成と推測される



第298図 G2・H地点出土の縄文・弥生土器

壺の破片で、中期後半頃と思われる。

G2地点第227号住居跡No8とG2地点第294号住居跡No9は、やや節の大きな単節縄文を横位多段に施す後期後半の吉ヶ谷式の壺や甕の破片と考えられる。G2地点第291号住居跡No1は、口縁部外面に輪積み装飾と口唇部にキザミを施すもので、外見上は吉ヶ谷式の壺の口縁に類似するが、輪積み装飾は粘土紐貼り付けによるものであり、吉ヶ谷式の一般的な粘土紐積み上げによる技法とは異なっている。おそらく、吉ヶ谷式の壺の口縁に見られる輪積み装飾を模倣したものと思われる。

G2地点第291号住居跡No2・3・4、G2地点第227号住居跡No7、G2地点第289号住居跡No3、H地点第386号住居跡No4は、右回りの頸部櫛描糜状文とその上下に櫛描波状文を多段に施す後期後半を主体とする樽式の甕の破片である。

G2地点第291号住居跡No5は、口縁部外面に節の小さな細縄文を施すもので、時期や系譜はよく

わからない。

G 2 地点第294号住居跡No 5・6・7・8、G 2 地点第295号住居跡No 8、H 地点調査区内No 9・10・12、G 2 地点第227号住居跡No10、G 2 地点第96号溝跡No 2は、いわゆる東関東系の土器で、多くは二軒屋式と思われる。胴部外面を付加糸縄文や単節縄文により羽状で多段に施文するものが多いが、羽状をなさないものも見られる。当地方で出土する東関東系土器は、ほとんどが二軒屋式と言われていたが、隣接する久前遺跡G 地点(未報告)では、茨城県南部方面の土器に系譜を持つと思われる土器の破片も出土しており、今後は二軒屋式以外の東関東系土器にも注意が必要である。なお、G 2 地点第294号住居跡No 5・6・7については、胎土分析の結果、本遺跡周辺の粘土材料によって作られた可能性が示唆されている(第V章参照)。

## 2. 古墳時代～平安時代の土器

### I 期(古墳時代前期)

I 期の土器(第299図)は、主にG 2 地点で5軒とH 地点で12軒の合わせて17軒の住居跡から出土している。遺構の重複が激しく、良好な一括資料による比較はできないが、器種によっては時期差が窺えるものもある。多くは前期中葉～後葉頃のもので、有稜高坏を主体とする時期と柱状(屈折脚)高坏を主体とする時期を考えることができる。また、個体的にはH 地点第383号住居跡No 4のように、幅広い肩部横線を持つS 字状口縁台付甕の系譜の中ではやや古相と思われるものや、G 2 地点第288号住居跡No 2のように、口縁部が厳密なS 字状をなさず受け口状のものも見られる。甕は、当地方の特徴でもあるが、台付甕や平底甕など多様な系譜のものが混在して存在する。注目されるものとしては、口縁部内面に陰描文様をもち、口縁部が大形の器台に再利用されたと思われるG 2 地点第262号住居跡No 1の幅狭複合口縁壺や、同住居跡No 2のS 字状口縁を呈し胴部内外面がナデ整形の大形鉢の可能性が推測されるものなどがある。

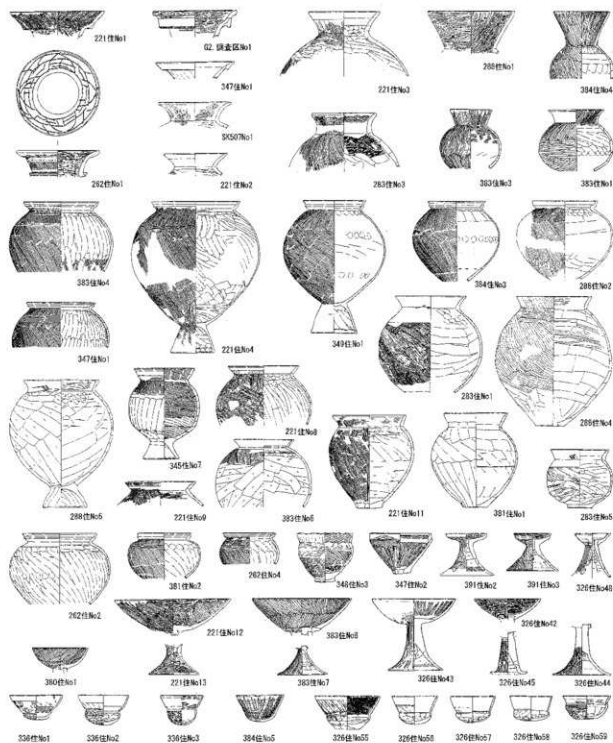
### II 期(古墳時代中期)

II 期の土器(第300図)は、主にG 2 地点で3軒とH 地点で1軒の合わせて4軒の住居跡から出土している。また、I 期のH 地点第326号住居跡の覆土中に、大量に投棄された該期の土器もある。これらの住居跡は、炉をもつもの(G 2 地点第265・266・295号住居跡)とカマドをもつもの(H 地点第389号住居跡)があるが、良好な一括資料による比較ができないため、新旧関係はよくわからない。

該期の土器は、概ね前半と後半に分かれる。前半の土器は、G 2 地点第265・266・295号住居跡出土土器などが該当する。器種組成中の小型土器群の主体が、埴や坏以前の小形直口壺で、中期の5世紀前半頃と考えられる。後半の土器は、住居跡は明確ではないが、H 地点第326号住居跡覆土中一括投棄土器が該当する。当地域では、該期には各住居にカマドが普及している。器種組成中の小型土器群の中で小形直口壺は減少し、内斜口縁環を含む和泉型の坏や埴が主体を占める模倣坏出現の直前段階の5世紀後半頃と考えられる。甕は、胴張系と長胴系のものが分離し始める。大形甕は、いわゆる砲弾型で内面に雑なミガキを施すものがすでにみられる。この大形甕の内面ミガキ手法は、この後7世紀前半の後期後葉段階まで継続し、当地方の大形甕の地域的特色といえる。

### III 期(古墳時代後期)

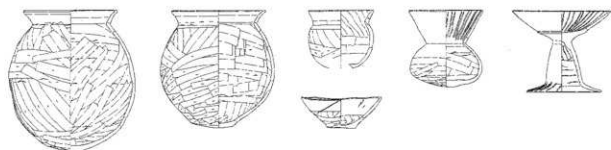
III 期の土器(第301・302図)は、主にG 2 地点で3軒とH 地点で26軒の合わせて29軒の住居跡から出



第299図 I期の土器

土しており、概ね3時期に分けて説明する。以前本遺跡のF1地点の報告書(恋河内2012)で、F1地点出土のⅢ期の土器をⅢA期～ⅢC期の3時期に分けて説明したが、それとは区分が異なることから、G2・H地点出土のⅢ期の土器についてはⅢ1期～Ⅲ3期として説明する。

Ⅲ1期の土器(第301図)は、G2地点第274号住居跡や第568号土坑出土土器などが該当する。いわゆる模倣杯の出現期で、後期初頭の5世紀末頃と考えられる。体部外面のケズリ整形の後に雑なナデあるいはミガキ調整を施す模倣杯や、口縁部内面だけに放射状暗文を施す小形化した和泉型高杯、扁



286号



285号

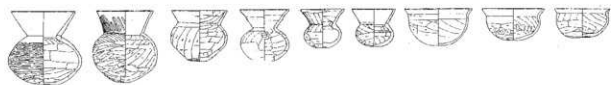
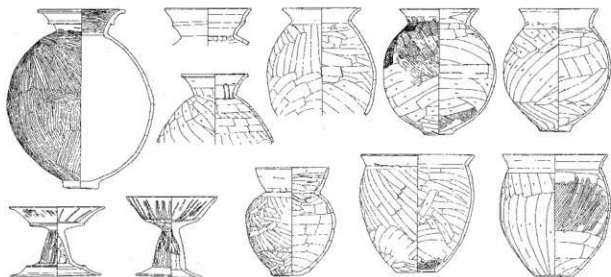
299号



389号

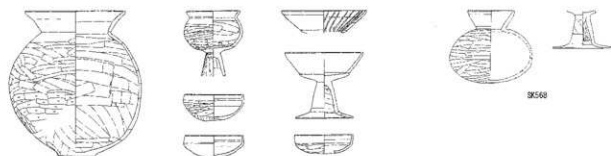


355号



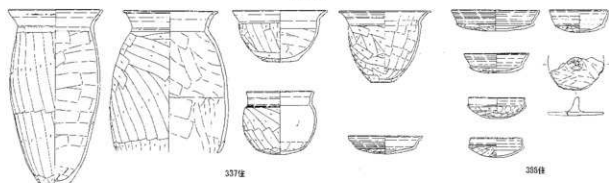
329号

第300図 Ⅱ期の土器



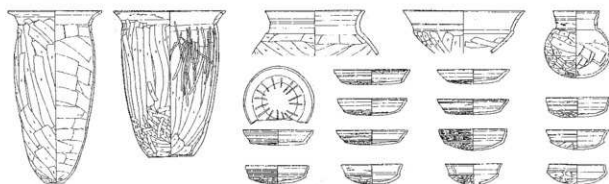
274件

Ⅲ 1 期

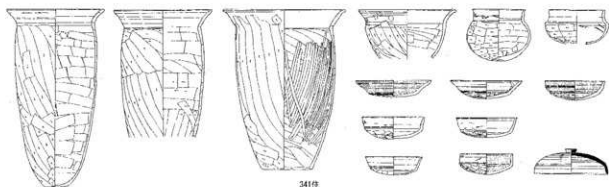


337件

355件



335件



341件

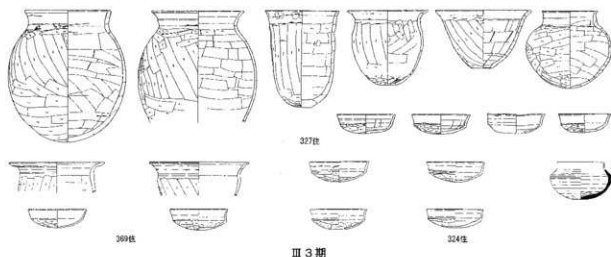


255件

377件

Ⅲ 2 期

第301図 Ⅲ 1 期・Ⅲ 2 期の土器



第302図 III 3期の土器

平化した胴部に内湾ぎみの短い口縁部の中形直口壺などが特徴的である。該期は、F 1地点のⅢA期に該当する。

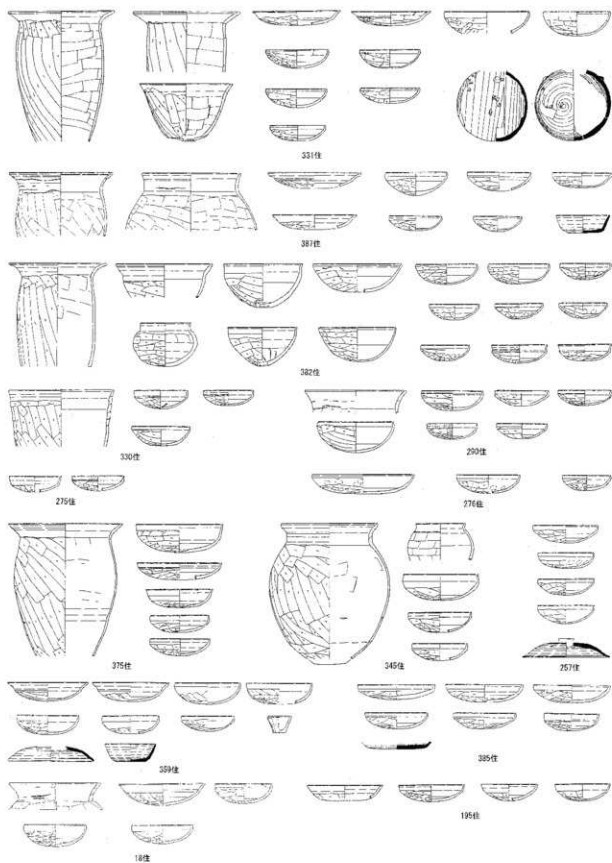
Ⅲ2期の土器(第301図)は、Ⅲ期の中では最も多く、G 2地点の第255号住居跡やH地点の第335・337・341号住居跡などが該当する。甕や大形甕の長胴化と有段口縁環の出現などが特徴的で、後期中葉の6世紀後半を主体とする時期と思われる。土師器の甕や鉢などの単純口縁から有段口縁の採用や、有段口縁環の大形から小形への移行など、該期は細別が可能である。須恵器は非常に少なく、H地点の第341号住居跡で高環か環の蓋が出土しただけである。該期は、概ねF 1地点のⅢB期とⅢC期に該当する。

Ⅲ3期の土器(第302図)は、H地点の第324・327・369号住居跡出土土器などが該当する。有段口縁環や杯身型模倣環がほとんど見られなくなり、精選された胎土で無黒斑の環蓋型模倣環などが主体になる。須恵器は、H地点の第324号住居跡で広口短頸壺が出土しているだけである。後期後葉の7世紀前半と考えられる。

#### Ⅳ期(白鳳時代～奈良時代)

Ⅳ期の土器(第303～304図)は、主にG 2地点で7軒とH地点で18軒の合わせて25軒の住居跡から出土しており、Ⅳ1期～Ⅳ3期の3時期に分けて説明する。

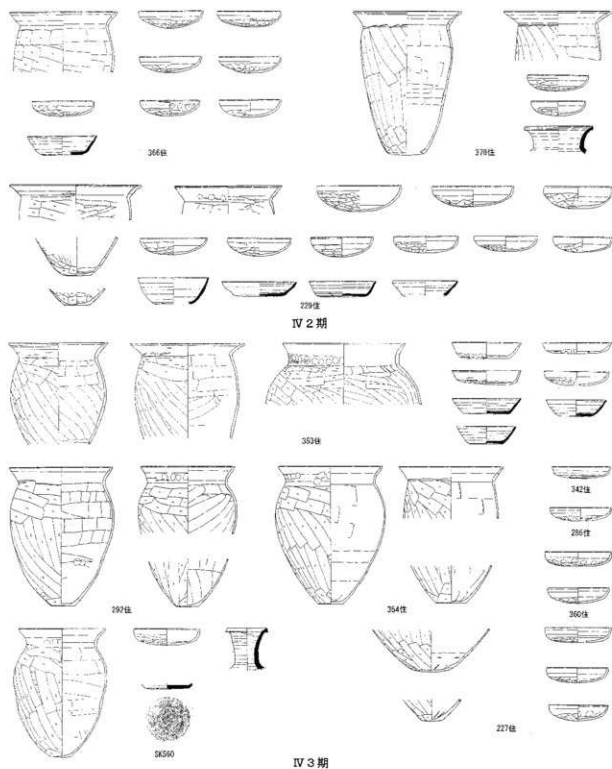
Ⅳ1期の土器(第303図)は、前段階の鬼高式とは系譜を異にする土師器の大形の皿や北武蔵系杯の祖型となる内屈口縁環の出現を特徴とし、7世紀後半の白鳳時代を主体にすると考えられる。該期は、概ね前半と後半に分けられる。前半の土器は、H地点の第331・382・387号住居跡出土土器などが該当する。径20cm前後で多様な口縁部形態を呈する大形の皿と、口縁部が短く内屈し、体部が深く口縁部ヨコナデの直下から鋭ケズリされる大・中・小の法量差をもつ内屈口縁環(鉢)が特徴的である。後半の土器は、G 2地点第257号住居跡やH地点第359・375・385号住居跡出土土器などが該当する。大形の皿は径16cm程度の口縁部が緩やかに外反する形態が多くなる。内屈口縁環は、口縁部が短く直立もしくは内湾ぎみに立ち、体部はやや浅くなる。体部外面のケズリも前半の口縁部ヨコナデ直下からやや下がるものが多くなる傾向が見られる。前半に見られた法量差による器種分化はほとんどなくなり、法量は単一化される。甕は、口唇部内側にヨコナデによる段を持つものが多い。須恵器



IV 1 期

第303図 IV 1 期の土器





第304図 IV 2・IV 3期の土器

の出土は少なく、H地点の第331号住居跡でフラスコ型瓶、H地点の第359・382・385・387号住居跡で環、G 2地点の第257号住居跡やH地点の第359号住居跡で口縁部内側に返りをもつ坏蓋などが出土している。該期は、概ね前半がF 1地点のIV A期、後半がIV B期に該当する。

IV 2期の土器(第304図)は、G 2地点の第229号住居跡、H地点の第366・376号住居跡出土土器などが該当する。土器は、各器種とも前段階のIV 1期から漸移的に変化する。長胴甕は、口縁部の外反

が緩やかになり、口唇部の段は新しくなるにつれて見られなくなる。胴部は短くなり、胴部外面の匏ケズリは上半斜方向、下半縦方向に概ね画一化される。坏は、口縁部径が13cm～13.5cm程度のものが主体となり、口縁部は前段階よりも長く内湾ぎみに立ち上がり、器高を減じながら体部匏ケズリの範囲も下方に下がる。須恵器は、G 2地点の第229号住居跡やH地点の第366号住居跡で、口縁部径14cm～16cmで、底部外面の調整が回転匏ナデや回転匏ケズリを施す坏が出土している。時期は、8世紀前半の奈良時代前半を主体にすると考えられる。

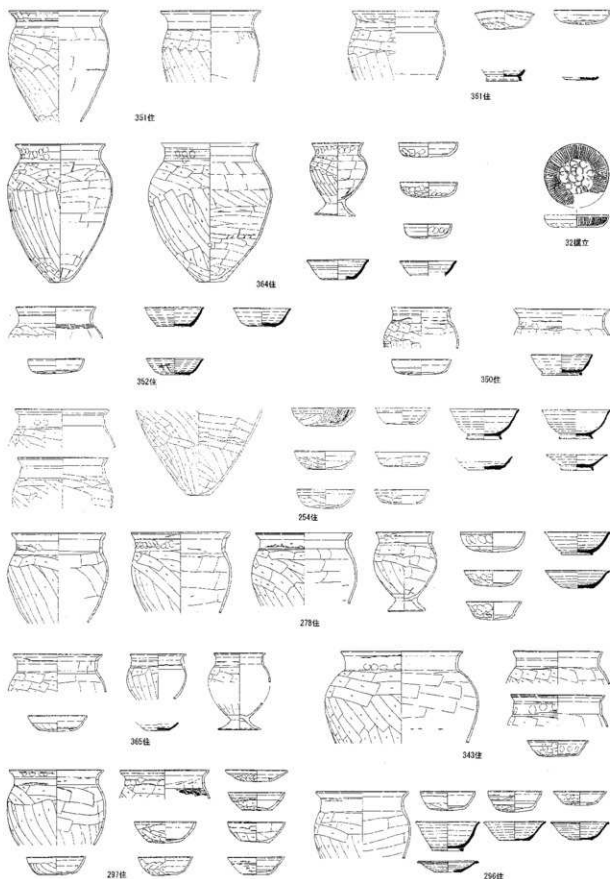
IV 3期の土器(第304図)は、G 2地点の第227号住居跡、H地点の第353・354・360号住居跡出土土器などが該当する。長胴甕は、口縁部が緩やかに外反し、該期の新しい段階には口縁部の中位に緩い屈曲が作られ、V期のメルクマルとなるコの字状口縁部への系統的な変化が窺える。坏は、法量は変わらないが、体部と口縁部の境の位置がさらに下がり、器高も低く扁平化が進む。須恵器は、H地点の第353号住居跡で、口縁部径が13cm前後で、口縁部が直線的に外傾し、底部外面の調整が回転匏ケズリや回転糸切りの坏が出土している。なお、当地方では該期になると南比企窯産の坏が多く流入するようになるが、G 2地点やH地点ではそれほど多い感じはしない。時期は、8世紀後半の奈良時代後半を主体にすると考えられる。

#### V期(平安時代前期～中期)

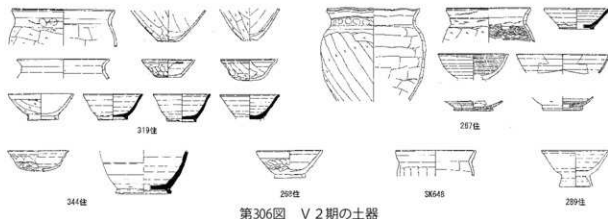
V期の土器(第305～306図)は、主にG 2地点で12軒とH地点で14軒の合わせて26軒の住居跡から出土している。とりあえず9世紀の平安時代前期を主体とするV 1期と、10世紀前半の中期前半を主体とするV 2期の2時期に分けて説明する。

V 1期の土器(第305図)は、概ね前半と後半に分けることができる。V 1期前半は、H地点の第364号住居跡や第350～352号住居跡など、G 2地点5軒とH地点12軒の計17軒が該当する。土師器は、甕におけるコの字状口縁の定型化と、坏における体部の扁平化に伴い体部下端の屈曲点の形成による底部の明確化が主な特徴である。コの字状口縁部は、口縁部上段の屈曲部が長い形態のもが主体である。北武蔵系坏は、口縁部径が12cm代のもが中心になるが、H地点第364号住居跡出土坏のように、体部が二段に屈曲するもの(口縁部と体部の境、体部と底部の境)と、H地点第350号住居跡や第352号住居跡出土坏のように、体部が底部からやや内湾ぎみに外傾する2つの形態のもが見られる。須恵器は、高台付碗や坏が出土している。坏は、口縁部径が12cm代のもが多く、口縁部はやや玉縁状を呈して短く外反し、底部外面は回転糸切りのものが主体となる。V 1期後半は、G 2地点の第254・278・296・297号住居跡やH地点の第343・365号住居跡などが該当する。コの字状口縁部は、口唇部が短く内湾するものや、口唇部外面に面取りによる平坦面を施すものが見られる。坏は、前半からの系譜を引く北武蔵系の坏は口縁部の底部からの外傾が強くなる。また、北武蔵系坏とは系譜を異にする坏として、やや器高が高く、平底で体部外面下半に1～2段のケズリ調整を加えるものが見られる。須恵器は、これまでの高台付碗や坏に加えて、皿及び高台付皿が見られるようになる。該期は、概ね前半がF 1地点のVA期に該当し、後半は9世紀後半を主体にすると考えられる。

V 2期の土器(第306図)は、G 2地点の第267・268・284号住居跡やH地点の第319・344号住居跡など、G 2地点4軒とH地点2軒の計6軒が該当する。土師器は、甕は器肉がやや厚くなり、コの字状口縁は断面コの字の形態が崩れ始める。具体的には、該期の前半のうちにコの字状の口縁が短くなり、上半の屈曲点が真上から内側に傾くことにより「コ」の字状から「く」の字状に徐々に変化する。坏



第305図 V1期の土器



第306図 V 2期の土器

は、前段階の平底で体部外面下半にケズリ調整を加えるやや器高の深い杯の系譜を引くものかよくわからないが、同様に器高が深く口縁部が屈曲する雑な作りの杯が見られる。また、新しい傾向として、該期にはこの杯に高台が付くものが見られるようになる。須恵器系は、法量的には土師器の杯と変わらないものに、潰れたような雑な貼り付け高台が付く高台付杯が主体であるが、焼成において還元不良で酸化焼成ぎみのものが多くなる。当地域では該期には羽釜が出現するが、本遺跡の該期集落では顕著ではない。この他には、灰釉陶器の高台付碗や高台付皿の一般集落への急速な普及が認められる。また、G 2地点の第289号住居跡では高い高台が付く高台付杯が、第267号住居跡では内面黒色処理の高台付碗も見られはじめ、これらは10世紀中頃に近い時期と推測される。該期は、概ねF 1地点のV B期に該当する。

## 第2節 集落再編成の一つの画期

以上のように、今回報告した久下東遺跡のG 2地点とH地点から出土した古代の土器の様相を述べてきたが、本格的に集落が形成されるI期の古墳時代前期から、集落が姿を消すV 2期の平安時代中期まで、連続と集落が続く様相が窺える。しかしながら、この中で古墳時代後期のⅢ 1期とⅢ 2期の間にあたる6世紀前半(鬼高I式中～後葉)の期間に、集落の断絶とも言えるような大きな空白期が認められる。この6世紀前半に見られる集落の空白期は、本遺跡と遺構の分布が連続する同一集落と考えられる久下前遺跡(恋河内2012、2018、恋河内・的野2010、松本2013、松本・的野2010)・北堀久下塚北遺跡(松本・大熊2009、恋河内・的野2014)・北堀新田前遺跡(松本2015)・北堀新田遺跡(佐々木2010、大熊2013、松本2015)や、隣接する七色塚遺跡(増田1987、恋河内・松本2008、恋河内・的野2014)及び下田遺跡(柿沼他1978、増田1987)でも同様に認められ、本遺跡近隣の女堀川下流域の低地内に立地する男堀川に面する集落群に共通する特徴と言える。

この6世紀前半に集落の断絶期間をもつか、あるいは6世紀後半(鬼高Ⅱ式)に新しく集落が形成される古墳時代の集落は、本遺跡が所在する女堀川流域では比較的多く見ることができ、この期間を地域的な集落編成の一つの画期として捉えられそうである。具体的に女堀川流域の古墳時代集落の動態を見ると、下流域・中流域・上流域で多少様相の違いがあるものの、6世紀前半を境にして流域社会において類似した集落変動の様相を認めることができる。

5世紀後半から6世紀前半においては、下流域では低地内の後張遺跡(増田・立石1982・1983)が集落の全盛期をむかえ、中流域では低地内の共和小学校校庭遺跡(恋河内1989、大熊2000)や辻堂・南街

道遺跡(恋河内1996)が大規模に営まれ、上流域では低地内にミカド遺跡(坂本・鈴木1980)が出現する。これらの低地内の比較的規模の大きな集落は、6世紀前半で衰退するもの(後張遺跡・ミカド遺跡)やその後も継続するもの(共和小学校校庭遺跡、辻堂・南街道遺跡)があるが、6世紀後半には中・下流域では、本遺跡近隣の遺跡の他、西側の本庄台地縁辺部(社具路・今井原屋敷・南共和・新宮・辻ノ内・金佐奈遺跡)や低地内(今井川越田・東牧西分・左口・柿島・浅見境北遺跡)、東側の残丘上やその下に広がる低台地上(雷電下・鷺山南・女池遺跡)、上流域では丘陵上(真鏡寺後・塩谷下大塚・高柳原遺跡)に集落が多く散在的に形成されている。

この時期の集落移動のもう一つの形態として、古墳群の形成に伴う移動が目される。具体的には、東五十子古墳群(太田2002)や西五十子古墳群(太田2007)では、5世紀末から6世紀初頭頃の一般集落があった場所に古墳群を形成して、居住域から有力者層の墓域に変更させているが、同様の現象は当地域と隣接する小山川(旧身馴川)右岸の広木大町古墳群(小淵他1980、長滝1992)なども認められる。これらは、小円墳の築造に見られる新興勢力の台頭に伴う新たな墓域の確保や拡張の必要性から、在地首長層によって強制的に一般集落が移動させられたものと考えられるが、地域全域における該期の集落変動の現象も、これらと連動した上位権力の在地首長層の主導による地域的再編成の可能性が高いと言えよう。

集落再編成の要因については、在地における上位権力層内部の構造変化とともに総合的に検討しなければならないが、今後は個別的な調査地点における定点的な集落の変遷とともに、集落群の関係性による集落移動から見た地域経営の変化を検討し、地域史的視点に立てて捉える必要があろう。

#### <参考文献>

- 荒川 正夫 (1998) 『大久保山Ⅵ』 早稲田大学本庄校地文化財調査報告 6  
 荒川正夫・民 民生 (2004) 『大久保山Ⅺ』 早稲田大学本庄校地文化財調査報告11  
 有山 雅世 (2008) 『川越田遺跡Ⅲ』 本庄市埋蔵文化財調査報告書第9集  
 磯崎 一 (1995) 『今井川越田遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書177集  
 岩瀬 謙 (1998) 『地神ノ塔頭』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第193集  
 岩田 明弘 (1998) 『今井条里遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第192集  
 大塚 季広 (2000) 『共和小学校校庭遺跡—C地点の調査—』 児玉町遺跡調査会報告書第8集  
 (2013) 『左口遺跡Ⅱ・本庄飯玉遺跡・北嶺新田遺跡Ⅲ』 本庄市埋蔵文化財調査報告書第34集  
 太田 博之 (2002) 『東五十子・川原町』 東五十子遺跡調査会  
 (2003) 『有勝寺裏墳輪郭跡・有勝寺北裏』 本庄市埋蔵文化財調査報告書第26集  
 (2005) 『四方田(Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ次調査)・久下東(Ⅱ次調査)』 本庄市埋蔵文化財調査報告書第31集  
 (2007) 『西五十子古墳群』 本庄市埋蔵文化財調査報告書第5集  
 (2008) 『西澤遺跡』 本庄市埋蔵文化財調査報告書第12集  
 大谷 徹 (2011) 『川越田遺跡Ⅱ』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書375集  
 大塚 昌彦 (2014) 『長沖古墳群ⅣⅠ』 本庄市埋蔵文化財調査報告書第42集  
 小澤 正人 (1996) 『大久保山Ⅳ』 早稲田大学本庄校地文化財調査報告 4  
 小淵良樹他 (1980) 『広木大町古墳群』 埼玉県遺跡調査会報告書第40集  
 金子正之他 (1980) 『有勝寺北裏遺跡』 有勝寺北裏遺跡調査会  
 柿沼幹夫他 (1978) 『下田・諏訪』 埼玉県遺跡発掘調査報告書第21集  
 恋河内昭彦 (1989) 『共和小学校校庭遺跡』 児玉町文化財調査報告書第10集  
 (1990) 『根田遺跡』 児玉町文化財調査報告書第12集  
 (1990) 『雷電下遺跡—B・C地点—(図版編)』 児玉町文化財調査報告書第13集  
 (1991) 『真鏡寺後遺跡Ⅲ—C・F・D地点の調査—』 児玉町文化財調査報告書第14集  
 (1993) 『川越田遺跡Ⅱ(B・C地点の調査)』 児玉町遺跡調査会報告書第5集  
 (1995) 『飯玉東Ⅱ・高瀬田・樋越・梅沢Ⅱ・東牧西分・鶴崎・毛無し屋敷・石橋』 児玉町文化財調査報告書第5集  
 (1996) 『辻堂遺跡Ⅰ』 児玉町文化財調査報告書第19集  
 (1996) 『辻堂Ⅱ・南街道・児玉条里遺跡』 児玉町文化財調査報告書第20集  
 (1997) 『城の内・日延・東田・浅見境北遺跡』 児玉町文化財調査報告書第23集  
 (1999) 『日延Ⅱ・児玉条里遺跡』 児玉町文化財調査報告書第31集  
 (1999) 『雷電下Ⅲ・南ノ前遺跡』 児玉町文化財調査報告書第32集  
 (2001) 『鷺山古墳の第2次墳形確認調査』 『児玉郡市文化財担当委員会会報』 第1号  
 (2001) 『女池遺跡(B・D地点の調査)』 児玉町文化財調査報告書第35集  
 (2003) 『大久保遺跡(B地点の調査)』 児玉町遺跡調査会報告書第14集

- (2004) 『女池遺跡(A地点の調査)』 児玉町遺跡調査会報告書第16集
- (2005) 『後張遺跡Ⅲ—C地点の調査—』 児玉町遺跡調査会報告書第20集
- (2008) 『塚島遺跡Ⅱ—F地点の調査—』 本庄市遺跡調査会報告書第22集
- (2008) 『塚島遺跡Ⅱ—E地点の調査—』 本庄市遺跡調査会報告書第23集
- (2012) 『塚島遺跡Ⅳ—C地点の調査—』 本庄市遺跡調査会報告書第33集
- (2012) 『久下前遺跡Ⅳ(D1・E1地点)・久下東遺跡Ⅴ(F1地点)』 本庄市埋蔵文化財調査報告書第28集
- (2016) 『久下東遺跡Ⅲ(C2・D2・D3・E2・E3・E4地点)』 本庄市埋蔵文化財調査報告書第49集
- (2018) 『久下東遺跡Ⅵ(C2・C3・C4・F2・F3地点)』 本庄市埋蔵文化財調査報告書第53集
- 志河内昭彦・松本 完 (2008) 『七色塚遺跡Ⅱ(B1地点)・北嶺新田遺跡(A1地点)』 本庄市埋蔵文化財調査報告書第7集
- 志河内昭彦・的野 善行 (2010) 『北嶺久下塚北遺跡Ⅱ(B地点)・久下東遺跡Ⅳ(C1・D1・E1地点)・久下前遺跡Ⅱ(A1・B1地点)』 本庄市埋蔵文化財調査報告書第19集
- (2014) 『七色塚遺跡Ⅲ(B2地点)・北嶺久下塚北遺跡Ⅲ(C・D地点)・久下東遺跡Ⅶ(A2・B2・B3・F2地点)・有勝寺北裏遺跡Ⅳ(C地点)』 本庄市埋蔵文化財調査報告書第37集
- 駒宮 史朗 (1979) 『雷電下、飯玉東』 埼玉県遺跡発掘調査報告書第22集
- 坂本 和俊 (1984) 『III 埼玉県』 『古墳時代土器の研究』 古墳時代土器研究会
- 坂本和俊・鈴木徳雄 (1980) 『金屋遺跡群』 児玉町文化財調査報告書第2集
- 櫻井 和哉 (2004) 『児玉大久保遺跡—C地点の調査—』 児玉町遺跡調査会報告書第17集
- 佐々木藤雄 (2010) 『北嶺新田遺跡』 本庄市埋蔵文化財調査報告書第22集
- 菅谷 浩之 (1984) 『北嶺新田遺跡における古式古墳の成立』 児玉町史資料調査報告書古代第一集
- 菅谷浩之・駒宮史朗 (1973) 『生野山古墳群発掘調査概報』 『第6回遺跡発掘調査報告会発表要旨』 埼玉考古学会 埼玉県遺跡調査会 埼玉県教育委員会
- 鈴木 徳雄 (1983) 『古代北武蔵における土器器製作技法の前期』 『土曜考古』 第7号 土曜考古学会
- (1984) 『いわゆる北武蔵系土器器の動態』 『土曜考古』 第9号 土曜考古学会
- (1987) 『真鏡寺後遺跡Ⅰ』 児玉町文化財調査報告書第7集
- 鈴木徳雄・大塚道則 (1988) 『真鏡寺後遺跡Ⅱ』 児玉町文化財調査報告書第8集
- (1991) 『辻ノ内・中下田・塚島・児玉桑里遺跡』 児玉町文化財調査報告書第15集
- 鈴木徳雄・尾内俊彦・櫻井和哉 (2007) 『児玉清水遺跡—A地点の調査—』 本庄市遺跡調査会報告書第18集
- 瀬田 哲夫 (2010) 『児玉大久保遺跡—A地点の調査—』 本庄市遺跡調査会報告書第30集
- 高林 真人 (2010) 『後張遺跡Ⅳ—D地点の調査—』 本庄市遺跡調査会報告書第35集
- (2011) 『後張遺跡Ⅴ—E地点の調査—』 本庄市遺跡調査会報告書第40集
- 瀧崎 芳一 (1997) 『今井川越田遺跡Ⅲ』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書191集
- 徳山 寿樹 (1994) 『平塚・左口・児玉桑里遺跡』 児玉町文化財調査報告書第16集
- (1995) 『稲向・塚原A・柿島・内手B・C・児玉桑里遺跡』 児玉町文化財調査報告書第22集
- (1996) 『藤塚遺跡—B2地点の調査—』 児玉町文化財調査報告書第24集
- (1997) 『金佐奈遺跡—A1地点の調査—』 児玉町文化財調査報告書第24集
- (1998) 『金佐奈遺跡—A2地点の調査—』 児玉町文化財調査報告書第29集
- (1998) 『金佐奈遺跡—B1地点の調査—』 児玉町文化財調査報告書第30集
- 徳山寿樹・大熊季広 (1999) 『金佐奈遺跡Ⅱ—B1地点の調査—』 児玉町文化財調査報告書第33集
- 徳山寿樹・松澤浩一 (2005) 『高塚原遺跡—B・C地点の調査—』 児玉町文化財調査報告書第39集
- 富田和夫・赤熊浩一 (1985) 『立野南一八幡太人神・熊野太神南・今井遺跡群—一丁田・川越田・梅沢』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第46集
- 長瀬 康成 (1992) 『後山王遺跡—B・D地点—』 美里町遺跡調査会報告書第1集
- 長谷川勇他 (1987) 『社具路遺跡発掘調査報告書』 本庄市埋蔵文化財調査報告書第5集 3分冊
- 伴瀬 宗一 (1996) 『今井川越田遺跡Ⅱ』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書178集
- 福田 聖 (2013) 『川越田遺跡Ⅲ』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書400集
- 本庄市教育委員会 (2016) 『本庄市の遺跡と出土文化財』 本庄市郷土叢書第5集
- 本 庄 市 (1976) 『本庄市史』 資料編
- (1986) 『本庄市史』 通史編Ⅰ
- 松本 完 (2013) 『久下前遺跡Ⅴ(F1地点)・久下東遺跡Ⅵ(G1地点)』 本庄市埋蔵文化財調査報告書第32集
- (2015) 『北嶺新田前遺跡Ⅱ(A2・A3地点)・北嶺新田遺跡Ⅳ(A2・B地点)・久下東遺跡Ⅶ(G3地点)』 本庄市埋蔵文化財調査報告書第44集
- 松本 完・大熊 季広 (2009) 『浅見山1遺跡(Ⅲ次)・久下東遺跡(Ⅲ次)A1・B1地点・北嶺久下塚北遺跡』 本庄市埋蔵文化財調査報告書第13集
- 松本 完・町田幸祐子 (2002) 『久下東遺跡Ⅲ(Ⅲ次)・北嶺新田古墳群(第2・3次)発掘調査報告書』 本庄市遺跡調査会報告書第6集
- 松本 完・的野 善行 (2010) 『久下前遺跡Ⅲ(C1地点)・北嶺新田遺跡(A1地点)・有勝寺北裏遺跡Ⅲ(A1・B1地点)』 本庄市埋蔵文化財調査報告書第23集
- 増田 一裕 (1985) 『本庄遺跡群発掘調査報告書Ⅱ—久下東遺跡・遺構編—』 本庄市埋蔵文化財調査報告書第7集
- (1987) 『東富田遺跡群発掘調査報告書』 本庄市埋蔵文化財調査報告書第10集
- (1989) 『四方田・後張遺跡群発掘調査報告書』 本庄市埋蔵文化財調査報告書第14集
- (1990) 『山根遺跡群発掘調査報告書』 本庄市埋蔵文化財調査報告書第18集
- 増田逸朗・小久保徹 (1977) 『塚山古墳群』 埼玉県遺跡発掘調査報告書第10集
- 増田逸朗・駒宮史朗 (1979) 『飯玉東・雷電下』 埼玉県遺跡発掘調査報告書第22集
- 増田逸朗・坂本和俊他 (1986) 『埼玉県古式古墳調査報告書』 埼玉県史編さん室
- 増田逸朗・立石盛岡 (1982) 『後張Ⅰ』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第15集
- (1983) 『後張Ⅱ』 埼玉県埋蔵文化財調査事業報告書第26集
- 宮本 久子 (2015) 『今井原屋敷遺跡—第5地点の調査—』 本庄市遺跡埋蔵文化財調査報告書第46集
- 山本 千春 (2006) 『今井原屋敷遺跡—第4地点の調査—』 本庄市遺跡埋蔵文化財調査報告書第4集